深江北町遺跡

第12・14次調査

埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

神戸市教育委員会

序

神戸市の東端に位置する東灘区の深江地区は、芦屋市と境を接し、古代より海陸の交通の要衝として栄えてきた地域です。

この地には深江北町遺跡があり、これまでの調査で奈良・平安時代に、都と大陸との交通の要地である北九州とを結ぶ古代のメインロード（山陽道）に設けられたターミナルである驛家（うまや）に関連する遺跡であるということが判ってきました。

このたび、阪神電気鉄道株式会社本線の住吉・芦屋間連続立体交差事業によって、その軌道敷部分の発掘調査を実施し、驛家に関わる貴重な資料が明らかになりました。

本事業の完成によって、市民の方々の利便性が増し、また、発掘調査によって得られた資料が市民の方々に広く活用いただくことを願ってやみません。

平成26年３月

神戸市教育委員会

例　　言

1．本書は神戸市東灘区深江北町１・２丁目地内に所在する深江北町遺跡第12・14次調査の発掘調査報告書である。

2．調査は阪神本線住吉・芦屋間連続立体交差事業に伴うもので、神戸市教育委員会が阪神電気鉄道株式会社から委託を受けて現地調査を平成23・24年度に実施した。また平成25年度に出土品の整理作業・科学分析作業と報告書作成・刊行作業を実施した。

3．本書の作成は遺構の記述は調査担当者が行い、その他調査に関連するものは谷 正俊が担当した。Ⅱ章の各調査区出土の木製品の解説およびⅢ章１の項は中村大介が執筆した。また主な編集は谷が行い、Ⅲ章の古環境の調査と復元の編集の一部および挿図写真・写真図版の木簡・墨書土器の編集は丸山 潔が行った。

4．木簡および墨書土器の文字資料については独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室室長 渡辺晃宏氏・主任研究員 馬場 基氏・同 山本 崇氏・研究員桑田訓也氏・同 山本祥隆氏に釈読・解説をしていただき、Ⅴ章として掲載させていただいた。なお、木簡および墨書土器の赤外線写真は同研究所企画調整部写真室主任 中村一郎氏に撮影いただいた。
また、第12次調査B74区出土の御用札については神戸市教育委員会文化財課 高久智広が文字内容を釈読し、その段階で聴き取った概要を基に谷が解説を記述した。

5．遺跡が立地する地形の成立状況を知るために、増田富士雄氏（同志社大学理工学部）に調査期間中、６回にわたって現地において、現地調査の指針となる有益なご教示を頂戴した。また本報告書に玉稿をいただいた（Ⅲ章３節）。

6．遺物の写真撮影は杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。

7．調査で出土した木製品、種実の同定および古環境復元のための花粉・珪藻・植物珪酸体の分析業務については、株式会社古環境研究所・パリノサーヴェイ株式会社に委託した。本報告書ではその分析結果の一部を掲載している。
本書掲載の木製品の実測・デジタルトレースについては、神戸市教育委員会の作業手順・図面表現方法の仕様に基づき、有限会社測点堂が実施した。
また、木製品の整理作業にあたって、東村純子氏（当時国立民族学博物館 日本学術振興会特別研究員、現在福井大学教育地域科学部講師）に遺物を実見していただき、紡織具の選定とその機能についてご教示いただいた。

8．本書に用いた方位・座標は平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。

9．調査で出土した遺物および写真・図面等の記録類、分析資料については神戸市埋蔵文化財センターにて保管している。

10．本書に使用した地図は神戸市発行の1/2500地形図「芦屋浜」である。

11．調査にあたって、神戸市都市計画総局、阪神電気鉄道株式会社、大成建設・戸田建設JVの協力を得ました。

目　次

序
例言
目次 …… i ～vi
Ⅰ．はじめに
　1．深江北町遺跡の立地と歴史的環境 …… 1
　2．これまでの調査成果 …… 4
　3．第12・14次調査の経緯と経過 …… 5
Ⅱ．遺構と遺物
　1．第12・14次調査地付近の地形 …… 9
　2．第12次調査
　　B74区 …… 11
　　B75-A区 …… 15
　　B75-B区 …… 17
　　B76-A区 …… 21
　　B76-B区 …… 23
　　B77-A区 …… 25
　　B77-B区 …… 29
　　B77-C区 …… 31
　　B78区 …… 33
　　B79区 …… 39
　　B80-A区 …… 43
　　B80-B区 …… 55
　　B81-A区 …… 97
　　B81-B区 …… 103
　　B82-A区 …… 111
　　B82-B区 …… 121
　　B83-A区 …… 129
　　B83-B区 …… 133
　3．第14次調査
　　P2区 …… 141
　　P3区 …… 143
　　P4区 …… 147
　　P5区 …… 149
　　P6区 …… 151
　　P7区 …… 155
　　P8区 …… 157
Ⅲ．古環境の調査と復元
　1．深江北町第12・14次調査出土木製品について …… 159
　2．深江北町遺跡第12次調査における古環境分析 …… 163
　　株式会社　古環境研究所
　3．神戸市東灘区深江北町遺跡第12次調査地での自然堆積層 …… 171
　　増田　富士雄（同志社大学理工学部）
Ⅳ．まとめ …… 183

Ⅴ．深江北町遺跡第12・14次調査出土木簡釈文・解説 …… 一～四
　　独立行政法人国立文化財機構
　　奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室

挿図・挿図写真・表目次

fig. 1　深江北町遺跡の位置 …… 1
fig. 2　六甲山南麓の飛鳥～平安時代の遺跡 …… 3
fig. 3　深江北町遺跡調査一覧（表）…… 4
fig. 4　今回の調査地と既往の調査地 …… 5
fig. 5　深江北町遺跡第12・14次調査範囲…… 7
fig. 6　深江北町遺跡第12・14次調査地地形概念図 …… 9
fig. 7　深江北町遺跡第12・14次調査土層柱状図……10
fig. 8　B74区位置図……11
fig. 9　B74区北壁断面図 ……11
fig. 10　近世溝内石材出土状況図 ……12
fig. 11　B74区東壁断面図……12
fig. 12　近世溝内土留丸太検出状況図 ……13
fig. 13　近世溝内出土陶磁器……13
fig. 14　近世溝内出土漆椀 ……14
fig. 15A　近世溝内出土御用札（図）……14
fig. 15B　近世溝内出土御用札（写真）……14
fig. 16　B75-A区位置図……15
fig. 17　B75-A区北壁断面図 ……15
fig. 18　B75-A区検出遺構平面図 ……16
fig. 19　B75-A区全景（東から・写真）……16
fig. 20　B75-B区位置図 ……17
fig. 21　B75-B区北壁断面図……17
fig. 22　B75-B区犂溝・焼土面平面図 ……18
fig. 23　B75-B区近世井戸断面図 ……18
fig. 24　B75-B区浜堤～湿地への変換点平面図 ……19
fig. 25　B75-B区湿地内杭列配置図……19
fig. 26　杭列平・立面図 ……19
fig. 27　B75-B区出土土器 ……20
fig. 28　B75-B区浜堤と湿地の状況（西から・写真）……20
fig. 29　B76-A区位置図……21
fig. 30　B76-A区北壁断面図 ……21
fig. 31　B76-A区流路平面図 ……22
fig. 32　B76-A区出土遺物 ……22
fig. 33　B76-B区位置図 ……23
fig. 34　B76-B区北壁断面図……23
fig. 35　B76-B区遺構平面図……24
fig. 36　B76-B区出土遺物 ……24
fig. 37　B77-A区位置図……25
fig. 38　B77-A区北壁断面図 ……25
fig. 39　B77-A区東壁断面図 ……26
fig. 40　B77-A区犂溝平面図 ……26
fig. 41　B77-A区流路平面図 ……27
fig. 42　B77-A区人力掘削状況（写真）……27
fig. 43　B77-A区犂溝の状況（東から・写真）……27
fig. 44　B77-A区出土土器 ……28
fig. 45　B77-A区出土土錘 ……28
fig. 46　B77-A区流路完掘状況（南東から・写真）……28
fig. 47　B77-B区位置図 ……29
fig. 48　B77-B区北壁断面図……29
fig. 49　B77-B区流路平面図……30
fig. 50　B77-B区出土遺物 ……30
fig. 51　B77-C区位置図 ……31
fig. 52　B77-C区北壁断面図……31
fig. 53　B77-C区流路平面図……32
fig. 54　B77-C区出土土器 ……32
fig. 55　B78区位置図 ……33
fig. 56　B78区北壁断面図……33
fig. 57　B78区湿地内自然木・木製品・土器検出状況図 ……34
fig. 58　B78区東壁断面図……34
fig. 59　B78区出土墨書土器 ……35
fig. 60　B78区出土石庖丁 ……35
fig. 61　B78区出土遺物……36
fig. 62　B78区出土木製品 ……37
fig. 63　B78区湿地内土器・木製品出土状況（北から・写真）……38
fig. 64　B78区木製品取上げ作業（写真）……38
fig. 65　B79区位置図 ……39
fig. 66　B79区北壁断面図……39
fig. 67　B79区犂溝・溝平面図……40
fig. 68　B79区犂溝全景（東から・写真）……40
fig. 69　B79区柱穴・土坑平面図……41
fig. 70　B79区柱穴・土坑断面図……41
fig. 71　B79区全景（東から・写真）……42
fig. 72　B79区出土土器……42
fig. 73　B79区出土墨書土器 ……42
fig. 74　B79区出土土錘……42
fig. 75　B80-A区位置図……43
fig. 76　B80-A区北壁断面図 ……43
fig. 77　B80-A区東壁断面図 ……44
fig. 78　B80-A区杭・ピット平面図 ……44
fig. 79　B80-A区ピット断面図……44
fig. 80　B80-A区谷状地形平面図 ……45
fig. 81　黒灰色砂質シルト出土土器・磁器……46
fig. 82　黒色砂質シルト出土土器 ……47
fig. 83　暗灰色中砂出土土器・陶器……48
fig. 84　灰色中砂出土土器・陶硯 ……48
fig. 85　ピット出土土器……48
fig. 86　黒灰色砂質シルト・灰色中砂出土墨書土器……49
fig. 87　黒色砂質シルト出土墨書土器……49
fig. 88　黒色砂質シルト出土転用硯……49
fig. 89　谷状地形出土土器 ……49
fig. 90　黒灰色砂質シルト出土銙帯金具 ……49
fig. 91　黒色砂質シルト・暗灰色中砂出土瓦 ……50
fig. 92　B80-A区出土蛸壺 ……50
fig. 93　B80-A区出土土錘 ……51

fig. 94　B80-A区出土土錘・砥石……52
fig. 95　B80-A区出土木簡（図・写真）……53
fig. 96　B80-A区出土木製品……54
fig. 97　B80-B区位置図……55
fig. 98　B80-B区北壁断面図……55
fig. 99　B80-B区東壁断面図……56
fig. 100　B80-B区杭・柱穴・湿地平面図……57
fig. 101　B80-B区柱穴・土坑断面図……57
fig. 102　B80-B区谷状地形平面図……57
fig. 103　中世耕作土出土遺物……58
fig. 104　淡黒灰色シルト～黒褐色シルト上層出土遺物……58
fig. 105　黒褐色シルト出土墨書土器（1）……59
fig. 106　黒褐色シルト出土墨書土器（2）……59
fig. 107　黒褐色シルト出土墨書土器（3）……60
fig. 108　黒褐色シルト出土土器・陶器……61
fig. 109　黒褐色シルト出土転用硯……62
fig. 110　黒色砂質シルト出土土師器……63
fig. 111　黒色砂質シルト出土須恵器・陶器……64
fig. 112　黒色砂質シルト出土須恵器……65
fig. 113　黒色砂質シルト出土墨書土器（1）……66
fig. 114　黒色砂質シルト出土墨書土器（2）……67
fig. 115　黒色砂質シルト出土墨書土器（3）……68
fig. 116　黒色砂質シルト出土転用硯……69
fig. 117　黒色シルト混灰色細砂出土土器……70
fig. 118　黒色シルト混灰色細砂・SX01出土墨書土器……71
fig. 119　黒色シルト出土須恵器（1）……71
fig. 120　黒色シルト出土須恵器（2）……72
fig. 121　黒色シルト出土土師器……73
fig. 122　黒色シルト出土墨書土器（1）……74
fig. 123　黒色シルト出土墨書土器（2）……75
fig. 124　黒色シルト出土ヘラ描き土器……75
fig. 125　黒色シルト出土転用硯……76
fig. 126　B80-B区出土瓦（1）……77
fig. 127　B80-B区出土瓦（2）……78
fig. 128　B80-B区出土棒状・管状土錘……79
fig. 129　B80-B区出土有溝・管状土錘……80
fig. 130　B80-B区出土蛸壺……81
fig. 131　B80-B区出土漆付着土器・フイゴ羽口……82
fig. 132　B80-B区出土砥石……83
fig. 133　B80-B区出土砥石・敲石・磨石……84
fig. 134　B80-B区出土木簡（1）（図・写真）……85
fig. 135　B80-B区出土木簡（2）（図・写真）……86
fig. 136　B80-B区出土木簡（3）（図・写真）……87
fig. 137　B80-B区出土木簡（4）（図・写真）……88
fig. 138　B80-B区出土木簡（5）（図・写真）……89
fig. 139　B80-B区出土木簡（6）（図・写真）……90
fig. 140　B80-B区出土木製品（1）……92
fig. 141　B80-B区出土木製品（2）……93
fig. 142　B80-B区出土木製品（3）……94
fig. 143　B80-B区出土木製品（4）……95
fig. 144　B80-B区出土木製品（5）……96
fig. 145　B81-A区位置図……97
fig. 146　B81-A区北壁断面図……97
fig. 147　B81-A区柱穴・ピット平面図……98
fig. 148　B81-A区柱穴・土坑・溝断面図……98
fig. 149　B81-A区竪穴住居平・断面図……99
fig. 150　B81-A区溝・ピット・土坑平面図……100
fig. 151　B81-A区溝・土坑・ピット検出状況
（南東から・写真）……100
fig. 152　B81-A区出土砥石……101
fig. 153　B81-A区出土土器……101
fig. 154　B81-A区出土土錘・蛸壺……102
fig. 155　B81-A区北壁断面（写真）……102
fig. 156　B81-B区位置図……103
fig. 157　B81-B区北壁断面図……103
fig. 158　B81-B区犂溝平面図……104
fig. 159　B81-B区柱穴・ピット検出面平面図……104
fig. 160　B81-B区柱穴・ピット断面図……105
fig. 161　B81-B区祭祀遺物出土位置図……106
fig. 162　B81-B区溝状遺構平面図……107
fig. 163　B81-B区溝状遺構内土器出土状況
（南東から・写真）……107
fig. 164　B81-B区出土土錘……107
fig. 165　B81-B区出土土器……108
fig. 166　B81-B区祭祀場出土鉄製品……109
fig. 167　B81-B区祭祀場出土土器……109
fig. 168　B81-B区出土祭祀遺物……109
fig. 169　B81-B区祭祀場遺物出土状況
（北西から・写真）……110
fig. 170　B81-B区祭祀遺物検出作業（写真）……110
fig. 171　B82-A区位置図……111
fig. 172　B82-A区北壁断面図……111
fig. 173　B82-A区東壁断面図……112
fig. 174　B82-A区犂溝平面図……112
fig. 175　B82-A区土坑・ピット平面図……113
fig. 176　B82-A区土坑・ピット断面図……113
fig. 177　B82-A区祭祀遺物・土器出土位置図……114
fig. 178　B82-A区東壁断面（写真）……115
fig. 179　B82-A区東壁断面土層転写作業（写真）……115
fig. 180　B82-A区出土土器……116
fig. 181　B82-A区出土銙帯金具……117
fig. 182　B82-A区出土土錘……117
fig. 183　B82-A区出土祭祀土製品……118
fig. 184　B82-A区出土手捏土器（1）……119
fig. 185　B82-A区出土手捏土器（2）……120
fig. 186　B82-B区位置図……121
fig. 187　B82-B区北壁断面図……121
fig. 188　B82-B区犂溝・溝平面図……122
fig. 189　B82-B区柱穴・ピット平面図……122
fig. 190　B82-B区柱穴・ピット断面図……122

fig. 191　B82-B区祭祀遺物・土器出土位置図…… 123
fig. 192　B82-B区祭祀遺物出土状況（東から・写真）‥ 124
fig. 193　B82-B区黒色細砂面平面図 …… 124
fig. 194　B82-B区黄灰色粗砂面平面図…… 125
fig. 195　B82-B区黒色中砂・黄灰色粗砂出土土器 …… 125
fig. 196　B82-B区黄灰色中砂出土土器…… 126
fig. 197　B82-B区黄灰色中砂出土祭祀遺物 …… 127
fig. 198　B82-B区猪形土製品出土状況
（東から・写真）…… 128
fig. 199　B82-B区犂溝・溝検出作業（写真）…… 128
fig. 200　B83-A区位置図 …… 129
fig. 201　B83-A区北壁断面図…… 129
fig. 202　B83-A区東壁断面図…… 130
fig. 203　B83-A区平面図 …… 130
fig. 204　B83-A区出土土錘…… 131
fig. 205　B83-A区出土土器・陶器…… 131
fig. 206　B83-A区黒灰色細砂出土甑 …… 132
fig. 207　B83-A区出土木製品 …… 132
fig. 208　B83-B区位置図…… 133
fig. 209　B83-B区北壁断面図 …… 133
fig. 210　B83-B区東壁断面図 …… 134
fig. 211　B83-B区犂溝平面図 …… 134
fig. 212　B83-B区湿地出土土器…… 135
fig. 213　B83-B区出土墨書土器…… 135
fig. 214　B83-B区出土転用硯 …… 135
fig. 215　B83-B区出土土錘 …… 136
fig. 216　B83-B区出土木簡（図・写真） …… 136
fig. 217　B83-B区出土木製品（1）…… 138
fig. 218　B83-B区出土木製品（2）…… 139
fig. 219　B83-B区出土木製品（3）…… 140
fig. 220　P2区位置図 …… 141
fig. 221　P2区北壁断面図 …… 141
fig. 222　P2区地形測量図 …… 142
fig. 223　P2区出土土器…… 142
fig. 224　P2区出土木製品 …… 142
fig. 225　P2区出土墨書土器 …… 142
fig. 226　P3区位置図 …… 143
fig. 227　P3区北壁断面図 …… 143
fig. 228　P3区水田畦畔平面図…… 144
fig. 229　P3区黒灰色中砂面澪筋平面図 …… 144
fig. 230　P3区黒灰色中砂面土器群検出状況
（西から・写真）…… 144
fig. 231　P3区出土木製品 …… 145
fig. 232　P3区出土土器…… 146
fig. 233　P4区位置図 …… 147
fig. 234　P4区北壁断面図 …… 147
fig. 235　P4区流路平面図 …… 148
fig. 236　P4区出土蛸壺・土錘…… 148
fig. 237　P4区出土土器…… 148
fig. 238　P4区出土木製品 …… 148
fig. 239　P5区位置図 …… 149
fig. 240　P5区北壁断面図 …… 149
fig. 241　P5区水田畦畔平面図…… 150
fig. 242　P5区出土墨書土器 …… 150
fig. 243　P5区出土土器・土錘…… 150
fig. 244　P5区出土木製品 …… 150
fig. 245　P6区位置図 …… 151
fig. 246　P6区北壁断面図 …… 151
fig. 247　P6区犂溝平面図 …… 152
fig. 248　P6区落ち込み・流路平面図…… 152
fig. 249　P6区高坏出土状況（南西から・写真）…… 152
fig. 250　P6区出土墨書土器 …… 153
fig. 251　P6区出土木簡（図・写真）…… 153
fig. 252　P6区出土土器・土錘…… 153
fig. 253　P6区出土木製品 …… 154
fig. 254　P7区位置図 …… 155
fig. 255　P7区北壁断面図 …… 155
fig. 256　P7区杭列検出状況平面図 …… 156
fig. 257　P7区出土土器・土錘…… 156
fig. 258　P7区出土木製品 …… 156
fig. 259　P8区位置図 …… 157
fig. 260　P8区北壁断面図 …… 157
fig. 261　P8区水田畦畔・溝・杭平面図 …… 158
fig. 262　P8区澪筋検出状況平面図 …… 158
fig. 263　P8区出土木製品 …… 158
fig. 264　樹種同定結果（1）（表） …… 160
fig. 265　樹種同定結果（2）（表） …… 161
fig. 266　樹種同定結果（3）（表） …… 162
fig. 267　主要植物遺体と推定される植生・環境・農耕
（表）…… 167
fig. 268　B83-B区東壁断面における花粉ダイヤグラム
…… 167
fig. 269　B83-B区東壁断面における植物珪酸体分析結果
…… 167
fig. 270　B83-B区東壁断面における主要珪藻
ダイヤグラム …… 168
fig. 271　B83-B区東壁断面における種実ダイヤグラム
…… 168
fig. 272　B83-B区13層における種実ダイヤグラム …… 168
fig. 273　B83-B区検出の植物珪酸体（写真）…… 169
fig. 274　B83-B区検出の花粉・胞子・寄生虫卵（1）
（写真）…… 169
fig. 275　B83-B区検出の花粉・胞子・寄生虫卵（2）
（写真）…… 169
fig. 276　B83-B区検出の珪藻（1）（写真）…… 169
fig. 277　B83-B区検出の珪藻（2）（写真）…… 170
fig. 278　B83-B区検出の珪藻（3）（写真）…… 170
fig. 279　B83-B区検出の種実（1）（写真）…… 170
fig. 280　B83-B区検出の種実（2）（写真）…… 170
fig. 281　深江北町遺跡の位置 …… 171

fig. 282　砂丘・海浜堆積物の露頭断面と粒度特性
（工区B77-Bの北壁）（図・写真）…… 172
fig. 283　砂丘・海浜堆積物の露頭断面と粒度特性
（工区B80-Aの北壁）（図・写真）…… 172
fig. 284　砂丘・海浜堆積物（工区B80-A）（写真）…… 173
fig. 285　砂丘堆積物と潟堆積物（工区B77-A）（写真）‥ 173
fig. 286　砂丘砂の粒度特性 …… 173
fig. 287　砂丘堆積物と潟堆積物（工区B75-B）（写真）‥ 174
fig. 288　潮汐チャネル（澪）埋積物にみられる
マッドドレイプ（工区B77-B）（写真）…… 174
fig. 289　砂質堆積物からなる潮汐チャネル（澪）埋積物
（工区B82-A）（写真）…… 174
fig. 290　砂干潟堆積物の砂泥細互層（工区B82-A）
（写真）…… 175
fig. 291　海浜・砂丘堆積物と土砂流堆積物（工区B82-A）
（写真）…… 175
fig. 292　河川堆積物の砂礫層（工区B82-A）（写真）…… 175
fig. 293　河川堆積物の砂礫層（工区B82-A）（写真）…… 175
fig. 294　土砂流堆積物（工区B80-A）（写真）…… 176
fig. 295　調査地における自然堆積層の分布とそれから
読み取れる地形と海水準変動…… 177
fig. 296　調査地を通る南北方向の地下地質断面図 …… 178
fig. 297　粒度分布から求めた粒度特性値（表）…… 180
fig. 298　砂試料の採取点と粒度分布型（図・写真）…… 181
fig. 299　砂試料の粒度特性。各工区の中央粒径，
分級度，歪度のプロット。 …… 182

写真図版目次

カラー写真図版1
深江北町遺跡第12・14次調査出土墨書土器・硯・転用硯
カラー写真図版2
1．深江北町遺跡第12・14次調査出土墨書土器の一部
2．同上 硯・転用硯の一部
カラー写真図版3
B80-B区出土土錘・蛸壺
カラー写真図版4
B82-A区出土祭祀遺物
カラー写真図版5
1．B81-B区出土祭祀遺物
2．B82-B区出土祭祀遺物
カラー写真図版6
1．深江北町遺跡付近の航空写真（北から）
2．深江北町遺跡付近の航空写真（東から）
写真図版1
1．調査時の状況（東灘小学校校舎屋上より阪神芦屋駅方向を望む）
2．B74区近世溝と石材出土状況（東から）
写真図版2
1．B75-B区湿地内杭列の出土状況（西から）
2．B80-A区湿地と浜堤の境界の状況（東から）
写真図版3
1．B80-B区湿地の状況（西から）
2．B80-B区北壁における土器・木片の堆積状況
写真図版4
1．B81-A区柱穴・ピット検出状況（南東から）
2．B81-B区柱穴・ピット検出状況（東から）
写真図版5
1．B82-A区柱穴・ピット検出状況（東から）
2．B82-A区祭祀遺物出土状況（東から）
写真図版6
1．B82-B区柱穴・ピット検出状況（東から）
2．B82-B区掘立柱建物（西から）
写真図版7
1．B83-A区北壁における浜堤から湿地への堆積状況
2．P3区澪筋と土器出土状況（西から）
写真図版8
1．B74区出土陶磁器
2．B77-B区出土土器・土錘
写真図版9
1．B78区出土土器・土錘・石庖丁
2．B80-A区出土土錘・蛸壺
写真図版10
B80-A区黒灰色砂質シルト出土土器
写真図版11
B80-B区黒色砂質シルト出土土器
写真図版12
B80-B区黒色シルト出土土器
写真図版13
1．B80-B区出土瓦
2．B80-B区出土砥石・磨石・敲石
写真図版14
深江北町遺跡第12・14次調査出土墨書土器（1）
写真図版15
深江北町遺跡第12・14次調査出土墨書土器（2）
写真図版16
1．B80-B区出土漆付着土器
2．B81-A区出土土器・土錘・蛸壺・砥石
写真図版17
1．B81-B区出土土器
2．B82-A区出土土器（1）
写真図版18
1．B82-A区出土祭祀遺物（1）
2．B82-A区出土祭祀遺物（2）
写真図版19
1．B82-A区出土土器（2）
2．B82-B区出土土器（1）
写真図版20
1．B82-B区出土土器（2）
2．B83-A区出土土器
写真図版21
P3区出土土器
写真図版22
1．深江北町遺跡第12次調査出土金属製品（表）
2．同上（裏）
3．同上（X線透過画像）
写真図版23
1．木製品1（墨壺）
2．木製品2（工具類）
3．木製品3（鍬身・横槌）
4．木製品4（浮木）
写真図版24
1．木製品5（錘・織具）
2．木製品6（下駄）
3．木製品7（横櫛）
写真図版25
木製品8（祭祀具）
写真図版26
1．木製品9（漆容器・皿）
2．木製品10（曲物）
3．木製品11（釘・楔）
4．木製品12（その他）
写真図版27
1．木製品13（大形部材）
2．木製品14（御用札）
写真図版28
深江北町遺跡第12・14次調査出土木簡（1）
写真図版29
深江北町遺跡第12・14次調査出土木簡（2）
写真図版30
深江北町遺跡第12・14次調査出土木簡（3）

Ⅰ．はじめに

1．深江北町遺跡の立地と歴史的環境

(1) 遺跡の地理的環境

深江北町遺跡は神戸市域の東端に位置し、芦屋市と市境を跨いで遺跡が存在する。芦屋市側は津知(つぢ)遺跡と称しているが、本来同一の遺跡と考えられる。

当遺跡は大阪湾を巡る沿岸流によって形成された浜堤(砂堆)上に立地する。現在は海岸部の埋め立てが進み、海岸線からは約500～600m程離れているが、中世以前はすぐ南側に海浜が連なっていたものと推定される。浜堤は海岸線にほぼ平行して4列確認されており、その間の低地部分は、水田が営まれ、葦等が生い茂る沼沢地となっていたことが古環境の各種分析により明らかとなっている。

4列の浜堤については、山側から1列目の浜堤には本庄町遺跡、森南町遺跡など縄文時代後期～弥生時代後期にかけての集落遺跡が占地し、2・3列目には小路大町遺跡や深江北町遺跡等の主に古墳時代以降に形成された遺跡が存在する。4列目には弥生時代前期～平安時代の北青木遺跡が浜堤上の場所を変えながら存続する。

遺跡の東側には芦屋川が流れており、過去に大きな氾濫を繰り返し、現在は天井川となっている。当遺跡もその影響を受けて、浜堤間の湿地が次第に埋積してゆき、中世頃には埋没して耕作地化していた状況が発掘調査によって確認された。

また、この付近を古代山陽道が通過していたことは、主に歴史地理学の分野から論及されてきたが、古代山陽道に付随する施設である「葦屋驛家」(あしやのうまや)が当遺跡の近辺に奈良～平安時代前半頃まで存在していたことが、近年の発掘調査資料の増加により窺えるようになってきた。

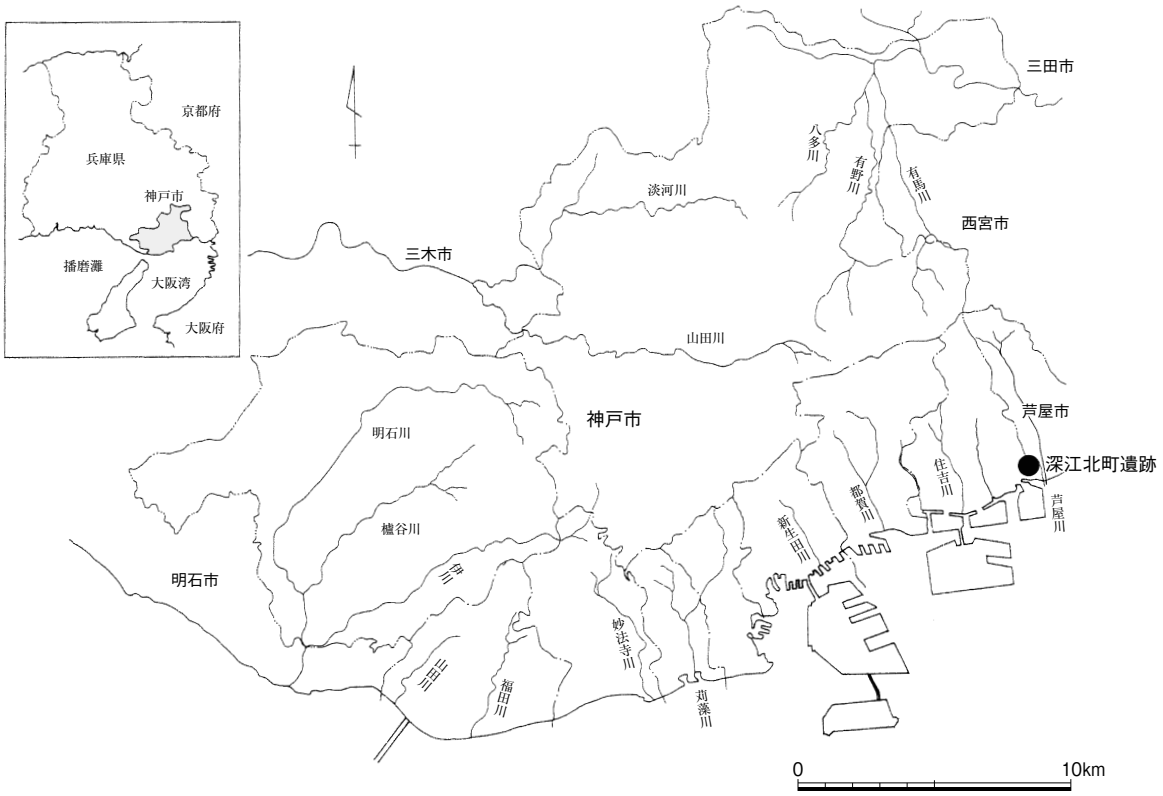


fig. 1　深江北町遺跡の位置

（2）六甲山系南麓の飛鳥から平安時代前半の遺跡

六甲山系南麓は、複数の小河川によって形成された扇状地と小規模な沖積地が連続する地形であり、その起伏のある土地を横断するかたちで古代山陽道が通過している。

この付近の飛鳥から平安時代前半の遺跡の分布状況には特徴がある。fig. 2の地図を参照すると、古代山陽道の通っていた場所と推定される周辺に遺跡が帯状に点在していることが判る。

また、深江北町遺跡を含む芦屋廃寺、寺田遺跡等の芦屋市西部の遺跡群から神戸市東灘区の郡家遺跡、住吉宮町遺跡までの東側のグループがあり、数キロメートルにわたる遺跡の空白地帯を経て、中央区の日暮遺跡から須磨区大田町遺跡までの西側のグループに分けられる。芦屋市西部から神戸市須磨区付近一帯は摂津国菟原郡と八部（雄伴）郡という2郡が分立しており、遺跡の空白地帯はその境界を表す可能性がある。

以下時代の概要と各遺跡についてのキーワードを記述する。

①飛鳥時代

この時期に集落を形成した遺跡は奈良・平安時代前期と存続するものが多い。古い時期の木簡が出土するような遺跡もあり、注目される。

芦屋市寺田遺跡（1）（竪穴住居・掘立柱建物）、芦屋市三条九ノ坪遺跡（2）（壬子年〔652年〕記載の木簡）、東灘区深江北町遺跡（3）（竪穴住居）、東灘区森北町遺跡（4）（掘立柱建物・水田遺構）、東灘区郡家遺跡（5）（掘立柱建物）、中央区二宮遺跡（6）（竪穴住居・掘立柱建物・鍛冶遺構）、中央区下山手遺跡（7）（溝・土坑）、兵庫・長田区上沢遺跡（8）（掘立柱建物・大壁造建物・鍛冶、鋳造に関わる遺物）、長田区三番町遺跡（9）（流路・ピット）、長田区御蔵遺跡（10）（掘立柱建物・集石遺構・流路）、須磨区行幸町遺跡（11）（大溝）

②奈良時代

古代山陽道沿いに遺跡が集まる時期で、この大道が生活に深くかかわる道路であることを示唆している。沿海部にも遺跡が見出せる。

芦屋市寺田遺跡（12）（「大領・小領」の墨書土器）、芦屋市津知遺跡（13）（大形掘立柱建物・皇朝銭・円面硯）、芦屋市芦屋廃寺（14）（白鳳期創建）、東灘区深江北町遺跡（15）（掘立柱建物・木簡）、東灘区住吉宮町遺跡（16）（井戸内出土の墨書土器「橘東家」「免〔菟原の誤記か〕」）、東灘区郡家遺跡（5）（大形の掘形を持つ掘立柱建物）

灘区西求女塚古墳（17）（古墳の西側で掘立柱建物、溝を確認）、中央区二宮遺跡（6）（流路・土馬）、中央区旧三宮駅構内遺跡（18）（土坑）、中央区下山手遺跡（7）（土坑）、兵庫・長田区上沢遺跡（19）（掘立柱建物・井戸内から鋺出土）、長田区御蔵遺跡（20）（掘立柱建物・井戸）、長田区御船遺跡（21）（掘立柱建物）、長田区二葉町遺跡（22）（掘立柱建物・井戸・土坑）、長田区長田野田遺跡（23）（掘立柱建物・井戸・土坑）、須磨区大田町遺跡（24）（掘立柱建物・土坑・胞衣壺）、須磨区行幸町遺跡（11）（掘立柱建物・帯金具）

③平安時代

前代に続いて遺跡が継続するものが多いが、地域毎の中心地が推移していく様子が窺える。平安時代後半には遺跡の消滅、規模の縮小・分散化が認められ、社会構造・集落の在り方に大きな変化があったことが窺える。

東灘区深江北町遺跡（15）（「承和」年の木簡）、東灘区住吉宮町遺跡（25）（掘立柱建物・地鎮遺構）、中央区日暮遺跡（26）（掘立柱建物・地鎮遺構）、長田区御蔵遺跡（20）（掘立柱建物）、須磨区大田町遺跡（24）（掘立柱建物）

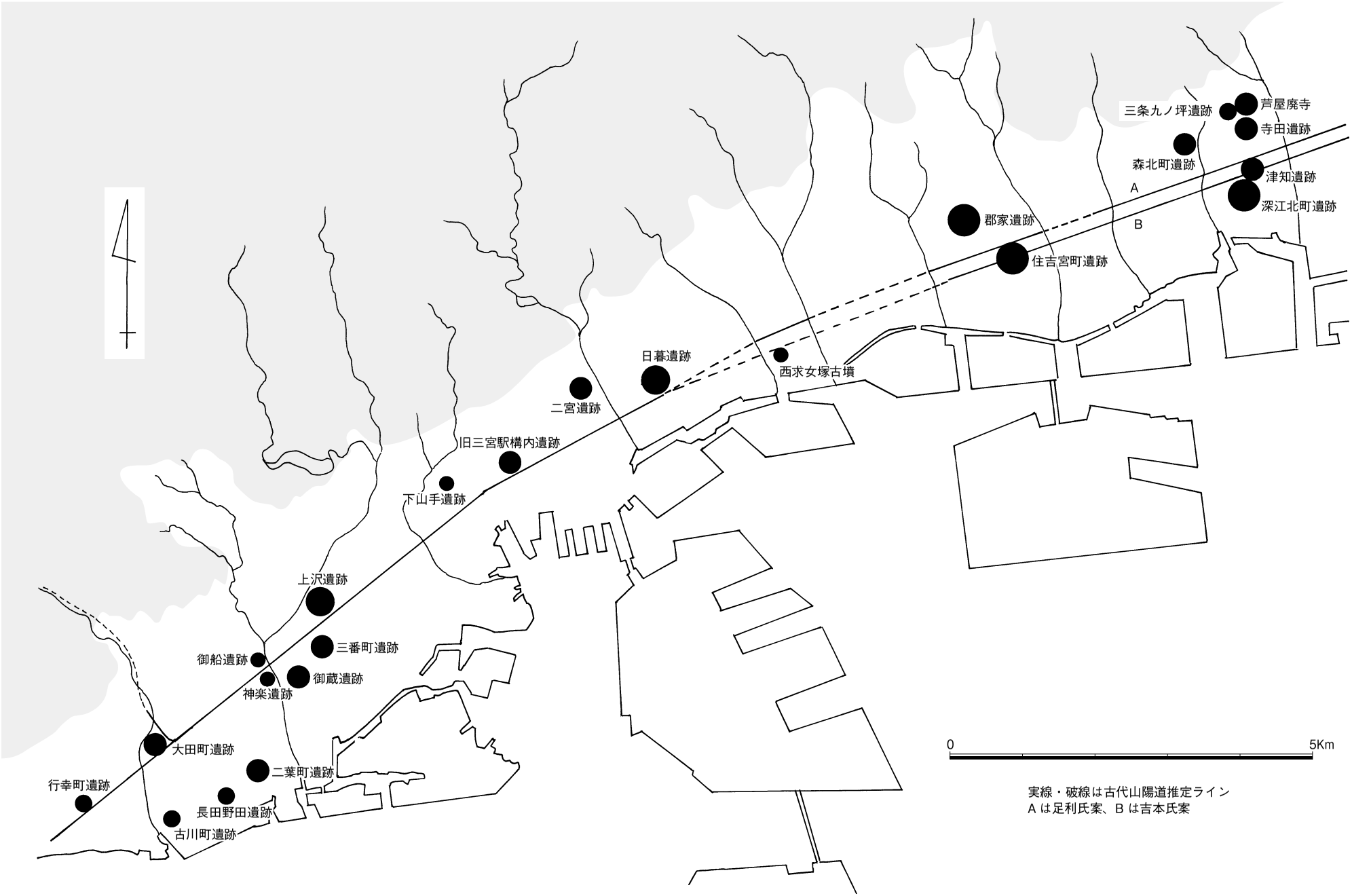


fig. 2　六甲山南麓の飛鳥～平安時代の遺跡

2. これまでの調査成果

これまでの調査では、古墳時代初頭の円形周溝墓群（第３次）や飛鳥時代～平安時代初めまでの竪穴住居・掘立柱建物等（第２次・９次）が確認されている。

発見された出土品としては青銅製帯金具・小型銅鏡（第２次）、「承和」の年号が入った米の支給伝票木簡、「九九八十一・八九七十二」と書かれた木簡の出土（第９次）や、「驛」（第８次）・「驛・大垣・北・大西・東・百・年」（第９次）等と墨書された土器が発見されていることが特筆され、「葦屋驛家」またはそれに関連する施設が近くに存在していたことを示唆する資料を提示したが、驛家の施設本体を未だ確認することはできていない。

また、各種土錘・蛸壺等の漁具が多く出土し、海との関わりが深い人々の集落でもあることが指摘されている。

遺構群が分布する浜堤の北側と東側の湿地には、古墳時代頃から水田が拓かれるが、東側を流れる芦屋川の氾濫の影響をしばしば受け、複数層の水田面が洪水砂に覆われる状況が確認されている（第１・13・14・15次）。

当遺跡の北側に隣接する芦屋市津知遺跡では、第２地点で平安時代前期の掘立柱建物が確認され、「和同開珎」「萬年通寶」等の皇朝銭・墨書土器・円面硯・緑釉陶器・瓦が出土し、これが「葦屋驛家」に関わる施設という考え方がある。また古代山陽道がこの付近を通過するという歴史地理学の研究成果も相まって、この遺跡付近に「葦屋驛家」を求める意見も根強いものがある。しかしながら阪神淡路大震災以後、区画整理事業やそれに関連する工事で津知遺跡付近の調査件数が増加して新たな知見も加わり、この意見にも修正が加えられつつある。

調査次数	調査年度	調査機関	調査面積	調査目的	調査内容
1	1984	兵庫県教育委員会	1950	県営住宅建設	奈良時代以降の水田、時期不明の土坑・杭列 弥生時代後期～平安時代後期の柱穴
2	1985	兵庫県教育委員会	605	県営住宅建設	弥生時代後期の溝、飛鳥時代の竪穴住居 奈良～平安時代初めの掘立柱建物
3	1986	兵庫県教育委員会	660	県営住宅建設	古墳時代初めの円形周溝墓群、土器棺墓
4	1987	神戸市教育委員会	50	共同住宅建設	古墳時代後期～鎌倉時代の落ち込み・ピット
5	1990	兵庫県教育委員会	1572	県営住宅建設	弥生時代後期の掘立柱建物・土坑、中世の掘立柱建物・土坑・水田
6	1993	神戸市教育委員会	50	共同住宅建設	古墳時代後期～中世の遺物包含層
7	1996	神戸市教育委員会	185	共同住宅建設	平安時代後半の土坑・溝・ピット
8	1999	神戸市教育委員会	220	共同住宅建設	古墳時代初めの溝・ピット、古墳時代後期～平安時代の柱穴・土坑・流路、「驛」の墨書土器
9	2000	神戸市教育委員会	2670	共同住宅建設	古墳時代初めの遺物包含層、奈良～平安時代初めの掘立柱建物・土坑・溝・流路、平安時代後期の掘立柱建物　木簡・墨書土器
10	2006	神戸市教育委員会	163	下水道移設	平安時代を主体とする土坑・溝・ピット・落ち込み
11	2006	神戸市教育委員会	200	共同住宅建設	平安時代の流路、転用材を利用した護岸施設
12	2011	神戸市教育委員会	1620	鉄道高架化工事	本報告書所収 古墳時代初めの溝、古墳時代後期の祭祀跡、飛鳥時代の竪穴住居、奈良～平安時代の掘立柱建物、中・近世の犂溝、近世の集落を画する溝、木簡・墨書土器
13	2011	神戸市教育委員会	875	特別養護老人ホーム	古墳時代初め頃～平安時代の水田遺構
14	2012	神戸市教育委員会	364	鉄道高架化工事	本報告書所収 奈良時代頃の水田遺構、古墳時代の流路、土器群、木簡・墨書土器
15	2012	神戸市教育委員会	900	共同住宅建設	古墳時代～中世の水田遺構
16	2013	神戸市教育委員会	20	個人住宅建設	古墳時代頃の落ち込み

fig. 3　深江北町遺跡調査一覧

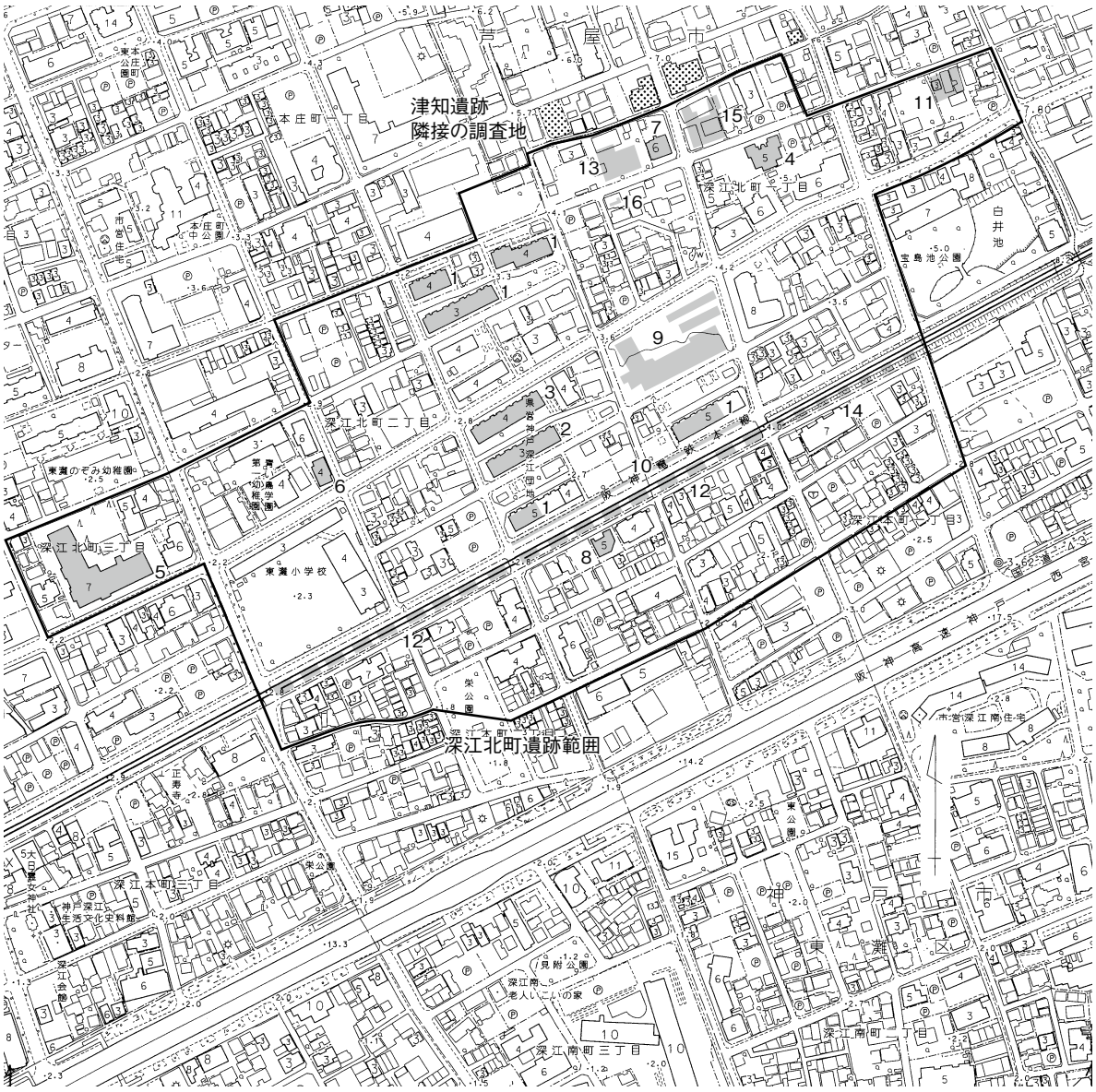


fig. 4　今回の調査地と既往の調査地（S＝1/5000・数字は調査次数に対応）

3．第12・14次調査の経緯と経過

（1）調査に至る経緯

神戸市では踏切の解消と都市環境の改善を目的とし、阪神電気鉄道株式会社の協力を得て、阪神住吉駅から芦屋駅までの区間を連続的に高架化し、あわせて交差道路や側道の整備を行う連続立体交差事業を実施している。

既に魚崎駅より西側の区間は工事が完了し、それより東側の区間についての工事を進めるにあたって、当該工事範囲の一部が神戸市の周知の埋蔵文化財包蔵地である深江北町遺跡に該当することが事前調整協議の中で判明し、平成21年３月31日付けで文化財保護法第93条第１項の規定に基づく届出を、鉄道高架部分の施主である阪神電気鉄道株式会社より神戸市教育委員会教育長あて提出された。これに基づき、神戸市教育委員会文化財課は周辺の発掘調査のデータを鑑みて、工事によって埋蔵文化財が損壊をうける部分については発掘調査が必要と判断し、その旨を阪神電気鉄道株式会社側に指示事項として通知した。

その後、調査の具体的な方法や調査時期等を断続的に調整し、現地の発掘調査については平成23年５月より実施することとなった。

今回の調査は、上記の高架化工事に伴うもので深江北町遺跡の範囲を東西に横断する形で行われている。ただし路線敷全体でなく、高架橋梁の基礎部分１箇所あたり約90㎡（第12次調査）・18箇所、約41～54㎡（第14次調査）・７箇所の合計25箇所をシートパイルで囲って調査する方法をとった。

調査は作業行程と予算の関係で、平成23年５月９日から平成24年２月17日（第12次調査・B74～B83-B区）までと、平成24年４月４日から平成24年８月７日（第14次調査・P2～P8区）までの２回に分けて実施した。

今回の調査範囲では浜堤と堤間湿地（ラグーン）が交錯するような状況で出現しており、隣接する調査区でも地形の様相が全く異なる場合があった。調査の結果、浜堤上では古墳時代の祭祀跡、奈良～平安時代の集落跡、湿地内では同時期の土器、木製品・木片等が出土している。

調査区の呼称は、現地調査中に事業者側と意思の疎通を容易にするため、工事にあたって、各橋台に工事番号として付している呼称名を、そのまま踏襲したことを付言する。

（2）調査組織（平成23・24・25年度）

現地調査および整理、報告書刊行作業にあたって、神戸市教育委員会の体制は以下の通りである。

神戸市文化財保護審議会　史跡・考古担当委員

和田晴吾（立命館大学文学部教授・平成25年７月14日まで）

工楽善通（大阪府立狭山池博物館館長）

菱田哲郎（京都府立大学文学部教授・平成25年７月15日から）

神戸市教育委員会事務局

教育長	永井秀憲（平成23・24年度）
	雪村新之助（平成25年度）
社会教育部長	大寺直秀（平成23年度）
	東野展也（平成24・25年度）
参事（文化財課長事務取扱）	安達宏二（平成23年度）
文化財担当部長	安達宏二（平成24・25年度）
主幹（埋蔵文化財係長事務取扱）	千種　浩（平成23年度）
埋蔵文化財担当課長	千種　浩（平成24・25年度）
文化財専門役	丸山　潔（平成23～25年度）
文化財課主査	丹治康明・安田　滋・斎木　巌（平成23・24年度）
	丹治康明・安田　滋・前田佳久・斎木　巌（平成25年度）
事務担当学芸員	佐伯二郎・井尻　格・中谷　正・小林さやか（平成23・24年度）
	西岡誠司・井尻格・中谷正（平成25年度）
調査担当学芸員	谷　正俊・阿部　功・井上（佐藤）麻子
遺物整理担当学芸員（主担）	阿部敬生（平成23年度）
	藤井太郎（平成24・25年度）
保存科学担当学芸員	中村大介（平成23～25年度）

(3) 調査の経過

①第12次調査

現地での調査は平成23年５月９日から平成24年２月17日まで実施した。

調査面積は約1620㎡（延べ調査面積3420㎡）である。

調査は阿部　功（B76-A区・B81-A区・B83-B区）、井上（佐藤）麻子（B82-A区）、谷　正俊（上記以外の調査区）が主に担当したが、作業内容によっては相互に連携している。

②第14次調査

現地での調査は平成24年４月４日から平成24年８月７日まで実施した。

調査面積は約364㎡（延べ調査面積約783㎡）である。調査は谷　正俊が担当した。

③出土品の整理・報告書の作成

平成23年度は発掘調査（第12次）と併行して、大量の木片・木製品の水洗作業を調査現場で行った。土器類は神戸市埋蔵文化財センターで水洗・マーキング・復元作業を実施した。

平成24年度は現地調査（第14次）と共に、出土土器類のマーキング・復元作業・一部実測作業にかかった。木製品については、水洗が完了した膨大な量の木片を分類する作業に終始した。

平成25年度は土器類の復元作業を実施しながら、年度後半から、本格的に実測作業を始め、その後、遺構・遺物測量図のレイアウト・トレース作業・本文作成等に追われた。また、出土遺物の撮影作業・木製品の実測・デジタルトレース作業の外部委託を行った。

④記者発表

現地調査中、および調査完了後、出土した木簡を独立行政法人奈良文化財研究所史料研究室に持ち込み、釈読していただいたところ、「（葦）屋驛長」「呪願師・天平十□年」銭の文数等を記したもの等が確認された。付近に「（葦）屋驛家」の存在やその活動内容の一端が明らかになったとして、平成25年４月10日に神戸市役所記者クラブにおいて調査成果の公表を行った。

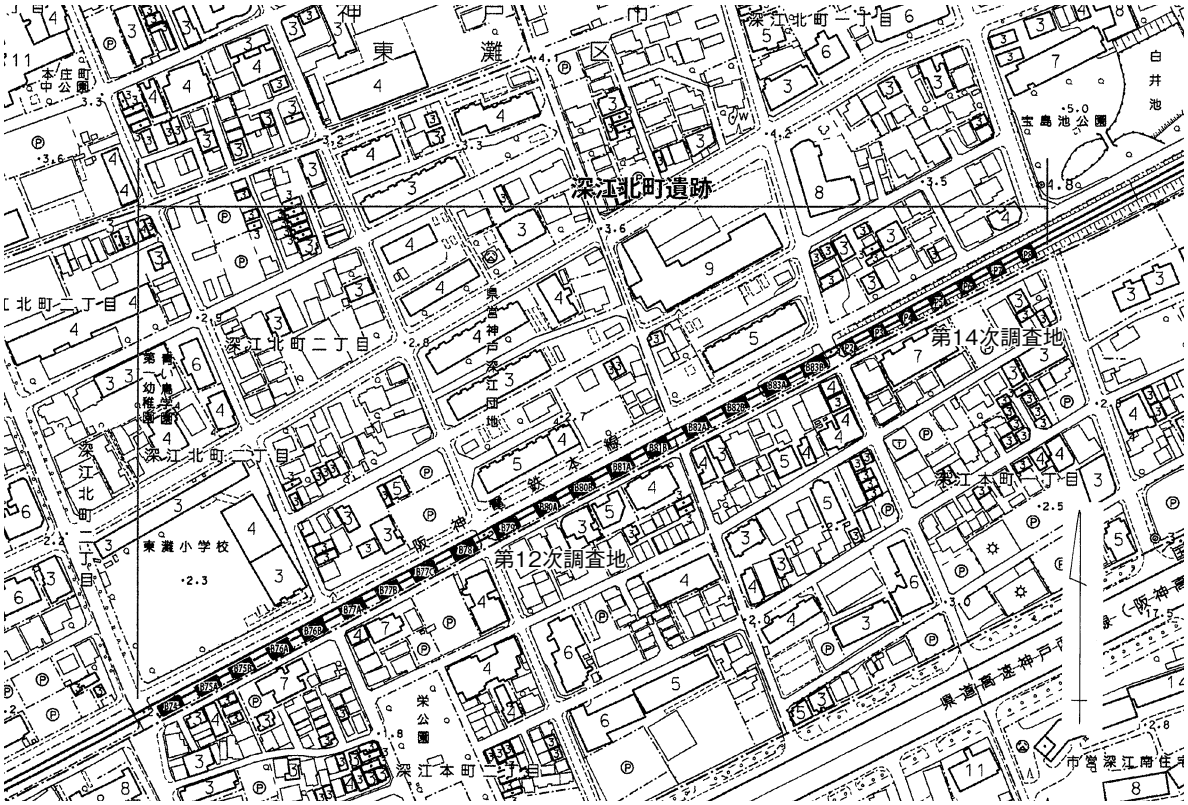


fig. 5　深江北町遺跡第12・14次調査範囲（S=1/4000）

（参考文献・本文中の括弧付番号に対応）

（１）前田佳久編『兵庫県芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書　第127，130，133地点』芦屋市　芦屋市教育委員会2002
（２）高瀬一嘉ほか『三条九ノ坪遺跡』兵庫県文化財調査報告第168冊　兵庫県教育委員会1997
（３）山下史朗編『神戸市東灘区深江北町遺跡』兵庫県教育委員会1988
（４）丹治康明他「森北町遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1992
（５）菅本宏明他「郡家遺跡大蔵地区第７次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2001
（６）谷正俊「二宮遺跡第１次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2001
（７）阿部敬生編『下山手遺跡第６次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2014
（８）池田毅他「上沢遺跡第９次調査」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
　　橋詰清孝他「上沢遺跡第32次-1，２次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2002
（９）谷正俊他「三番町遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1992
（10）安田滋編『御蔵遺跡　第17，38次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2001
　　山口英正「御蔵遺跡第３次」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
（11）西岡巧次他「行幸町遺跡　第１次-１・２次調査」『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2003
（12）宮本郁雄他『古代のメインロード―山陽道沿線物語―』神戸市教育委員会2001
（13）竹村忠洋編『津知遺跡第17次地点発掘調査報告書』芦屋市文化財調査報告第34集　芦屋市教育委員会1999
（14）村川幸弘『芦屋廃寺址』芦屋市文化財調査報告第７集　芦屋市教育委員会1970
（15）山本雅和編『深江北町遺跡第９次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2002
（16）丹治康明他「住吉宮町遺跡第14次調査」『平成２年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1993
　　菊池逸夫他「住吉宮町遺跡第23次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1999
（17）須藤宏「西求女塚古墳第６次調査」『平成６年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1997
（18）菅本宏明他「旧三宮駅構内遺跡」『平成２年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1993
（19）斎木巌他「上沢遺跡第３次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1999
　　斎木巌他「上沢遺跡第８・16次調査」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
　　富山直人「上沢遺跡第10次調査」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
　　口野博史「上沢遺跡第33次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2002
（20）安田滋編『御蔵遺跡　第４・６・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2001
（21）池田毅「御船遺跡第２次調査」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
（22）川上厚志編『二葉町遺跡第３・５・８・９・12次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2001
（23）兼康保明他「長田野田遺跡第１次調査」『平成７年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1998
（24）森内秀造編『神戸市須磨区　大田町遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会1993
　　吉川義彦『大田町遺跡発掘調査報告書』1994　関西文化財協会　1994
　　口野博史他「大田町遺跡第２次調査」『平成３年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994
　　東喜代秀他「大田町遺跡第５次調査」『平成６年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994
（25）丸山潔編『住吉宮町遺跡第14次調査』神戸市教育委員会1990
（26）谷正俊編『日暮遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1989

（註）fig. 2の山陽道推定ルートは足利健亮、吉本昌弘両氏の復元ルートを基に、谷が作図を行った。作図にあたって、以下の文献を参考にした。

足利健亮「山陽道の歴史地理学的考察」『歴史の道調査報告書　第２集　山陽道（西国街道）』兵庫県教育委員会1992
吉本昌弘「摂津国八部、菟原両郡の古代山陽道と条里制」『人文地理』第33巻第４号1981

Ⅱ．遺構と遺物

1．第12・14次調査地付近の地形

今回の調査はちょうど深江北町遺跡を横断する状態で実施したため、浜堤と湿地の変化を捉えることができた。その変化の状況を地形のまとまりごとに記述するが、浜堤は成長・変化しているため、ここでは概ね古墳時代以降の状況を記述する（fig. 6・7参照）。

(1) B74区～B75-B区

この範囲は浜堤上に位置するがB75-B区東半部で湿地に変化する。このあたりは中・近世以降の遺構が確認されている。

(2) B76-A区～B77-C区

B76-A区では西半分が湿地で、東側は浜堤に上がる地形である。そのまま2ブロックは浜堤が連続し、B77-B区の北側の一部、B77-C区の東側では再び湿地に下がる。

(3) B78区～B80-B区

B78区は調査区全体が湿地内にあたり、B79区では北東側、B80-A区では北西側が浜堤上にあたり、ピット・土坑等が確認される。その他は湿地または湿地への移行部分にあたる。B80-B区では西半分は湿地、東半分は浜堤上となり、ピット等が検出される。

(4) B81-A区～B83-A区

このあたりは安定した浜堤にあたっており、古墳時代～平安時代前期までの遺構が集中する場所にあたる。ただし一部の調査区では洪水砂の堆積が見られる。この浜堤はB83-A区で急激に下がり、湿地に移行する。

(5) B83-B区～P8区

B83-B区は湿地の分厚い堆積層が認められた。P2区では西側を流れていた小河川の氾濫の影響を受けている。P3区から東側は湿地内の奈良時代頃の水田が洪水砂で埋もれている状態が確認された。それ以前は潟・澪筋が古墳時代の土器と共に発見されている。

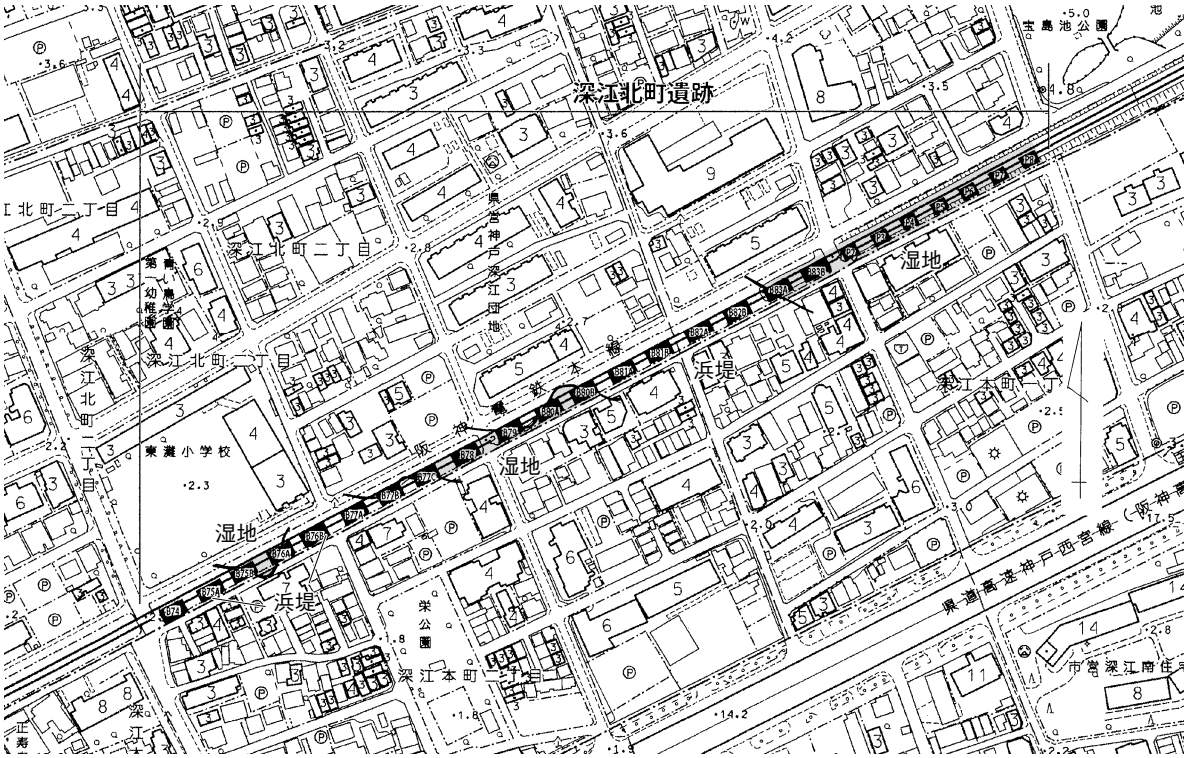


fig. 6　深江北町遺跡第12・14次調査地地形概念図（古墳時代以降 S＝1/5000）

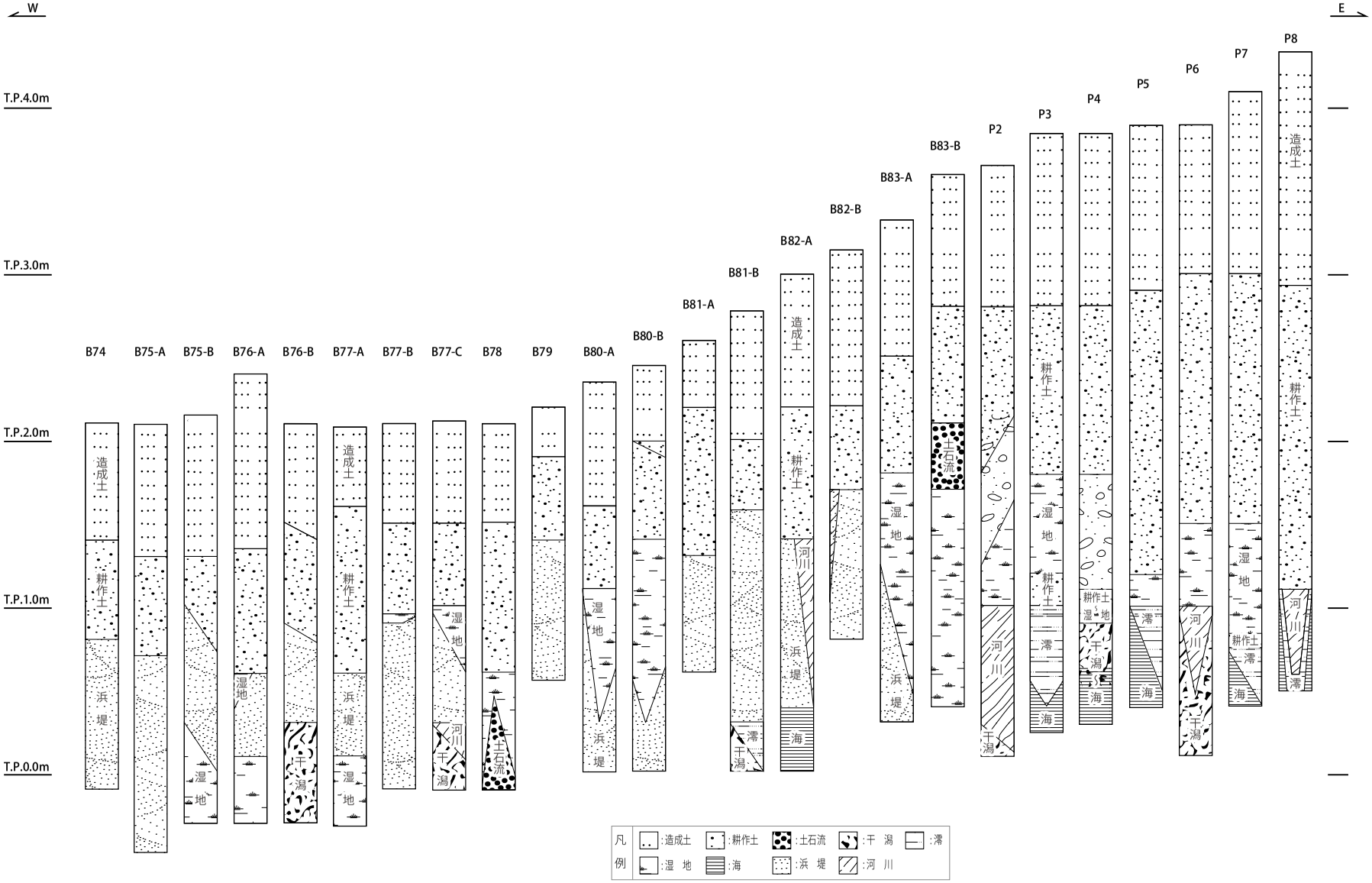


fig. 7　深江北町遺跡第12・14次調査土層柱状図

2．第12次調査

B74区

立地

当該区は調査範囲の一番西側に位置し、安定した浜堤上に位置する。

基本層序

阪神電車の軌条下は、約1mの盛土がされている。その下は近代の耕作土が覆い、その直下に近世頃の耕作土層が部分的に残されている。以下は浜堤の細砂～中砂が厚く堆積する。T.P.0m付近では粗砂、砂礫が認められる。

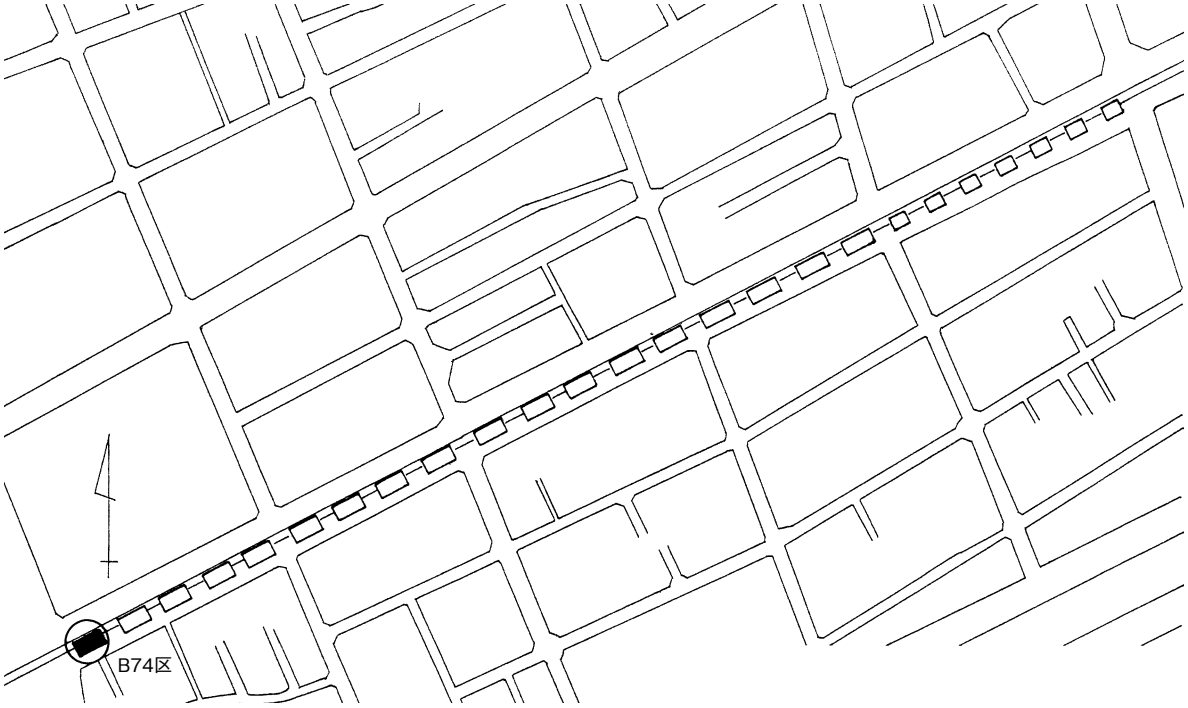


fig. 8　B74区位置図

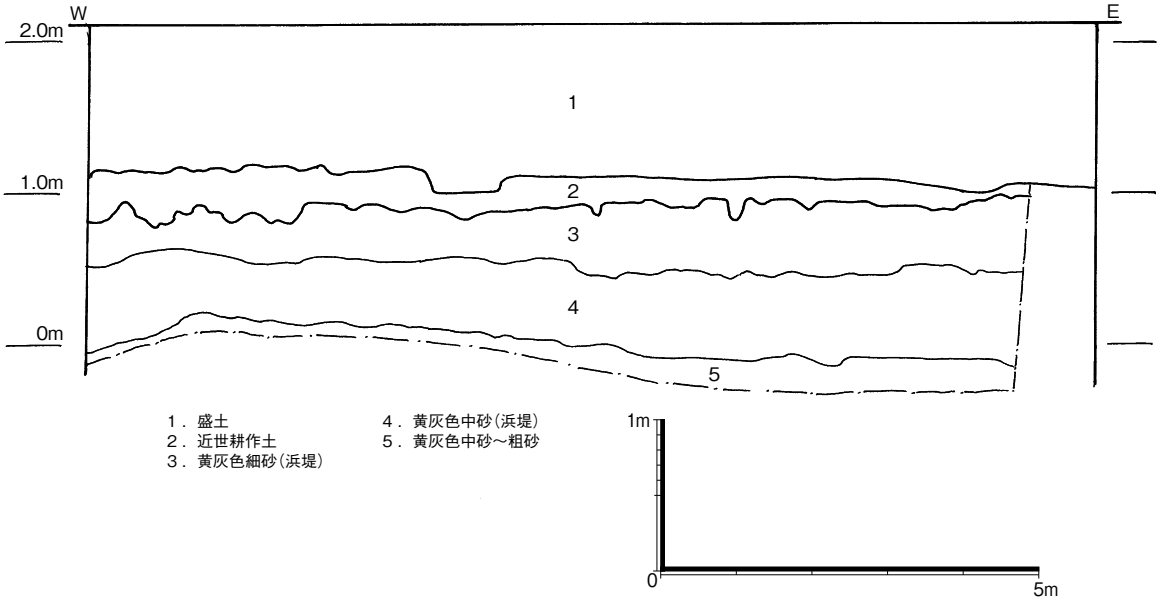


fig. 9　B74区北壁断面図

近世溝

溝の検出長は12.5m、幅3.8m、深さ0.7m、東西方向の溝である。溝の南岸の肩部に角礫を敷き詰めている。その一部には花崗岩を加工した際に生じた削り屑を充てている。これは、護岸または水辺に寄り付くための足場固めの目的で敷かれたものであると思われる。また、溝の底の部分には直径20㎝程度の丸太材を寝かせて縦に並べ、杭で固定し土留めとしている。また、配水のためと想定される分岐の小溝が南側の岸で確認されている。溝内は中砂～粗砂が堆積し、東側のセクションでは掘り直しで北側に拡がっている状況が確認された。この溝は、江戸時代の深江村居住域の北辺を区切る溝の可能性が高い。

溝内からは、18～19世紀の陶磁器・瓦・鉄製品・漆椀・石臼（上臼）・木製品（「表面：御用　深江村　裏面：御用　庄や・年寄」と書かれた木札）等が出土した。

fig. 10　近世溝内石材出土状況図

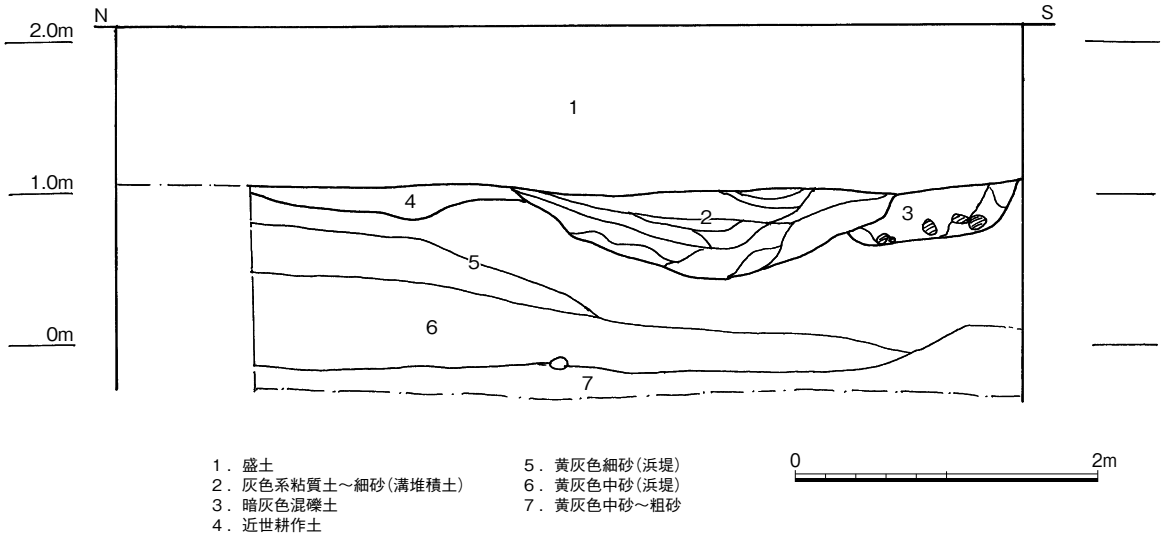


fig. 11　B74区東壁断面図

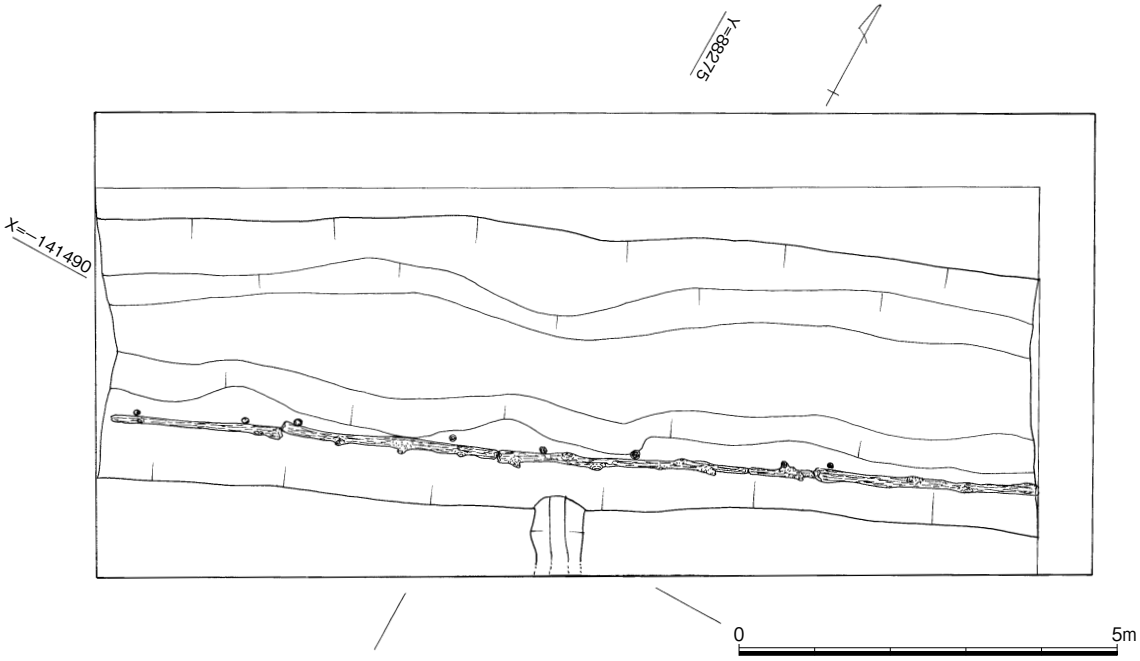


fig. 12　近世溝内土留丸太検出状況図

出土遺物

（1）陶磁器

1は染付けの油壺で、肩部に横方向に梅一枝を描く。2はくらわんか茶碗で、外面に浜千鳥、内面に帯状の菱形文、内底面にも千鳥を丁寧に描く。3は染付け皿で外面には蔓草文、内面には草花文、内底面には五弁花を施す。4の広東碗の外面は菖蒲と山形文、内底面には矢車の文様を描く。1，2は溝の下層、3，4は溝の上層で出土した。

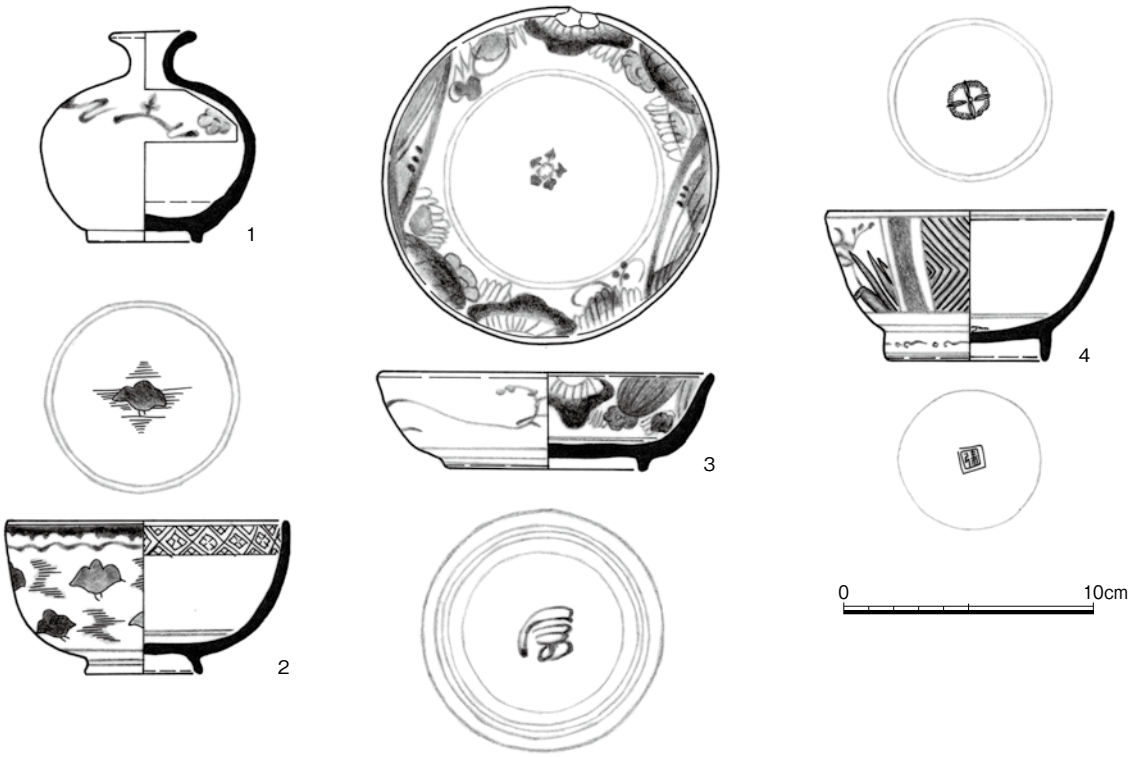


fig. 13　近世溝内出土陶磁器

（2）木製品

5は溝内より出土した漆椀の破片で、材はトチノキである。口縁部を欠くため、口径、器高は不明である。高台は復元径6.0㎝、高さ4.7㎜を測る。器全面に施された漆は内外共に黒色で、器外面には直径3.1㎝の円に囲まれた紋が描かれている。6は同じく溝内出土のほぼ完形の御用札である。縦横30.8㎝×11.1㎝、厚さ6.2㎜の長方形を呈する。材はスギを用いたやや板目よりの柾目板製で、下端より4.2㎝上の中央付近に直径1.3㎝の穴が穿たれている。

御用札の書体からみると、幕末ころのものと推定される。また、札の厚みや大きさが従来知られているものと異なること、在り合わせの板材を転用していること等から、臨時に作られた札と見られる。当時の時代背景として、「長州征伐」・「諸藩の大阪湾沿岸砲台構築」などの事件があり、幕府の進発軍や作業監督役人の御用宿を勤めた際に用いられたものとも考えられる。

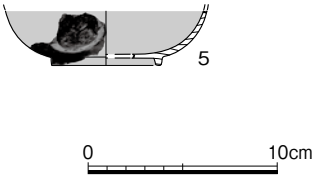


fig. 14　近世溝内出土漆椀

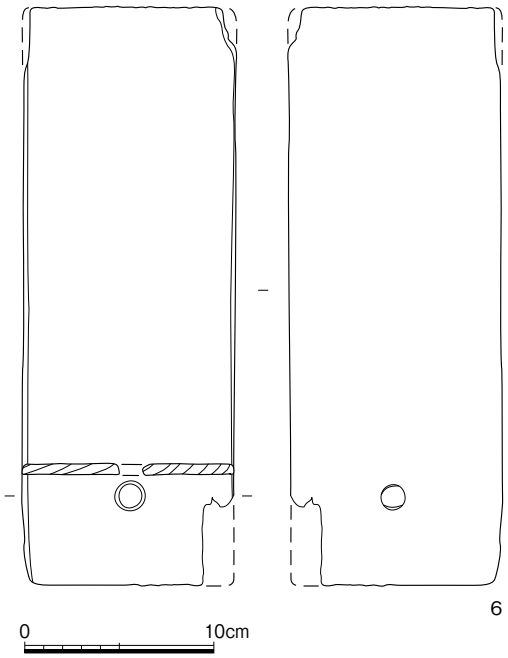


fig. 15A　近世溝内出土御用札

fig. 15B　近世溝内出土御用札

B75-A区

立地

当該区はB74区に引き続き、安定した浜堤上に位置する。

基本層序

阪神電車軌道設置時の盛土層の下は近代の耕作土層であり、以下（T.P.1m前後）は浜堤の細砂～砂質シルト層が連続する。T.P.0m以下では砂礫層が確認される部分がある。浜堤の堆積物は西から東に傾斜しながら堆積しており、浜堤の発達状況を窺うことができる。近世の耕作土の下の浜堤堆積層上面で中世～近世の遺構を確認した。

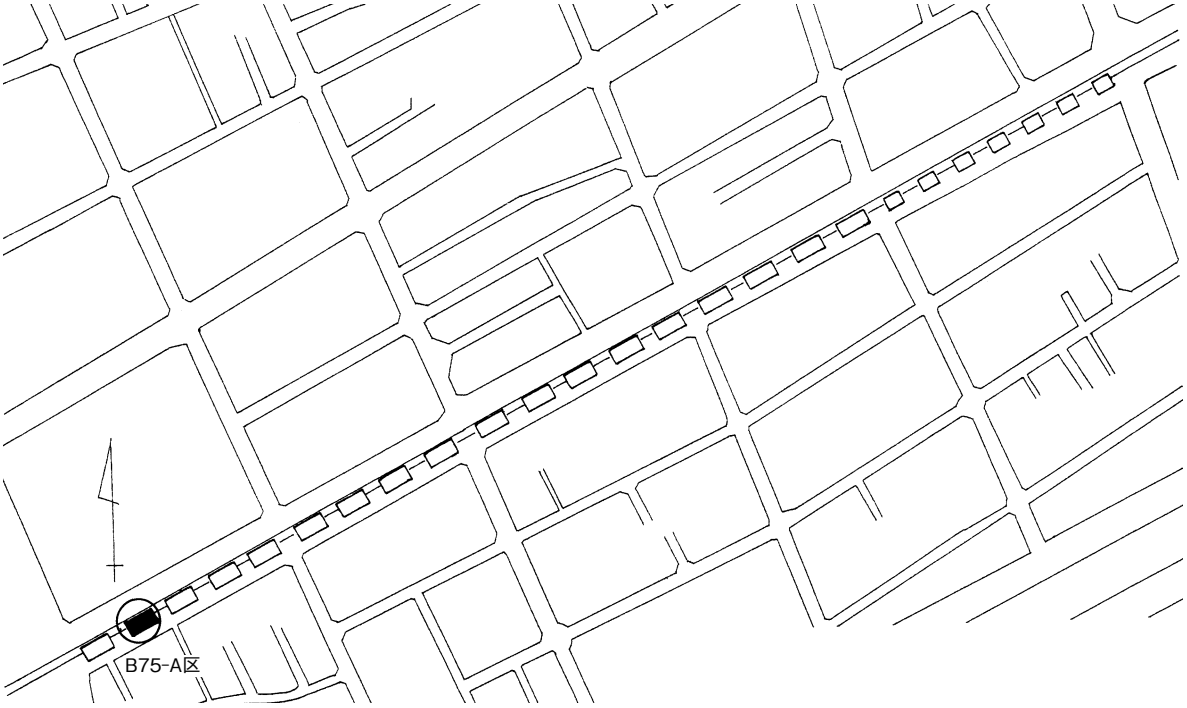


fig. 16　B75-A区位置図

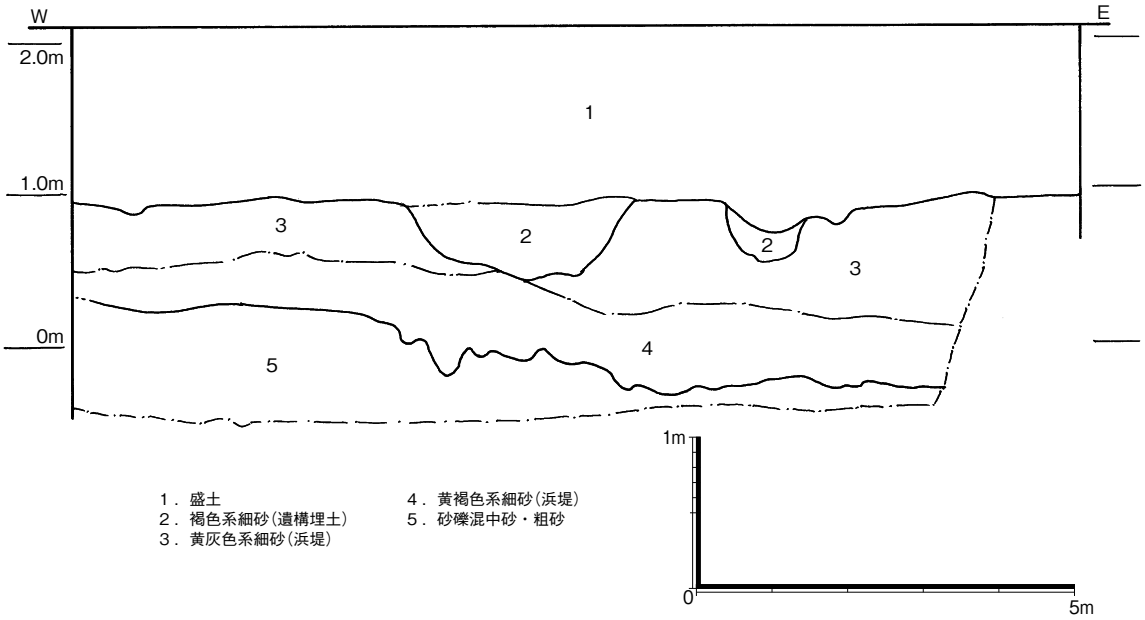


fig. 17　B75-A区北壁断面図

検出遺構

中世～近世の犂溝、ピットを確認した。犂溝は南北方向に走るものが多いが、東西方向や逆Ｌ字状を呈するものもあり、時期が異なると思われる。ピットは浅いもので出土遺物もなく、用途は不明である。

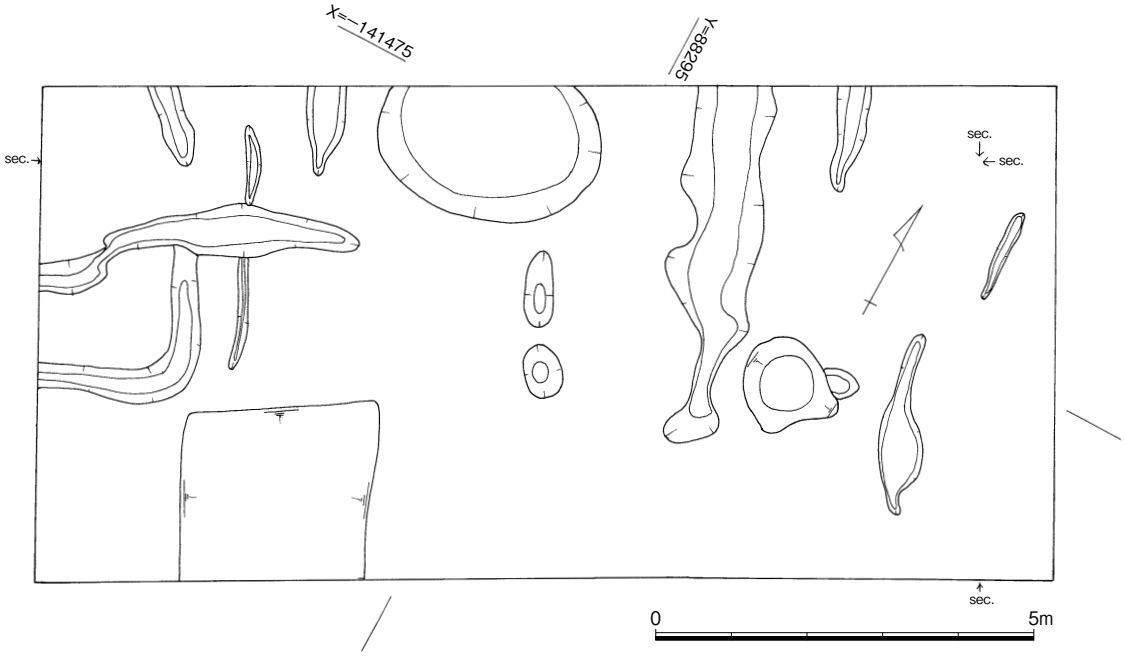


fig. 18　B75-A区検出遺構平面図

fig. 19
B75-A区全景
（東から）

B75-B区

立地

当該区は浜堤から湿地への変換点にあたっており、西から東に傾斜した地形である。

基本層序

阪神電車軌条設置時の盛土下は近代耕作土が広く覆い、その直下には中近世の陶磁器を含む耕作土層が認められる。それは西半分では1層、東半分では複数層堆積している。それらの耕作土の下(T.P.0.5～1m前後)は西側では、浜堤堆積物、東側では湿地堆積物となる。T.P.0～0.3m以下では、湿地堆積のみとなり、畦畔と思われる杭列を確認する。

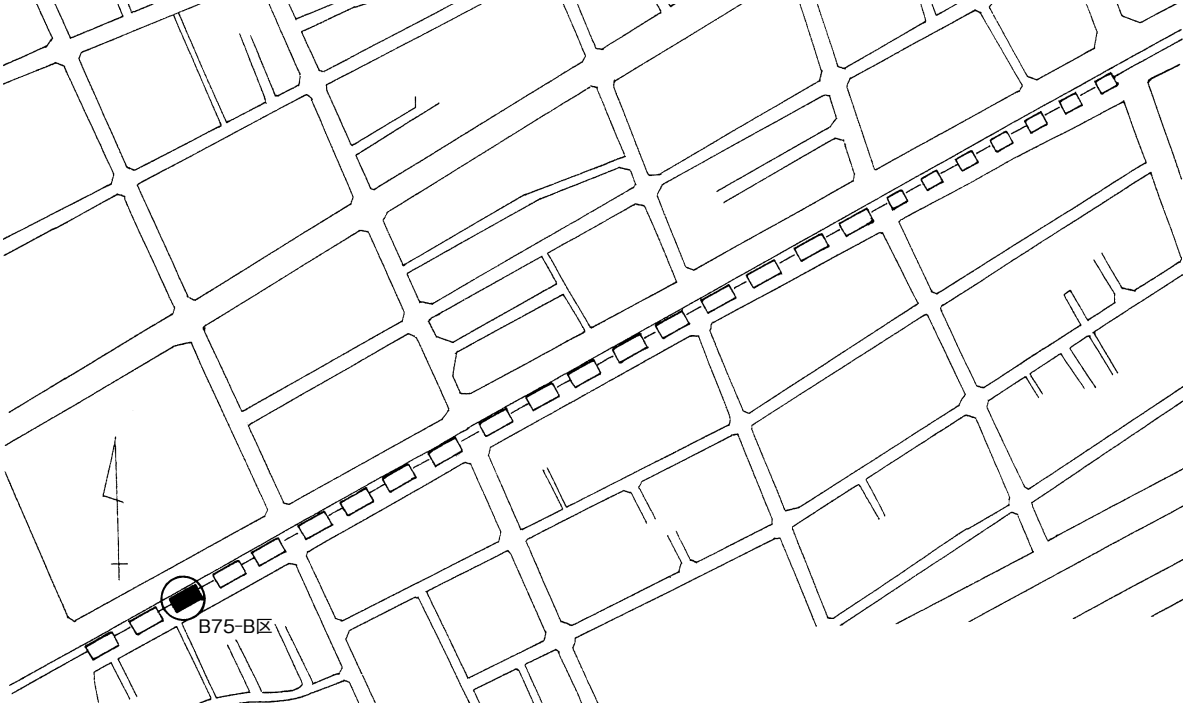


fig. 20　B75-B区位置図

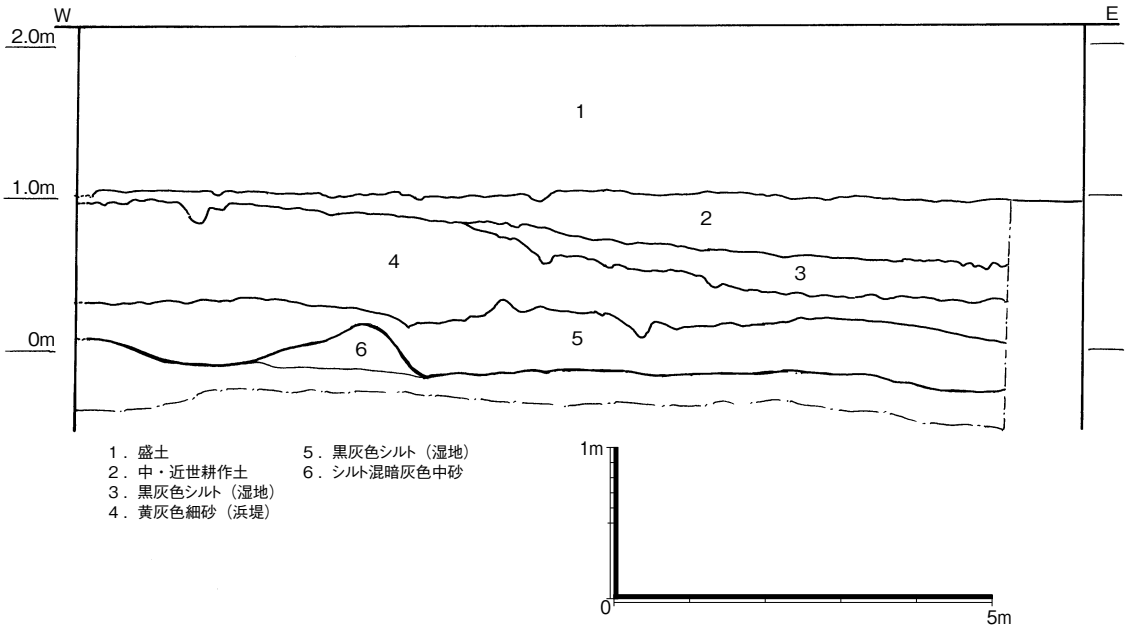


fig. 21　B75-B区北壁断面図

犂溝・焼土面

調査区の東半分では中世～近世にかけての犂溝、西半分では焼土面・浅い溝を確認した。焼土面からは土師器の細片が出土したが精確な時期は不明である。また、中央で近世末頃の井戸を確認された。井戸は枠が抜き取られていたが、竹製の箍の残欠が残っており、桶状のものを埋め込んでいたと判断される。

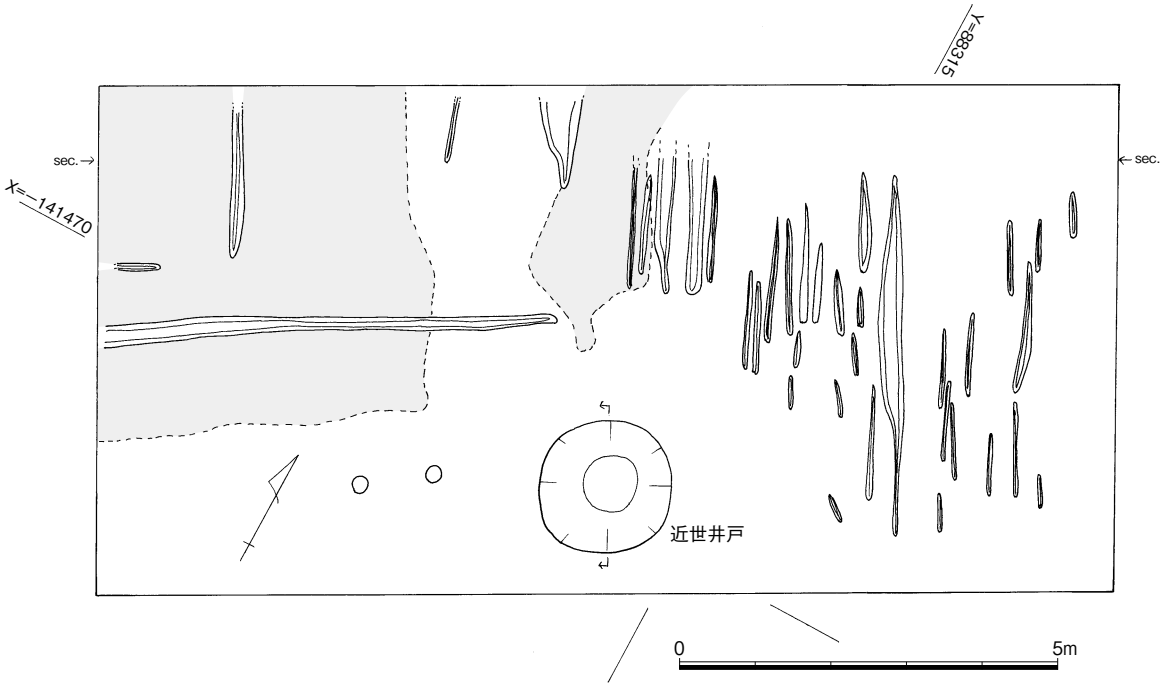


fig. 22　B75-B区犂溝・焼土面平面図（網かけ部分は焼土面検出範囲）

湿地

中世耕作土を除去すると、北西から南東方向に調査区を斜行する状態で湿地（ラグーン）が確認される。湿地の最上層は奈良・平安時代の土器を含み、下層では古墳時代の土器を含む。湿地と浜堤の境目付近では土器がまとまって出土する所もあった。古墳時代の土器を含む層からは、最上層から踏み込まれたと見られる隅蹄類（ウシと思われる）の足跡が確認され、図化可能な写真撮影や一部の足跡の土層転写作業を実施した。

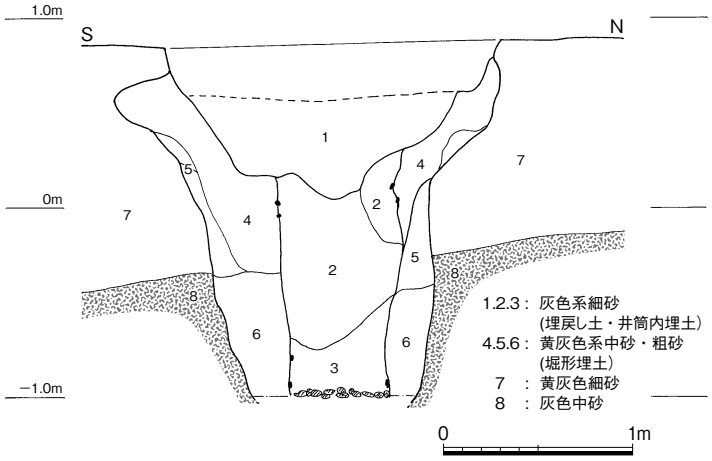


fig. 23　B75-B区近世井戸断面図

杭列

浜堤が発達する途中過程の湿地内において、北西から南東方向に調査区を斜行する状態で杭列が確認された。杭列は検出長7m、幅0.6～0.7m、2列に45本打ち込まれている。杭は先端を尖らせており、樹皮が付いたままのものがある。この遺構は水田の畦畔と判断される。畦畔すぐ横の湿地内からは弥生時代後期と考えられる甕形土器（吉備系）が、正位置で完形の状態で出土している。その他の遺物は出土せず、祭祀に伴うものであるかは判断がつかない。

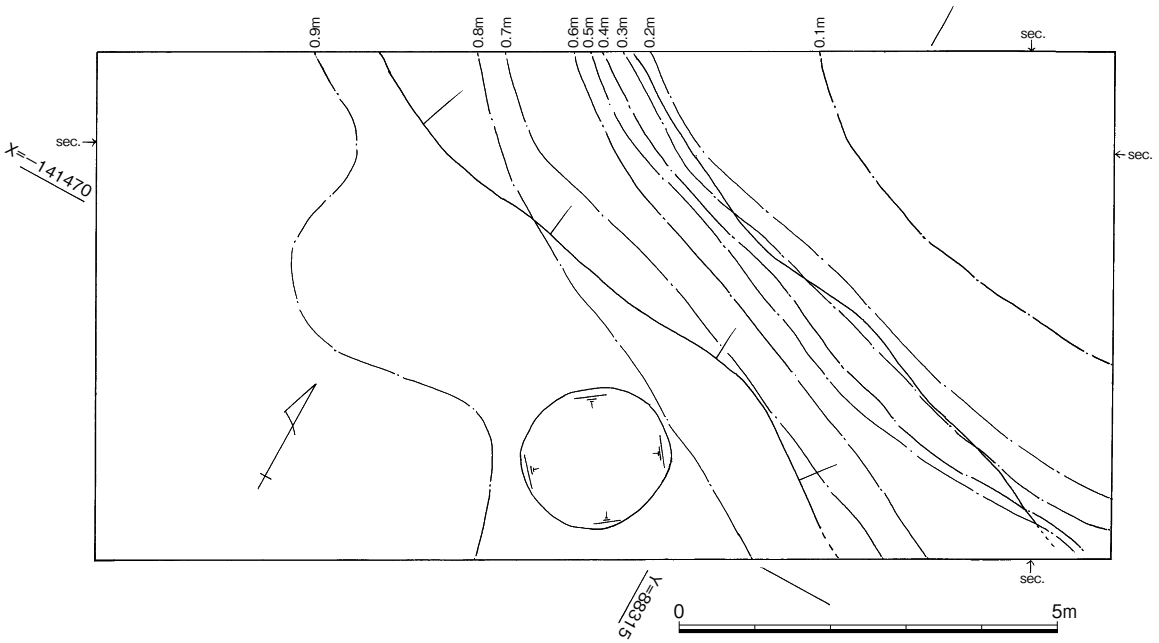


fig. 24　B75-B区浜堤～湿地への変換点平面図

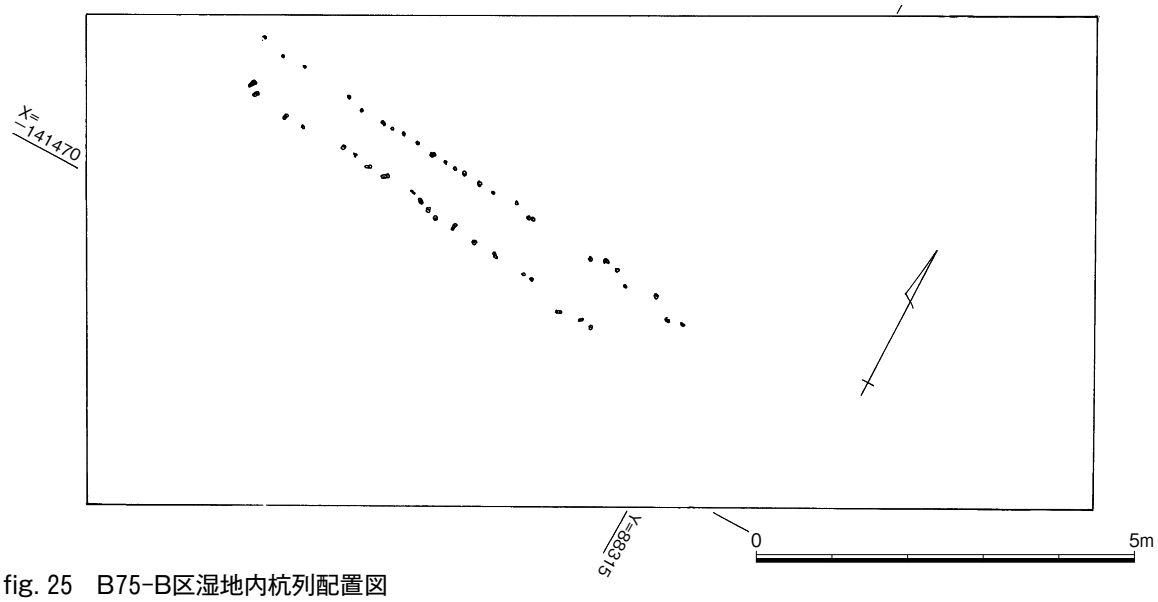


fig. 25　B75-B区湿地内杭列配置図

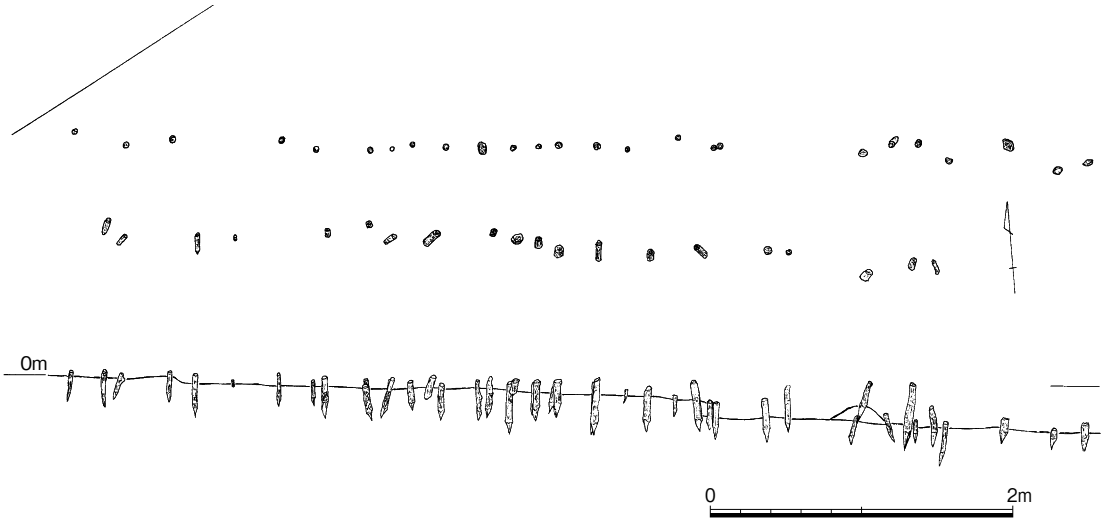


fig. 26　杭列平・立面図

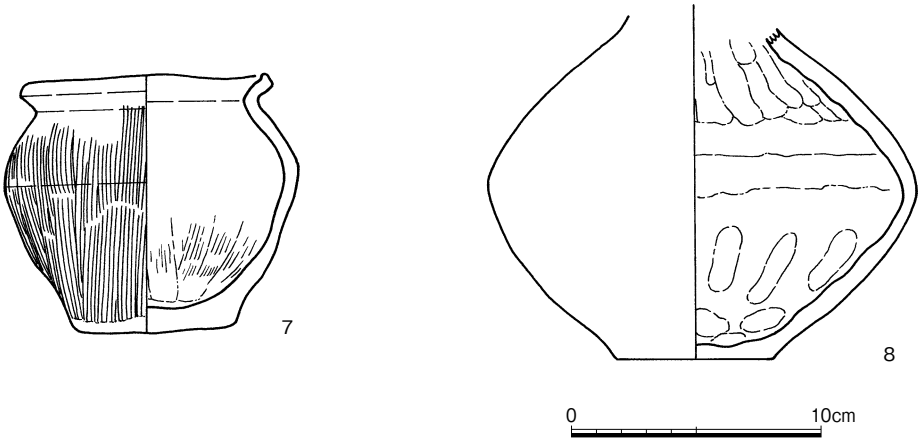


fig. 27　B75-B区出土土器

出土遺物

７は甕形土器で、器高6.8cmと胴径８cmの小ぶりのものである。胴部外面は縦方向のハケ目、内面は剥離が激しいが下半部にはハケ目が残る。口縁部内外面は横方向のナデで仕上げる。湿地内の杭列の横から出土した。器形の特徴から吉備系土器と判断される。時期は弥生時代後期である。８は壺形土器で、腰の張った算盤玉型を呈する。器壁の剥離が激しいため外面の調整が不明であるが、内面には指頭圧痕が残る。器形からみて弥生時代中期頃のものと思われる。湿地と浜堤堆積物の境目付近から出土した。

fig. 28　B75-B区浜堤と湿地の状況（西から）

B76-A区

立地

当該区は浜堤が湿地を埋めてゆく過程を示しており、未発達の浜堤が確認されている。

基本層序

阪神電車軌条建設時の盛土が約1m積まれ、それ以下には近代耕作土、中・近世耕作土が堆積する。中世耕作土を除去すると奈良・平安時代の土器を含むシルト層が確認されるがこの段階では、半湿地状態であると思われる。以下には浅い湿地の堆積、未発達の浜堤堆積物、その下には再び湿地堆積物が確認される。

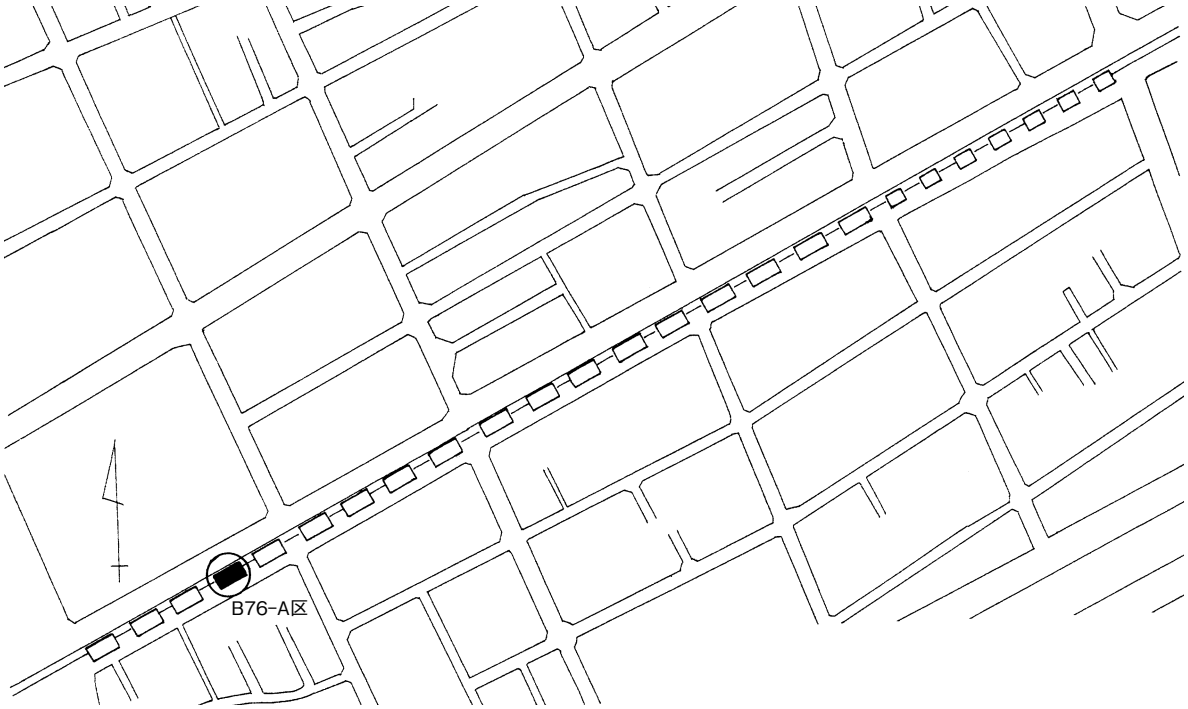


fig. 29　B76-A区位置図

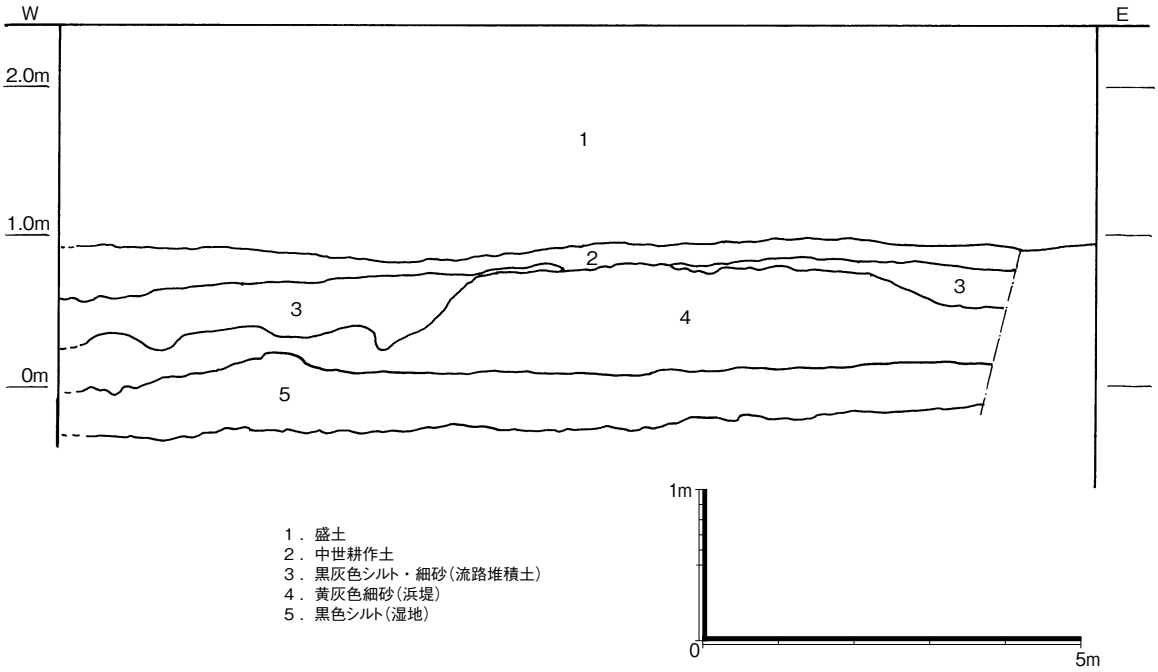


fig. 30　B76-A区北壁断面図

流路

奈良・平安時代の土器を含むシルト層を除去し、浅い流路状の落ち込みを検出した。調査範囲内では二条の流路が平行しているように見える。堆積土はシルトと細砂の互層となっている。その最上層には須恵器の小片を含む、下層には弥生土器・土師器を含むがいずれも小破片である。この流路は、海水の干満によって形成された地形と判断される。

湿地

流路が確認された黄灰色細砂～中砂（浜堤の砂）を除去すると、湿地の堆積土である黒色シルトが現れる。湿地内からは少量の弥生時代の土器と多量の植物遺体を含む。それ以下は粗砂・砂礫を構成主体とする土石流の堆積が続く。

出土遺物

9，10は土師質の管状土錘で、棒状の心材に粘土を巻きつけて成形している。湿地上層から下層で出土した。11の弥生土器は球形に近い体部を呈し、頸部は縦方向のハケ目、胴部はハケ目とヘラミガキ、底部はヘラミガキを施す。下層湿地と浜堤砂の境目で出土した。

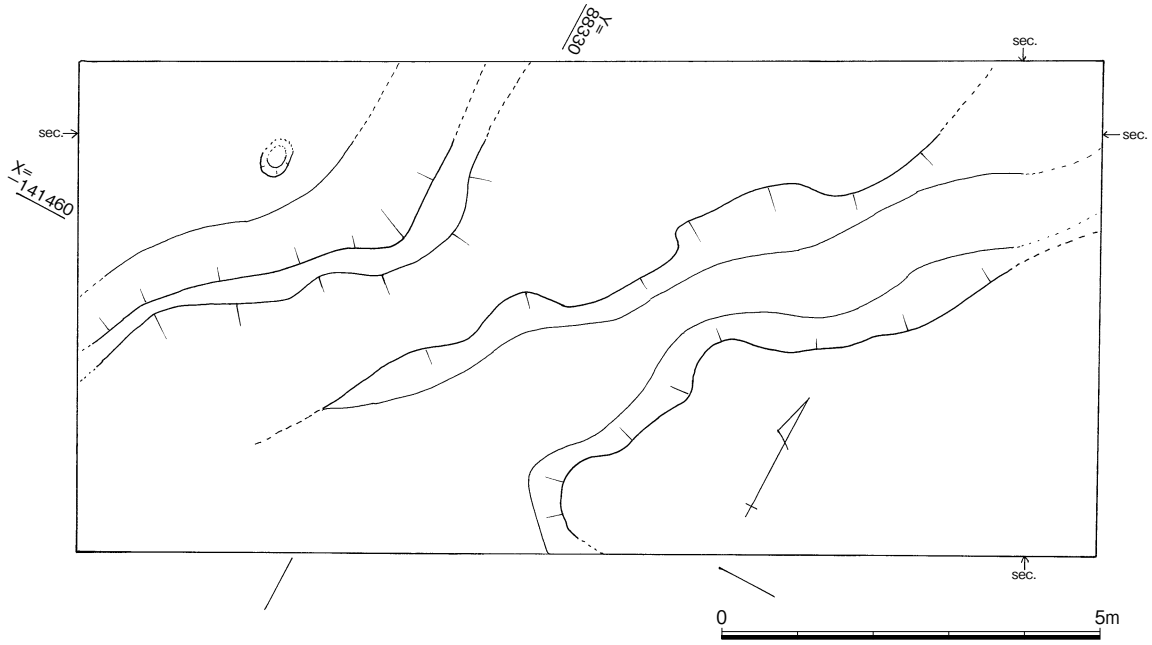


fig. 31　B76-A区流路平面図

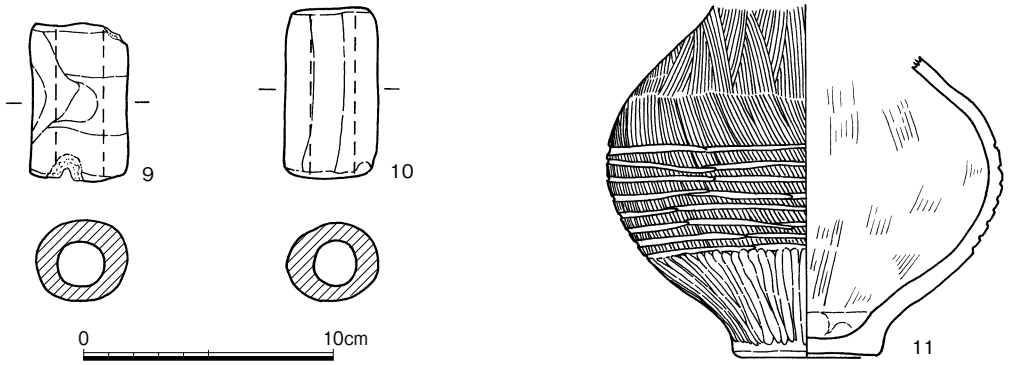


fig. 32　B76-A区出土遺物

B76-B区

立地

当該区は前述調査区と同様に未発達の浜堤が確認されている。

基本層序

阪神電車軌条建設時の盛土が60cmほど積まれ、その下は近代耕作土・床土となる。それ以下は中・近世の耕作土となり、T.P.0.8～0.9m前後で浜堤の砂が現れる。この上面で流路を検出している。T.P.0.3m前後からは潮汐の影響による堆積が認められ、T.P.0m以下ではシルト・砂の堆積となる。

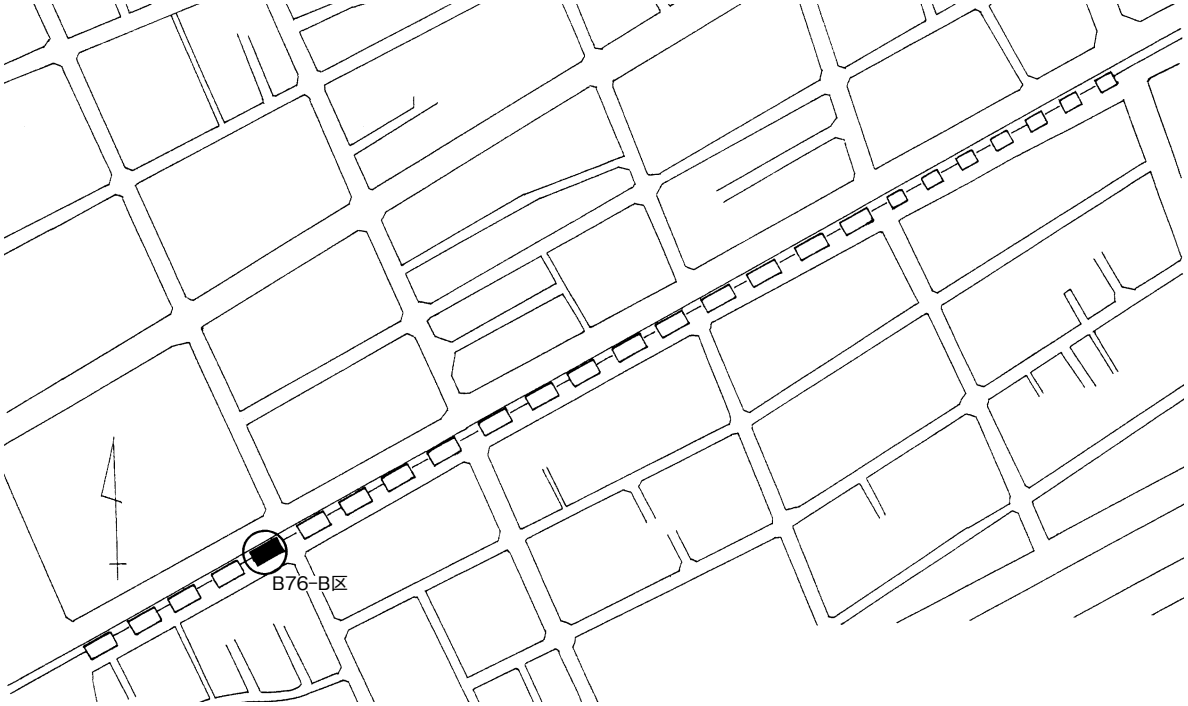


fig. 33　B76-B区位置図

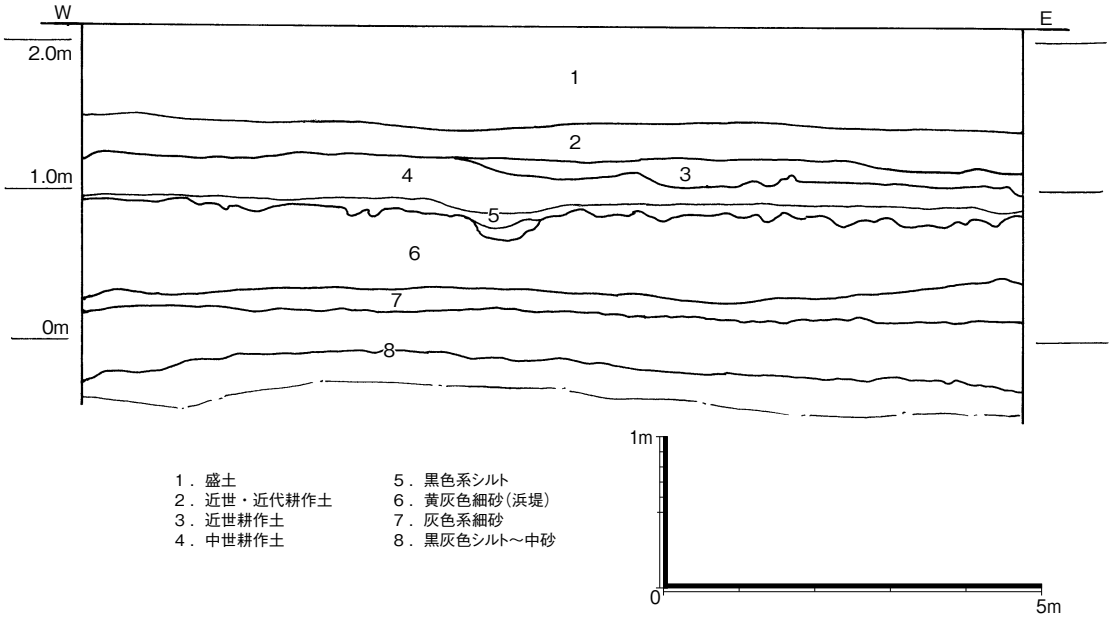


fig. 34　B76-B区北壁断面図

流路

中世耕作土を除去すると奈良・平安時代の土器を含む灰褐色砂質シルトが確認されるが前記調査区と同様に、湿潤な土地の様相を呈していたと思われる。その下層からは浅い流路状の落ち込みが検出される。流路は北西から南東方向に流れている。この流路が確認された黄灰色細砂～中砂（未発達の浜堤の砂）からは古墳時代初頭の土器が出土している。

湿地

浜堤の砂を除去すると、湿地（ラグーン）の堆積土である黒灰色シルトが確認される。この堆積土内からは少量の弥生時代の土器片と焼け焦げた枝、板状の木製品等が出土した。

出土遺物

12，13は土師質の管状土錘で丸い棒状の心材に粘土を巻きつけ、成形している。これらは流路および浜堤の砂の中から出土した。14は緑釉陶器で須恵質の胎土に光沢のある緑灰色の釉がかかり、回転糸切の底部に高台を貼り付ける。15は須恵器椀で円盤状高台に半円形の体部を有す。いずれも中世耕作土内出土である。

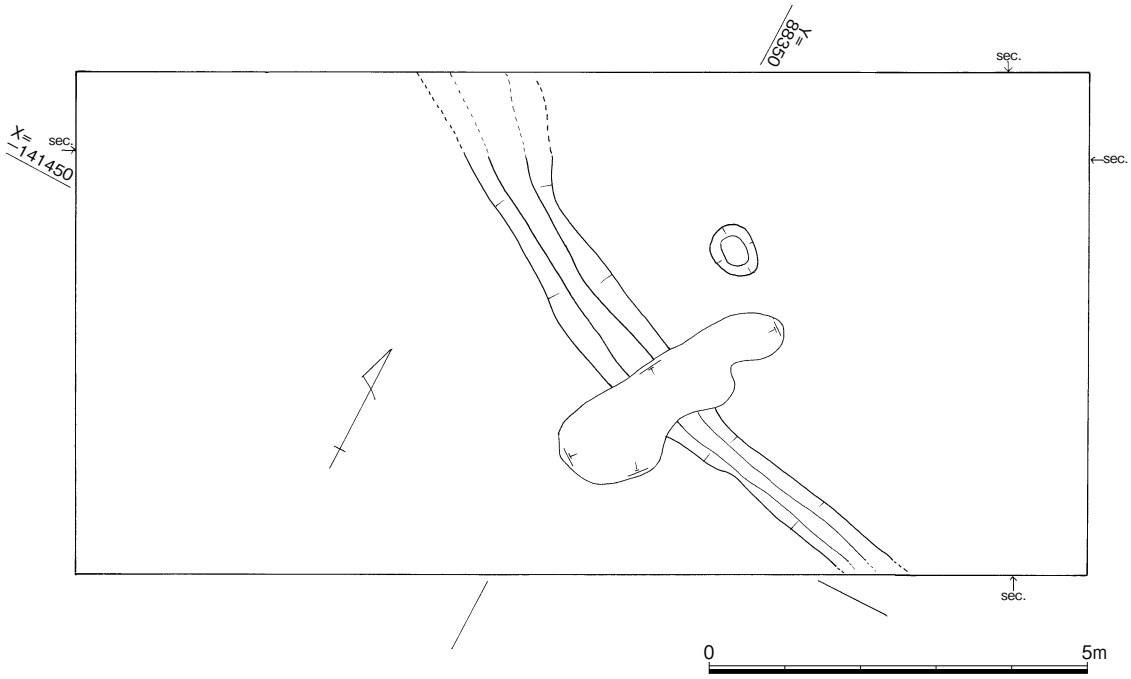


fig. 35　B76-B区遺構平面図

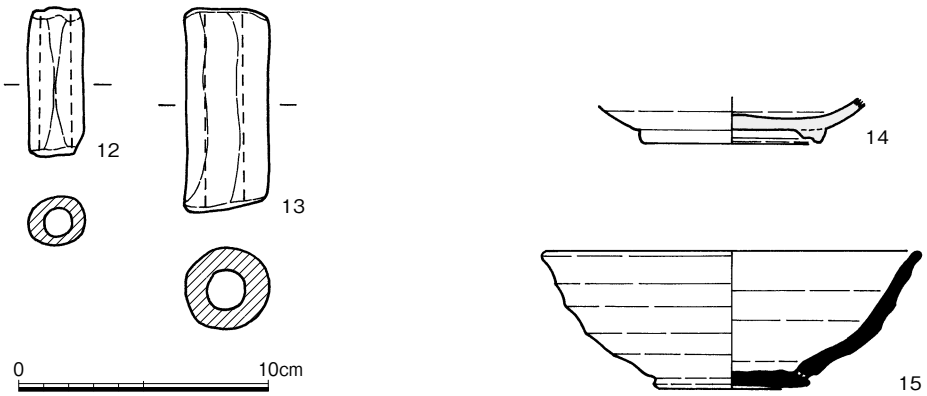


fig. 36　B76-B区出土遺物

B77-A区

立地

当該区においても浜堤が湿地を埋めてゆく過程が見られるが、浜堤は未発達である。

基本層序

阪神電車軌条下の盛土層下には近代耕作土層が広がる。T.P.1m以下で中・近世耕作土が複数層確認され、この段階で犂溝を検出した。中世耕作土の下には奈良・平安時代の土器を含むシルト層が確認され、それを除去した段階で浜堤の砂が現れる。その上面で流路状の遺構を検出した。浜堤の砂の下はラグーンのシルト、土石流の粗砂が連続する。

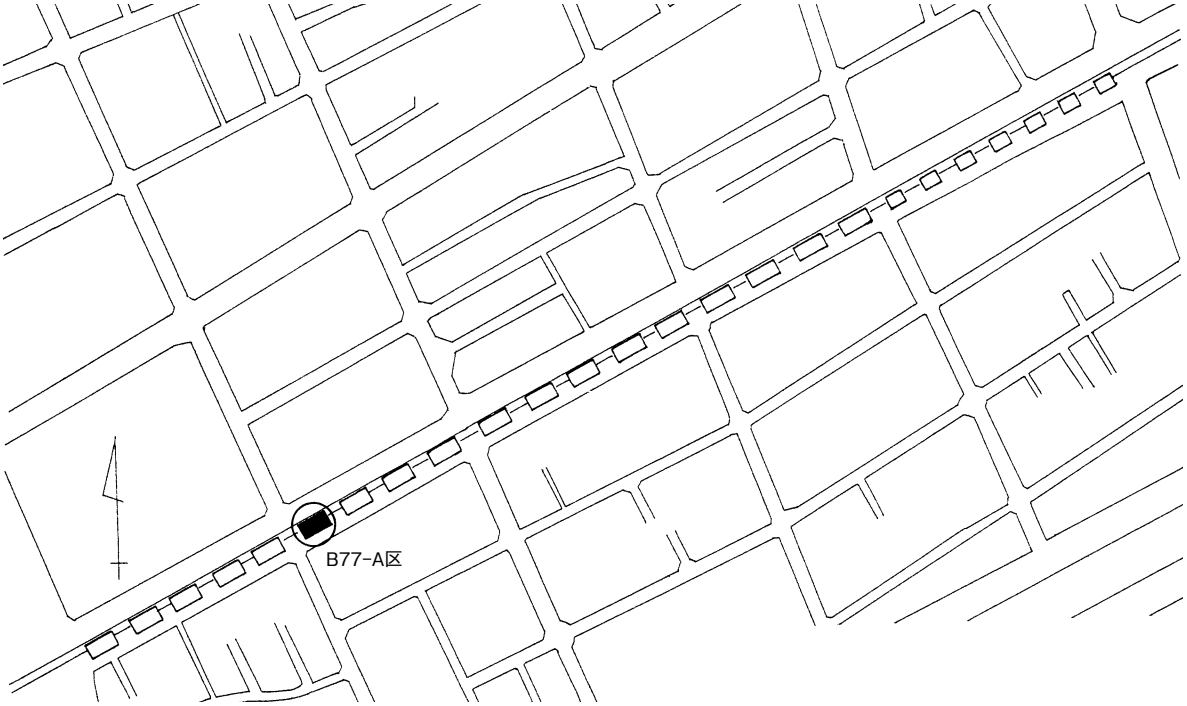


fig. 37　B77-A区位置図

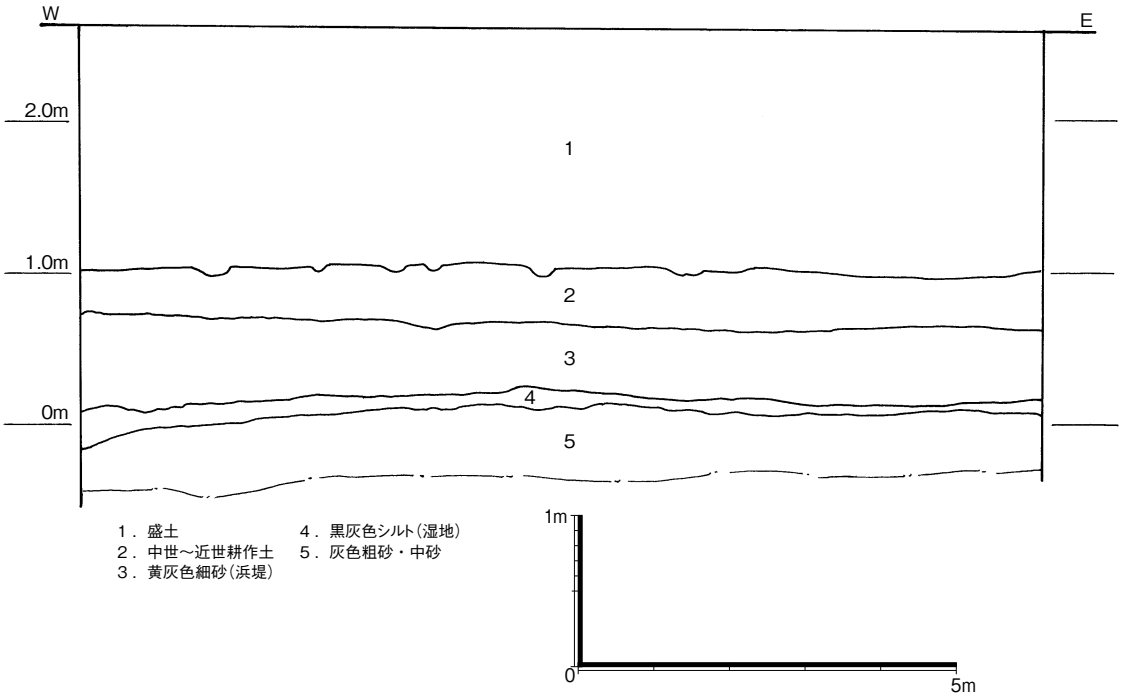


fig. 38　B77-A区北壁断面図

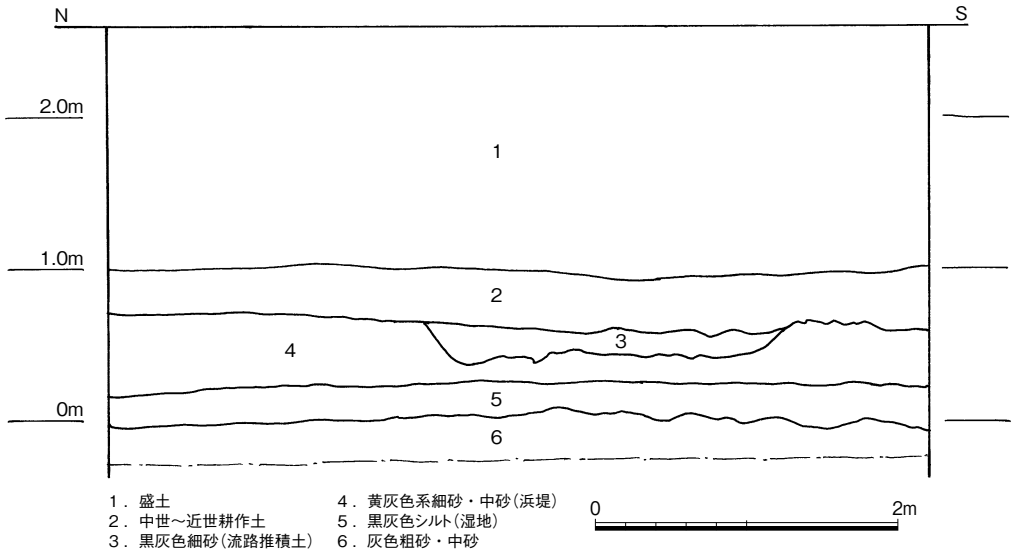


fig. 39　B77-A区東壁断面図

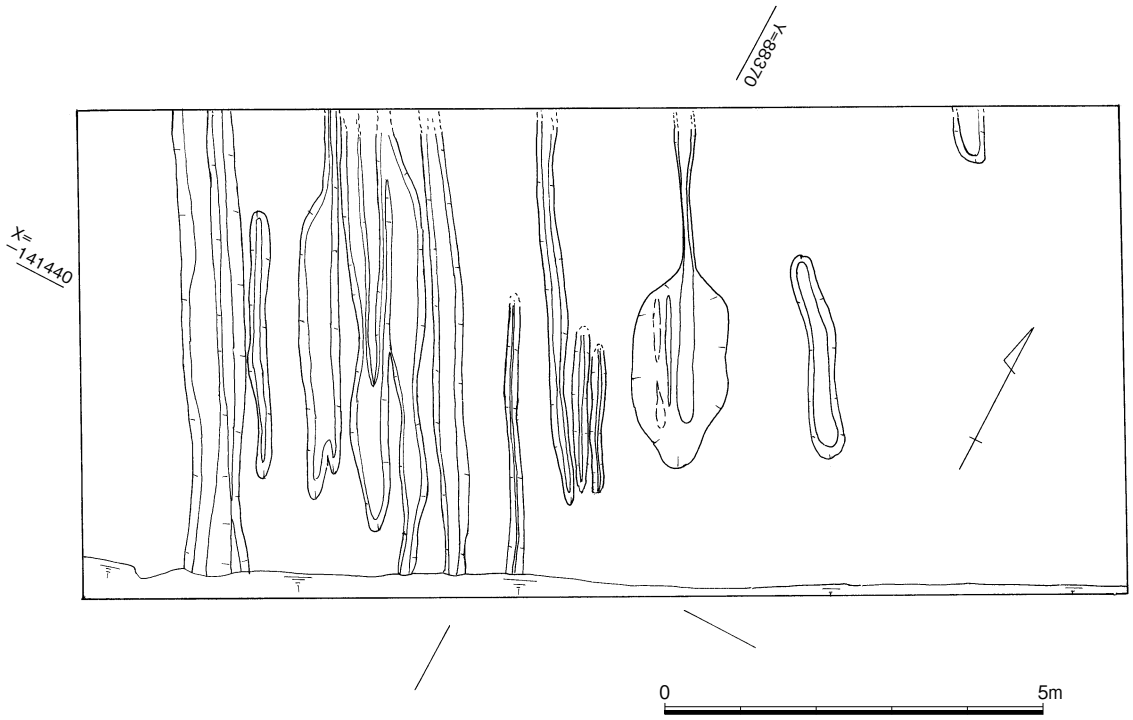


fig. 40　B77-A区犂溝平面図

犂溝

中世耕作土面で南北方向の犂溝が確認されている。ほとんどが直線状に延びるが、土坑状に拡がるものもある。

流路

浜堤の堆積土である黄灰色細砂～中砂面まで下げると東西方向の浅い流路が確認される。これは海水の干満によって形成された地形であり、堆積土はシルト主体であるが部分的には砂が混じった状態である。上層では古墳時代の須恵器、下層・底面では細片ではあるが古墳時代初頭頃の土器を含む。

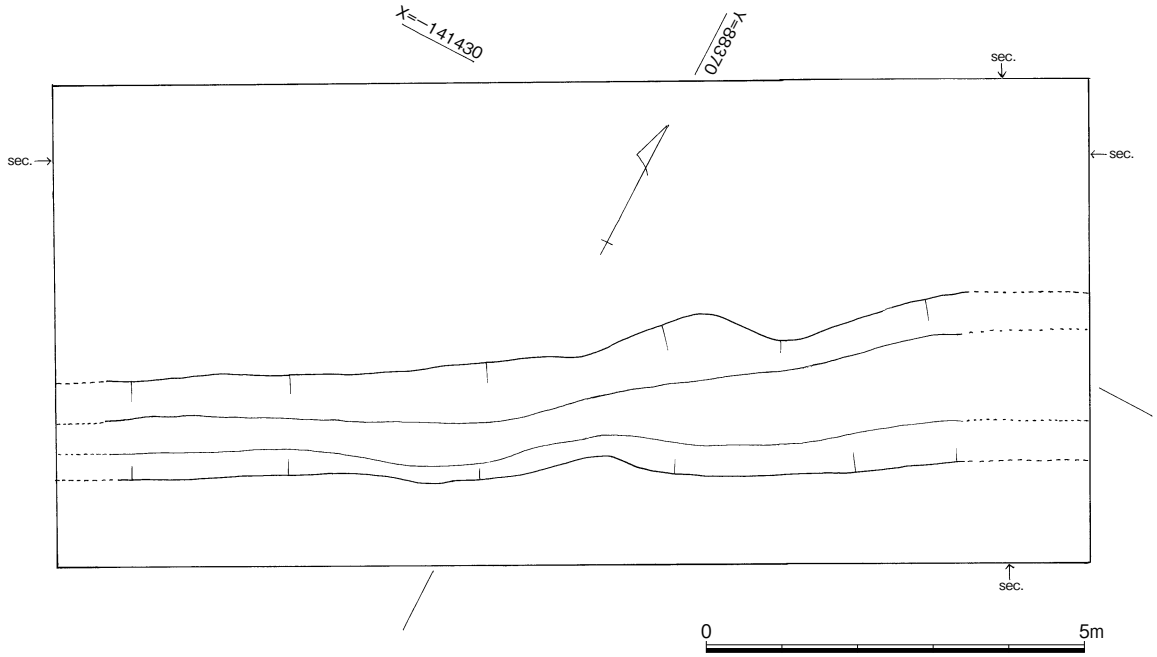


fig. 41　B77-A区流路平面図

fig. 42
B77-A区人力掘削状況

fig. 43
B77-A区犂溝の状況
（東から）

土石流の堆積

浜堤の砂を除去すると、土石流の堆積と思われる暗灰色中砂～粗砂が確認され、少量の弥生時代の土器を含む。木の葉、自然木片が濃集して出土する部分がある。

出土遺物

16は須恵器坏蓋で扁平な宝珠つまみを有する。17は須恵器小壺で胴張りの体部に、底部には貼付け高台を付ける。これらは奈良・平安時代の土器を含む灰褐色砂質シルト出土である。18は土師器壺の頸部～口縁部である。器壁は荒れていて調整が明瞭ではないが、内外面共にハケ目調整をほどこしているようである。これは流路内から出土している。19, 20は棒状土錘で両端に紐通し用の穴を開けている。19は途中で折損している。21は有溝土錘で隅円方形の2面に綱に固着させるための溝を作りつけている。いずれも灰褐色砂質シルト出土である。

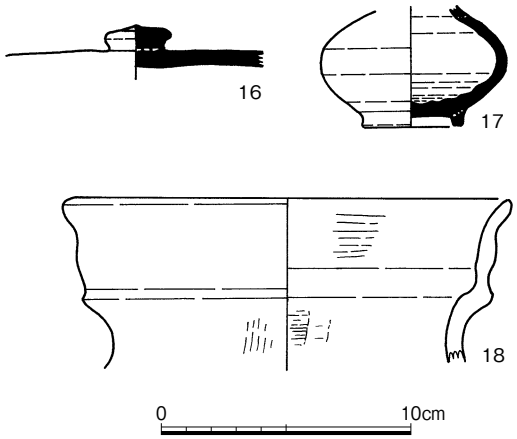


fig. 44　B77-A区出土土器

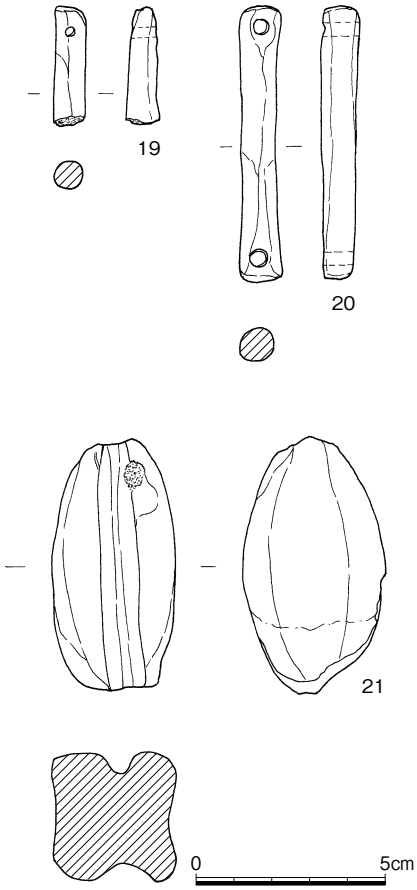


fig. 45　B77-A区出土土錘

fig. 46
B77-A区流路完掘状況
（南東から）

B77-B区

立地

当該区は浜堤と西側に落ち込む湿地を確認している。

基本層序

盛土・耕作土下に浜堤の砂が現れ、その上面で流路が確認される。その下は浜堤の砂である。

流路

浜堤の堆積土である淡褐色細砂面まで下げると浅い流路が確認される。この流路は海水の干満の影響で形成されたものであり、下層では古墳時代初頭の土器・流木を含む。

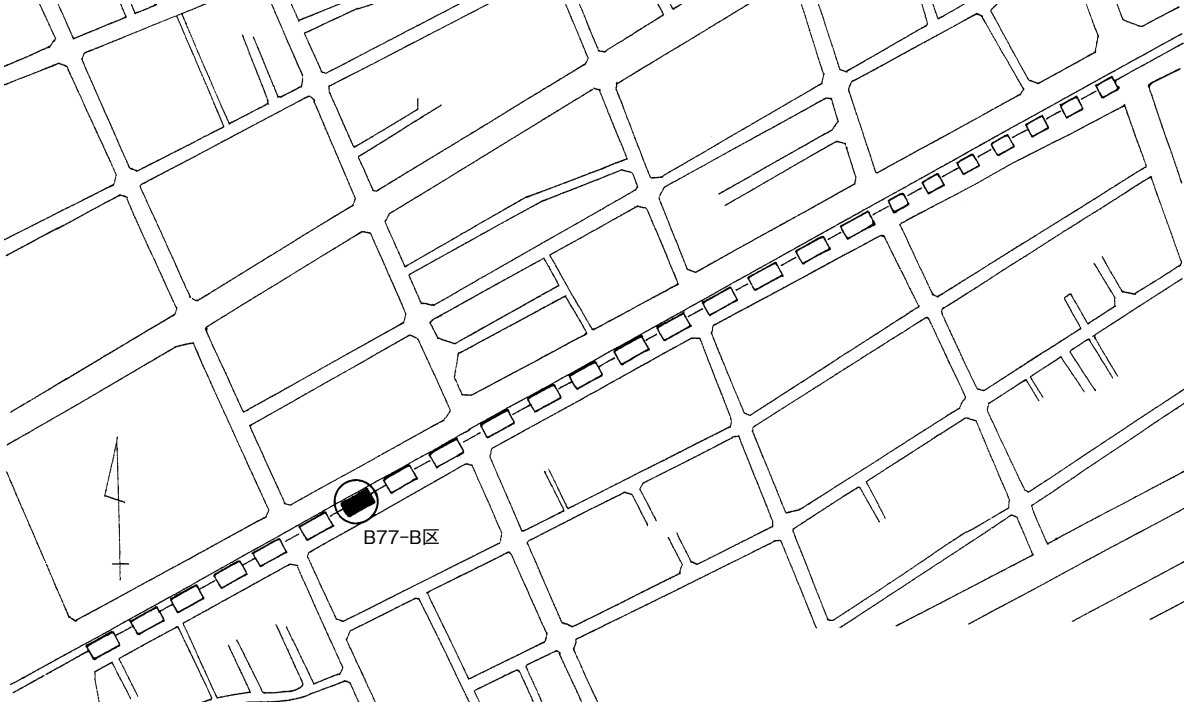


fig. 47　B77-B区位置図

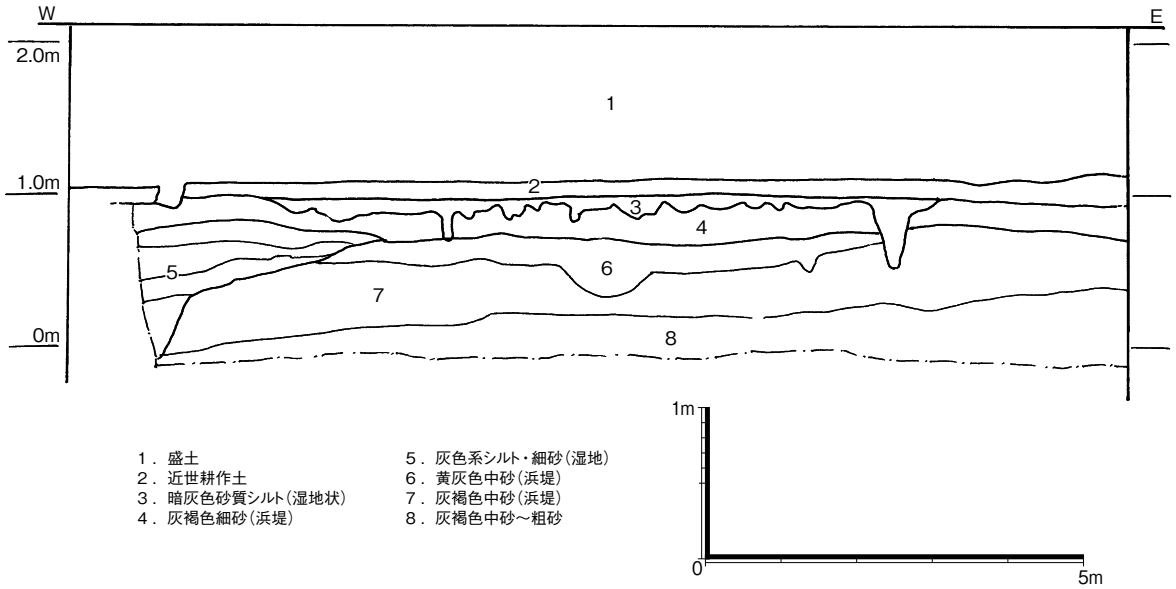


fig. 48　B77-B区北壁断面図

出土遺物

22は長頸壺形土器、23，24，27は壺形土器、28は甕形土器、22，23，27は弥生時代後期、24，28は古墳時代に属する。25，26の土錘は土師質である。以上はすべて流路出土である。

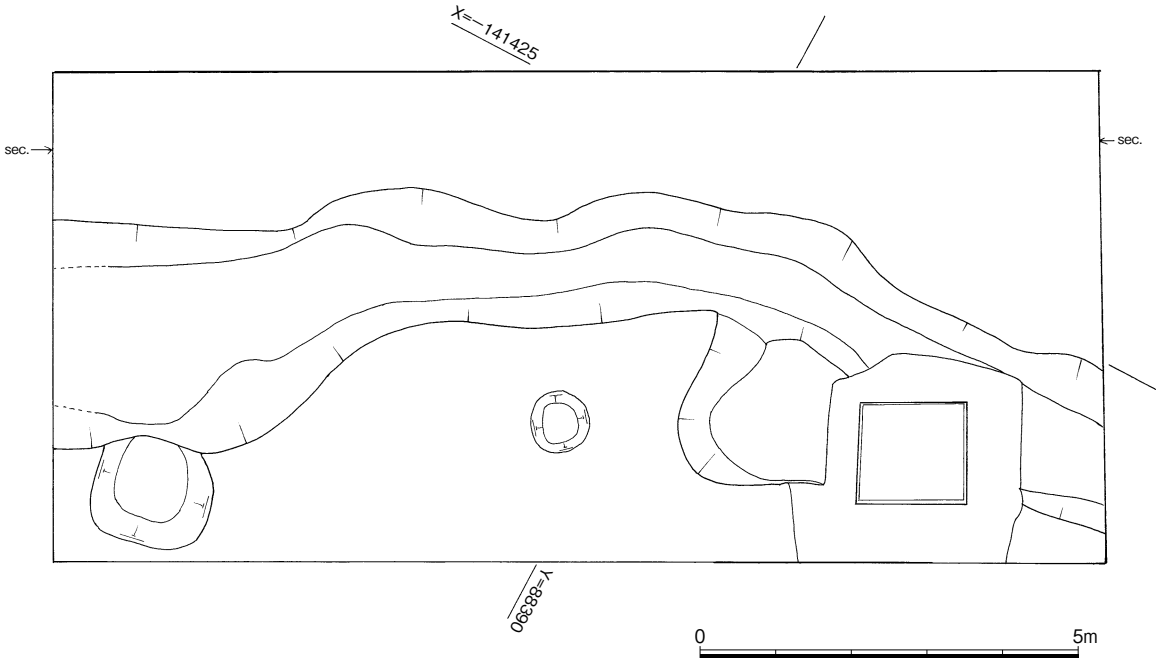


fig. 49　B77-B区流路平面図

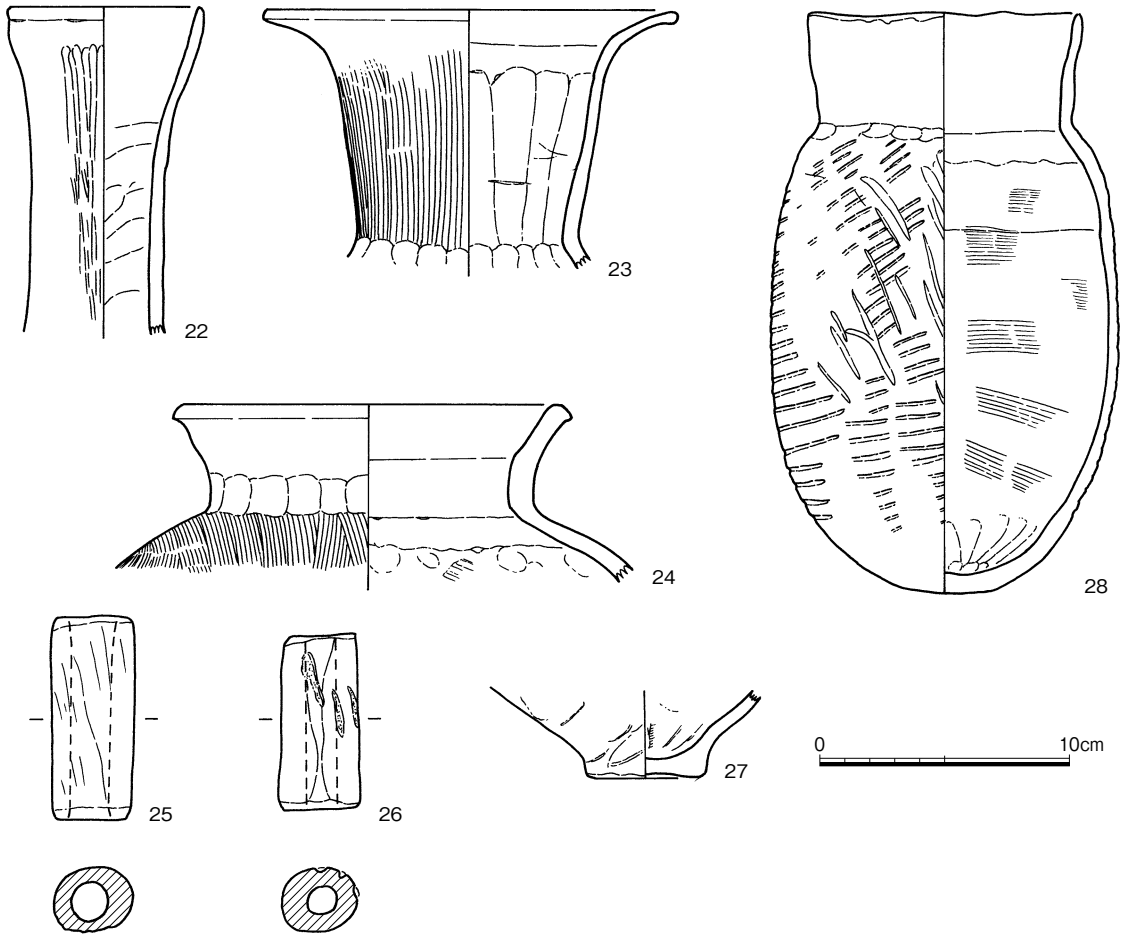


fig. 50　B77-B区出土遺物

B77-C区

立地

当該区は未発達の浜堤を確認し、浜堤下では小河川や潮汐の影響が認められた。

基本層序

阪神電車軌条設置時の盛土、近代の耕作土下に近世耕作土が残る。T.P.1m以下で浜堤の砂が80cmほど堆積し、その上面で流路状の浅い地形が確認される。浜堤の砂を除去すると、浅い小川状の堆積、さらに下は潮汐の影響で形成されたラミナ層が認められる。

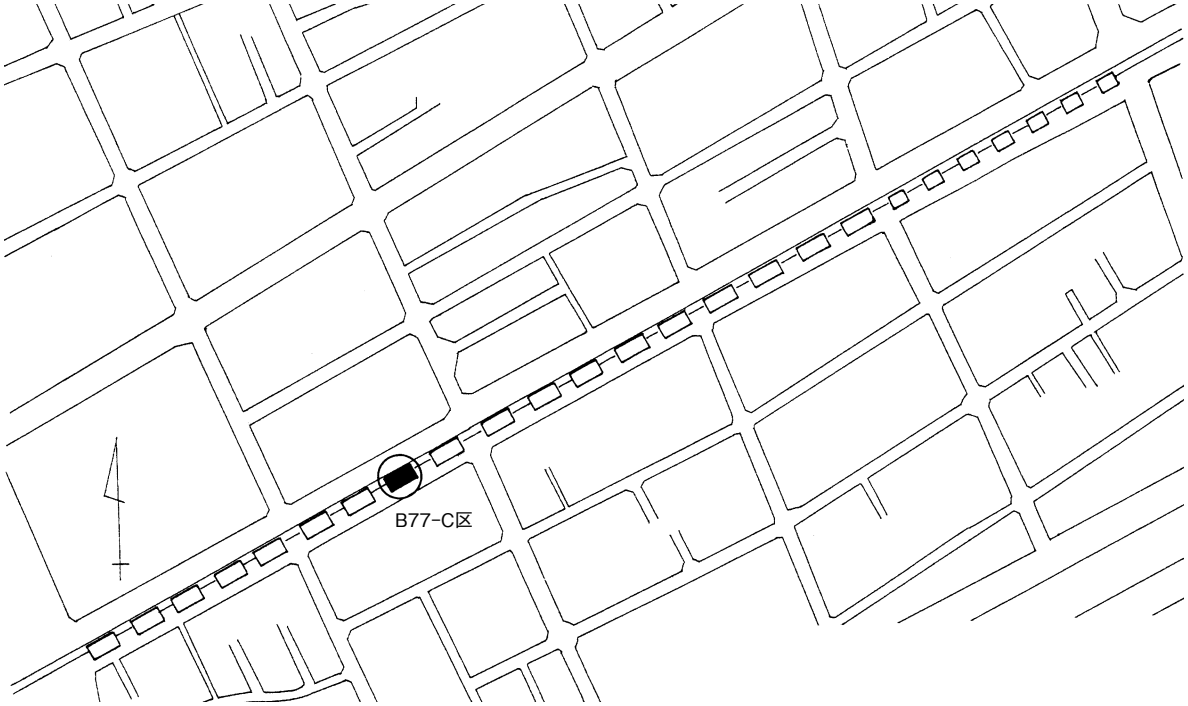


fig. 51　B77-C区位置図

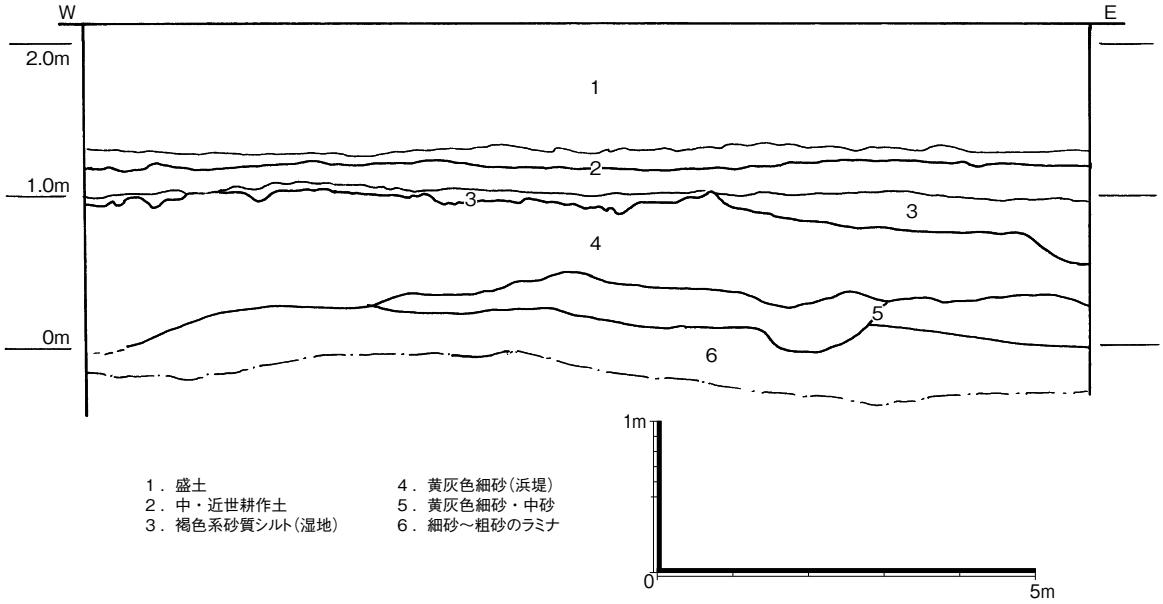


fig. 52　B77-C区北壁断面図

流路

浜堤の堆積土である黄灰色細砂～中砂面まで下げると浅い流路が確認される。当調査区では北西から南東へ下がる流路の地形を確認しており、堆積土の下層では弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の土器を含む。また、偶蹄類の足跡が堆積土内で確認されている。浜堤の砂からは少量の弥生時代の土器片が出土している。

出土遺物

29，30は壺形土器で、29は球形の胴部に外反する口縁部を持つ。器壁が荒れているため、調整は明瞭でない。30は平たい底部に外面にはハケ目調整を施す。31，32は甕形土器で、31はやや外反する口縁部に頸部外面には叩き目を施す。32の底部外面は円形にやや窪み、外側面には叩き目を施す。30は弥生時代、29，31，32は弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の土器と判断される。29，31は流路内堆積土、30，32は浜堤砂から出土した。

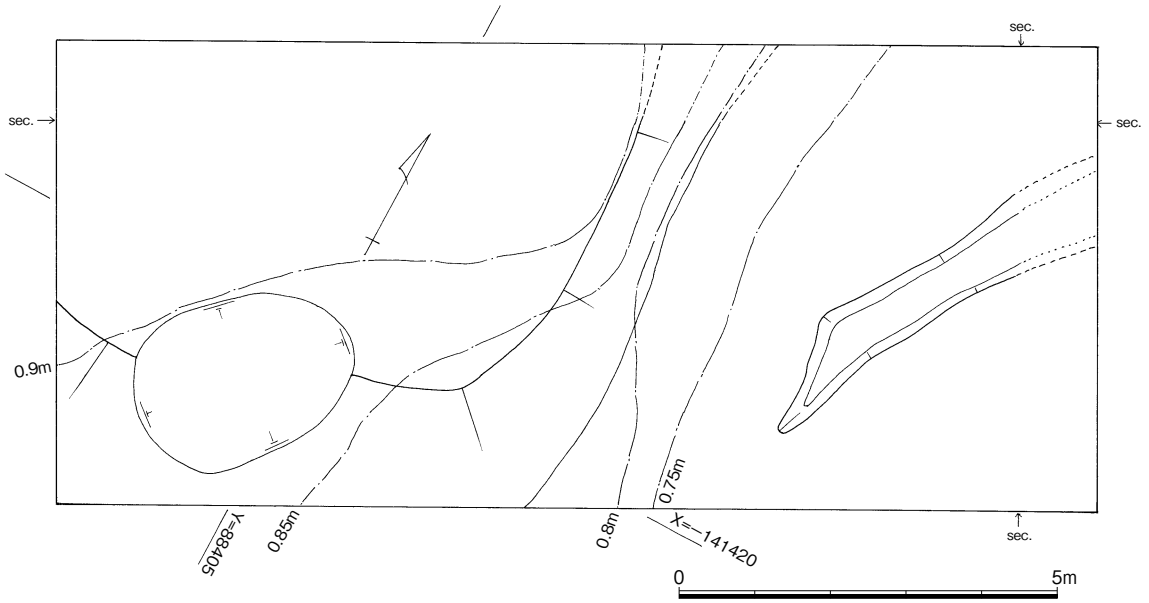


fig. 53　B77-C区流路平面図

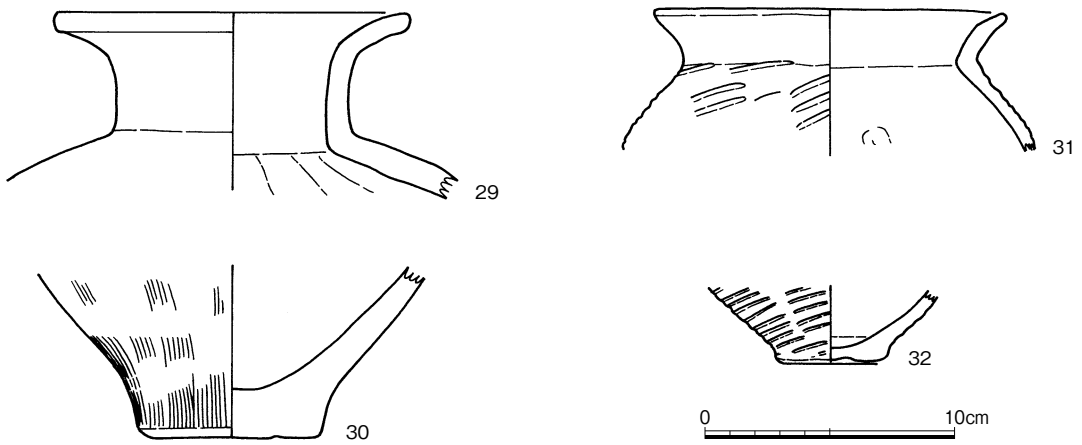


fig. 54　B77-C区出土土器

B78区

立地

当該区では浜堤の堆積は認められず、湿地（ラグーン）の堆積土のみであり、その下は砂礫層が続いていた。

基本層序

阪神電車軌条下の盛土層、近代・近世・中世の耕作土の下には、奈良・平安時代の土器を含む暗灰色細砂が確認される。その下には湿地堆積物である黒灰色シルト層が厚く積もる。同層は砂礫層が形成する南北方向の浅い谷状の地形に堆積していた。

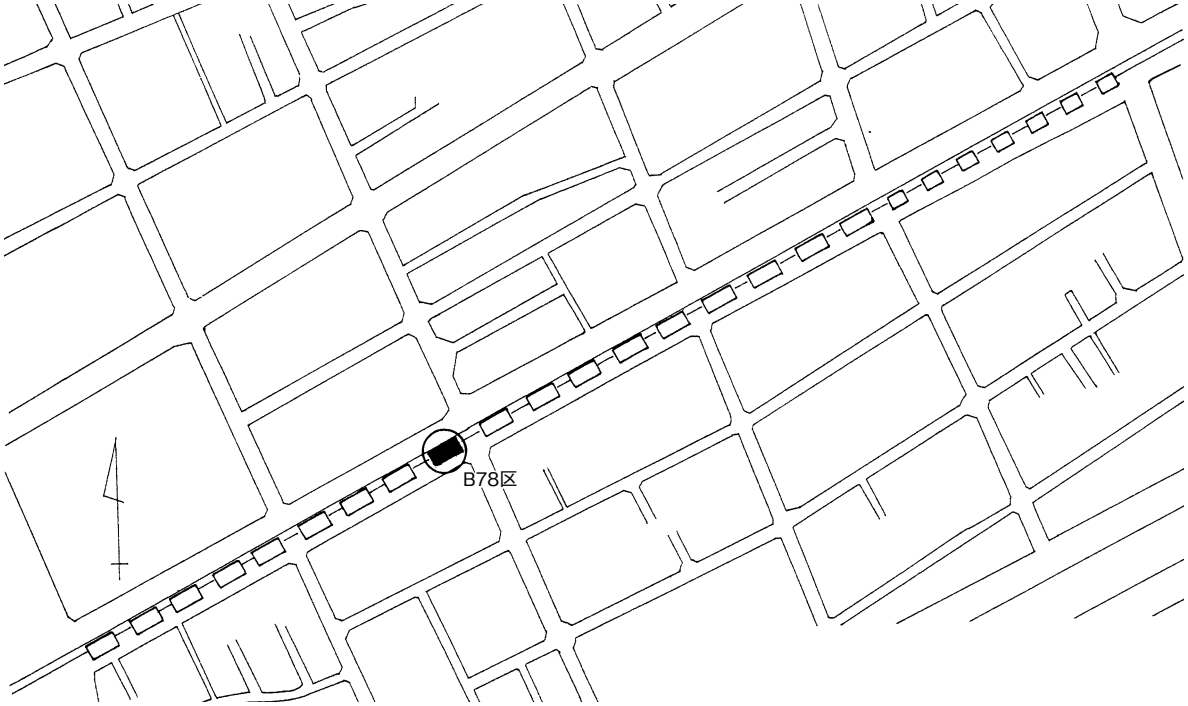


fig. 55　B78区位置図

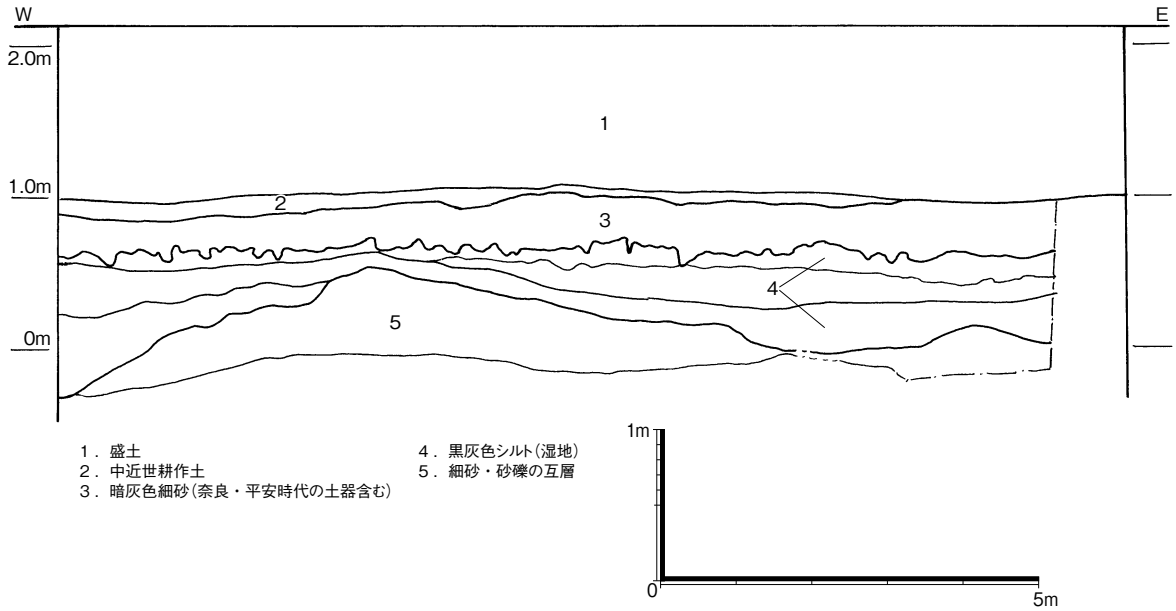


fig. 56　B78区北壁断面図

湿地

奈良・平安時代の土器を含む暗灰色細砂を除去すると、黒灰色シルトが確認された。この層の上面にはヒトや偶蹄類（ウシ）の足跡が検出された。同層は0.8～1mの厚さで堆積するが、上層には須恵器が含まれ、下層では弥生時代～古墳時代の土器が出土した。また、底面近くで石庖丁が1点発見された。

下層からは、幹が焼け焦げた状態の倒木や枝が出土しているが、出土状況に人為的な様子は認められなかった。湿地の中からは棒状の木製品や槌の子の未成品、角材の先端を尖らせた建築部材と思われるものなどが古墳時代の土器とともに出土している。

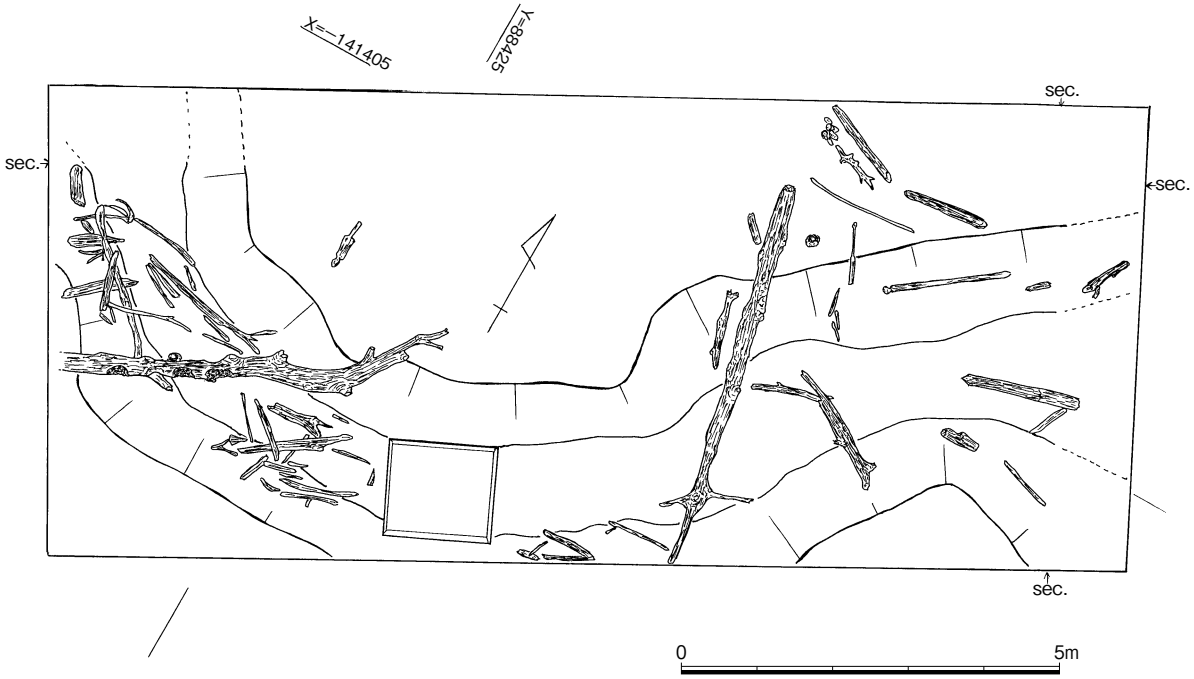


fig. 57　B78区湿地内自然木・木製品・土器検出状況図

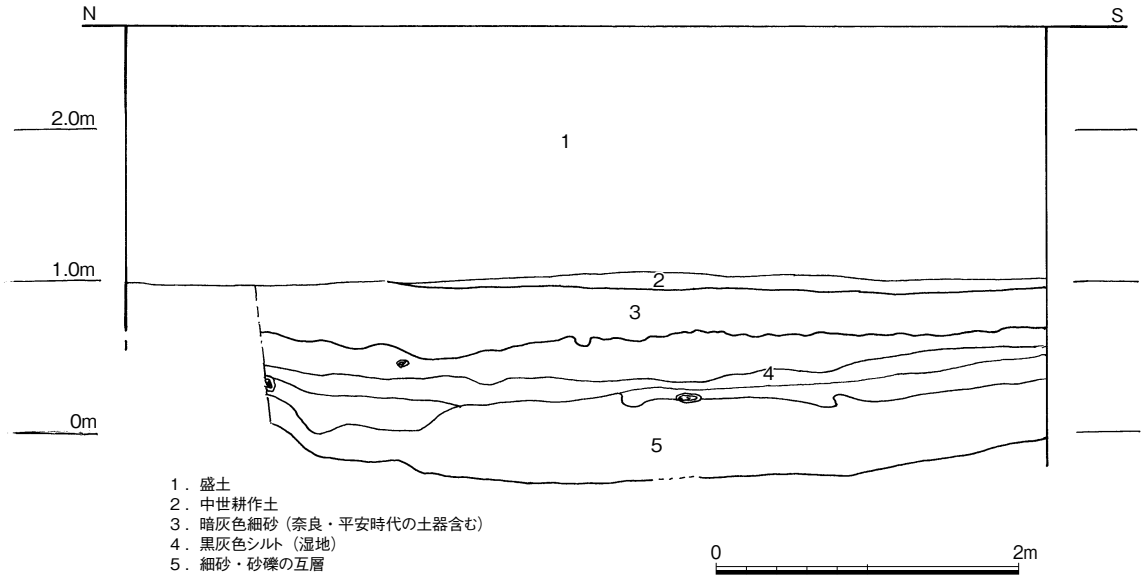


fig. 58　B78区東壁断面図

出土遺物

(1) 土器

37，38，39は須恵器で、37は扁平な宝珠つまみを持つ坏蓋、38は口縁端部を折り曲げる坏蓋である。39の坏は回転ヘラ削りの後、高台を貼り付ける。40は土師器坏で、外底部はヘラ削りを施す。これらは暗灰色細砂層で出土している。41，42は須恵器で、41の坏は短い立ち上がりを持ち、42の坏蓋は丸い天井部を持つ。41は暗灰色細砂、42は黒灰色シルト上層から出土した。43，44は土師器高坏で、43はやや内傾した口縁端部、44は外反する端部を持つ。45～48は土師器甕形土器である。45は小ぶりで内傾する口縁部で頸部はヘラ磨きを施す。46の口縁内面はハケ目、頸部内面はヘラ削りを行う。47，48は球形の直線的に立ち上がる口縁端部を有する。外面はハケ目、内面はヘラ削りで調整する。43～48はいずれも黒灰色シルト下層の出土である。

(2) 土錘

49～53は土師質の管状土錘で丸い棒材に粘土を巻きつけ成形している。53は暗灰色細砂、それ以外は黒灰色シルト下層の出土である。

(3) 墨書土器

33～35は須恵器で、33の坏の底面に「垣」が墨書きされている。34は坏蓋内面に複数の文字があるがかすれて読み取り不能である。35の坏蓋は残画では文字の判別はできない。

(4) 石庖丁

湿地堆積物である黒灰色シルト底面近くで、発見された石庖丁は両端を欠損するものの直線の刃部に曲線の握り部を持ち、縁が摩滅した二孔を有している。粘板岩製と思われる。

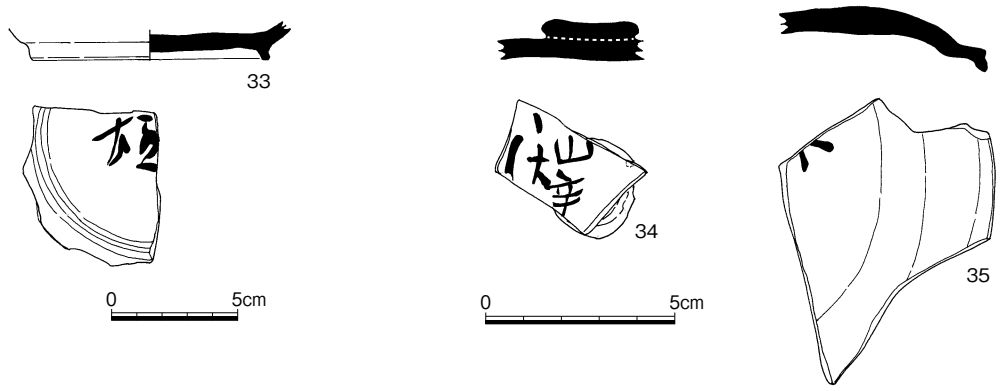


fig. 59　B78区出土墨書土器

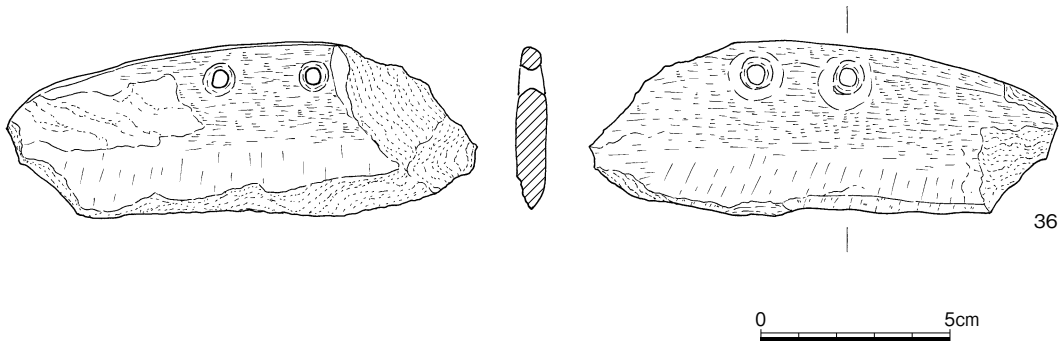


fig. 60　B78区出土石庖丁

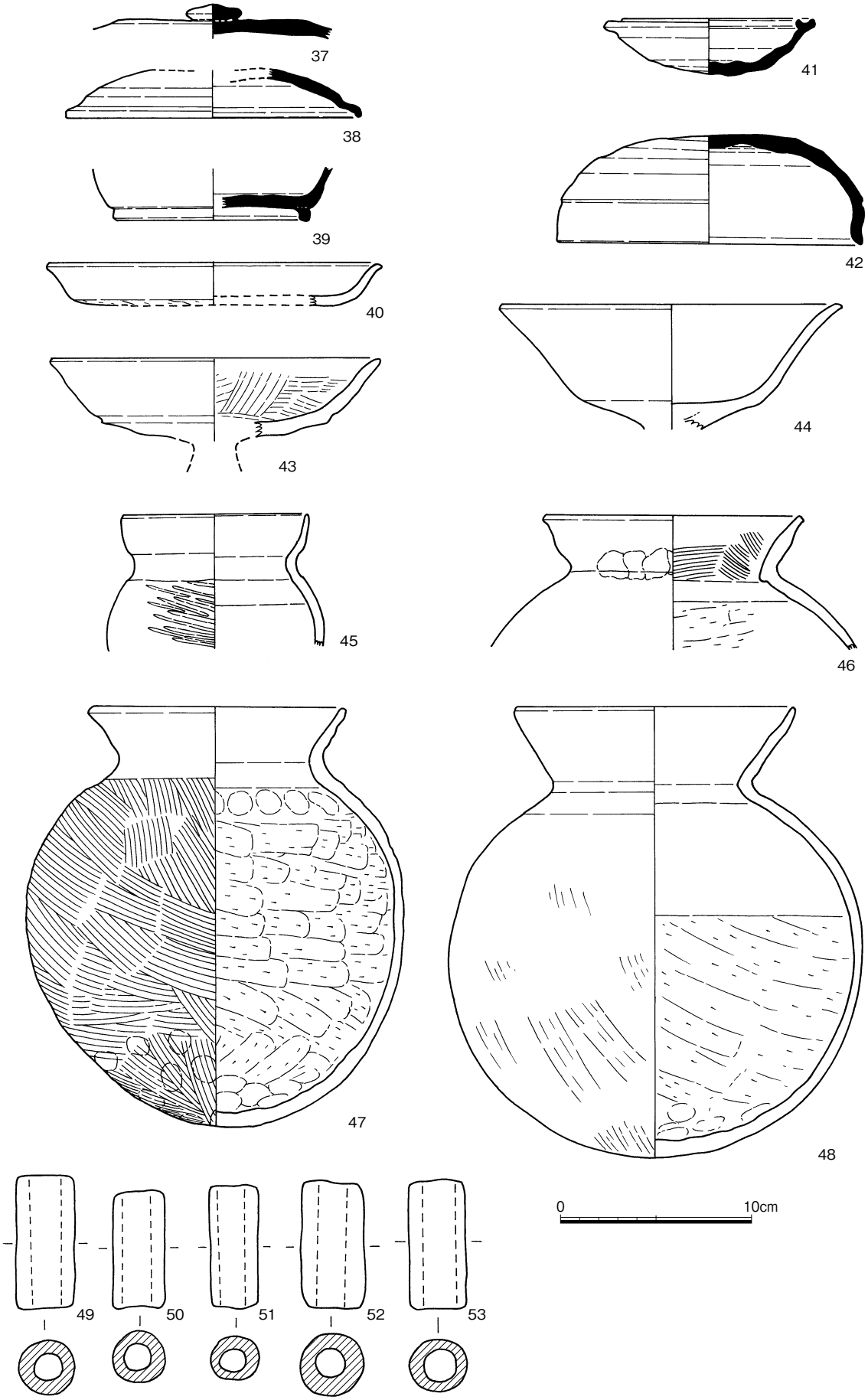


fig. 61　B78区出土遺物

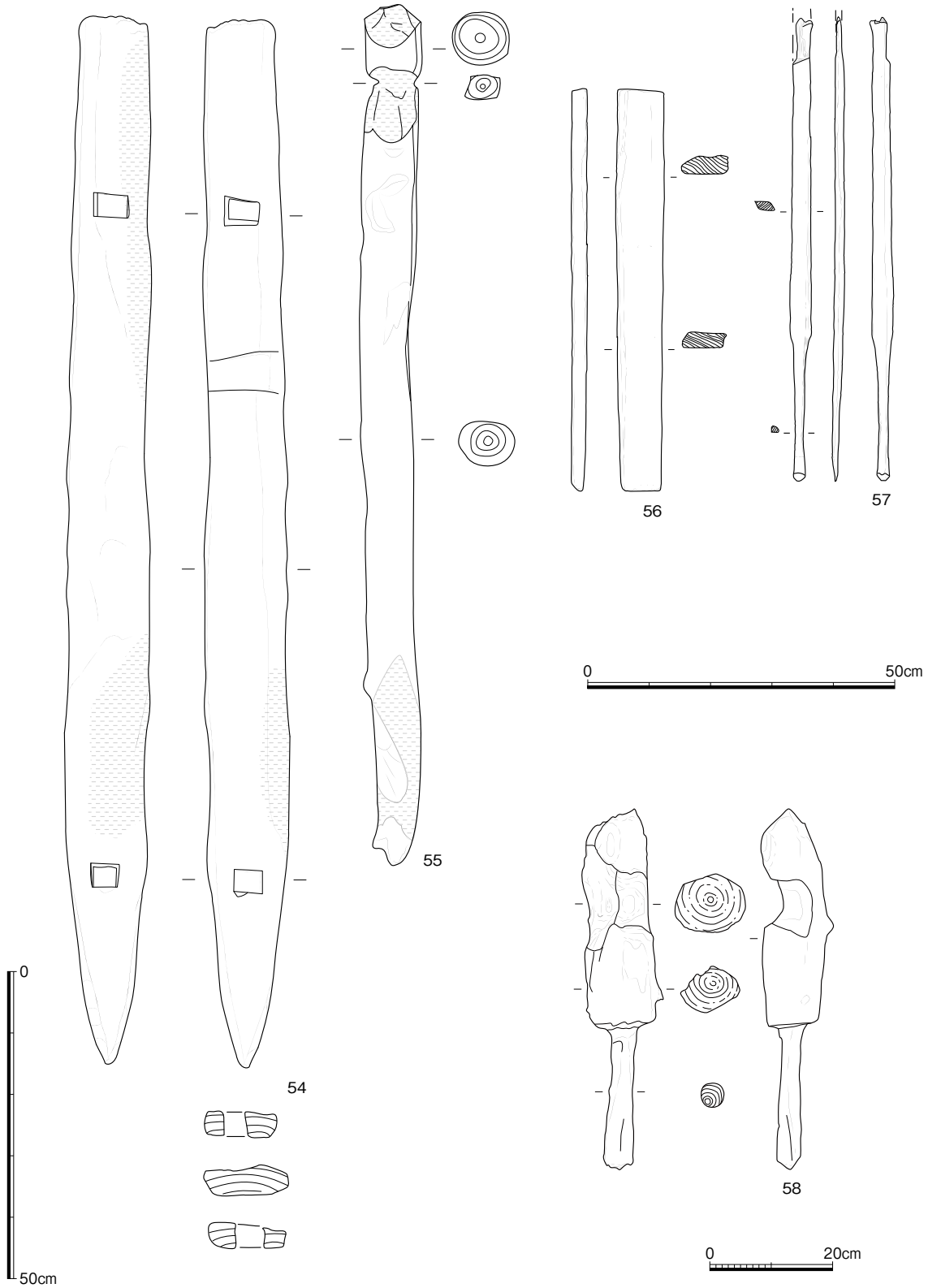


fig. 62　B78区出土木製品

（5）木製品

54は一端を尖らせたヒノキ製の大型角材で、長さ170.0㎝、幅12.8㎝、厚さ４～５㎝を測る。尖頭部を下にした状態で、上端から19.3㎝、下端から26.3㎝の中央部に、それぞれ縦横４～６㎝の貫き穴が穿たれている。建築材等に使用したものを杭等に転用した可能性がある。

58はマツ属複維管束亜属製の横槌で、一木造りのほぼ完形品である。長さ46.3㎝、頭部は長さ28.0㎝、直径8.0～9.3㎝で、柄は長さ18.3㎝、最大径3.6㎝を測る。全体が腐食していることもあり、頭部の欠損は打撃によるものではないと考えられる。

fig. 63
B78区湿地内土器・木製品出土状況（北から）

fig. 64
B78区木製品取上げ作業

B79区

立地

当該区は浜堤が南方向に下がり、湿地に変わりかける部分に位置する。西端部は近世から近代まで使用された南北方向の水路によって、深く撹乱を受けている。

基本層序

阪神電車軌条の盛土、近代の耕作土以下は中近世の耕作土が続く、以下は調査区北半分では、浜堤堆積物の黄灰色中砂が確認され、南半分は南西方向に下がり、湿地に続くものと考えられる。南半部分に堆積する黒灰色砂質土からは奈良時代の土器が多く出土する。

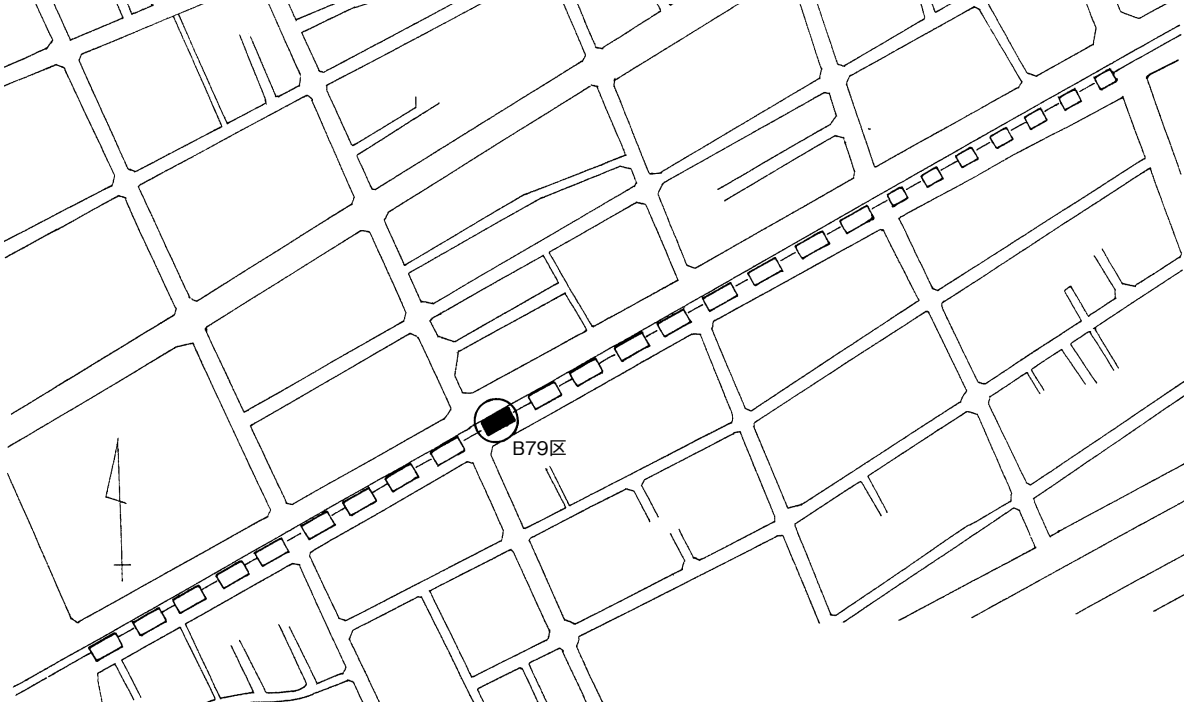


fig. 65　B79区位置図

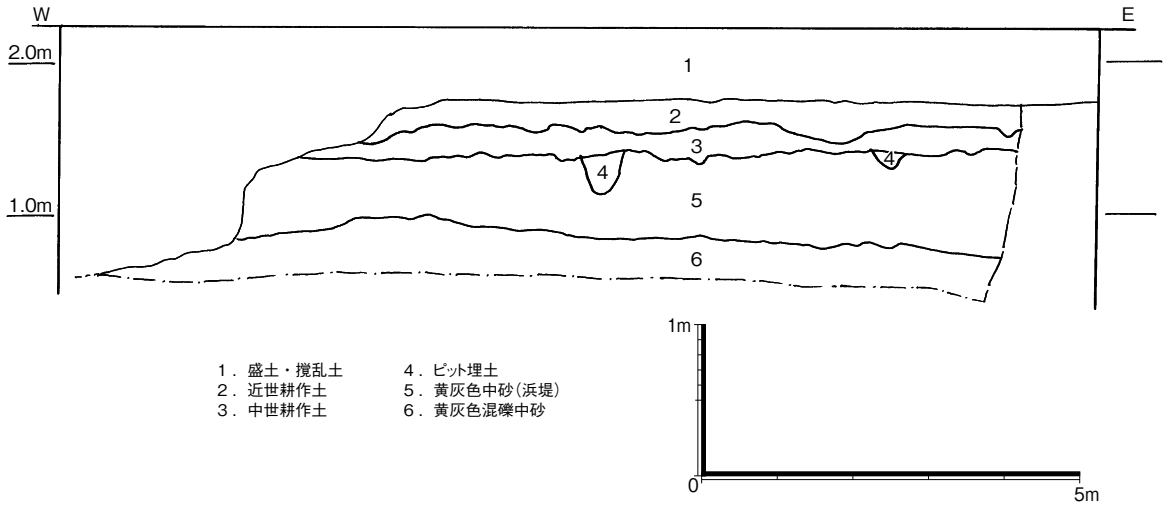


fig. 66　B79区北壁断面図

犂溝・溝

中世耕作土面で南北方向の犂溝・溝が確認されている。溝は幅約1.2m、深さ10㎝のものが2条平行している。

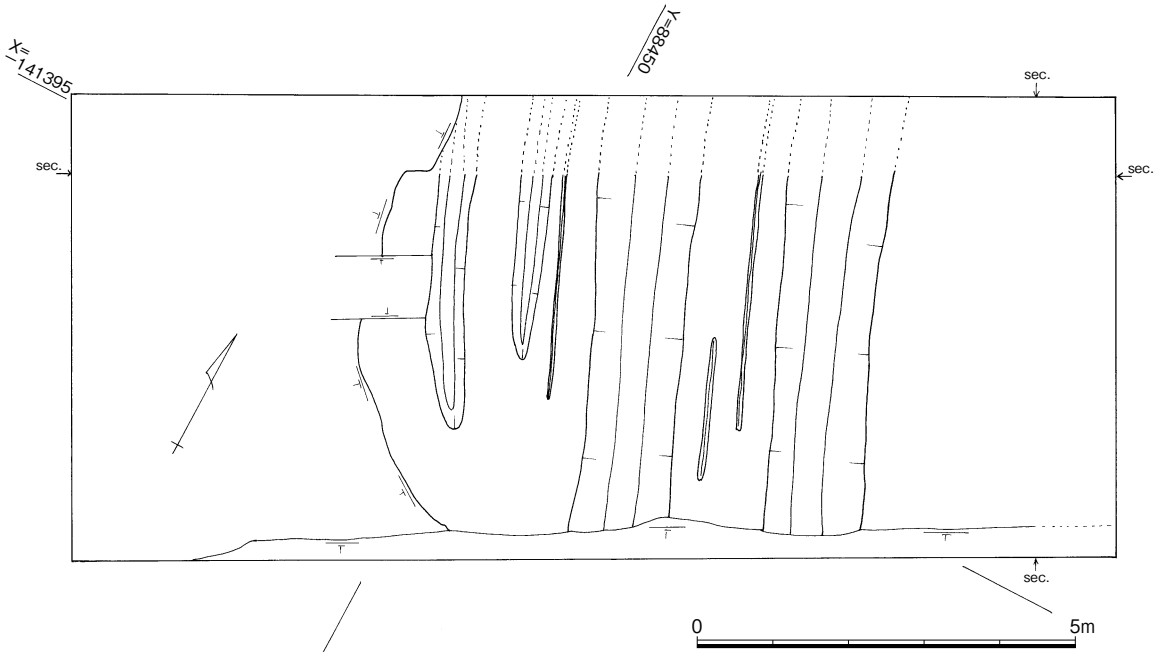


fig. 67　B79区犂溝・溝平面図

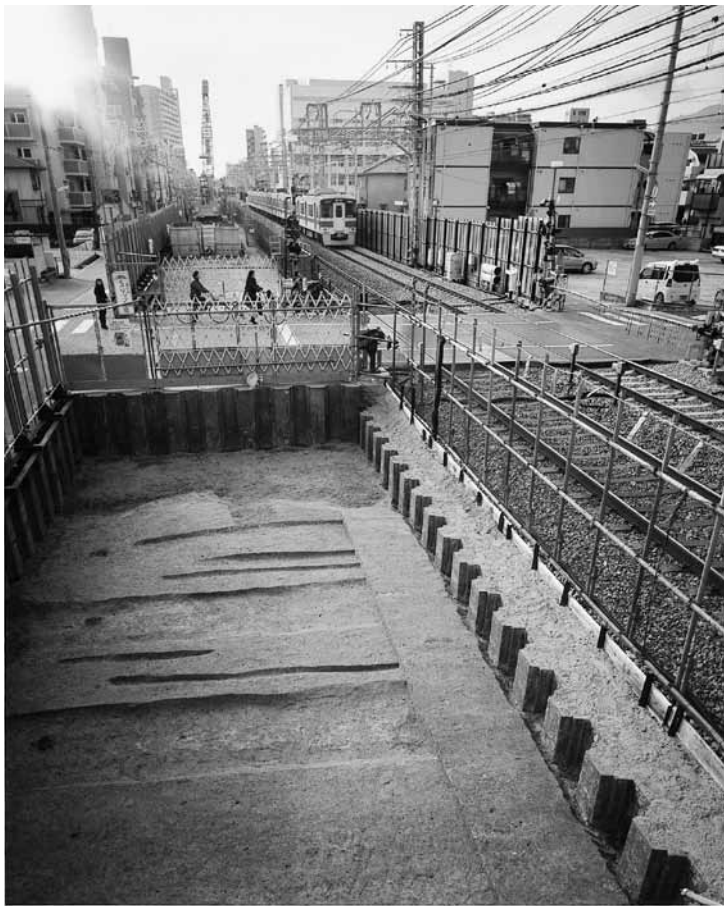


fig. 68　B79区犂溝全景（東から）

柱穴・土坑

中世耕作土（茶灰色砂質土）を除去した段階で調査区北半分では、黄灰色中砂が確認され、その上面で柱穴・ピット・土坑が検出された。大型の掘形を持つ柱穴もあり、掘立柱建物を構成すると思われるが、調査区内では建物の南端の柱列の一部が検出されたに止まり、建物規模は明確でない。その建物の南側には柵とみられる小さいピット列や炭の詰まった土坑（SK01）が確認されており、ここから南側には遺構は確認できないことから、遺構群の南限と思われる。

これらの遺構から出土した土器は小破片のものが多く時期の判定は難しいが、おおよそ奈良時代～平安時代初め頃に納まるものと判断される。

fig. 69　B79区柱穴・土坑平面図

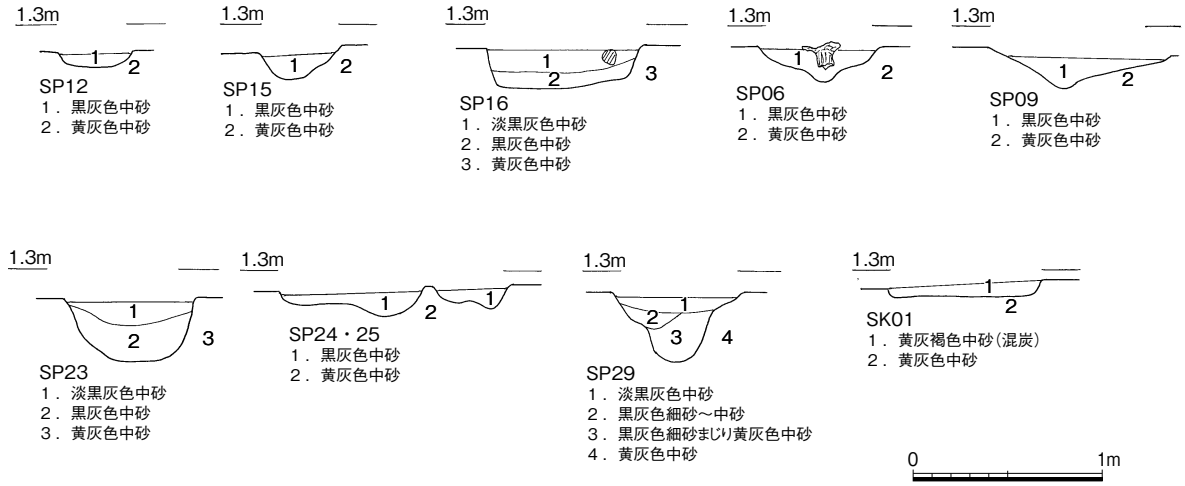


fig. 70　B79区柱穴・土坑断面図

fig. 71　B79区全景（東から）

出土遺物

59は須恵器の甕で胴部外面はタタキ成形の後、カキ目で表面調整を行う。内面は同心円文のタタキ目文様が残る。60，61は須恵器坏の底部外面に墨書を施すものである。60には「大」の可能性が高い文字、61には残画が少ないが「垣」の可能性が高い文字が残される。

この二つは同一個体のものと判断され、二つ併せて「大垣」となる可能性が高い。62～64は管状土錘で、細い棒に粘土を巻きつけ、成形した痕跡がよく残る。65は棒状土錘で両端に紐通しの穴を穿けるが、欠損して半分しか残存していない。

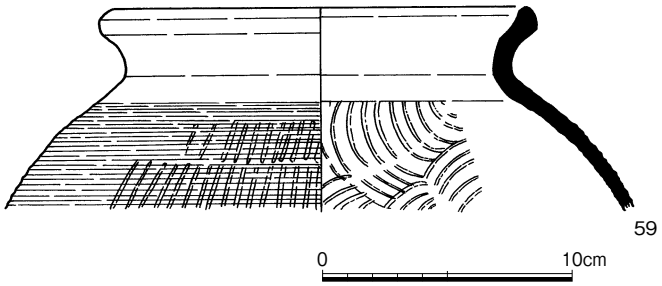


fig. 72　B79区出土土器

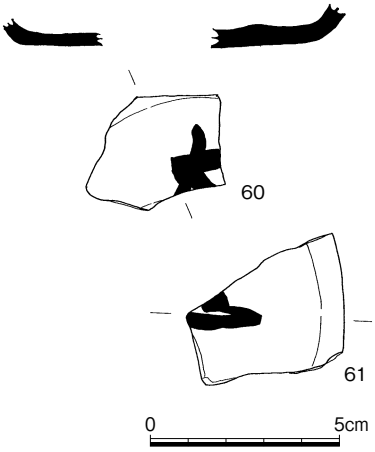


fig. 73　B79区出土墨書土器

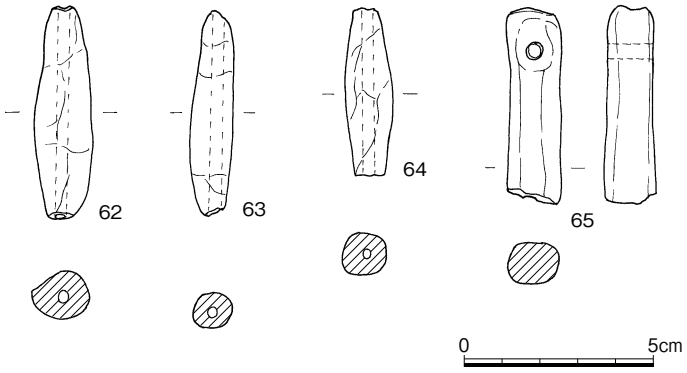


fig. 74　B79区出土土錘

B80-A区

立地

当該区は浜堤と湿地の変換点に位置する。B79区北半分で浜堤となったものが、当調査区東半分では再び湿地に下がるという複雑な地形の一部にあたっている。

基本層序

阪神電車の軌条下の盛土、近代の耕作土以下、調査区西側では浜堤堆積物である黄灰色中砂が堆積する。東側は湿地堆積物が1.5mほど堆積し、上層から黒灰色砂質シルト（炭混）、黒色砂質シルト、暗灰色中砂の順に堆積し、その下には砂礫・粗砂層が拡がる。

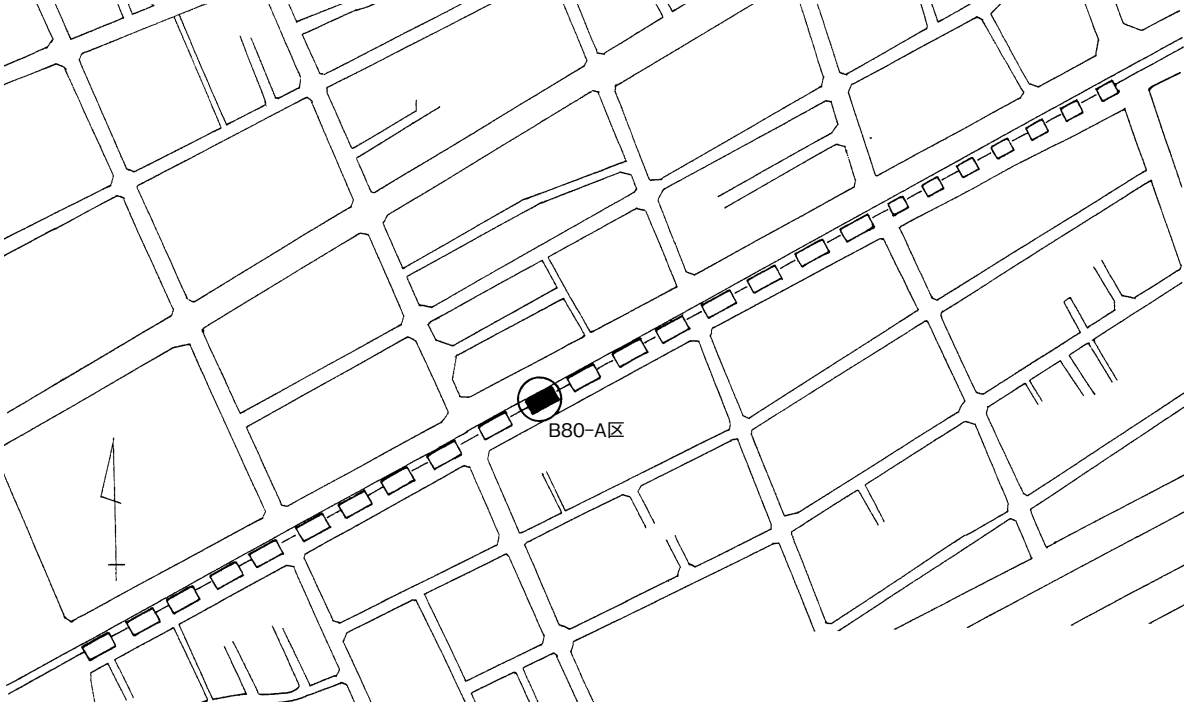


fig. 75　B80-A区位置図

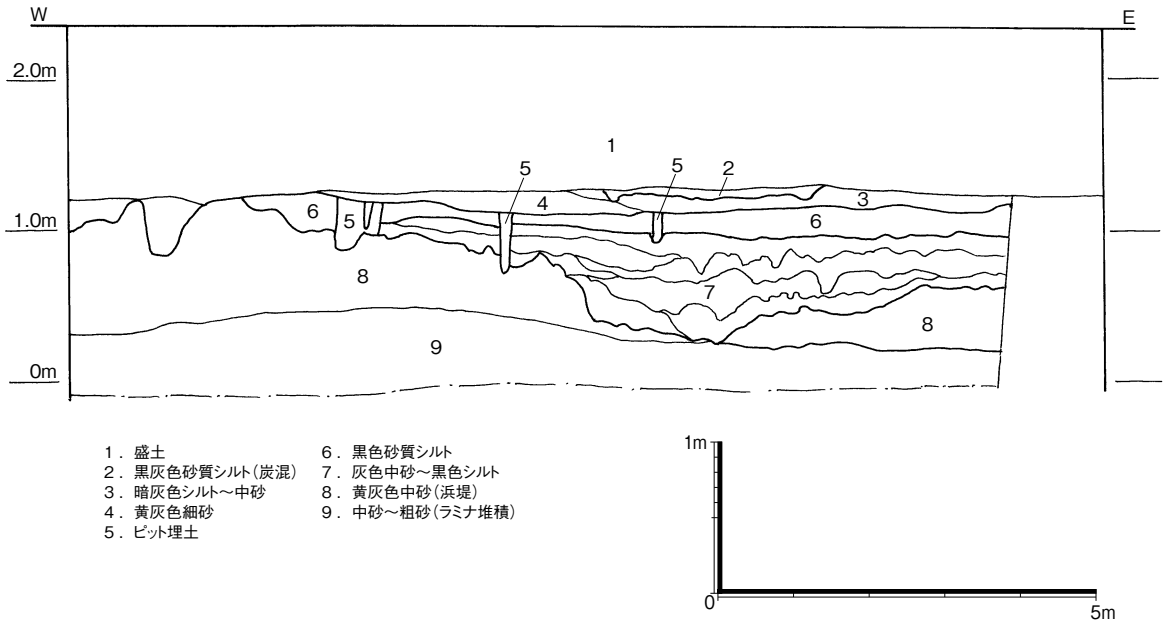


fig. 76　B80-A区北壁断面図

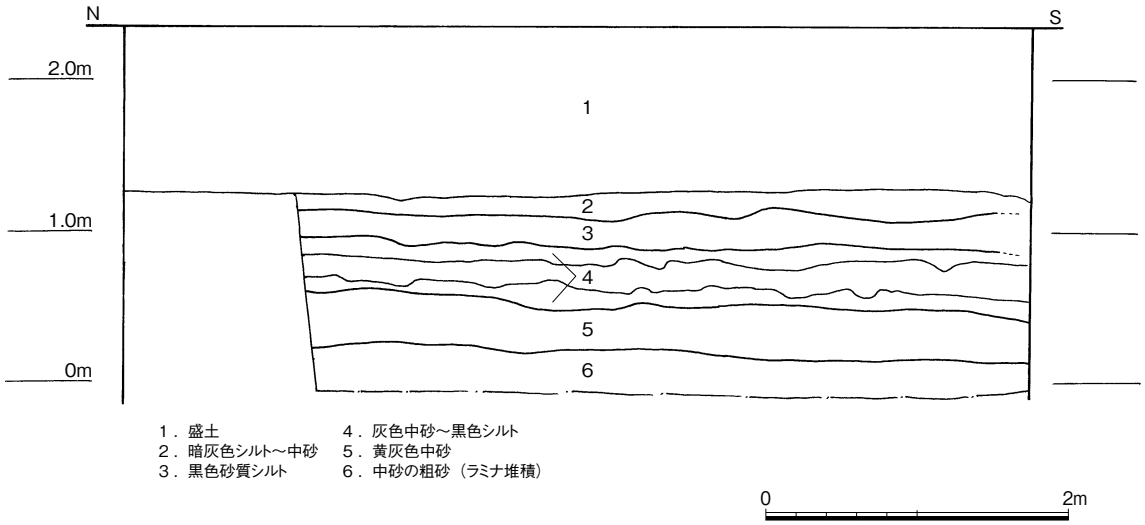


fig. 77　B80-A区東壁断面図

fig. 78　B80-A区杭・ピット平面図

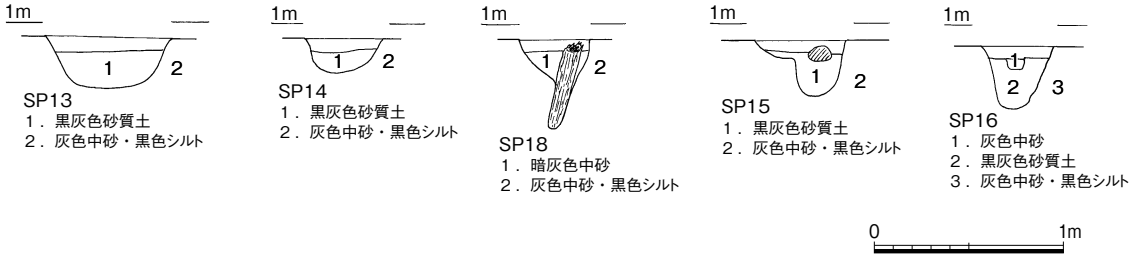


fig. 79　B80-A区ピット断面図

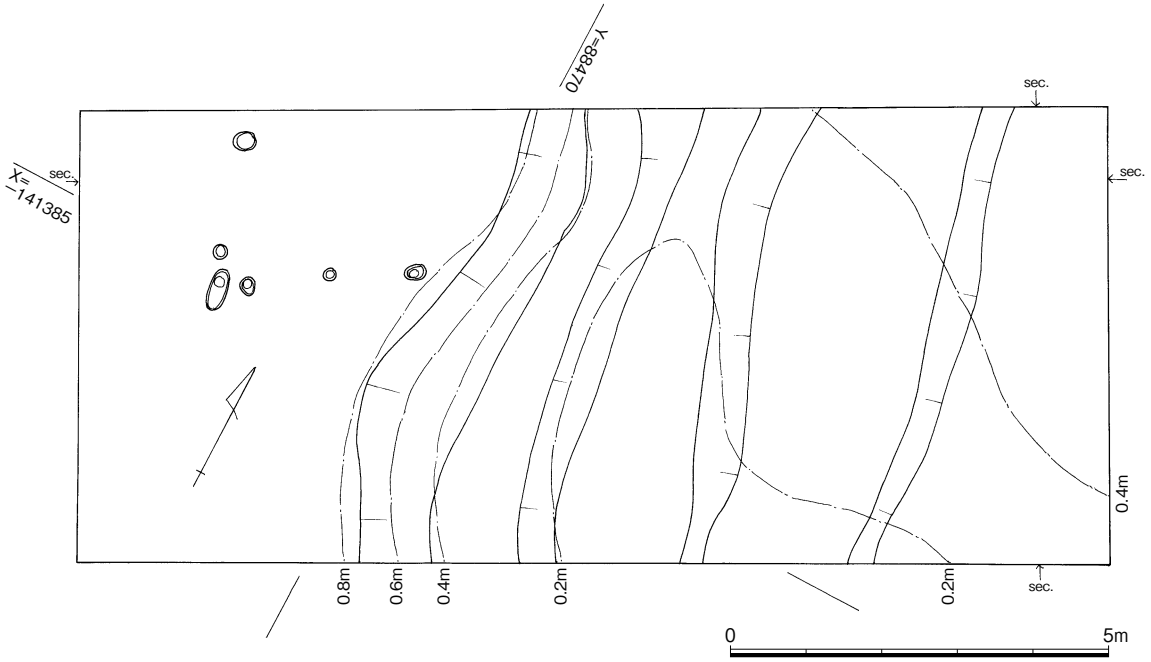


fig. 80　B80-A区谷状地形平面図

杭・ピット

浜堤と湿地の境目付近には、護岸のためと思われる杭が打たれている。また、北西端の浜堤上の平坦面にはピット・柱穴が集中しており、一部のピットは列をなすものもあり、掘立柱建物の構成する柱列もあると思われる。

湿地

湿地部分はシルト～中砂の堆積物で埋まり、これらの堆積層には飛鳥・奈良時代～平安時代前半の土器・木簡を含む木製品が多く含まれている。

谷状の地形

湿地堆積土を約1m除去すると、砂礫・粗砂層が南北方向の浅い谷状地形を呈しているのを確認した。同志社大学の増田富士雄先生の現地視察でのご教示では、この部分はラグーンインデット（澪筋）にあたるということであった。

出土遺物

（1）黒灰色砂質シルト出土土器・磁器

66～74は土師器坏で、66，67は口縁端部内面に段を持つ。68～71は直線的に伸びる口縁端部で、底部外面には指頭圧痕を残す。72，73は外反する口縁端部であり、底部外面に指頭圧痕を残す。74は平底で直線的に立ち上がる口縁部を持つ。

75～78は須恵器で、75の坏は丸い体部に底部は回転ヘラ削りで調整する。76の坏は直線的な体部を持つ。77の壺の底部は回転糸切りである。78は壺の底部で張り出した特徴的な高台を有する。79は白磁碗で直線的な体部に口縁端部は小ぶりな玉縁となっている。

80，81は土師器坏で高台を有する。81は外反する口縁端部と内面には段を持つ。82は土師器皿で口縁端部内面に段を有する。83は黒色土器で内湾する口縁部に内面はヘラミガキ調整、外面はヘラ削りを行う。84～86は土師器甕で、球形に近い体部に外反する口縁部を持つ。これらの土器、磁器は奈良時代のものも混じるが、一番新しい要素を考えるならば、下限は平安時代初め頃のものと考えるが妥当であると判断される。

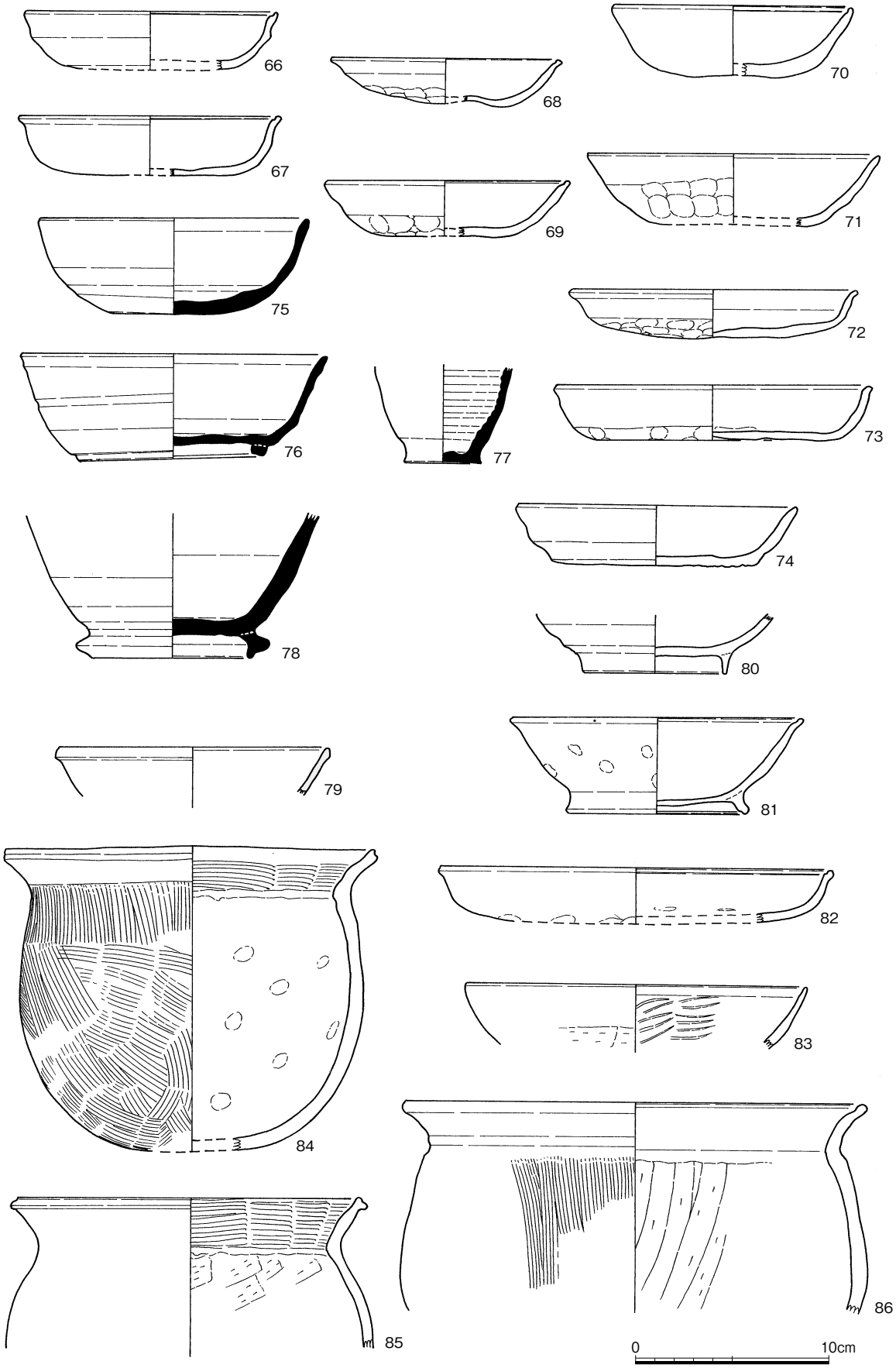


fig. 81　黒灰色砂質シルト出土土器・磁器

(2) 黒色砂質シルト出土土器

87～93は須恵器で、87は扁平なつまみを持つ坏蓋、88，89は体部が直線的に立ち上がる坏である。90は逆台形の高台を有する坏である。91は碗の口縁部と思われる。92は鉢、壺の底部と思われる。93は大型の甕の口縁端部と判断される。2条単位の沈線2帯と3帯の波状文を施している。

94～98は土師器で、94の坏はヘラ削りの底部に丸く内傾する口縁部を有する。95は皿で外底部に指頭圧痕を残し、外反する浅い口縁部を持つ。96，97は黒色土器で内面はヘラミガキ、外面はヘラ削りを施す。これらの土器について、91は飛鳥時代頃のものと考えられる以外は、概ね奈良時代末から平安時代初め頃のものと判断される。

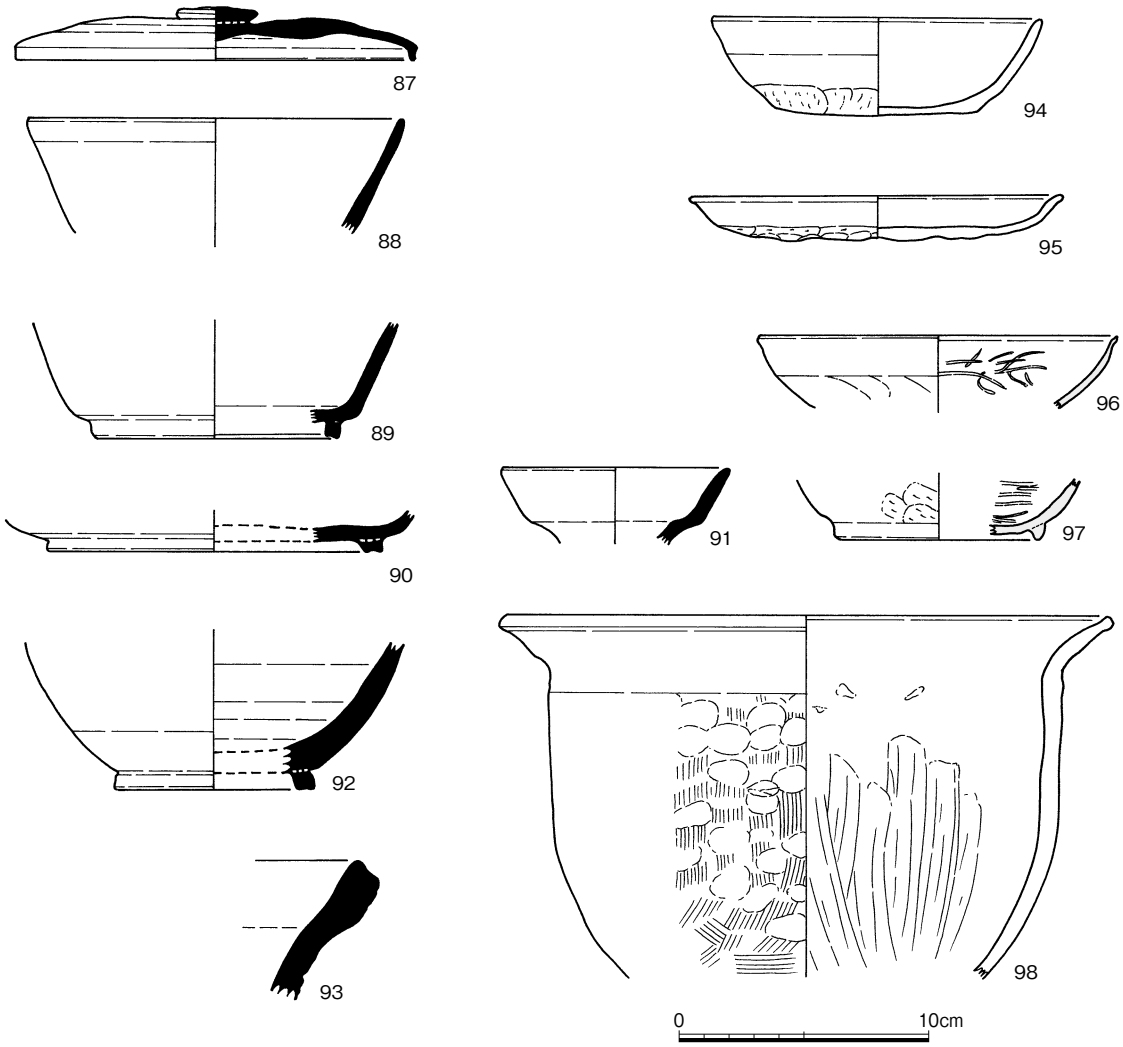


fig. 82　黒色砂質シルト出土土器

(3) 暗灰色中砂出土土器・陶器

99は緑釉の唾壺で、大きく開く口縁部を持つ。胎土は須恵質で、光沢のある緑灰色の釉薬が掛かる。100，101は須恵器で、100の坏蓋は扁平な天井部に屈曲した口縁端部を持つ。101は坏で、断面四角形の高台である。102は土師器坏で口縁内面に段を有する。103は土師器甕で、球形の胴部に外反する口縁部を持つ。胴部外面はハケ目、内面はヘラ削りを施す。

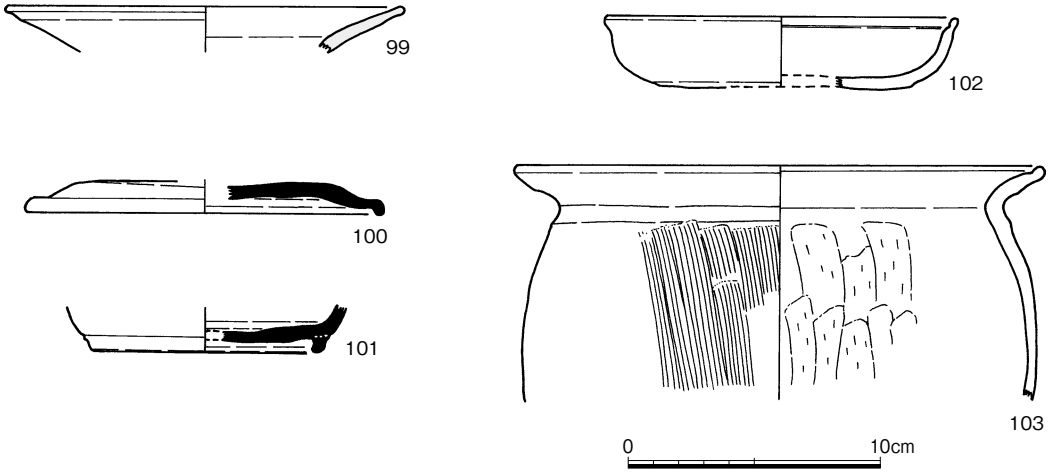


fig. 83　暗灰色中砂出土土器・陶器

(4) 灰色中砂出土土器・陶硯

灰色中砂は浜堤と湿地の境界付近に堆積する堆積層である。104は須恵器で、平瓶の口縁部と思われる。106は須恵器甕の口縁部で、大きく外反し頸部外面は素文である。105は須恵器の小ぶりの圏足硯で、四角い透かしを有している。陸・海部にわずかに墨痕を残す。陸部は摩滅しておらず、それほど使用されない内に破損放棄されたものと判断される。

(5) ピット出土土器

ピット内から出土した土器の中で、須恵器坏2点を実測・掲載した。107はやや内傾する高台部を有する。底径は8㎝である。108はやや外に開く四角い高台を持ち、底部から胴部への屈曲が明瞭である。

(6) 墨書土器・転用硯

黒灰色砂質シルトからは109の墨書土器が出土した。残画を確認すると二文字になるが、文字の意味は不明である。110は灰色中砂出土で、一文字分残されているが判読できない。これらは土師器坏の外面に書かれている。黒色砂質シルトからは2点の墨書土器が出土した。111は須恵器坏外側面に横向きに「大」字が書かれている。112は須恵器坏の外底面に「北」または「背」の可能性のある墨書が一文字確認される。やや外反する高台部と直線的な体部を持ち、深めの坏である。また、黒色砂質シルトからは須恵器の坏・坏蓋を利用して硯とした転用硯が出土しているが、その内の3点を図示している。これらはいずれも坏蓋の内面を利用しており、墨痕が明瞭に残存する。

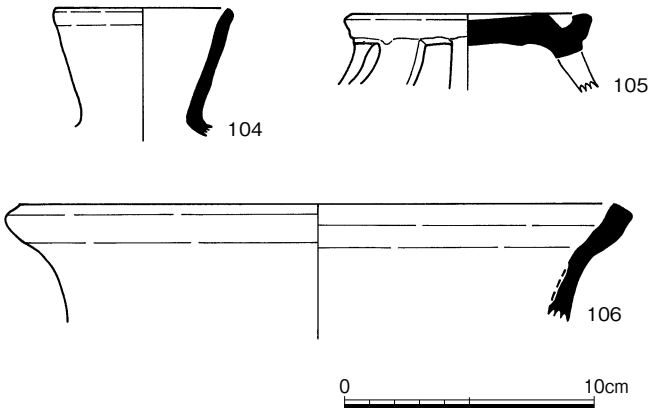


fig. 84　灰色中砂出土土器・陶硯

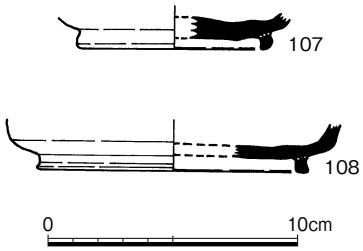


fig. 85　ピット出土土器

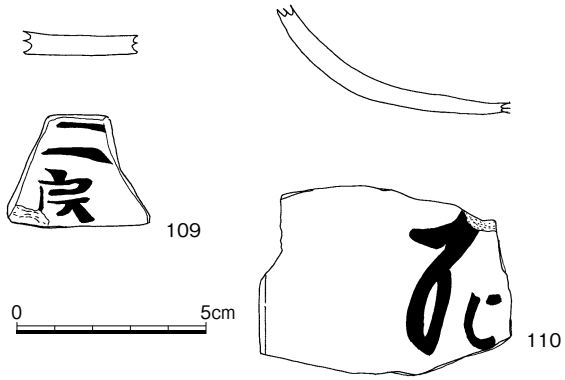


fig. 86　黒灰色砂質シルト・灰色中砂出土墨書土器

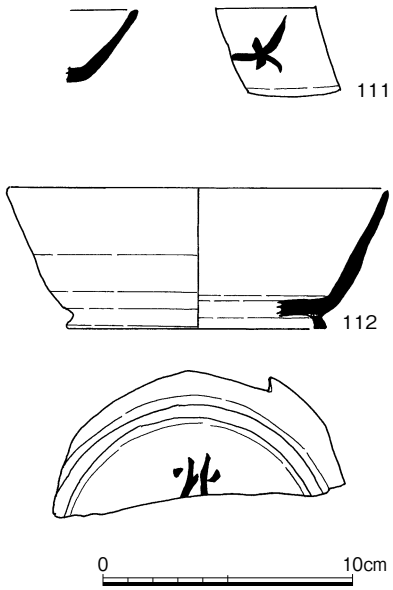


fig. 87　黒色砂質シルト出土墨書土器

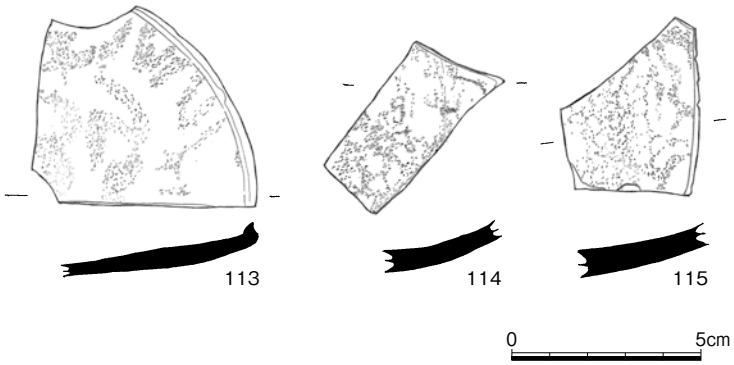


fig. 88　黒色砂質シルト出土転用硯

(7) 谷状地形出土土器

谷状地形を形成する砂礫中から、弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土した。116は壺形土器の口縁部、117は甕形土器の底部でいずれも摩滅が著しい。

(8) 黒色砂質シルト・暗灰色中砂出土瓦

平瓦4点、軒丸瓦1点を図示した。119は瓦質、121，122は須恵質、120，123は土師質である。120の軒丸瓦は珠文帯と圏線が見られる。平瓦には凸面には縄目、凹面には布目が残る。

(9) B80-A区出土蛸壺・土錘・砥石

124～128は蛸壺、129～142は管状土錘、143～148は有溝土錘、149～167は棒状土錘、168・169は大型の管状土錘である。124・125は須恵質、その他はすべて土師質である。170は凝灰岩質の砥石でよく使いこまれ、摩滅している。

(10) 黒灰色砂質シルト出土銙帯金具

銙帯金具（巡方）が1点出土した（118）。縦20㎜、横23㎜（約八分）のほぼ方形で、内側に帯と固定するための鋲が四隅にある。

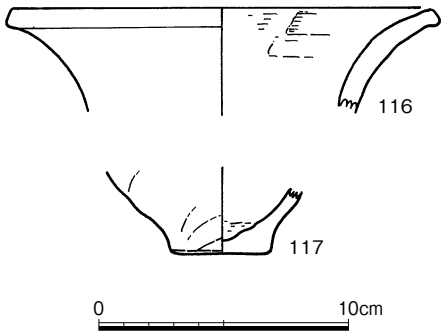


fig. 89　谷状地形出土土器

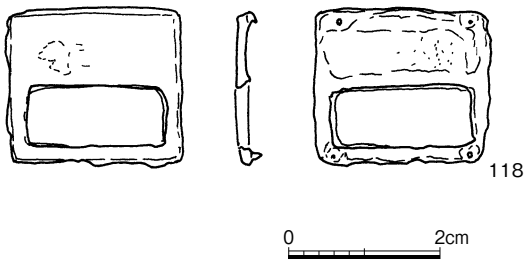


fig. 90　黒灰色砂質シルト出土銙帯金具

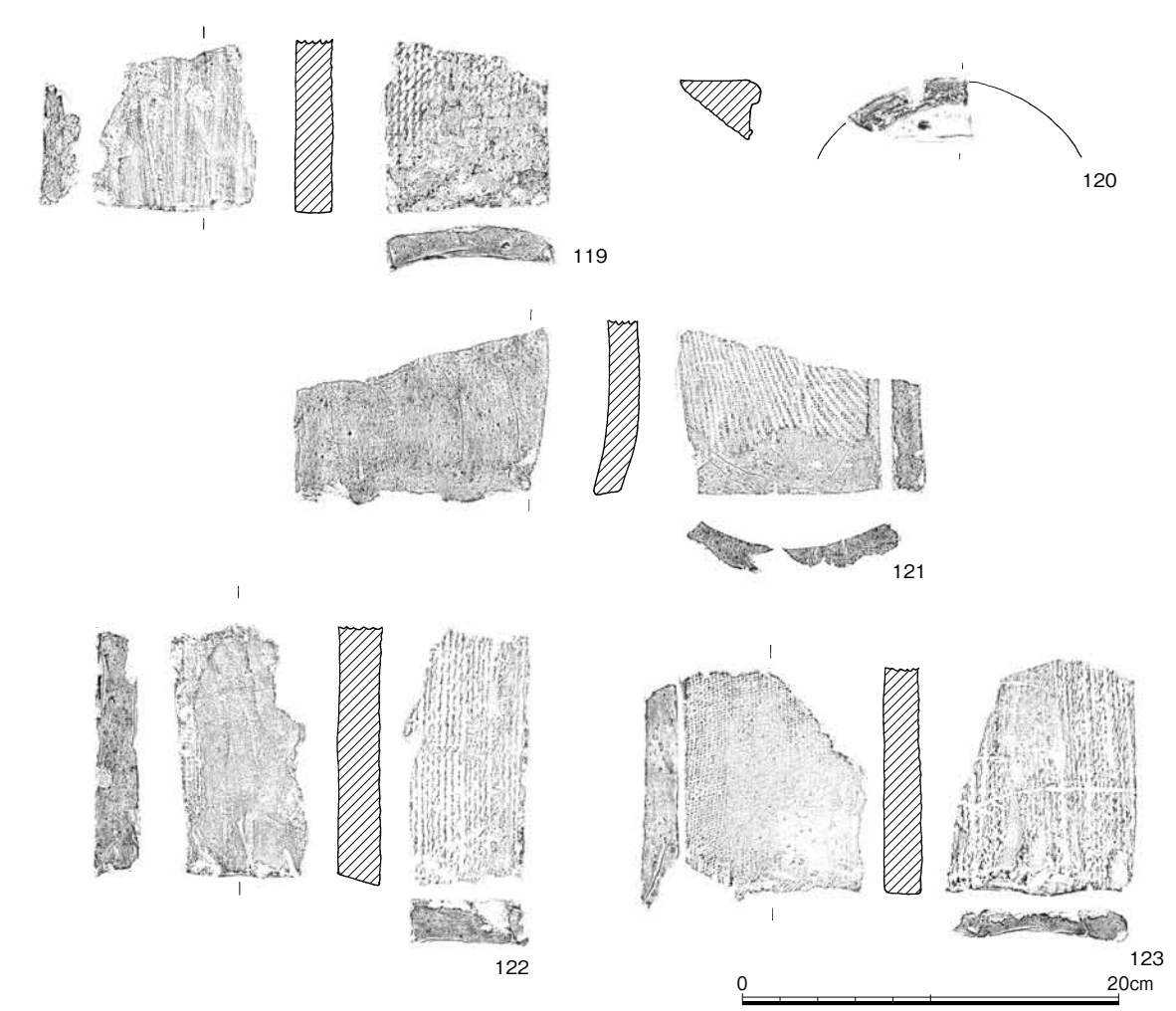


fig. 91　黒色砂質シルト・暗灰色中砂出土瓦

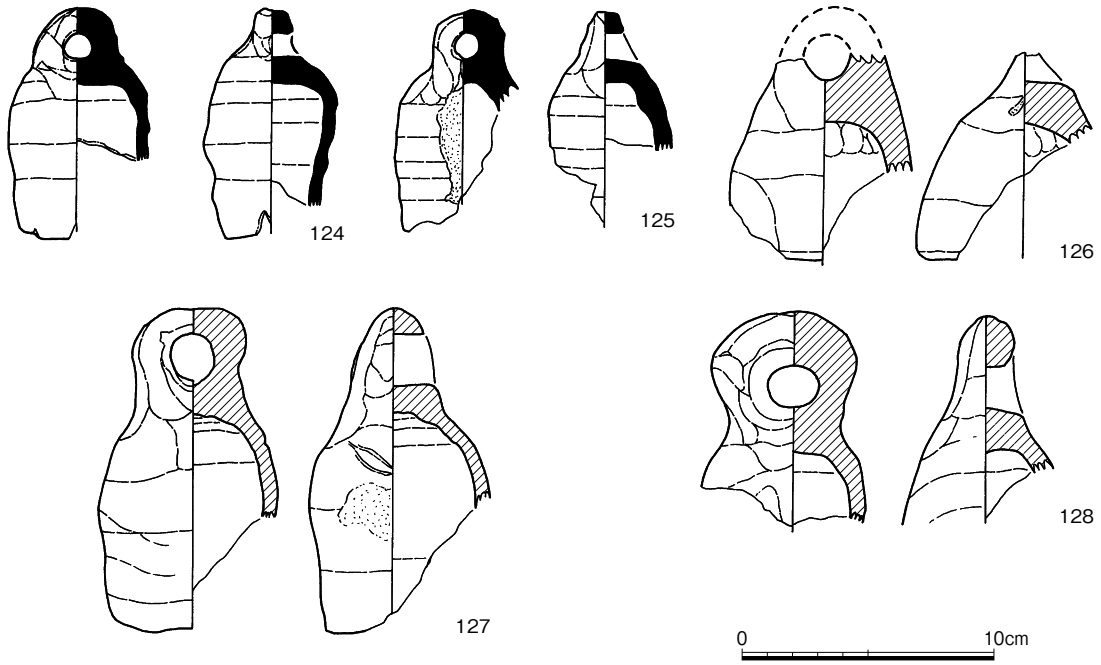


fig. 92　B80-A区出土蛸壺

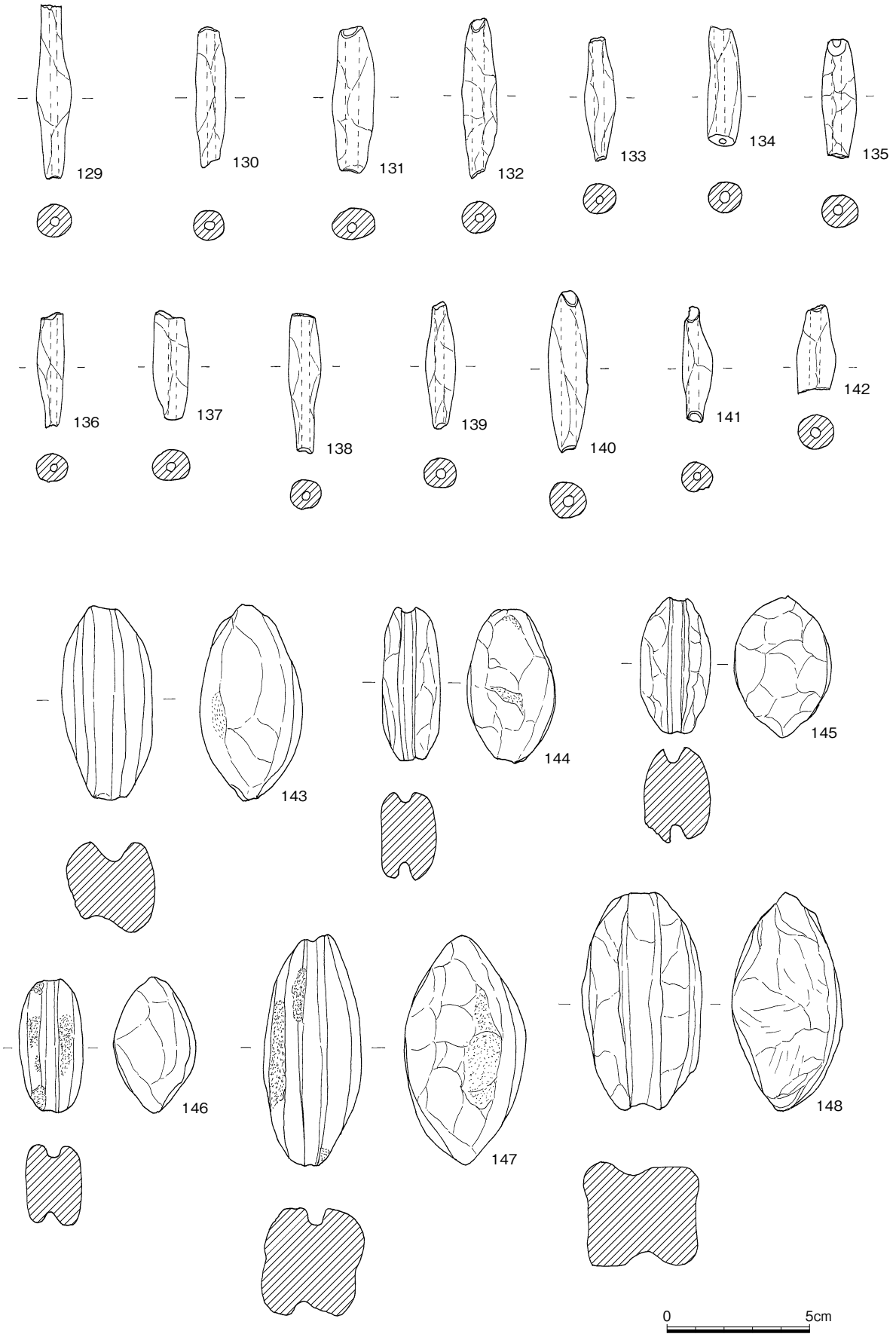


fig. 93　B80-A区出土土錘

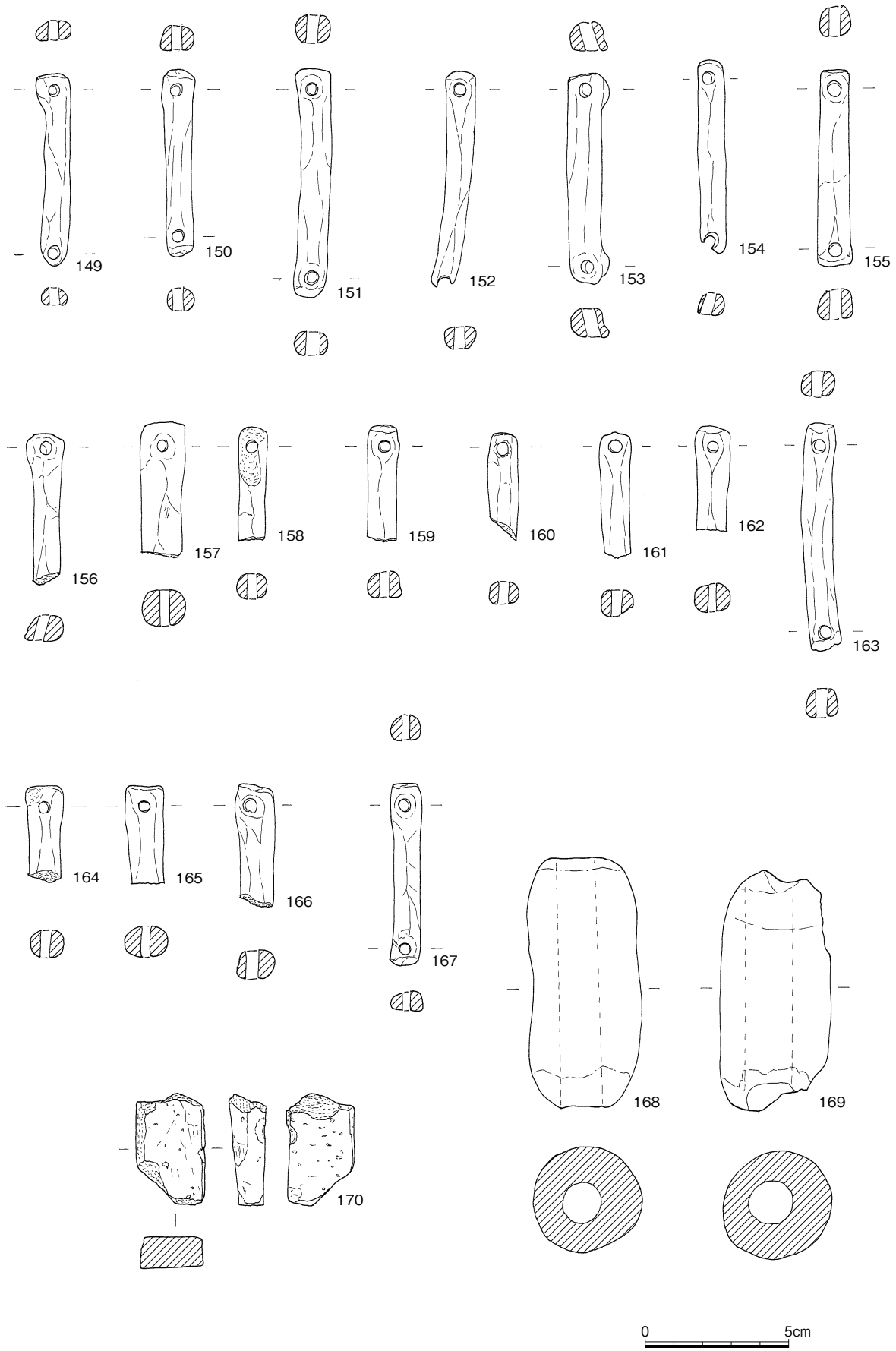


fig. 94　B80-A区出土土錘・砥石

(11) B80-A区出土木簡・木製品

①木簡

170は黒色砂質シルトより出土した木簡で、墨痕薄く不明瞭であるが「米七升八合九合・合四斗五升五合」というような米の数量を書き記したものである。大きさは235㎜×25㎜×6㎜032型式である（詳しくはⅤ章の木簡の解説と釈文を参照していただきたい）。

②木製品

171は曲柄又鍬の鍬身で、アカガシ亜属の板目材を使用している。残存長32.4㎝、軸部長20.0㎝、笠幅9.6㎝、厚さ1.6㎝を測る。軸頭が造り出されておらず、未成品の可能性がある。

173～176は魚網の浮木と考えられ、両端に抉りのある板状と、細い棒の両端に穿孔された2型式が見られる。いずれもスギ、ヒノキなど、気乾比重0.4前後の軽量材が使用されている。

177～179は端部に抉りのある丸材を用いた錘と考えられる。アカガシ亜属、ムクロジなど、気乾比重が0.9前後の重量材が使用されている。

180，181，184は祭祀具である。180は斎串で、全長20.1㎝、幅1.9㎝、厚さ2.8㎜を測る。181は鏃形で、全長13.4㎝、刃部幅8.5㎜を測る。184はマツ属複維管束亜属製の舟形で、直径4.6㎝の丸材を用いている。下面を舟底形に削り出し、上面には上部構造物を表現する。

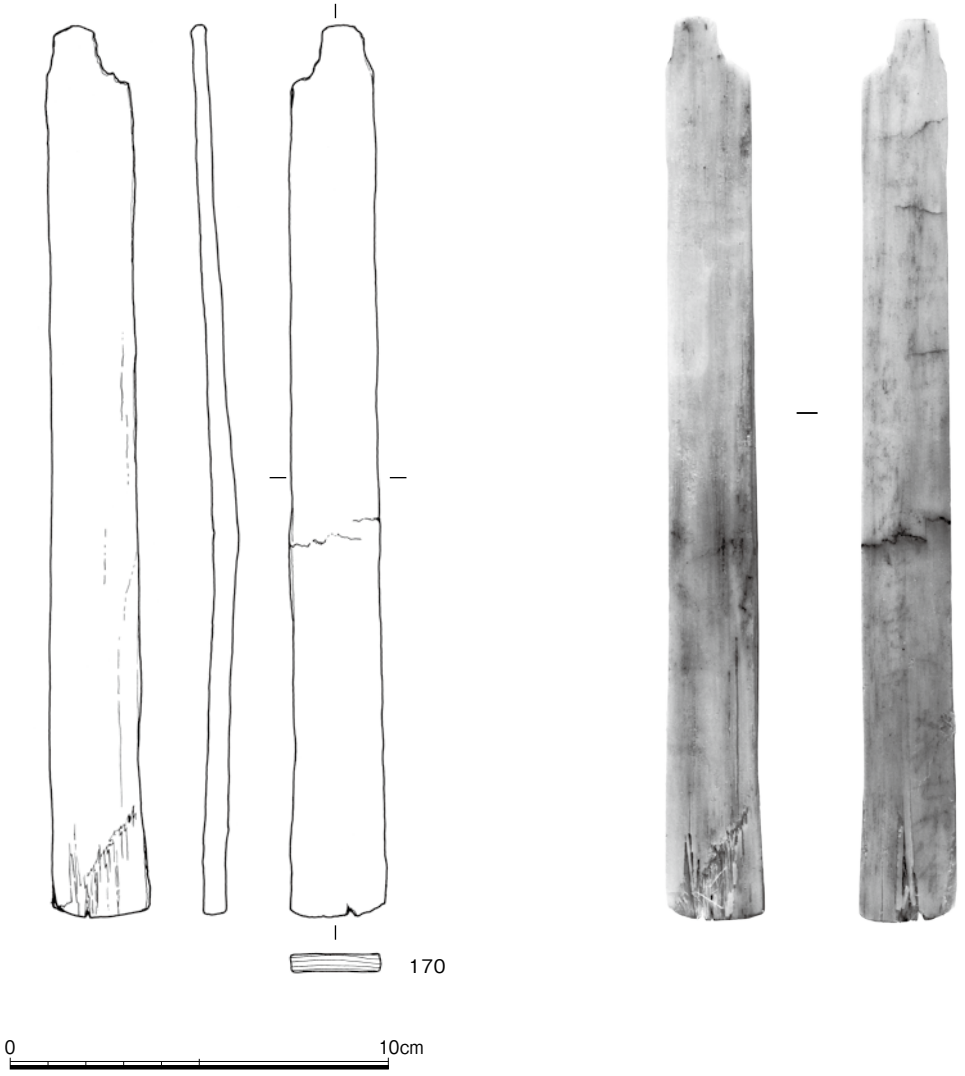


fig. 95　B80-A区出土木簡

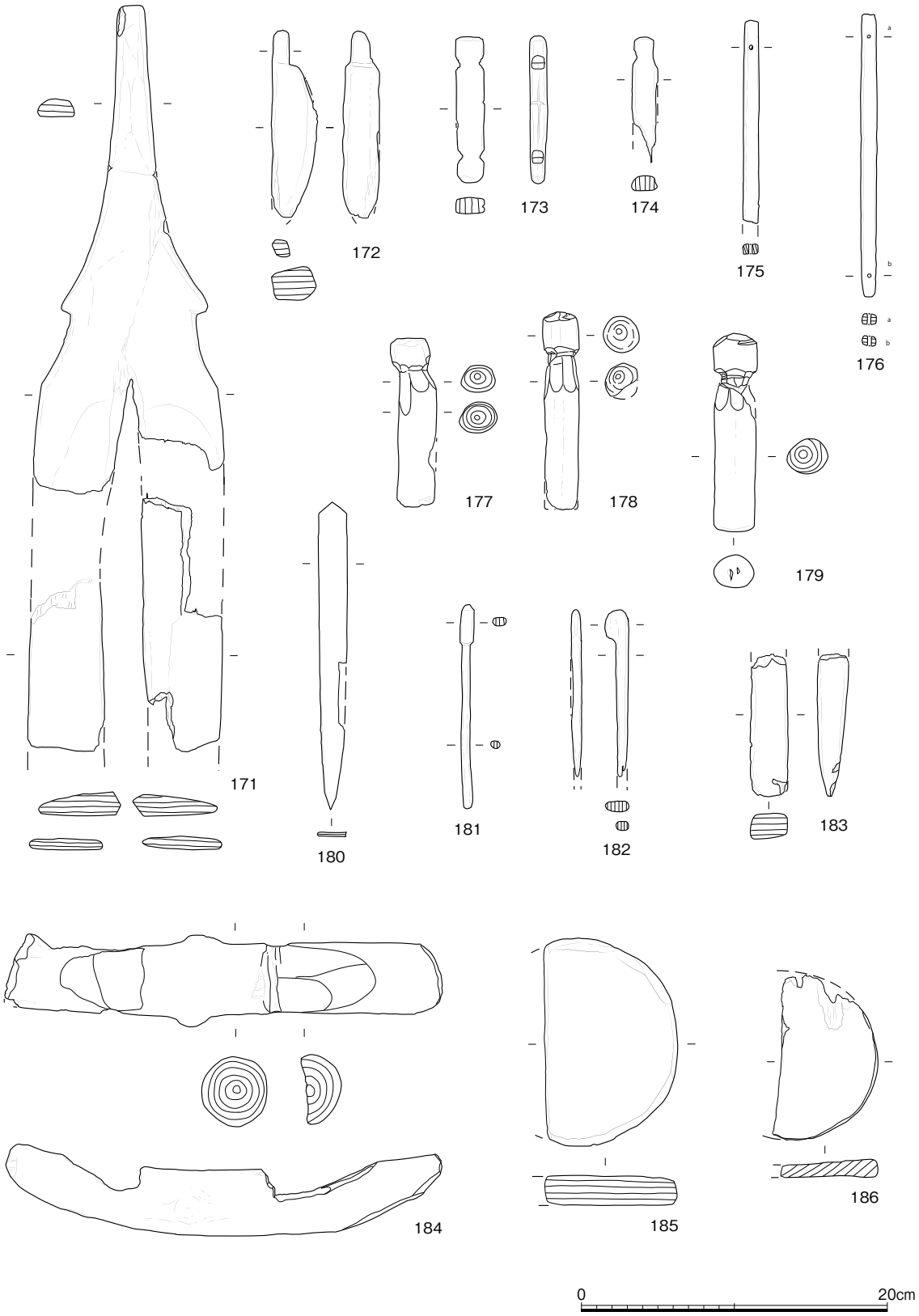


fig. 96　B80-A区出土木製品

B80-B区

立地

当該区は大半が湿地で、北東側のごく一部が浜堤にあたる。B80-A区と同様に湿地と浜堤が入り組んだ複雑な地形の部分であると判断される。

基本層序

盛土、近代の耕作土下に中世耕作土が残る。以下は湿地堆積物で、最上層は淡黒灰色シルト、上層は黒褐色シルト、中層は黒色砂質シルト、その下に部分的に堆積する層を黒色シルト混灰色細砂、下層は黒色シルトである。それ以下は細砂・粗砂層が堆積する。

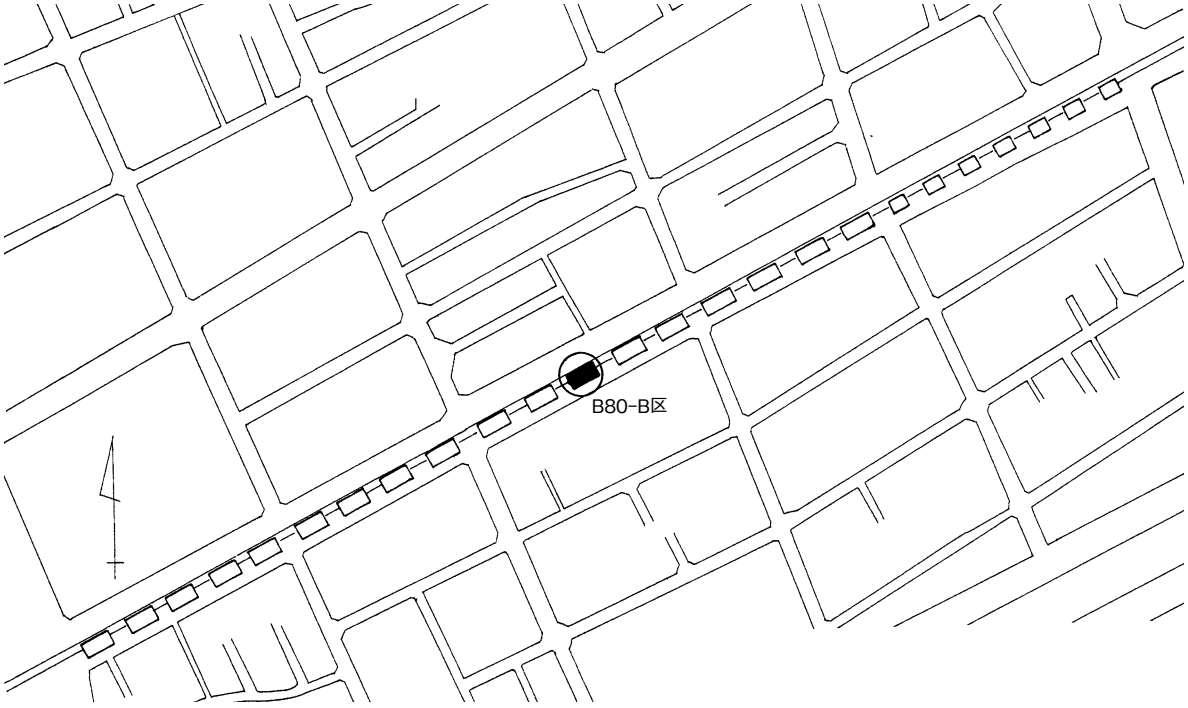


fig. 97　B80-B区位置図

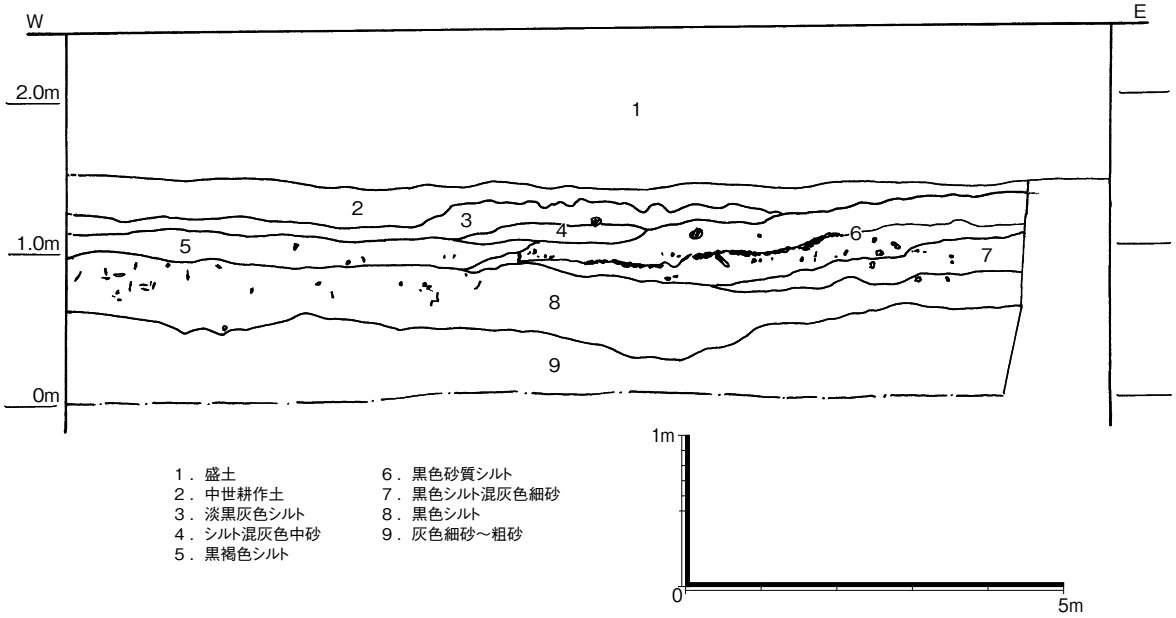


fig. 98　B80-B区北壁断面図

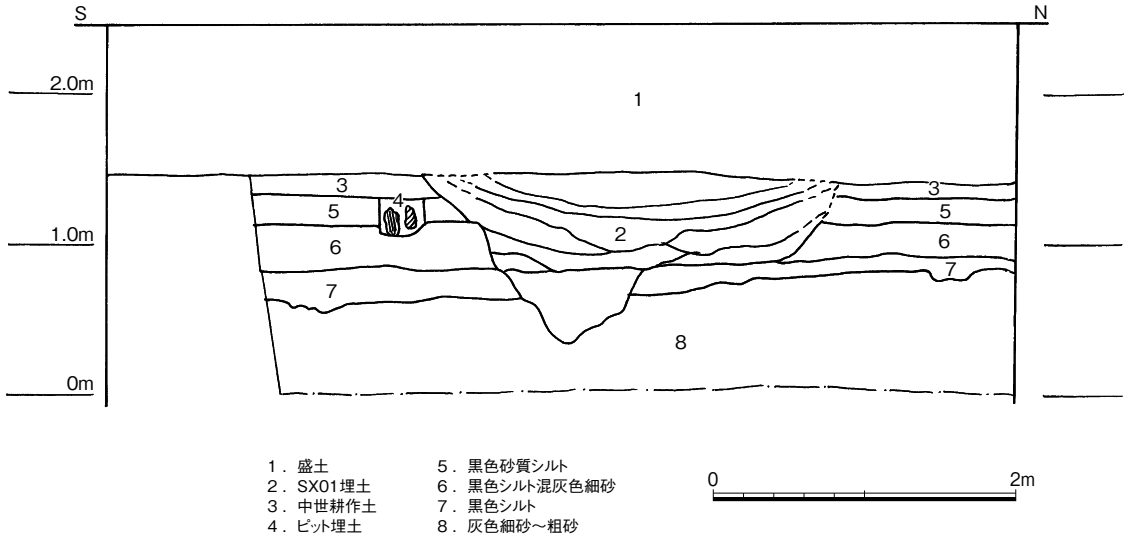


fig. 99　B80-B区東壁断面図

杭・柱穴・近世の土坑

北東端の浜堤上には柱穴・ピット、湿地との境目には杭が打ち込まれている。柱穴・ピットは後述のB81-A区の遺構群に連続すると思われる。また、東側断面で確認された落ち込み（SX01）は奈良時代～近世の遺物を含み、二段に掘り込まれて下段が集水に適した形状からみて近世の溜井と判断される。

湿地

基本層序の項で説明したとおり、湿地内堆積物は複数層に分けることができる。上層の黒褐色シルトから下層の黒色シルトまで、飛鳥時代～平安時代前半に至る遺物を大量に含んでおり、第12・14次調査のなかで遺物（土器・木製品・木屑等）の出土量が抜群に多いことは特記すべきことである。

特に浜堤が湿地に落ち込む斜面部分を中心に、大量の木屑（木端材）・木の枝などに混じって木製品・木簡が出土した。木簡以外の木製品として、斎串・人形・馬形・武器形、舟形木製品・琴柱等の祭祀具、木皿、杓文字、曲物等の食膳具、櫛、下駄等の装身具、浮木や木針等の漁労具、糸巻、整経ヘラ・綛かけ・桙の腕木・綜絖棒（綾棒）・緯打具の可能性のあるもの・木錘等の紡織具、墨壺・木釘・楔・箆等の木工道具、建築部材等多岐にわたる木製品が出土している。また、大量の木屑（木端材・斫り材）の出土は、近辺で盛んに木工作業あるいは建築工事が行われたことを示唆している。

出土遺物は、湿地最上層・上層（淡黒灰色シルト・黒褐色シルト）には概ね平安時代前半頃までの土器を含み、中層（黒色砂質シルト・黒色シルト混灰色細砂）には奈良時代後半の土器、下層（黒色シルト）には奈良～飛鳥時代の土器を含んでいる。

谷状の地形

湿地堆積土を除去すると、砂礫・粗砂層が南北方向の浅い谷状地形を呈しているのを確認した。B80-A区同様にラグーンインデット（澪筋）に相当する。

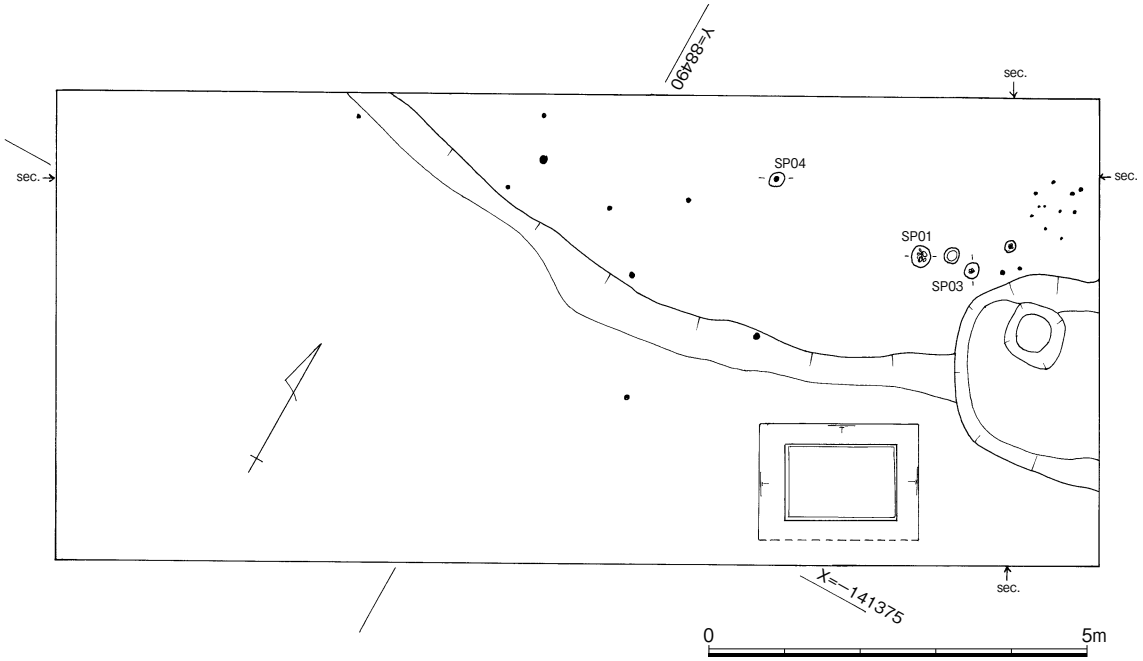


fig. 100　B80-B区杭・柱穴・湿地平面図

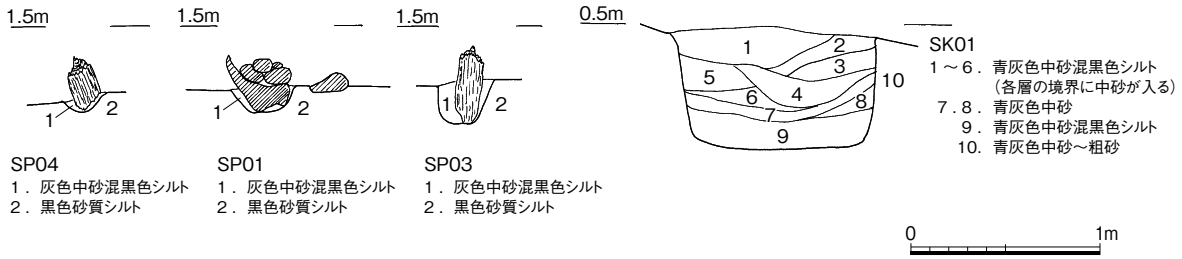


fig. 101　B80-B区柱穴・土坑断面図

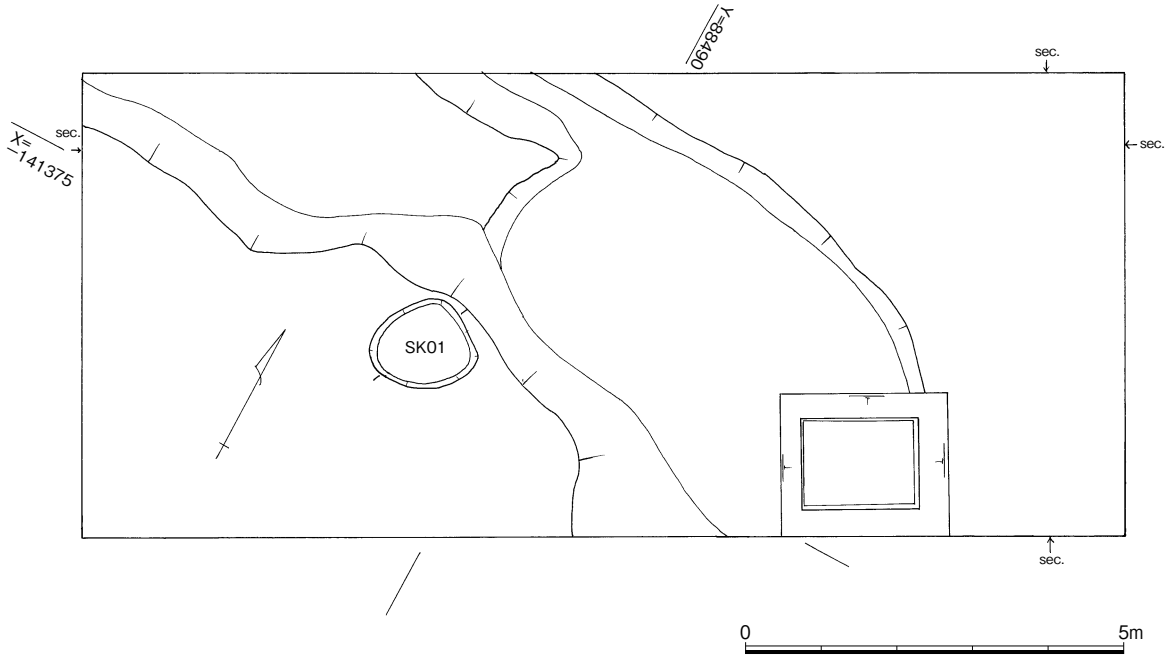


fig. 102　B80-B区谷状地形平面図

出土遺物

（1）中世耕作土・淡黒灰色シルト・黒褐色シルト上層出土遺物

187～191は中世耕作土出土遺物で、187，188は須恵器捏鉢である。189は青磁碗で、外面に鎬を持つ蓮弁文を掘り込む。190，191は白磁碗・皿で、190は外反し、191は玉縁状に肥厚した口縁端部を有する。

192～201は淡黒灰色シルト・黒褐色シルト上層出土遺物である。192，193，196は土師器坏で口縁部を屈曲させて、端部をつまみあげるいわゆる「ての字状口縁」の形態である。194，195は土師器坏で、194は直線的な口縁部で内面と端部に炭化物が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。195は口縁端部内面に明瞭な段を設ける。197は土師質で、土馬の脚部の可能性があるが明らかではない。

198～201は土師器甕で、口縁部は外反するが、端部に個体差がある。外面はハケ目調整するものが多い。

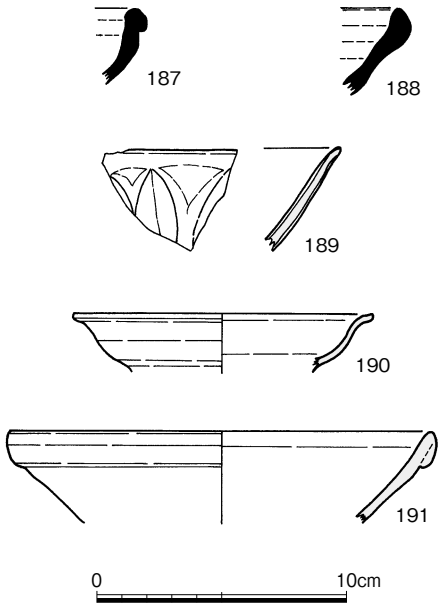


fig. 103　中世耕作土出土遺物

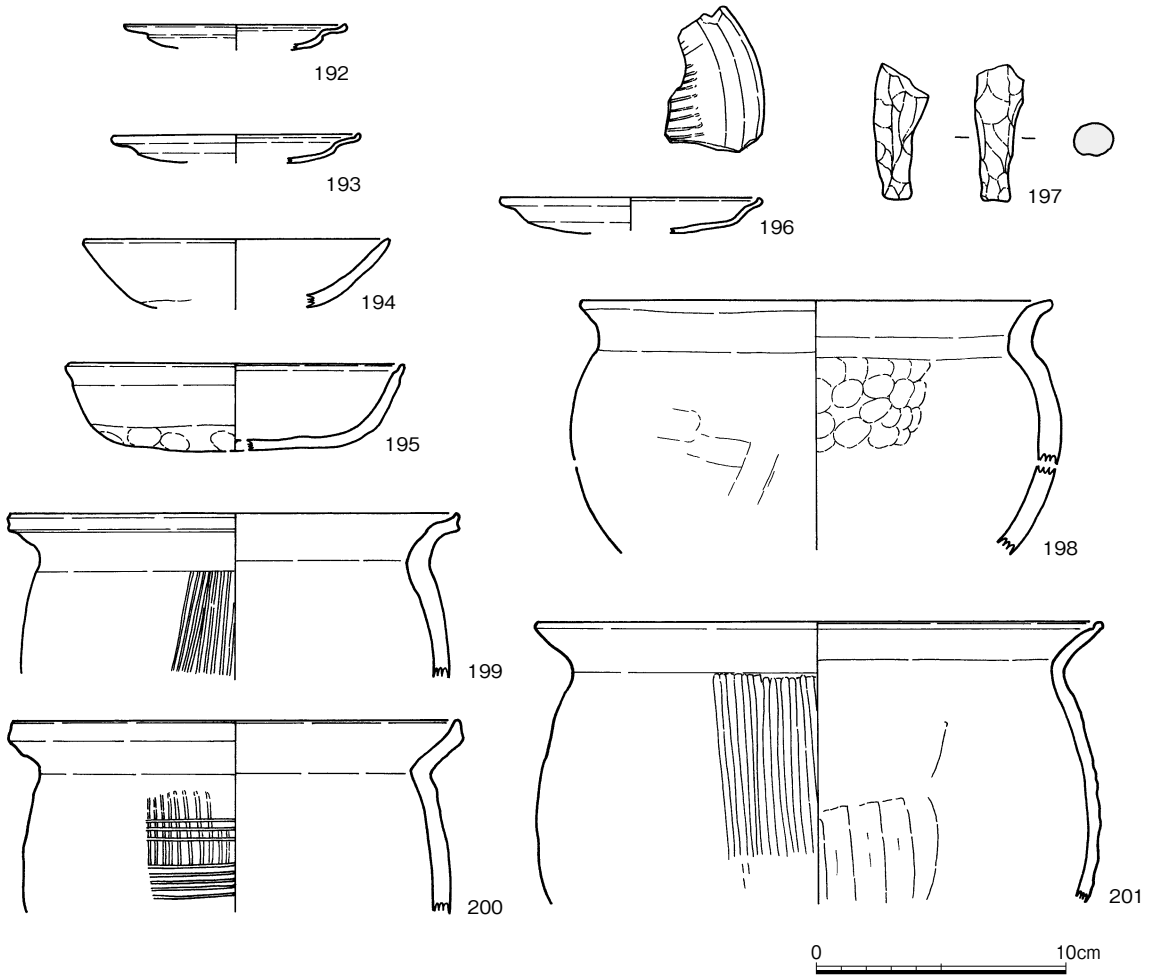


fig. 104　淡黒灰色シルト～黒褐色シルト上層出土遺物

(2) 黒褐色シルト出土遺物

①土器・陶器

230～234，242～251は須恵器である。230～234は坏蓋で、扁平なつまみを有する。

235，236，238～241は緑釉陶器で241は胎土が須恵質、その他は土師質である。237は灰釉陶器である。244～246は坏底部、247は広口壺の底部と思われる。246と247は底部が糸切り底である。248～251は甕で、口縁部を波状文で飾るもの。無文のものがある。

②墨書土器

「大垣」の墨書きやその可能性があるもの(202，203，205，212～218，220，226)、「門・拝・津」等の可能性があるもの(204)、「殿□」と書かれたもの、「驛」またはその可能性があるもの(223，207)、「反・及」等の可能性があるもの(208)、「交」の可能性があるもの(211)、「大□□」

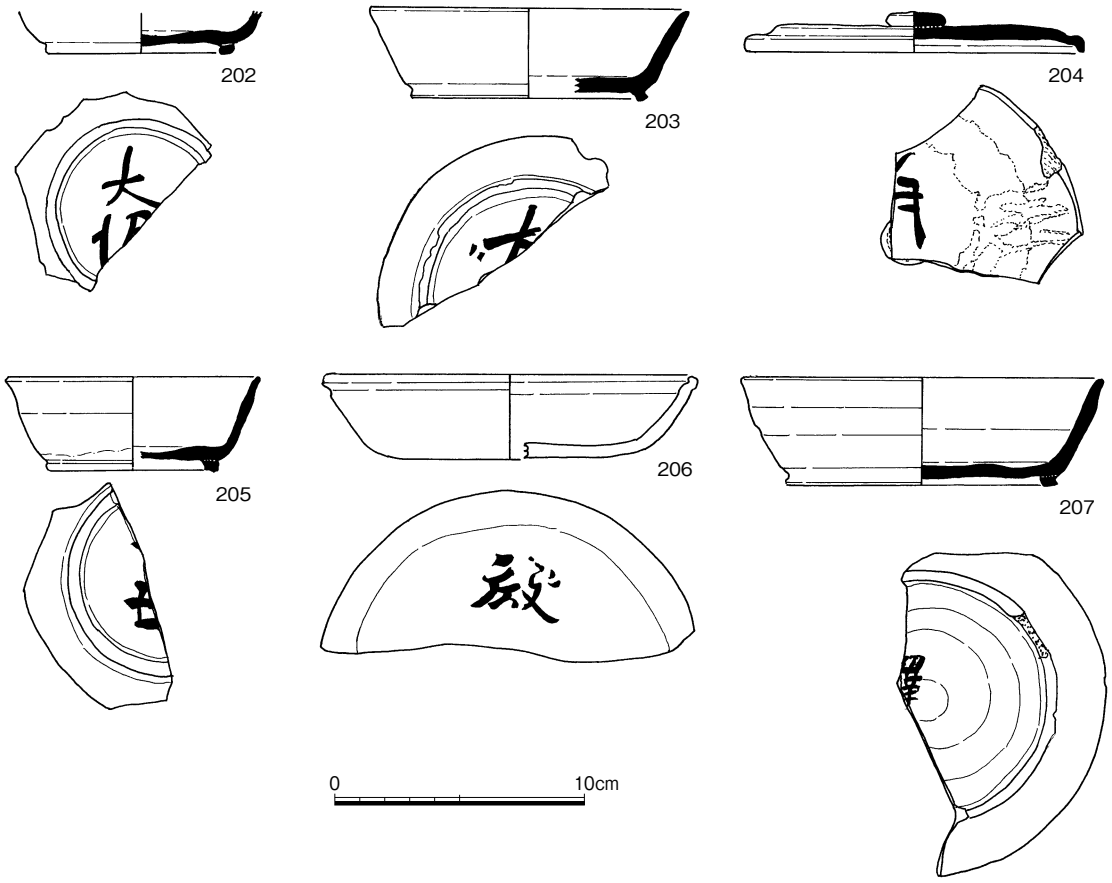


fig. 105　黒褐色シルト出土墨書土器(1)

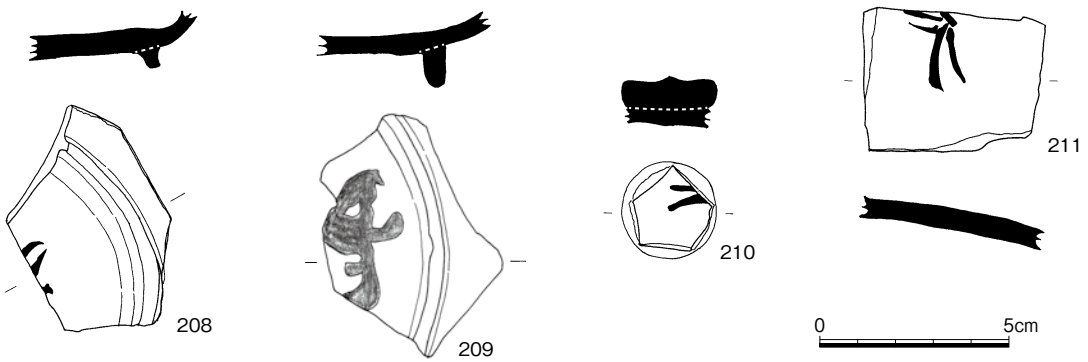


fig. 106　黒褐色シルト出土墨書土器(2)

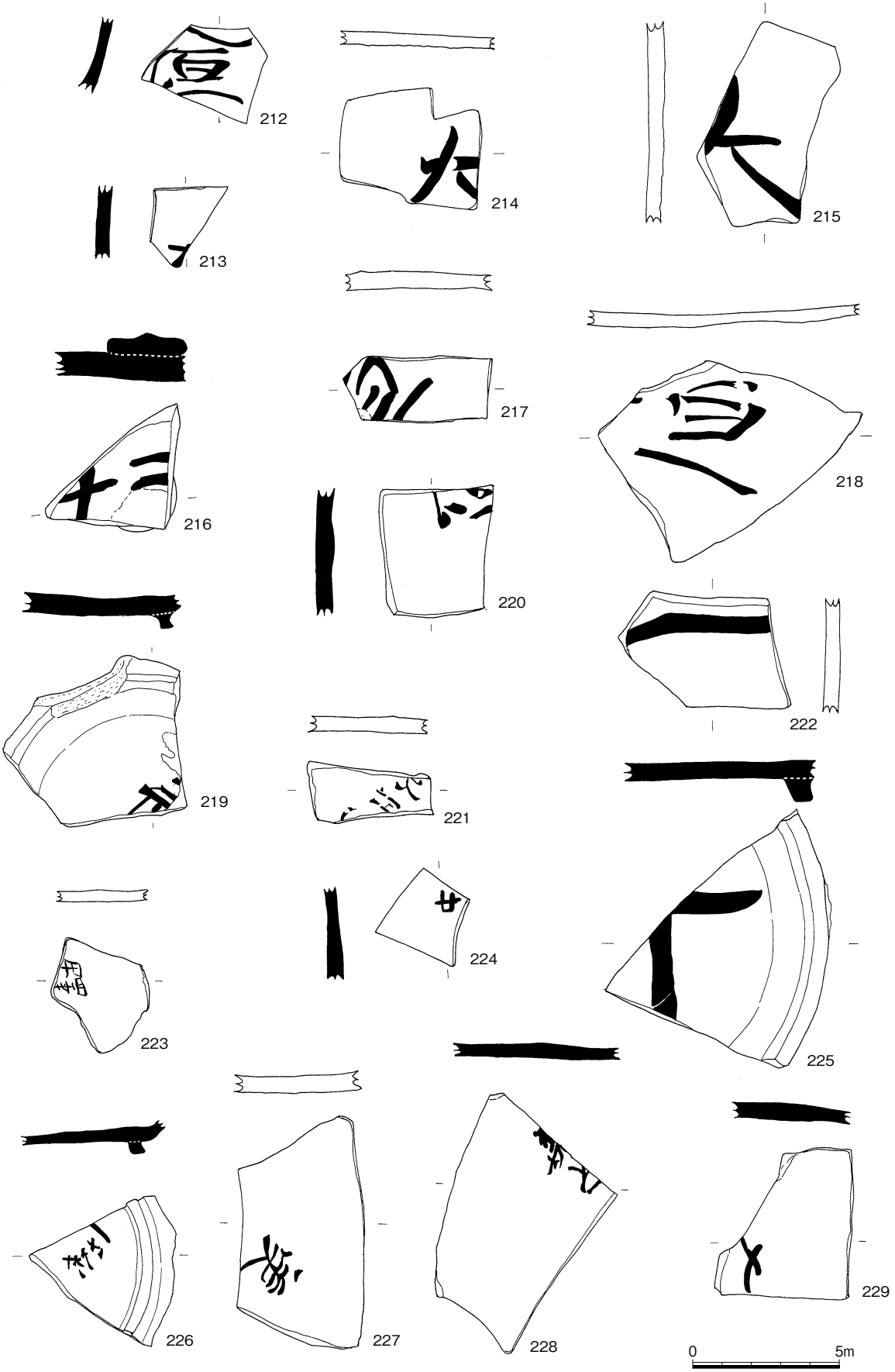


fig. 107　黒褐色シルト出土墨書土器（3）

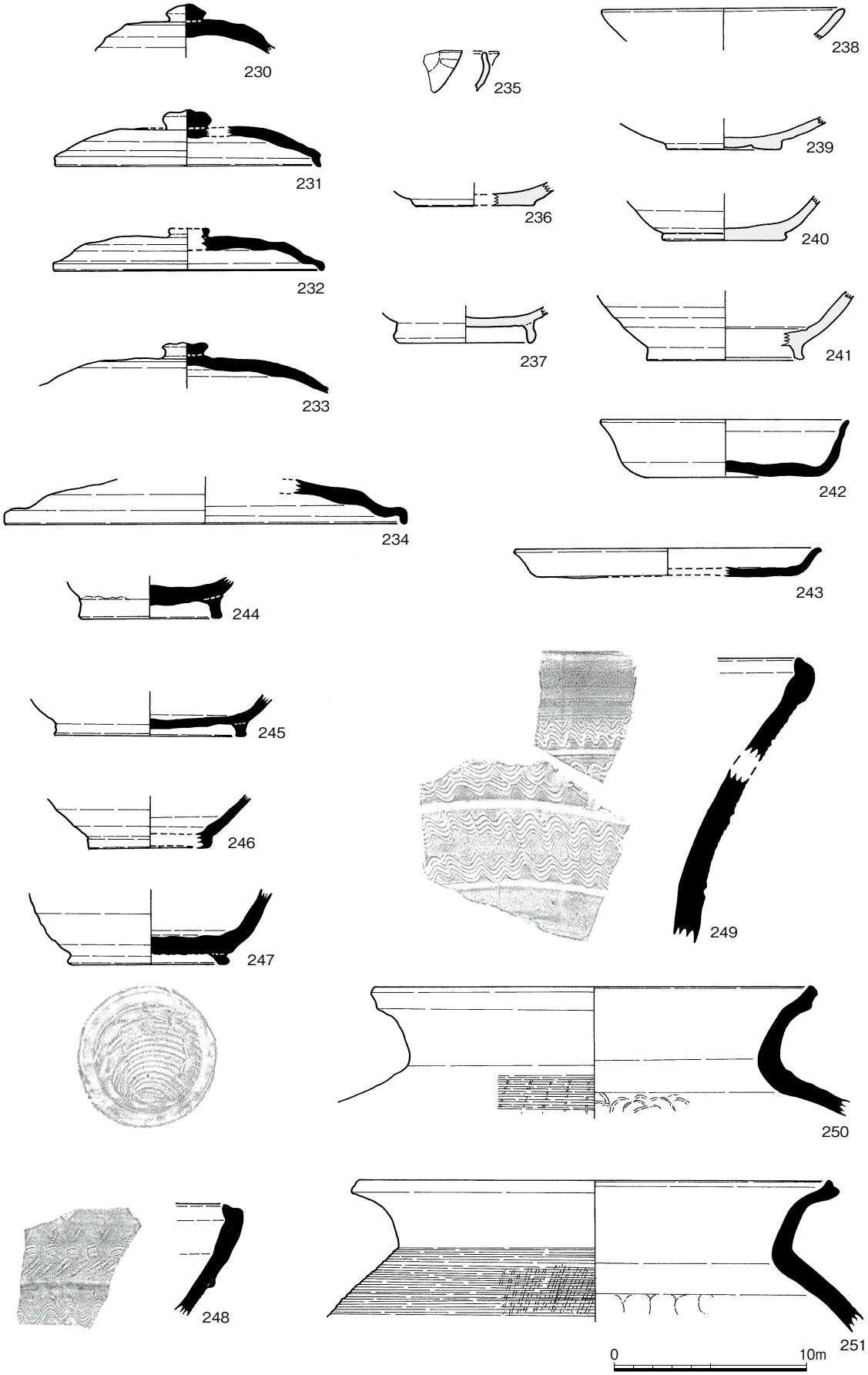


fig. 108　黒褐色シルト出土土器・陶器

と書かれたもの(221)、「女・甘」の可能性のあるもの(224)、「美□」と書かれたもの(227)、「□足」と書かれた可能性のあるもの(228)等がある。

③転用硯

252～257，259～261は須恵器、258は灰釉陶器である。坏蓋の内面を硯として利用しているものが多く、墨痕がよく残っている。260は薬壺の蓋ではないかと思われる。

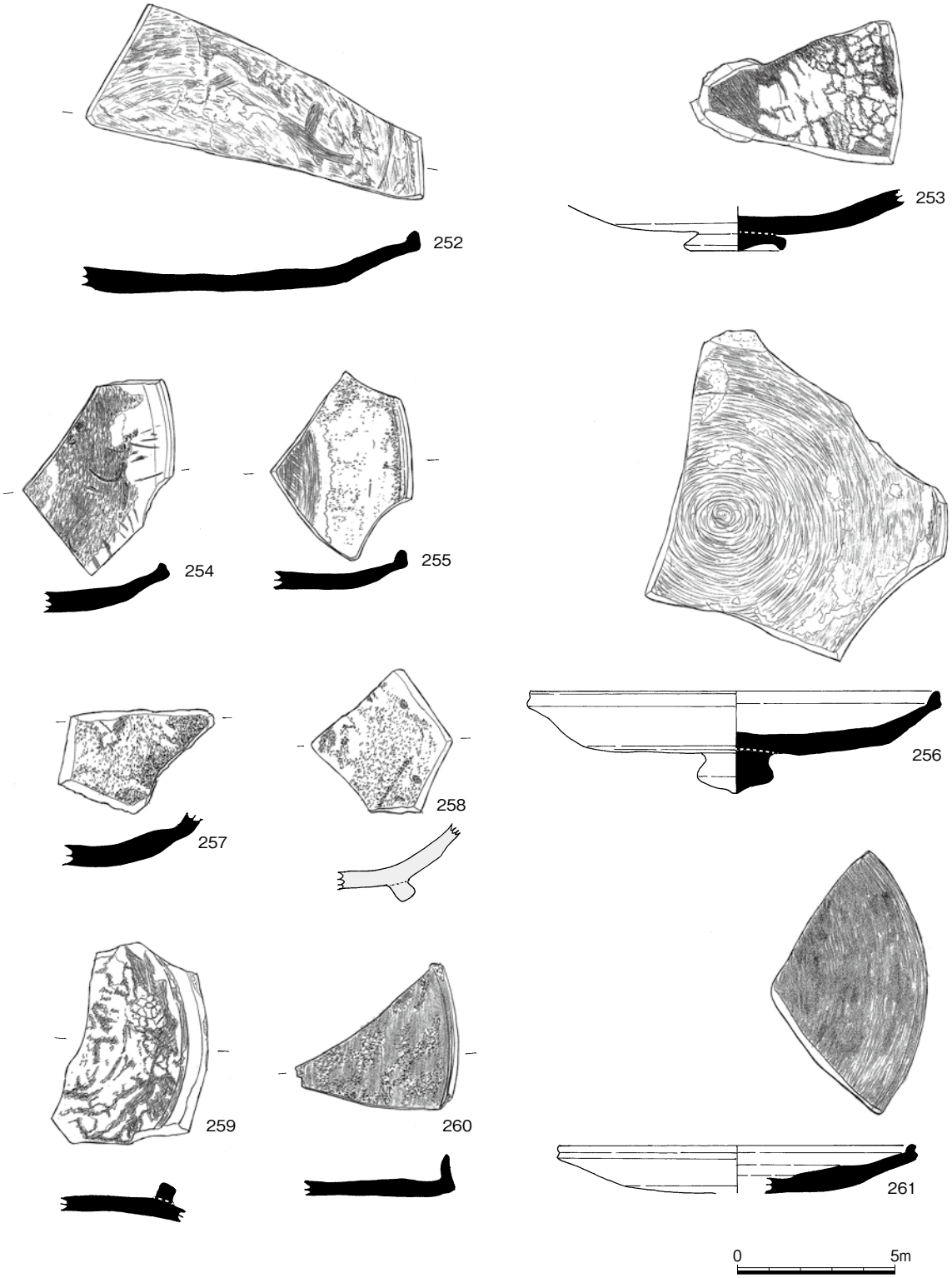


fig. 109　黒褐色シルト出土転用硯

(3) 黒色砂質シルト出土遺物

①土器・陶器

262～276は土師器で、262～266は坏で口縁端部内面に段を有する。262，263の底部はヘラ削り、265，266は指頭圧痕を残し内面には放射状の暗文を施す。270は高坏脚部で外面は縦方向のヘラ削りを行う。267～269は口縁端部内面に段を有する盤である。272～274は小型の甕で、口縁端部をつまみ上げる。275～276の胴部は縦方向のハケ目、口縁内面は横方向のハケ目を

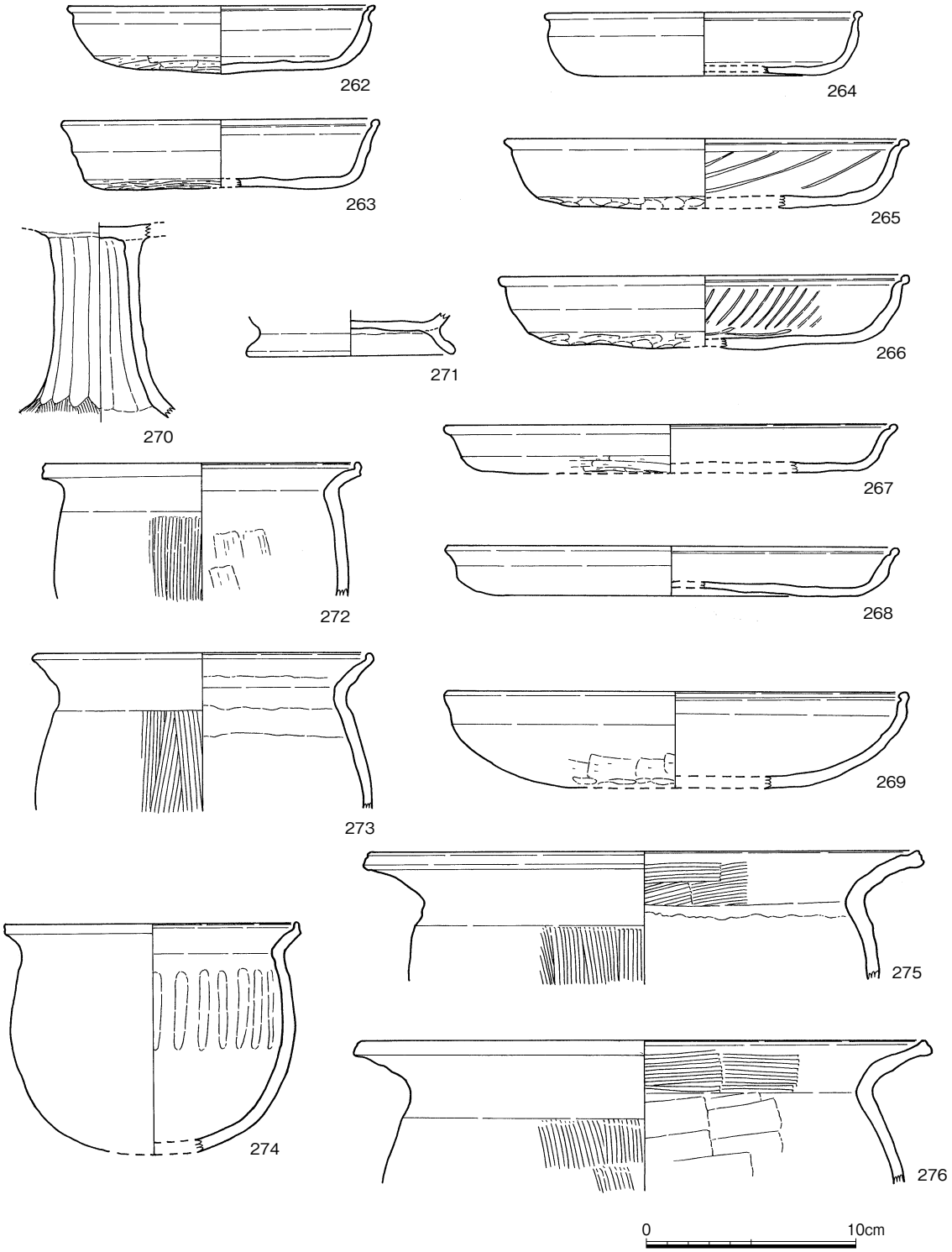


fig. 110　黒色砂質シルト出土土師器

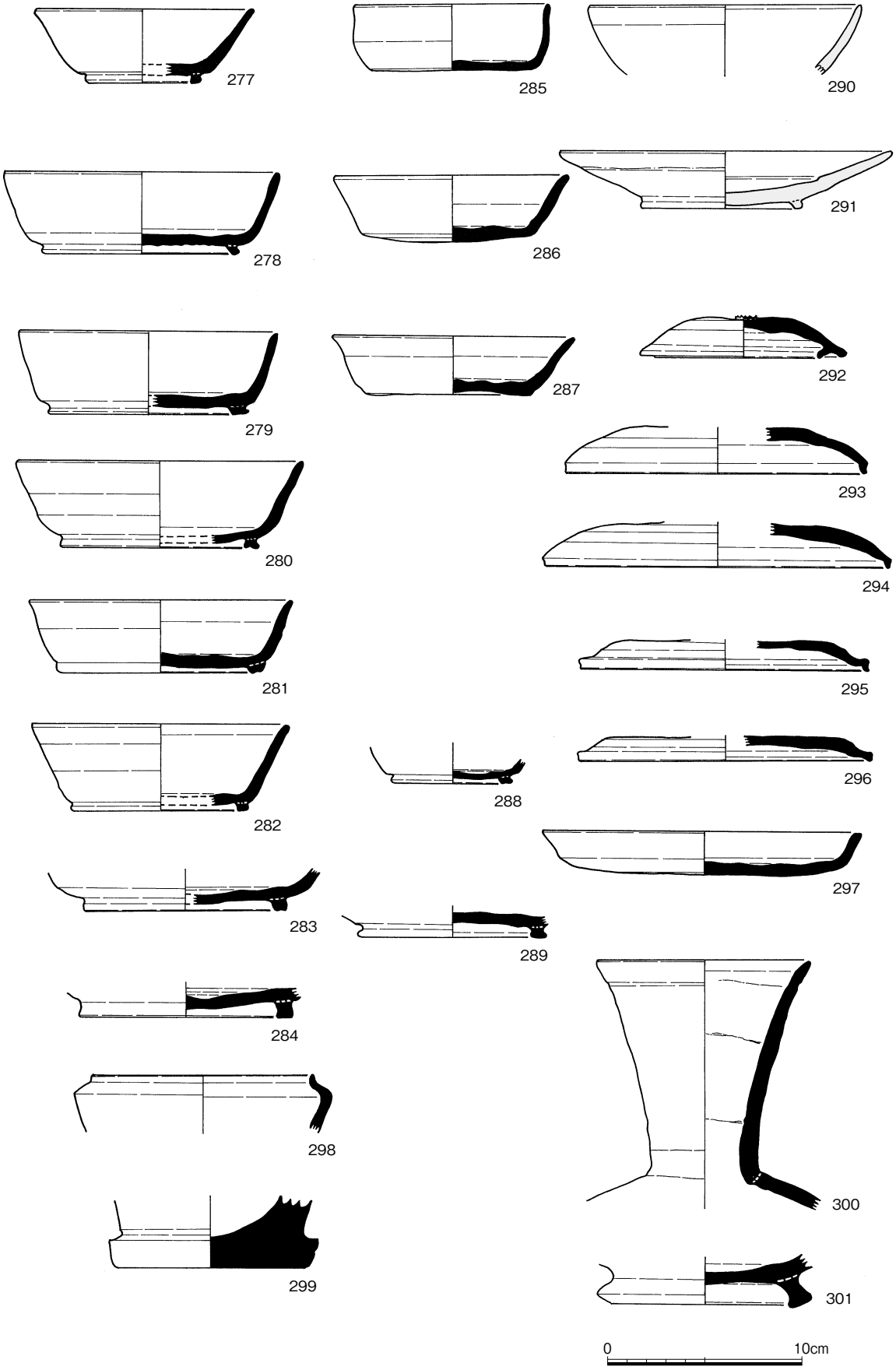


fig. 111　黒色砂質シルト出土須恵器・陶器

施す。

277～289，292～306は須恵器である。277～284，288、289は高台を有する坏で、口縁部が直立するもの(279)や外反するもの(277)がある。285～286は無高台の坏で、口縁部が直立するもの(285)、外反するもの(286，287)がある。292～296は坏蓋で、内面に反りを持つもの(292)、口縁端部に屈曲を持つもの(295，296)がある。298は短頸壺，300，301は長頸壺である。297は擂鉢の底部分で、内底面が摩滅している。302～306は甕で、頸部に波状文を施すもの(302，303)無文のもの(304～305)がある。口縁端部は肥厚するもの(303)や外反し端面をもつもの(306)等がある。290は胎土が土師質の緑釉、291は灰釉皿である。

②墨書土器・絵画土器

308は「新大」と書かれている。309，328，329は「驛」または「驛」の可能性が高い文字である。310，313，314～326は「大垣」または「大」の可能性が高い墨書である。この内318は転用硯としても使用されている。311は「菟・充・克・老」等の文字の可能性がある。これも転用硯として利用されている。327は「□□官」である。330は「頁」のようにみえるが意味不明である。331はつまみ上面に文字が書かれているが読み取れない。332は「弓□」である。333は「麻・栄」様の文字が書かれているが確定ではない。334は「小・禁」等の文字が充てられる可能性がある。335は「大」の可能性がある。336～338は筆ならしの墨痕である可能性が高い。

339～343は絵画土器またはその可能性のあるものである。340は顔のようなものが描かれ、343には人物の顔から肩口の正面像、背景には楼閣状のものが描かれている。341，342は飛雲文状のものが描かれているが、筆ならしの可能性もある。

307～315，318，320～322，326～332，335，336，338，340，343は須恵器で、316，317，319，323～325，333，334，337，339，341，342は土師器である。

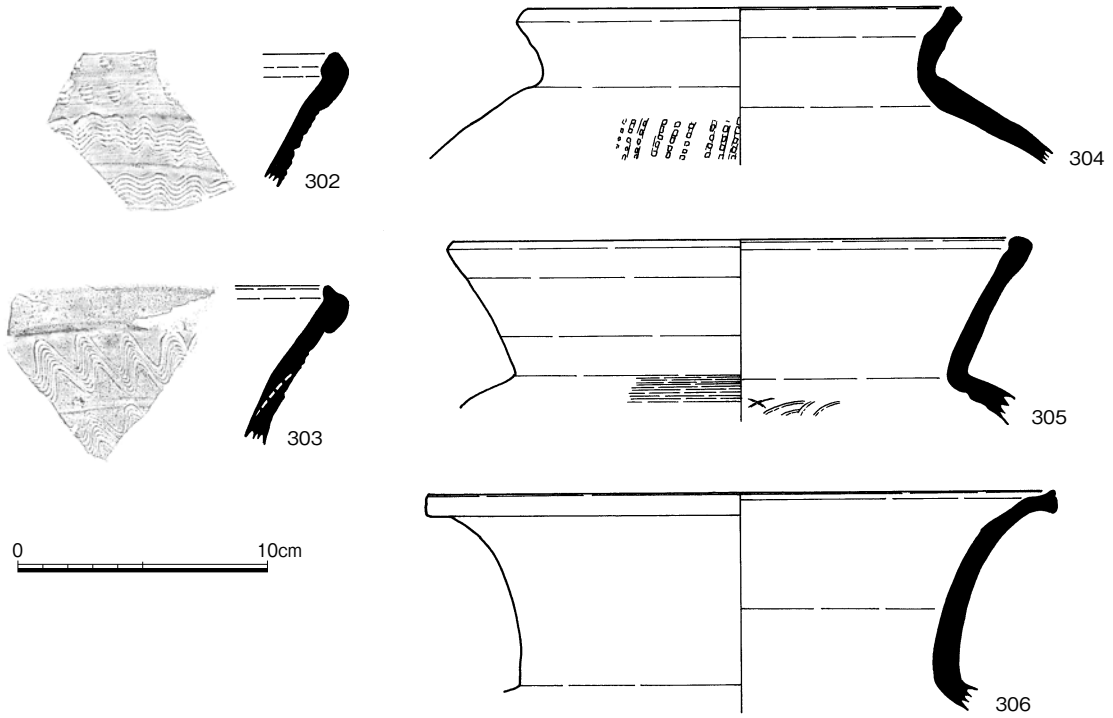


fig. 112　黒色砂質シルト出土須恵器

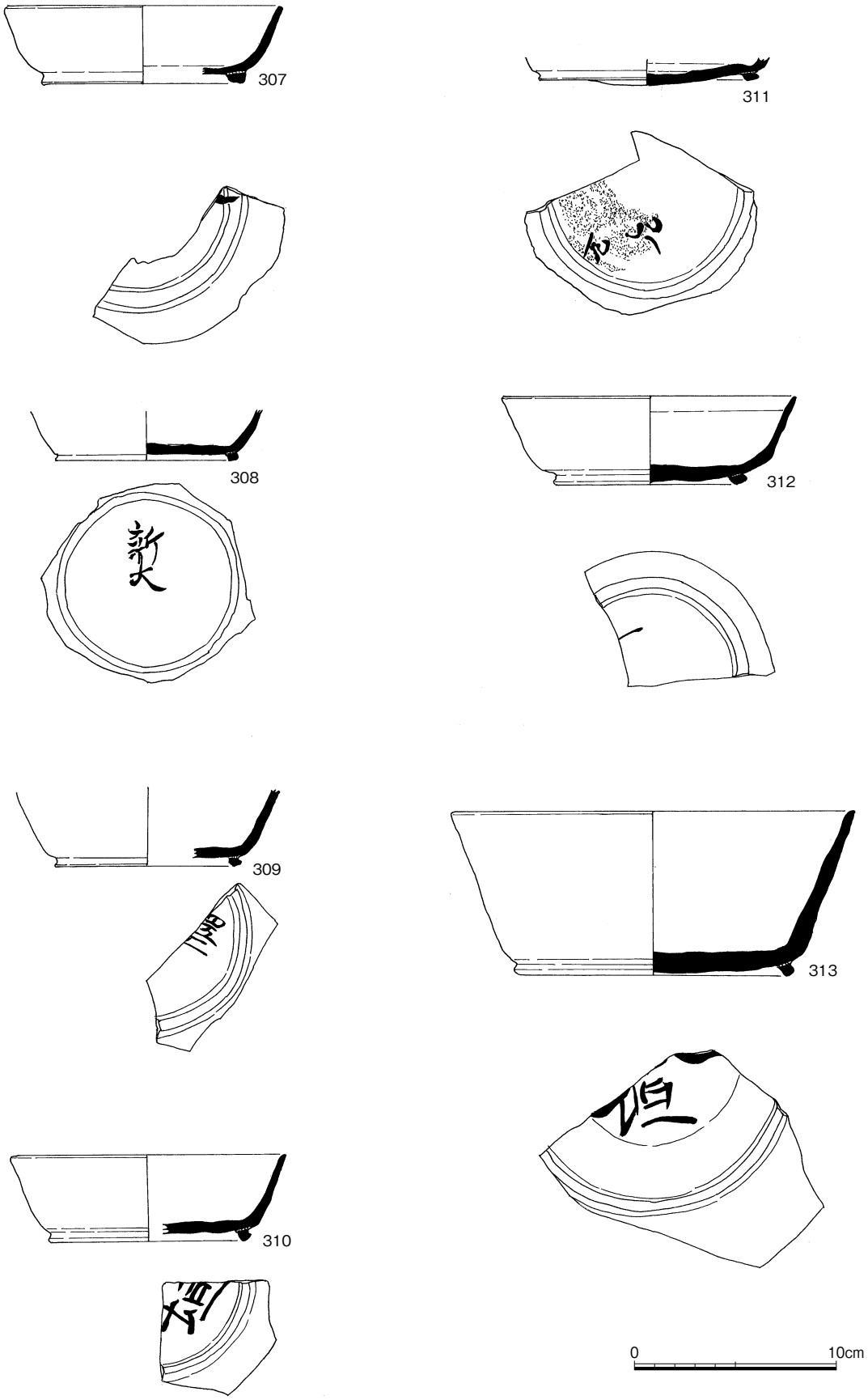


fig. 113　黒色砂質シルト出土墨書土器（1）

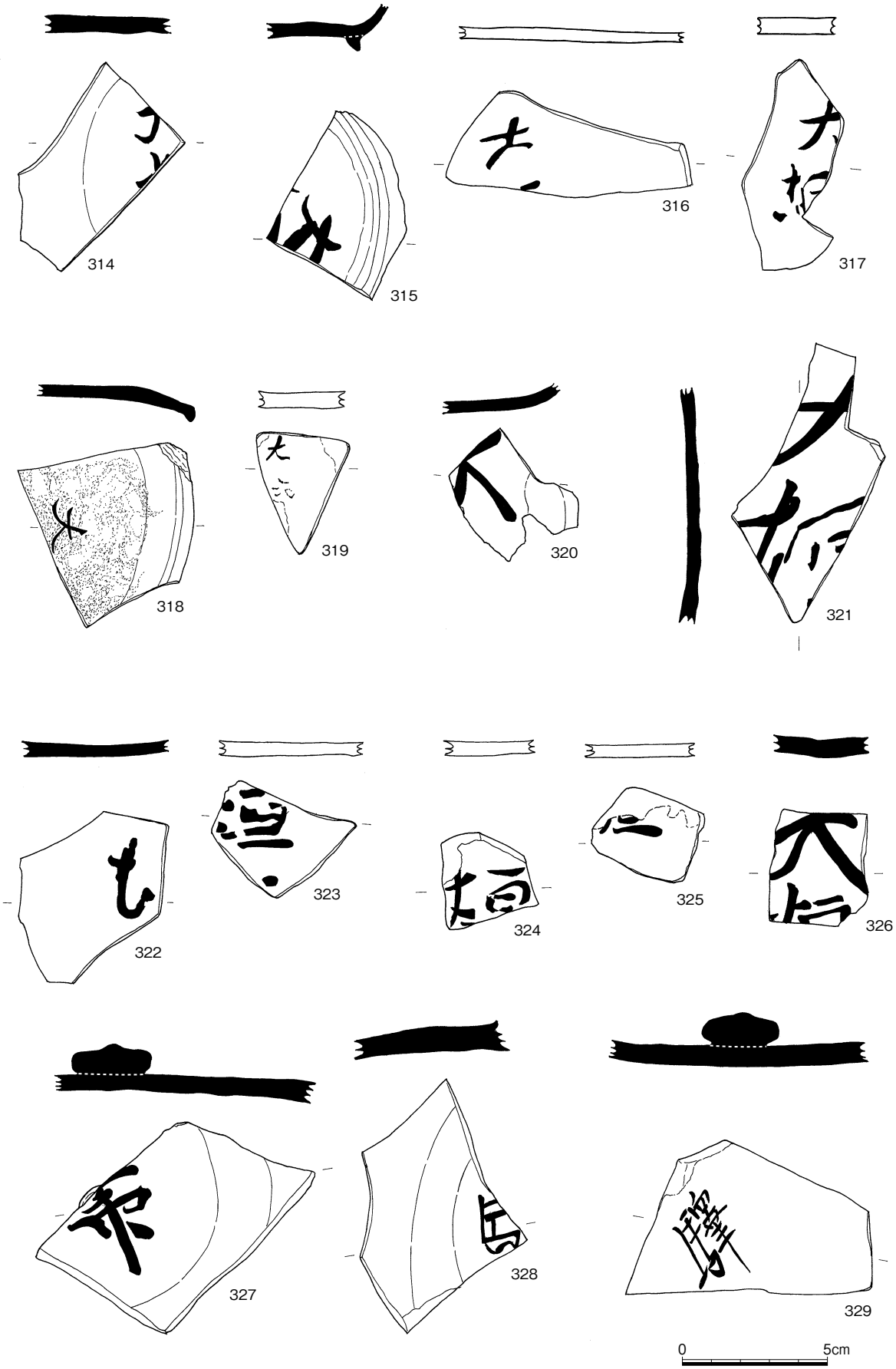


fig. 114　黒色砂質シルト出土墨書土器（2）

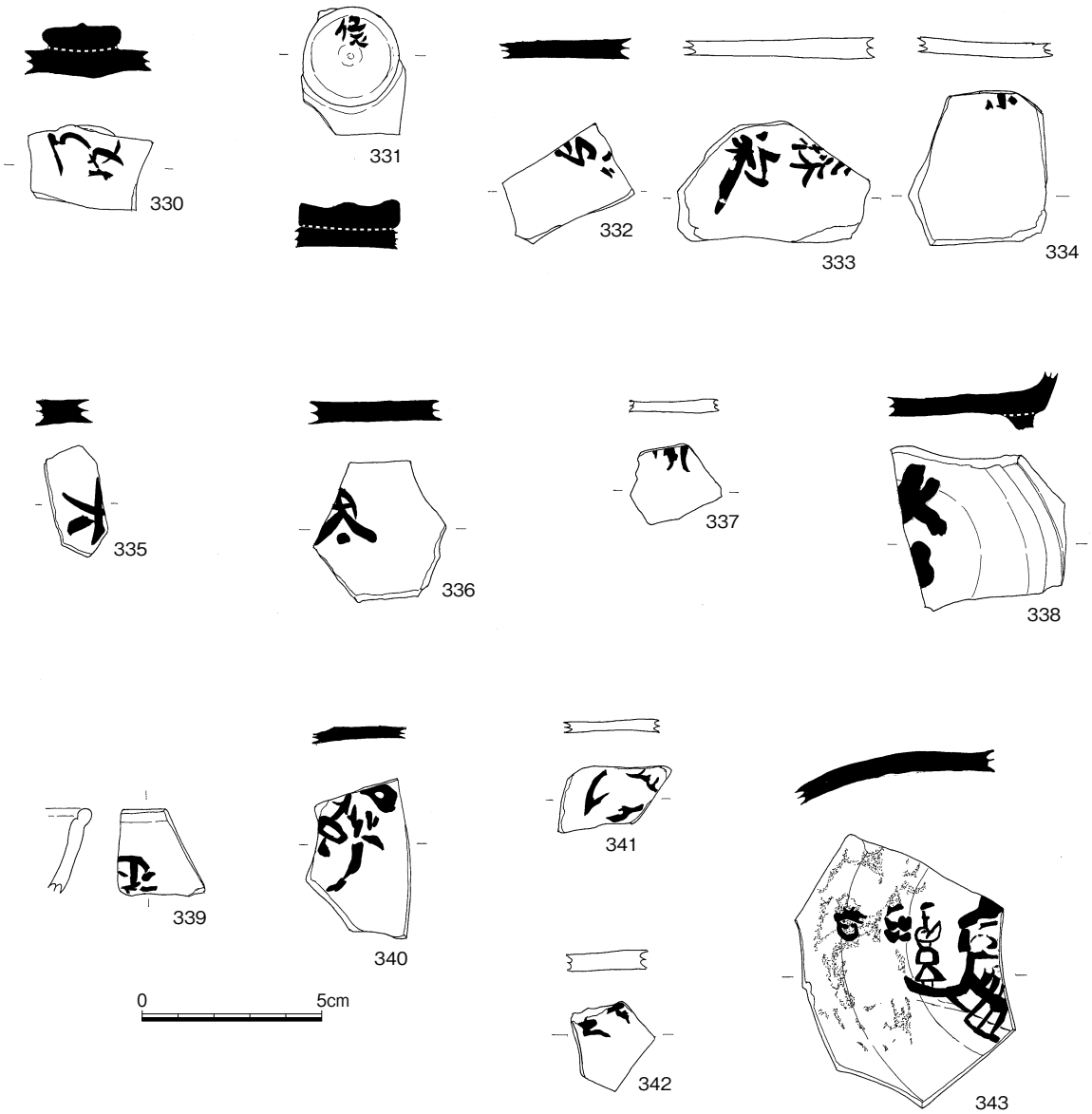


fig. 115　黒色砂質シルト出土墨書土器（3）

③転用硯

344～356は転用硯で、すべて須恵器である。348，351，352は高台付坏の外底面を硯面とし、その他は坏蓋の内面を硯面に転用している。それぞれ、墨の痕跡が明瞭に残り、一部には筆ならしの跡も認められる。

坏蓋はおそらく坏の口縁に内面を上向けて載せ、硯面として利用したと想定される。なぜ坏蓋を利用するかは明らかではないが、手近に数多くあり、転用が比較的容易であったこと。硯面を反転して蓋をすれば、塵埃の混入や、墨汁の乾燥をある程度防ぐことが可能であるためと考えられる。

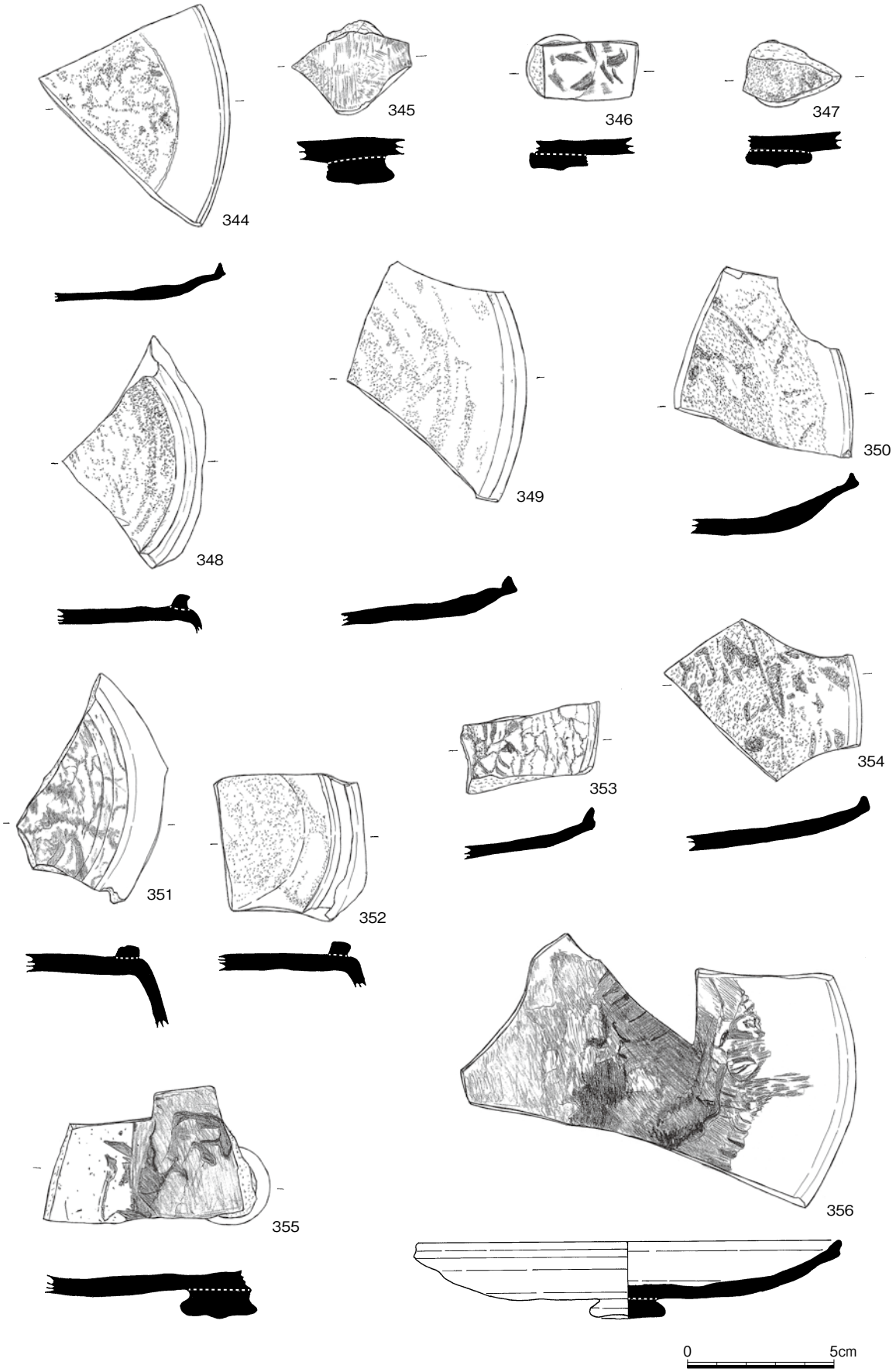


fig. 116　黒色砂質シルト出土転用硯

(4) 黒色シルト混灰色細砂出土遺物

①土器

黒色シルト混灰色細砂層は黒色砂質シルト層の下に堆積するが、調査区の東側の一部分に堆積する層である。そのため遺物の出土量はさほど多くはない。

357～360は須恵器、361～367は土師器である。357は坏蓋、358は坏で直立した胴部に口縁部は外反する。359は坏蓋、360は坏で、いずれも飛鳥時代に属すると考えられる。361は口縁端部内面に段を有する。362, 363は盤で、口縁端部内面に段を有し、放射状の暗文を内面に施す。364～367は甕で、大小の規格があり、大型のものの胴部外面は縦・斜め方向のハケ目、口縁部内面は横方向のハケ目、胴部内面はハケ目、指頭圧痕を残す。

②墨書土器

368～370, 372は須恵器、371は土師器である。368は「垣」、369は「□［大ヵ］垣」、370は「頁」様の文字を書くが明確でない。371は「上」状の文字が書かれているが墨痕や筆ならしの可能性もある。372は「□［垣ヵ］」と思われる文字の残画がある。

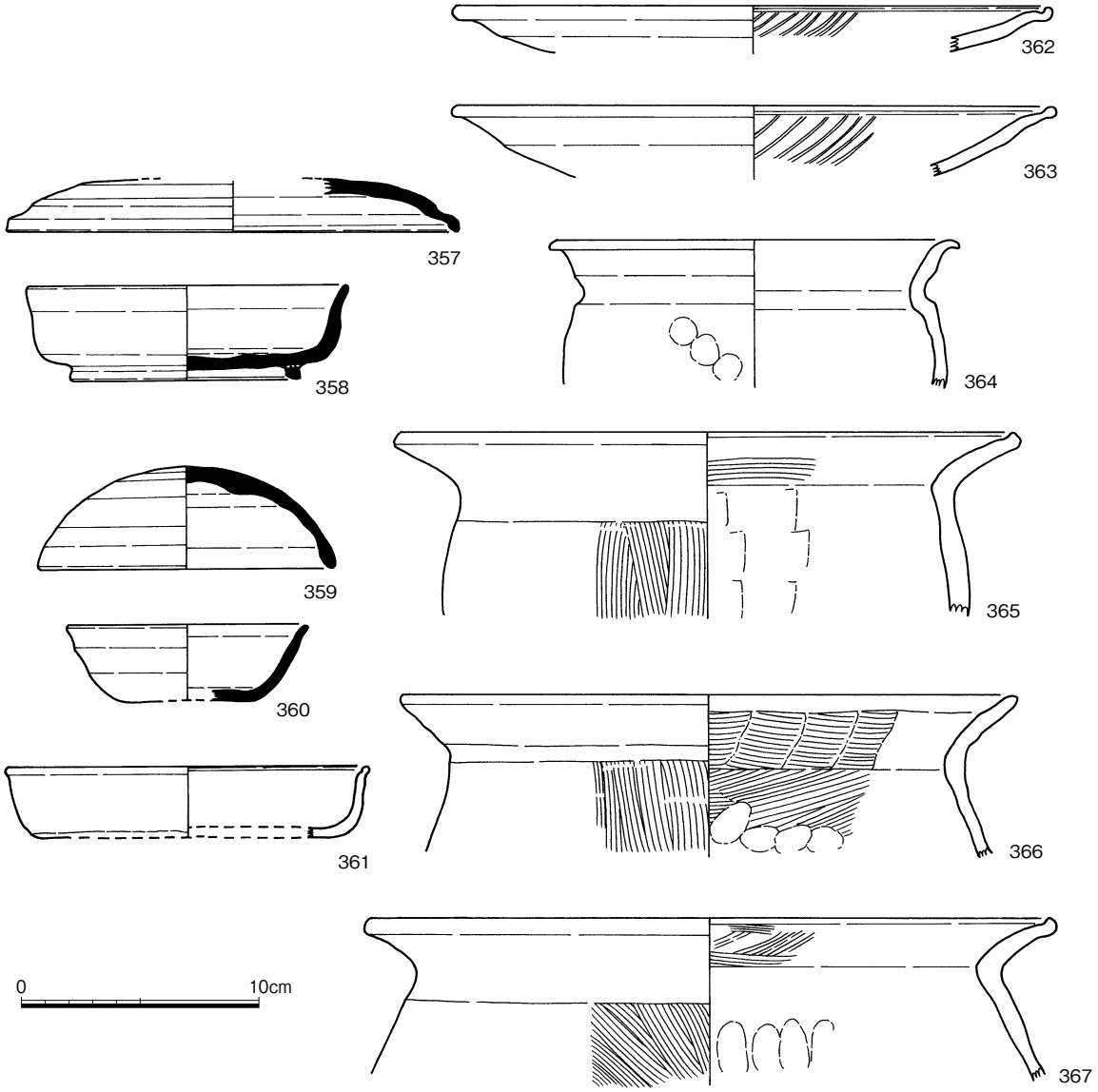


fig. 117　黒色シルト混灰色細砂出土土器

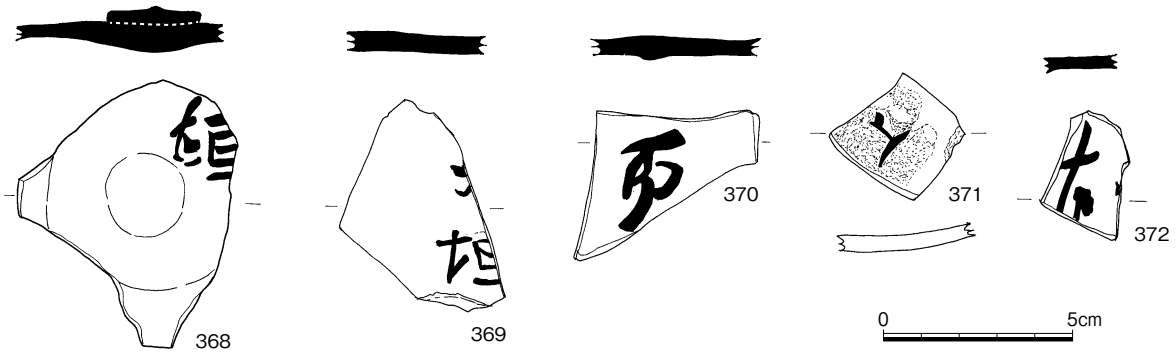


fig. 118　黒色シルト混灰色細砂・SX01出土墨書土器

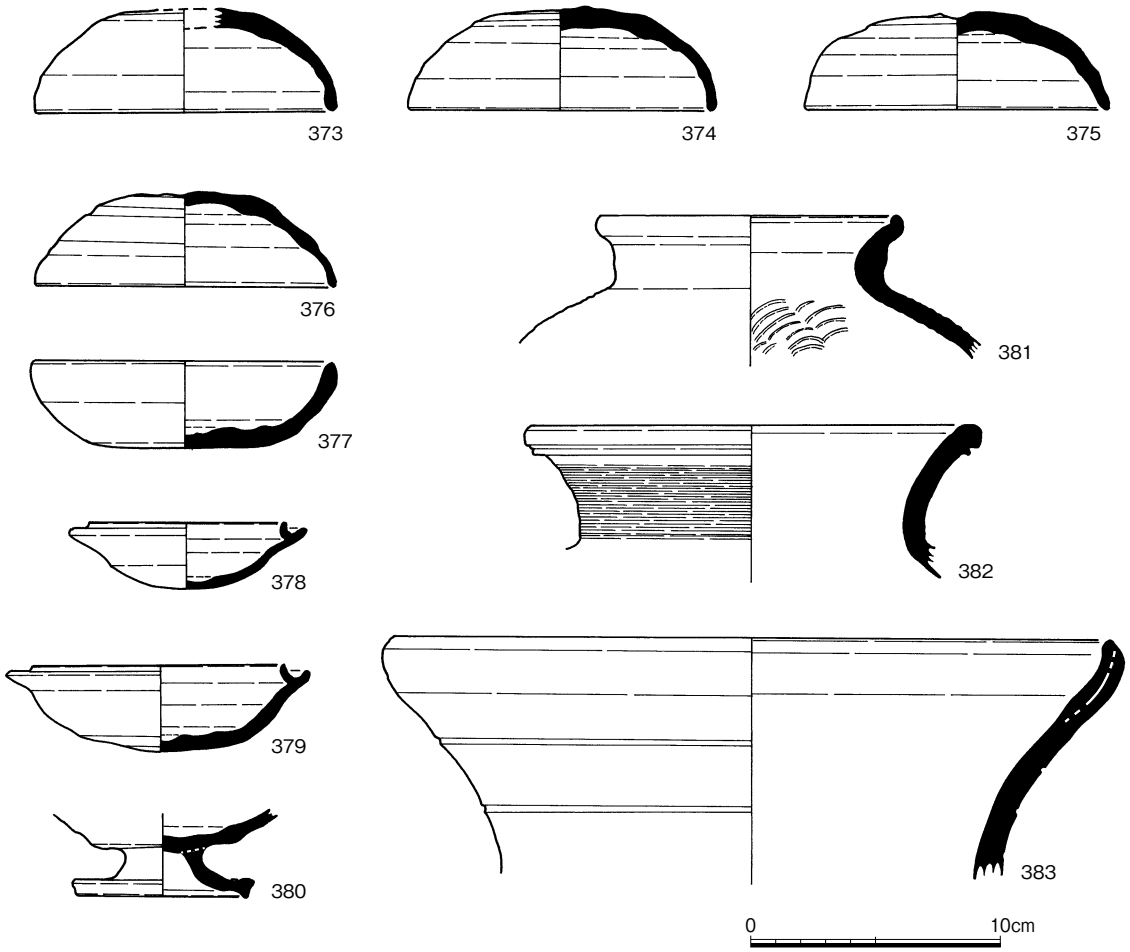


fig. 119　黒色シルト出土須恵器（1）

（5）黒色シルト出土遺物

①土器

373～396は須恵器である。373～376は坏蓋で口縁部は横ナデで成形し、天井部は回転ヘラ削りを行う。377～379は坏で378，379は短い立ち上がりを有する。380は脚部の短い高坏である。381～383は甕で大中小の形態があり、382の頸部はカキ目調整、383は2条の沈線で加飾する。これらは概ね飛鳥時代頃のものと判断される。

384～385は坏蓋で扁平な宝珠つまみを持ち、端部を屈曲させて下方に垂下させる。387～389は高台付の坏で、389は焼け歪んでいる。390，391は鉢と思われる。392は無高台の坏で口縁は直線的に立ち上がる。393は短頸壺で胴部は球形で短い直立した頸部を持つ。394～396は甕で、394は口縁端部を肥厚させる。395は直線的な口縁部に2条単位の沈線帯の間にノの字形の刻みを入れている。396は頸部に4条の波状文を施している。

397～405は土師器である。397，398は坏で、397の外面には指頭圧痕が残る。398は外面はヘラ削り、内面には放射状の暗文を施す。399は盤の蓋の可能性がある。天井部はヘラ削り、内面には放射状の暗文を施す。400，401は坏で、口縁端部内面に段を有する。底部外面には指頭圧痕が残る。402，403は口縁部が内傾する坏である。404，405は皿・盤であるが、404は口縁部を内傾させ、405は口縁部で折り曲げて端部を丸くする。いずれも内面に放射状の暗文が残っている。406は高坏の脚部で、ヘラ削りによる面取りを行う。407は甕で、外反した口縁部に胴部外面は縦方向のハケ目、内面は横と斜め方向のハケ目を施す。

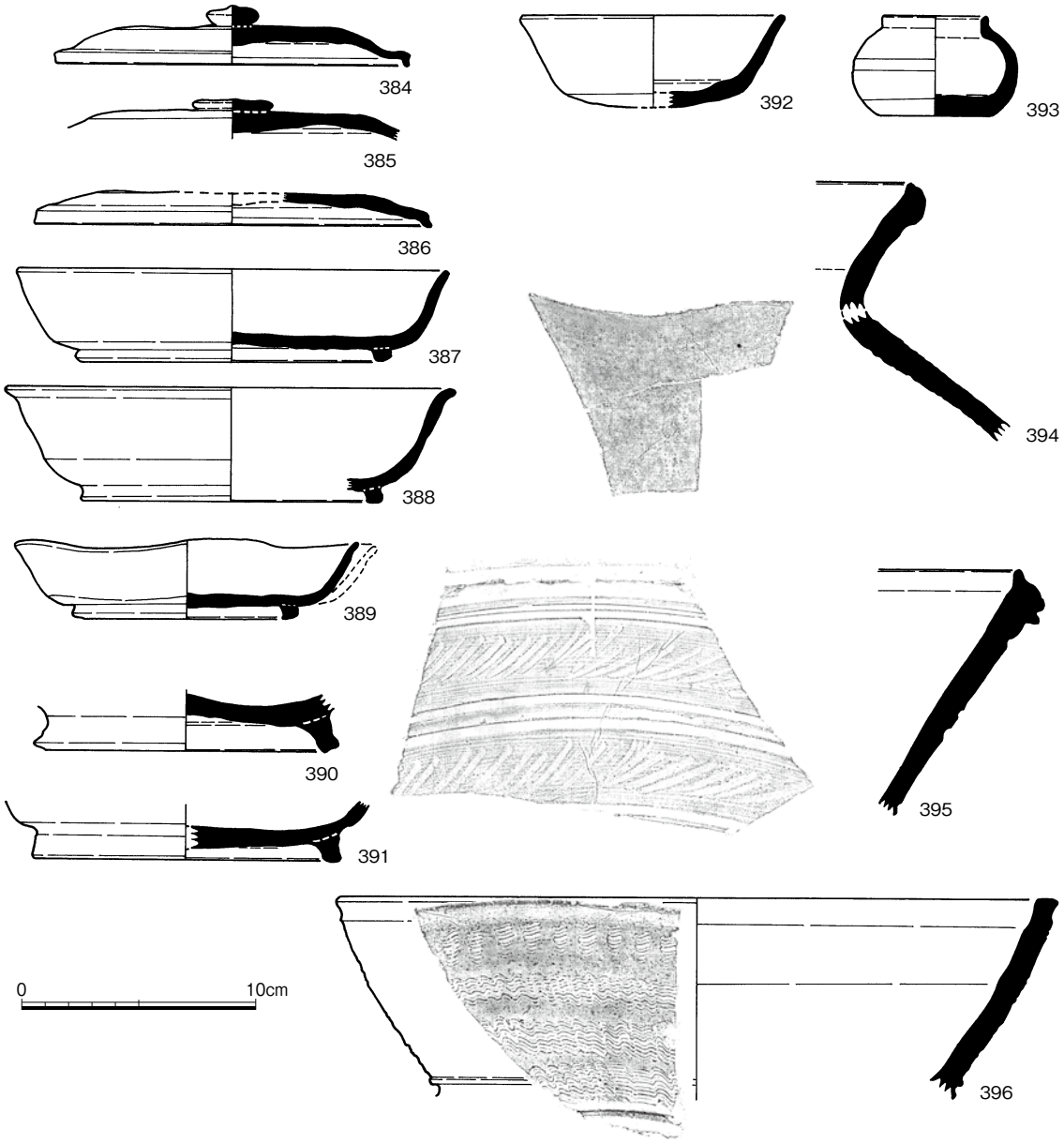


fig. 120　黒色シルト出土須恵器（2）

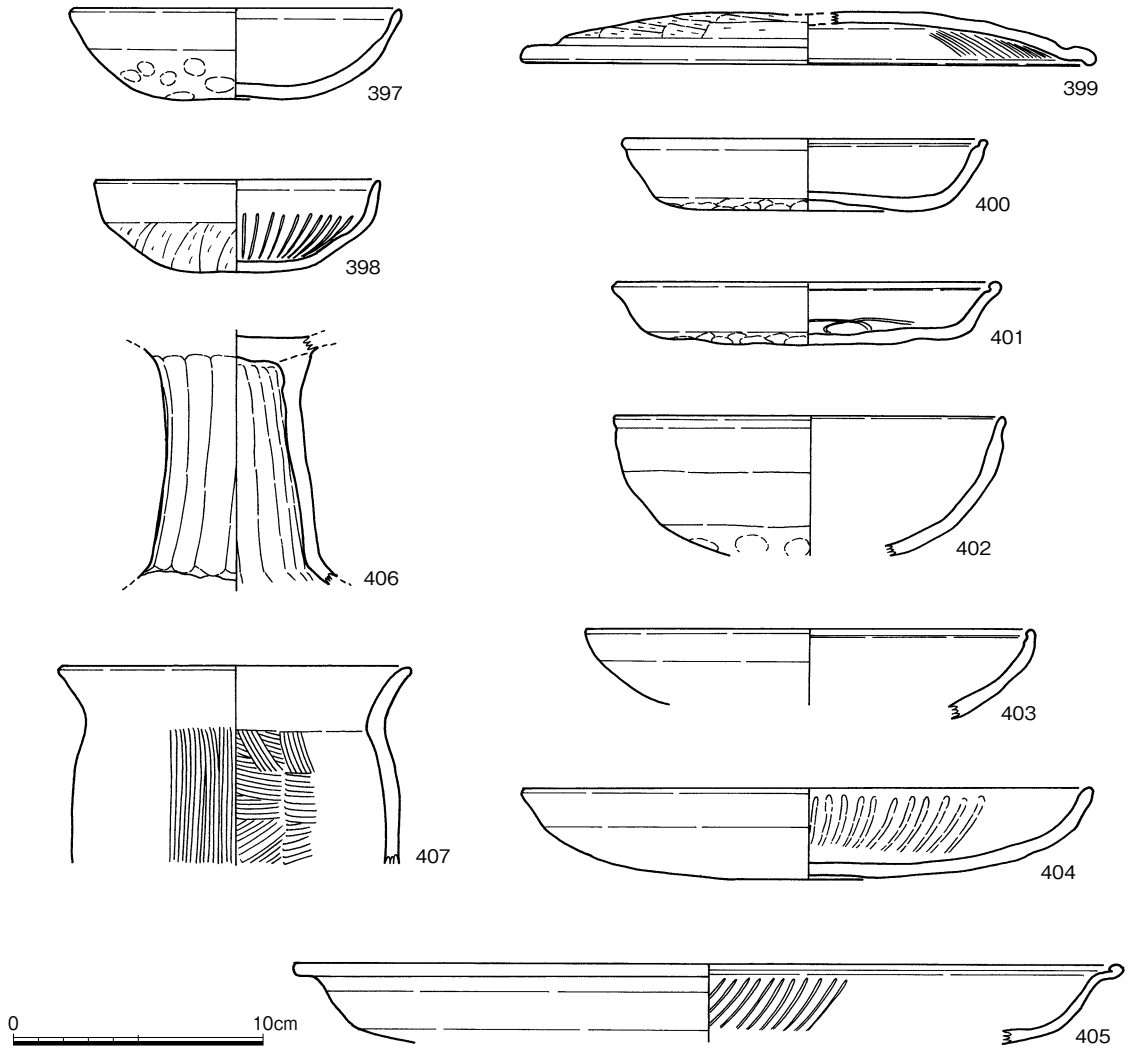


fig. 121　黒色シルト出土土師器

②墨書土器

408～411，420は土師器、412～419，421は須恵器である。408は坏の外底面に「大垣」と墨書されており、口縁外面に帯状に墨痕が残る。409は坏の外底部に「大□」、外側面に「頁」状の文字を書くが正確には判らない。410は坏の外側面に波状の墨痕を残す。411は坏の外側面に「□□」[三宅ヵ]と記されている。412は坏蓋内面に「北家」という文字が残されている。413は坏外底面に「□」[罡ヵ]と書かれている。414は坏外底面が転用硯として用いられており、その面に墨痕が残されている。これは文字のようにもみえるが単に筆ならしの可能性もある。

415は坏蓋内面のつまみの真裏に「大垣」と記されている。416も坏蓋のつまみ真裏に「官」と墨書されている。417は坏の底部と思われる部分に「□[大ヵ]垣□[官ヵ]/□□□[大垣官ヵ]」と書かれている。418は坏蓋内面に「□[驛ヵ]」と墨書されている。419は坏蓋の内面と思われるが残画が少なく文字は不明である。420は坏？外底面に「□/□[津ヵ]/□」と記されている。421は坏蓋外面？に「大□」と書かれている。

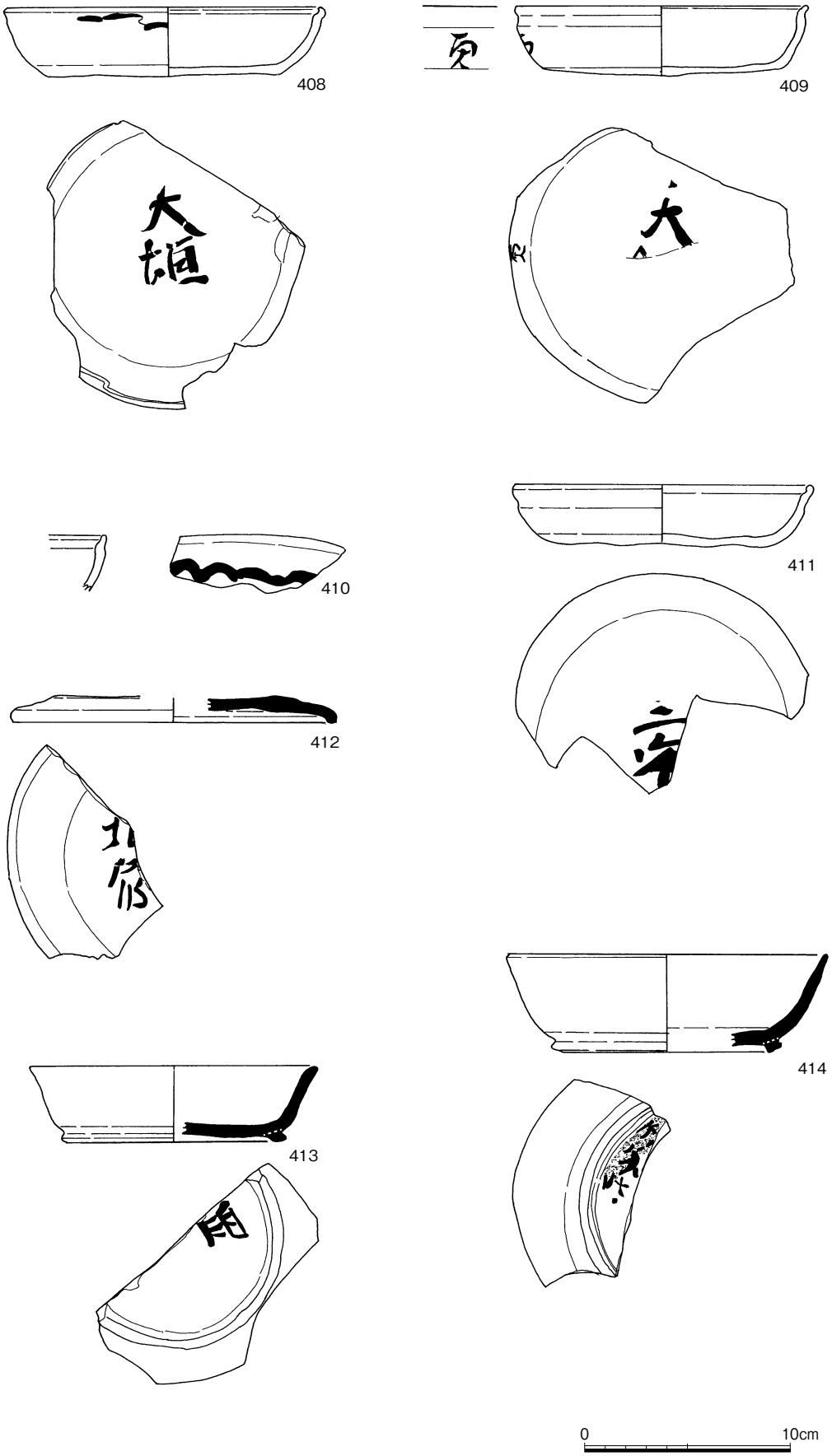


fig. 122　黒色シルト出土墨書土器（1）

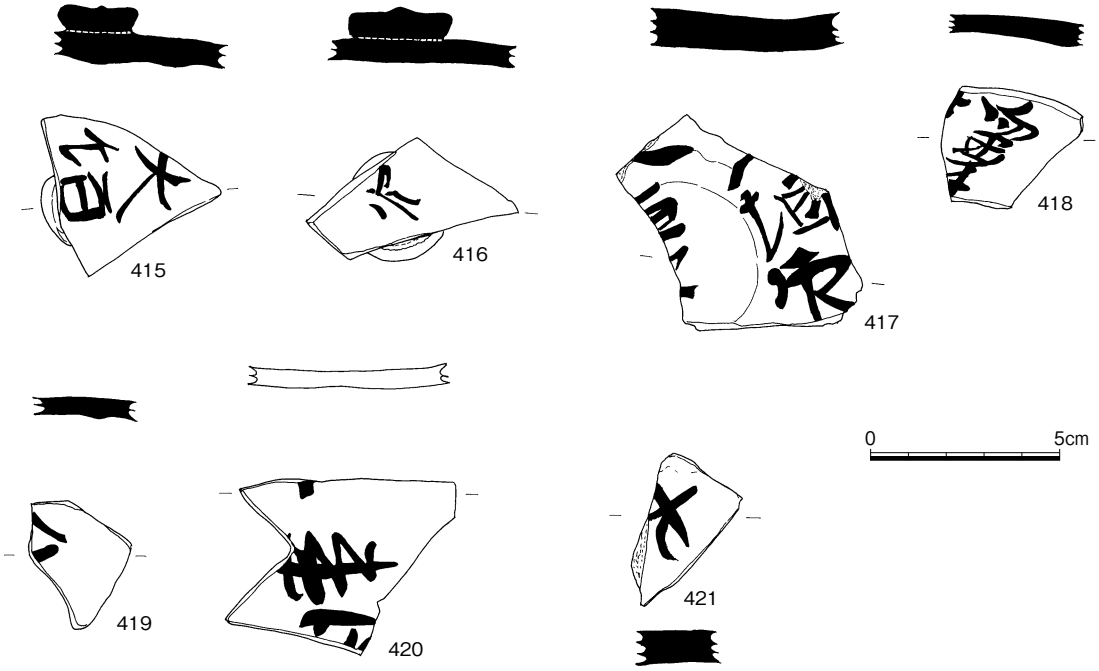


fig. 123　黒色シルト出土墨書土器（2）

③転用硯

425～432まで、すべて須恵器である。425は無高台の坏内面に墨が濃く付着している。426は坏蓋内面に筆ならしの跡に見える墨痕が残っている。427は小型の坏蓋内面に墨の痕跡が残る。428は坏蓋内面に墨痕が残存する。429，432は坏蓋で、内面に墨が濃く付着し、筆ならしの跡と見られるものも残っている。430は小型の坏で、内外面に墨の痕跡が残り、墨壺として利用されていた可能性がある。431は坏蓋で、墨痕と筆ならしの跡が残されている。

④ヘラ描き土器

422～424は表面にヘラ描きがなされた土器で、いずれも須恵器の甕の肩部に記号をヘラ描きしている。これらの記号は製作した集団を表す窯印と思われる。土器の表面はカキ目で調整し、内面にはタタキ目が残る。422は黒色シルト層、423は黒色シルト混じり灰色細砂層、424は黒色シルト下層から出土している。

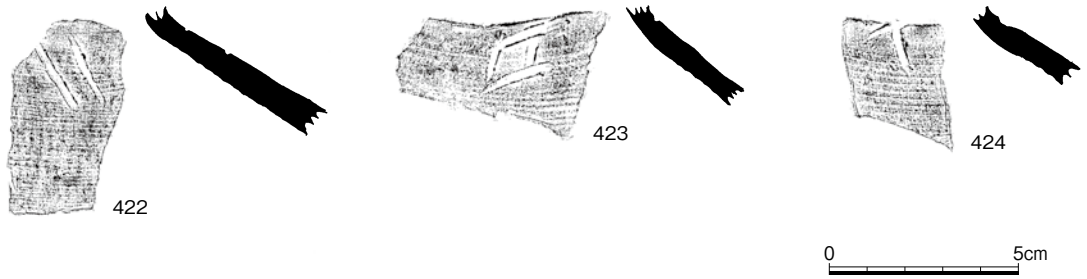


fig. 124　黒色シルト出土ヘラ描き土器

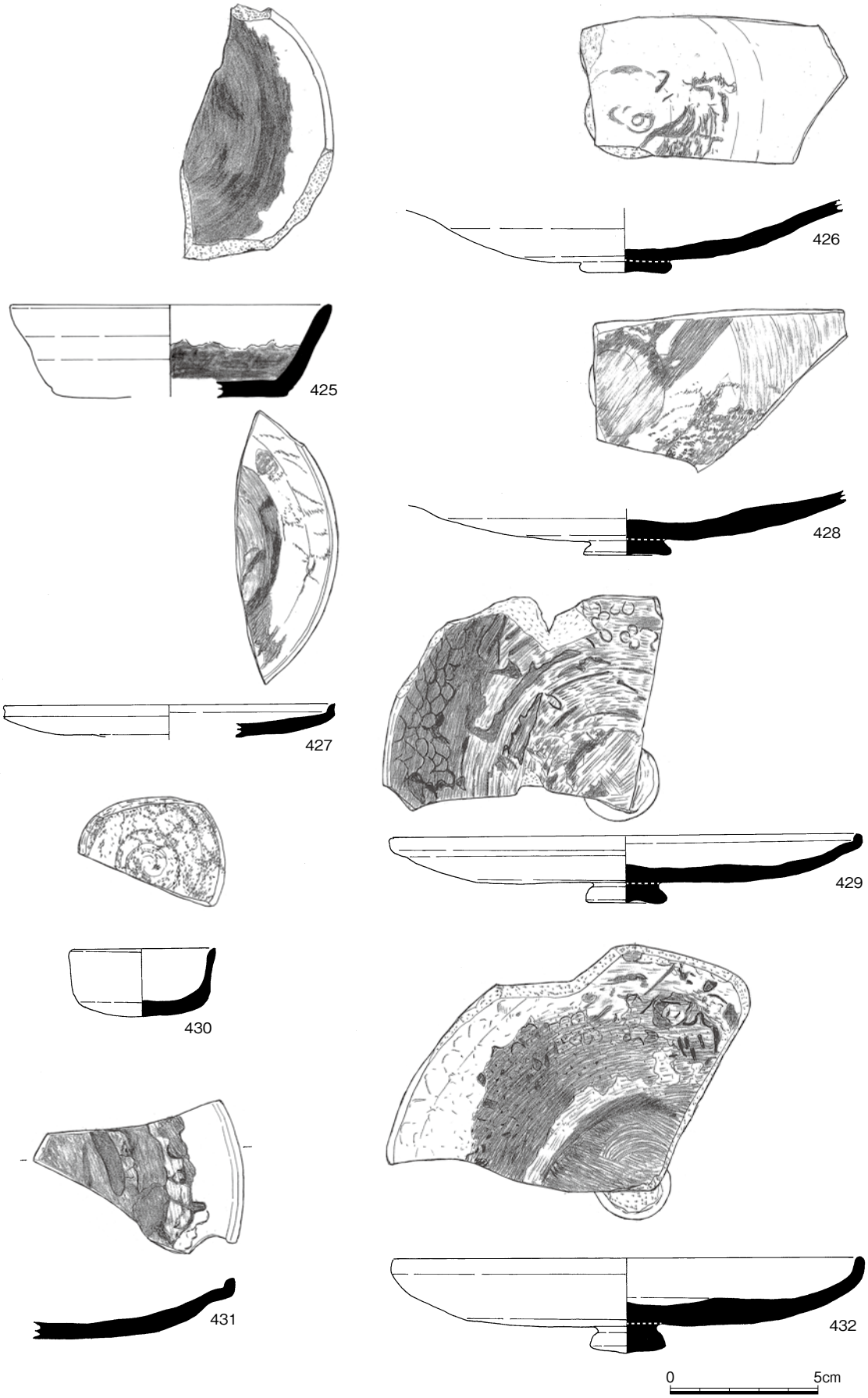


fig. 125　黒色シルト出土転用硯

(6) B80-B区出土瓦

当該区出土の瓦は完形品が見つからず、すべて破片の状態で見つかっている。破片どうしを接合することができないため、別の場所で割れて破片となったものを投棄したと考えられる。また平瓦の破片が多く、破断面に焼け焦げが付着しているものがある。平瓦が本来の機能を終えた後に別の用途に使用され、不要となった後に捨てられた可能性もある。

433は土師質の軒丸瓦で珠文帯の内側に圏線を巡らし複弁を作り出す。434は土師質の軒平瓦で、重廓文を表す。435は須恵質の丸瓦で、外面はナデ調整、内面は布目圧痕が残る。436は土師質、437～439は須恵質の平瓦で、凸面は縄目が残り、凹面は436には布目圧痕が残り、437～439は布目圧痕とナデまたはヘラ削りで調整する。

440～445はすべて瓦質で、440の軒平瓦は433と同じ文様構成であるが、複弁の形状が異なる。441，443は丸瓦で、443は玉縁の部分である。442，444，445は平瓦で、凸面は縄目が残り、凹面は布目圧痕またはヘラ削りの痕跡が残る。

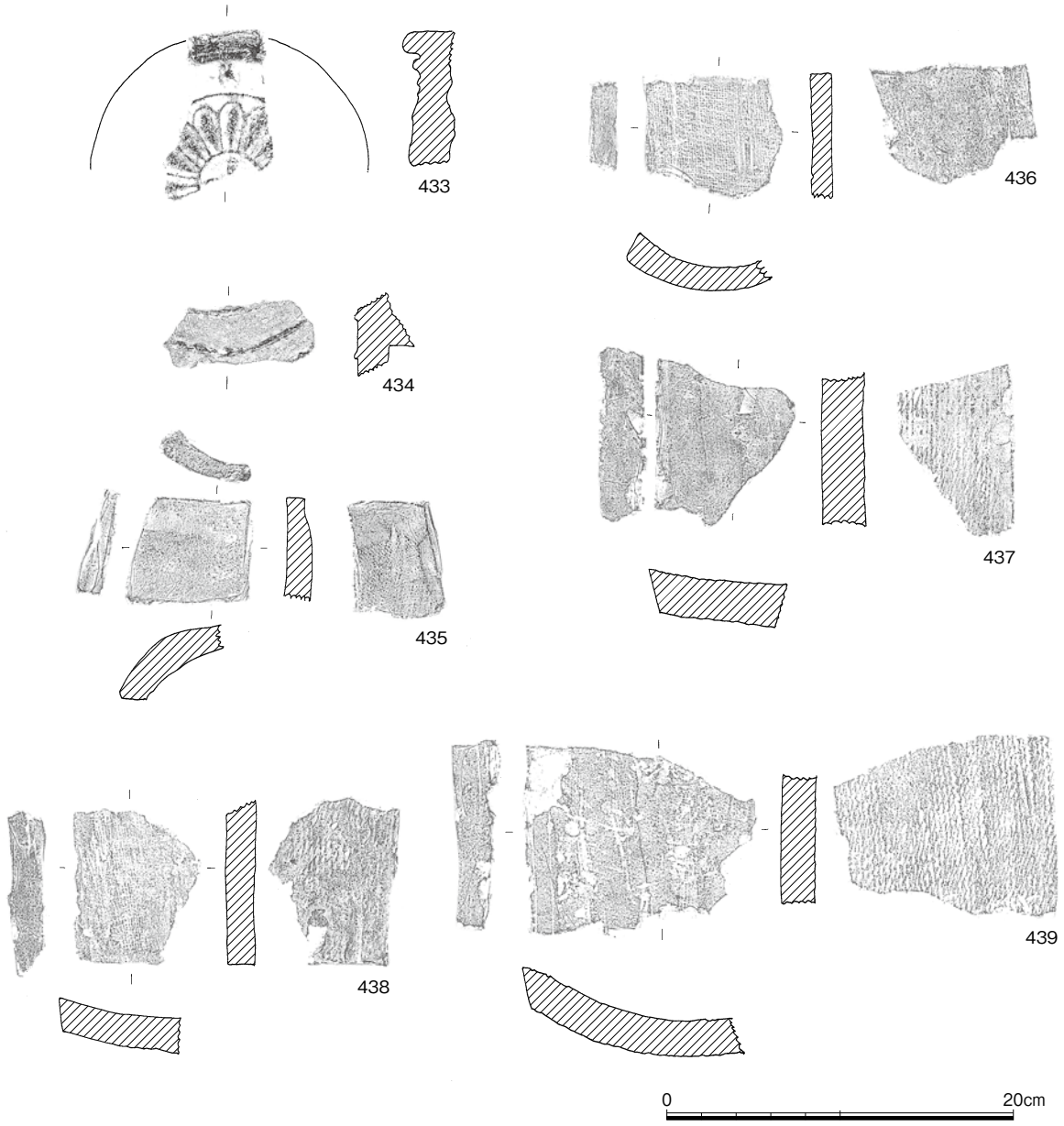


fig. 126　B80-B区出土瓦（1）

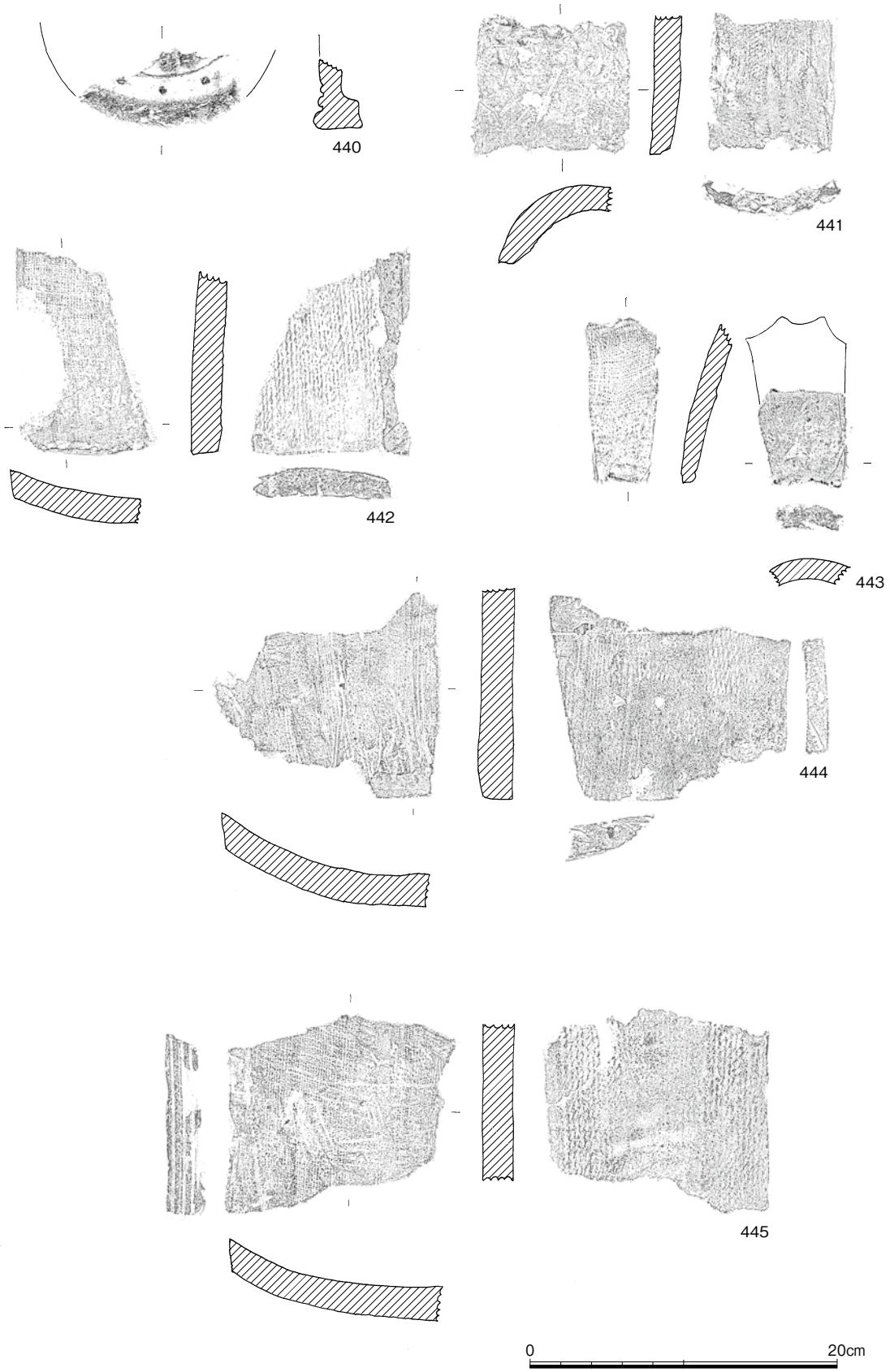


fig. 127　B80-B区出土瓦（2）

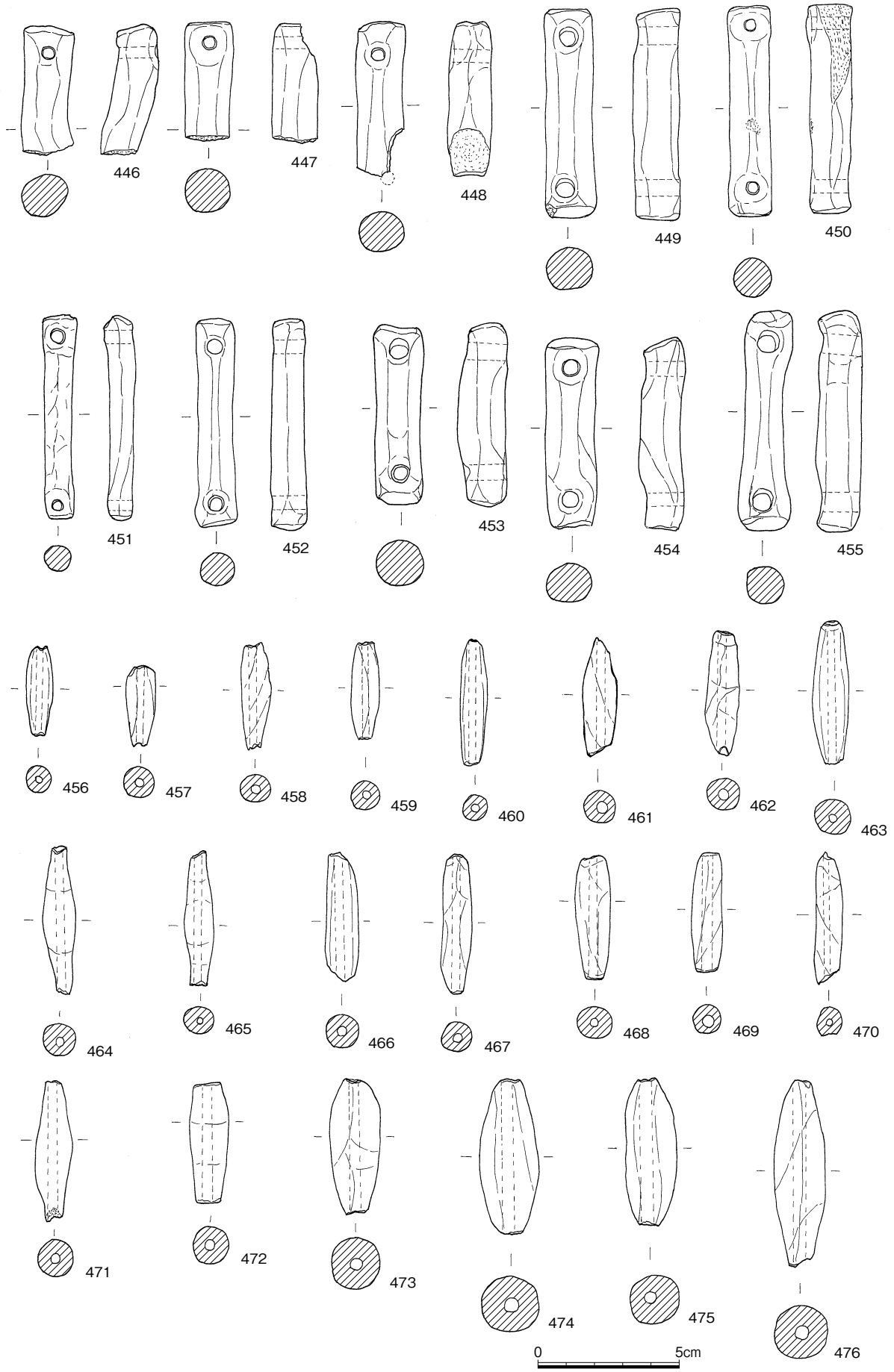


fig. 128　B80-B区出土棒状・管状土錘

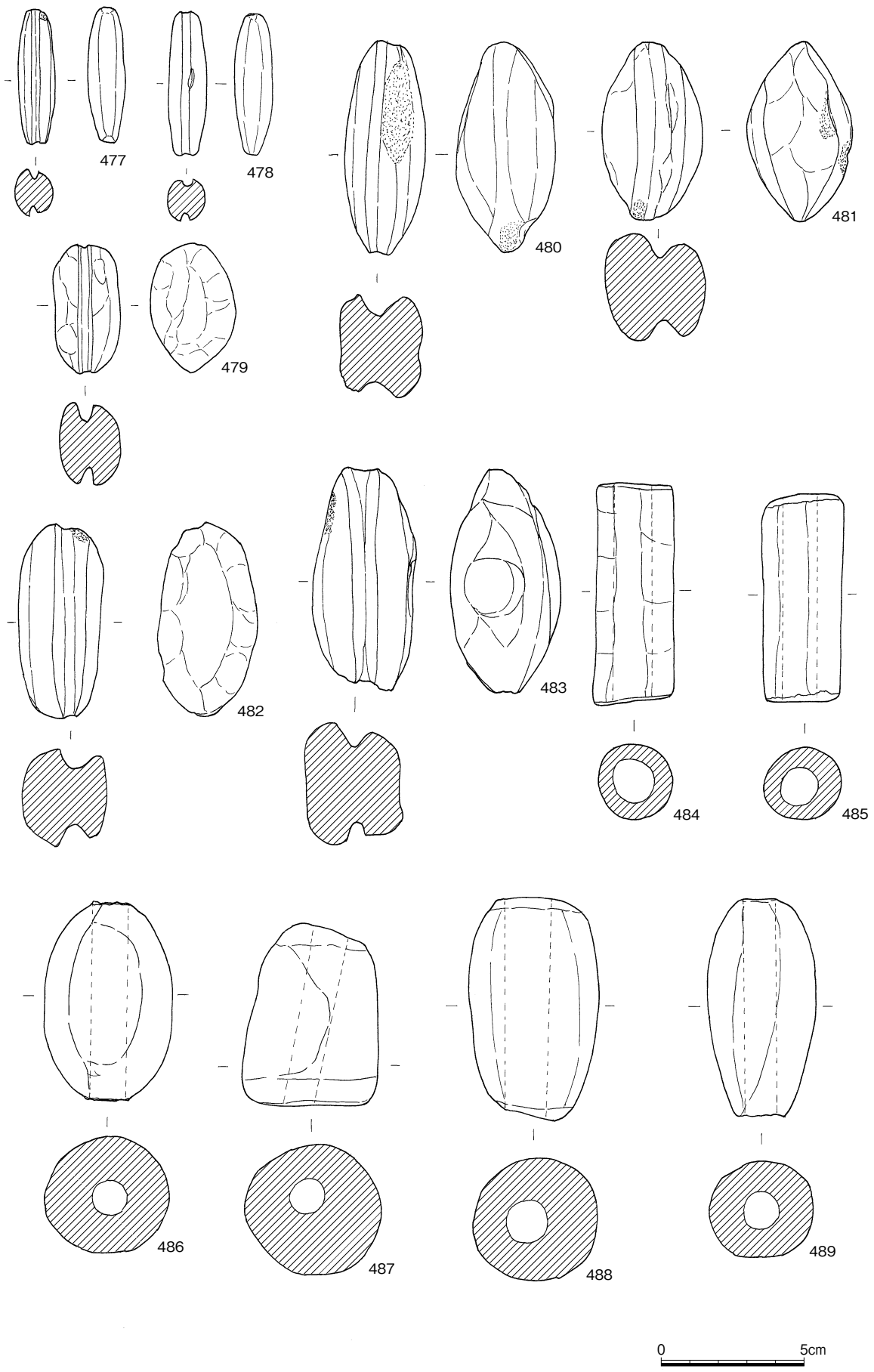


fig. 129　B80-B区出土有溝・管状土錘

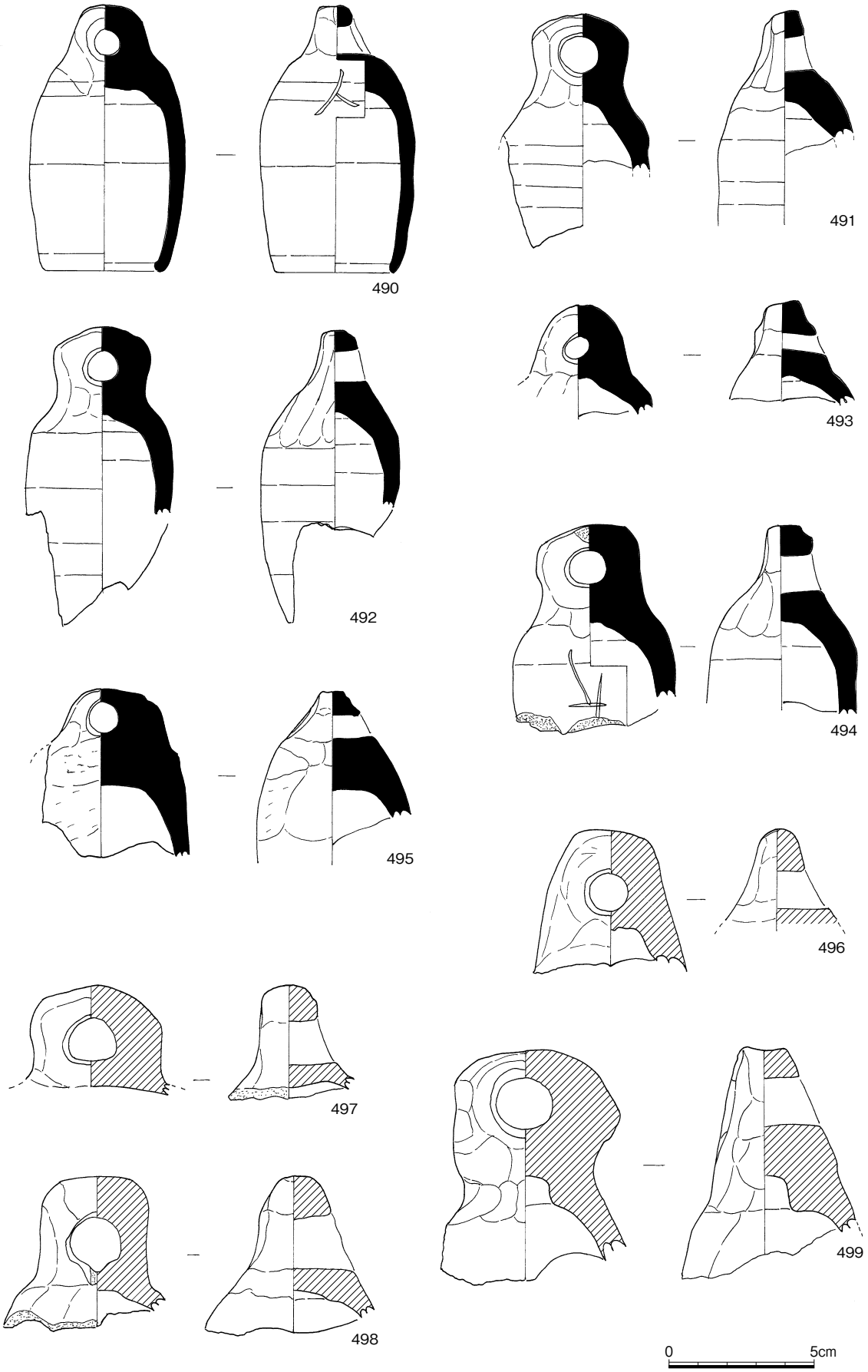


fig. 130　B80-B区出土蛸壺

（7）B80-B区出土土錘・蛸壺

土錘・蛸壺は数量が多いため、主な出土品を図示している。土錘はすべて土師質である。

446～455は棒状土錘で、粘土塊を成形しナデ調整を行った後、両端に紐通しの孔を開ける。この種類の土錘はほぼ真ん中で折損し出土する例が多い。孔の周縁部が摩滅していることがある。456～476は管状土錘で、丸い棒に粘土を付け成形したものである。大きさに差があり、取り付ける網の種類が異なると思われる。

477～483は有溝土錘で、小型のものは断面円形の二箇所に溝を設け、大型のものは隅円方形の二端に溝を設けるものである。溝の部分を除く表面が摩滅している例が多く、底曳網や地曳網に使用した可能性がある。

484～489は管状土錘で、486～489等の大型のものに混じって484，485などの古いタイプのものも出土している。表面や孔の部分が摩滅しているものがあり、地曳網に使用した可能性がある。

490～499は飯蛸壺で、490～495は須恵質、496～499は土師質である。表面や孔の部分が摩滅しているものが多い。

（8）B80-B区出土漆付着土器・フイゴ羽口

500～502は須恵器の内面に漆が付着したもので、501は平瓶の口縁部、500，502は壺？の内面に付着する。503はフイゴ羽口で、口縁端部が熱を受けて溶けている。

（9）B80-B区出土砥石・敲石・磨石

504は花崗岩質、505，506は砂岩質、507は凝灰岩質で、3面に磨耗した面を有する。508は砂岩質で被熱痕がある。509は凝灰岩質、510は砂岩質で、磨耗痕の外、線条痕を有する。511～515は凝灰岩質で513，514は磨耗で大きく凹んでいる。516（砂岩質），518（花崗岩質）は敲石で、石の先端に敲打痕がある。517は磨石で、先端が摩滅している。

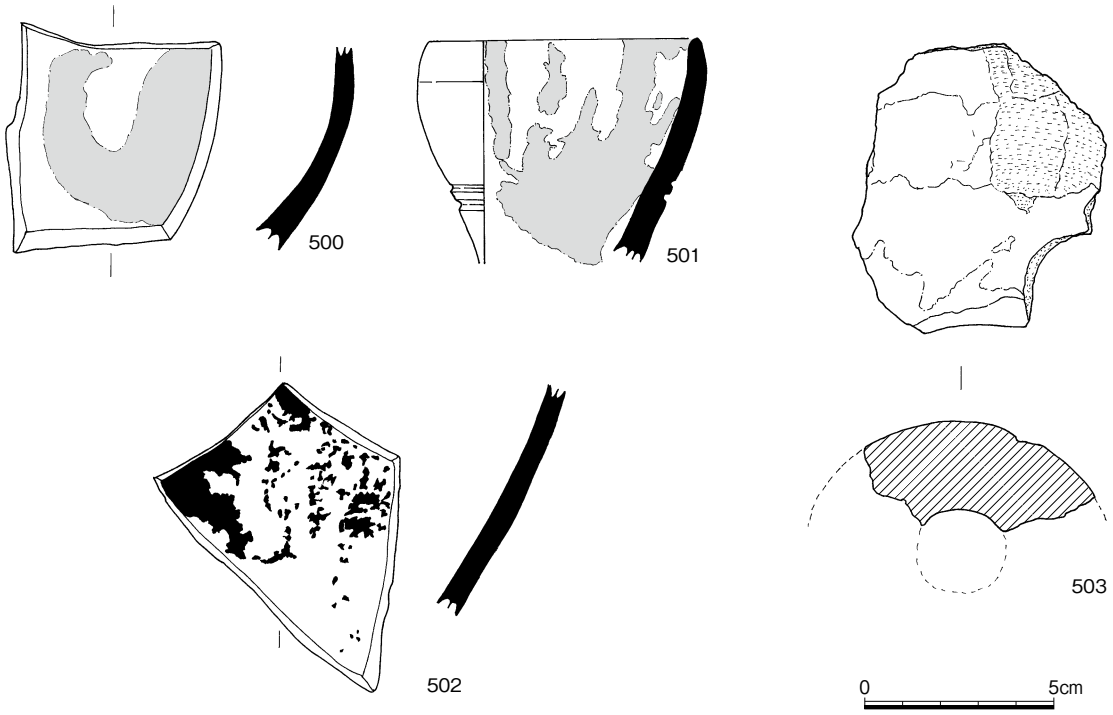


fig. 131　B80-B区出土漆付着土器・フイゴ羽口

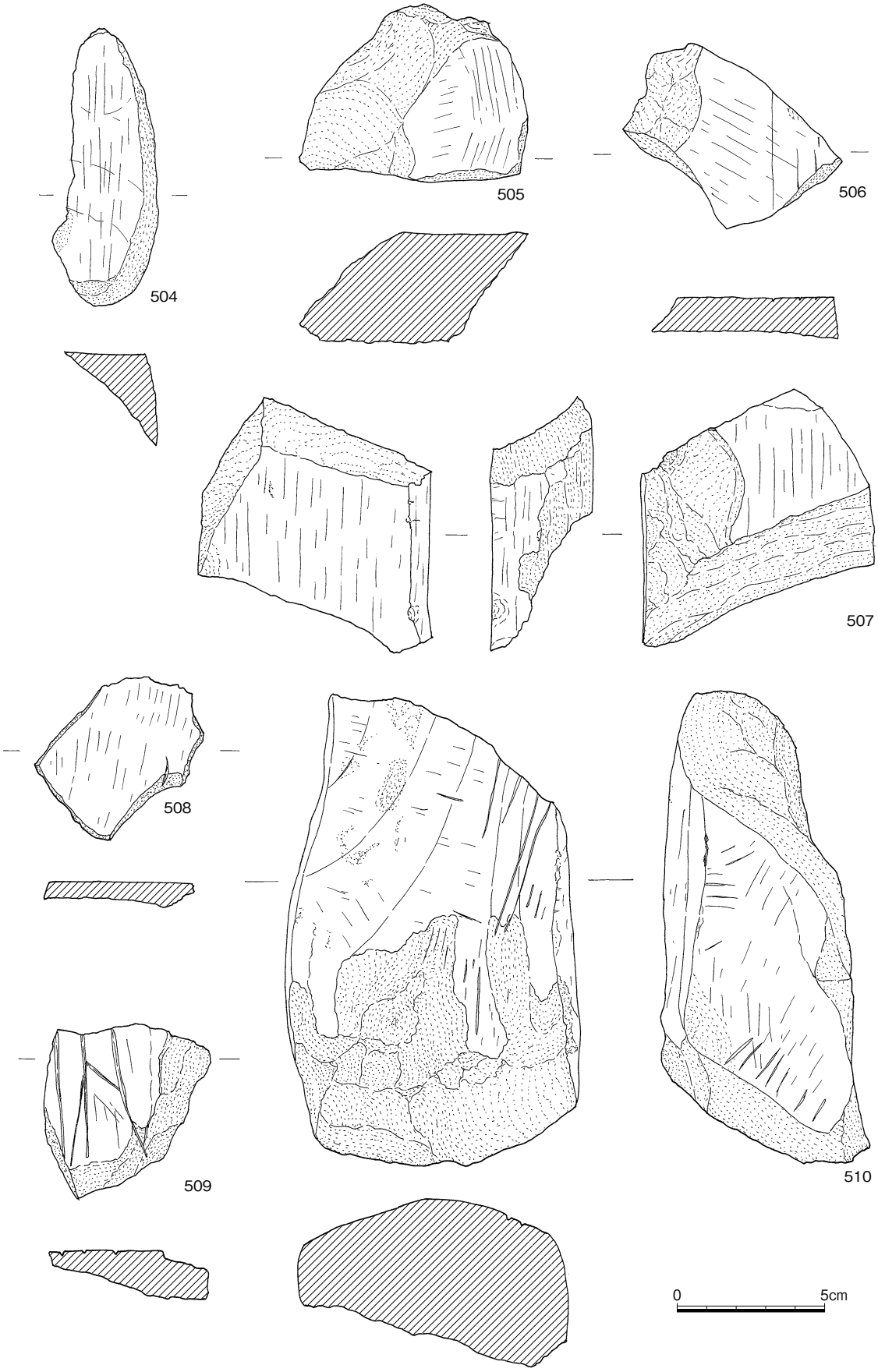


fig. 132　B80-B区出土砥石

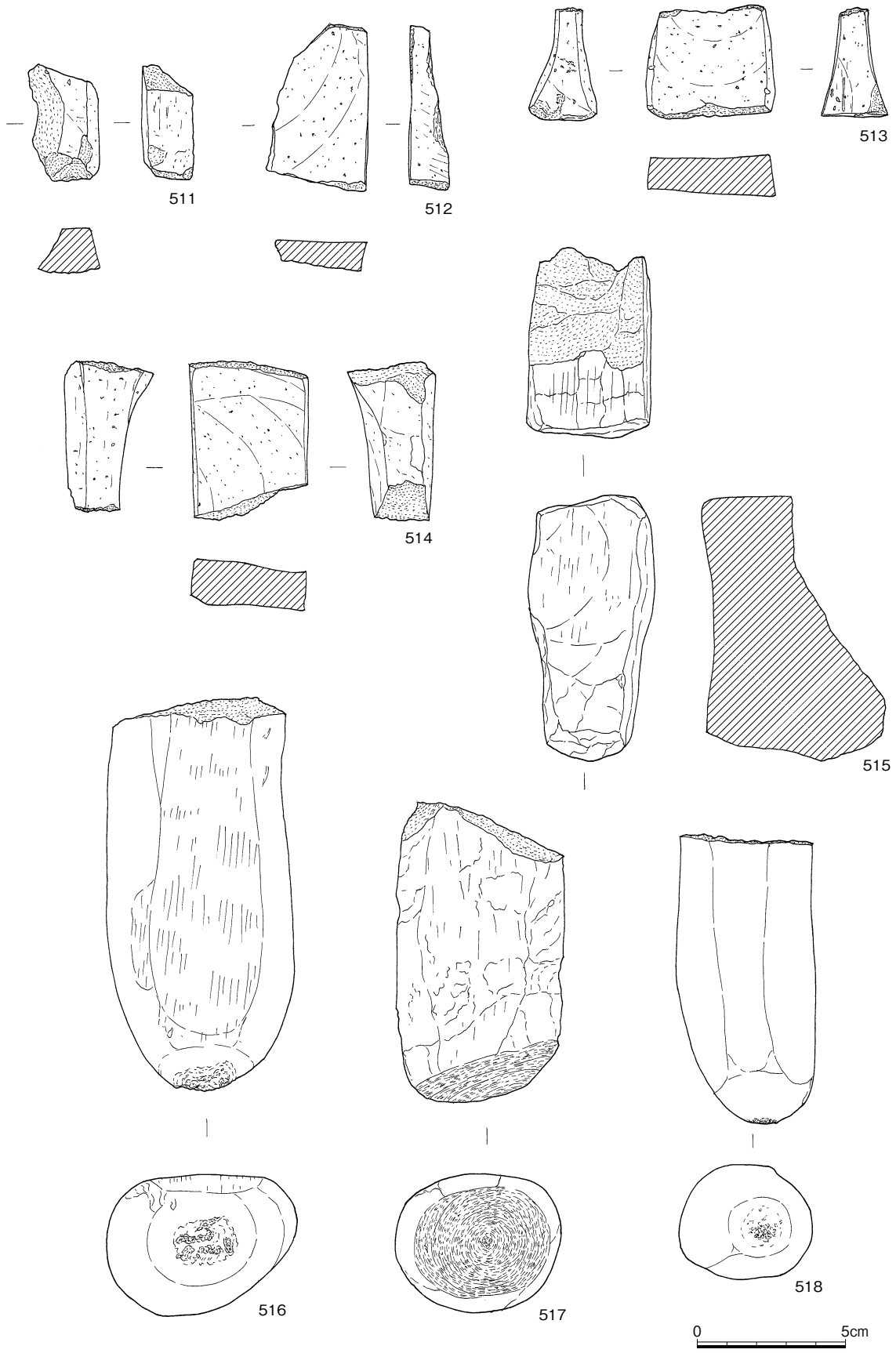


fig. 133　B80-B区出土砥石・敲石・磨石

(10) B80-B区出土木簡

湿地層からは木製品と共に木簡が出土している。519は表に「咒願師（人名）・亀　智識」裏に「天平十□〔九ヵ〕年八月一日」と記されたもので、「智識」に関係する記録簡の類と考えられる。智識（知識）は作善により仏縁を結ぶ行為を意味する言葉であり、労働奉仕・金品を寄進すること等を指す。材の様子や幅から520と同一簡である可能性がある。

521は表に「×□〔屋ヵ〕駅長等　□□□」裏に「即走上□〔奉ヵ〕」とあり、急いで何かを行うよう命じる文書木簡と考えられる。表面上部は「葦」に続くとみられる。521は駅長に宛てたものであるが、「等」とあることより、その上に他の宛名も記されていたと想定される。

522は「賀美里戸主葦屋賀津羅□」とあり、葦屋駅家が存する摂津国兎原郡の賀美郷である可能性が高い。賀美郷に葦屋氏が分布していた状況が窺える。

523は片面に「遠方来不亦楽乎人不知而不慍不亦君子　乎」とあり、習書木簡である。『論語』学而第一冒頭の、「子曰、学而時習之、不亦説乎、有朋自遠方来、不亦楽乎、人不知不慍、不亦君子乎」の一部を記したものである。

524の上端は丸く削り出す。表面一文字目は「弘」「於」など、二文字目は「勤」など、四文字目は「道」などの可能性がある。

525は「大石□□□□・□〔秦ヵ〕足□」と人名の列記がなされる。

526は「八」等の数字が示されるが墨痕は不鮮明で判読できない。

527は「□身連」など多数の墨痕があるが表面の痛み具合が進み、判読困難である。

528は「□孔古五斗　友麻□」「□清人　□□主二□」と表裏の文字が天地逆に書かれている。

529は表に７文字、裏に６文字書かれているが判読不能である。

530は言偏の文字の習書多数が書かれている。その他の木簡の文字は判読不能である。（詳しくはⅤ章の木簡の解説と釈文を参照していただきたい）。

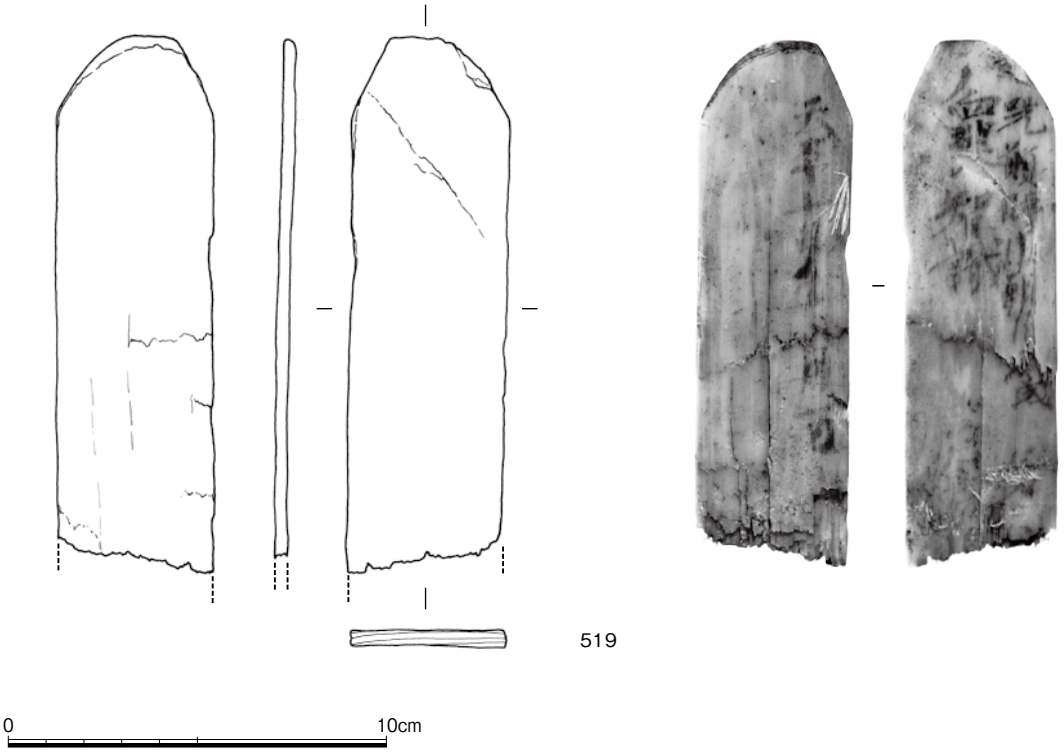


fig. 134　B80-B区出土木簡（1）

fig. 135　B80-B区出土木簡（2）

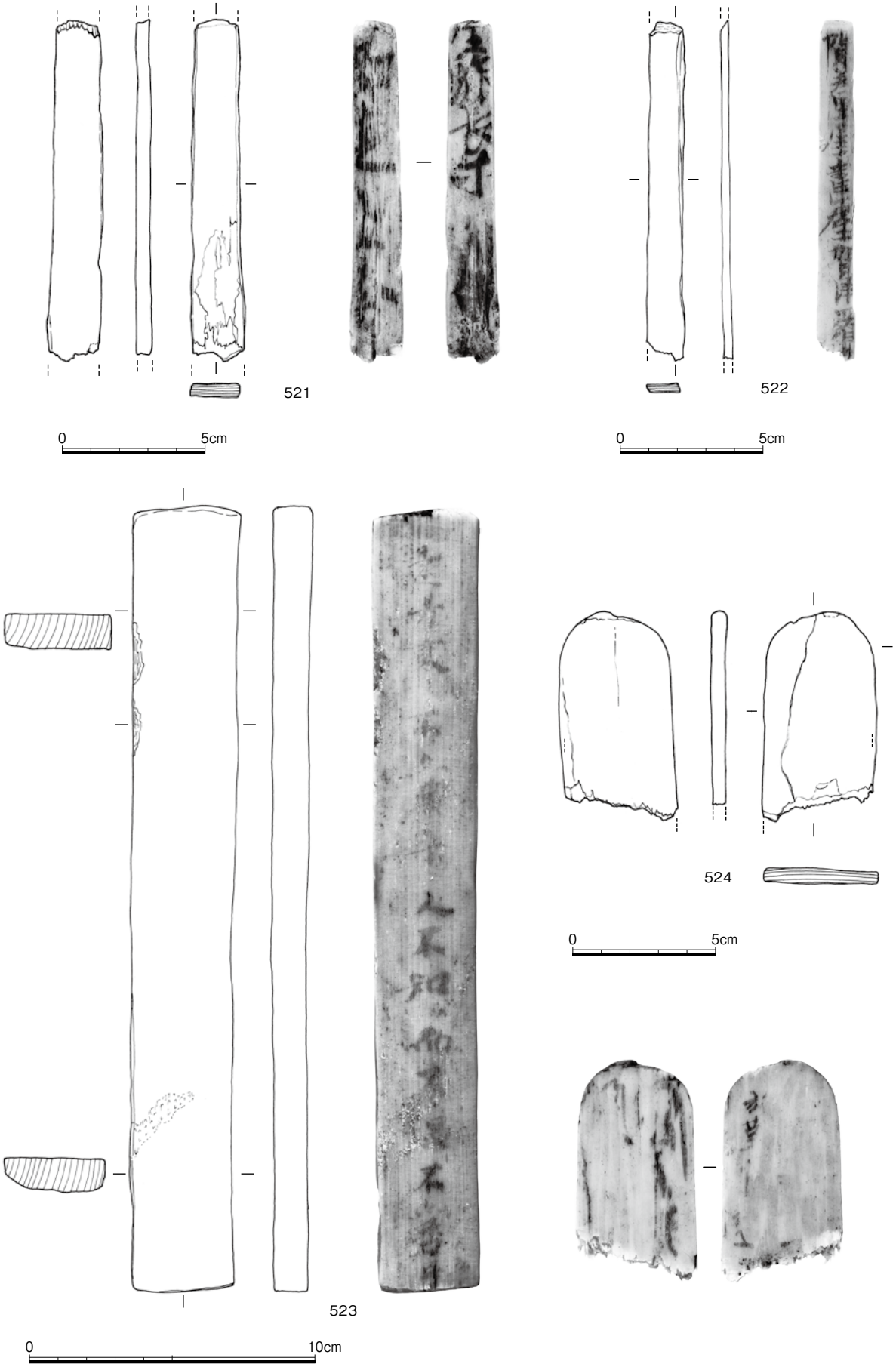
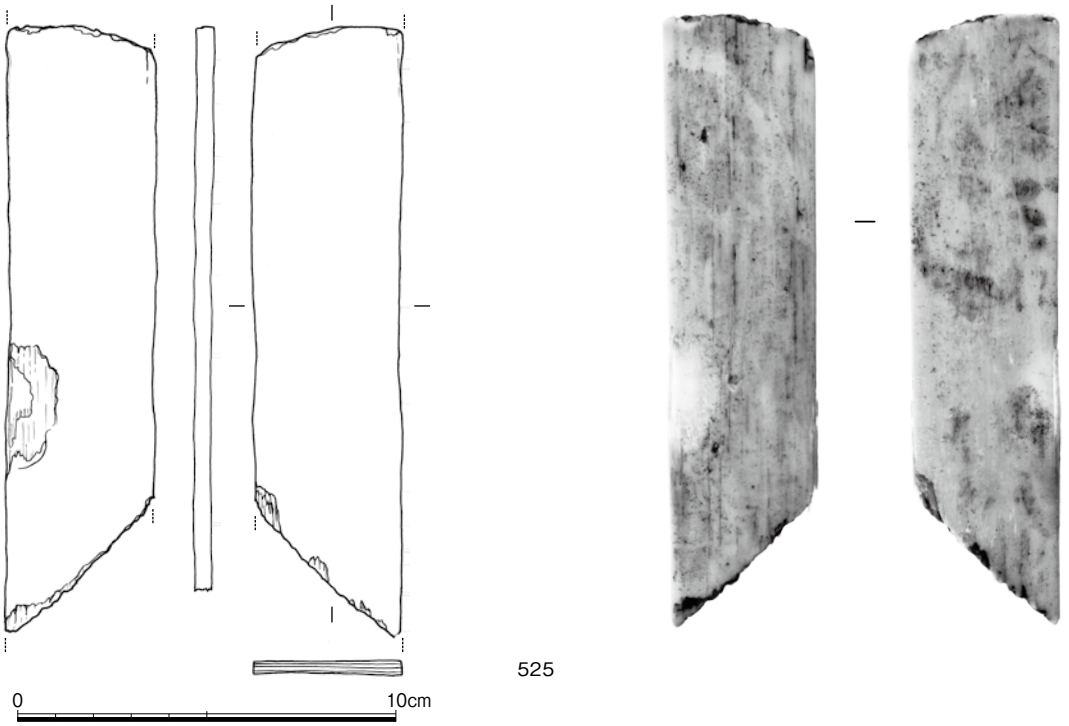
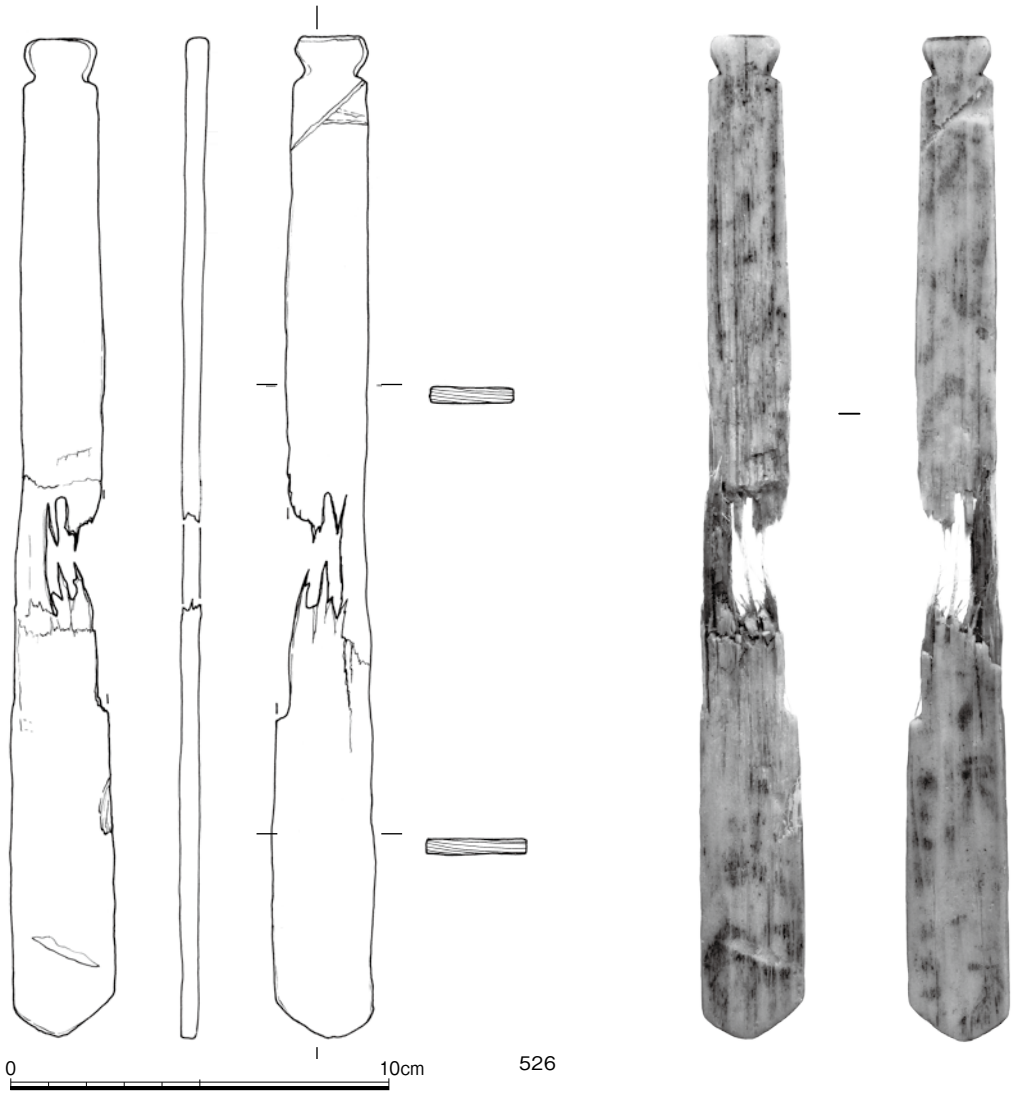


fig. 136　B80-B区出土木簡（3）



525



526

fig. 137　B80-B区出土木簡（4）

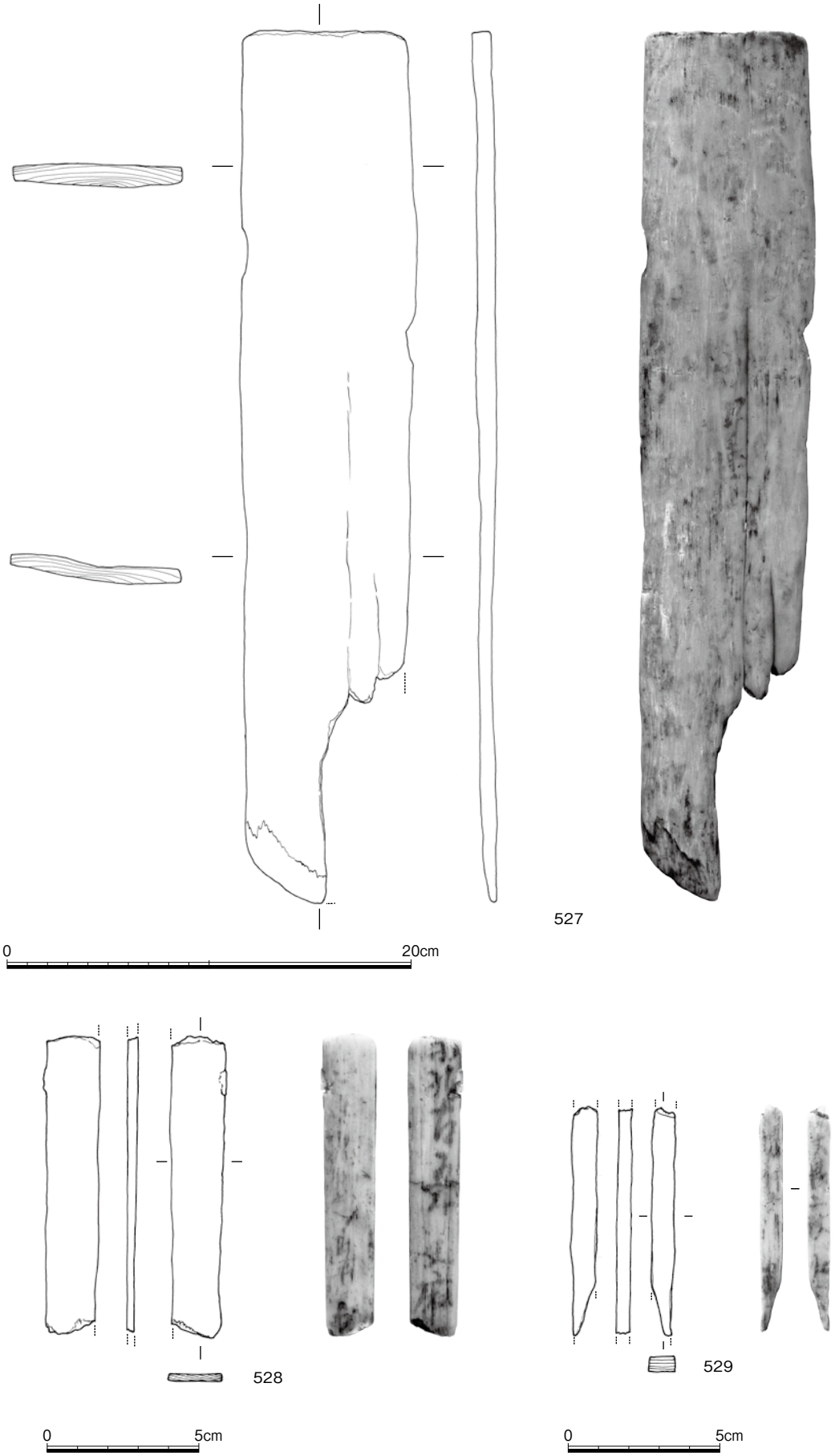
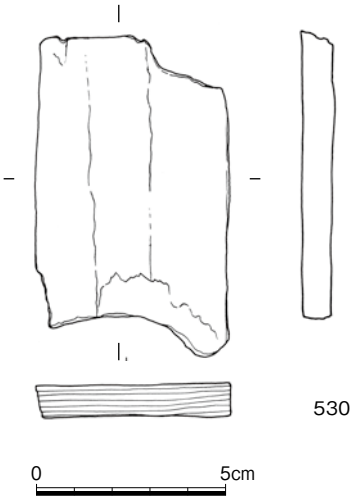
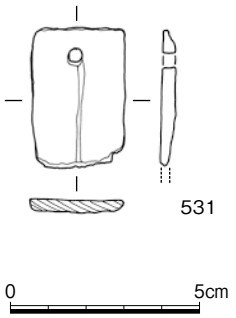
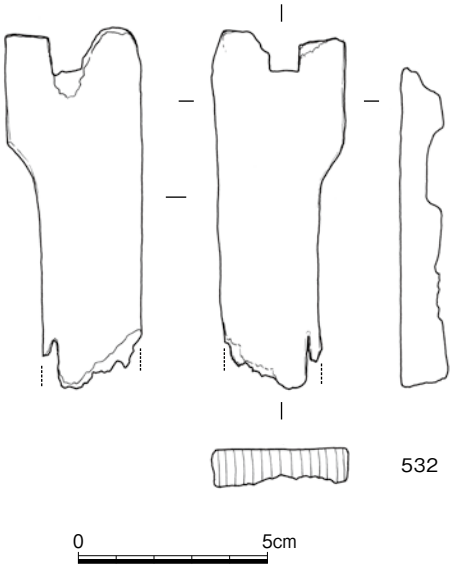
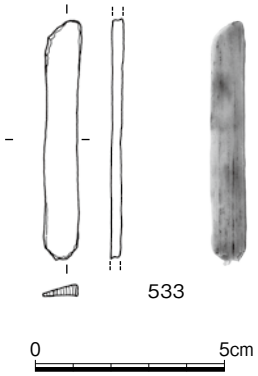


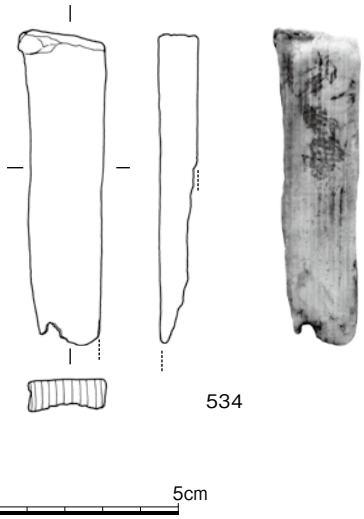
fig. 138　B80-B区出土木簡（5）

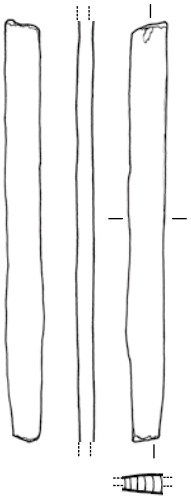












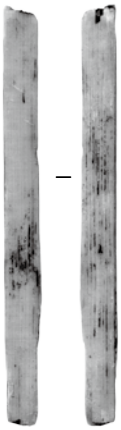


fig. 139　B80-B区出土木簡（6）

(11) B80-B区出土木製品

543はハゼノキ類の一木を刳りぬいて製作された墨壺である。全体の半分を欠損していると共に糸車も欠く。頭部は平面形を丸く作り出し、中央には径5.8㎝、深さ7.0㎝の断面方形の壺を彫り込んでいる。糸道は欠損のため定かではない。尾部は頭部後端から尾部後端にかけ、やや歪なアーチ状に整形され、中央やや上寄りに径9.0㎜の糸車の軸受け孔が開けられる。孔の位置から推定される糸車の直径は約6㎝程度と考えられる。全長16.0㎝、高さ8.4㎝を測る。

544は墨壺の糸車である。材はヒノキで、外輪は一部を残して欠損する。外輪の中心には軸を通す直径6.0㎜の孔が開けられている。糸巻部は横断方向に十字に透かしを施され、4本の扇形の柱で構成されている。また表面には墨が残存し、実際に使用されていたものであることがわかる。外輪部径は約5.5㎝、全幅5.3㎝、糸巻部径1.9～2.2㎝、糸巻部幅3.1㎝を測る。

547～556は紡織作業に伴う工具類と考えられる。548はアカガシ亜属製の竪櫛で、経糸を整える作業に用いた可能性がある。長さ19.2㎝、幅8.7㎝、厚さは把手の基部で1.1㎝、歯の基部で6.0㎜と、先端に向け厚みを減じる。歯は9本削り出される。549～551は杓文字状を呈する柄付きの長方形板で、経糸を整えるための整経篦の可能性がある。孔を開けていないものと開けたものがあるが、類例では孔を2列設けるものが通有であり、550は未成品と考えられる。全てヒノキ材である。552～554は糸枠の支え木で中央に段と孔が穿たれる。552のように2材を組み合わせ、2個1対で4本の腕木と組み合わせて使用する。ヒノキ製である。555、556は端部に段と穿孔があり、かせかけの支え木の可能性がある。両者共ヒノキ製。

569はヒノキ製の下駄である。平面形は隅丸長方形を呈するが、前半は端部にかけて幅をやや減ずる。歯は痕跡が認められず、無歯の可能性もある。前壺は右寄りで、本製品が左足用であることがわかる。後壺は後端から5.5～5.8㎝の位置に穿たれている。全長15.2㎝、幅6.8㎝で、子供用の可能性が高い。

577～582，586，589は曲物の蓋板であり、583～585，588，590は同じく底板と考えられる。特定の根拠としては、側板との結合に樺皮を用いたものを蓋板、木釘のみで結合したもの、もしくは結合具を用いず、叩き込んで固定されたものを底板とした。

591～595は舟形である。591は半裁した割板の樹皮側面を舟底形に加工したもので、上面は特に加工は見られない。長さ28.5㎝、幅8.0㎝、厚さ3.0㎝、スダジイ製。592はB80-A区の184に類似するマツ属複維管束亜属製で、長さ24.0㎝、幅4.9㎝を測る。593はヒノキ材を刳りぬいて作られたもので、長さ20.0㎝、幅2.7㎝平面形は両端を柳葉形に尖らせている。横断面はU字形を呈し、船槽を刳りぬいている。ヒノキ製で、184類似型式に比べて精良である。594（エノキ属）、595（アカガシ亜属）は184類似型式であるが、若干小型品である。

596～601は人形と考えられる。頭部のみ削りだされた596、597、600、601と、四肢表現のある599、烏帽子を着装した男子の横顔表現と思しき598がある。

602～607は馬形と考えられる。半裁丸太を加工した602（アカガシ亜属）以外は細長いヒノキ製の薄板を素材とする。603は上辺に2箇所切込みを加え、鞍を表現している。604は鞍表現が無いが、上辺1箇所、下辺2箇所の切込みにより、頭部、背、尾を表現するとともに、頭部下辺に口を表す切欠きを加えている。606は鞍のない裸馬を表現している。607は掲載図では、尾を左に向けた鞍馬である。

617～623は釘であり、全てヒノキ製である。頭部形状に、片側1辺に突出するもの（617～622）と、両側から抉りを入れたもの（623）がある。

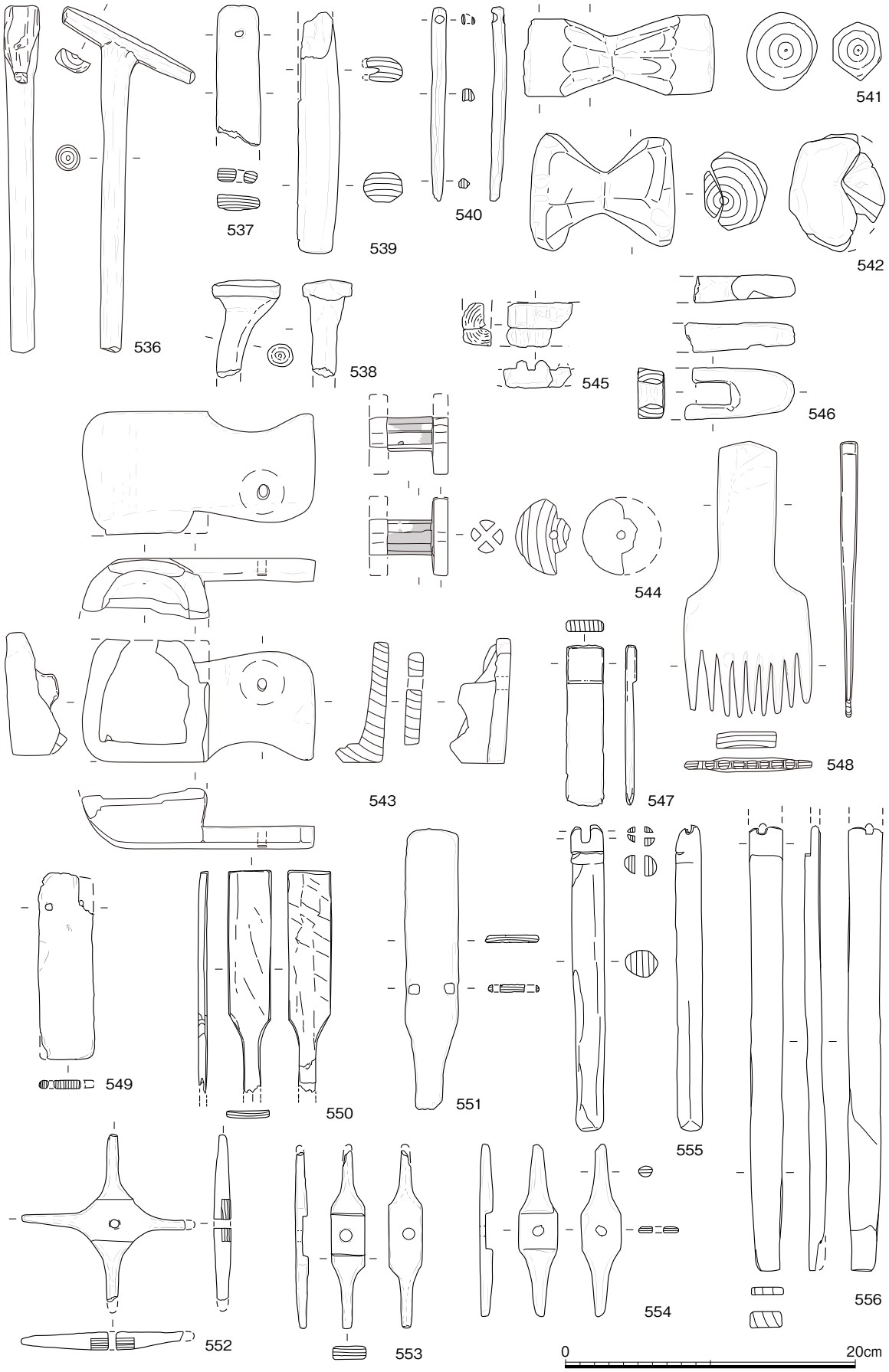


fig. 140　B80-B区出土木製品（1）

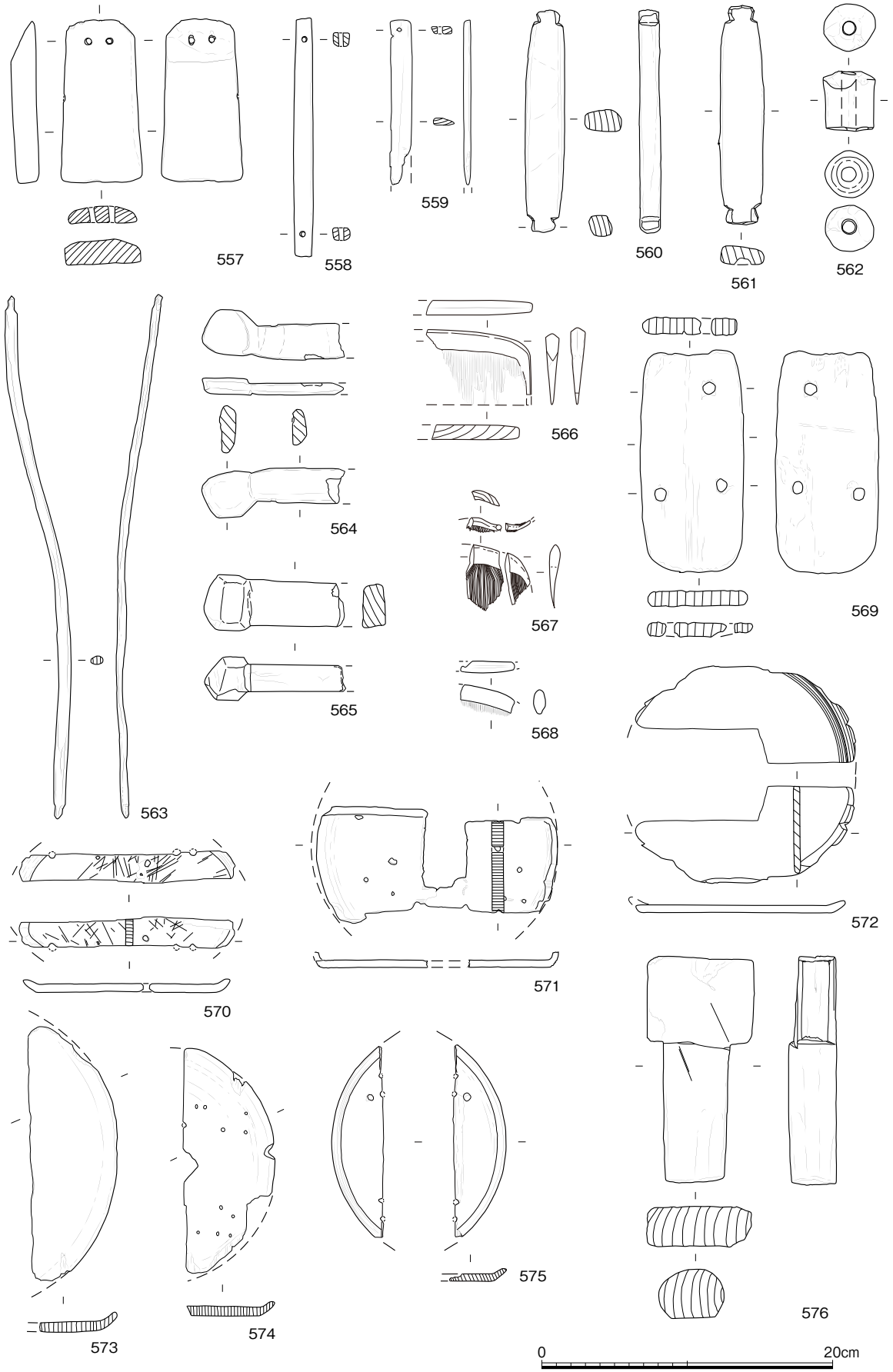


fig. 141　B80-B区出土木製品（2）

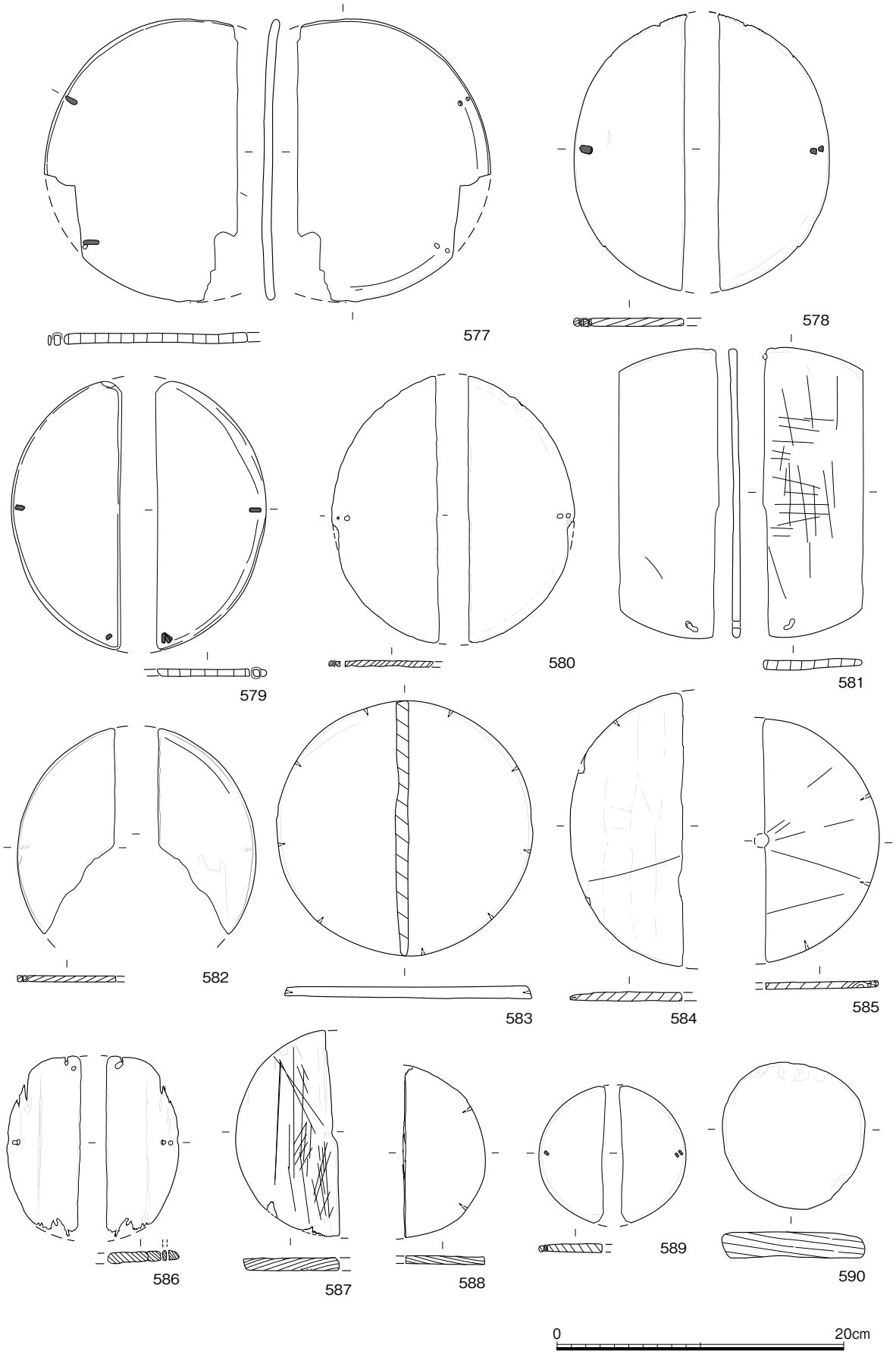


fig. 142　B80-B区出土木製品（3）

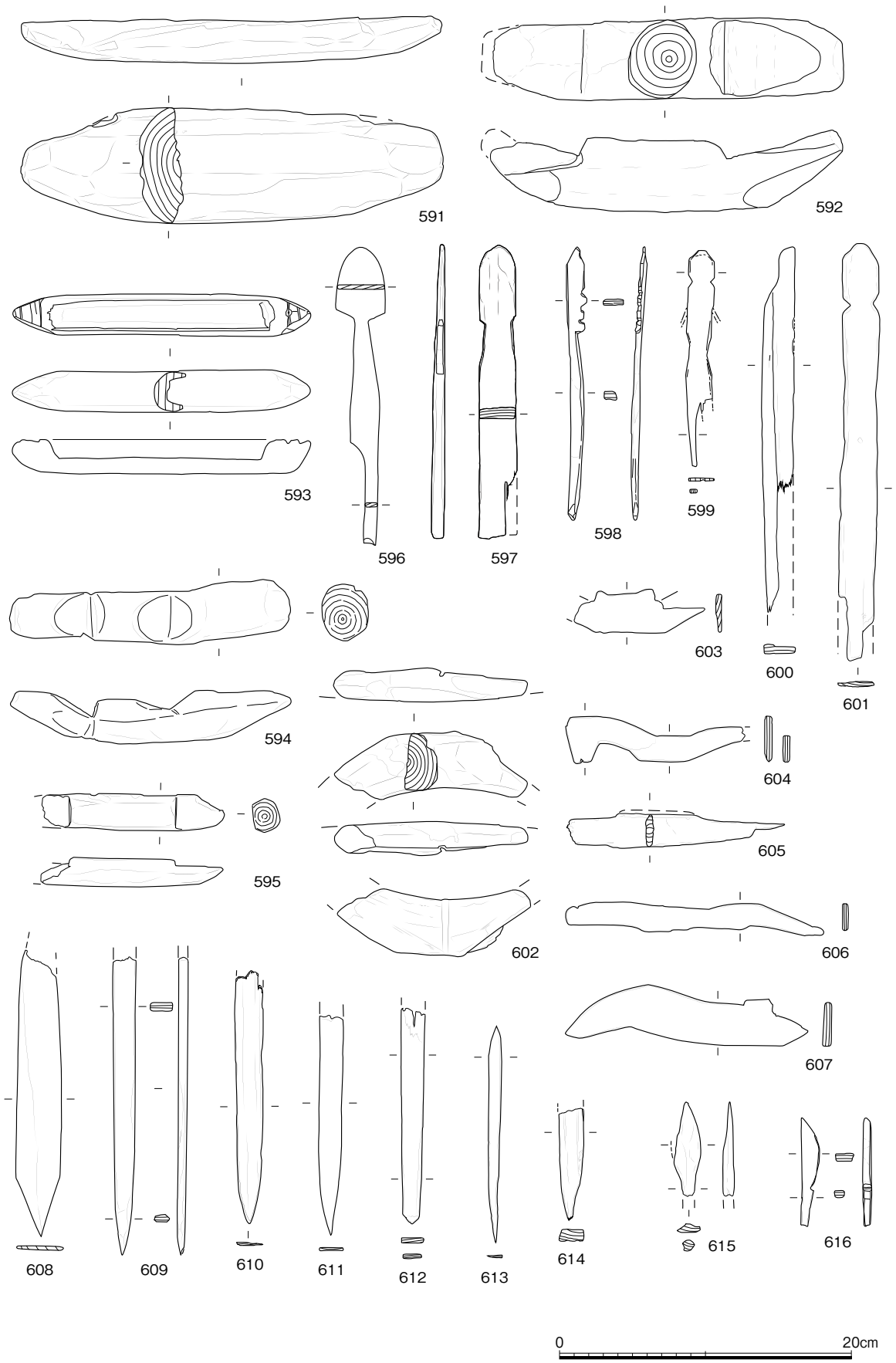


fig. 143　B80-B区出土木製品（4）

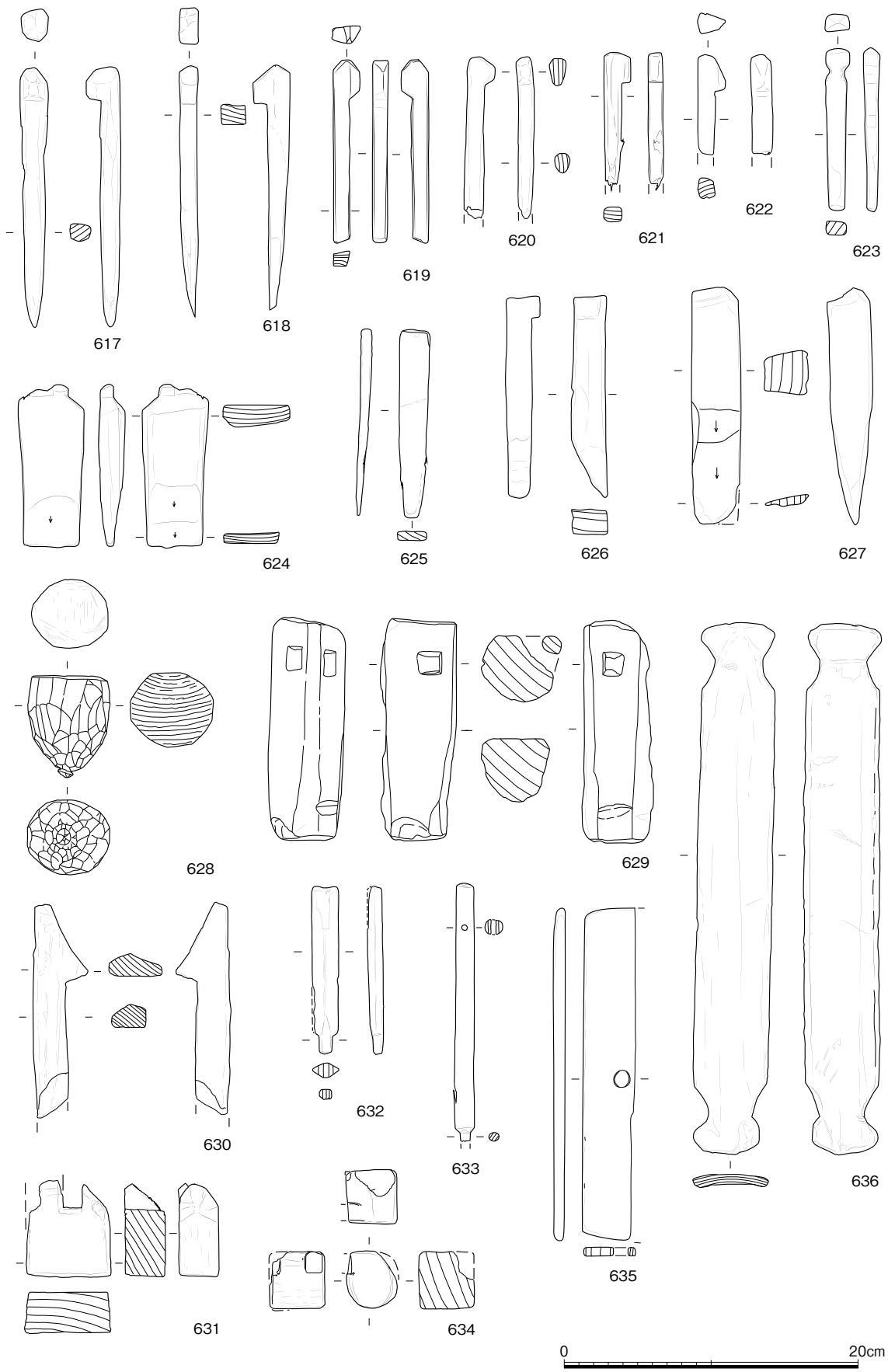


fig. 144　B80-B区出土木製品（5）

B81-A区

立地

当該区から東側は、B83-A区で急激に浜堤が湿地に変換するまで、安定した浜堤が連続する。浜堤上ではピット、柱穴、土坑等が多く確認され、居住域の中心地と考えられる。

基本層序

阪神電車軌条下の盛土、近代・近世耕作土直下で古墳時代後期～奈良時代の遺構面が現れ、柱穴・ピットが多数検出される（第1面）。この遺構面を除去すると、細い溝や、土坑・ピットが確認できる（第2面）。以下は浜堤堆積層である細砂・中砂が連続する。

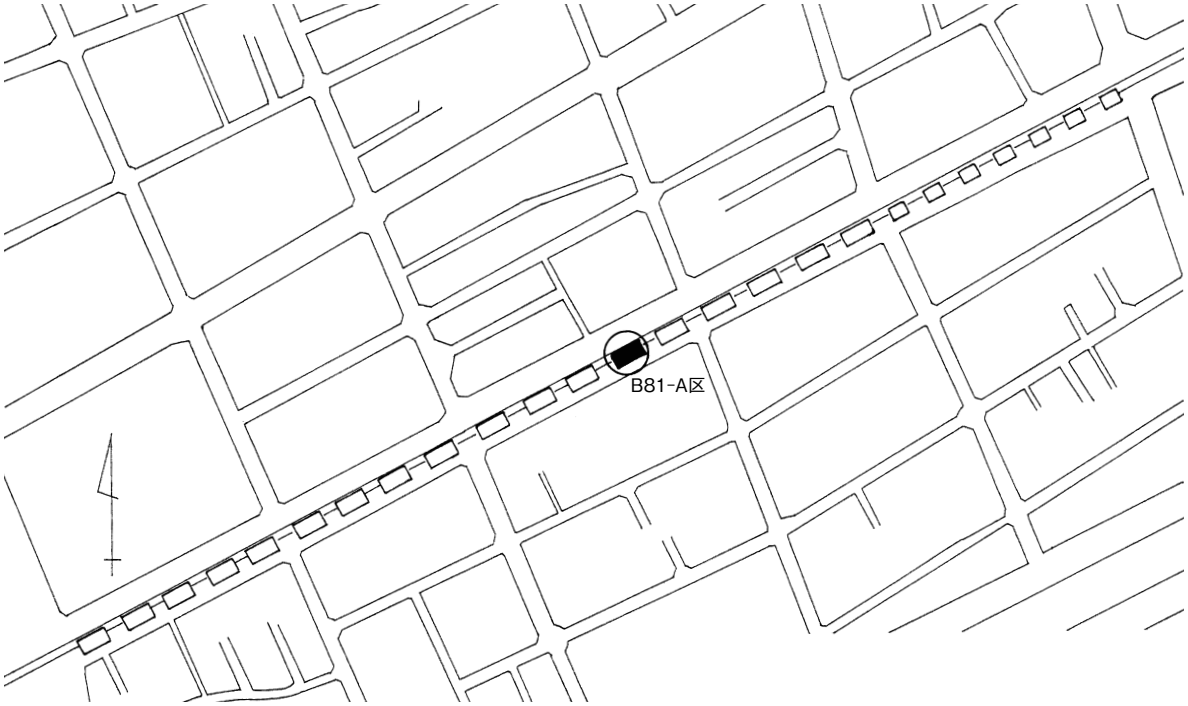


fig. 145　B81-A区位置図

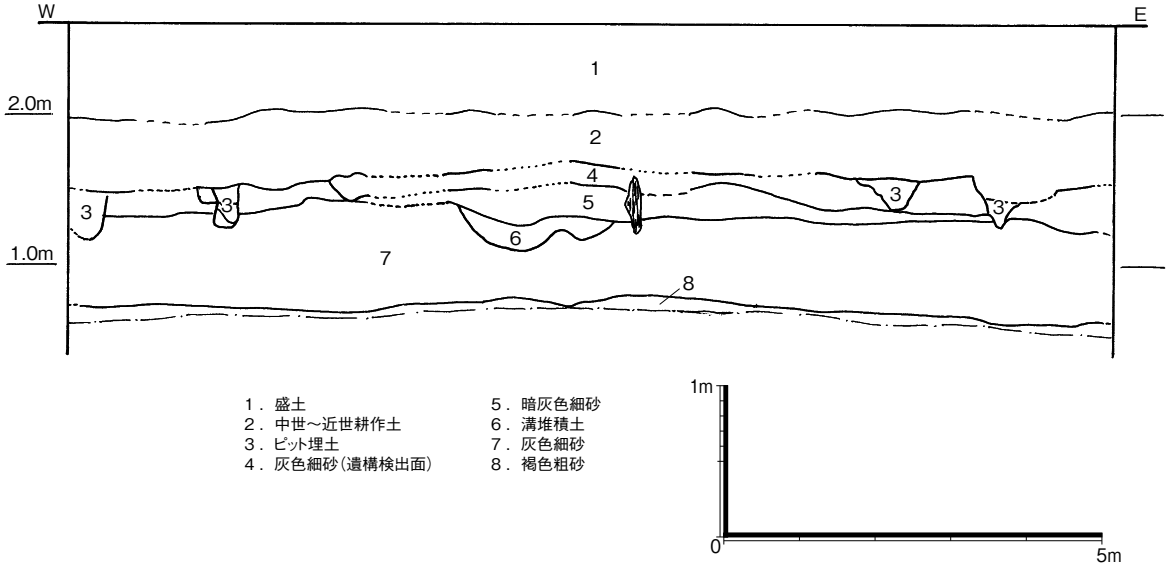


fig. 146　B81-A区北壁断面図

柱穴・ピット（第1面）

近代～近世耕作土直下で、柱穴・ピットが確認される。北西から南東に列状に複数のピットが連続する箇所があり、柵が何度か造り替えられたと推定される。

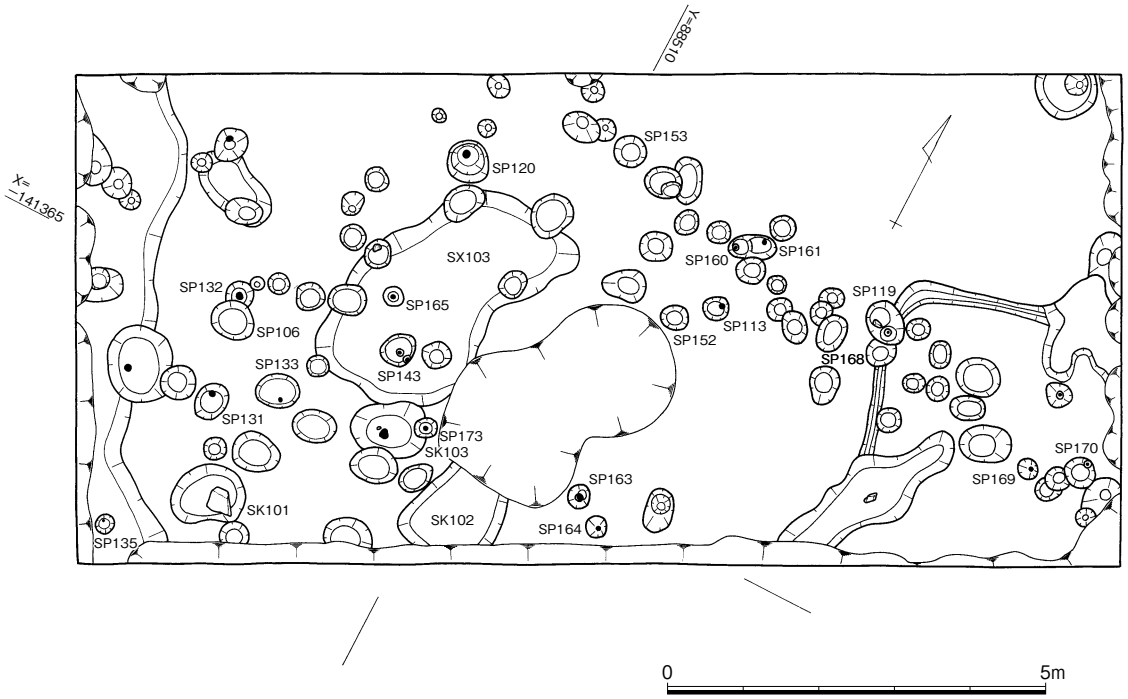


fig. 147　B81-A区柱穴・ピット平面図

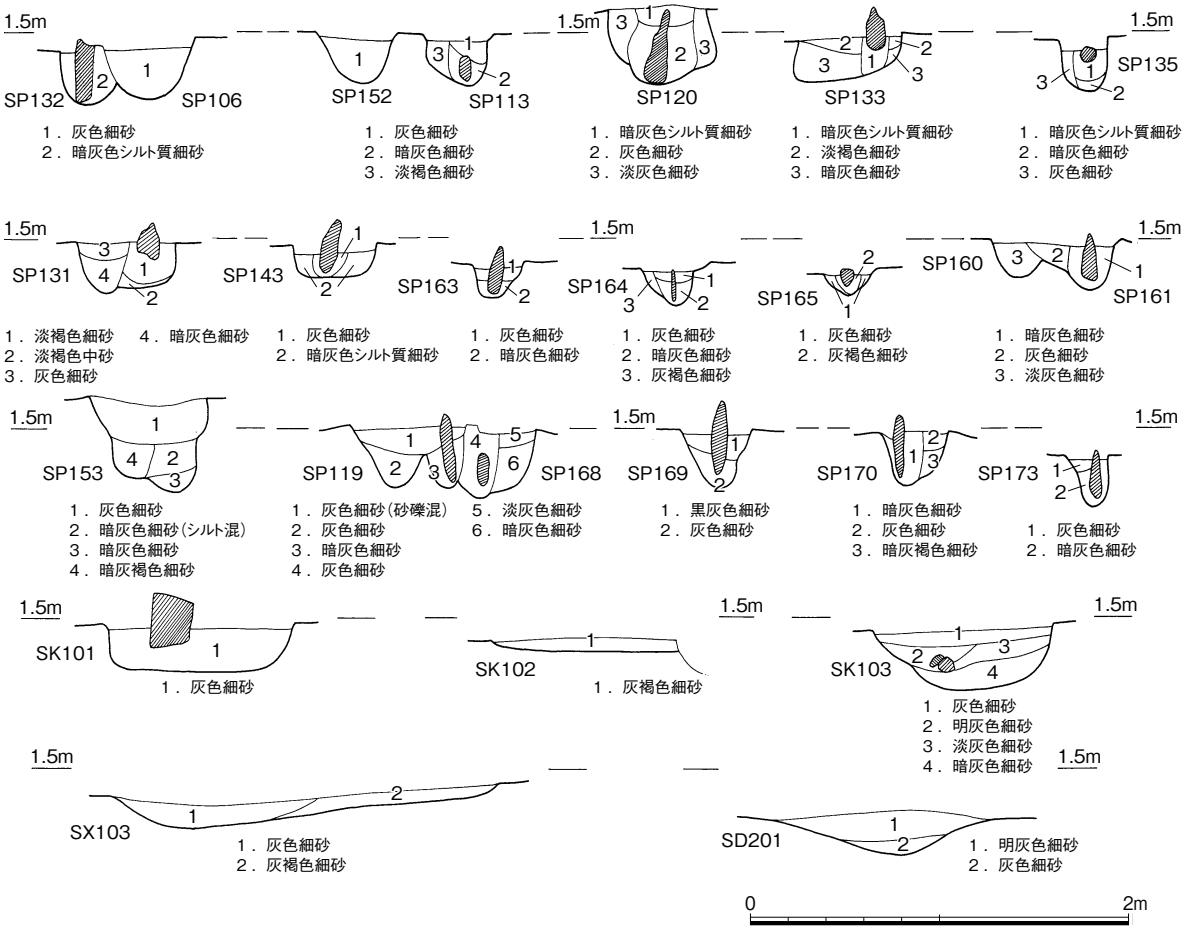


fig. 148　B81-A区柱穴・土坑・溝断面図

竪穴住居

調査区東端で竪穴住居が確認された。全体の半分以上が調査区外であるが、カマド・煙道・周壁溝を有する。住居に属するとみられる柱穴は1箇所確認されている。カマドの前面には薄い炭層が1m四方程度広がっていた。覆土内および床面から、古墳時代後期末頃の土器がわずかであるが出土している。

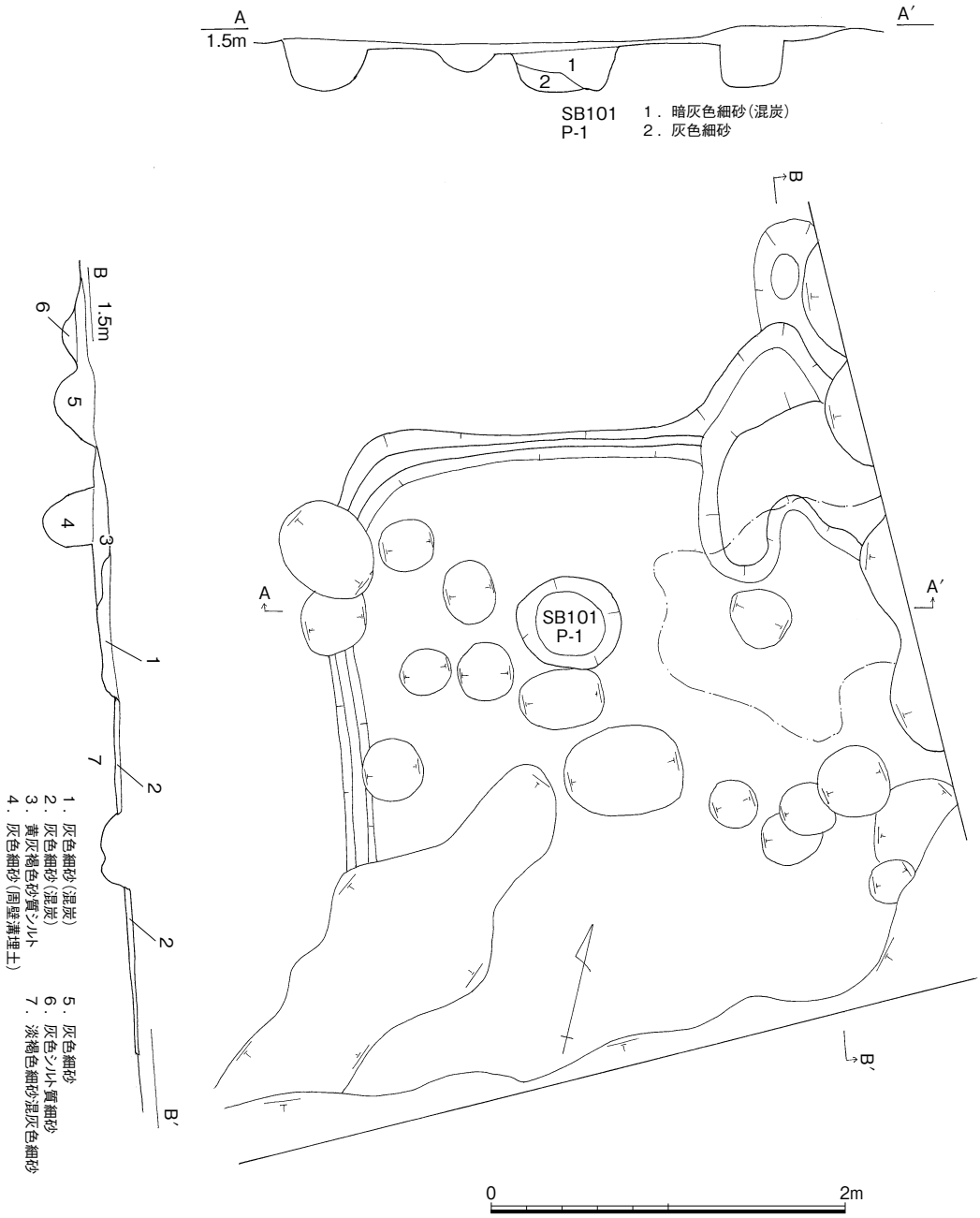


fig. 149　B81-A区竪穴住居平・断面図

溝・土坑・ピット（第2面）

当該遺構面を若干掘り下げた段階で、北東から南西へ流れる細い溝や、土坑・ピットを確認した。ピットも小型で検出状態は散漫であり、この段階では当該調査区付近が遺跡の中心地と考えることはできない。出土遺物は少ないが、古墳時代後期頃の遺構であると判断される。

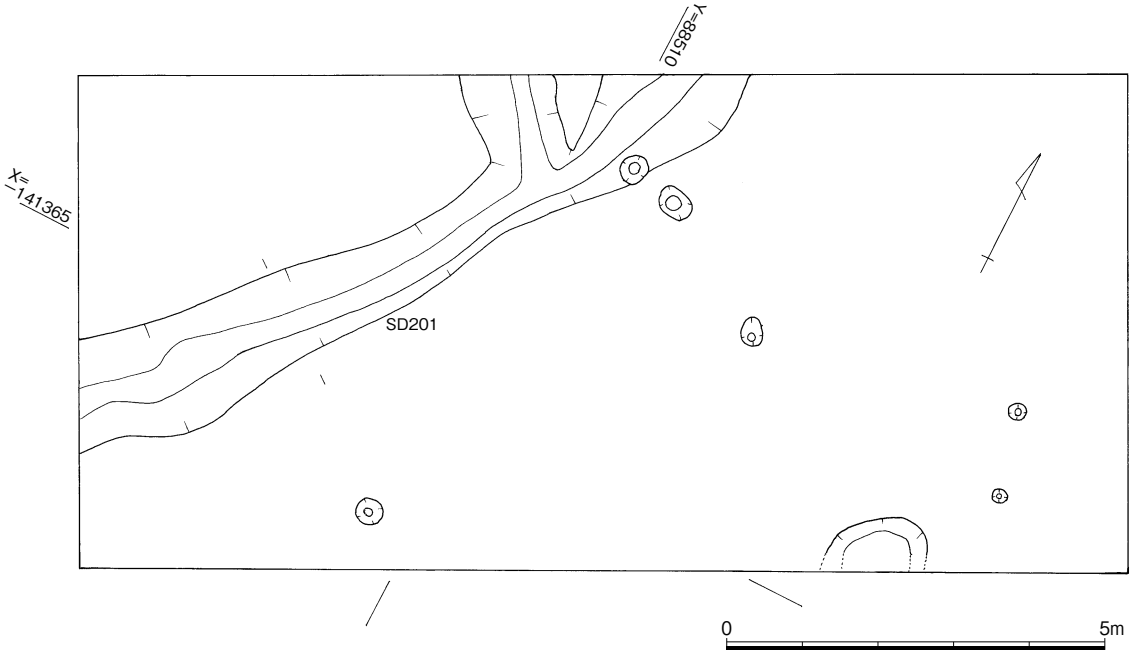


fig. 150　B81-A区溝・ピット・土坑平面図

fig. 151　B81-A区溝・土坑・ピット検出状況（南東から）

出土遺物

(1) 土器

当調査区は浜堤上に位置するため、古墳時代後期～奈良時代の生活面は後世の耕作等によって削平され、明瞭な遺物包含層というべき土層は残っていない。図示した土器はほとんどが遺構面検出中に出土したものである。

638～644は須恵器、645は弥生土器である。638は坏蓋で、扁平なつまみを持つ。639は高台を持つ坏で、底部は回転ヘラ削りで仕上げる。いずれも奈良時代のものと判断される。

640，641は坏で640は短い立ち上がり、641は長い立ち上がりを持つ。642～644は坏蓋で、小ぶりな642，644とやや大型の643に分けられる。641は古墳時代後期、640，642～644は飛鳥時代のものと考えられる。645は壺形土器で、口縁端部を垂下させ、端面に波状文と円形浮文を施す。端部上面には三角形の列点文を等間隔に刻む。頸部には凹線文が僅かに残る。弥生時代中期後半のものと思われる。浜堤堆積層を断ち割った部分から出土した。

(2) 砥石

637は遺構面直上から出土した砂岩質の砥石で、四面が平滑で、擦過痕が無数に残っている。

(3) 土錘・蛸壺

646，647は棒状土錘で、端部に紐通しの孔を穿つ。648は管状土錘である。649は有溝土錘で、四角い断面の二面に溝を有する。全体に摩滅が激しい。650は須恵質，651は土師質の蛸壺である。

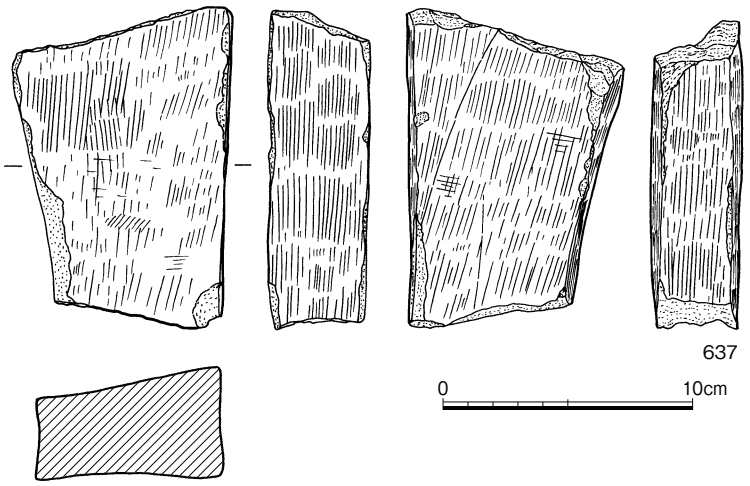


fig. 152　B81-A区出土砥石

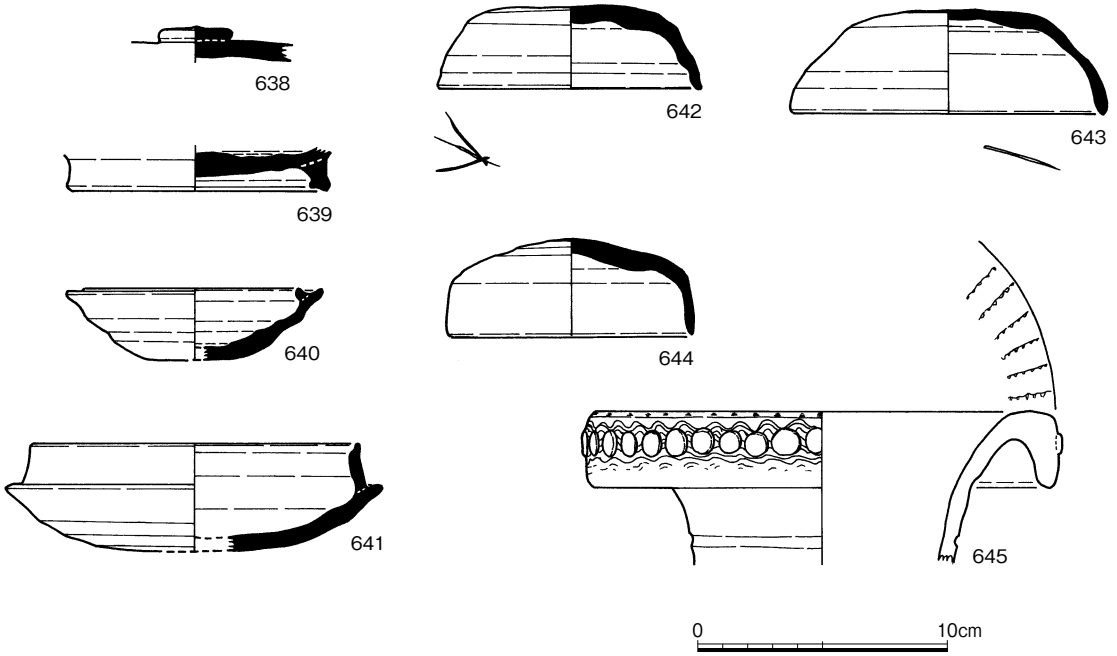


fig. 153　B81-A区出土土器

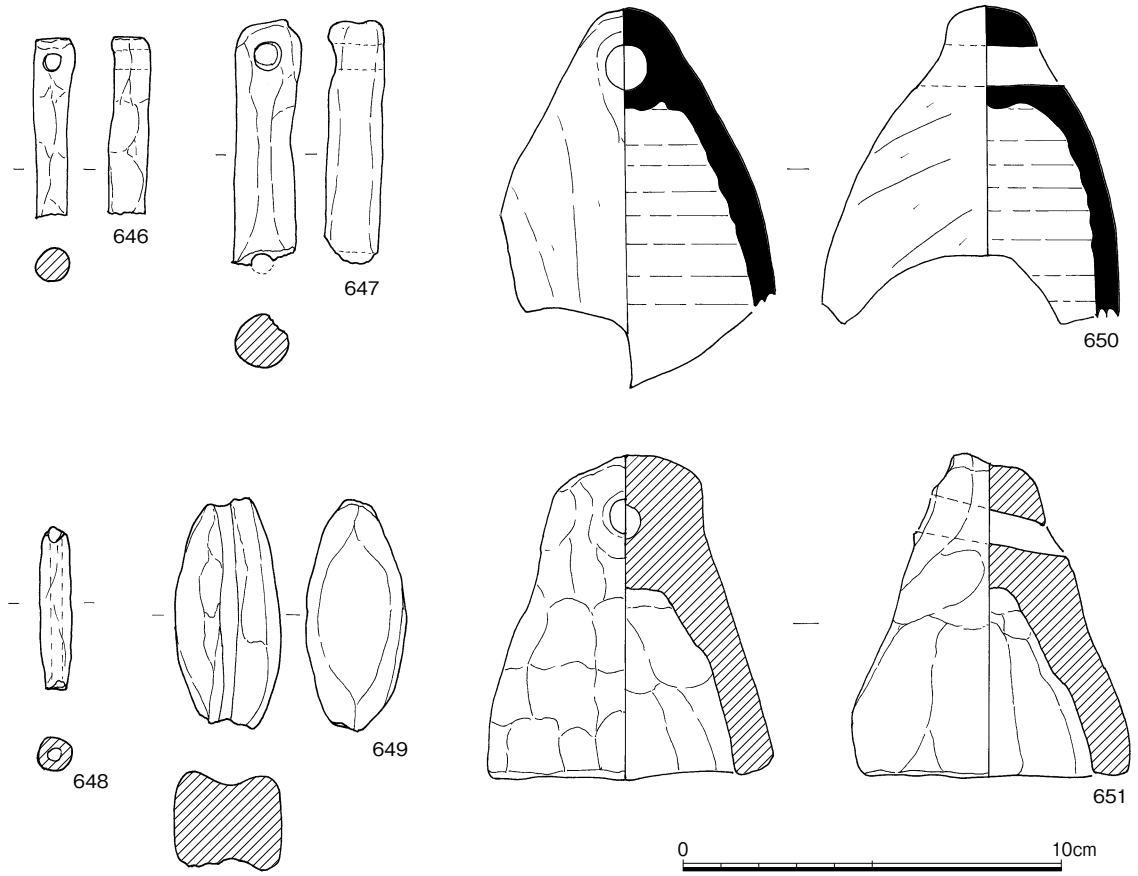


fig. 154　B81-A区出土土錘・蛸壺

fig. 155　B81-A区北壁断面

B81-B区

立地

当該区付近は安定した浜堤が続き、古墳時代後期～奈良時代の遺構が密に発見されている。

基本層序

阪神電車軌条の盛土下は近世・近代の耕作土、中世耕作土が現れる。その下は浜堤の堆積層（黄灰色中砂）となり、この上面で柱穴・ピットを確認する。その下はしばらく中砂が続き、T.P.0.8～1m前後で粗砂に変わり、T.P.0.2m前後で北東から南西方向に黒いシルトの帯状の堆積が上下二段で確認され、この堆積は澪筋にあたる。

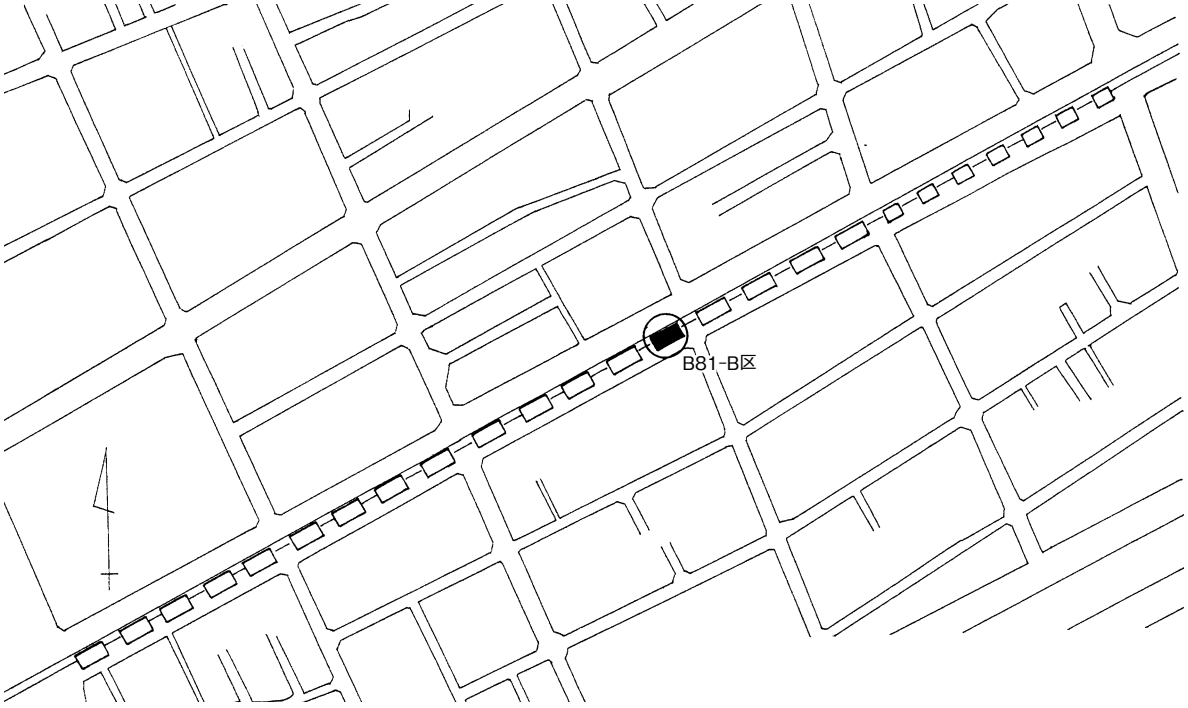


fig. 156　B81-B区位置図

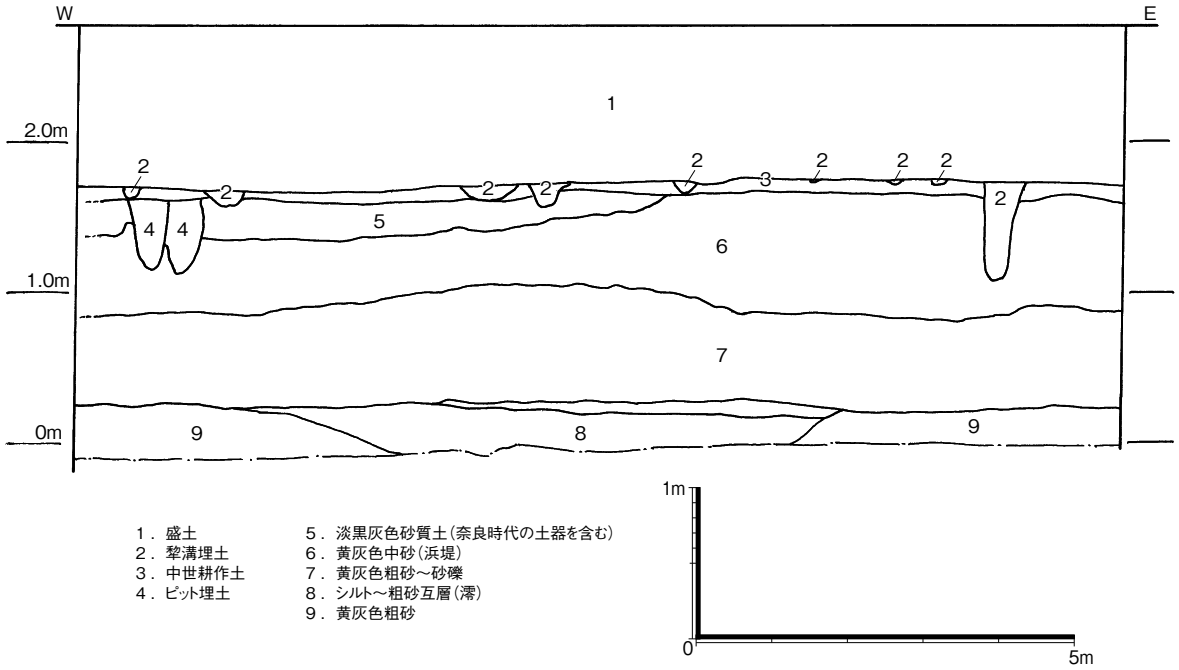


fig. 157　B81-B区北壁断面図

犂溝

中世耕作土面で南北方向の犂溝を検出した。犂溝は幅約20～80㎝前後であり、すべてがほぼ並行に走っている。溝内からはほとんど遺物が出土しない。

柱穴・ピット

中世耕作土を除去し、浜堤堆積層である黄灰色中砂上面で柱穴・ピット多数を発見した。柱穴の中には、大型の掘形のものが存在し、北西から南東方向に並ぶことから、3間以上の柱列を持つ側柱建物の可能性を持つものがあるが、断定はできない。柱穴・ピット内出土の土器からみて、奈良時代の中に納まるのではないかと考えられる。

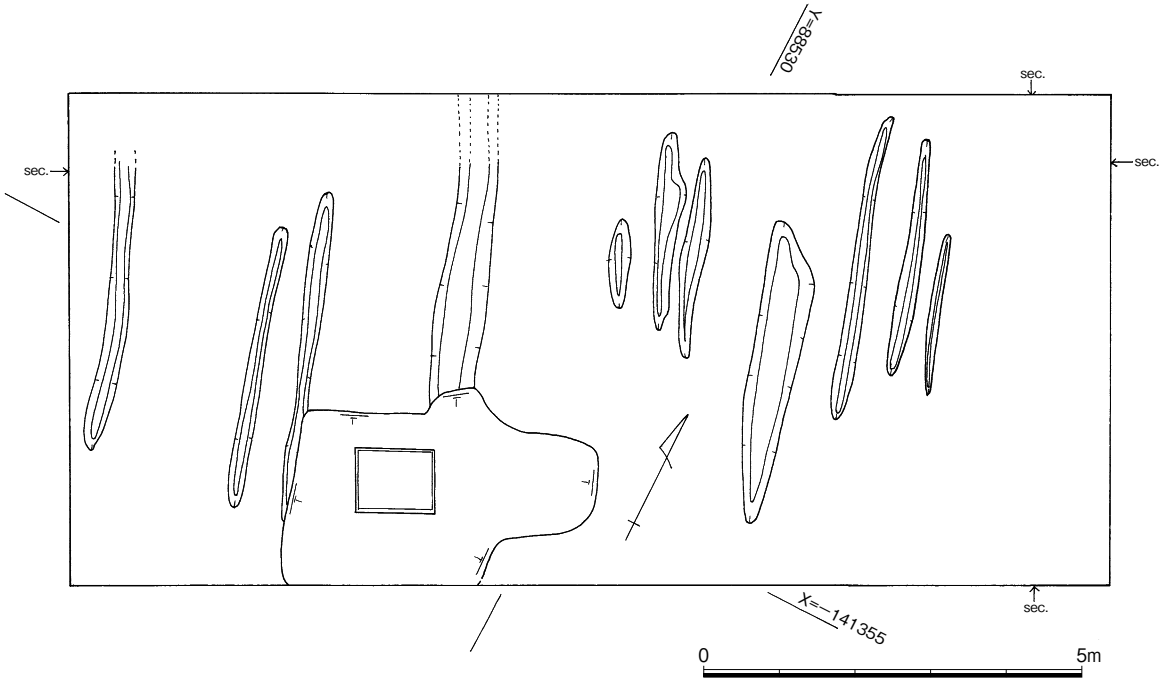


fig. 158　B81-B区犂溝平面図

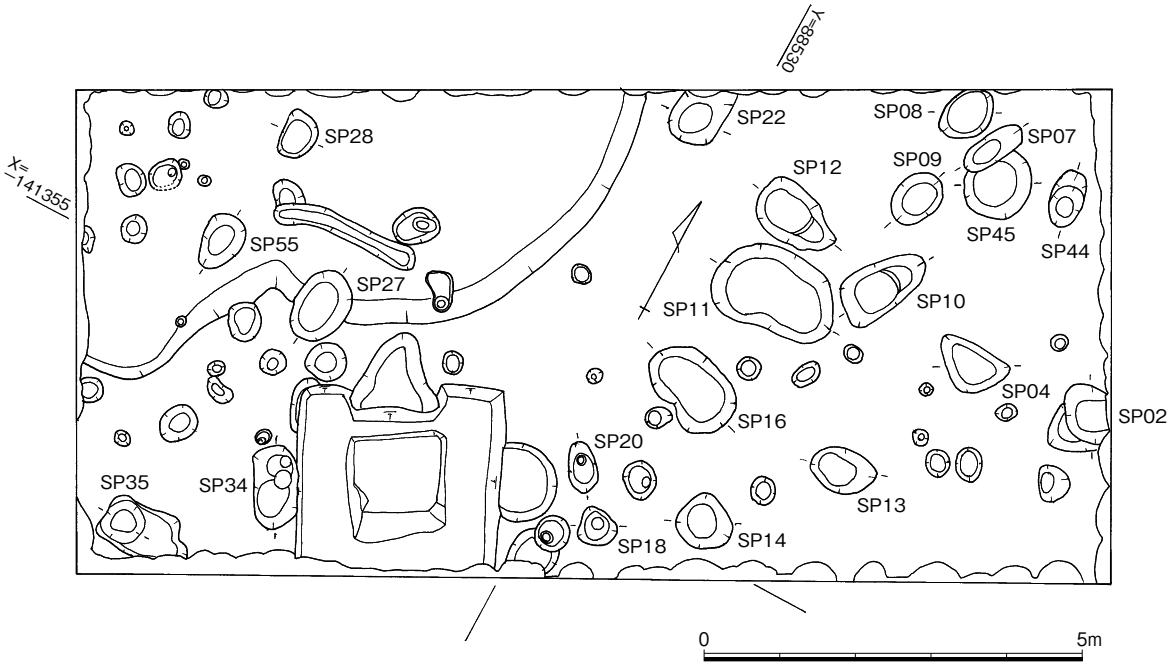


fig. 159　B81-B区柱穴・ピット検出面平面図

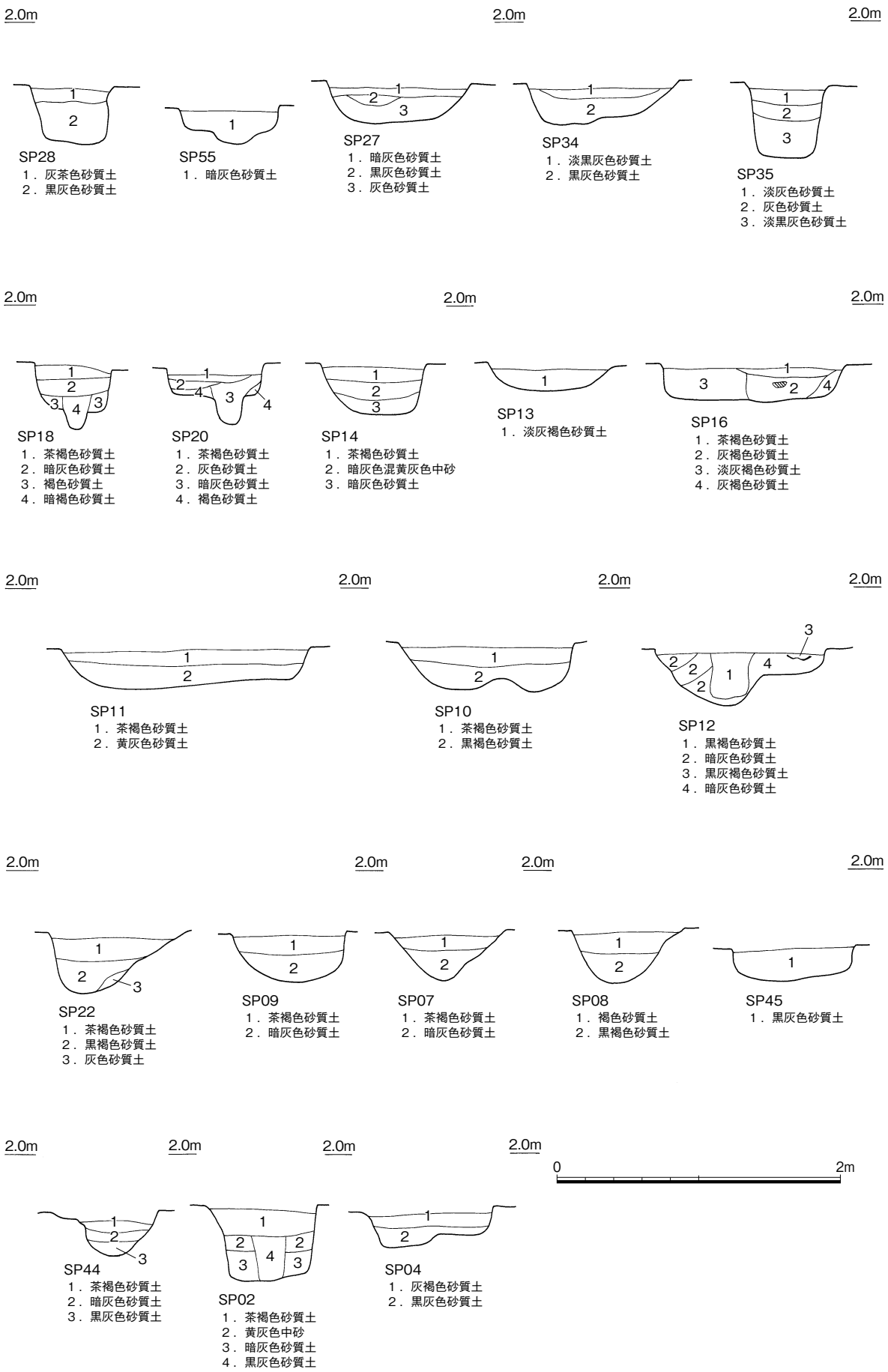


fig. 160　B81-B区柱穴・ピット断面図

祭祀場

奈良時代の遺構面である黄灰色中砂を5～10cmほど掘削した段階で、調査区南東部分から土師器甕・手捏土器を1点ずつ確認した。そのため、周辺の精査に努めたところ、その付近からは土製勾玉・小玉、棒状の鉄製品が散乱した状態で検出された。

これらの出土状況からみて、土師器甕・手捏土器付近を中心にして祭事が行われた際に、土製勾玉・小玉、鏡形土製品、棒状の鉄製品等をその周辺に置き去ったような状況が窺える。

また、少し離れたピットから手捏土器が2個体出土した。これらは古墳時代後期のものと判断される。

溝状遺構

黄灰色中砂下には黒灰色細砂（クロスナ）が堆積する。同層は調査区北東端で落ち込む。この落ち込みは土層観察用のセクションを撤去する際に、セクション内にほぼ収まる規模の溝状遺構の一部であることが判明した。溝は長さ約3m確認されている。西側は徐々に浅くなり消失する。東側も同様と思われる。

溝内からは底部を穿孔した小型丸底形土器、二重口縁の壺形土器等が底面に接して、ほぼまとまって出土した。時期は古墳時代初頭のものと判断される。

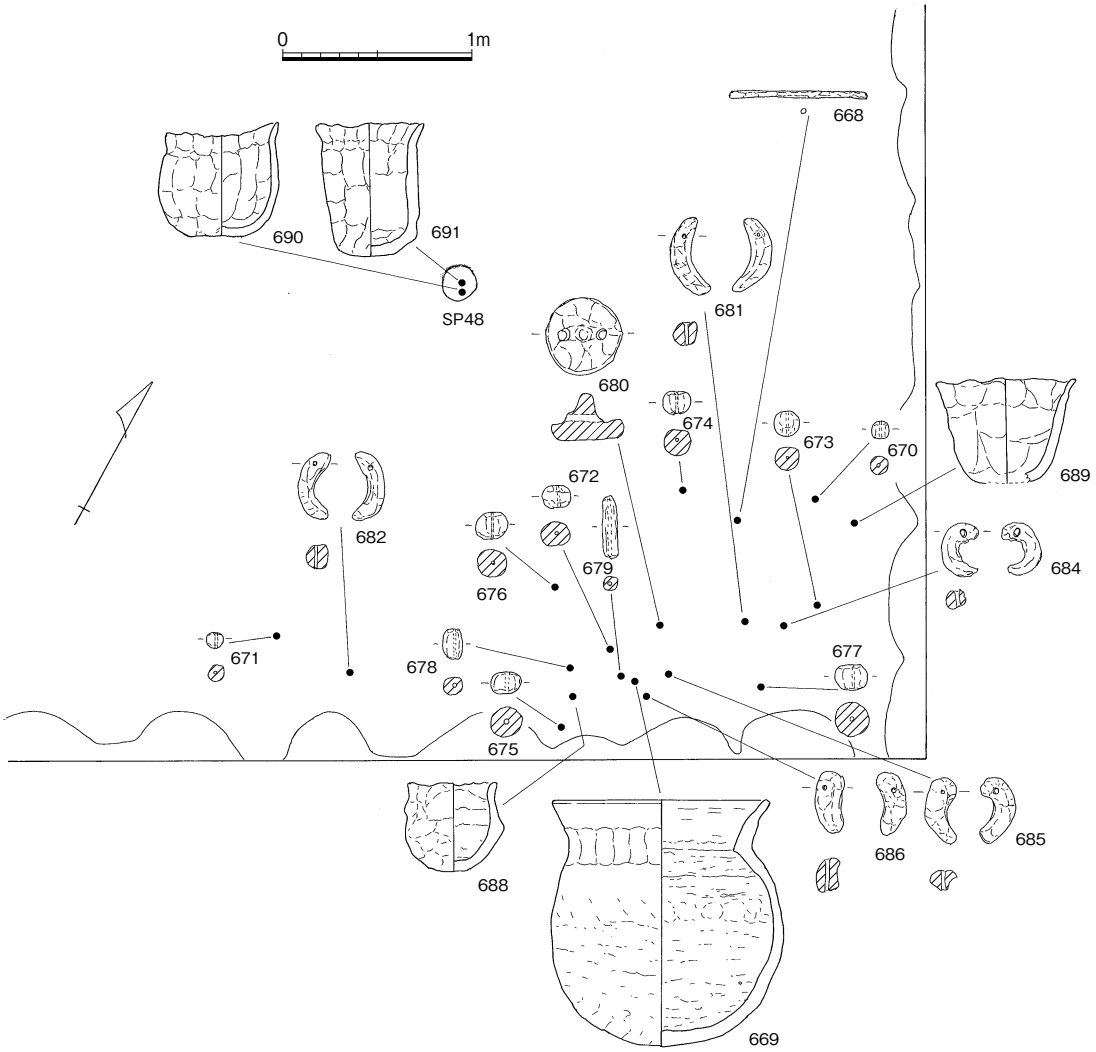


fig. 161　B81-B区祭祀遺物出土位置図（番号はfig. 166～168と同じ）

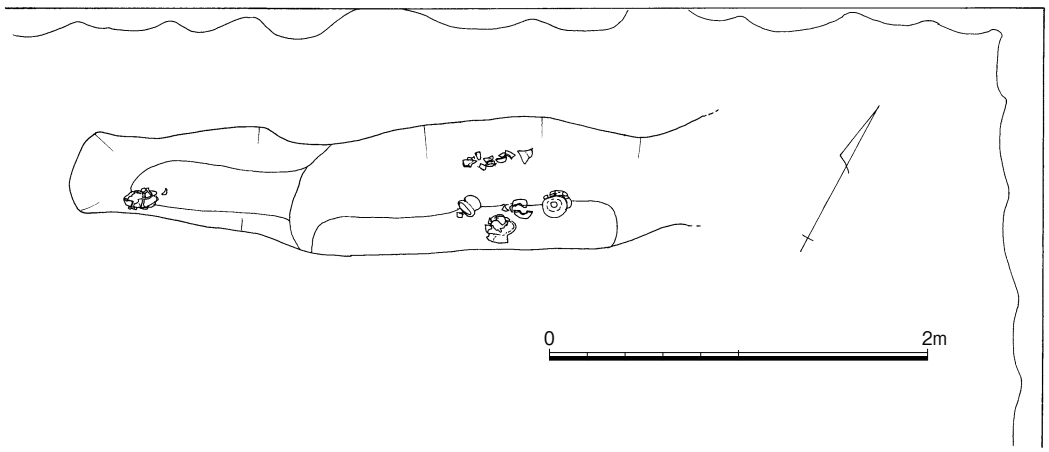


fig. 162　B81-B区溝状遺構平面図

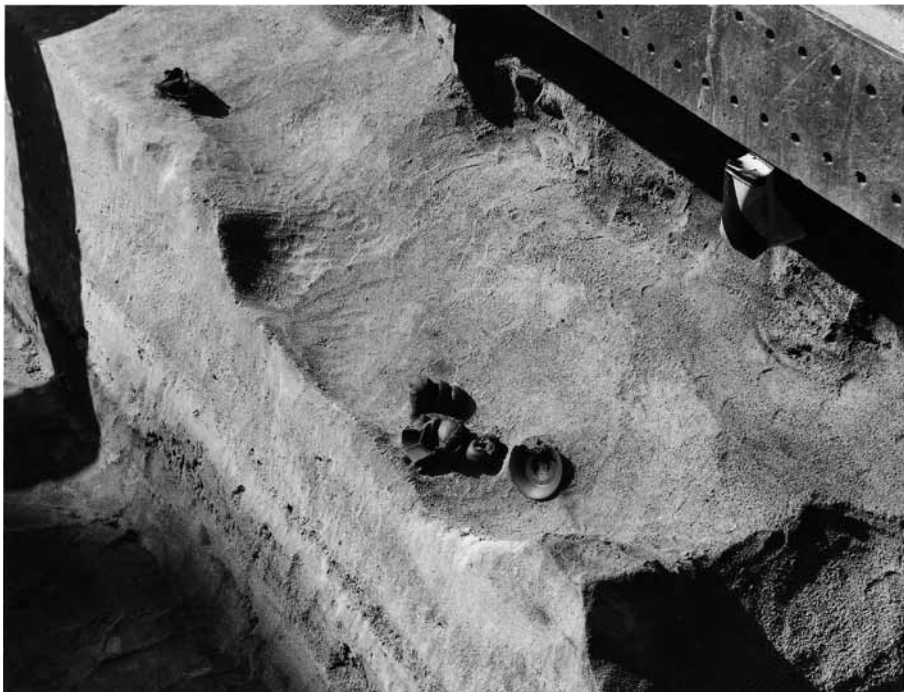


fig. 163
B81-B区溝状遺構内土器
出土状況（南東から）

出土遺物

652～654は土師質の棒状土錘で、成形した粘土棒の両端に紐通しの孔を穿がっている。652はピット、他は中世耕作土出土である。

655は土師器坏で、口縁端部は外反する。656～659は須恵器で、656は扁平なつまみを持つ坏蓋、657は高台付きの坏・盤でこれらは概ね奈良時代に収まる。

658は坏蓋で小ぶりで天井部が丸い。659は坏で短い立ち上がりを有する。いずれも飛鳥時代のものと考えられる。

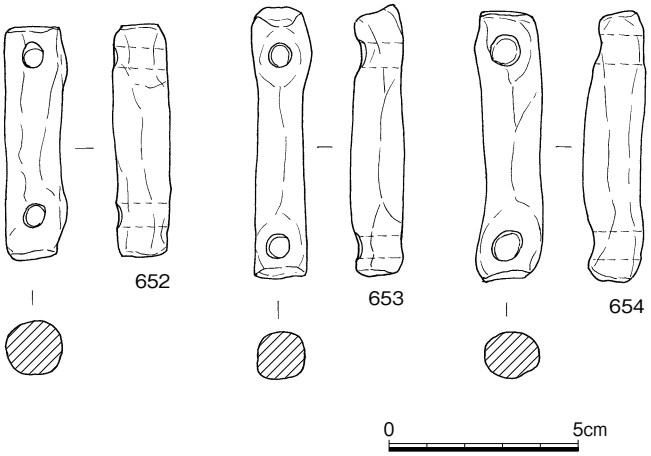


fig. 164　B81-B区出土土錘

660～667は調査区北東端のセクション内で確認された溝状遺構出土の土師器である。660，661，664は底部を焼成後穿孔の小型丸底形土器で、外面上半部はナデ、底部付近はヘラ削り、口縁内面はヘラミガキで調整を行う。665，666，667は壺形土器で、665の口縁内面は放射状のヘラミガキ、胴部はヘラミガキを行う。666は内外面共に丁寧なヘラミガキを施し、底部は焼成後穿孔している。667は二重口縁の壺形土器で、外面上半はハケ目調整、下半はヘラ削りを行う。口縁内面はヘラミガキで調整する。662は粗製の甕形土器で、内外面をヘラ削りとナデで調整する。663の器台は上層の柱穴断ち割り時に出土したが、溝付近のものと判断した。

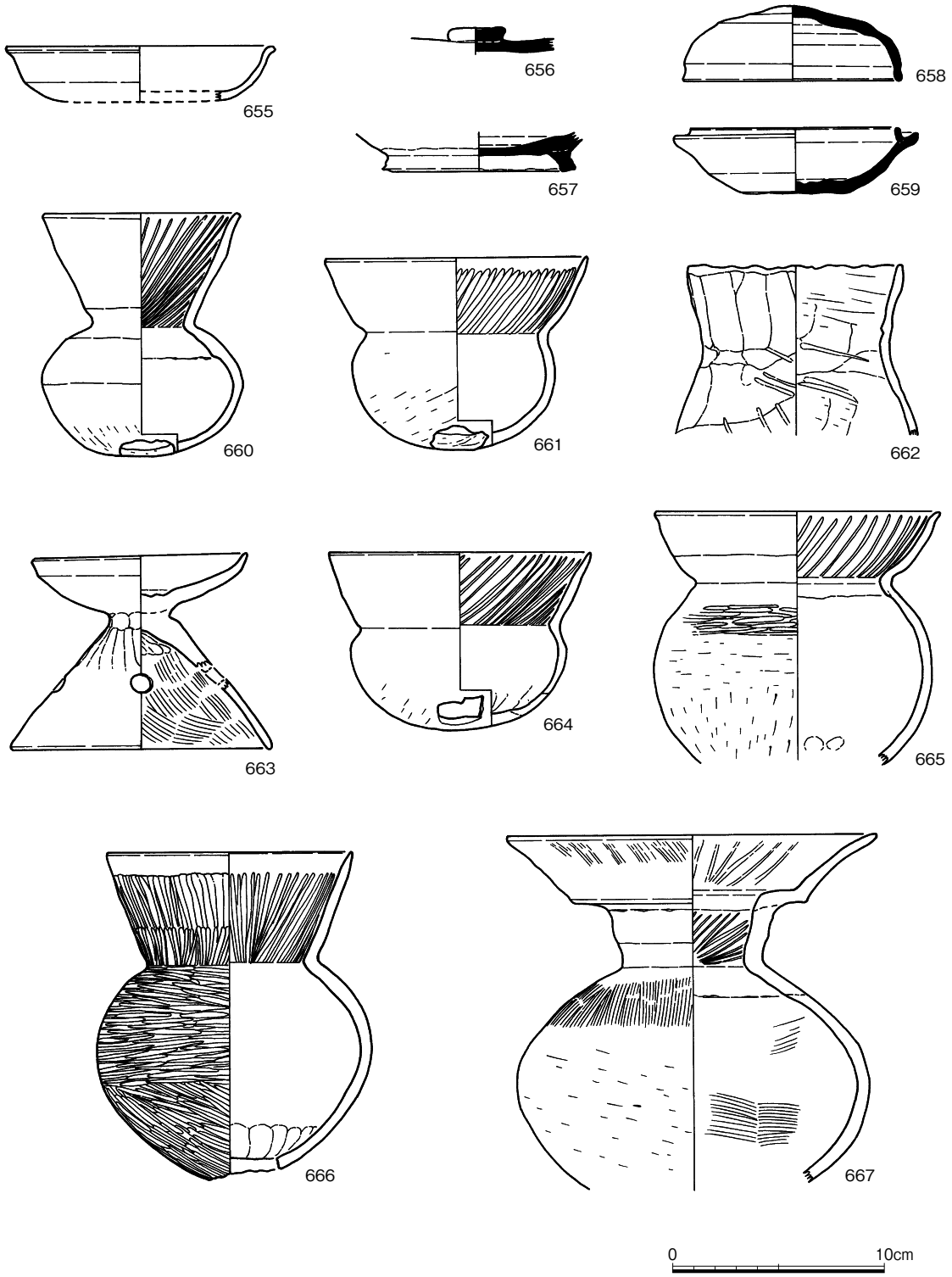


fig. 165　B81-B区出土土器

668は祭祀場出土の棒状の鉄製品で断面は円形を呈する。用途は不明である。

669～682，684～691は土師質の祭祀遺物である。669は土師器甕で、球形の胴部に外反する口縁端部を持つ。胴部内外面共にヘラ削りを行う。670～678は土製小玉、679は土製管玉、681，682，684～687は土製勾玉、680は鏡形土製品である。688～691は手捏ね土器で、690，691はピット出土である。683は滑石製の円盤であるが、祭祀場ではなく中世耕作土出土である。

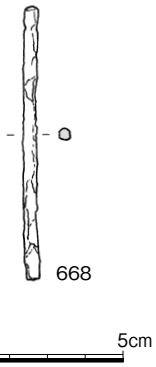


fig. 166　B81-B区祭祀場出土鉄製品

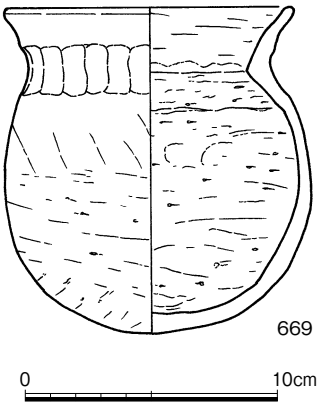


fig. 167　B81-B区祭祀場出土土器

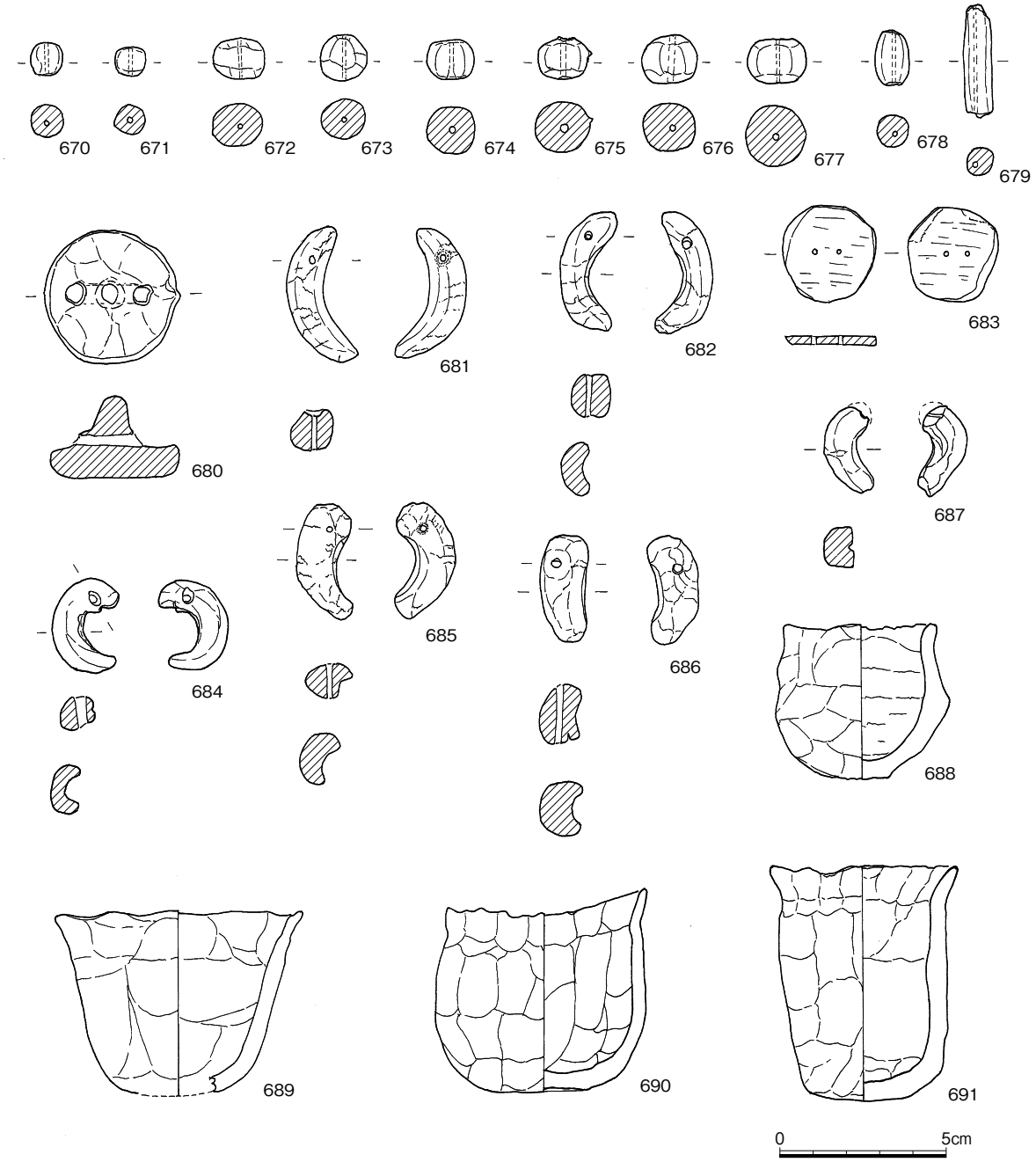


fig. 168　B81-B区出土祭祀遺物

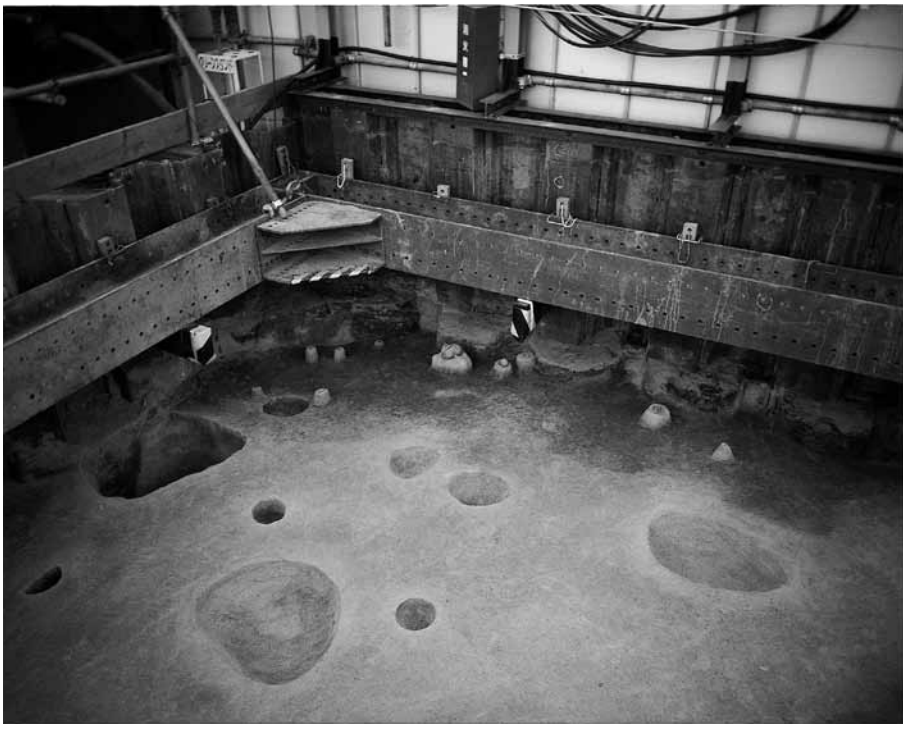


fig. 169　B81-B区祭祀場遺物出土状況（北西から）

fig. 170　B81-B区祭祀遺物検出作業

B82-A区

立地

当該区は浜堤上に位置する。奈良・平安時代頃には安定した土地となっているが、それ以前（古墳時代）は調査区東半分を土石流が通過するという不安定な状況を呈する。

基本層序

阪神電車の軌道の盛土、近代・近世耕作土の下は中世耕作土が見られる。その下は奈良～平安時代の土器を含む暗灰褐色砂質土がある。以下は西側については浜堤の中砂、東側は土石流堆積の粗砂・砂礫が堆積する。浜堤堆積層の下は土石流・高潮による土砂の流入が確認できた。

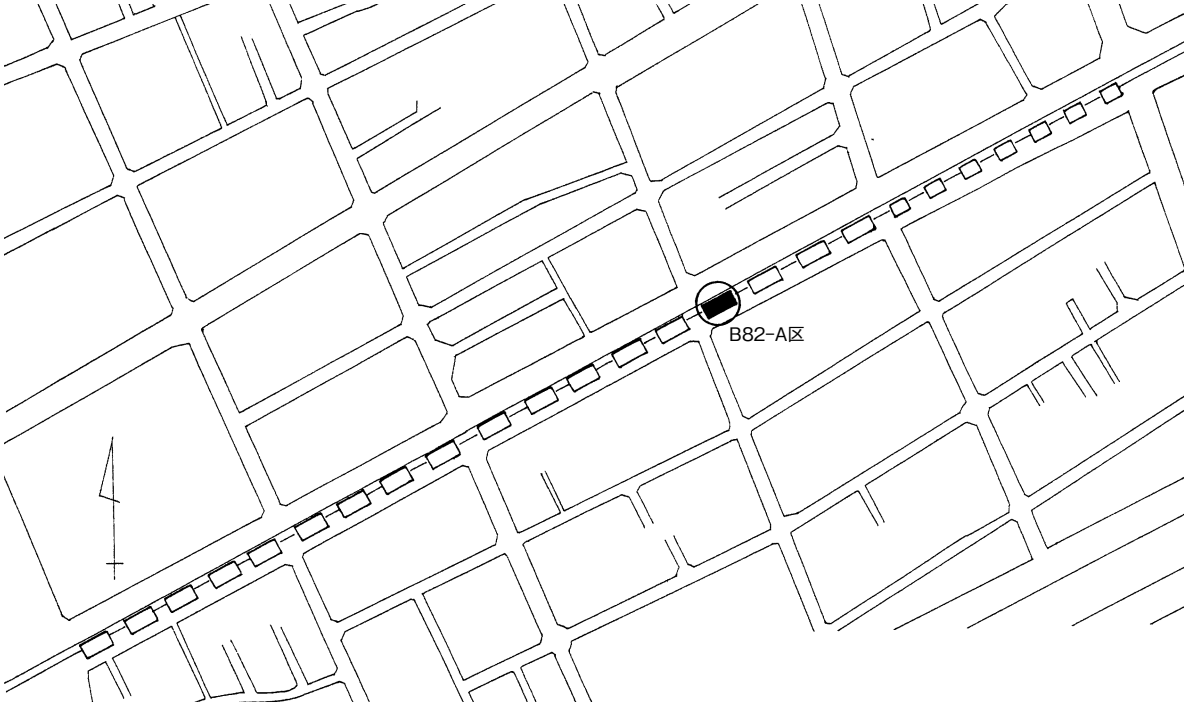


fig. 171　B82-A区位置図

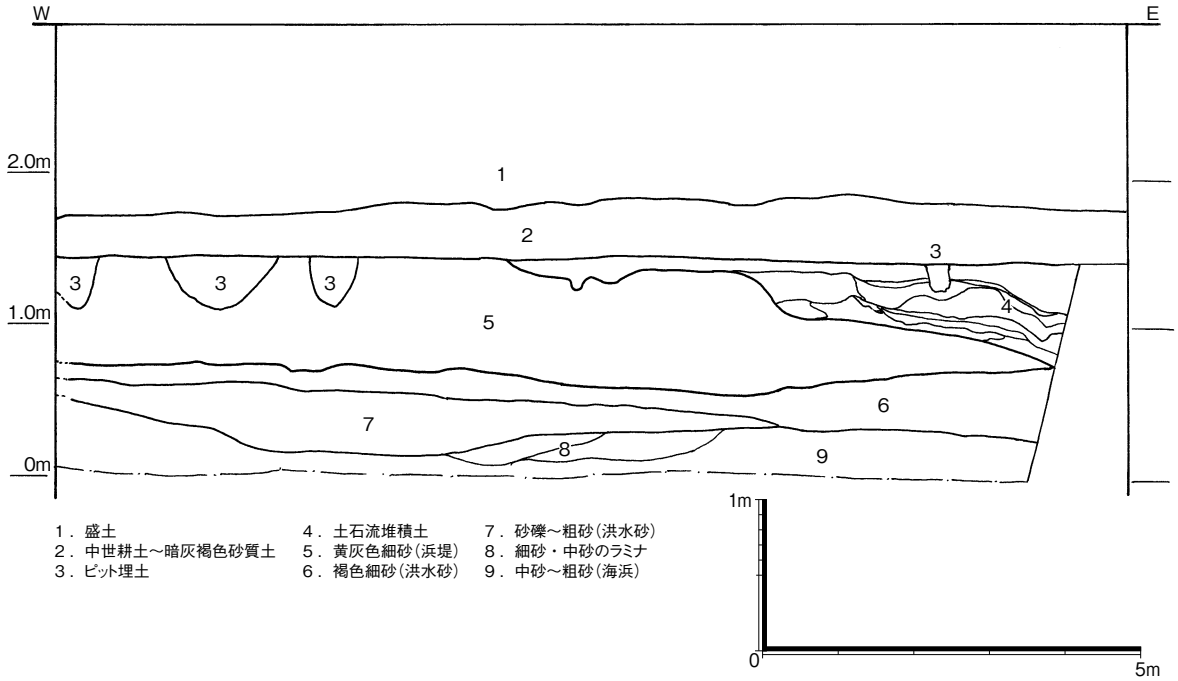


fig. 172　B82-A区北壁断面図

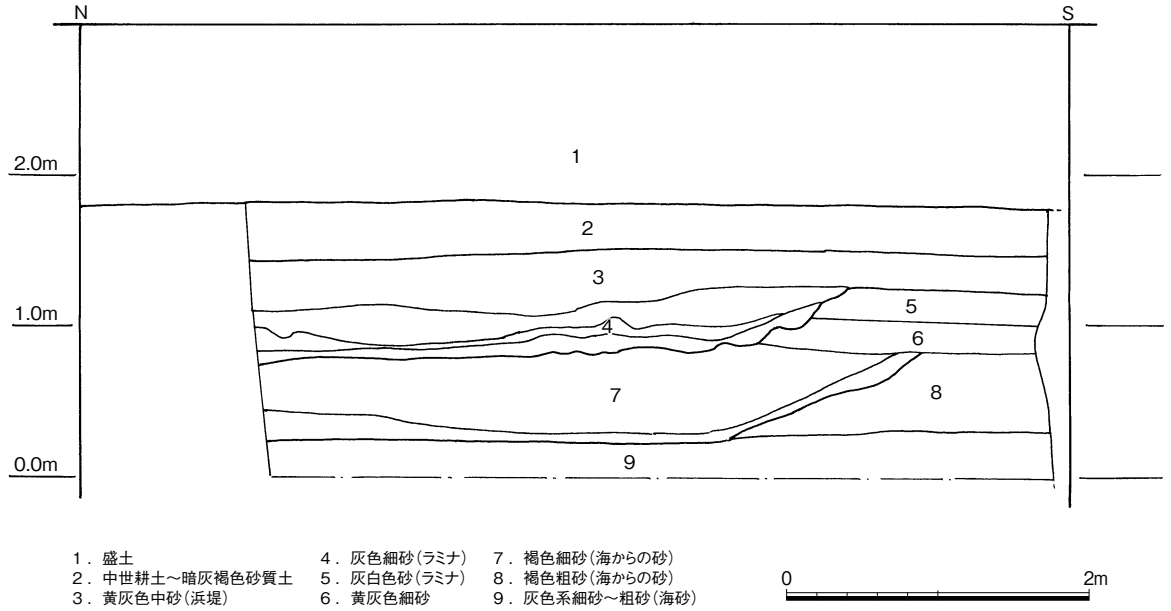


fig. 173　B82-A区東壁断面図

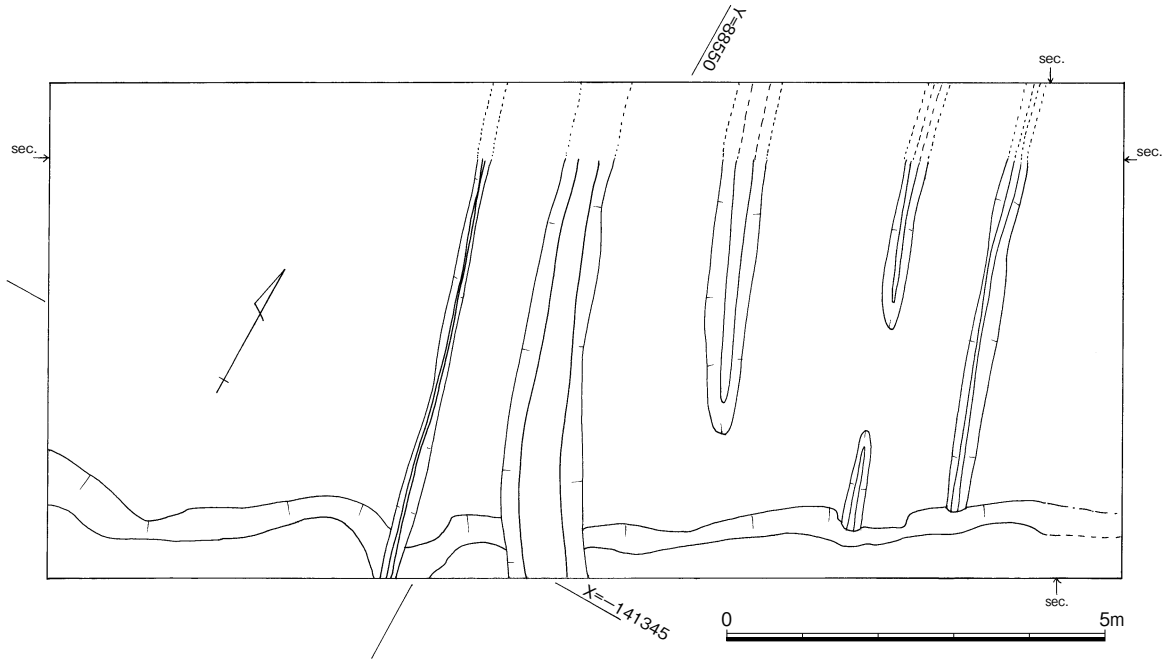


fig. 174　B82-A区犂溝平面図

犂溝

中世耕作土面で南北方向の犂溝を検出した。溝状に広がるものと浅く細いものがある。

土坑・ピット

上記土層を除去すると、調査区西半分は、浜堤の細砂、東半分は土石流の砂礫層が堆積する。この上面で土坑・柱穴・ピットを確認した。遺構は調査区のほぼ中央に帯状に検出されたが、掘立柱建物としてのまとまりは確認できない。柱穴の中には、柱材が残存するものや根石と思われる花崗岩が底に据えられたものがあった。柱穴・ピット内からの土器片から判断して時期は奈良・平安時代初めに納まると判断される。

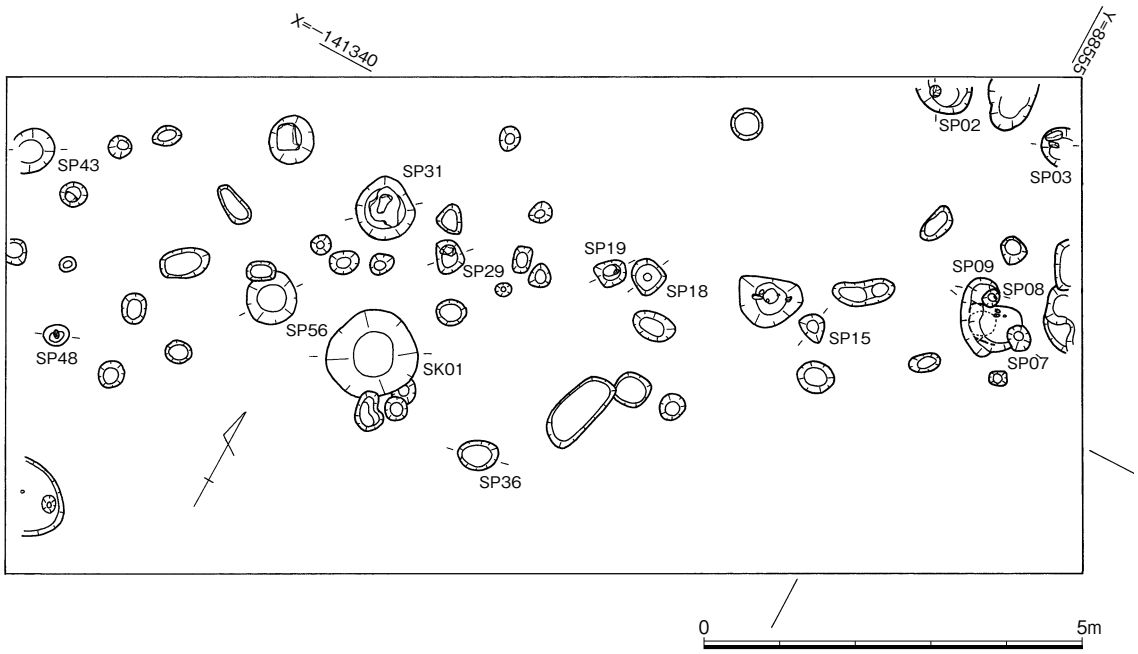


fig. 175　B82-A区土坑・ピット平面図

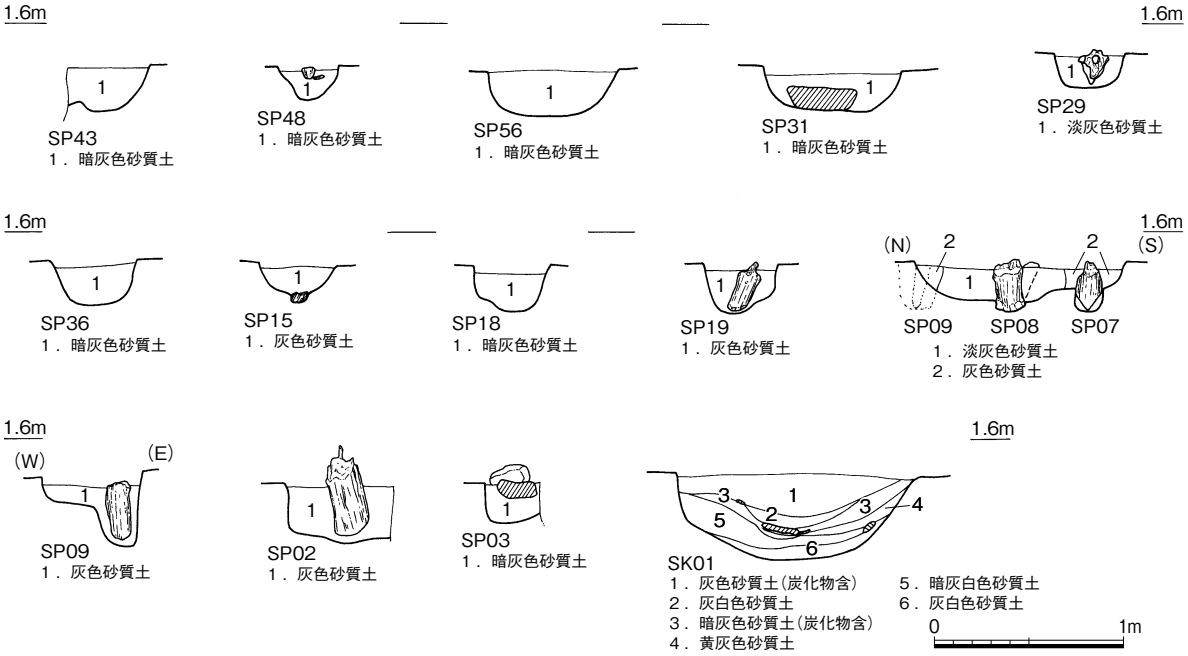


fig. 176　B82-A区土坑・ピット断面図

祭祀場

当調査区では、およそ東半分を土石流が北東から南西方向に走る。土石流の走る部分は浜堤間の窪みがあった低地にあたると考えられる。そこに堆積する土石流の土砂を除去し、浜堤の斜面を検出する過程で、斜面に転がり落ちるように、多数の手捏土器、土製勾玉、同小玉、鏡形土製品、動物（馬？）形土製品が出土した。また、浜堤上の平坦面からも同様のものが確認されており、土製品を用いた祭事がこの場所で行われたものと考えられる。祭祀遺物が発見された土石流斜面の反対側の岸では、高坏が1点出土した。祭祀遺物の時期は、古墳時代後期と判断される。

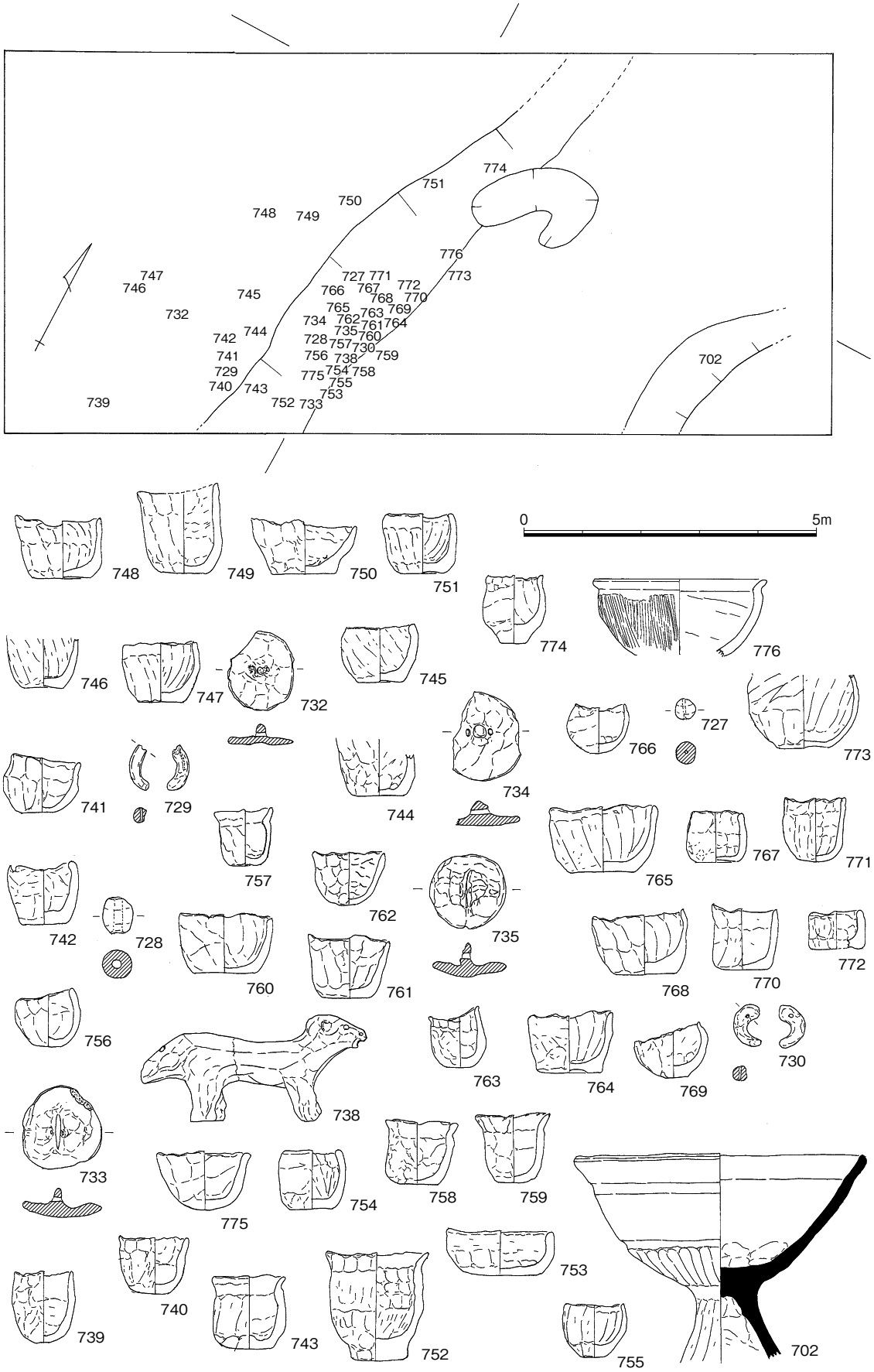


fig. 177　B82-A区祭祀遺物・土器出土位置図（番号はfig. 180, 183～185と同じ）

高潮の痕跡

当調査区では、浜堤の成り立ちや高潮の痕跡を確認することができた。浜堤が形成される以前の海の堆積が確認でき、そこに弥生時代後期の土石流が北から南へ流れ込んでいる。その後、薄く腐植土が堆積した後、嵐や津波などに起因する高潮の痕跡が確認できる。ここにも弥生時代後期末の遺物が含まれている。高潮に運ばれた細砂の上層に風性砂が堆積して浜堤を形成していった。調査区の東南では、浜堤の上層でも潮汐堆積が確認できる。浜堤が形成され陸地化が進む中でも、嵐や大潮などの際には、海からの影響を受ける地形環境であったと考えられる。

同志社大学の増田先生に堆積状況を視察いただき、浜堤の形成過程や波の方向、当時の海水面を考えるうえで貴重な資料であるとのご教示を受けた。当該地の地形の成り立ちを視覚的に後世に残すため、東壁と北壁東部で土層転写を実施した。

fig. 178
B82-A区東壁断面

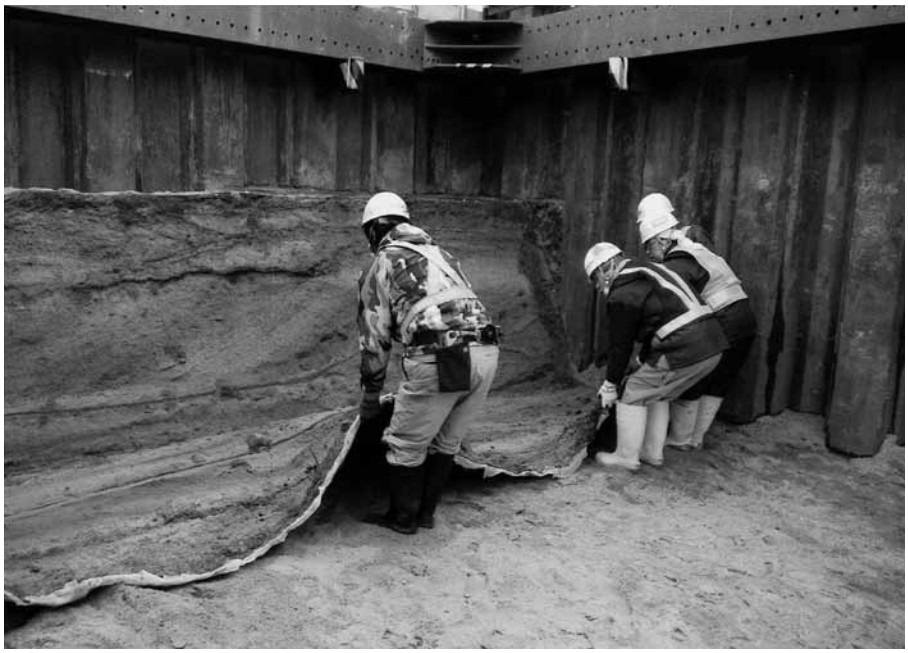


fig. 179
B82-A区東壁断面土層
転写作業

出土遺物

（1）土器・陶器

692～702までは須恵器、703～706は土師器である。692～694は坏、695，696は坏蓋である。697は灰釉陶器脚付盤、698は甕、以上は奈良～平安時代初めのものである。699は高坏、700，701は坏蓋、702は形状や調整は土師器の高坏に見えるが、焼成は須恵質である。703，704は甕形土器、705は器台で口縁部に円形浮文を貼り付ける。706は甕形土器である。これらは古墳時代初め～後期のものと判断される。

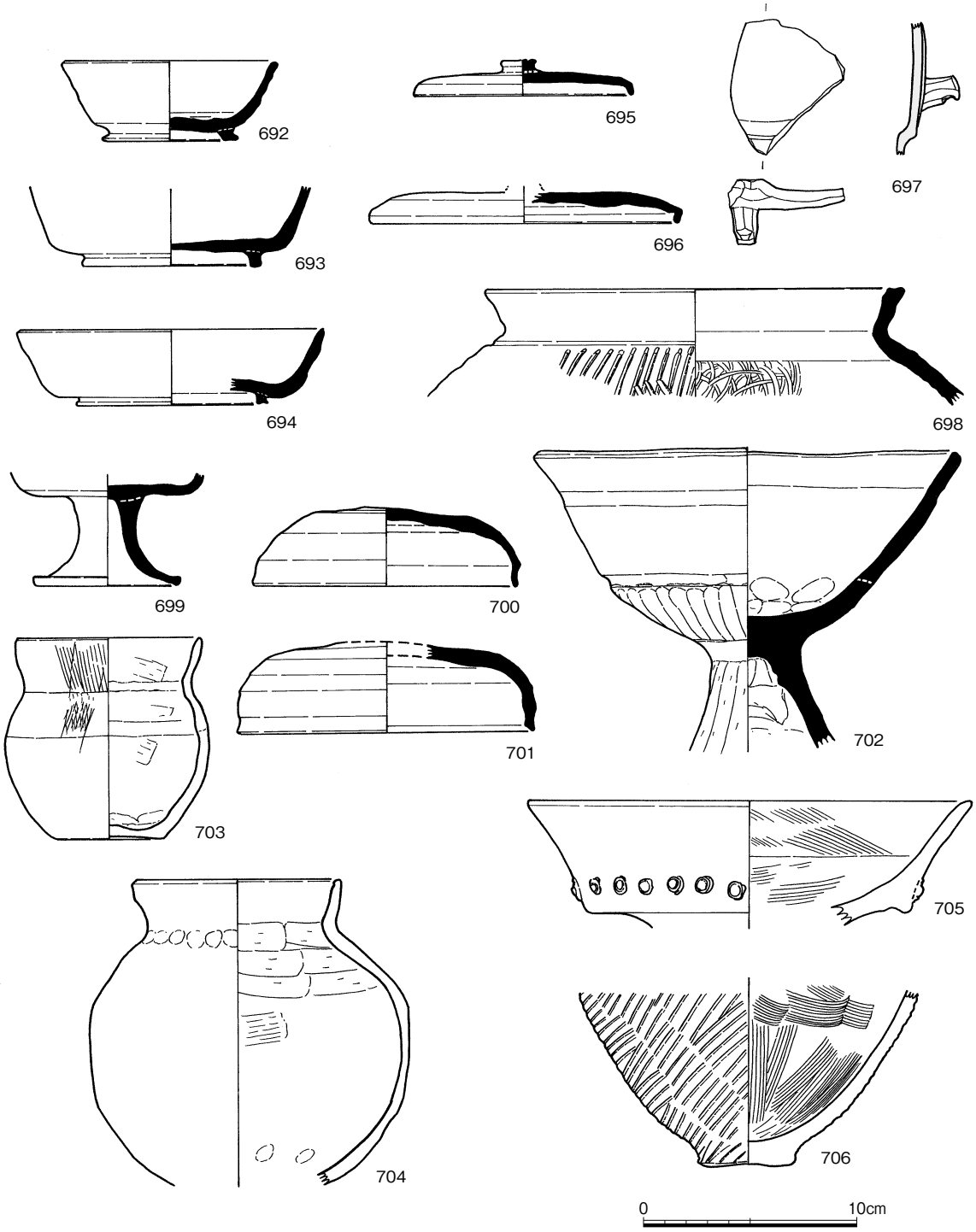


fig. 180　B82-A区出土土器

(2) 銙帯金具

暗灰褐色砂質土から出土した。縦22.5㎜、横26.5㎜の方形で、裏面に鋲留め金具がある。

(3) 土錘

708～714，724は管状土錘、715～723は棒状土錘、725は有溝土錘である。

(4) 祭祀遺物（土製品）

726～728は小玉、729～731は勾玉、732～736は鏡形、737は猪形、738は馬形、739～775，777～785は手捏土器である。

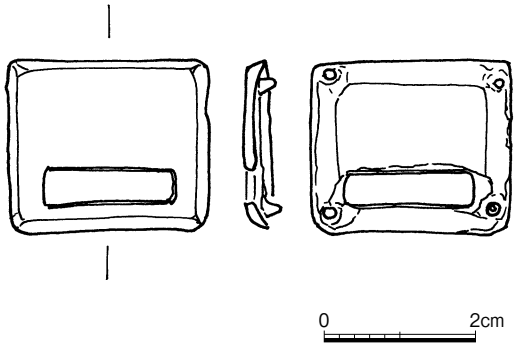


fig. 181　B82-A区出土銙帯金具

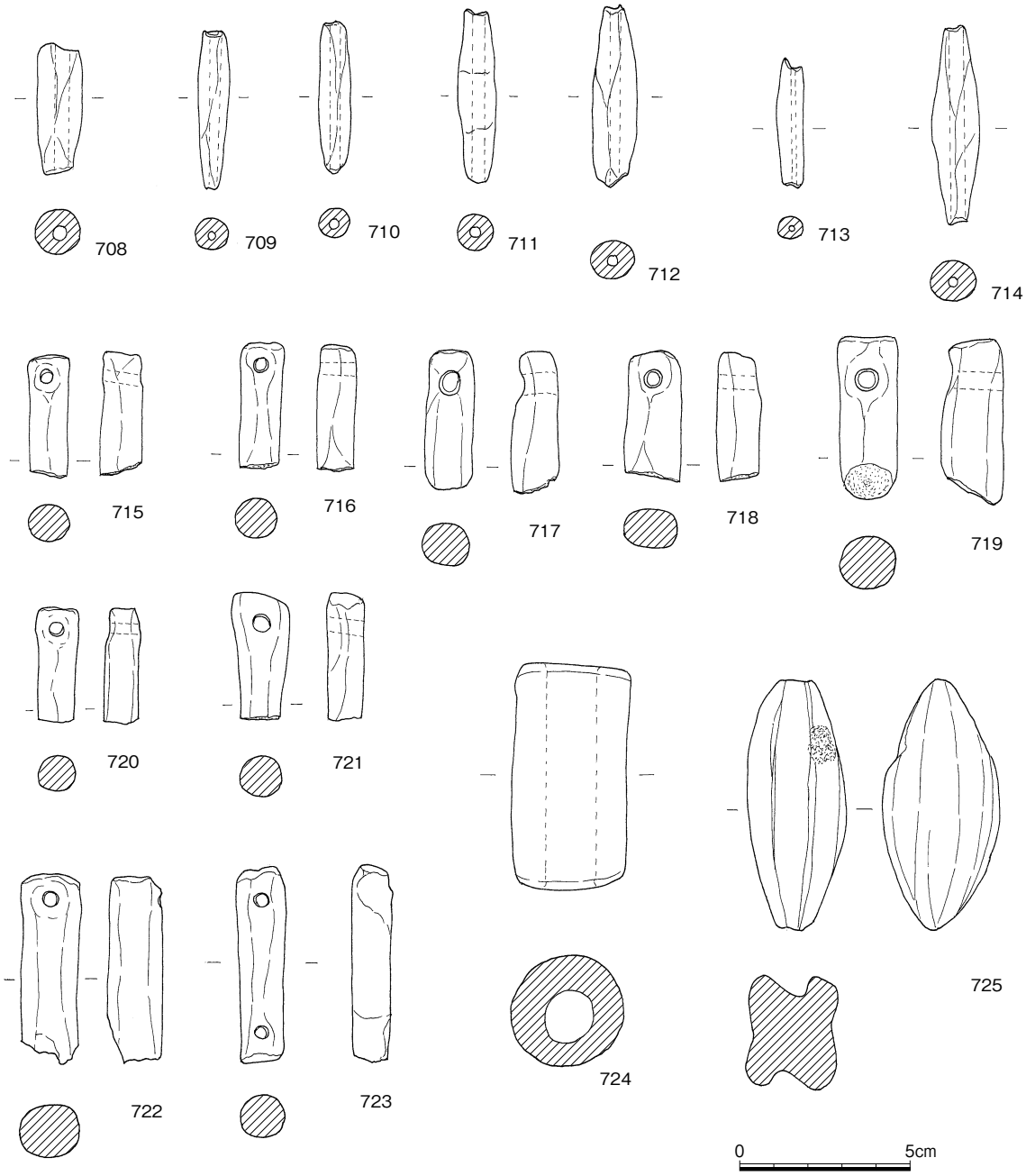


fig. 182　B82-A区出土土錘

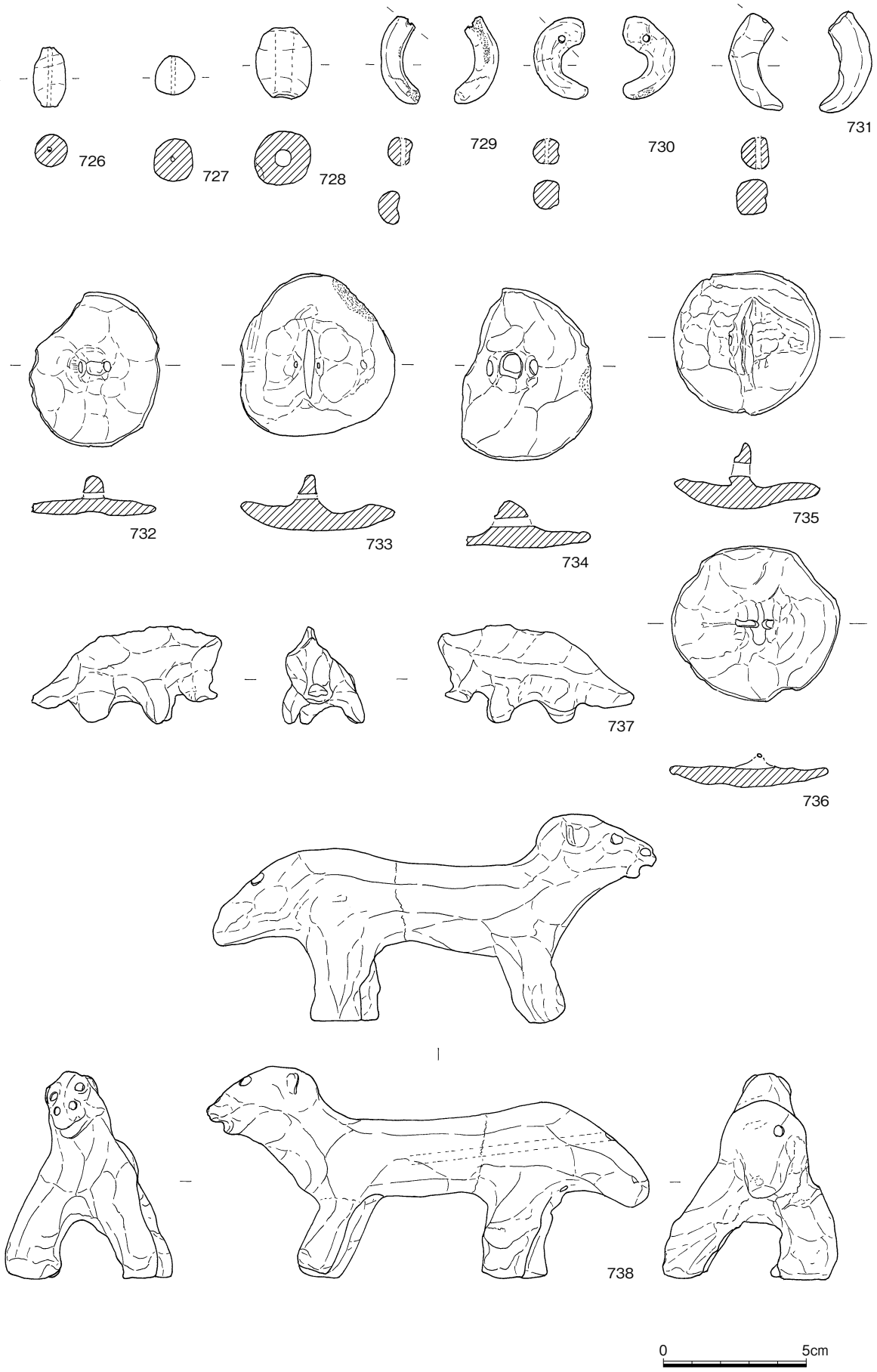


fig. 183　B82-A区出土祭祀土製品

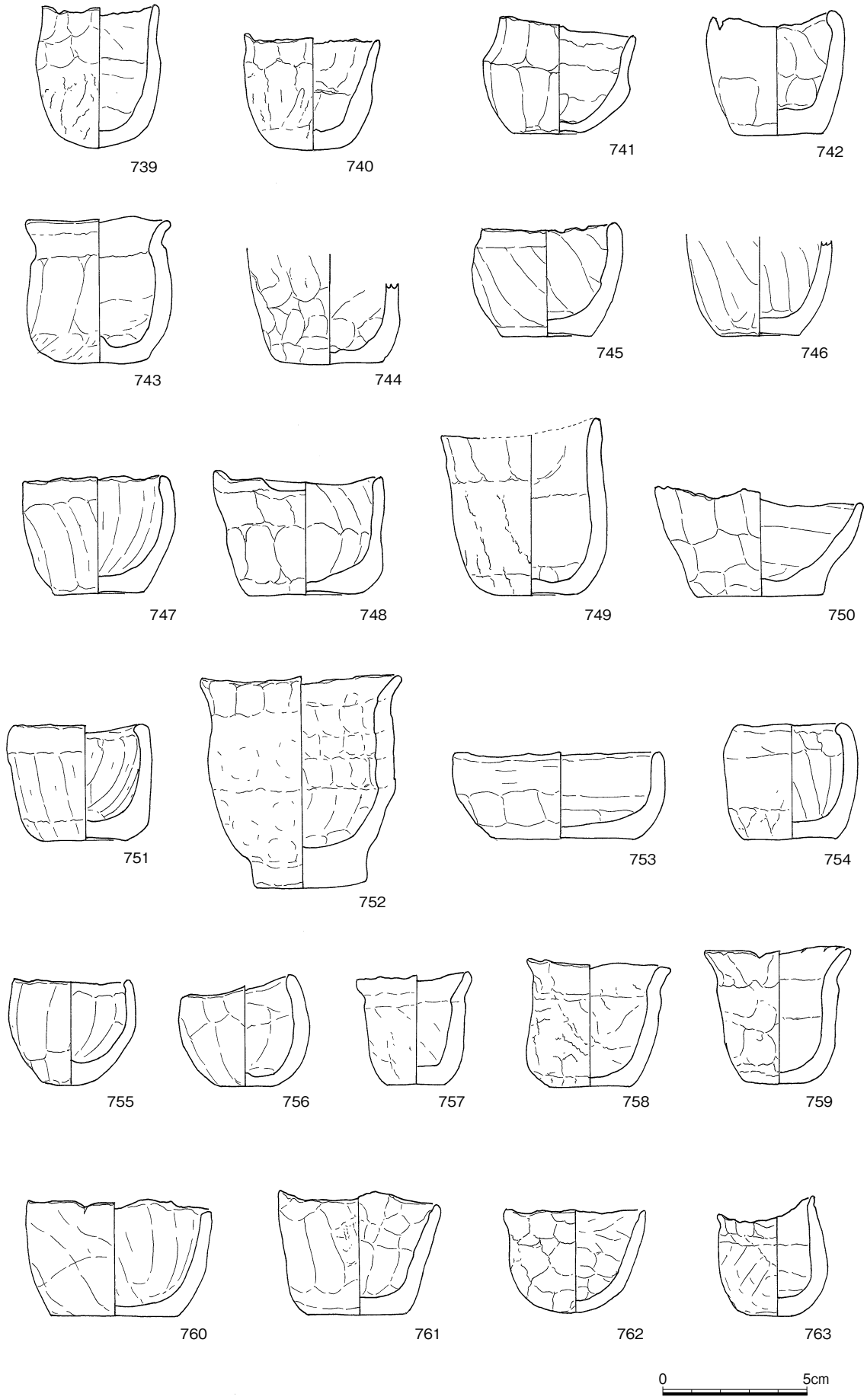


fig. 184　B82-A区出土手捏土器（1）

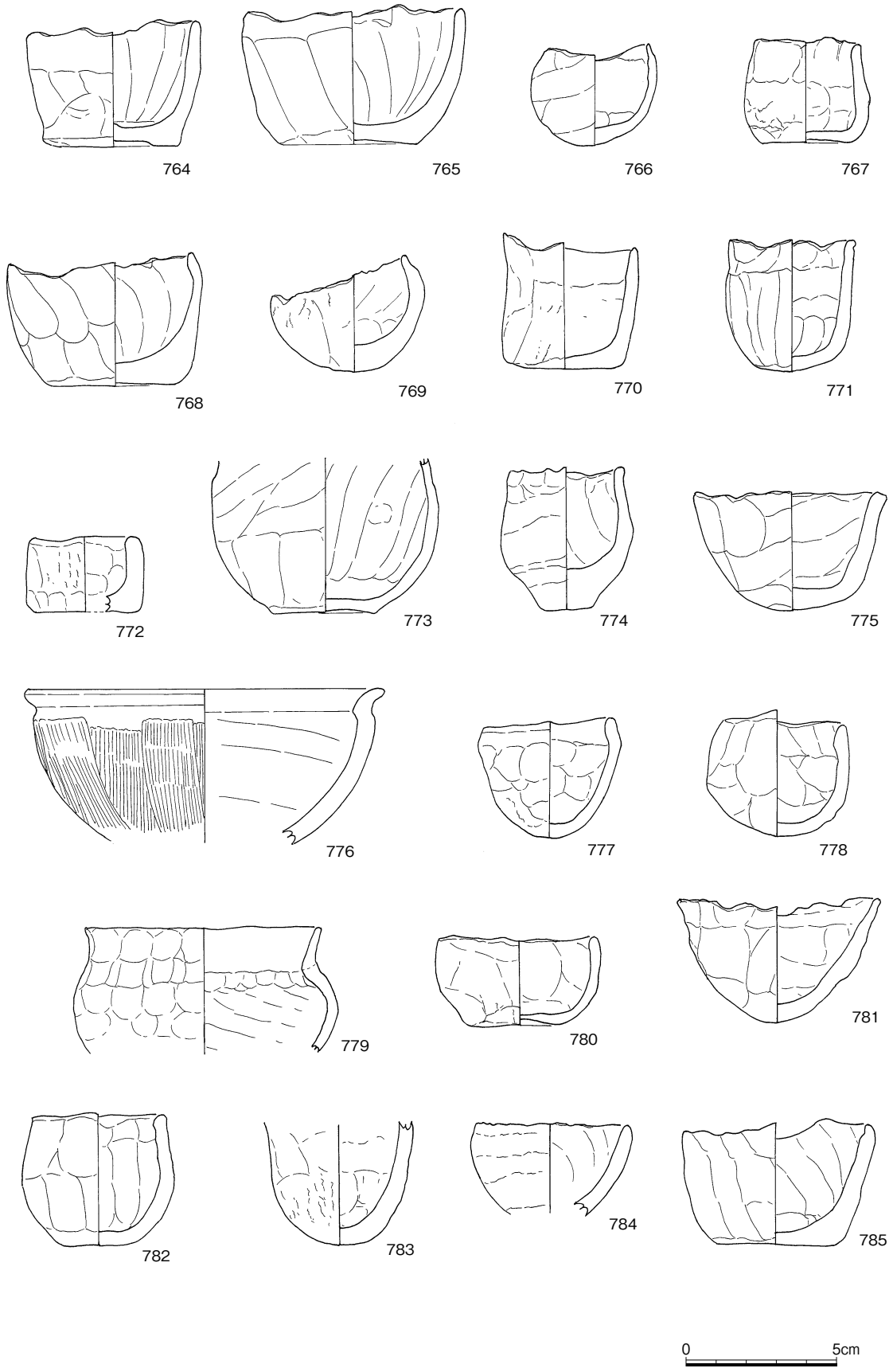


fig. 185　B82-A区出土手捏土器（2）

B82-B区

立地

当調査区は浜堤上に位置するが、調査区西端は浜堤の低地部分にあたり、土石流によって浜堤の砂が削られている。この土石流はB82-A区の東半分のものと連続すると思われる。

基本層序

阪神電車軌条の盛土、近代の耕作土下で中・近世の耕作土が確認され、その下は調査区東側では浜堤の砂層、西端では土石流の砂礫が堆積する。さらに下では黒灰色細砂（クロスナ層）、黄灰色粗砂が堆積する。

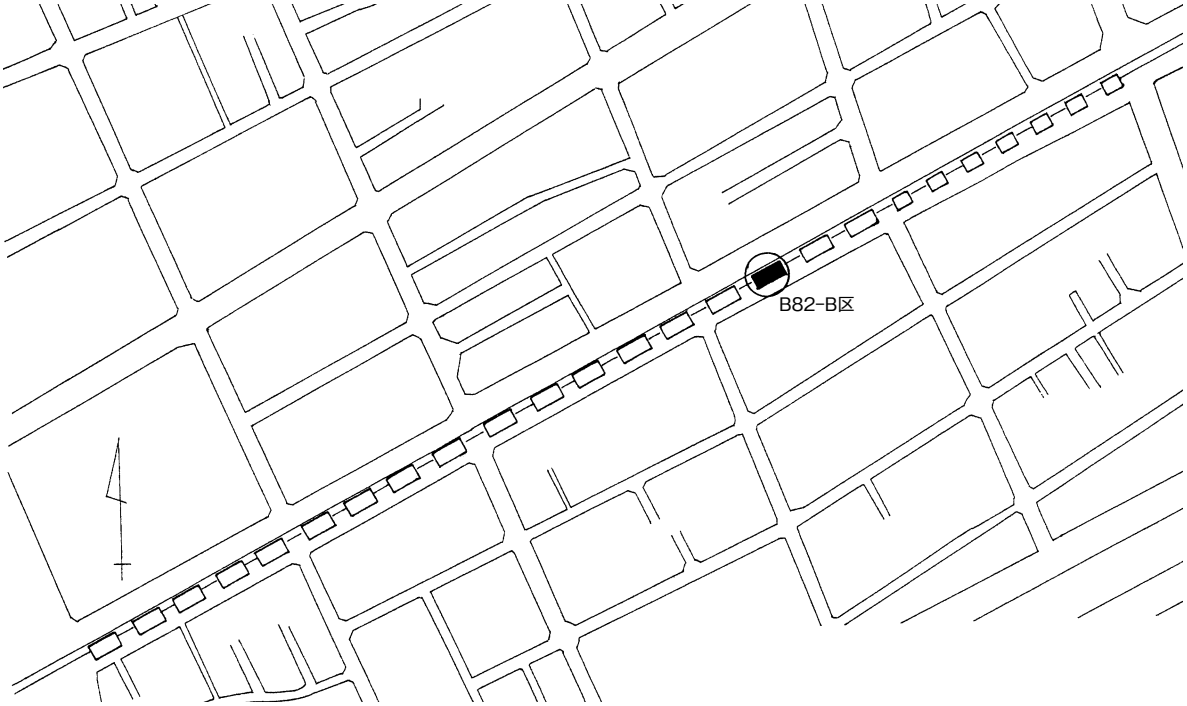


fig. 186　B82-B区位置図

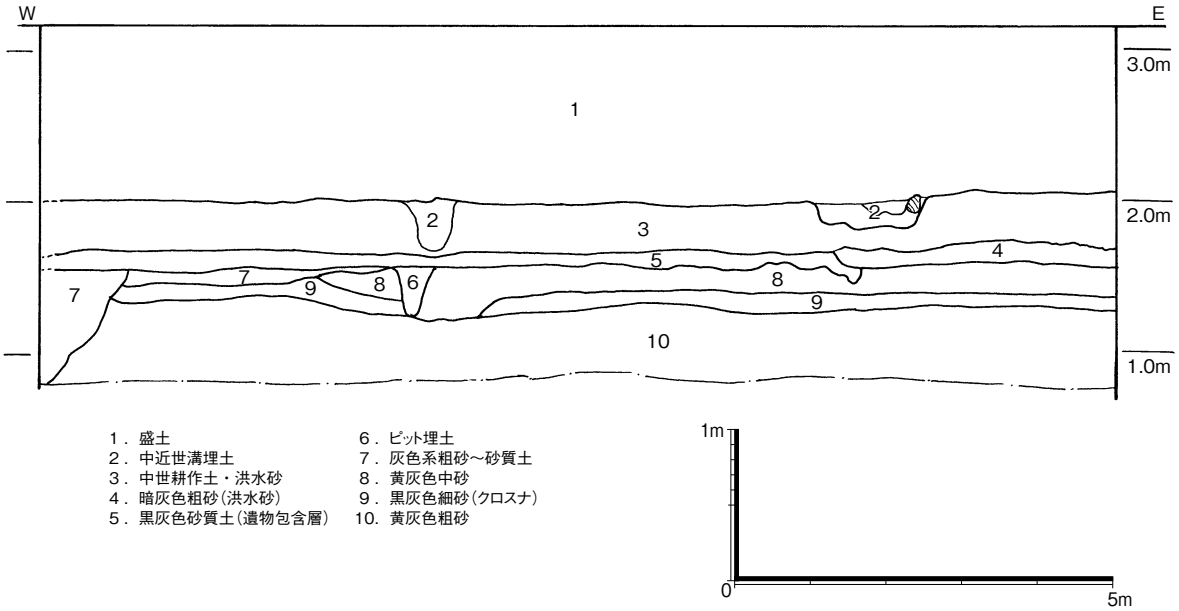


fig. 187　B82-B区北壁断面図

犂溝・石組み溝

中世耕作土面で南北方向の中世犂溝、近世の石組み溝を確認した。

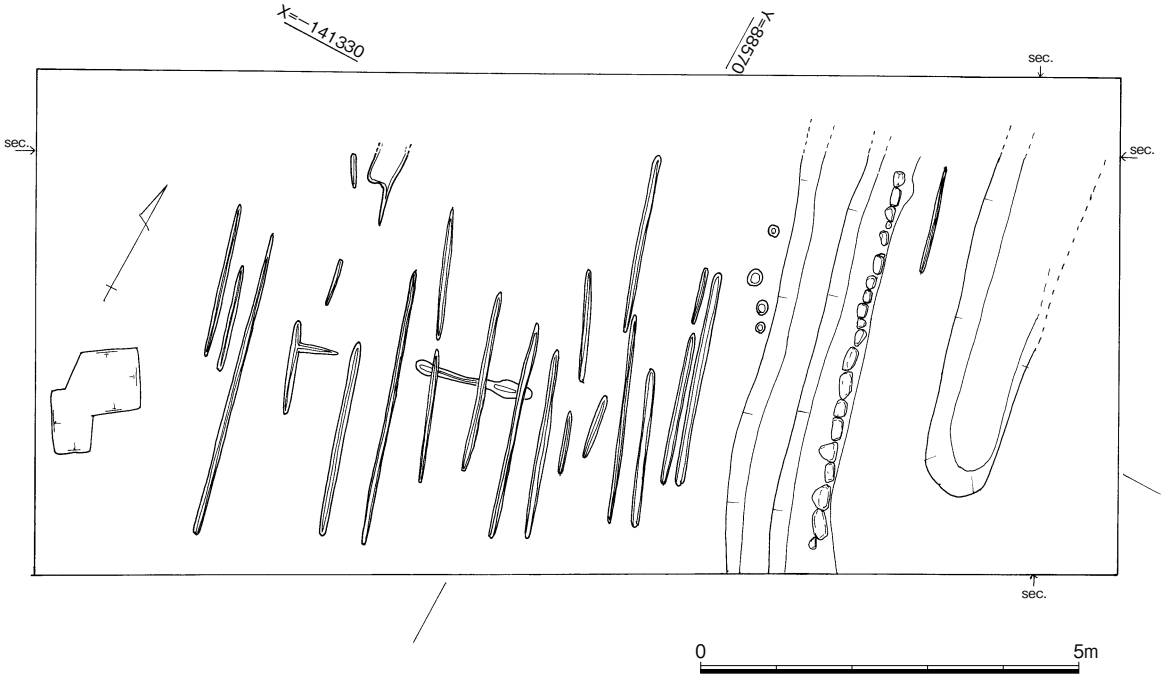


fig. 188　B82-B区犂溝・溝平面図

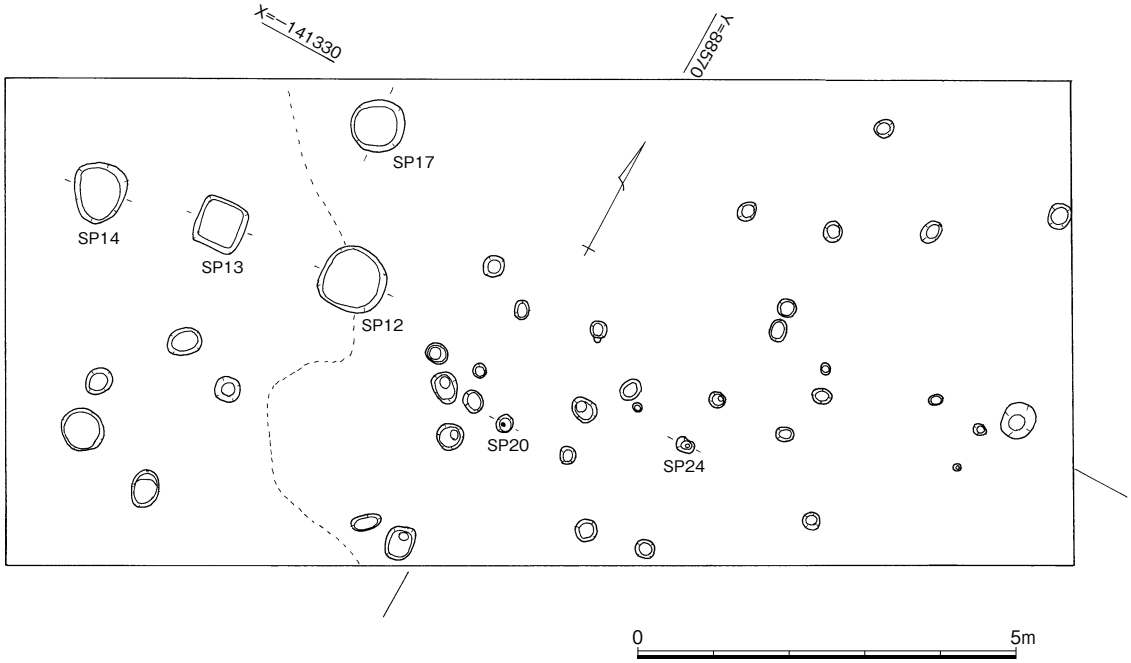


fig. 189　B82-B区柱穴・ピット平面図

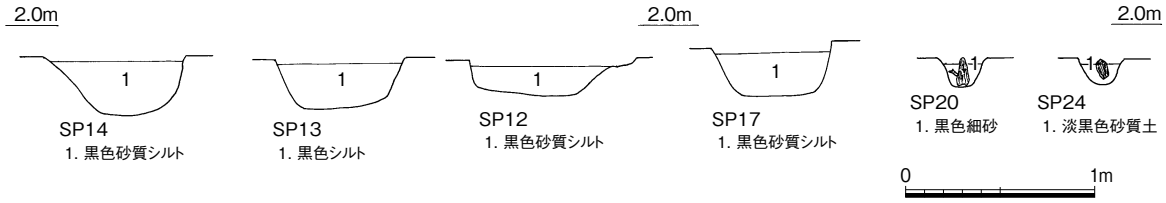


fig. 190　B82-B区柱穴・ピット断面図

掘立柱建物・柱穴・ピット

中世耕作土を除去すると、調査区東側は黄灰色中砂・西側は砂礫（土石流）となり、ピットや柱穴などが確認された。その中には大型の掘形を持つ柱穴があり、それらを繋ぐと、3間×2間以上の掘立柱建物（側柱建物）となり、残余は調査区外に延びる。ピットは列状に並ぶものもあるが規模が小さく、柵のようなものになる可能性もある。柱穴の中には柱材を僅かに残すものも見られる。掘立柱建物の時期は柱穴内から僅かに出土した土器から、奈良時代の中に収まると考えられる。

祭祀場

ピットや柱穴を確認した黄灰色中砂を若干掘り下げると、調査区中央部から南東部付近で手捏土器・土製勾玉・同管玉、土師器甕・壺・甑が出土した。また、猪を象った土製品が1点発見された。これらが出土した付近で祭事が行われたものと推定される。

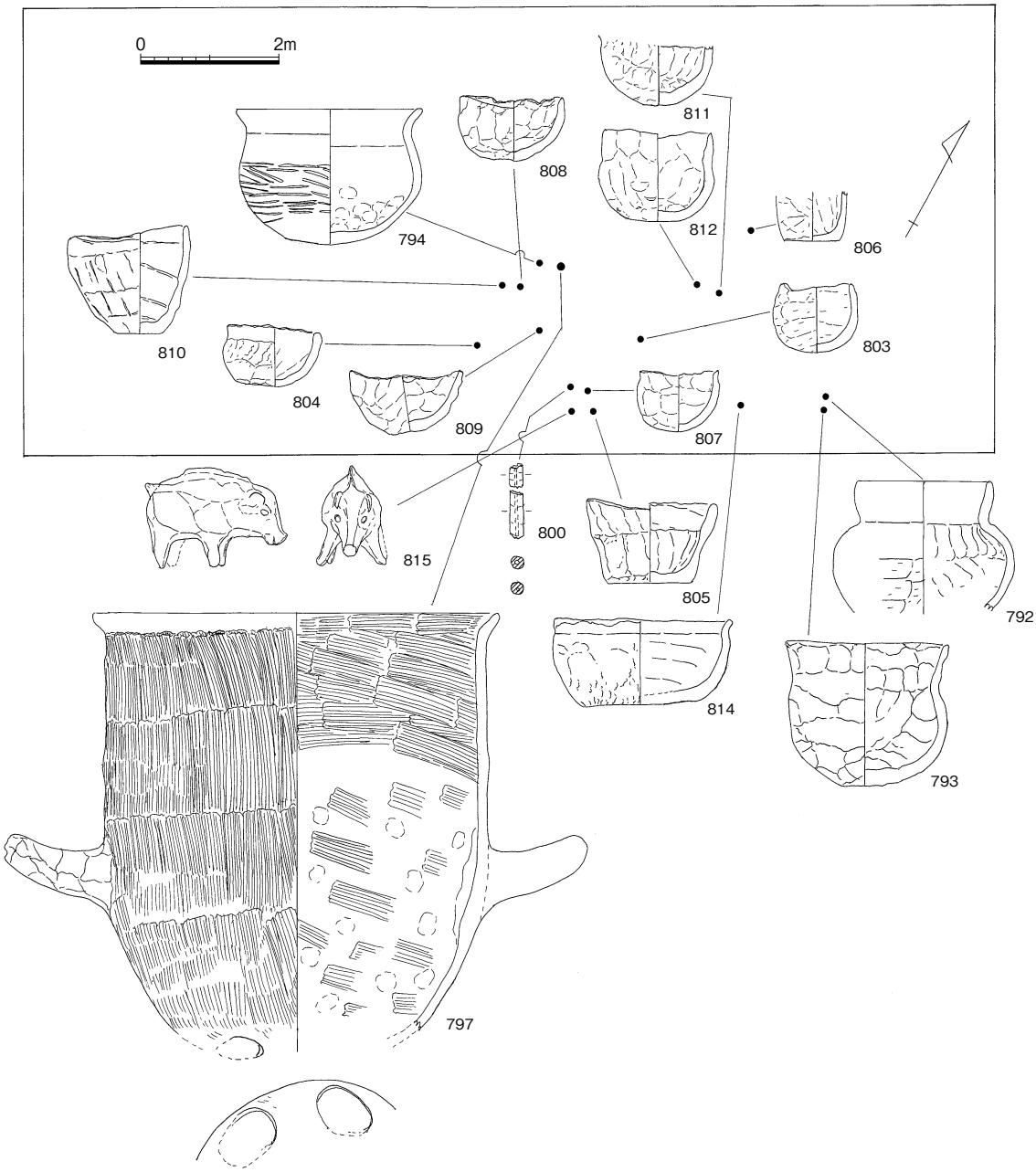


fig. 191　B82-B区祭祀遺物・土器出土位置図（番号はfig. 196, 197と同じ）

fig. 192
B82-B区祭祀遺物
出土状況（東から）

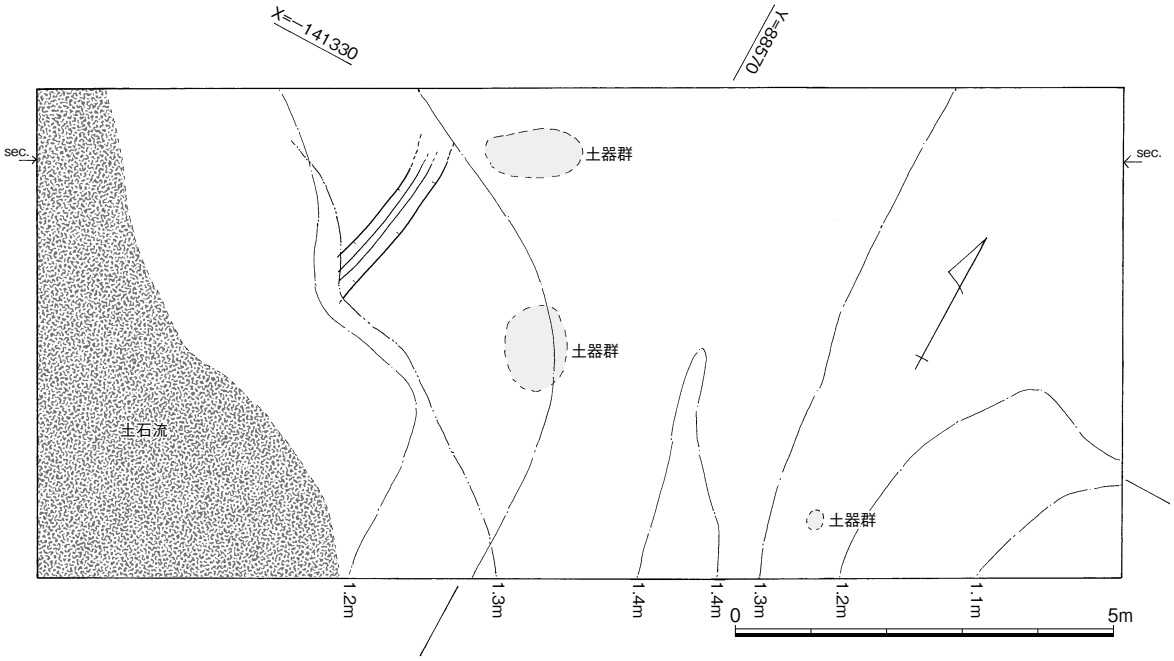


fig. 193　B82-B区黒色細砂面平面図

土器群・ピット

上記の祭祀遺物を検出中に、下層の黒灰色細砂（クロスナ層）から土器が出土するのを確認し、上層の調査が完了した時点で遺物の検出に努めた。同層からは土師器甕が出土した。

また、黒灰色細砂を除去した面（黄灰色粗砂）で浅いピットの中に炭化材（棒状のものが2本並んで炭化している）が入ったものが確認された。これは松明として点火された木材を、浅いピットの中に投げ入れ、明かりとした可能性が指摘される。

これらの微地形を見ると、土器が出土した場所が一番高く、そこから南東と南西に下がってゆくことが判り、祭事は浜堤上でも周辺より小高い場所で行われたと思われる。

黄灰色中砂と黒灰色細砂から出土した土器はほぼ同じ時期のものと判断される。

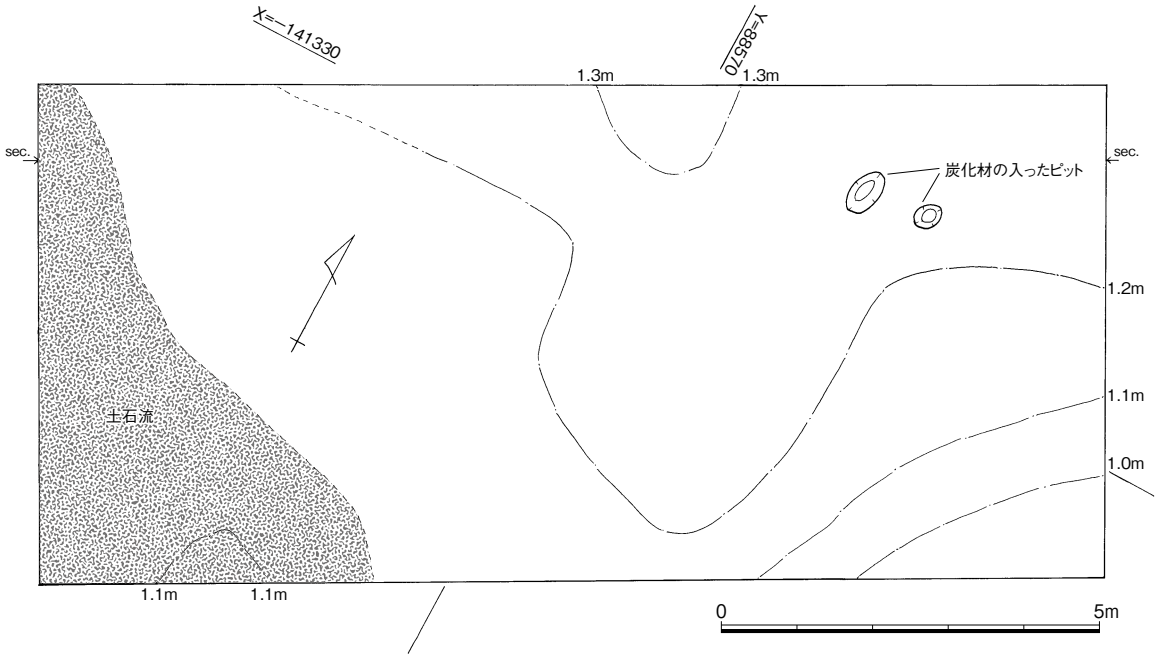


fig. 194　B82-B区黄灰色粗砂面平面図

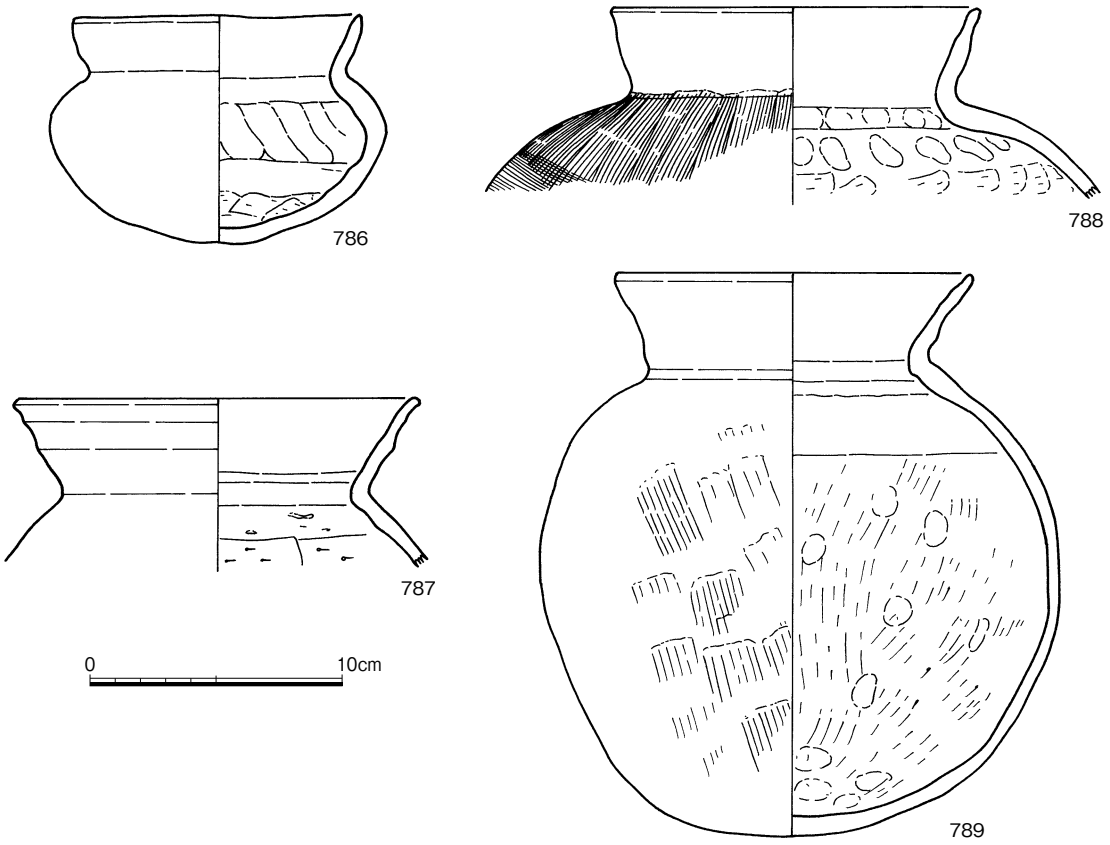


fig. 195　B82-B区黒色中砂・黄灰色粗砂出土土器

出土遺物

786，788，789は黒色中砂（クロスナ層）出土の土師器の甕形土器である。786は偏球形で内傾気味の口縁部を持ち、内面はヘラ削り、指頭圧痕が残る。787は黄灰色粗砂出土の土師器甕で、外面は横方向のナデ胴部内面はヘラ削りを行う。788は球形の胴部に直線的な口縁部を持つ。

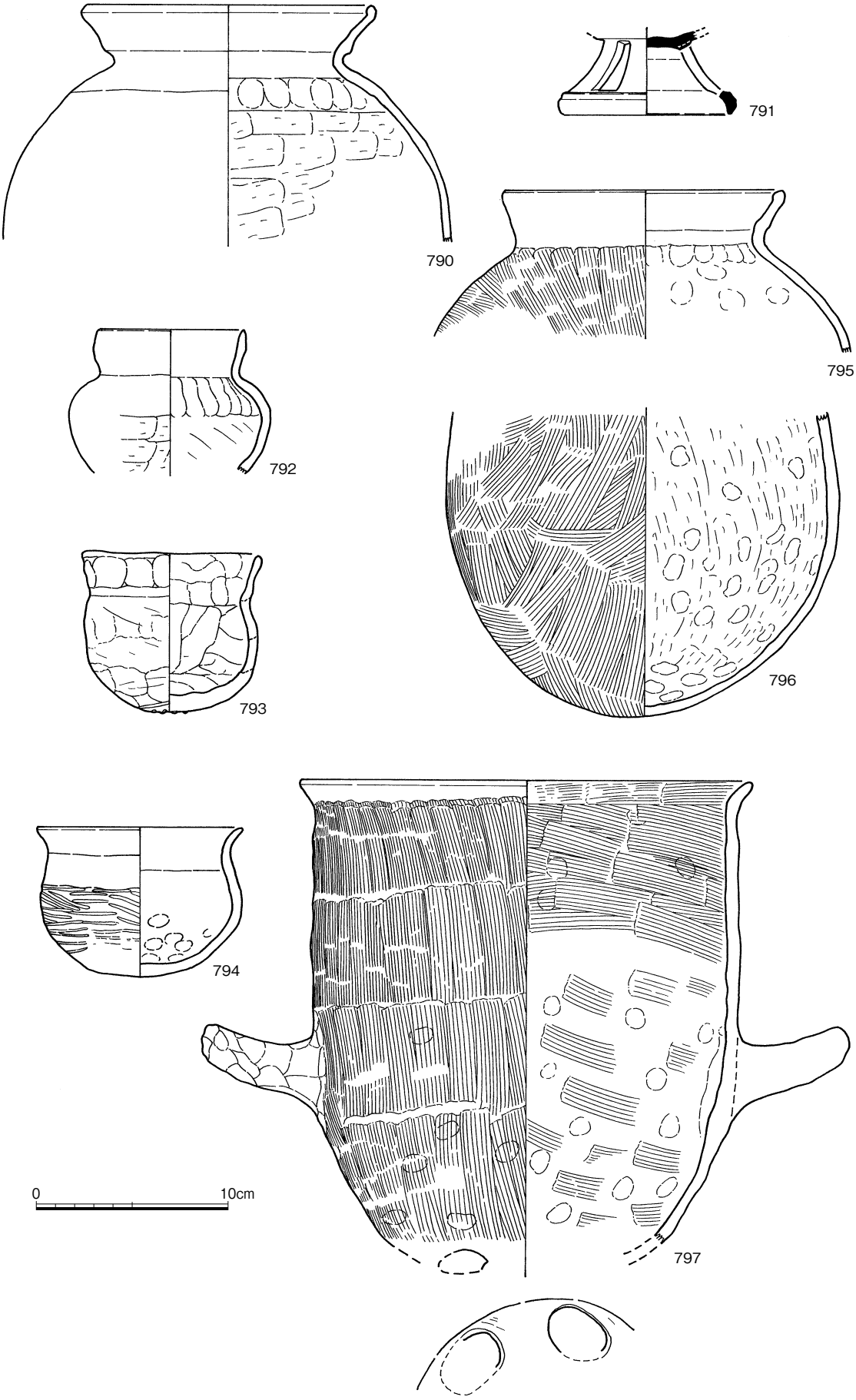


fig. 196　B82-B区黄灰色中砂出土土器

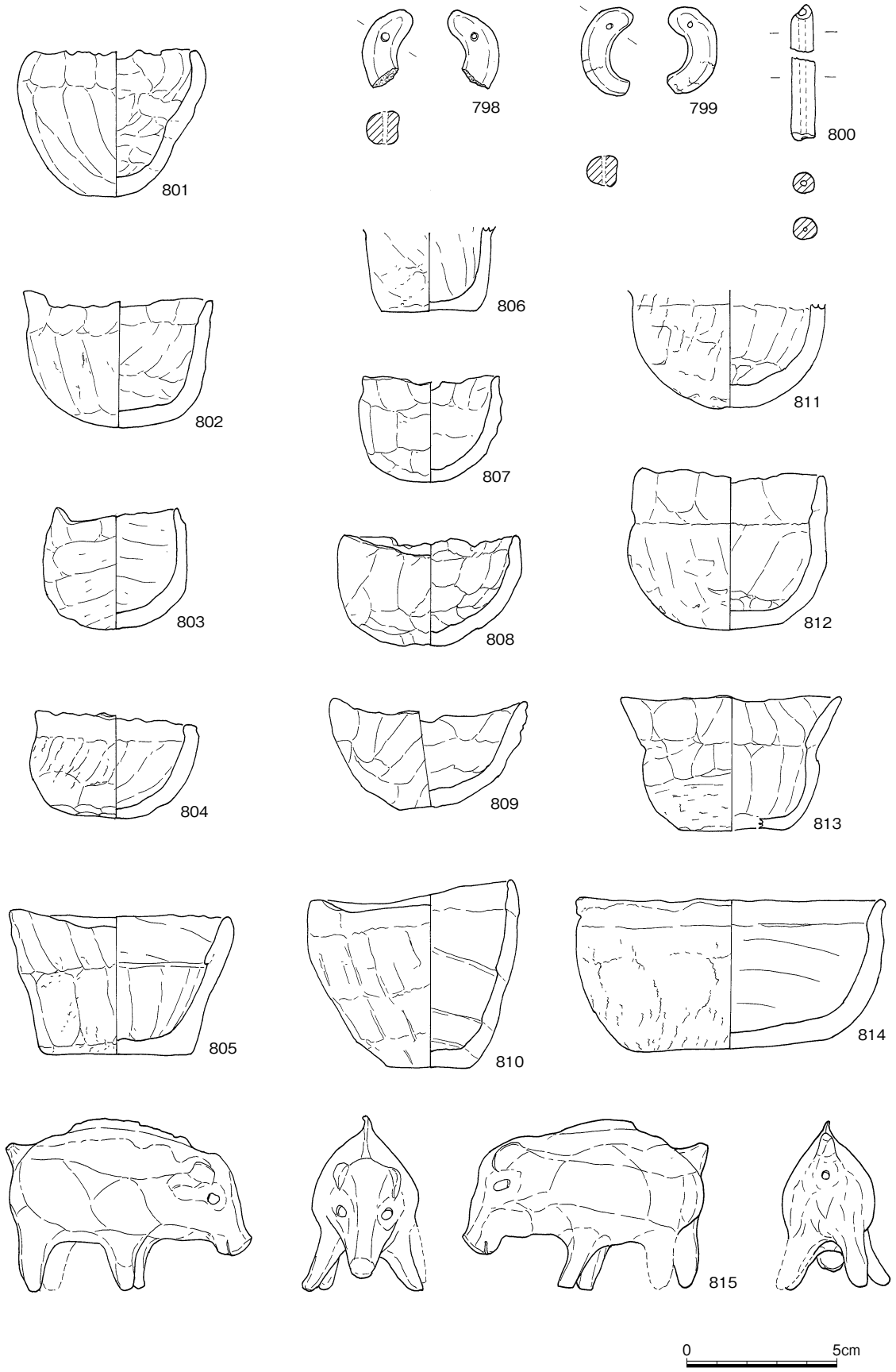


fig. 197　B82-B区黄灰色中砂出土祭祀遺物

頸部外面はハケ目調整、内面は指頭圧痕が残る。789は直線的な口縁部に球形の胴部、胴部外面はハケ目、内面は縦方向のヘラ削りを行う。

790～797は黄灰色中砂出土の土器で、791は須恵器、その他は土師器である。790，795，796は大形の甕形土器で、球形の胴部に795は口縁端部に面を持つ。胴部内面はヘラ削り、指頭圧痕が残る。外面はハケ目調整である。792～794は小型の甕形土器で、792，793は球形の胴部に直立した口縁部を持ち、794の胴部外面にはヘラミガキで調整する。791は須恵器高坏で三方透かしの短い脚部を有する。797は甑で、内面を横方向、外面を縦方向のハケ目で調整する。底部には蒸気を通す孔が開けられている。

798～815は土製の祭祀遺物で、黄灰色中砂から出土した。798，799は勾玉、800は管玉で、紐通しの穿孔がある。801～814は手捏土器で大きさ、形状に差がある。815は猪形土製品で脚を一本欠失しているが、写実的な作りである。

fig. 198
B82-B区猪形土製品
出土状況（東から）

fig. 199
B82-B区犂溝・
溝検出作業

B83-A区

立地

当該区は西側に広がっていた浜堤が下がってゆき湿地に変わってゆく境目にあたる。東半分は湿地となり、西半分は傾斜を持ちながら浜堤が緩やかに上がってゆく斜面の地形である。

基本層序

阪神電車軌条下の盛土、近代～中・近世の耕作土の下は、湿地層が現れる。湿地層は砂・シルトの互層であり、西から東に少しずつ下がってゆく。また、T.P.1.2m以下で確認される浜堤の砂層も同様に西から東に下がりながら堆積している。

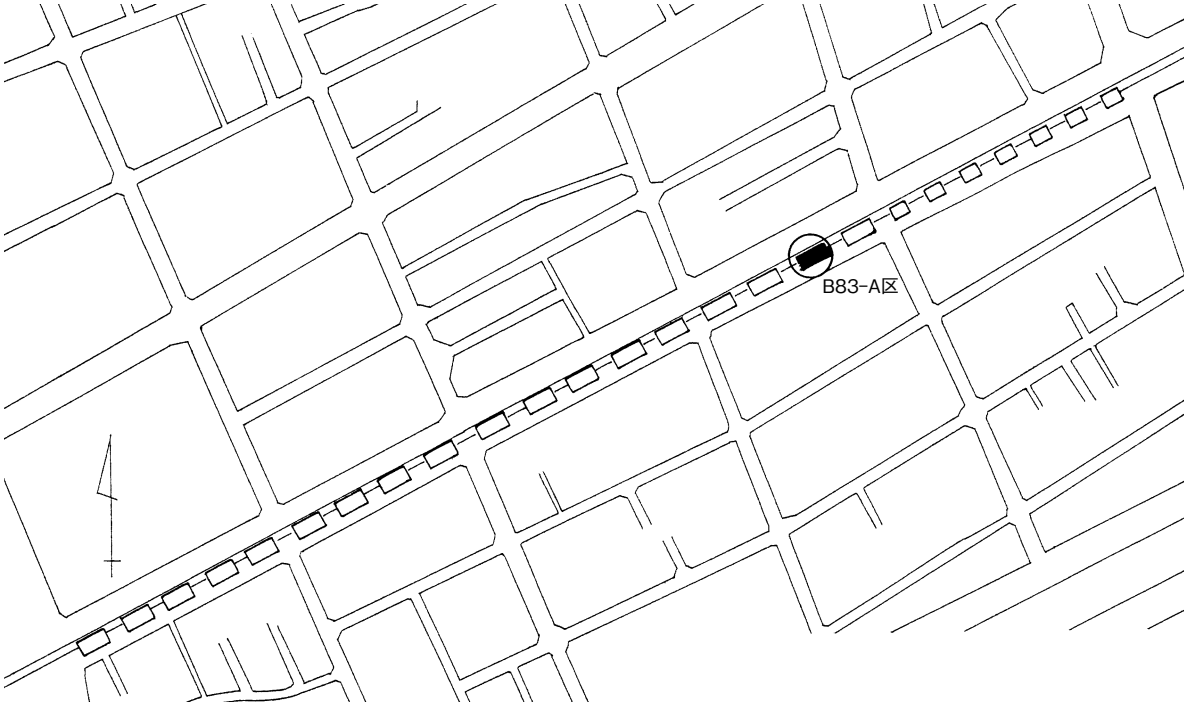


fig. 200　B83-A区位置図

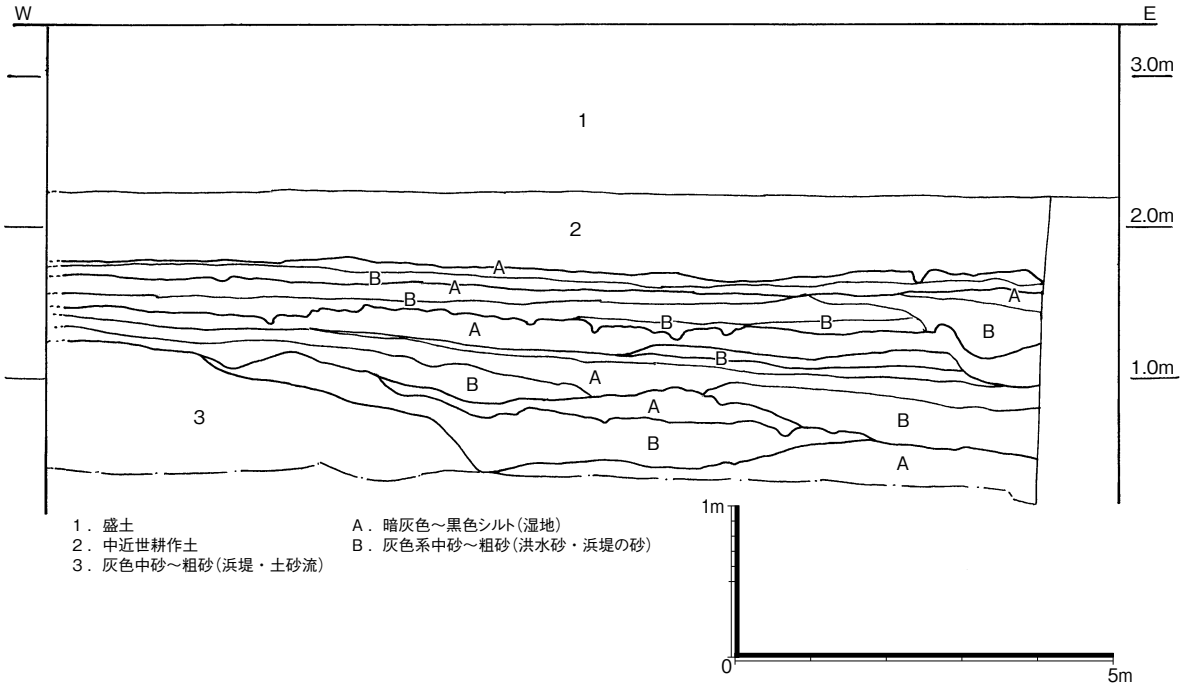


fig. 201　B83-A区北壁断面図

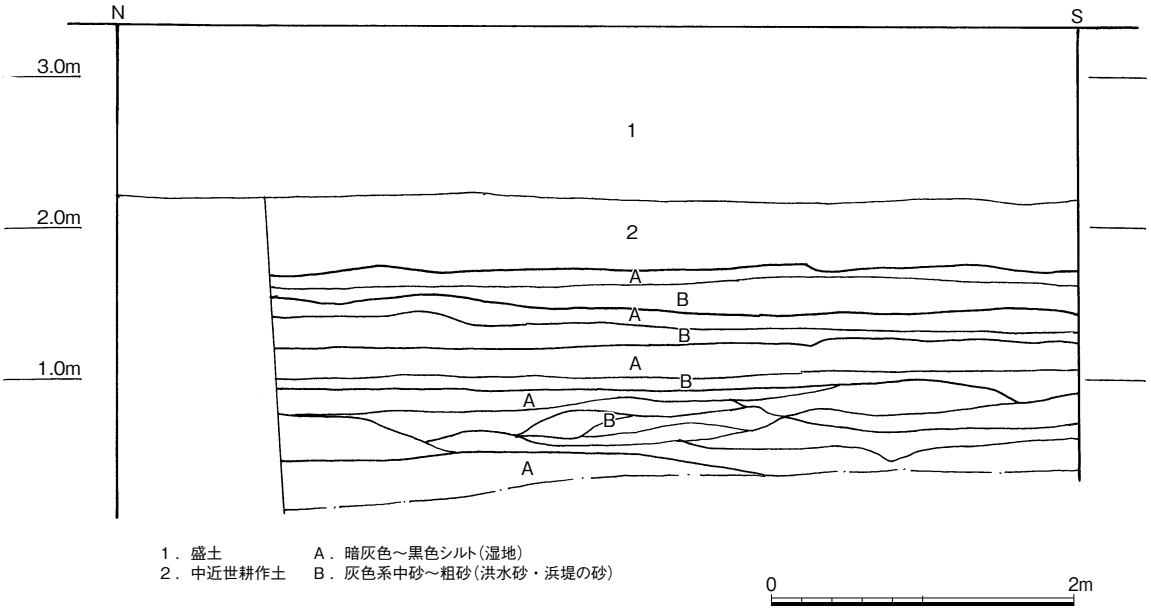


fig. 202　B83-A区東壁断面図

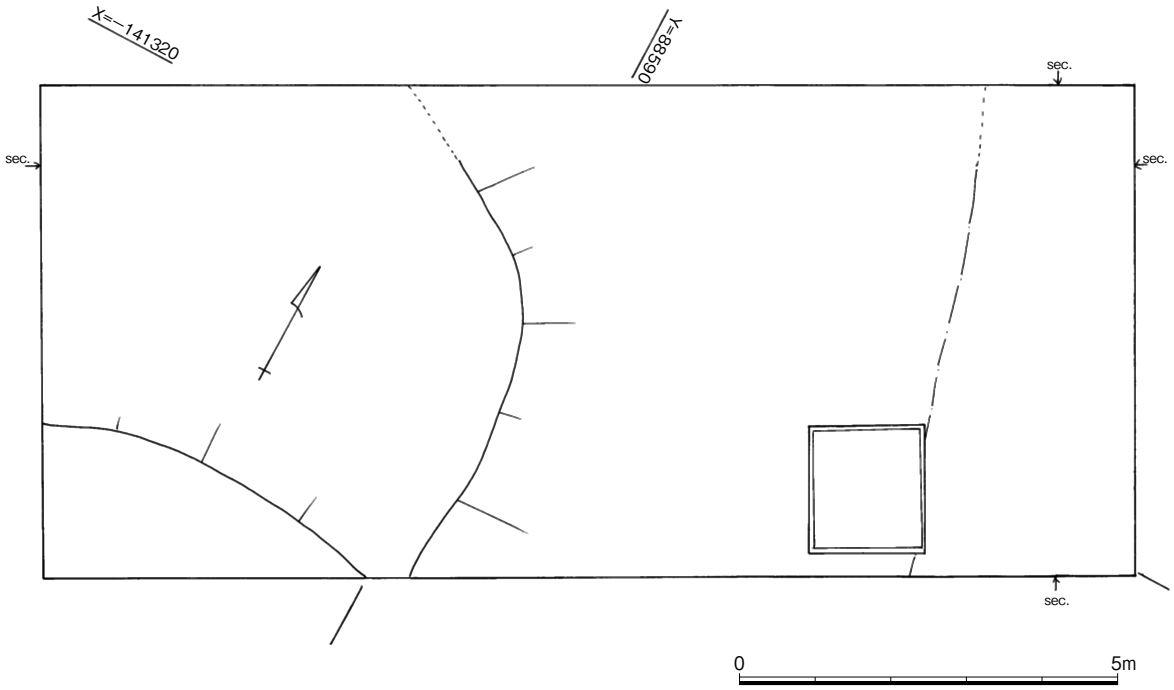


fig. 203　B83-A区平面図

湿地

湿地はシルトと砂の互層となり、シルト層については概ね6層に分層できる。この堆積状況から見ると、湿地のシルト層がある程度溜まった段階で、浜堤から供給される砂によって、それらが覆われるという段階を何度も経て埋没していったことが判かる。湿地の最終的な埋没時には南西端の辺りが一番高かったものと推測される。湿地の上層では奈良・平安時代の土器、木製品、下層では古墳・弥生時代の土器、木片等が出土した。

出土遺物

(1)土器・陶器

823～825は須恵器で、823，825は坏、824は有蓋高坏の坏蓋である。823は奈良時代、824，825は古墳時代後期に属する。826～828は緑釉陶器で、828は蛇ノ目高台を持つ。826，828は土師質、827は須恵質である。

829～834は土師器で、829は直線的な口縁部を持つ甕形土器で、胴部内面はヘラ削りを行う。832，833

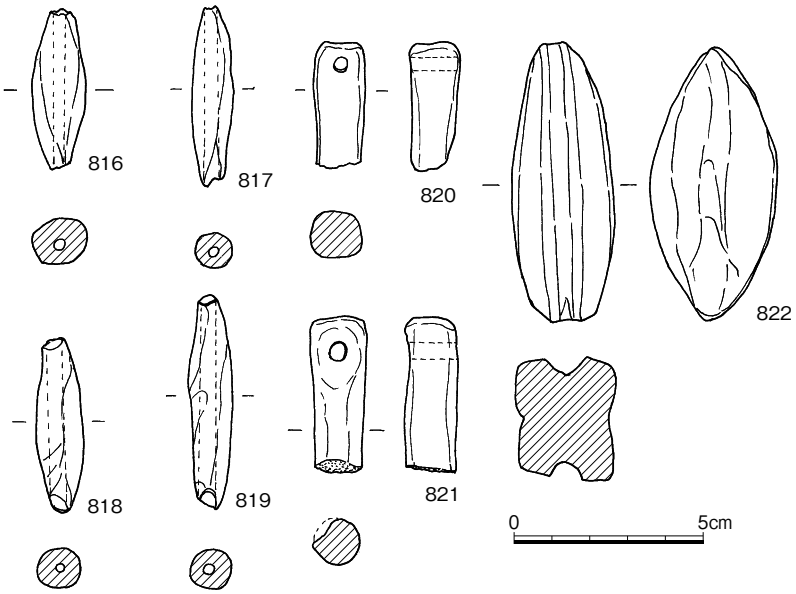


fig. 204　B83-A区出土土錘

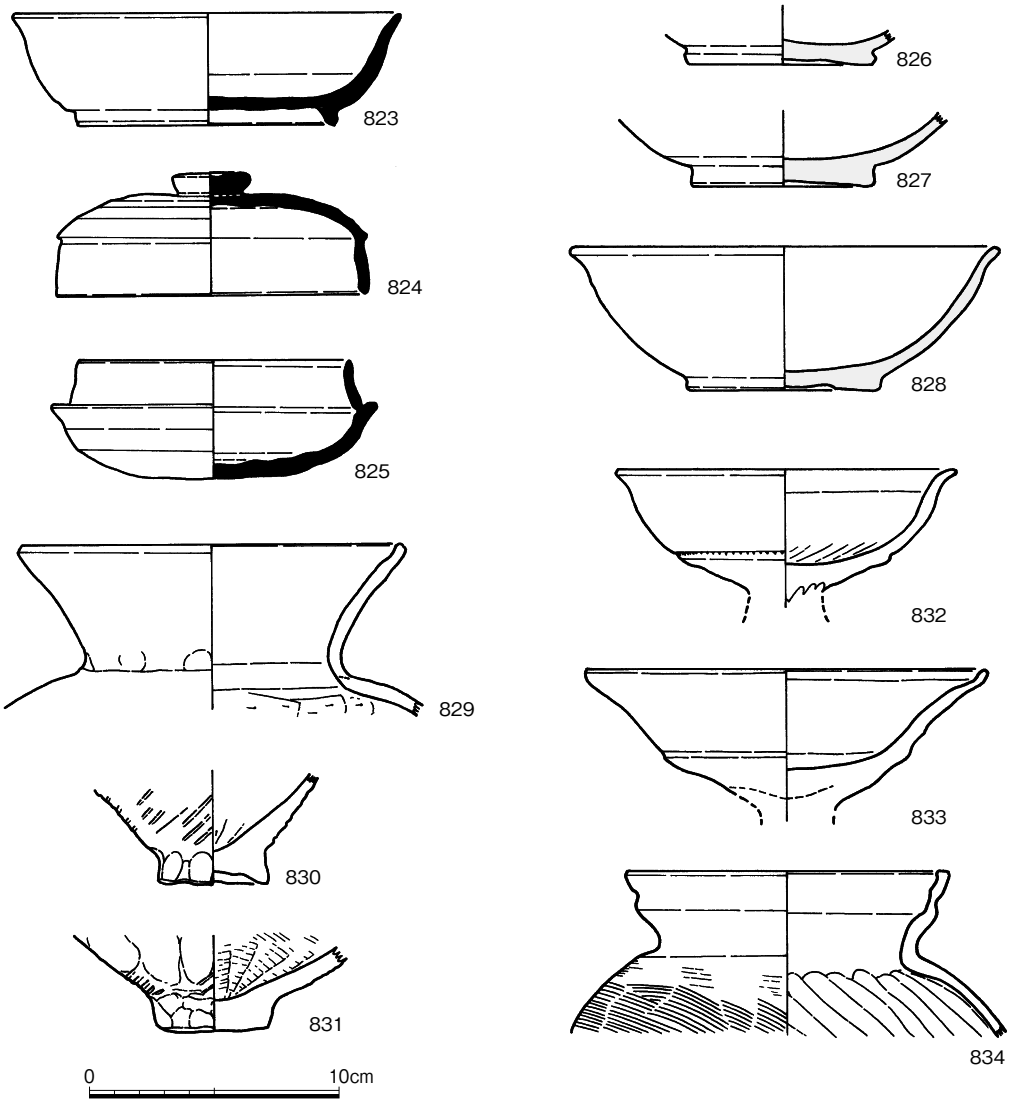


fig. 205　B83-A区出土土器・陶器

は高坏で、832は坏部に列点文を施す。830，831は甕形土器の底部で外面に叩き目の痕跡を残す。834は甕形土器で、段を持った口縁部を有し、胴部外面はハケ目、内面は指ナデで調整する。これらは古墳時代初め～後期に属する。

835は土師器の甑で、外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目と指頭圧痕が残る。底部には真中と四方に蒸気通しの孔がある。

(2) 土錘

816～822は土錘ですべて土師質である。816～819は管状土錘、820，821は棒状土錘、822は有溝土錘である。

(3) 木製品

836はヒノキ製の連歯下駄の残欠で、前壺はやや右寄りの左足用である。歯幅は台から下端に向け開く。837はヒノキ科製の独楽で、直径8.2㎝、高さ4.4㎝、奈良時代の製品にしては扁平である。

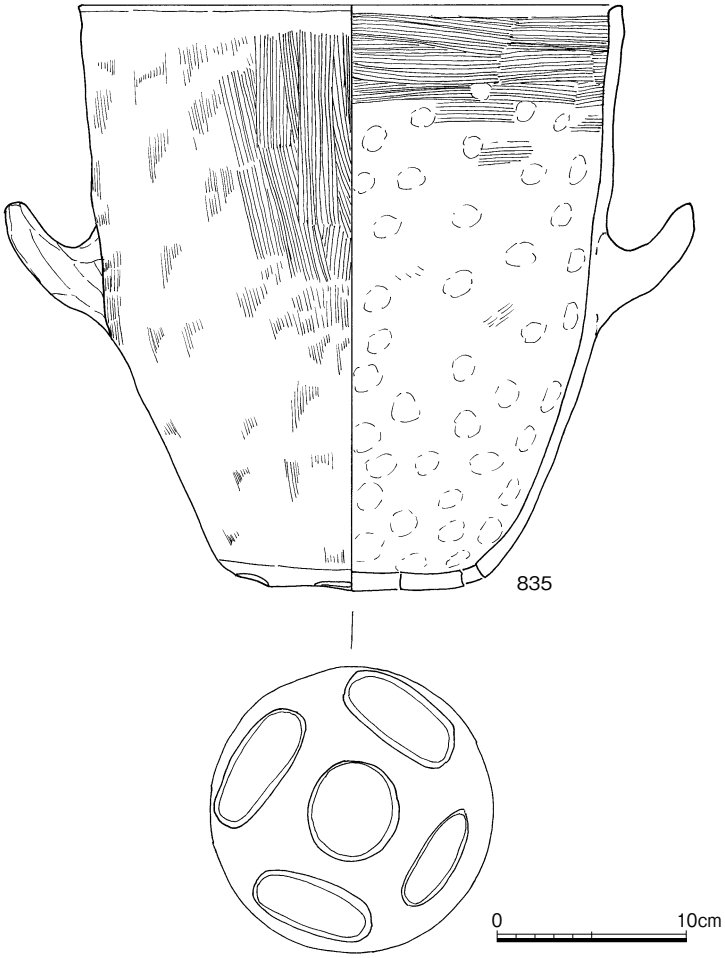


fig. 206　B83-A区黒灰色細砂出土甑

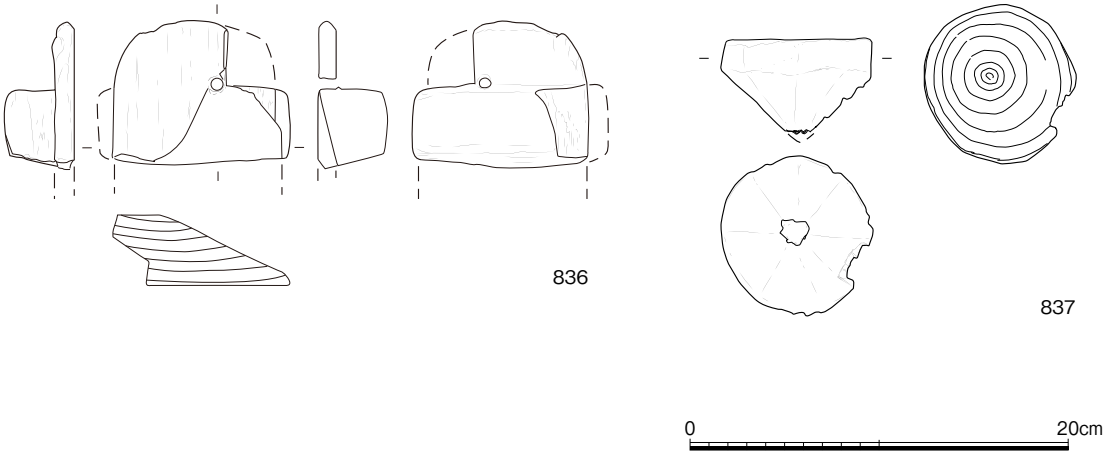


fig. 207　B83-A区出土木製品

B83-B区

立地

この調査区の全体が東方向に深く落ち込む堤間湿地の堆積土にあたっている。

基本層序

阪神電車の軌条下の盛土、近世・近代の耕作土、洪水砂層があり、中世耕作土以下は主にシルト系の堆積土が続き、低湿地であったことを示唆する。その下はシルトと土石流の砂が堆積し、さらに下は厚くシルト層が溜まる。それ以下は前面の浜堤を越えてきた高潮の影響を受けるような地形であったことが判る。

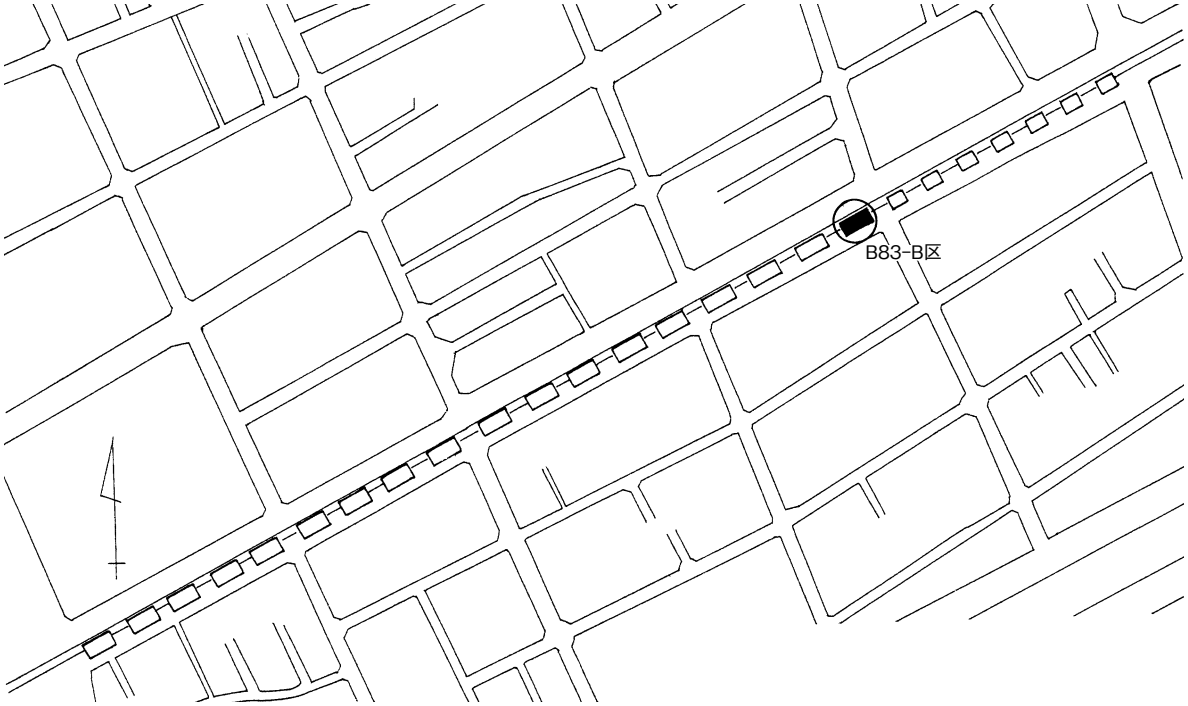


fig. 208　B83-B区位置図

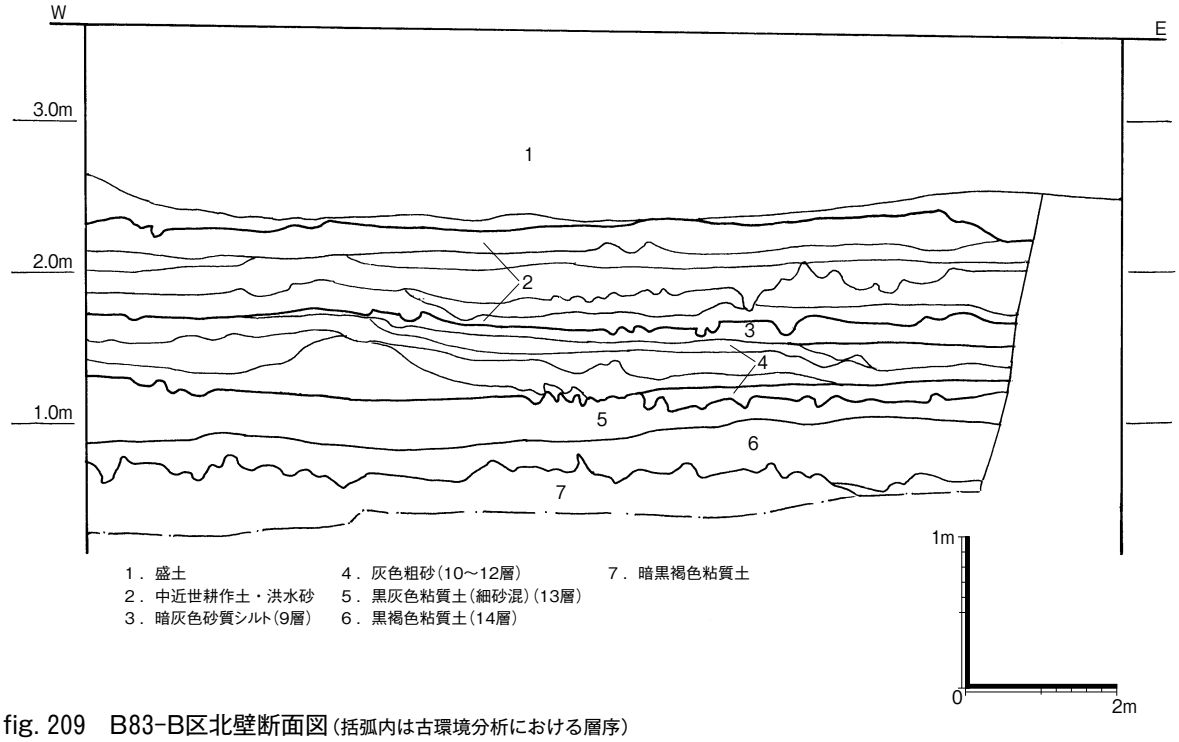


fig. 209　B83-B区北壁断面図(括弧内は古環境分析における層序)

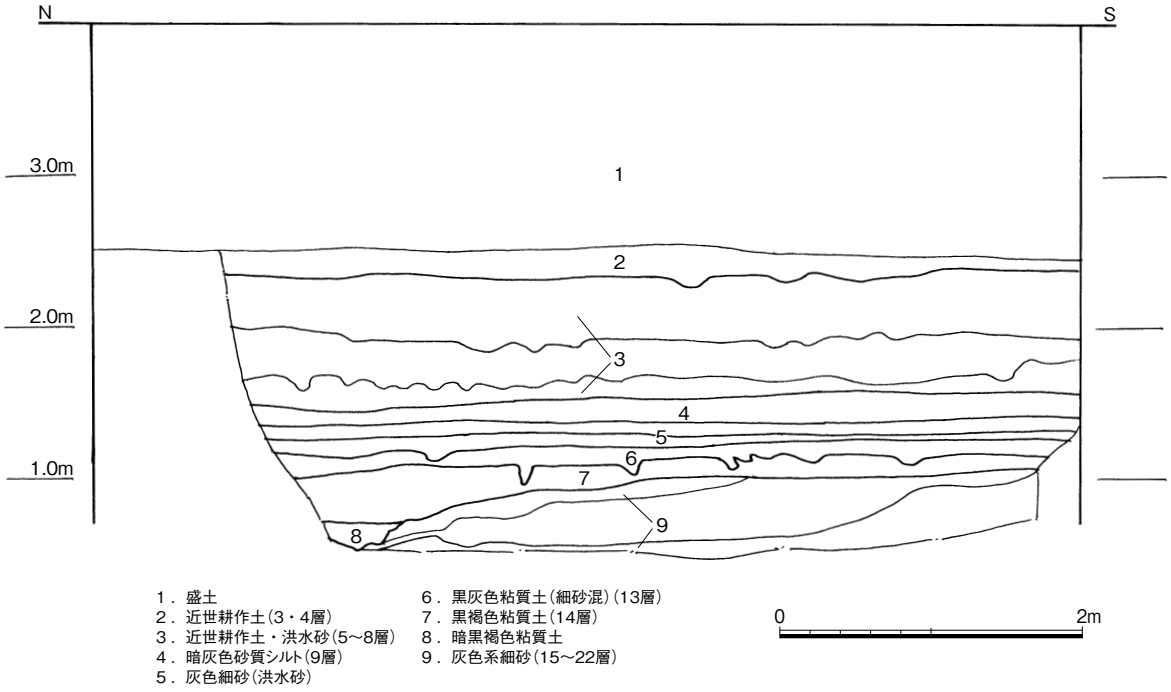


fig. 210　B83-B区東壁断面図（括弧内は古環境分析における層序）

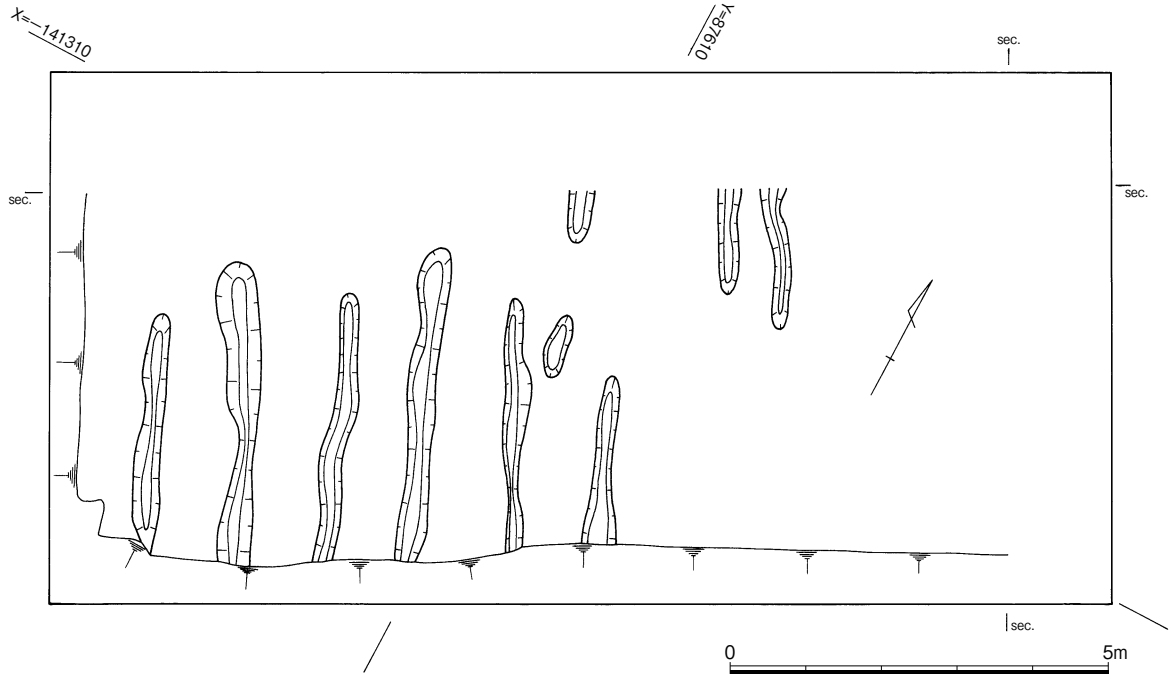


fig. 211　B83-B区犂溝平面図

犂溝

中・近世頃の耕作土面で南北方向のほぼ等間隔の犂溝が確認される。

土石流

現地表下約2.5mで平安時代の土器を含む暗灰色シルト（細砂混じり）を検出するが、その直下は土石流の粗砂・細砂が厚く堆積する。

湿地

土石流の下は再びシルト～粘質土の厚い堆積層となる。この層は有機物に富むことから葦等が生える湿地であったと判断される。その中からは奈良時代頃の土器の小破片に混じって、木製品（木簡（ものさし）・斎串・馬形・鳥形・浮子・曲物・箸・櫛・下駄・建築部材）、自然木が出土している。

湿地内の遺物の出土状況からみて、ごく直近から投棄されたのではなく、発見地の東側を流れていた小河川の上流側から流れ着いたものと考えられる。

高潮の痕跡

シルト～粘質土の湿地堆積層を除去すると、調査地のおよそ南半分には、前面の浜堤を越えて入ったと思われる灰色細砂が堆積している。これは嵐や津波等の通常より高い潮位によって生じたものであるとのご指摘を同志社大学増田先生からご教示を得た。

出土遺物

（1）土器

838，839は須恵器坏で、839は高台を有する。いずれも湿地層から出土した。

（2）墨書土器・転用硯

840は須恵器坏蓋裏に「志」と墨書きされている。841は須恵器坏？に「辛」と横画が一画多い異体字で書かれている。

842は須恵器坏蓋内面を硯に使用している。843は坏の裏側の高台内面を硯としている。筆ならしと見られる墨痕も残っている。844も同様の部分を使用している。いずれも須恵器である。

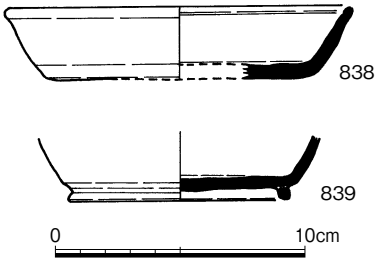


fig. 212　B83-B区湿地出土土器

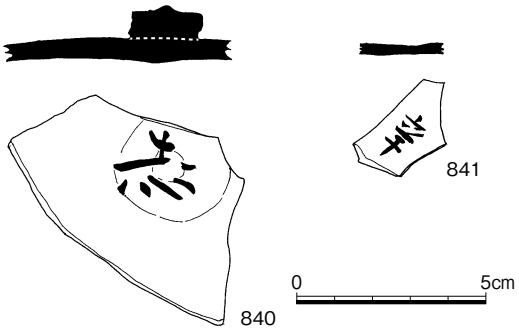


fig. 213　B83-B区出土墨書土器

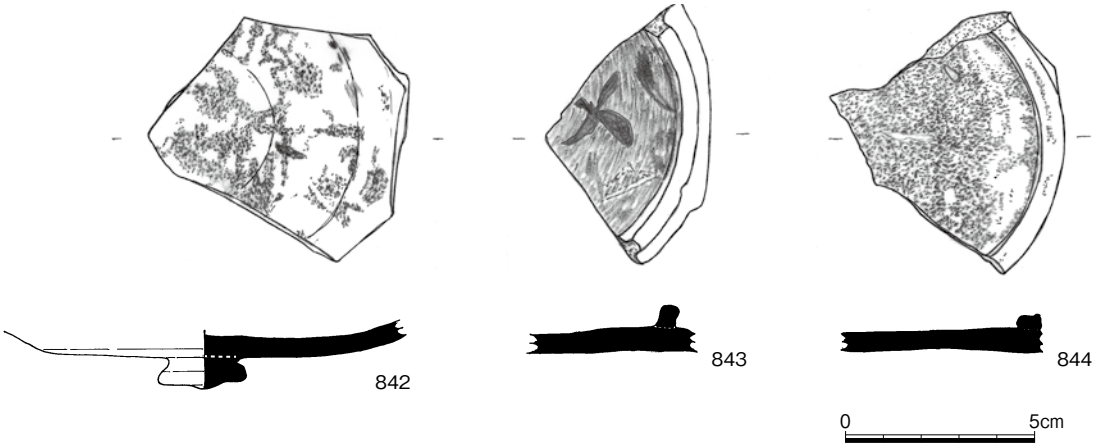


fig. 214　B83-B区出土転用硯

(3) 土錘

845は管状土錘、846～848は棒状土錘、849は有溝土錘である。いずれも土師質である。

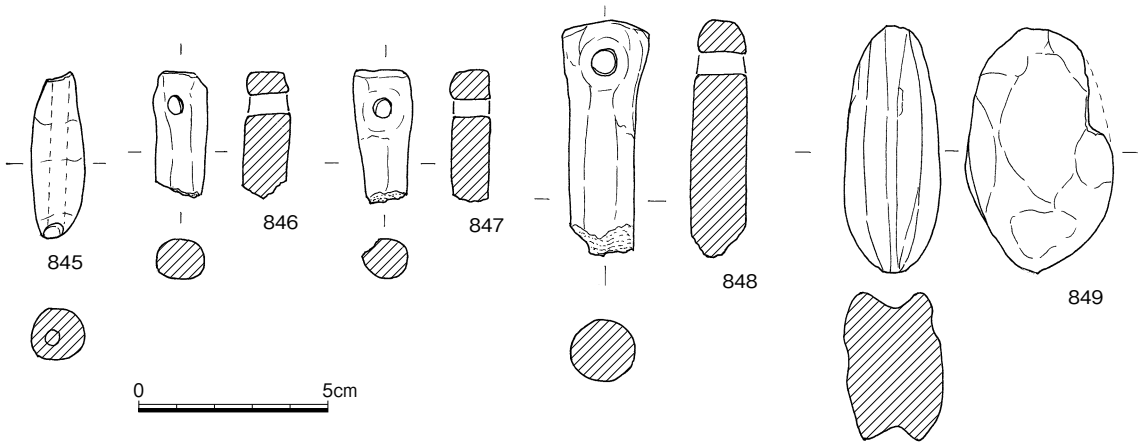


fig. 215　B83-B区出土土錘

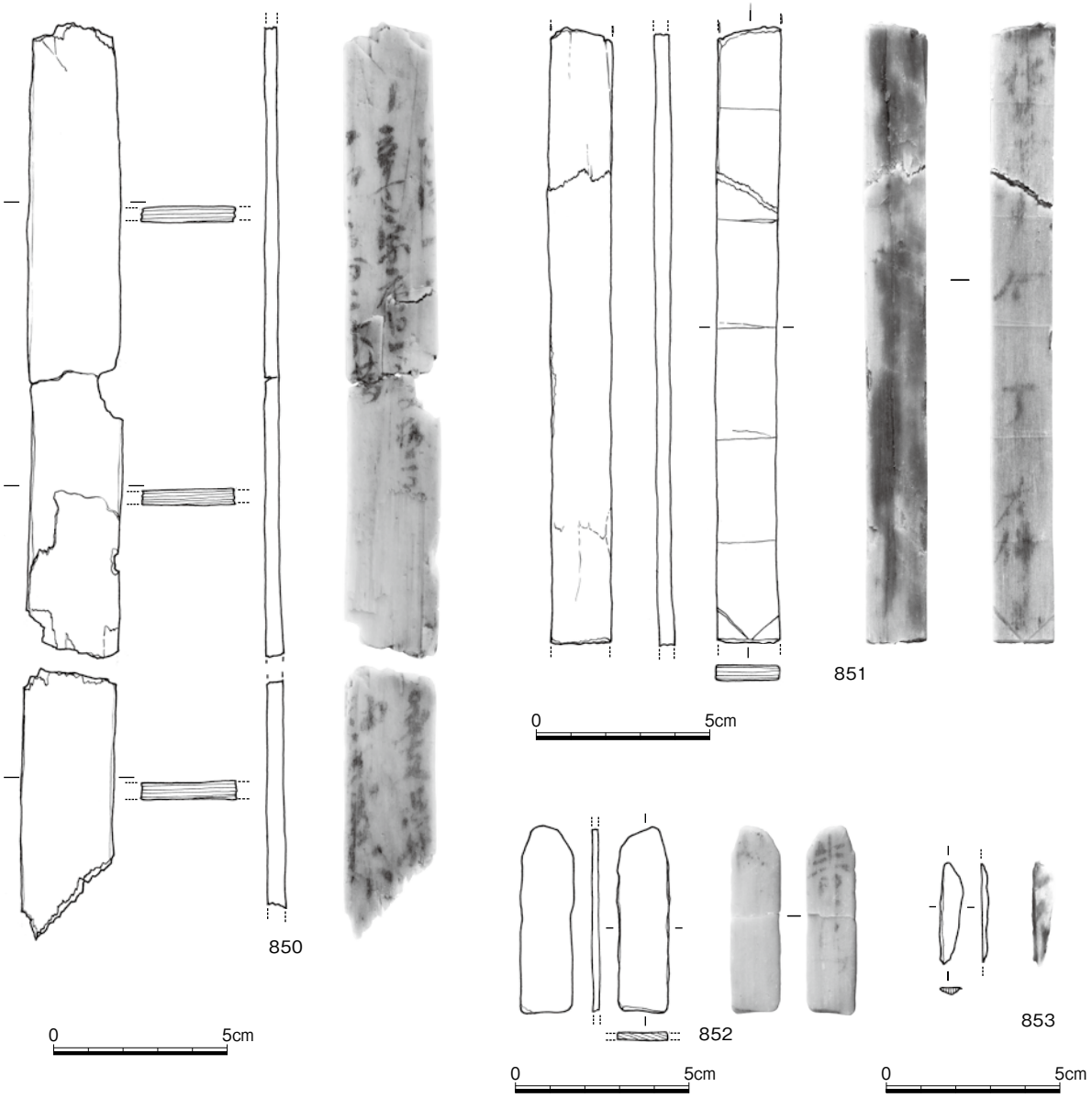


fig. 216　B83-B区出土木簡

(4) 木簡

850の木簡は、「辛万呂家麻呂」等の人名と「二升□」といった数量を表す文字を記す。これは3片に別れる。851は、「□□□□合　丁　右件□」と書かれた木簡を転用して約3㎝（一寸）単位で刻み目を入れ、物差しとしたものである。裏面にも墨痕があるようにみえるが、明確ではない。852は、現状では2片に分かれているが接合する。表側の一文字目は「請」の可能性がある。あるいは一文字目の上半は「生」、または「屋」の一部である可能性もある。裏面の文字は不明である。853は、墨痕は残っているが小破片のため、文字は読み取れない。

(5) 木製品

854はヒノキ製の柾目～板目取りの板材で、一長辺の両端に切欠きがある。長さ36.0㎝、幅9.2㎝、厚さ1.2㎝を測る。織機の腰掛板の可能性がある。

855はスギ製の連歯下駄で、平面形は長方形、前後歯共に台のほぼ前後端に接して削りだされている。前壺は右寄りに開けられており、左足用とわかる。後壺は後歯より前に穿たれている。長さ13.5㎝、幅7.3㎝と小型で、子供用と考えられる。

856はヒノキ製の連歯下駄で、前開き後窄まりの楕円形を呈する。歯は前後ともに台幅よりやや狭く削り込んだ後、裾に向け広がる。また側面観でも両歯はハの字状に開く。前・後歯ともに前壺は右寄りで左足用とわかる上、台上面には左足の足型が残っている。後壺は後歯の前に開けられる。長さ26.1㎝、幅10.8㎝を測る。

857は径1.0㎝の棒状品で、端部から約1㎝の部分に抉りを1周させる。もう一端は折損するため、残存長は11.7㎝である。織機の上糸と下糸を入れ替えるための粽絖（そうこう）の可能性がある。スギ製。

858，859は断面が長方形を呈する棒状の浮木である。いずれも端に孔が開けられる。858は残存長13.8㎝、859は9.3㎝を測る。両者ともにスギ製である。

860～862は箸と考えられる。いずれもヒノキ製で、端部を残して折損する。太さは5.0～6.0㎜で、荒い面取りの痕跡が認められる。860と861は身部から端部まで太さは一定だが、862は先端に向けてやや太さを減ずる。

863は横櫛で、恐らくB80-B区で出土した567，568同様、全体の形状は背が弧状に丸く収まる形状と考えられる。厚さ5.6㎜。シャシャンボ製。なお、566は背が平坦気味である。

864は18.0㎝×17.5㎝のほぼ正方形を呈するヒノキの柾目板である。相対する2辺のほぼ中央それぞれに、幅3.5㎝×長さ5.0㎝のものと、幅4.0㎝×長さ5.0㎝の突出部が付属する。突出部には1辺が1.2～1.4㎝の方孔が開けられている。何らかの器物の部材と考えられるが、詳細は不明である。

866～869は曲物の蓋板および底板である。866，868，869は、側板を樺皮で結合することから、蓋板と考えられる。867は木釘による側板の結合が7箇所以上認められることから、底板と考えられる。

873，874はヒノキ柾目板製の馬形である。873は上辺に切込みがあり、鞍後端と尾部を表現している。874は上下辺に切込みがあり、左向きの頭部を作り出す。頭部の下辺には口表現の切り込みも見られる。

878はヒノキ製の板材で、扁平な凸形を呈する。他の部材と組み合わせて機能したものか。

879はやや歪なひし形が2つ接合した形状の用途不明品。両端各辺は両面切削され、柳葉鏃の様な尖頭状である。また中心付近には直径約7.0㎜の歪んだ円孔が穿たれる。ヒノキ製。

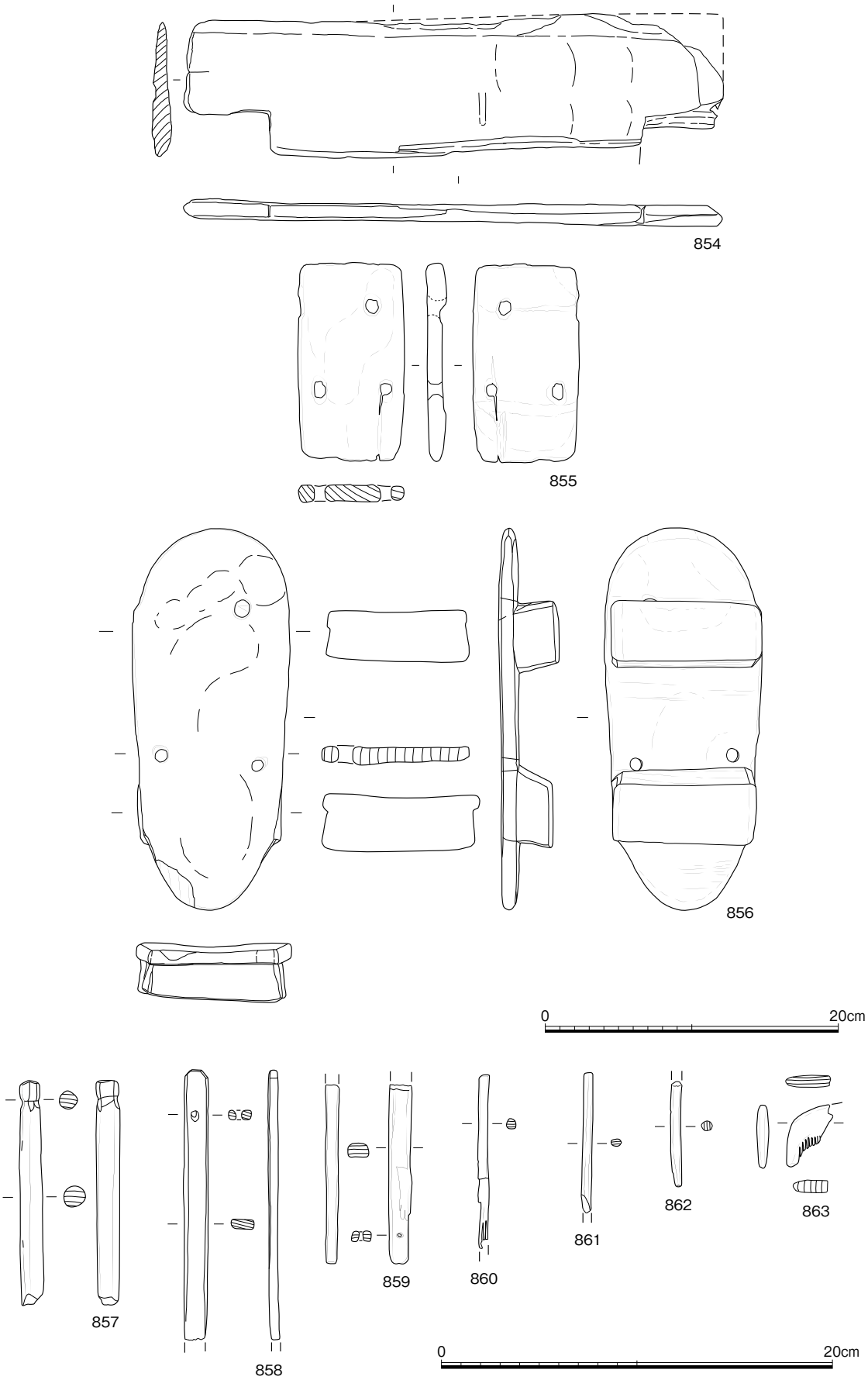


fig. 217　B83-B区出土木製品（1）

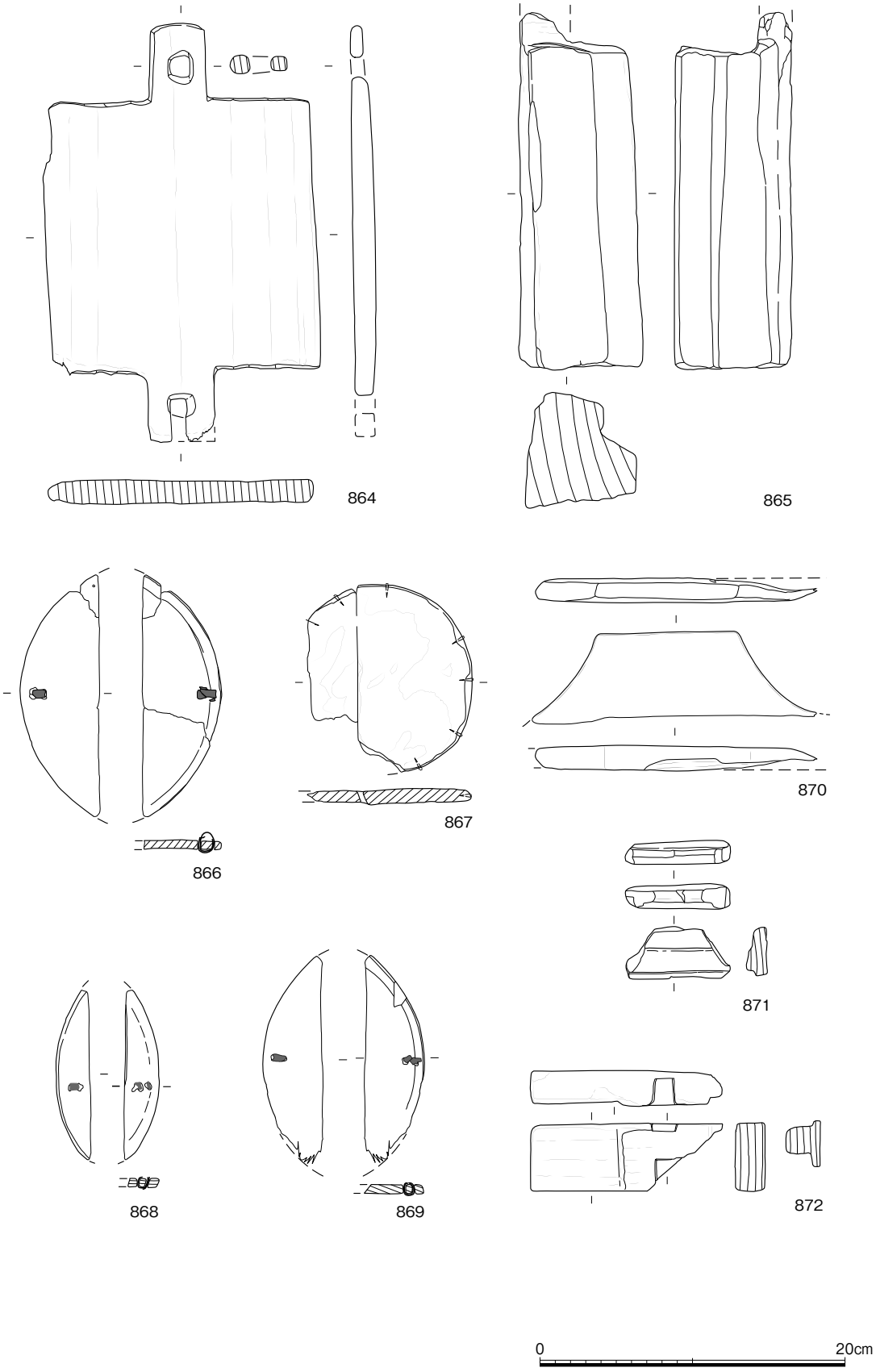


fig. 218　B83-B区出土木製品（2）

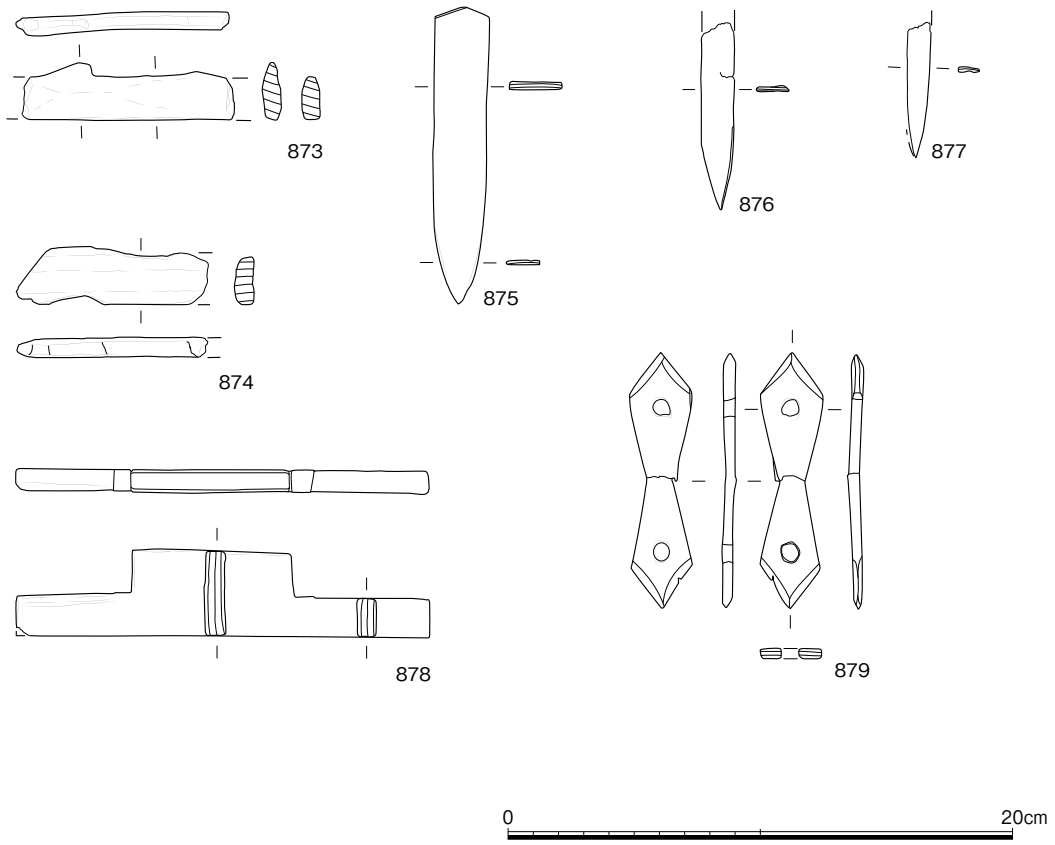


fig. 219　B83-B区出土木製品（3）

3．第14次調査

P2区

立地

当該地区は西側を流れる小河川の影響を受け、上層は洪水砂層に覆われていた。

基本層序

阪神電車軌条の盛土、近世の耕作土以下は中・近世頃の洪水の堆積層が堆積し、その下に奈良時代頃の土器を含む湿地層、シルトと細砂で構成される海の影響を受けた層が堆積する。

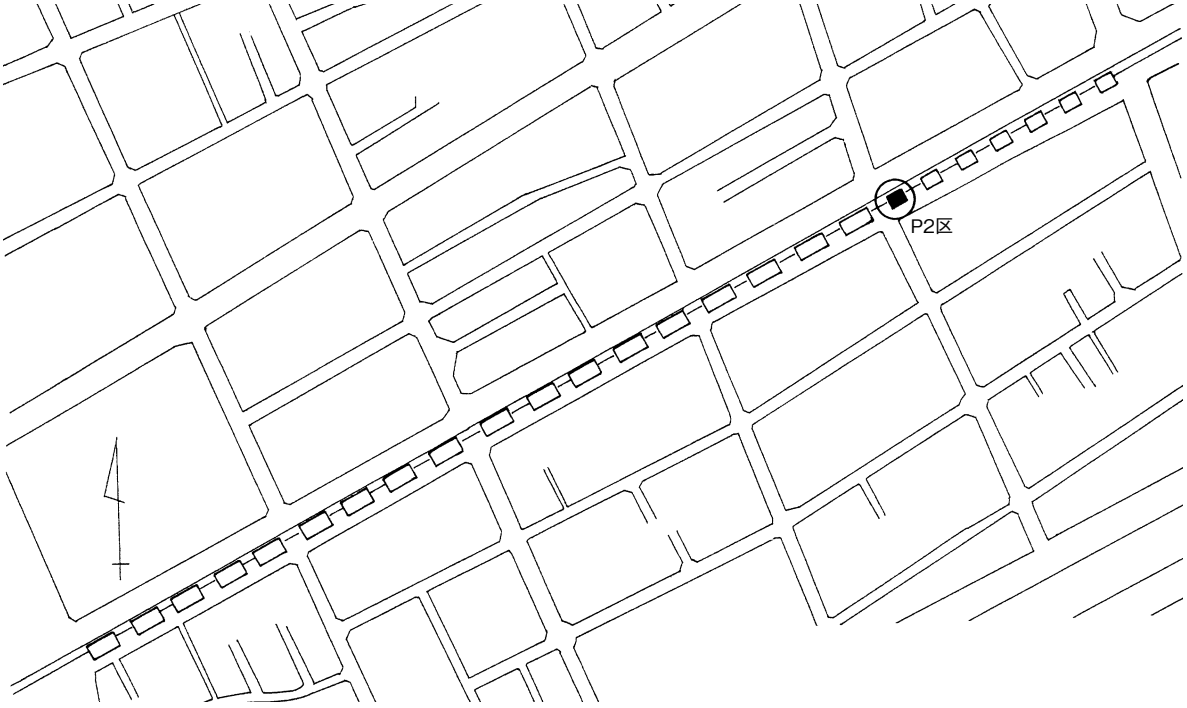


fig. 220　P2区位置図

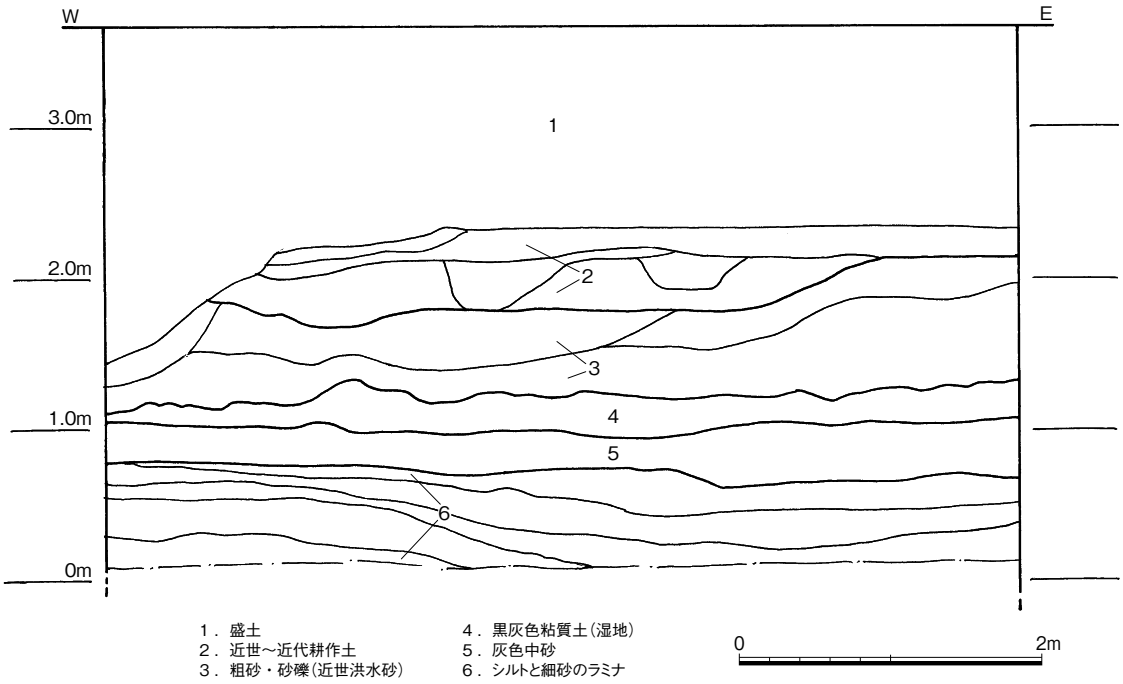


fig. 221　P2区北壁断面図

洪水層

耕土層の下は、西側にあった小河川の粗砂や砂礫層が厚く堆積していた。

奈良時代の湿地層（黒灰色粘質土）

洪水砂層に削られた状態で、奈良時代の土器を含む湿地層を確認した。

古墳時代の湿地層

湿地層以下は、シルトと中砂が交互に堆積する状態であった。

出土遺物

880は須恵器坏蓋である。881は土師器高坏、882は甕形土器である。883は墨書土器で「辛万（呂）」とある。

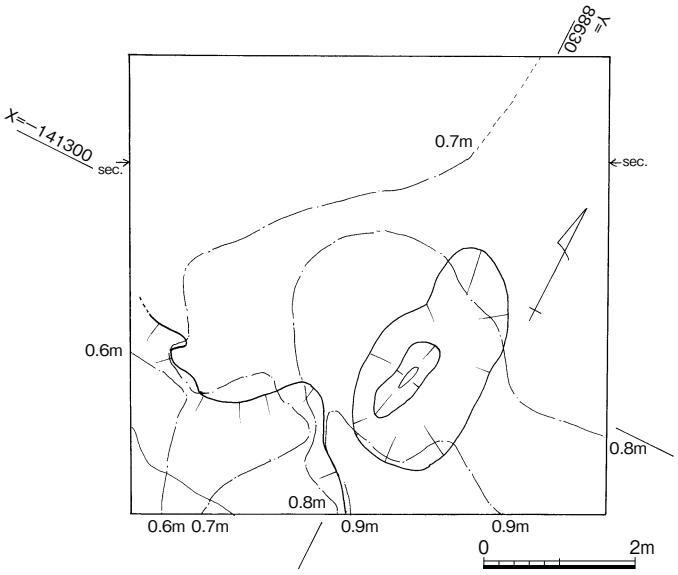


fig. 222　P2区地形測量図

884は舟形である。マツ属複維管束亜属材製で、184に類似するものの未成品と考えられる。

885は漆容器である。ハリギリ製で、木地に布帛を貼付し、さらに黒漆を施す精良品である。

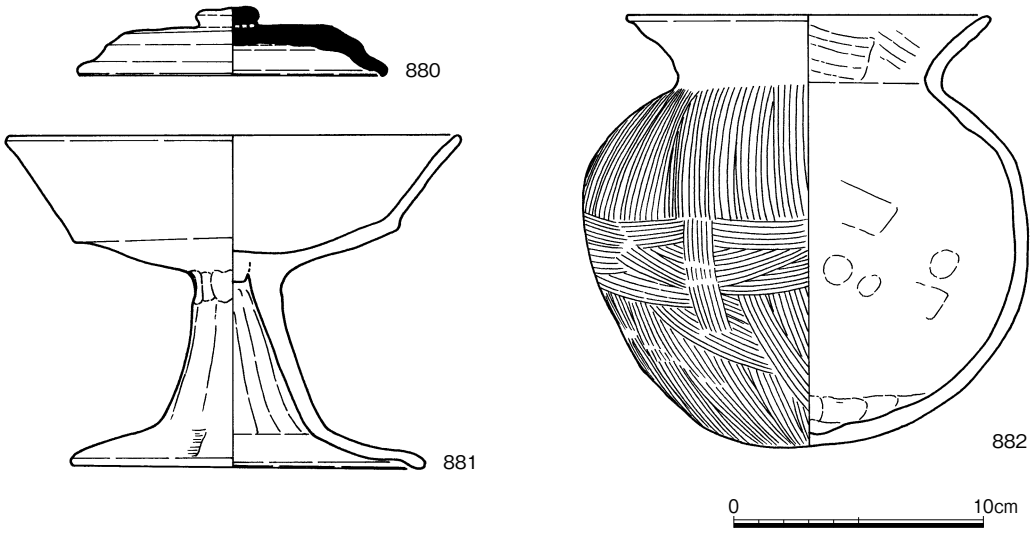


fig. 223　P2区出土土器

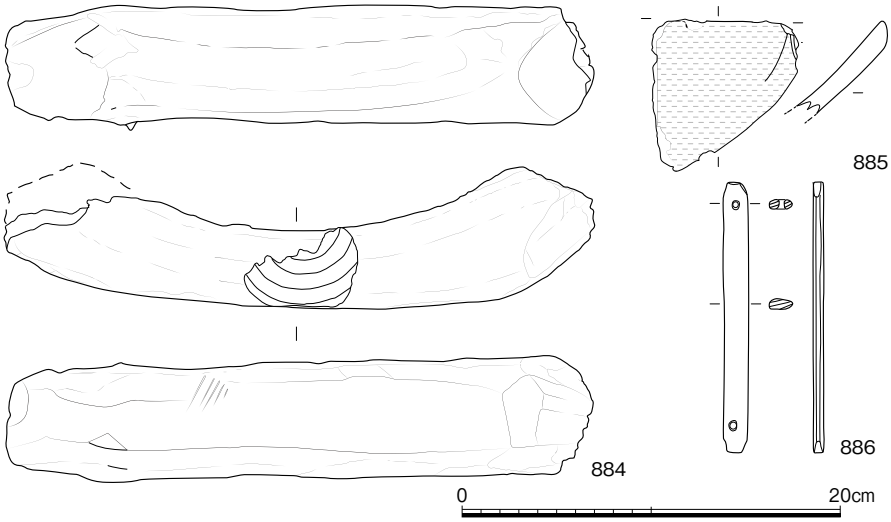


fig. 224　P2区出土木製品

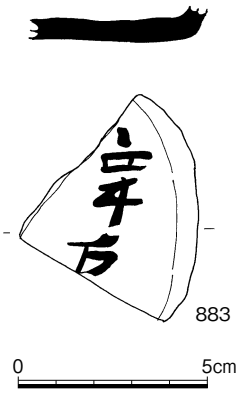


fig. 225
P2区出土墨書土器

P3区

立地

当該地は湿地層の堆積が続く。その途中には水田が拓かれ、底では澪筋が確認される。

基本層序

阪神電車の軌条下には近世・近代耕作土、P2区から連続する近世洪水砂層がある。

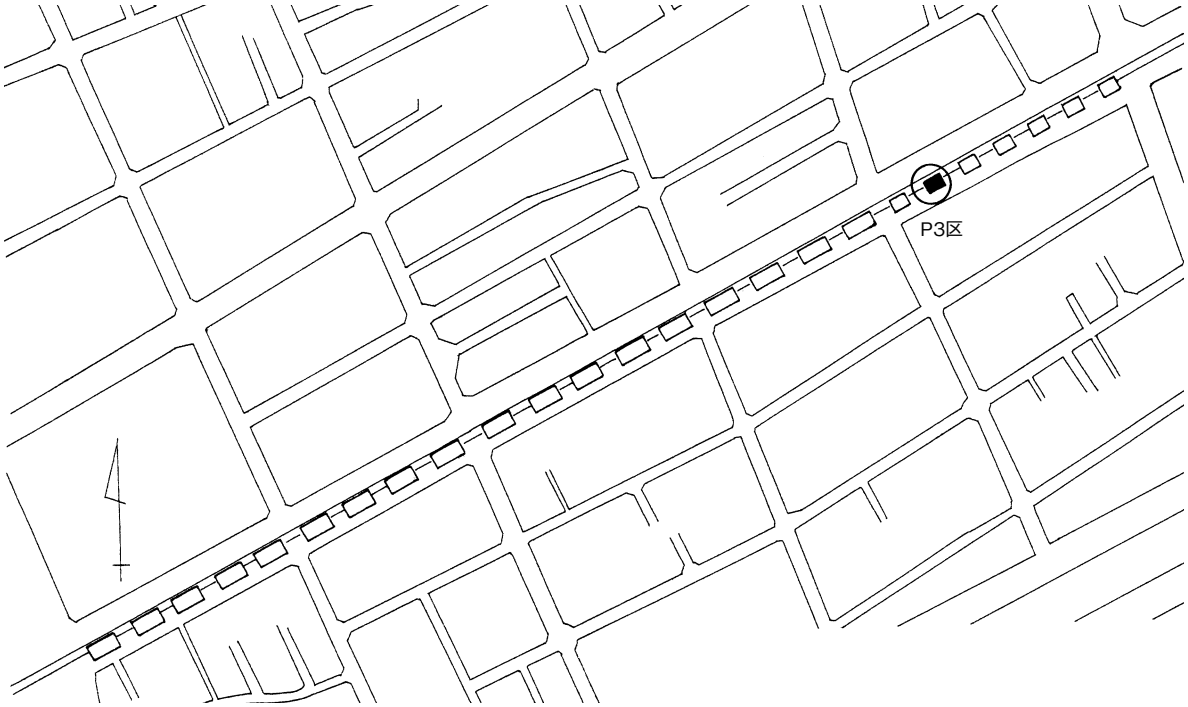


fig. 226　P3区位置図

その下は奈良・平安時代の湿地層（黒灰色粗砂混じり粘質土）奈良時代頃の水田面と畦畔検出層があり、以下で古墳時代頃の澪筋（黒灰色・暗灰色・灰色中砂）を確認した。

湿地層

近世耕作土の下は中・近世の土器を含む洪水砂層に厚く覆われ、その下で奈良・平安時代の土器を含む黒灰色粗砂混じり粘質土（湿地層）を確認した。

水田畦畔

この湿地層を除くと、再び洪水砂層が現れ、その厚さは40㎝に達する。この洪水砂層に覆われ、一部は削られるような状況で、水田畦畔と水

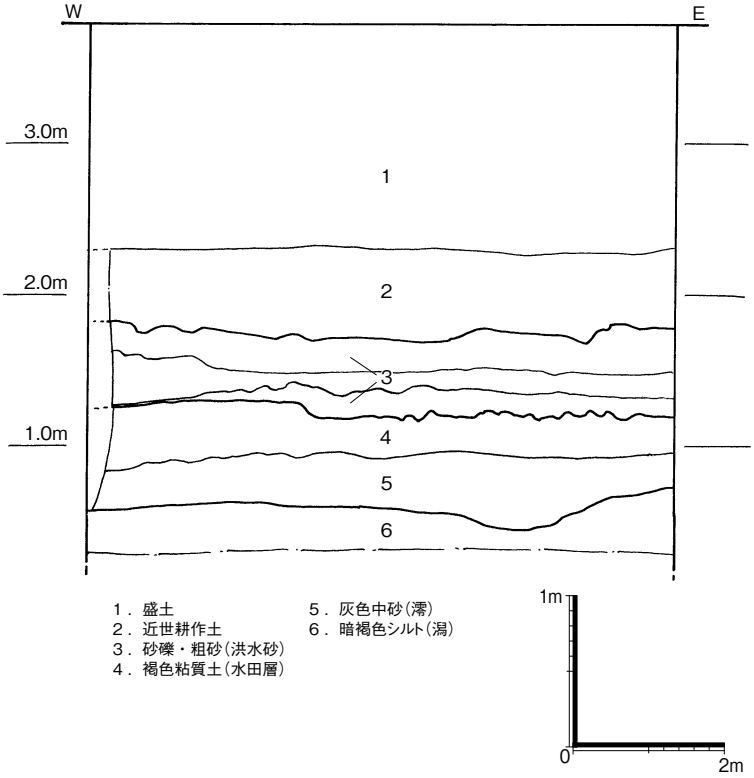


fig. 227　P3区北壁断面図

田面を検出した。畦畔は幅約40～50㎝、高さ10㎝程度で、ほぼ東西方向に延びる。畔の一部分が洪水の砂礫で抉られて消失していた。水田面にはヒトの足跡やウシと思われる偶蹄目の足跡が確認でき、その一部は歩行の状態が判るものもある。水田の時期は奈良時代と推定している。

澪筋・土器群

奈良時代の水田層の下はよく淘汰された中砂が堆積する。中砂は土壌化の程度によって、黒灰色・暗灰色・灰色に分かれ、南から北に向けて堆積を繰り返していたようである。

その過程で北東から南西方向の澪筋が開いていた時期があり、その澪筋の岸辺に古墳時代前期の土器群（小型丸底形土器、甕形土器、壺形土器）がまとまって出土した。水辺での祭祀跡と考えられる。

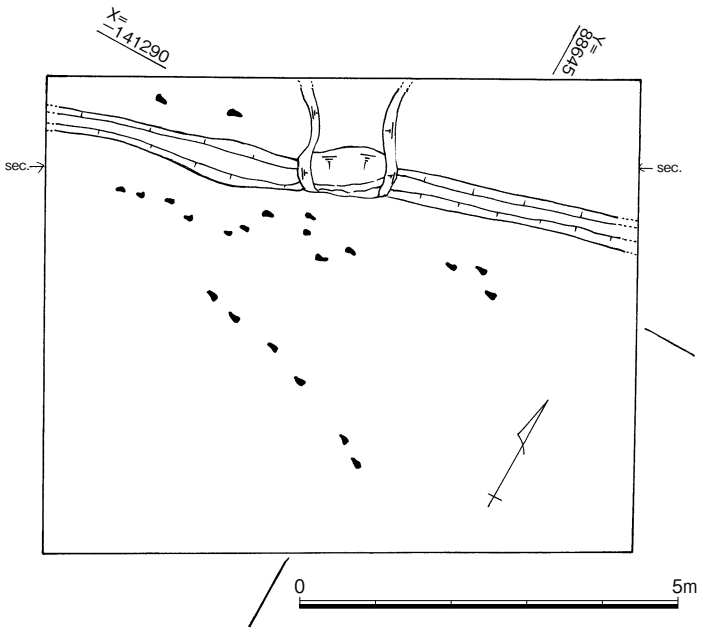


fig. 228　P3区水田畦畔平面図

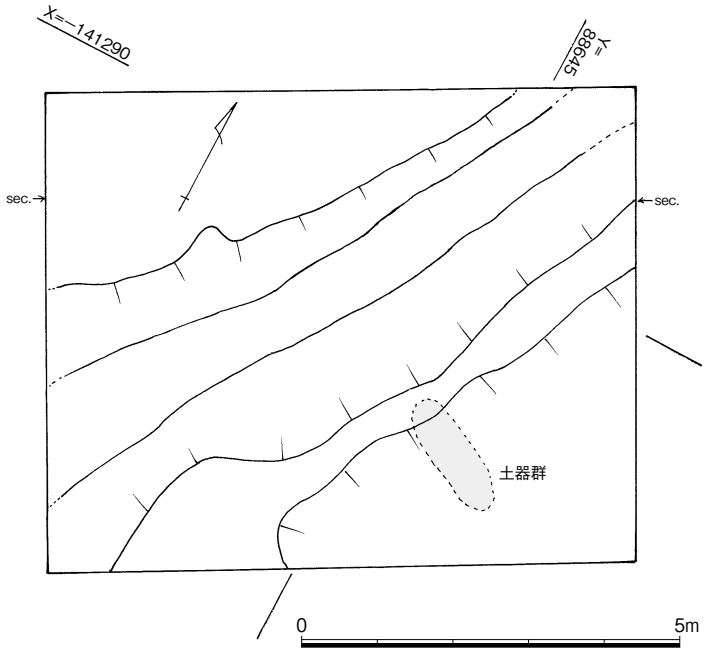


fig. 229　P3区黒灰色中砂面澪筋平面図

fig. 230
P3区黒灰色中砂面
土器群検出状況（西から）

出土遺物

（1）土器

890～898は土師器である。890，891は高坏で、稜の明瞭でない坏部を持つ。灰色中砂層から出土した。892は小型丸底土器、893，894は甕形土器で、893は外面ヘラ削り、内面ハケ目、894は内面ヘラ削り、外面をハケ目で調整する。895の壺形土器は直線的な口縁部に外面はヘラ削り、内面は板状の工具でナデる。これらは澪筋岸の土器群出土である。897の外面は細筋のタタキ目である。898は外面ハケ目、内面は板状工具でなでる。黒灰色中砂層出土である。

（2）木製品

887は円形曲物の蓋板である。復元径22.0㎝で、樺皮による側板結合がなされる。ヒノキ製。

888は断面長方形の棒であるが、一端を折損する。折損部の幅は2.8㎝で、逆端部に向けてやや幅を減ずる。また径1.8㎝の円孔が片面から穿たれており、何らかの部材と考えられる。

889はヒノキ製の舟形である。今回出土した船形では唯一、上部構造物を有する舟の側面観を２次元的な表現で作っている。長さ14.0㎝、厚さ1.8㎝を測る。

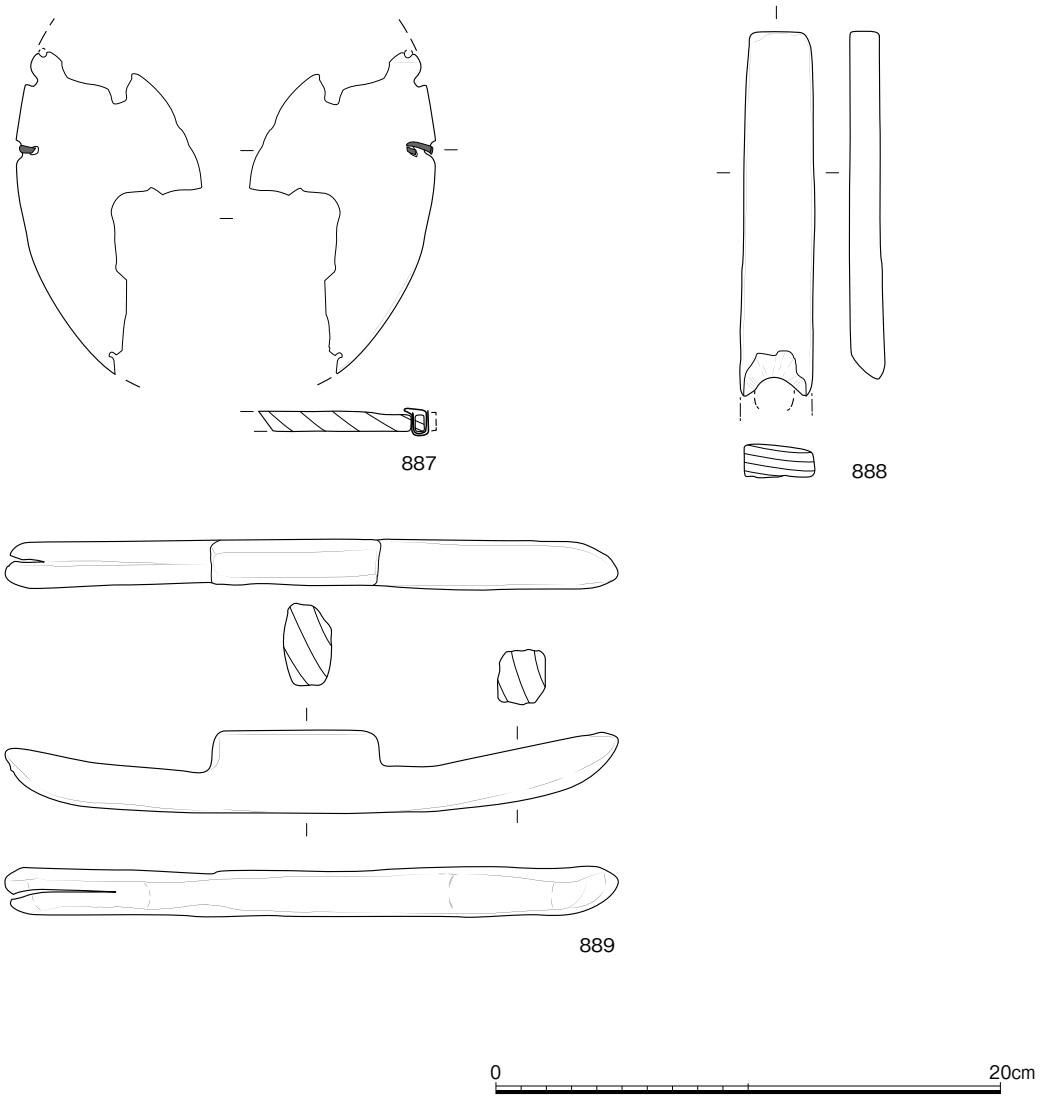


fig. 231　P3区出土木製品

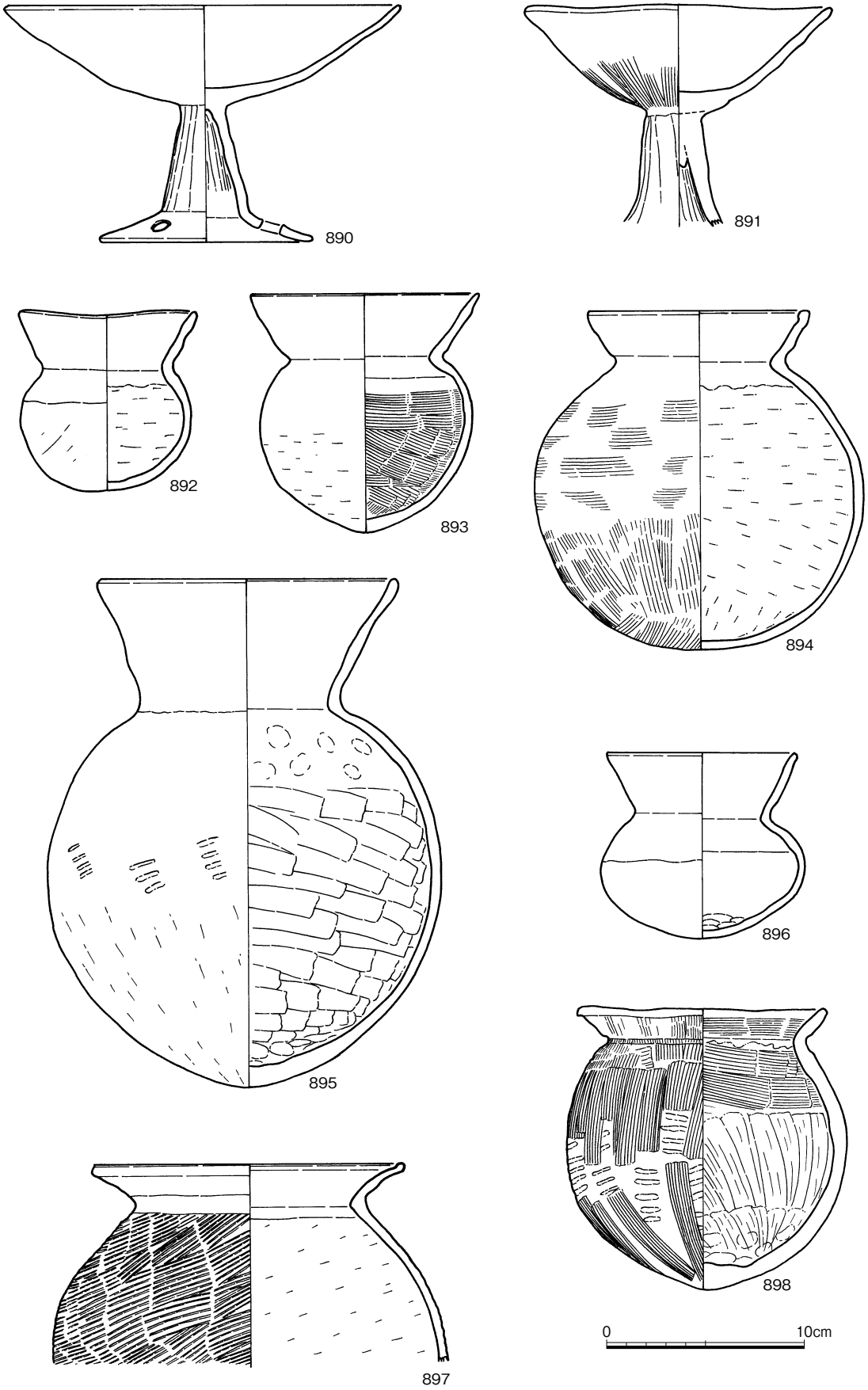


fig. 232　P3区出土土器

P4区

立地

当該地は湿地層の中にあり、洪水の影響を度々受けている場所である。

基本層序

阪神電車軌条下の盛土、近代・近世耕作土の下は中世耕作土（暗灰色砂質土）が堆積し、そ

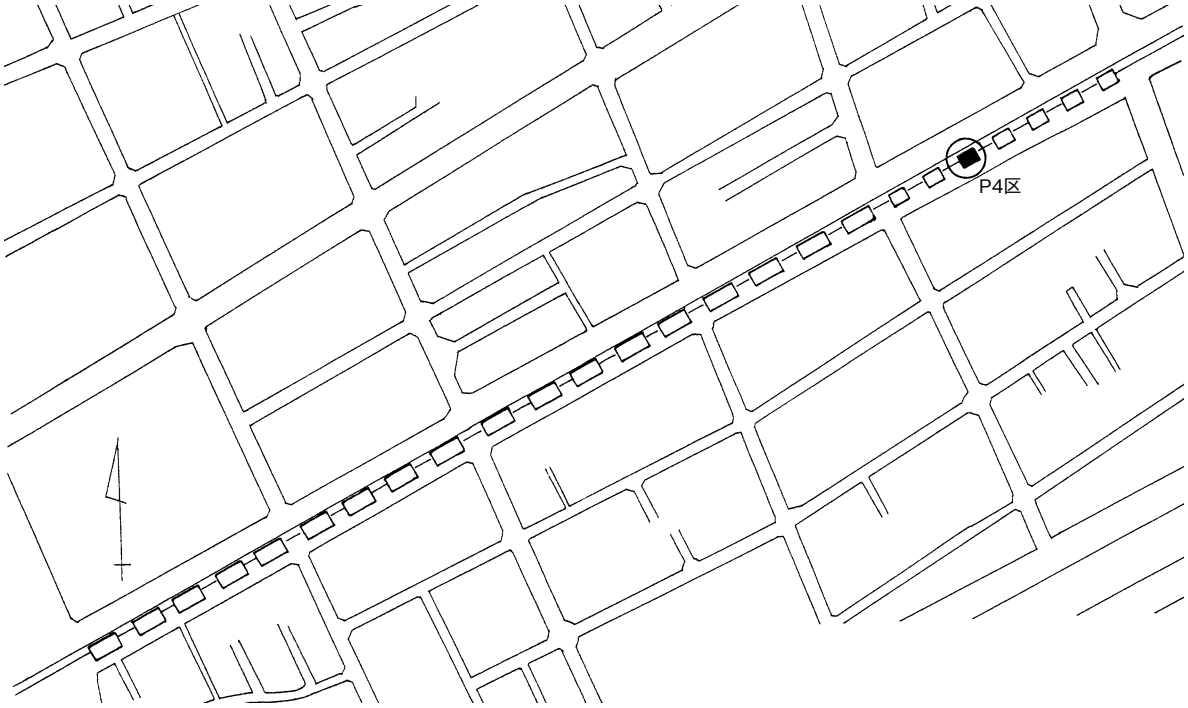


fig. 233　P4区位置図

の下は奈良時代頃の洪水層、奈良時代頃の水田層（褐色粘質土）を確認した。以下は中砂・シルト層が堆積していた。

洪水層

中世耕作土の下は、粗砂や砂礫層が厚く堆積（50～70cm）し、数度の洪水によってもたらされた堆積物であることが土層観察から判かる。洪水層は下の水田層を覆い尽くしている。

水田層

水田層では畦畔を確認していないが、隣接した調査区の水田畦畔確認層とほぼ同じ高さの同質の層である。この面には調査区の中央を南北方向に洪水砂が流れた跡が残されており、水田面には動物の足跡を確認した。

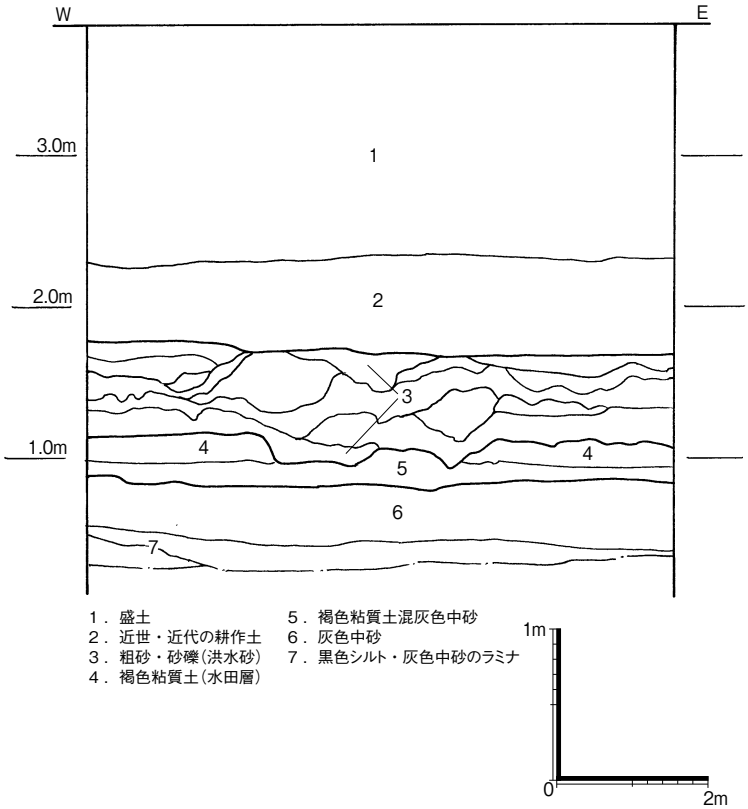
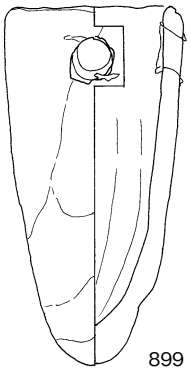


fig. 234　P4区北壁断面図



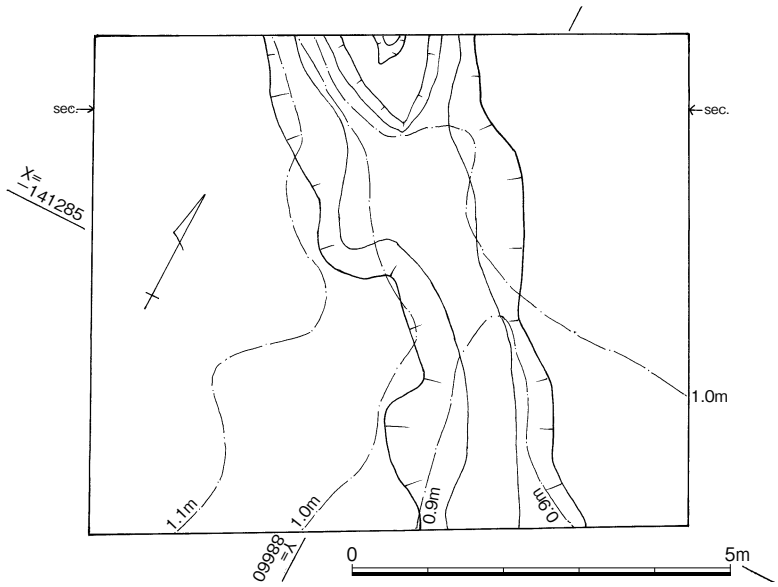


fig. 235　P4区流路平面図

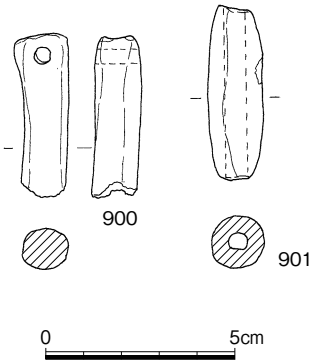


fig. 236　P4区出土蛸壺・土錘

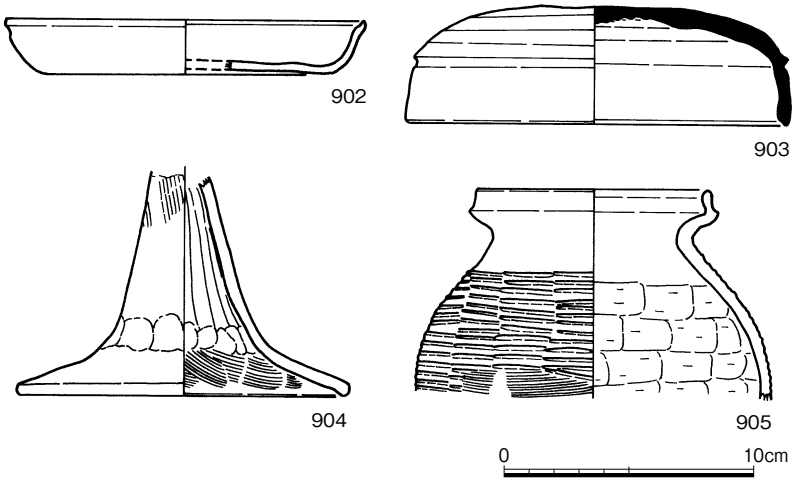


fig. 237　P4区出土土器

出土遺物

899, 904, 905はシルト層、900, 901, 902は洪水砂、903は水田層の下層から出土である。903は須恵器、その他は土師器（土師質）である。

906はヒノキ製の舟形で、平面形は細長い杏仁形、上面には上部構造物を削りだしている。

907は舟形で、他に比べ小型粗製である。スギ材を用い、素材からも違いが看取できる。

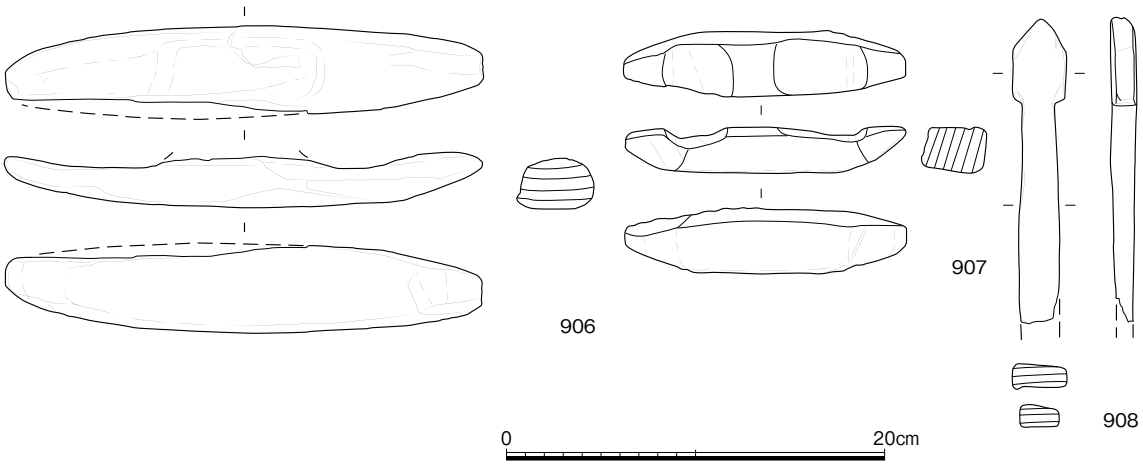


fig. 238　P4区出土木製品

P5区

立地

当該地は湿地の中に位置し、近世に至るまで低湿な環境下にあったものと考えられる。

基本層序

阪神電車軌条の盛土、近代・近世・中世耕作土の下は、奈良・平安時代頃の湿地層（黒灰色砂質シルト）・洪水砂、奈良時代頃の水田層（黒褐色粘質土）、それ以下はシルト・中砂が堆積する。

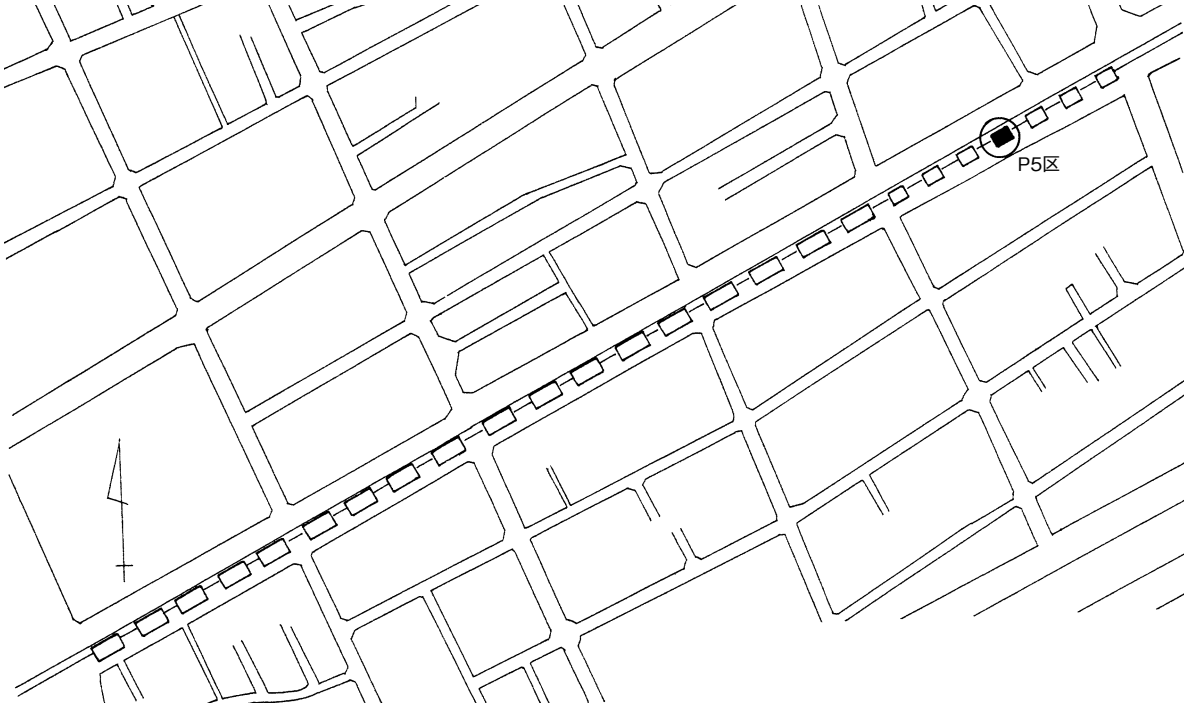


fig. 239　P5区位置図

水田畦畔・土坑

水田畦畔は幅約80㎝～1m、高さ10㎝程度で、南北方向に延びる。水田層面ではヒトとウマ？の足跡が多数残されていた。

また、畦畔の東側に中砂がレンズ状に堆積している箇所があり、水田層を除去後に掘削をしたところ、土坑（SK01）であることが判明した。径約2.1m、深さ80㎝の二段掘りで、上層は中砂で埋められ、下層はシルトが堆積していた。水田面から掘り込まれており、灌漑用の水を溜める施設（溜井）と考えられる。

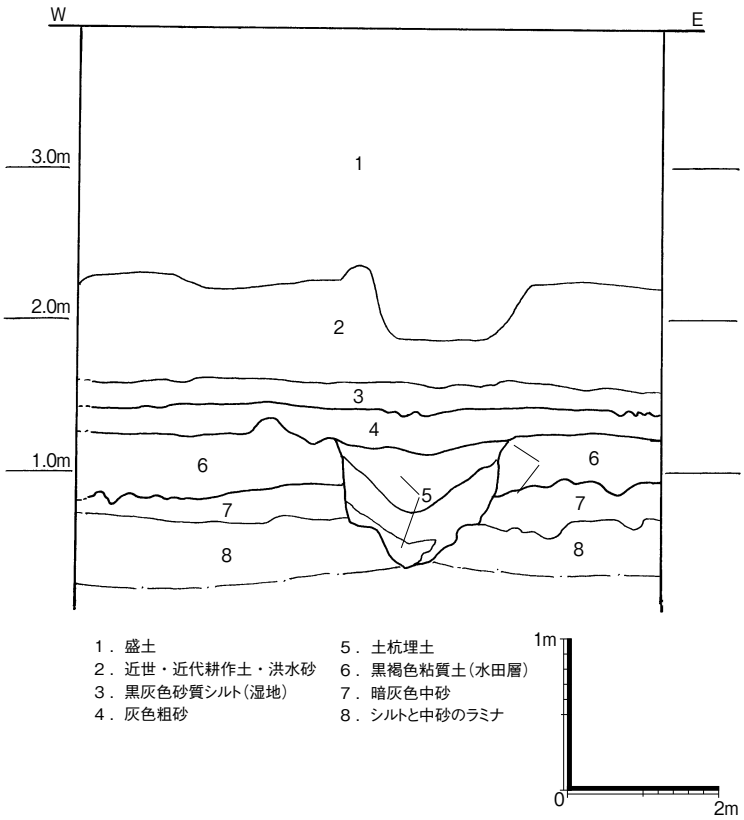


fig. 240　P5区北壁断面図

出土遺物

909は墨書土器で、須恵器坏蓋内面のつまみの裏付近に「飯」と書かれている。奈良時代水田層出土である。910は土師器皿で口縁端部内面に段を有する。911は棒状土錘である。いずれも湿地層の黒灰色砂質シルト出土である。

912は唯一のヒノキ製の錘である。913は舟形の残欠で、小型の粗製品であり、スギ材を用いている。914は円形曲物の底板で、ヒノキ材の板目板を使用している。915は用途不明である。ヒノキ製。

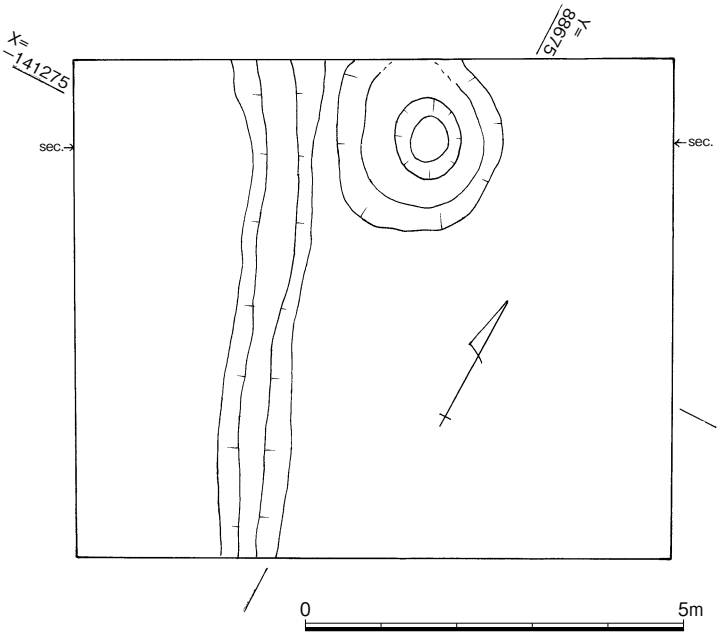


fig. 241　P5区水田畦畔平面図

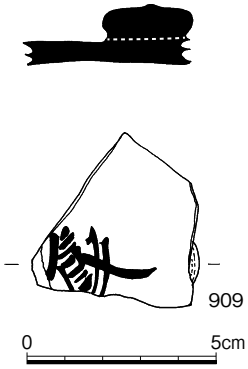


fig. 242　P5区出土墨書土器

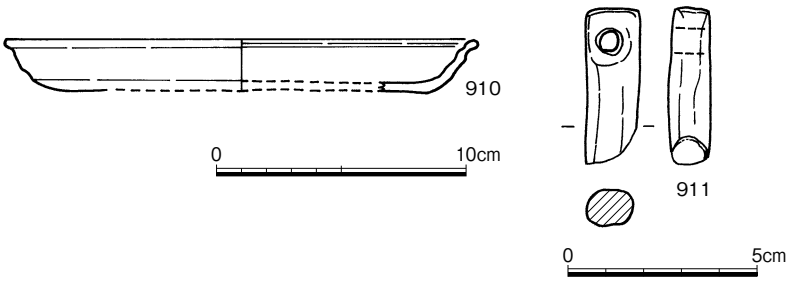


fig. 243　P5区出土土器・土錘

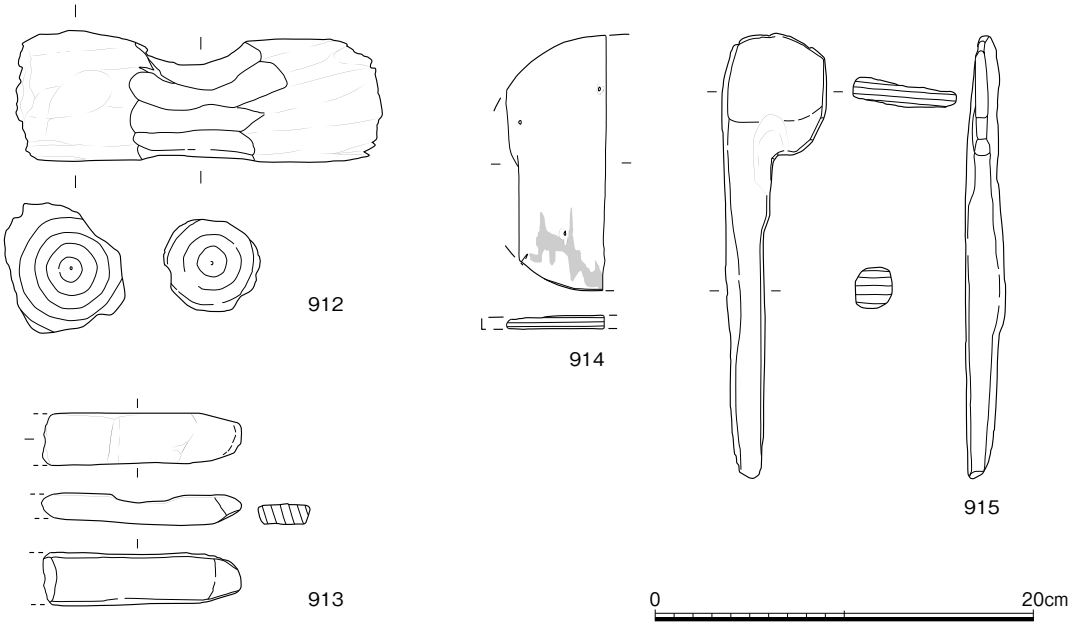


fig. 244　P5区出土木製品

P6区

立地

当該地は湿地内に位置する。この付近では西側にある小河川の氾濫の影響は見られない。

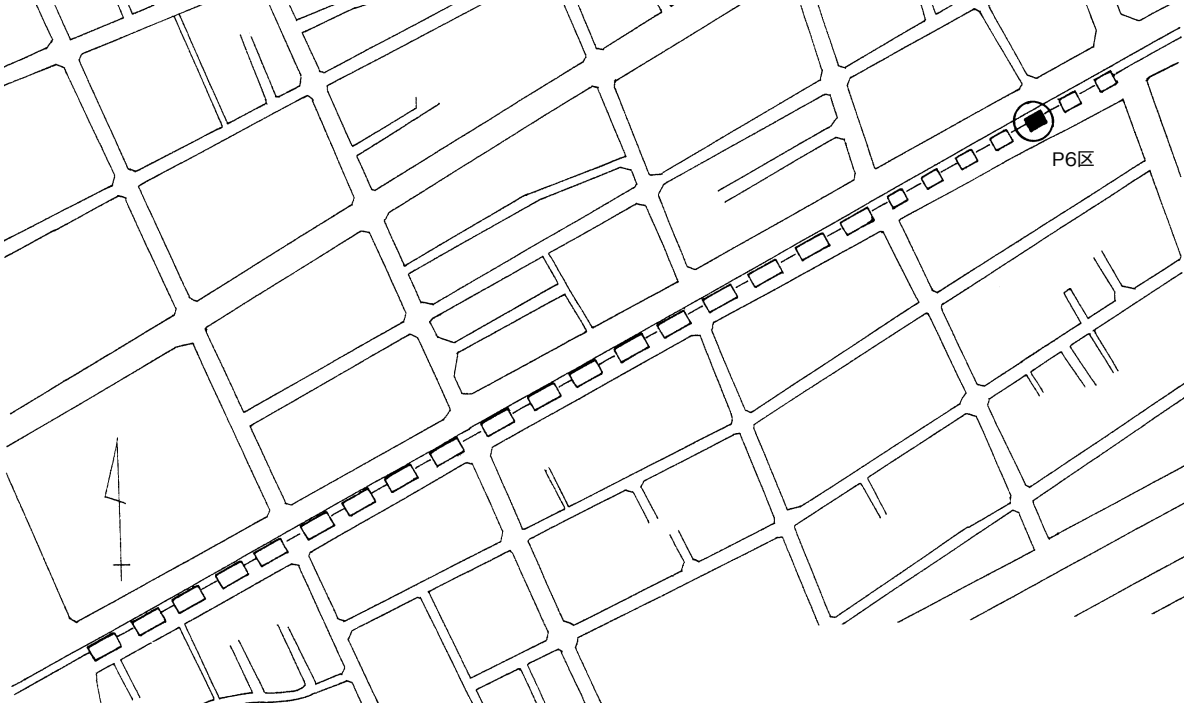


fig. 245　P6区位置図

基本層序

阪神電車軌条の盛土、近代・近世・中世の耕作土が連続し、奈良・平安時代頃の湿地層を確認する。以下は中砂・シルト層が互層で堆積し、それらの層から杭列、柵、古墳時代頃の流路を確認した。

近世の畝跡

近世洪水砂下の黒灰色粘性砂質土上面で、東西方向と南北方向の浅い溝が複数交差する状態で確認された。東西方向の溝は幅約40㎝、南北方向は幅約20～40㎝、深さは4～5㎝程度である。これらは犂溝と云うには幅が広く、畝の土を盛った際にその土を掘り出した痕跡（畝間の溝）と考えた方が妥当ではないかと思われる。なお、東西方向の溝が南北方向の溝に切られており、東西方向の畝が設定された後に、何らかの理由で南北方向の畝に改められたものと考えられる。

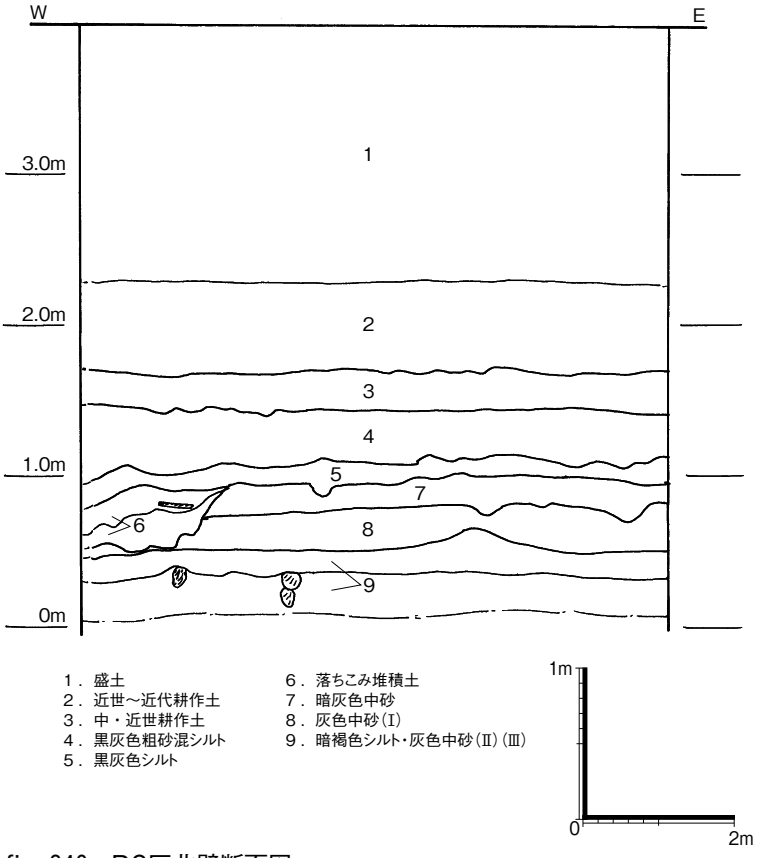


fig. 246　P6区北壁断面図

湿地層

奈良・平安時代の土器を含む黒灰色砂礫混じり粘質土、奈良時代の土器・木片を含む黒灰色粗砂混じりシルト層は湿地状態で堆積している。

落ち込み・流路

湿地層を除去すると、灰色中砂（Ⅰ）が現れる。この面では落ち込みと流路、杭列、柵を確認した。西側の落ち込みは下層にはシルト、上層には粗砂が堆積している。上層からは板材が出土している。

流路は、深さ10～20㎝程度で、やや深みになる箇所には植物遺存体が溜まっていた。流路からは古墳時代後期の土器片が出土している。

杭列・柵

調査区北半部で杭が6本、ほぼ直線に並んで検出した。西側の杭には丸材を横に配し、柵としていた。これらは上層の奈良時代の遺物を含む土層から打ち込まれたものと考えられる。これらの層では畦畔等は確認できなかったが、土の状況からみて、水田層であった可能性が高く、杭・柵などもそれに伴う遺構であると思われる。

高坏の出土

灰色中砂（Ⅰ）以下の層で古墳時代前期頃のほぼ完全な状態の土師器高坏や、甕の口縁部分が出土した。

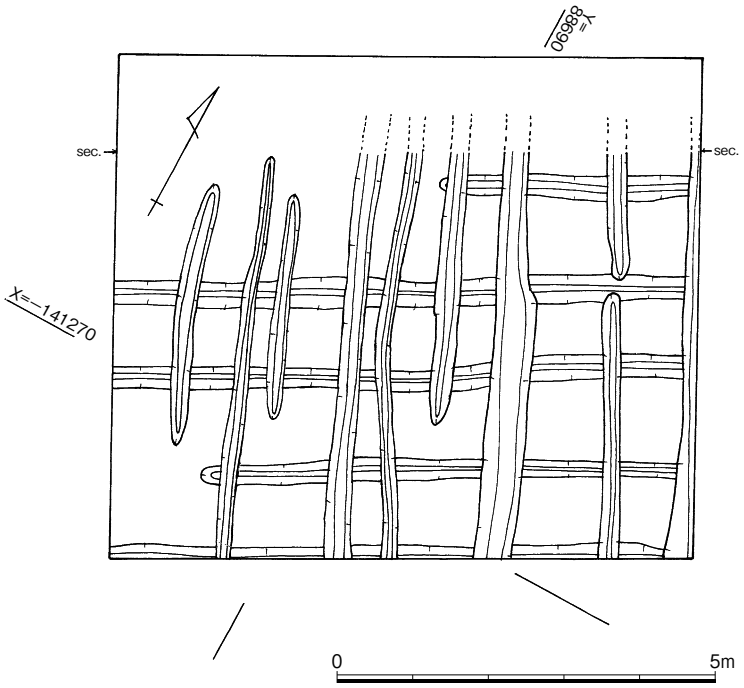


fig. 247　P6区犂溝平面図

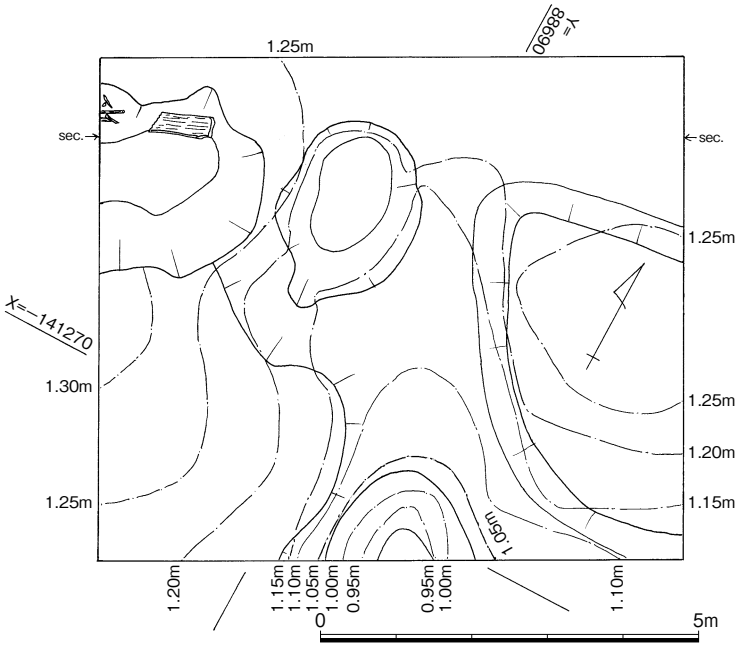


fig. 248　P6区落ち込み・流路平面図

fig. 249　P6区高坏出土状況（南西から）

出土遺物

(1) 土器・墨書土器

918は土師器の甕形土器で、球形の体部に直線的な口縁部と端部に面を持つ。胴部外面はナデ調整、内面はヘラ削りを施す。919は土師器高坏で、稜が明瞭でない坏部と直線的に開く口縁部を持つ。坏部内外面はハケ目、脚部に3方向の円形透かしを持つ。脚部外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りで調整する。これらは、灰色中砂(Ⅱ)層出土である。

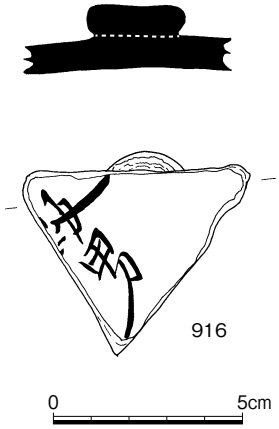
916は墨書土器で、須恵器坏蓋のつまみの真裏にあたる内面部分に「□[飯ヵ]男」と書かれている。これは水田層の下層(黒灰色粗砂混じりシルト層)で出土している。P5区でも「飯」と書かれた土器が出土しており、関連が注目される。

(2) 土錘

920, 921は棒状土錘で粘土を棒状に成形した後、両端に紐通しの孔を設ける。922は有溝土錘でいずれも土師質である。水田層下層から出土している。

(3) 木簡

917は水田層の下層(黒灰色粗砂混じりシルト層)で出土した木簡で、孔が開けられた下に「戸主椋人廣男戸馬□」と墨書されている。□は「手」の可能性が高い。



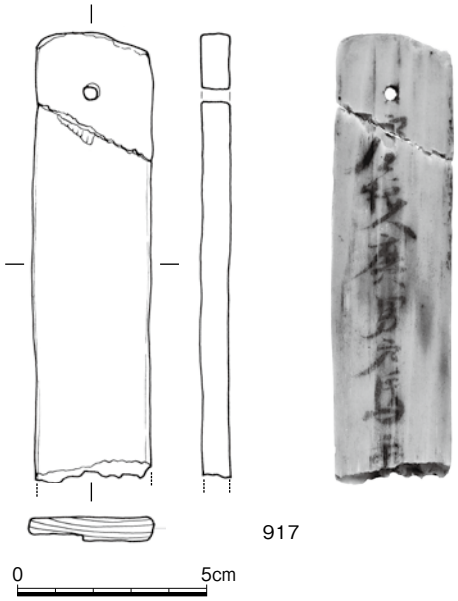


fig. 250　P6区出土墨書土器　fig. 251　P6区出土木簡

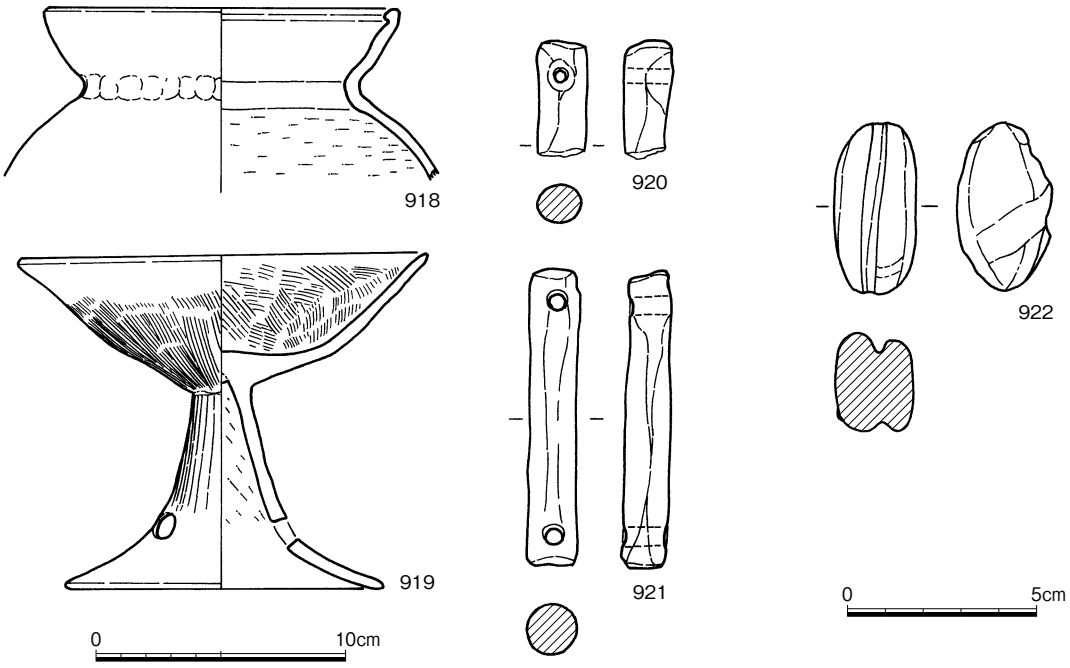


fig. 252　P6区出土土器・土錘

(4) 木製品

923は筒状を呈する浮木である。材はウツギ属で、中空とし易い材であることから、用材選択されたものと考えられる。径1.6㎝×長さ9.9㎝を測る。

924は漆容器である。小片のため、口径、器高は不明である。口縁端部は上面を平坦にし、端部から1.0㎝下に約1.0㎜の段を設ける。容器の身であれば、蓋受けになろう。器壁の厚さは最大1.2㎝、口唇部の厚さ9.4㎜を測る。ヒノキが用いられている。

926は曲物の蓋板であり、側板との結合に用いられた樺皮が残る。復元径は19.0㎝程度である。ヒノキの板目板製である。

927、928はヒノキ製の箸である。側面は面取り痕が明瞭に残る。太さ4.5～5.2㎜で、長さは折損のため不明である。

929はヒノキの柾目板で作られた馬形である。上辺３箇所に切込みがある。図示したものは、左に尾を向けたもので、中央に作り出した台形部は鞍を表すものであろう。材は厚さ7.0㎜あり、他に比して厚めである。

930はセンダン近似種の芯に近い材を使用した楔状品である。径2.3㎝前後の断面円形に調整した棒材の一端を、平たく楔状に削りだしている。全長14.6㎝を測る。

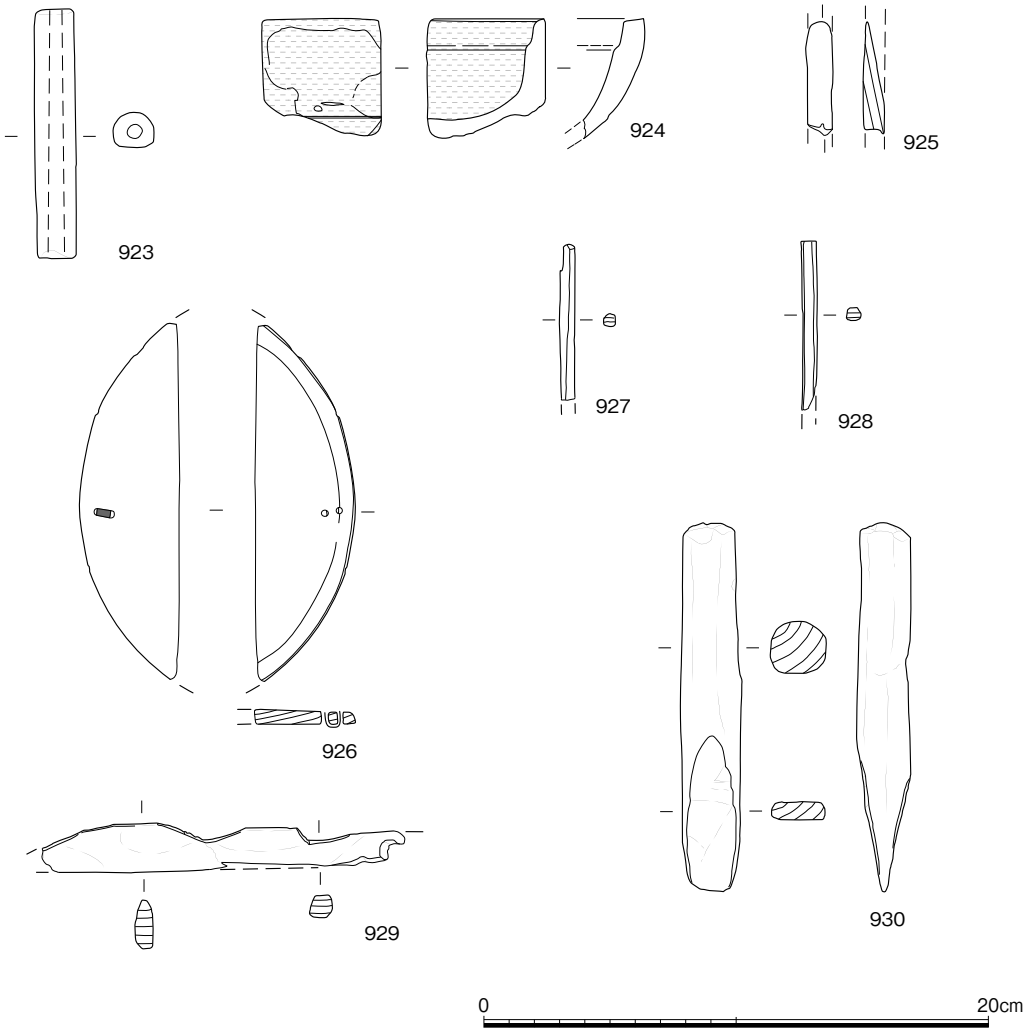


fig. 253　P6区出土木製品

P7区

立地

当該地付近も湿地が連続し、近世耕作土に至るまで、粘質土であることから、かなり水はけの悪い土地であったと思われる。

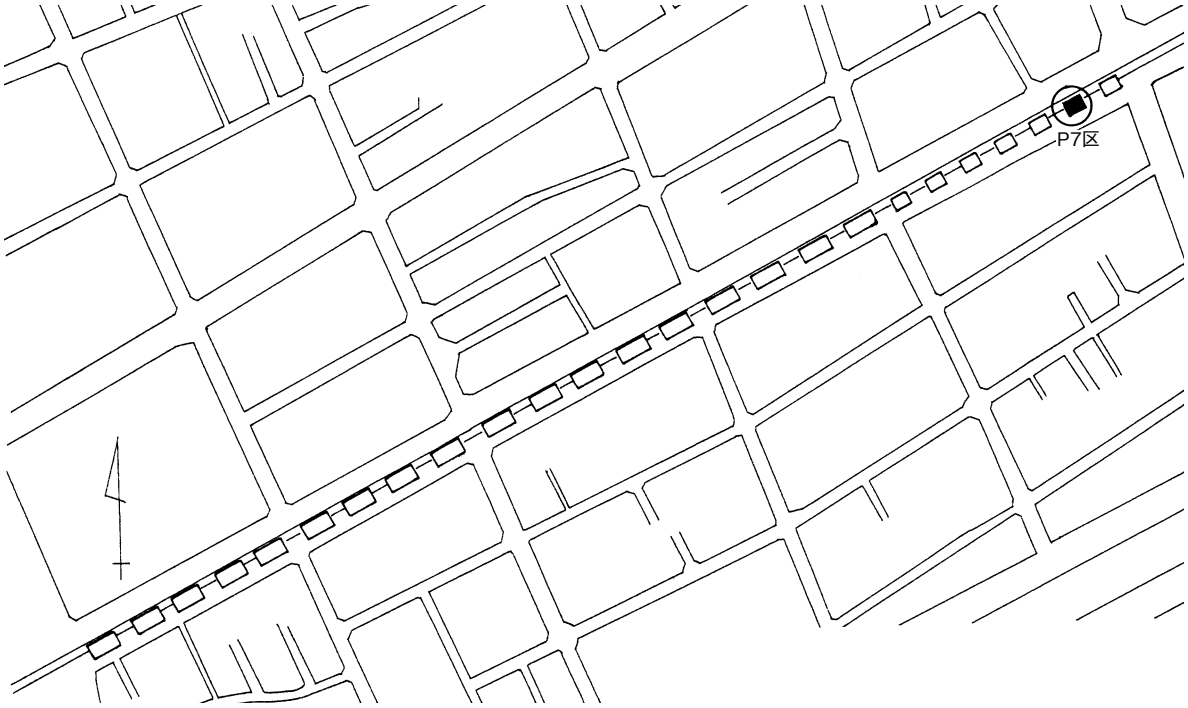


fig. 254　P7区位置図

基本層序

阪神電車の盛土下、近代・近世・中世耕作土、奈良・平安時代頃の湿地層（黒灰色粗砂混じり粘質土）、洪水層（灰色粗砂）、湿地層（黒灰色シルト）の堆積が確認された。以下は中砂・シルト層が連続していた。

近世の畝跡

近世耕作土上面で、東西方向と南北方向の浅い溝が複数交差する状態を確認した。

湿地層

黒灰色粗砂混じり粘質土、黒灰色シルトは湿地堆積物である。黒灰色シルトは、厚く堆積する暗灰色中砂の窪みに溜まっている状況であった。またこの層の上面では、ヒトやウマ？の足跡を多数発見した。

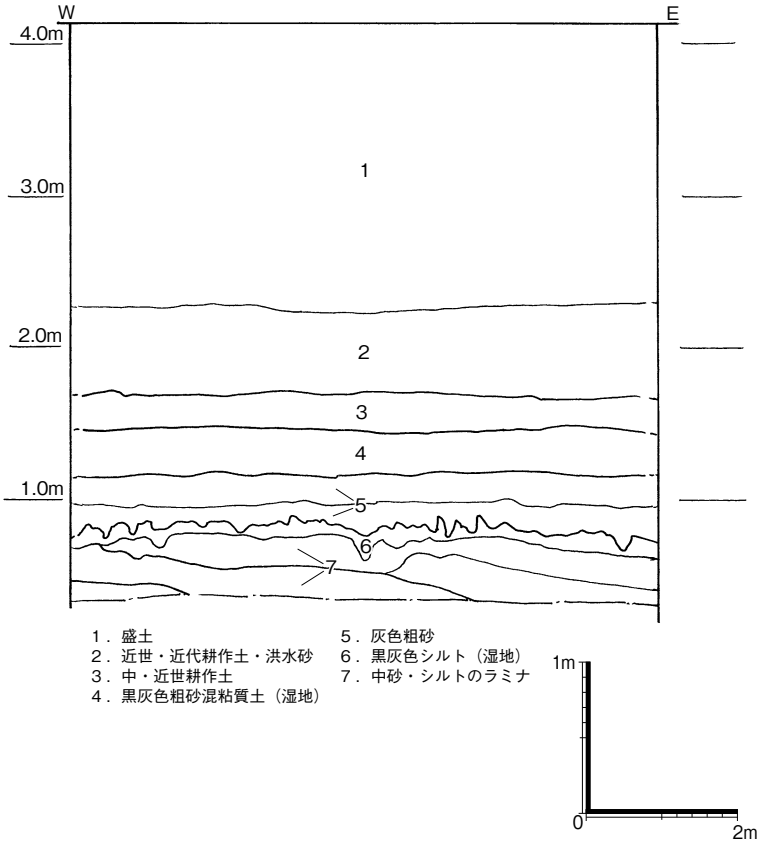


fig. 255　P7区北壁断面図

杭列

黒灰色シルト上面では直線に並ぶ杭10本を確認したが、検出面よりも上層（おそらく奈良・平安時代の湿地層）から打ち込まれたものと思われる。

出土遺物

（1）土器・土錘

931は瓦器椀で、内湾しながら開く口縁部を持ち、体部外面は指頭圧痕、内面はヘラミガキを行う。中世耕土（暗灰色粘質土）出土である。

932は土師器高坏の脚部で、三方に円形の透かしを持つ。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。湿地層より下の中砂・シルト層出土である。

933は土師質の有溝土錘で、断面隅円方形の２面に綱通しの溝を設ける。奈良・平安時代湿地層出土である。

（2）木製品

934はヒノキの板目板を用いた製品で、刀の切先状を呈する。長さ16.4㎝、基部幅3.7㎝で、厚さは上辺が1.5㎝で、下辺に向かって薄く作られる。下端の厚みは基部付近で9.0㎜、切先付近で4.0㎜程度である。用途は不明である。

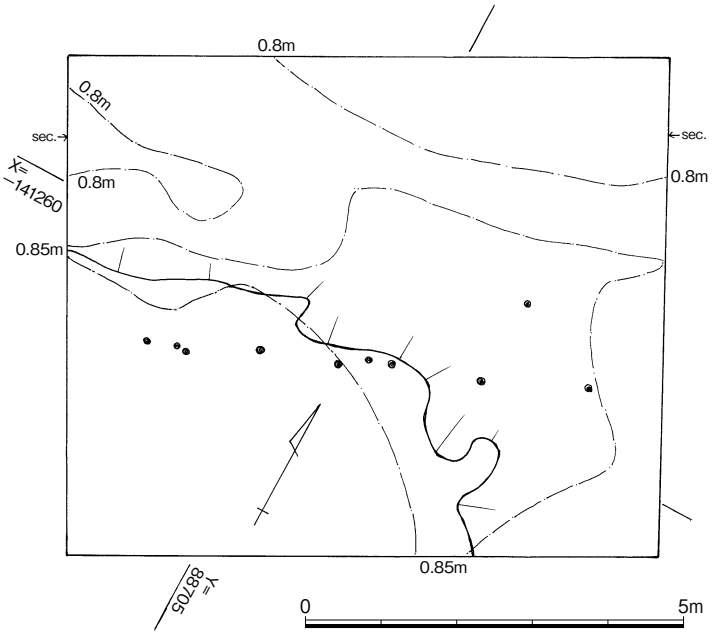


fig. 256　P7区杭列検出状況平面図

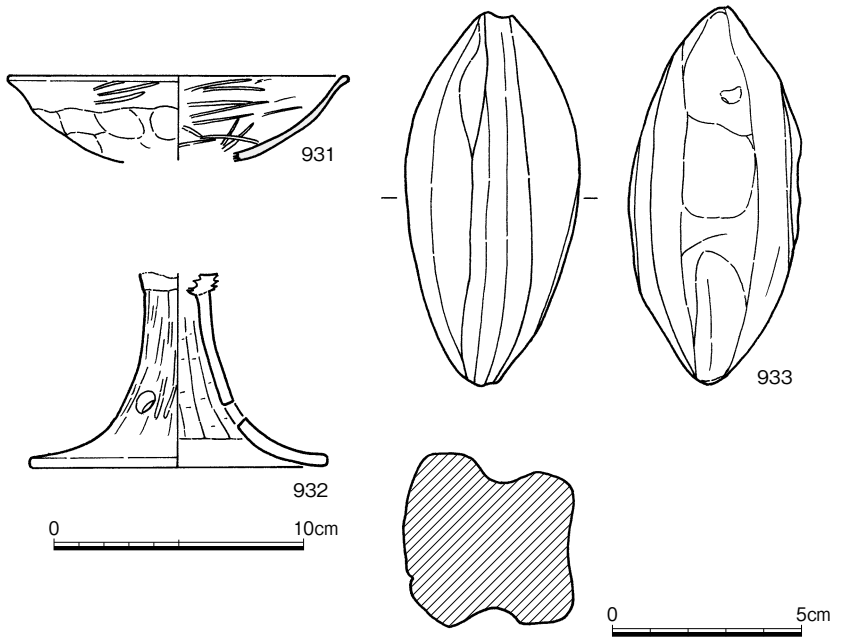


fig. 257　P7区出土土器・土錘

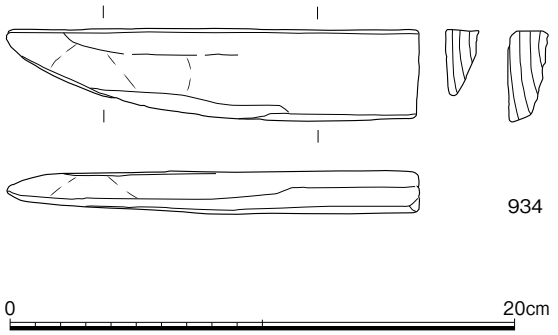


fig. 258　P7区出土木製品

P8区

立地

当該地は湿地に相当し、近代に至るまで連綿と耕作地として利用されている。

基本層序

阪神電車軌条の盛土、近代・近世耕作土の下、幾度かの洪水による細砂～砂礫層が確認され

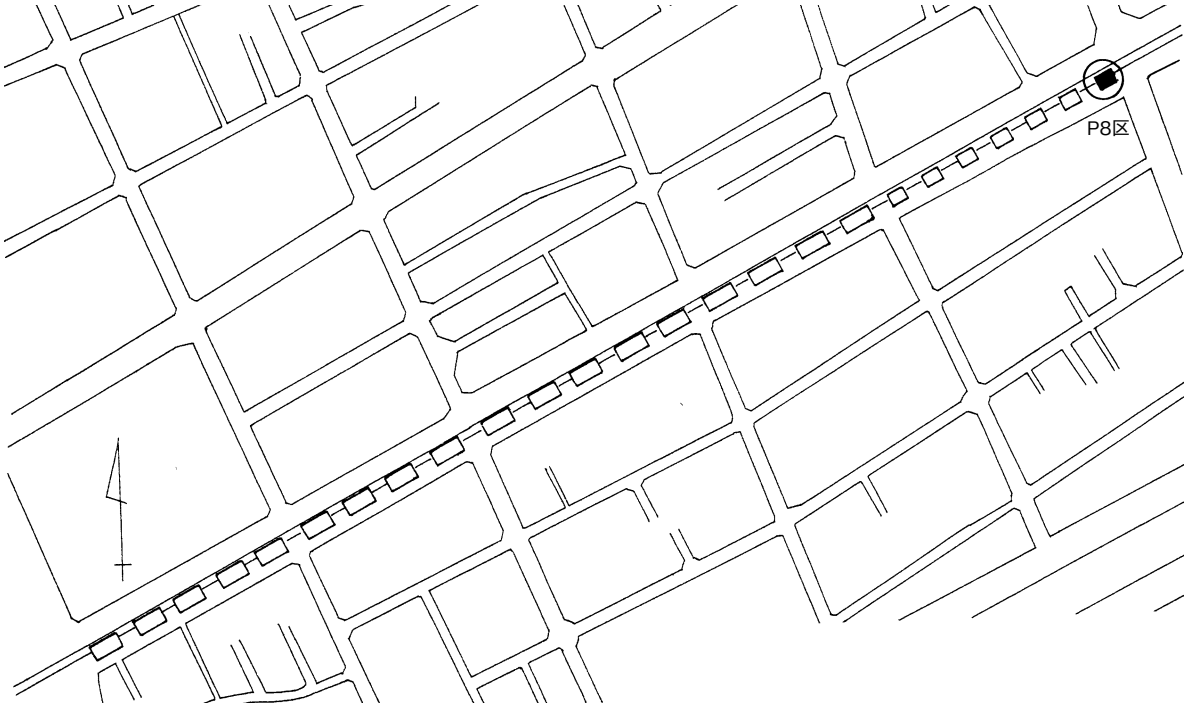


fig. 259　P8区位置図

る。中世耕作土(暗灰色粘質土)の下は黒灰色粗砂混じり粘質土が堆積し、その下は洪水の砂礫に覆われた状態の奈良時代の水田層(黒灰色粗砂混じりシルト)を確認した。以下は粗砂・シルトが続き、澪筋が確認される。

湿地層

黒灰色粗砂混じり粘質土は湿地堆積層である。この層からは奈良・平安時代の土器が出土している。

水田畦畔

洪水砂に覆われた黒灰色粗砂混じりシルト層上面を精査すると、東西方向に延びる畦畔を確認した。これは、幅約1.3m、高さ5～10㎝、北側に幅20～40㎝、深さ5㎝程度の溝を設け

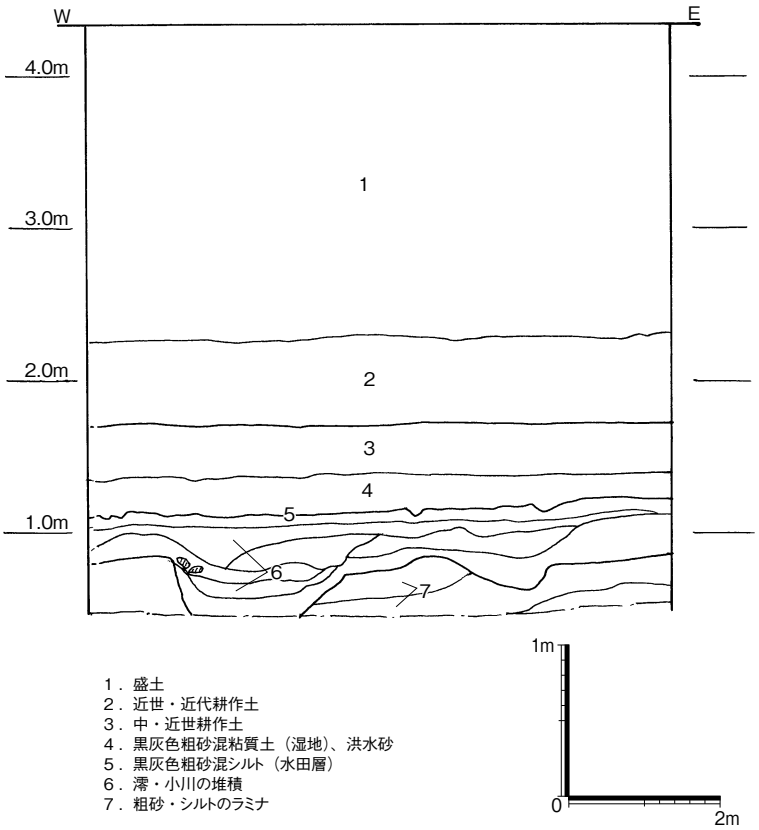


fig. 260　P8区北壁断面図

ている。東端部ではこの溝付近に奈良時代の土器片が少量散乱している状態で発見した。この層の上面では、ヒトや偶蹄目の動物の足跡を多数検出した。また、北東部で杭３本が並んで打ち込まれているのを確認している。

澪筋

水田層の下は主に砂礫・粗砂層が堆積する。これらを南北方向に削って砂礫混じりのシルト層が小川状に堆積する。この中には自然木や古墳時代後期頃の土器が混じっている。同志社大学の増田富士雄先生による現地視察では、この部分は澪筋であったところが、海からの影響が無くなるに従い小川に変化したものであるというご教示を得た。

出土遺物

935は先端を篦状に加工した棒である。コウヤマキ材を長径1.6cm、短径1.1cmの楕円形断面の棒に加工し、先端約5.5cm分を４面から削り、平坦な篦状に加工している。残存長19.1cmを測るが、折損するため元来の長さは不明である。

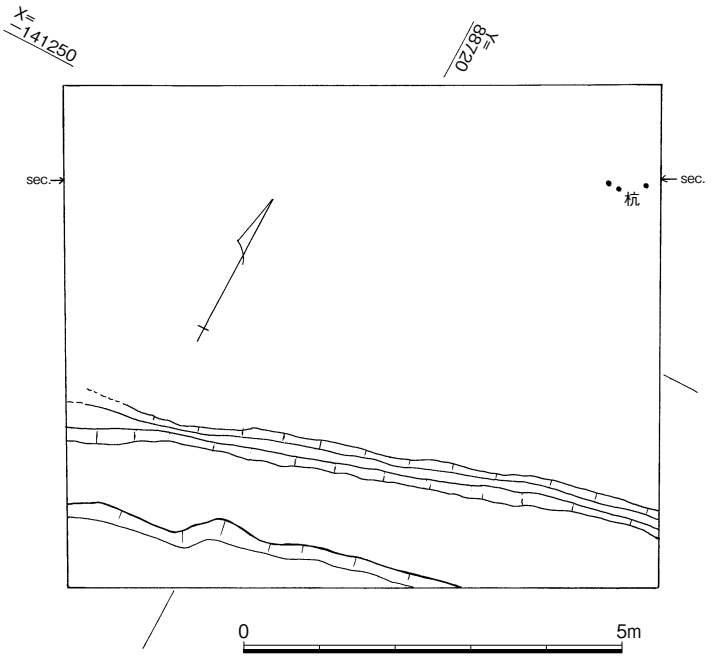


fig. 261　P8区水田畦畔・溝・杭平面図

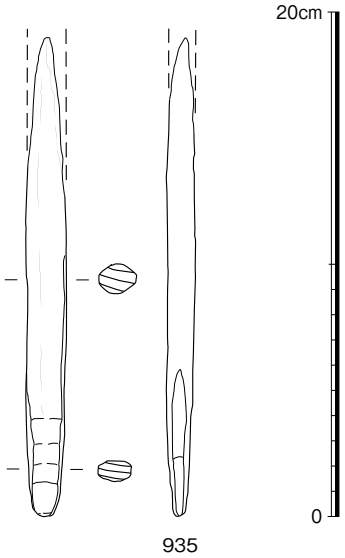


fig. 263　P8区出土木製品

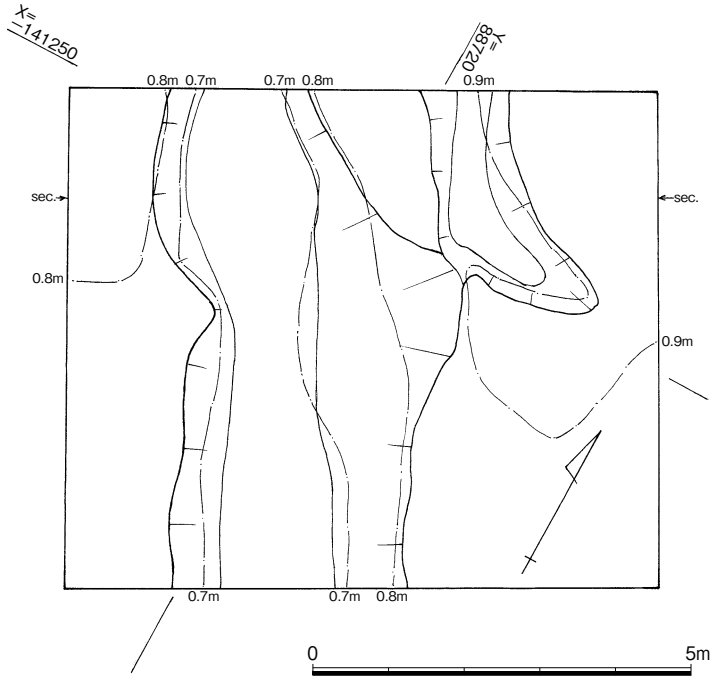


fig. 262　P8区澪筋検出状況平面図

Ⅲ．古環境の調査と復元

1．深江北町遺跡第12次・第14次調査出土木製品について

平成23，24年度に実施された発掘調査では、奈良時代の湿地層から膨大な量の植物質遺物が出土した。これは、今回の調査地が旧海岸線とその後背湿地に当たり、地下水が豊富であったこと等により、有機質遺物を腐食分解から防いだことが要因と考えられる。自然木を含めた全木質遺物の出土点数は知るべくも無いが、体積にして3.1㎥を超える（収納コンテナ換算）。その中で、断片を含め、最低限の器種名を付することが可能であったものだけで、2,622点に上った。それらのうち、さらに精品に絞り込んで樹種同定調査を実施したものがfig. 264～266に示した517点である（1）。

遺物の考古学的所見に加え、樹種同定データとクロスさせて得られた結果を以下にまとめる。

〔器種構成〕出土器種で特徴的なのは、容器、農工具、服飾具以外に、木簡、祭祀具、墨壺、物差、紡織具など、一般の集落ではあまり出土しない製品が多く認められることである。また製品以外に、燃えさしが大量に出土していることも特徴的である。

〔樹種構成〕ヒノキ（ヒノキ科を含む）が377点と圧倒的に多く、全体の72.9%を占める。ヒノキの使用率が上がるのは兵庫県瀬戸内側での古代出土木製品に見られる一般的傾向であるが、今回は一際その傾向が強い。続いて多いのがアカガシ亜属の40点（7.7%）、スギ32点（6.2%）、マツ属複維管束亜属15点（2.9%）となる。以下は各樹種それぞれ数点ずつとなる。深江北町遺跡周辺の古植生は、同時に実施した花粉分析（2）において、マツ属が優占し、続きスギ属、コナラ属となり、ヒノキ科は目立たない結果が得られている。これは単純に周辺地域から容易に得られる木材に依存していたのではなく、用途に応じた用材選択を敢えて行っていたことの証左と言える。

なお六甲山南麓でのヒノキ林の分布であるが、深江北町遺跡から北西約2㎞に所在する森南町遺跡において、弥生時代後期末～古墳時代初頭の流路埋土からヒノキが卓越する花粉分析データが得られている。（3）しかしそれ以外の周辺地域の調査ではヒノキの卓越する例が無く、ごく狭小なエリアのデータが過大評価されている可能性がある。やはり山麓ではスギ林・コナラ林を主としてシイ・カシ林が混在し、沿岸にはマツ林が広がっていたと見るのが妥当ではないか。

〔用材選択〕今回同定できた製品の用材選択傾向をごく簡単にまとめると、以下のようになる。

- マツ属複維管束亜属……舟形（芯持ち丸木使用粗製大型品）
- ヒノキ主体……曲物・皿・下駄・錘以外の紡織具・木簡・祭祀具（人形・馬形・斎串、刳り舟状舟形など）
- スギ主体……浮木（ウツギ属も使用）
- ヒノキ or スギ……舟形（上部構造物表現のある小型品）
- アカガシ亜属主体……農具・錘
- その他　墨壺：ハゼノキ・アカガシ亜属・ヒノキ
  横櫛：ツバキ属・シャシャンボ
  漆容器（奈良時代）：ヒノキ・ハリギリ
  （江戸時代）：トチノキ

このように、器種によって用材選択の傾向があることもさることながら、先述のようにヒノキ材に対する執着をうかがうことができる。また、製品ではないが、これに関連する事象として、燃えさしの樹種がすべてヒノキであったことが挙げられる。今回分析したものは5点のみであったが、未同定の燃えさしのほぼ全てが、辺材を数㎝の太さに裂き揃えた形状であり、腐食

状態から見てもほぼ同種材と見得る。これは、原木を製材するにあたり、廃材を燃料材として再利用したものと考えられ、当地周辺でヒノキ製品加工が組織的に行われていた可能性がある。

また今回の出土木質遺物を特徴づける製品に舟形があるが、これらにはいくつかの類型があり、用材選択との関連が見受けられる。

材料に角材を使用……刳り舟を表現したもの(593)：ヒノキのみ
上部構造物表現あり(889, 906, 907, 913)：ヒノキ or スギ
上部構造物表現なし(591)：スダジイ

材料に芯持ち丸木を使用……上部構造物表現ある大型品(184, 592)：マツ属複維管束亜属
上部構造物表現ある小型品(594, 595)：アカガシ亜属、エノキ属

以上のように類型ごとの用材選択が何に起因するものか詳細は不明である。ただし、今回のようなヒノキ製品優勢の状況下で、上部構造物を表現した長さ20㎝を超える大型品が敢えてマツ属複維管束亜属の芯持ち丸木を選択利用した経緯には、在地に特化した何らかの使用法が存在した可能性を示唆するものと言える。また他地域出土例との比較も今後の課題である。

註
(1・2)：これら分析業務は、2013・2014年度に、㈱パリノ・サーヴェイに委託して実施した。
(3)：黒田恭正『森南町遺跡発掘調査報告書―第1・2次調査―』神戸市教育委員会2005

木器No.	分析No.	掲載No.	調査区	遺物名	同定結果
W-10102	W-2	5	B74	漆椀	トチノキ
W-10101	W-1	6	B74	御用札	スギ
W-10103	W-3	54	B78	建築部材	ヒノキ
W-10107	W-7	55	B78	建築部材	マツ属複維管束亜属
W-10105	W-5	56	B78	割板	モミ属
W-10106	W-6	57	B78	加工部材	ヒノキ
W-10104	W-4	58	B78	横槌	マツ属複維管束亜属
MO-26	12	170	B80-a	木簡	ヒノキ
W-10119	20	171	B80-a	曲柄鍬身又鍬	アカガシ亜属
W-10109	2	172	B80-a	柄	ヒノキ
W-10110	4	173	B80-a	浮木	スギ
W-10111	5	174	B80-a	浮木	スギ
W-10120	22	175	B80-a	浮木	スギ
W-10113	13	176	B80-a	浮木	ヒノキ科
W-10108	1	177	B80-a	錘	アカガシ亜属
W-10118	19	178	B80-a	錘	ムクロジ
W-10116	17	179	B80-a	錘	ムクロジ
W-10121	23	180	B80-a	斎串	ヒノキ科
W-10112	6	181	B80-a	鏃形	ヒノキ科
W-10115	W-8	182	B80-a	釘	ヒノキ
W-10122	W-9	183	B80-a	楔	ヒノキ
W-10114	14	184	B80-a	舟形木製品	マツ属複維管束亜属
W-10117	18	185	B80-a	曲物底板	スギ
W-10123	26	186	B80-a	曲物底板	スギ
	3		B80-a	鏃形？	ヒノキ科
	7		B80-a	釘	ヒノキ
	8		B80-a	皿	ヒノキ
	9		B80-a	蒸篭底板	ヒノキ科
	10		B80-a	曲物底板	ヒノキ
	11		B80-a	曲物底板	ヒノキ
	15		B80-a	柄？	ヒノキ
MO-27	16		B80-a	木簡？	ヒノキ
	21		B80-a	曲物底板	ヒノキ
	24		B80-a	板	アカガシ亜属
	25		B80-a	把頭？	スダジイ
MO-4	320	519	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-3	319	520	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-7	323	521	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-9	326	522	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-5	321	523	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-2	318	524	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-1	117	525	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-28	148	526	B80-b	木簡	モミ属
MO-16	325	527	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-11	328	528	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-6	322	529	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-8	324	530	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-15	219	531	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-12	329	532	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-13	330	533	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-10	327	534	B80-b	木簡	ヒノキ
MO-14	109	535	B80-b	木簡	ヒノキ
W-10221	209	536	B80-b	斧柄	マツ属複維管束亜属
W-10135	51	537	B80-b	斧柄？	コナラ亜属クヌギ節
W-10145	68	538	B80-b	柄？	ヒノキ科
W-10134	49	539	B80-b	刀子柄	ヒノキ科
W-10150	77	540	B80-b	針	ヒノキ
W-10216	202	541	B80-b	錘	シキミ
W-10177	128	542	B80-b	錘	アカガシ亜属
W-10165	107	543	B80-b	墨壺	ハゼノキ類

木器No.	分析No.	掲載No.	調査区	遺物名	同定結果
W-10233	240	544	B80-b	墨壺(糸巻)	ヒノキ
W-10206	190②	545	B80-b	墨壺	アカガシ亜属
W-10205	190①	546	B80-b	墨壺	アカガシ亜属
W-10161	101	547	B80-b	布巻具？	ヒノキ
W-10243	258	548	B80-b	竪櫛	アカガシ亜属
W-10274	308	549	B80-b	整経篦未成品	ヒノキ科
W-10230	236	550	B80-b	整経篦未成品	ヒノキ
W-10277	313	551	B80-b	整経篦未成品	ヒノキ
W-10231	238	552	B80-b	糸枠(支え木)	ヒノキ
W-10176	127	553	B80-b	糸枠(支え木)	ヒノキ
W-10180	137	554	B80-b	糸枠(支え木)	ヒノキ科
W-10255	280	555	B80-b	かせかけ(支え木)？	ヒノキ
W-10263	294	556	B80-b	かせかけ(支え木)？	ヒノキ
W-10138	54	557	B80-b	浮木	ヒノキ科
W-10125	29	558	B80-b	浮木	スギ
W-10190	158	559	B80-b	浮木	ヒノキ
W-10151	78	560	B80-b	浮木	スギ
W-10127	36	561	B80-b	浮木	スギ
W-10128	37	562	B80-b	浮木	ウツギ属
W-10184	W-13	563	B80-b	小弓？	ヒノキ
W-10156	91	564	B80-b	把	ヒノキ
W-10232	239	565	B80-b	把	アカガシ亜属
W-10244	259	566	B80-b	横櫛	シャシャンボ
W-10191	160	567	B80-b	横櫛	ツバキ属
W-10194	167	568	B80-b	横櫛	ツバキ属
W-10280	316	569	B80-b	下駄	ヒノキ
W-10148	75②	570	B80-b	皿	ヒノキ
W-10281	317①	571	B80-b	皿	ヒノキ
W-10147	75①	572	B80-b	皿	ヒノキ
W-10132	46	573	B80-b	皿	ヒノキ
W-10130	40	574	B80-b	皿	ヒノキ
W-10282	317②	575	B80-b	皿	ヒノキ
W-10226	229	576	B80-b	栓？	ヒノキ科
W-10154	86	577	B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10210	196①	578	B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10247	263	579	B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10211	196②	580	B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10172	121	581	B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10167	112	582	B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10236	246	583	B80-b	曲物底板	ヒノキ科
W-10124	28	584	B80-b	曲物底板	ヒノキ科
W-10213	198	585	B80-b	曲物底板	ヒノキ
W-10136	52	586	B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10196	171	587	B80-b	曲物底板	ヒノキ
W-10192	163	588	B80-b	曲物底板	ヒノキ
W-10141	63	589	B80-b	曲物蓋板	ヒノキ科
W-10129	39	590	B80-b	曲物底板	スギ
W-10259	287	591	B80-b	舟形	スダジイ
W-10126	30	592	B80-b	舟形	マツ属複維管束亜属
W-10284	248	593	B80-b	舟形	ヒノキ
W-10202	186	594	B80-b	舟形	エノキ属
W-10207	191	595	B80-b	舟形	アカガシ亜属
W-10170	119	596	B80-b	人形	ヒノキ
W-10149	76	597	B80-b	人形	ヒノキ科
W-10152	79	598	B80-b	人形	ヒノキ科
W-10174	125	599	B80-b	人形	ヒノキ
W-10228	232	600	B80-b	人形？	ヒノキ
W-10278	314	601	B80-b	人形	ヒノキ
W-10178	129	602	B80-b	馬形	アカガシ亜属
W-10146	69	603	B80-b	馬形	ヒノキ

fig. 264　樹種同定結果(1)

木器No.	分析No.	掲載No.	調査区	遺物名	同定結果
W-10157	92	604	B80-b	馬形	ヒノキ
W-10131	43	605	B80-b	馬形	ヒノキ
W-10171	120	606	B80-b	馬形	ヒノキ
W-10175	126	607	B80-b	馬形	ヒノキ
W-10252	273	608	B80-b	斎串	ツガ属
W-10253	274	609	B80-b	斎串	ヒノキ
W-10173	123	610	B80-b	斎串	ヒノキ
W-10239	251	611	B80-b	斎串	ヒノキ
W-10143	66	612	B80-b	斎串	ツガ属
W-10168	114	613	B80-b	斎串	ヒノキ科
W-10169	115	614	B80-b	斎串	ヒノキ科
W-10183	142	615	B80-b	鏃形	モミ属
W-10155	90	616	B80-b	武器形	ヒノキ
W-10201	185	617	B80-b	釘	ヒノキ
W-10223	220	618	B80-b	釘	ヒノキ
W-10266	298	619	B80-b	釘	ヒノキ
W-10217	205	620	B80-b	釘	ヒノキ
W-10188	151	621	B80-b	釘	ヒノキ
W-10218	206	622	B80-b	釘	ヒノキ
W-10241	254	623	B80-b	釘	ヒノキ
W-10264	295	624	B80-b	楔	ヒノキ科
W-10193	164	625	B80-b	楔	ヒノキ
W-10159	96	626	B80-b	楔	アカガシ亜属
W-10142	64	627	B80-b	楔	ヒノキ科
W-10153	80	628	B80-b	独楽	ヒノキ科
W-10158	95	629	B80-b	部材	コナラ亜属コナラ節
W-10219	207	630	B80-b	用途不明品	アカガシ亜属
W-10224	222	631	B80-b	部材	アカガシ亜属
W-10220	208	632	B80-b	用途不明品	ヒノキ
W-10198	174	633	B80-b	部材	ヒノキ
W-10237	247	634	B80-b	部材	アカガシ亜属
W-10189	156	635	B80-b	板	ヒノキ
W-10268	300	636	B80-b	用途不明品	スギ
W-10186	27		B80-b	糸枠(支え木)	ヒノキ
	31		B80-b	舟形未成品？	マツ属複維管束亜属
	32		B80-b	板	ヒノキ科
	33		B80-b	曲物底板	ヒノキ科
	34		B80-b	板	ヒノキ科
	35		B80-b	柄	ヒノキ科
	38		B80-b	曲物	ヒノキ
	41		B80-b	曲物	ヒノキ
	42		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	44		B80-b	先端加工角材	ヒノキ
	45		B80-b	加工材	マツ属複維管束亜属
W-10133	47		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	48		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	50		B80-b	棒	ヒノキ科
	53		B80-b	皿	ヒノキ
W-10139	55		B80-b	錘	ケヤキ
	56		B80-b	錘	アカガシ亜属
	57		B80-b	錘	コナラ亜属クヌギ節
	58		B80-b	錘	アカガシ亜属
	59		B80-b	棒	アカガシ亜属
W-10140	60		B80-b	部材	ヒノキ科
	61		B80-b	板	ヒノキ
	62		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	65		B80-b	曲物底板	ヒノキ
W-10144	67		B80-b	篦状品	ヒノキ
	70		B80-b	皿	ヒノキ
	71		B80-b	篦状品	ヒノキ
	72		B80-b	板	ヒノキ
	73		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	74		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	81		B80-b	錘	ケヤキ
	82		B80-b	錘	アカガシ亜属
	83		B80-b	錘	ツバキ属
	84		B80-b	錘	ツバキ属
	85		B80-b	曲物底板	ヒノキ科
	87		B80-b	曲物側板	ヒノキ
	88		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	89		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	93		B80-b	曲物底板	ヒノキ
W-10283	94		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	97		B80-b	楔	アカガシ亜属
	98		B80-b	錘	コナラ亜属クヌギ節
	99		B80-b	錘	アカガシ亜属
	100		B80-b	錘	アカガシ亜属
W-10160			B80-b	棒	
W-10162	102		B80-b	布巻具？	ヒノキ
	103		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	104		B80-b	棒	ヒノキ
W-10163	105		B80-b	篦杓文字	ツガ属
W-10164	106		B80-b	部材	マツ属複維管束亜属
W-10166	108		B80-b	用途不明品	ヒノキ
	110		B80-b	斎串	ヒノキ
	111		B80-b	斎串	ヒノキ
	113		B80-b	楔	ヒノキ
	116		B80-b	楔	マツ属複維管束亜属
	118		B80-b	板	アカガシ亜属
	122		B80-b	曲物	ヒノキ科
	124		B80-b	曲物	ヒノキ
	130		B80-b	不明木製品	ヒノキ
	131		B80-b	棒	モミ属
	132		B80-b	棒	ヒノキ
	133		B80-b	物差？	ヒノキ
	134		B80-b	棒	スギ
	135		B80-b	斎串	ヒノキ
	136		B80-b	円板	マキ属
	138		B80-b	加工材	イヌガヤ
	139		B80-b	板	ヒノキ
	140		B80-b	斎串	ヒノキ
W-10182	141		B80-b	糸枠(支え木)	ヒノキ
	143		B80-b	棒	ヒノキ

木器No.	分析No.	掲載No.	調査区	遺物名	同定結果
	144		B80-b	棒	ヒノキ
	145		B80-b	棒	ヒノキ
W-10185	146		B80-b	角棒	ヒノキ
	147		B80-b	漆椀	ヒノキ
W-10187	149		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	150		B80-b	板	ヒノキ
	152		B80-b	角材	モミ属
	153		B80-b	板	ケヤキ
	154		B80-b	板	ヒノキ
	155		B80-b	角材	ヒノキ
	157		B80-b	板	ヒノキ
	159		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	161		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	162		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	165		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	166		B80-b	板	ヒノキ
	168		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	169		B80-b	曲物底板	ヒノキ
W-10195	170		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	172		B80-b	板	ヒノキ
W-10197	173		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	175		B80-b	舟形	ヒノキ
	176		B80-b	不明木製品	スギ
W-10199	177		B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10200	178		B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
	179		B80-b	角材	ヒノキ
	180		B80-b	棒	ヒノキ
	181		B80-b	棒	ヒノキ
	182		B80-b	角材	ヒノキ
	183		B80-b	棒	ヒノキ
	184		B80-b	杭	ヒノキ科
W-10203	187		B80-b	錘	シキミ
W-10204	188		B80-b	錘	ツバキ属
	189		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	192		B80-b	斎串	サカキ
	193		B80-b	板	ヒノキ
W-10208	194		B80-b	用途不明品	ヒノキ
W-10209	195		B80-b	部材	ヒノキ
W-10212	197		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	199		B80-b	曲物底板	ヒノキ
W-10214	200		B80-b	錘	コナラ亜属クヌギ節
W-10215	201		B80-b	錘	アカガシ亜属
	203		B80-b	錘	アカガシ亜属
	204		B80-b	錘	コナラ亜属クヌギ節
	210		B80-b	棒	ヒノキ
	211		B80-b	棒	ヒノキ科
	212		B80-b	棒	ヒノキ
	213		B80-b	角材	ツガ属
	214		B80-b	棒	ヒノキ科
W-10222	215		B80-b	柄？	アカガシ亜属
	216		B80-b	木釘？	ヒノキ
	217		B80-b	木釘？	ヒノキ科
	218		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	221		B80-b	刀杼？	ヒノキ
	223		B80-b	棒	モミ属
	224		B80-b	角材	ヒノキ
W-10225	225		B80-b	角材	ヒノキ科
	226		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	227		B80-b	斎串	ヒノキ科
	228		B80-b	斎串	ヒノキ
W-10227	230		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	231		B80-b	板	ヒノキ
	233		B80-b	棒	ヒノキ科
	234		B80-b	曲物底板	ヒノキ科
W-10229	235		B80-b	部材	コナラ亜属クヌギ節
	237		B80-b	板	ヒノキ
W-10234	241		B80-b	用途不明品	ヒノキ
W-10235	242		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	243		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	244		B80-b	斎串	ヒノキ科
	245		B80-b	斎串	ヒノキ
	249		B80-b	籠	ヒノキ科
W-10238	250		B80-b	篦状品	ヒノキ
W-10240	252		B80-b	脚	ヒノキ
	253		B80-b	馬形	ツガ属
	255		B80-b	浮木	スギ
	256		B80-b	板	ヒノキ
W-10242	257		B80-b	楔	ヒノキ
	260		B80-b	人形	ヒノキ
W-10245	261		B80-b	斎串	ヒノキ
W-10246	262		B80-b	浮木	ヒノキ
	264		B80-b	籠	ヒノキ
W-10248	265		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	266		B80-b	曲物底板	※265と接合
	267		B80-b	板	アカガシ亜属
	268		B80-b	棒	ヒノキ
	269		B80-b	丸材	ヒサカキ
	270		B80-b	板	ヒノキ
W-10250	271		B80-b	部材	ヒノキ
W-10251	272		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	275		B80-b	板	ヒノキ
	276		B80-b	板	ヒノキ
	277		B80-b	篦状品	シャシャンボ
W-10254	278		B80-b	琴柱	ヒノキ
	279		B80-b	脚？	ヒサカキ
	281		B80-b	加工材	ヒノキ
W-10256	282		B80-b	篦状品	ヒノキ
	283		B80-b	板	ヒノキ
W-10257	284		B80-b	浮木	ウツギ属
W-10258	285		B80-b	錘	アカガシ亜属
	286		B80-b	不明木製品	マツ属複維管束亜属
	288		B80-b	舟形	ヒノキ科
	289		B80-b	籠	ヒノキ

fig. 265　樹種同定結果(2)

木器No.	分析No.	掲載No.	調査区	遺物名	同定結果
	290		B80-b	板	スギ
W-10260	291		B80-b	机部材	アカガシ亜属
	292		B80-b	曲物底板	ヒノキ
W-10261	293		B80-b	曲物底板	ヒノキ
	296		B80-b	曲物底板	ヒノキ
W-10265	297		B80-b	浮木	スギ
	299		B80-b	斎串	ヒノキ
W-10269	301		B80-b	斉串	ヒノキ
W-10270	302		B80-b	楔	ヒノキ科
W-10271	303		B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
	304		B80-b	斉串	ヒノキ
	305		B80-b	斉串	ヒノキ
W-10272	306		B80-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10273	307		B80-b	糸枠(支え木)	ヒノキ
	309		B80-b	錘	アカガシ亜属
W-10275	310		B80-b	錘	アカガシ亜属
W-10276	311		B80-b	部材	アカガシ亜属
	312		B80-b	角材	ヒノキ
	315		B80-b	針状品	ヒノキ
W-10137	W-10		B80-b	篦状品	ヒノキ
W-10179	W-11		B80-b	棒	ヒノキ
W-10181	W-12		B80-b	篦状品	ヒノキ
W-10249	W-14		B80-b	板	ヒノキ
W-10262	W-15		B80-b	かせかけ未成品？	ヒノキ
W-10267	W-16		B80-b	整経杭？	ヒノキ
W-10279	W-17		B80-b	棒	スギ
	W-18		B80-b	チョウナ屑	マツ属複維管束亜属
	W-19		B80-b	チョウナ屑	マツ属複維管束亜属
	W-20		B80-b	チョウナ屑	モミ属
	W-21		B80-b	チョウナ屑	サカキ
	W-22		B80-b	チョウナ屑	アカガシ亜属
	W-23		B80-b	松明	ヒノキ
	W-24		B80-b	松明	ヒノキ
	W-25		B80-b	松明	ヒノキ
	W-26		B80-b	松明	ヒノキ
	W-27		B80-b	松明	ヒノキ
W-10285	331	836	B83-a	連歯下駄	ヒノキ
W-10286	339	837	B83-a	独楽未成品	ヒノキ科
	332		B83-a	曲物底板	ヒノキ
	333		B83-a	筒状品	ヒノキ
	334		B83-a	棒	アカガシ亜属
	335		B83-a	角材	スギ
	336		B83-a	板	ヒノキ
	337		B83-a	曲物底板	ヒノキ
	338		B83-a	角材	ヒノキ
MO-17～19	349	850	B83-b	木簡	ヒノキ
MO-21	371	851	B83-b	木簡	ヒノキ
MO-22	381	852	B83-b	木簡	ヒノキ
MO-23	382		B83-b	木簡	ヒノキ
MO-20	363	853	B83-b	木簡	ヒノキ
W-10309	400	854	B83-b	織機腰掛板？	ヒノキ
W-10305	395	855	B83-b	連歯下駄	スギ
W-10310	401	856	B83-b	連歯下駄	ヒノキ
W-10290	351	857	B83-b	織機部材	スギ
W-10288	347	858	B83-b	浮木	スギ
W-10297	369	859	B83-b	浮木	スギ
W-10300	385	860	B83-b	箸	ヒノキ
W-10296	368	861	B83-b	箸	ヒノキ
W-10304	394	862	B83-b	箸	ヒノキ科
W-10301	386	863	B83-b	横櫛	シャシャンボ
W-10303	391	864	B83-b	部材	ヒノキ
W-10311	402	865	B83-b	部材	ヒノキ
W-10298	373	866	B83-b	曲物蓋板	ヒノキ科
W-10294	364	867	B83-b	曲物底板	ヒノキ
W-10295	365	868	B83-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10293	360	869	B83-b	曲物蓋板	ヒノキ
W-10287	344	870	B83-b	脚座？	ヒノキ
W-10291	354	871	B83-b	台脚？	ヒノキ
W-10292	358	872	B83-b	部材	ヒノキ科
W-10306	396	873	B83-b	馬形	ヒノキ科
W-10307	397	874	B83-b	馬形	ヒノキ
W-10312	409	875	B83-b	斎串	ヒノキ
W-10299	374	876	B83-b	斎串	ヒノキ
W-10308	399	877	B83-b	斎串	ヒノキ科
W-10302	387	878	B83-b	部材	ヒノキ
W-10289	350	879	B83-b	用途不明品	ヒノキ
	340		B83-b	曲物側板	ヒノキ
	341		B83-b	箸	モミ属
	342		B83-b	札	ヒノキ
	343		B83-b	柄	ヒノキ
	345		B83-b	曲物蓋板	ヒノキ
	346		B83-b	錘	ツバキ属
	348		B83-b	箸	ヒノキ
	352		B83-b	板	ヒノキ
	353		B83-b	剣形	ヒノキ
	355		B83-b	曲物側板	ヒノキ
	356		B83-b	部品	ヒノキ科
	357		B83-b	容器底板	ヒノキ
	359		B83-b	用途不明品	ヒノキ
	361		B83-b	椀物	ヒノキ
	362		B83-b	農具？	アカガシ亜属
	366		B83-b	曲物側板	ヒノキ
	367		B83-b	曲物底板	ヒノキ
	370		B83-b	棒	ヒノキ
	372		B83-b	木皿？	ヒノキ
	375		B83-b	曲物側板	ヒノキ
	376		B83-b	曲物側板	ヒノキ
	377		B83-b	曲物底板	ヒノキ
	378		B83-b	円板	ヒノキ
	379		B83-b	不明部材	スギ
	380		B83-b	農具？	クスノキ
	383		B83-b	曲物側板	ヒノキ
	384		B83-b	曲物側板	ヒノキ

木器No.	分析No.	掲載No.	調査区	遺物名	同定結果
	388		B83-b	部品	ヒノキ
	389		B83-b	曲物側板	ヒノキ
	390		B83-b	曲物側板	ヒノキ
	392		B83-b	曲物側板	ヒノキ
	393		B83-b	曲物側板	ヒノキ
	398		B83-b	形代未成品	ヒノキ
	403		B83-b	割板	サクラ属
	404		B83-b	割材	ケヤキ
	405		B83-b	箸	ヒノキ
	406		B83-b	札	ヒノキ
	407		B83-b	板	スギ
	408		B83-b	曲物底板	ヒノキ
	410		B83-b	板	ヒノキ科
	411		B83-b	祭祀具	ヒノキ科
	412		B83-b	角材	アカガシ亜属
	413		B83-b	付札	ヒノキ
	414		B83-b	曲物側板	ヒノキ
W-10315	423	884	P-2	舟形未成品	マツ属複維管束亜属
W-10313	416	885	P-2	漆容器	ハリギリ
W-10314	422	886	P-2	浮木	スギ
	415		P-2	ささら？	ヒノキ
	417		P-2	曲物底板	ヒノキ科
	418		P-2	角材	ヒノキ
	419		P-2	板	ヒノキ
	420		P-2	棒	ヒノキ
	421		P-2	板	ヒノキ
	424		P-2	曲物底板	ヒノキ
	425		P-2	板	ヒノキ
	426		P-2	板	ヒノキ科
	427		P-2	板	スギ
W-10318	432	887	P-3	曲物蓋板	ヒノキ
W-10317	431	888	P-3	角棒	ヒノキ
W-10316	429	889	P-3	舟形	ヒノキ
	428		P-3	割材	コウヤマキ
	430		P-3	板	ヒノキ
W-10319	433	906	P-4	舟形	ヒノキ
W-10321	437	907	P-4	舟形	スギ
W-10320	434	908	P-4	鏃形	ヒノキ
	435		P-4	角材	アカガシ亜属
	436		P-4	加工材	アカガシ亜属
	438		P-4	棒	ヒノキ
W-10324	449	912	P-5	錘	ヒノキ
W-10322	446	913	P-5	舟形	スギ
W-10323	448	914	P-5	曲物蓋板	ヒノキ
W-10325	451	915	P-5	用途不明品	ヒノキ科
	439		P-5	皿	ヒノキ
	440		P-5	皿	ヒノキ
	441		P-5	札状	ヒノキ
	442		P-5	箸	ヒノキ
	443		P-5	角材	スギ
	444		P-5	角材	カヤ
	445		P-5	曲物底板	ヒノキ
MO-25	447		P-5	木簡	ヒノキ
	450		P-5	柄	ヒノキ
	452		P-5	棒	ヒノキ
	453		P-5	農具？	アカガシ亜属
	454		P-5	棒	キイチゴ属近似種
	455		P-5	棒	ヒノキ
	456		P-5	角材	ツガ属
	457		P-5	舟形	ヒノキ
MO-24	462	917	P-6	木簡	ヒノキ
W-10331	480	923	P-6	浮木	ウツギ属
W-10327	463	924	P-6	漆容器	ヒノキ
W-10326	460	925	P-6	漆容器	ヒノキ科
W-10328	464	926	P-6	曲物蓋板	ヒノキ
W-10329	474	927	P-6	箸	ヒノキ
W-10330	475	928	P-6	箸	ヒノキ
W-10332	482	929	P-6	馬形	ヒノキ
W-10333	489	930	P-6	楔	センダン近似種
	458		P-6	漆容器	トチノキ
	459		P-6	棒	マツ属複維管束亜属
	461		P-6	木簡？	ツガ属
	465		P-6	棒	ヒノキ
	466		P-6	板	ヒノキ
	467		P-6	斎串	コウヤマキ
	468		P-6	板	ヒノキ
	469		P-6	棒	マツ属複維管束亜属
	470		P-6	木皿	ヒノキ
	471		P-6	斎串	ヒノキ
	472		P-6	箸	ヒノキ
	473		P-6	箸	ヒノキ
	476		P-6	箸	ヒノキ
	477		P-6	箸	ヒノキ
	478		P-6	用途不明品	オオバヤドリギ属
	479		P-6	板	ヒノキ
	481		P-6	祭祀具	アカガシ亜属
	483		P-6	棒	ヒノキ
	484		P-6	不明	ヒノキ
	485		P-6	錘？	アカガシ亜属
	486		P-6	加工材	ヒノキ
	487		P-6	曲物底板	ヒノキ
	488		P-6	用途不明品	ヌルデ
W-10334	496	934	P-7	用途不明品	ヒノキ
	490		P-7	曲物底板	ヒノキ
	491		P-7	用途不明品	スギ
	492		P-7	箸	ヒノキ科
	493		P-7	箸	ヒノキ
	494		P-7	箸	スギ
	495		P-7	箸	ヒノキ
	497		P-7	板	スギ
	498		P-7	箸	ヒノキ
	499		P-7	板	クスノキ
W-10335	500	935	P-8	篦状品	コウヤマキ

fig. 266　樹種同定結果(3)

２．深江北町遺跡第１２次調査における古環境分析

株式会社古環境研究所

（1）はじめに

本報告では、植物珪酸体分析、花粉分析、珪藻分析、種実同定を行い、植生、環境、農耕の変遷の復元および推定を行った。

植物珪酸体分析、花粉分析、珪藻分析は同一試料で、B83-B区東壁断面において３層から22層までの層準から採取された堆積物である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。なお、３層と４層は近代、５層は近世？、９層は10世紀の遺物包含層、13層は奈良時代～平安時代の遺物包含層、16層は古墳時代？とされる。種実同定試料は、B83-B区東壁断面の13層、14層から採取された２点の堆積物と、東半北側、東半南側、西半北側、中央北側、中央南側において３㎜目と１㎜目の篩で水洗選別された10点の計12試料である。

（2）植物珪酸体分析

分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は付表のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果をfig. 269に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

考察

1）稲作跡の検討

B83-B区東壁断面では、３層から22層までの層準について分析を行った。その結果、３層～17層までの各層および19層からイネが検出された。このうち、４層、９層、10層、14層では密度が6,200～9,400個/gと高い値であり、３層および11層～13層でも3,500～4,900個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

５層～８層、15層～17層、19層では、密度が700～2,200個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

分析結果から、下位の22層～15層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、19層および17層～15層の時期には周辺で稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところには、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属などの草本類が生育しており、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの樹木が分布していたと考えられる。14層～９層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属などの竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属などの草本類が生育しており、遺跡周辺にはシイ属などの樹木が分布していたと考えられる。８層～５層の時期には、河川の影響など何らかの原因でメダケ属などの竹笹類は減少したと考えられるが、周辺ではおおむね継続して稲作が行われていたと推定される。また、４層と３層の時期には、調査地点で水田稲作が行われていたと考えられる。

(3) 花粉分析

分析結果

出現した分類群は、樹木花粉39、樹木花粉と草本花粉を含むもの6、草本花粉35、シダ植物胞子2形態の計82である。周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムをfig. 268に示す。なお、計数が200個未満であっても100個以上計数出来た試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。寄生虫卵は検鏡した結果、4分類群が検出された。

花粉分析から推定される植生と環境、農耕

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より5帯の花粉分帯を設定し、その設定した花粉分帯にそって下位より植生、環境、農耕の推定を行う。

1) Ⅰ帯期(18層から22層)

周辺にはイネ科を中心に湿地性の種が多いカヤツリグサ科の草本が分布し、後背にはヨモギ属が生育し乾燥地も分布していた。周辺地域の森林は、コナラ属アカガシ亜属(カシ)、シイ属の照葉樹林、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属(アカマツ、クロマツ)の針葉樹林が分布していた。周囲の浜堤の立地からクロマツの分布も考えられる。

2) Ⅱ帯期(10層から17層):13層は奈良時代～平安時代の遺物包含層、15層は古墳時代?

イネ属型の出現率が高くなりミズアオイ属やオモダカ属が伴われることから、堆積地や周囲で大きな水田開発が行われ、水田が拡大して分布する。周辺地域の森林植生は、コナラ属アカガシ亜属とシイ属の照葉樹林、スギ、マツ属複維管束亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の針葉樹が分布する。花粉分析では検出できない照葉樹のクスノキ科が植物珪酸体分析では検出されており、沿岸に多いクスノキ等も分布していた。上部のb亜帯期(10層から13層:13層から奈良時代～平安時代の遺物)になると、ソバ属が連続して検出され、乾燥を好み畑作雑草および人里植物でもあるヨモギ属が増加することから、周辺でソバなどの畑が営まれていた。立地から浜堤上で畑作が営まれたと推定される。周辺地域の森林では、シイ属とイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が減少する。

3) Ⅲ帯(7層から9層):9層は10世紀の遺物包含層

イネ科とイネ属型の優占は前帯と変化なく、周辺には水田が分布していた。ソバ属が消滅し、浜堤上の土地利用に変化が生じたと推定される。コナラ属アカガシ亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が減少し、コナラ属コナラ亜属が増加し、コナラの二次林の拡大が示唆される。針葉樹のスギとマツ属複維管束亜属は継続して分布する。

4) Ⅳ帯(6層)

花粉密度が極めて低く傾向はわからない。試料となった堆積物が砂であることから、一時的な氾濫による堆積物とみなされる。

5) Ⅴ帯(3層から5層):5層は近世?、3層と4層は近代

アブラナ科が極めて優占し、アブラナ科植物の集約性の高い畑作が堆積地と周囲で行われていた。特に近世から近代に盛行するアブラナ栽培が考えられる。イネ科とイネ属型の出現率はやや低くなるが、アブラナ科花粉の高率による相対的な減少とみなされ、水田と畑作の二毛作が行われたと推定される。森林要素ではマツ属複維管束亜属が主要に出現し、森林が減少しアカマツ二次林が成立する。

（4）珪藻分析

分析結果

試料から出現した珪藻は、真－中塩性種（海－汽水生種）19分類群、中－貧塩性種（汽－淡水生種）2分類群、貧塩性種（淡水生種）140分類群である。珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムをfig. 270に示す。主要な分類群について顕微鏡写真を示した。

珪藻分析から推定される堆積環境

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より5帯の珪藻分帯を設定し、その設定した珪藻分帯ごとに下位より環境の変遷を推定する。

1）Ⅰ帯期（18層から22層）

内湾環境指標種群の*Cyclotella striata-stylorum*と好止水性種で沼沢湿地付着生環境種群の*Eunotia minor*や*Gomphonema acuminatumn*がやや高率に出現する。周辺の海域は内湾の環境であり、堆積地にはその影響を直接受ける水草の生育する沼沢湿地が分布していた。18層、20層、22層は細砂層で、19層では好汚濁性種の*Achnanthes exigua*がやや高率になることから、急速に堆積していったと推定される。

2）Ⅱ帯期（15層から17層）：15層は古墳時代？

真・好流水性種と*Navicula pupula*や*Achnanthes exigua*などの好汚濁性種が多く、止水性種や沼沢湿地付着生環境種群が伴われる。堆積地は沼沢湿地であるが、流水の流れ込みがあったと推定される。

3）Ⅲ帯期（7層から14層）：9層から10世紀の遺物包含層、13層から奈良時代～平安時代の遺物

真流水性種の*Navicula elginensis v. neglecta*が優占するが、真・好止水性種の*Fragilaria brevistriata*、*Fragilaria construens*が安定して出現し、好汚濁性種の*Navicula pupula*もやや多い。流れ込みのある比較的安定した止水域が示唆されるが、やや汚濁する。やや曖昧な環境であり水田などが想定される。

4）Ⅳ帯期（5・6層）：5層は近世？

珪藻は低密度でほとんど検出されず、6層は砂であることからも、堆積速度の速い一時的な堆積が考えられる。

5）Ⅴ帯期（3層・4層）：3層・4は近代）

真流水性種の*Navicula elginensis v. neglecta*が優占し、不定性種、好汚濁性、陸生珪藻が伴われる。流水性のやや不安定な水域であるが、現代の水田にも多い*Amphora copulate*が含まれ、水田の環境が推定される。

（5）種実同定

樹木7、草本37の計44分類群が同定される。主要な分類群を写真に示す。

種実群集の特徴

13層と14層からは、樹木2、草本30の計32分類群が検出された。堆積物200㎤中の出現率をfig. 271に示す。水洗選別試料では、樹木7、草本30の計37分類群が同定された。1㎜目篩別の試料の出現率をfig. 272に示す。

種実同定から推定される植生、環境、農耕

1）13層・14層の植生、環境、農耕

13層と14層は種実組成が類似する。50%ないしそれ以上で優占するコナギ種子、比較的多いカヤツリグサ科果実、イグサ科種子、タガラシ、イバラモ属はいずれも水田雑草の範疇に入る

水生植物であり、13層と14層では、これら草本が繁茂し、湿地から浅水域の環境が示唆される。他に検出されるオモダカ属やホタルイ属、スゲ属、イボクサも水田雑草である。イネ頴も検出され、13層と14層で水田が営まれたとみなされ、水生植物が多いことから、湿田が推定される。乾燥を好み畑作雑草でもあり畦畔などにも生育するナデシコ科種子やアカザ属種子、カタバミ属種子も検出され、また13層からは栽培植物のナスも検出され、花粉分析でも栽培植物のソバ属が検出されており、近隣での畑の分布が示唆される。

2）水洗選別試料から推定される植生、環境、農耕

3㎜目篩別試料からは、ヤマモモ核とヤマグワ種子が西半北側、モモ核が中央北側と中央南側、ヒョウタン類種子が東半北側と西半北側で同定された。栽培植物はモモとヒョウタン類であり、ヤマモモとヤマグワは果実が食用となる。

1㎜目篩別試料では、各試料とも類似した組成を示し、コナギ種子が高率でイボクサ種子、タガラシ果実、イグサ科種子、カヤツリグサ科果実、オモダカ、オモダカ属果実、ヘラオモダカ属の水田雑草の性格をもつ水生植物が多い。イネ頴も多いが破片ばかりである。なお、13層と14層の0.25㎜目篩別試料の組成と比べると、微小なコナギ種子、イグサ種子、イバラモ種子、ナデシコ科種子、タガラシは1㎜以下のものもあるため過小であるとみなされる。これら雑草の種実とイネ頴は、逆の相関を示し、東半北側と東半南側はイネ頴が多いことから、イネの作柄がよかった可能性がある。

(6) まとめ

深江北町遺跡第12次調査地で植物珪酸体分析、花粉分析、珪藻分析、種実同定を行なった結果、次のような植生、環境、農耕の復元とその変遷が推定された(fig. 267)。最下部の20層から22層の時期は周辺の海域は海流の乏しい内湾環境が分布し、本地点はその海水の影響を受けるヨシが主に繁茂する湿地ないし浅水域であった。堆積地を含む浜堤間の湿地(堤間湿地)には満潮時には海水が満ちる環境で、隣接した浜堤にはヨモギ属などが分布し水落ちのよい乾燥した環境が示唆される。周辺地域の森林は、コナラ属アカガシ亜属(カシ)、シイ属の照葉樹林、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属(アカマツ、クロマツ)の針葉樹林が分布していた。15層から17層(15層は古墳時代？)の時期になると、本地点は汚濁性のやや高い流水性の湿地ないし浅水域になる。流水の環境は水田化された後も近代まで続き、本地点は流水が豊富な環境であった。近接する浜堤間(堤間湿地)にはミズアオイ属やオモダカ属という典型的な水田雑草が繁茂する水田が分布拡大する。浜堤上などには照葉樹林とマツ属複維管束亜属が分布する。14層の時期になると、周囲の水田化より少し遅れて本地点も水田化される。流水性が高く水生植物が豊富であることから湿田が想定される。10層から13層(13層から奈良時代～平安時代の遺物)の時期になると、浜堤上でソバ・ナス・ウリなどの畑が営まれる。栽培植物は他にモモやウメの果樹が検出されている。この頃、浜堤上など周辺地域で森林が減少する。7層から9層(10世紀は遺物包含層)の時期になると、畑が縮小し、コナラの二次林が増加する。8層では水田も衰退するか作柄が悪くなる。次の6層は植物遺体が乏しい。3層から5層(3層と4層は近代)の時期になると、水田と畑(アブラナ科)が分布し、二毛作の形態が推定される。周辺地域の森林では、マツ属複維管束亜属が増加しアカマツの二次林化が示唆される。

時期	土層	植生・環境.農耕		主要植物遺体					主要森林植生
		堆積地	周辺	植物珪酸体	種実	珪藻	草本花粉	樹木花粉	
近代	3層	水田・畠	二毛作（アブラナ）	イネ・ヨシ属		（Ⅴ帯）流水性種（Navicula elginensis v. Neglecta）	（Ⅴ帯）アブラナ科 イネ科・イネ属型	複維管束亜属	アカマツ二次林（森林の減少）
	4層								
近世？	5層	水田（？）		イネ		（Ⅳ帯）			
砂	6層		水田				（Ⅳ帯）		
	7層					（Ⅲ帯）流水性種（Navicula elginensis v. Neglecta）沼沢湿地種 好汚濁性種	（Ⅲ帯）イネ属型・イネ科	コナラ属・スギ 複維管束亜属	コナラ二次林
	8層								
10世紀遺物	9層	水田（湿田）		イネ・ヨシ属 ネザサ節型					
土石流	10層		水田の拡大 浜堤上に畠（ソバ・ナス・ウリなど）が分布				（Ⅱb亜帯）イネ属型・イネ科 ヨモギ属・ソバ属	アカガシ亜属 スギ 複維管束亜属	カシの照葉樹林 スギなど針葉樹林（森林の減少）
	11層								
	12層								
奈良時代～平安時代遺物	13層				コナギ・イネ ナス・ウリ モモ				
	14層		水田の拡大 浜堤上はメダケ属、シイやクスノキ科が分布				（Ⅱa亜帯）イネ属型・イネ科	アカガシ亜属 スギ・シイ属 複維管束亜属 ヒノキ類	カシ・シイの照葉樹林 スギなど針葉樹林
古墳時代？	15層	流水性の沼沢湿地		ヨシ属・イネ メダケ節型・ネザサ節型・ブナ科（シイ属）・クスノキ科		（Ⅱ帯）流水性種 沼沢湿地種 好汚濁生種			
	16層								
	17層								
	18層	内湾の影響を受ける沼沢湿地（ヨシ原）	一部水田化			（Ⅰ帯）内湾種 沼沢湿地種	（Ⅰ帯）イネ科 カヤツリグサ科	アカガシ亜属 シイ属 スギ・ヒノキ類	カシ・シイの照葉樹林 スギ・ヒノキ類などの針葉樹林
	19層								
	20層			ヨシ属					
	21層								
	22層								

fig. 267　主要植物遺体と推定される植生・環境・農耕

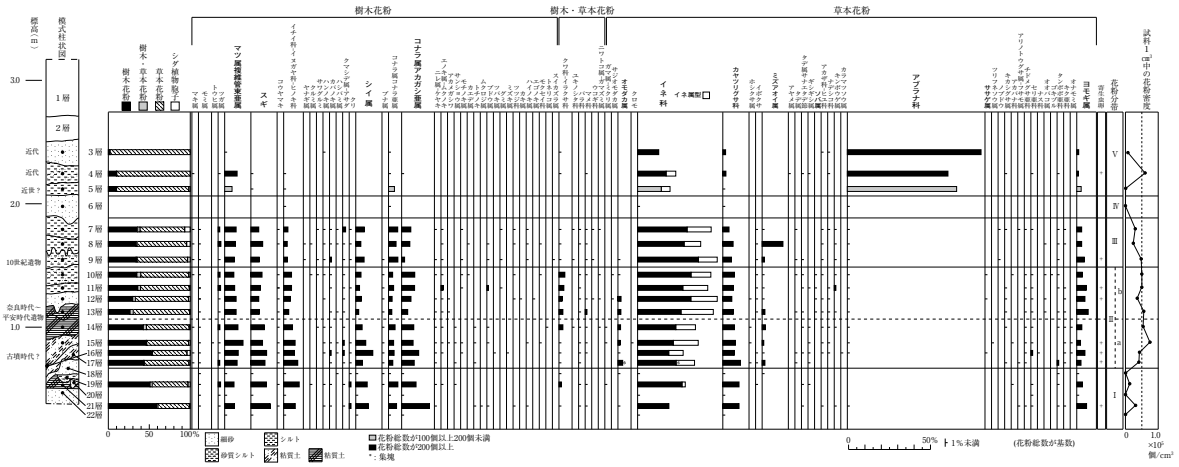


fig. 268　B83-B区東壁断面における花粉ダイヤグラム

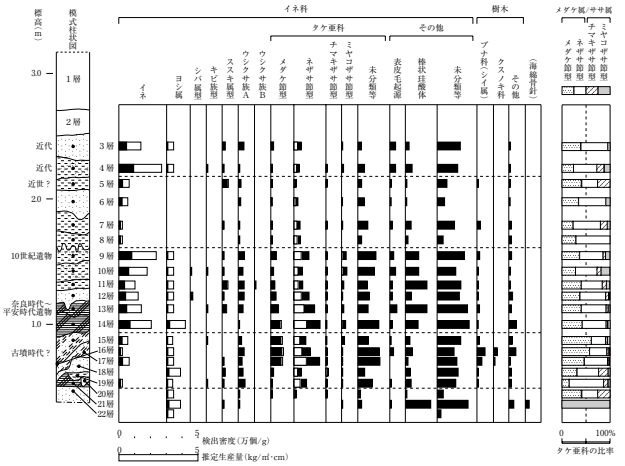


fig. 269　B83-B区東壁断面における植物珪酸体分析結果

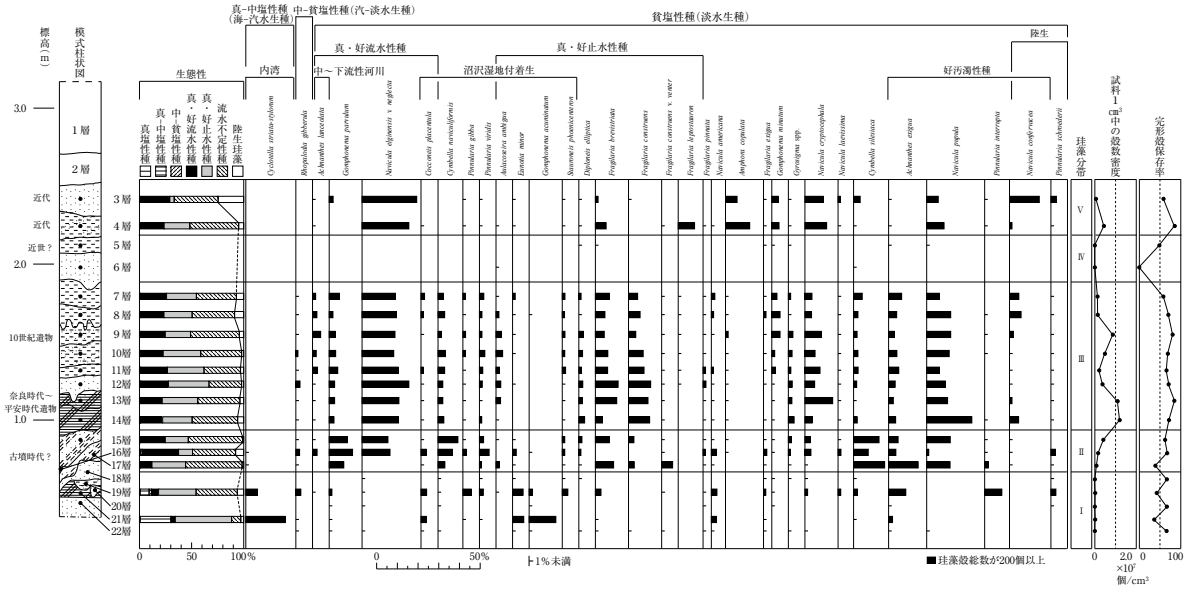


fig. 270　B83-B区東壁断面における主要珪藻ダイヤグラム

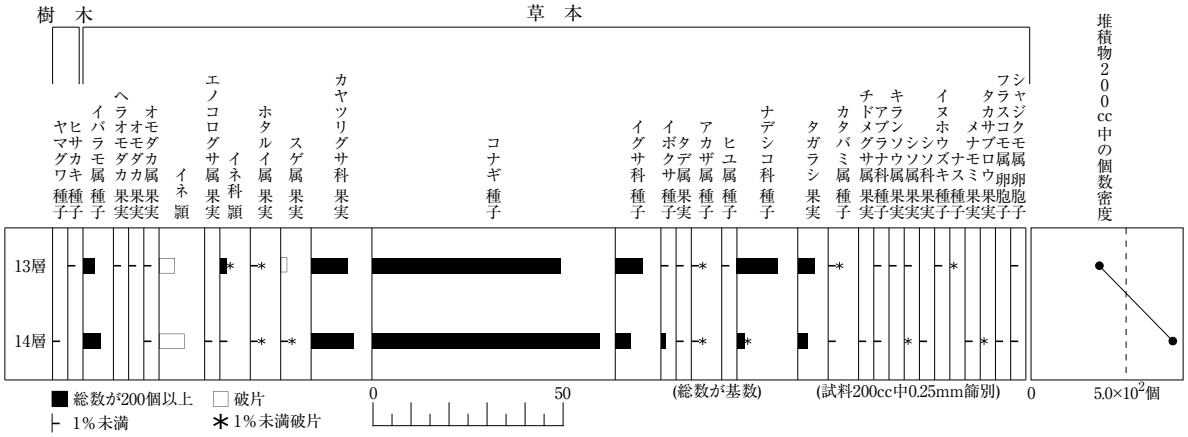


fig. 271　B83-B区東壁断面における種実ダイヤグラム

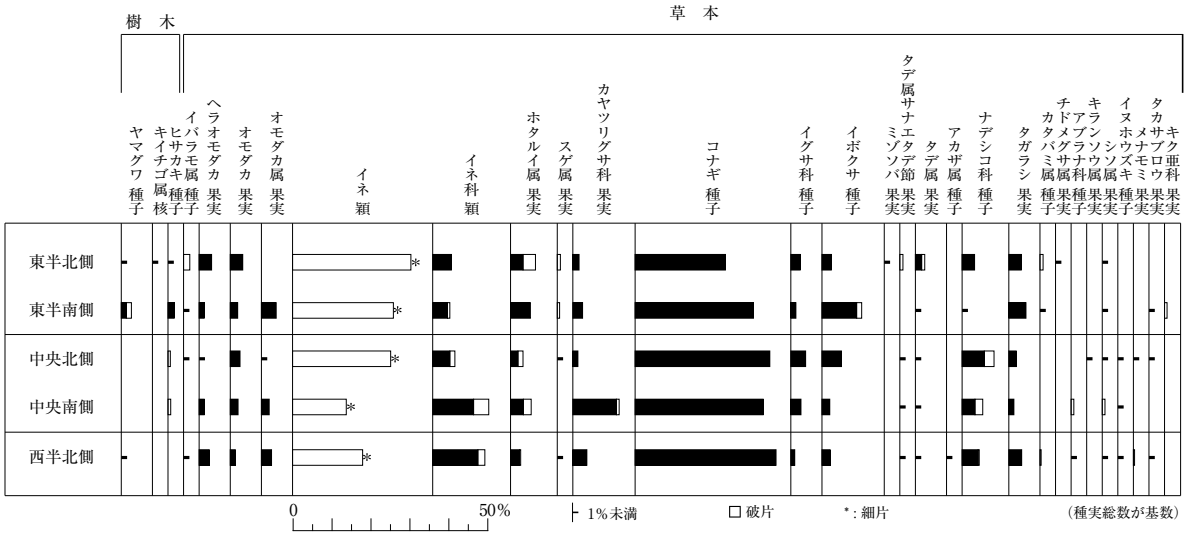


fig. 272　B83-B区13層における種実ダイヤグラム

深江北町遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

fig. 273　B83-B区検出の植物珪酸体

深江北町遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵 Ⅰ

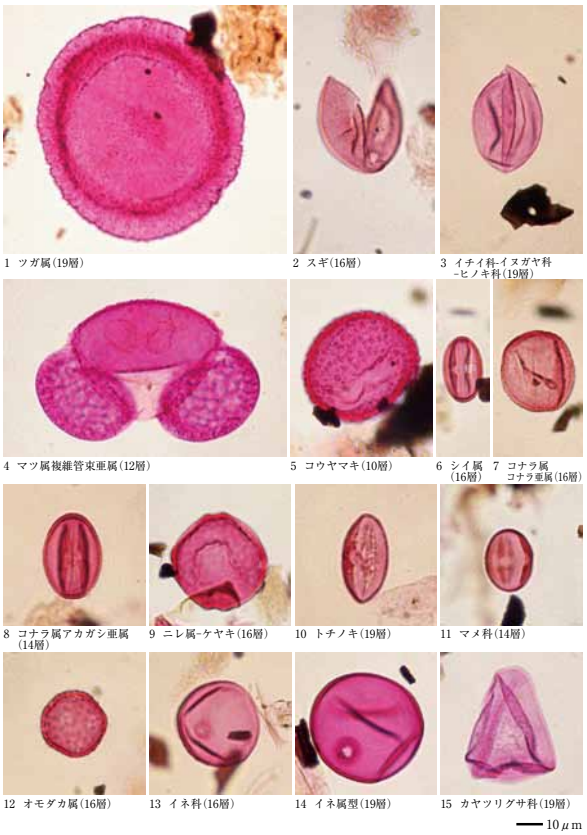


fig. 274　B83-B区検出の花粉・胞子・寄生虫卵（1）

深江北町遺跡の珪藻 Ⅰ

fig. 276　B83-B区検出の珪藻（1）

深江北町遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵 Ⅱ

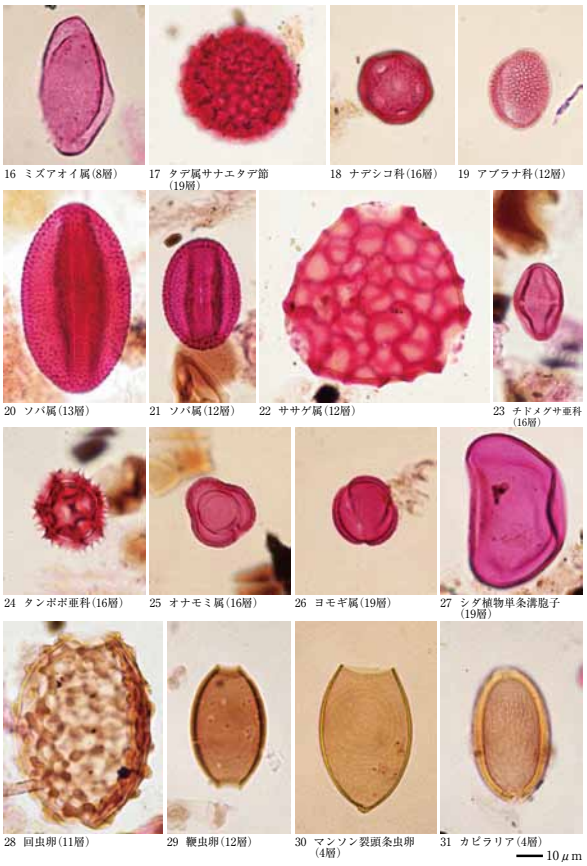


fig. 275　B83-B区検出の花粉・胞子・寄生虫卵（2）

深江北町遺跡の珪藻 Ⅱ

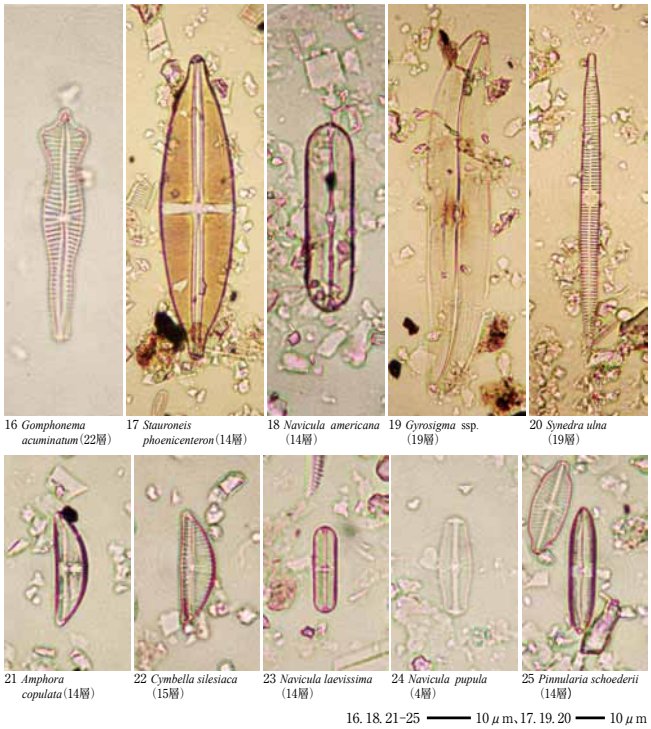


fig. 277　B83-B区検出の珪藻（2）

深江北町遺跡の珪藻 Ⅲ

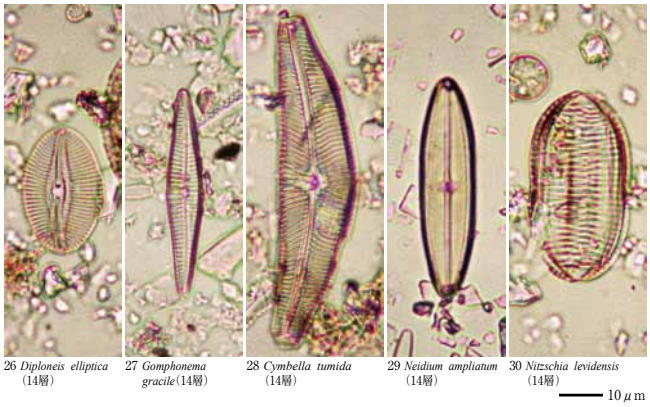


fig. 278　B83-B区検出の珪藻（3）

深江北町遺跡の種実 Ⅰ

fig. 279　B83-B区検出の種実（1）

深江北町遺跡の種実 Ⅱ

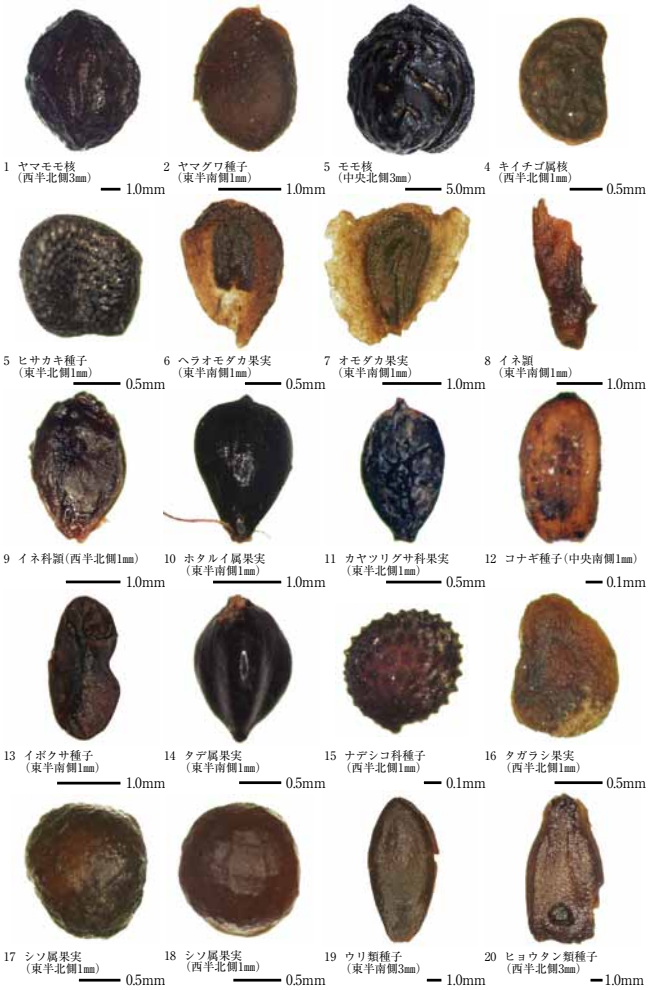


fig. 280　B83-B区検出の種実（2）

3. 神戸市東灘区深江北町遺跡第 12 次調査地での自然堆積層

増田　富士雄（同志社大学理工学部）

1. はじめに

2011 年 6 月から 2012 年 2 月にかけて，神戸市東灘区の阪神電車高架化事業に伴って行われた「深江北町遺跡第 12 次調査」で出現した露頭を，計 6 回，10 調査区について観察することができた。その結果，この地域の表層地質は，砂丘・海浜堆積物，潟・沿岸湿地堆積物，扇状地堆積物，および人工改変土層からなることが分かった。特に，分級の良い黄白色から灰白色の中粒砂からなる砂丘堆積物と，灰黒色の粘土からなる潮汐の影響のみられる潟や沿岸湿地の堆積物が発達することが，この地域の自然堆積層の特徴である。こうした堆積物の岩相や粒度特性について述べる。

2. 自然堆積層の解析法

調査地は，神戸市東灘区深江北町 2 丁目を中心とした深江駅東方の阪神電車沿いの長さ約 500 mの区間である（fig.281）。今回，観察した調査地点（工区）は 25 工区のうちの 10 工区で，西から東に，B75-A，B75-B，B77-A，B77-B，B77-C，B80-A，B81-B，B82-A，B83-B，P3，P8 である。調査区間の地表面の標高は 2.1 ～ 4.35 mの低地である。この遺跡は弥生時代後期から中世に至る複合遺跡である。観察した露頭は地表面から最大で深さ約 4.5 mである。

地層や堆積物の観察は，堆積相解析（増田，1988，1989）を用いて，堆積が行われた場所（堆積環境）の推定を行った。そこでは，岩相，粒度，層厚，堆積構造，色調，基底面形状，古流向，断面形状，重なり様式，側方変化などの観察を行った。また，粒度分布の特徴を明らかにするため，砂試料を採取し，それを風乾した後，沈降式粒度分析機で分析し，得られた粒度分布から Fork and Ward (1957) の方法で

fig.281　深江北町遺跡の位置

地図は国土地理院発行 2.5 万分の 1 地形図「西宮」より作成。青線は 1886 年（明治 19 年）頃の海岸線。A-B は図 16 の地質断面線の位置。

粒度特性値を求めた。

遺跡の自然堆積層の表層地質における位置付けを知るため，関西圏地盤情報データベース（関西圏地盤情報ネットワーク・関西圏地盤情報協議会）を利用して，地質柱状断面図を作成して解析した。解析には Shazam 層序学（増田ほか，2013）を適用して，地下地質を復元した。

３. 観察された自然堆積層

深江北町遺跡で観察された堆積物は，１）砂丘・海浜堆積物，２）潟・沿岸湿地堆積物，３）扇状地堆積物，および，４）人工改変土層である。

１）砂丘・海浜堆積物

調査地域で最も特徴的な堆積相で，黄白色から灰白色の分級の良い細粒から粗粒砂からなる厚さ 150cm ほどの砂層である（fig.282, fig.283, fig.298）。上部の 60 ～ 80cm は塊状の中粒砂で，その最上部は人工改変されているところが多い。下部は，灰色でより粗粒な（粗粒～中粒砂），逆グレーディング構造を示す平行葉理やくさび状葉理が発達する砂層である（fig.284）。場所によっては後述する暗灰色の泥層の上位に重なる（fig.285）。

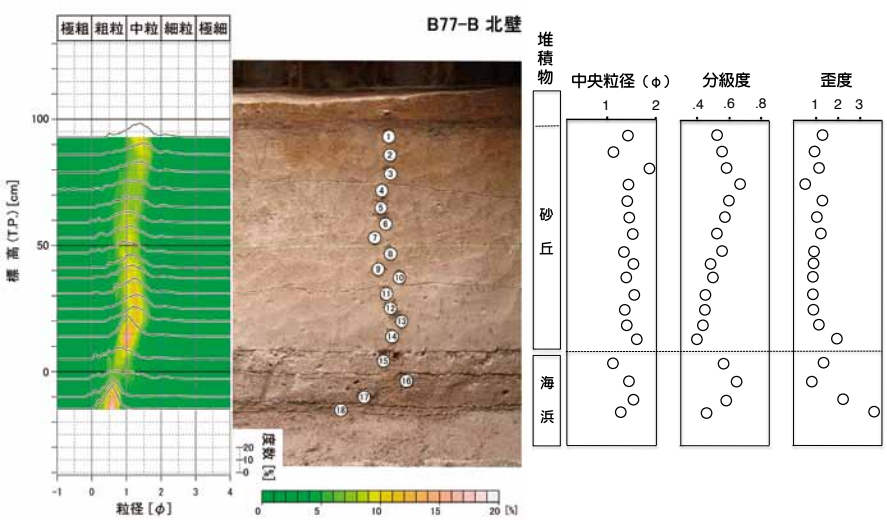


fig.282　砂丘・海浜堆積物の露頭断面と粒度特性工区 B77-B の北壁。

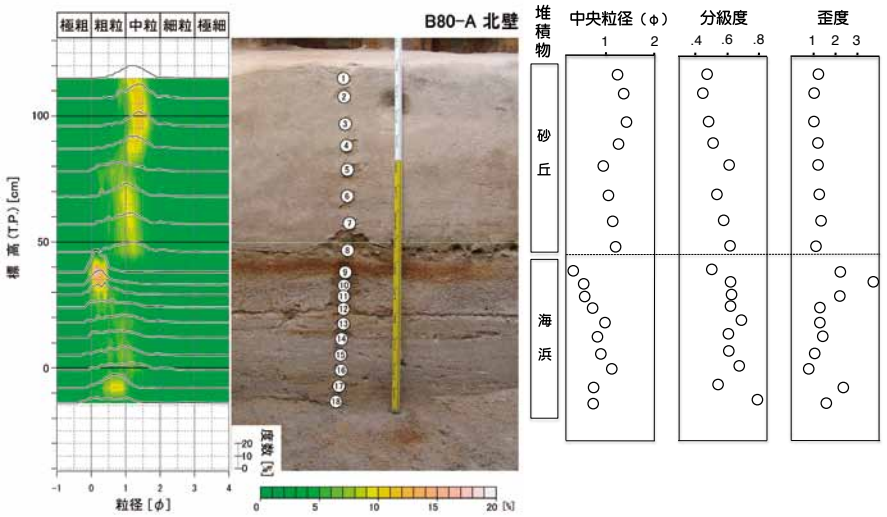


fig.283　砂丘・海浜堆積物の露頭断面と粒度特性工区 B80-A の北壁。

こうした堆積構造や岩相から推定すると，上部は砂丘堆積物，下部は海浜堆積物で，その上部が後浜堆積物，下部が前浜堆積物である。同様の堆積物や地層の重なりは調査地のすぐ西側の北青木遺跡でも見いだされている（増田ほか，2014）。

砂丘堆積物は粒度特性が特異な砂からなっている（fig.297，fig.299）。調査地全体にわたって，その砂は中央粒径が 1.2 ～ 1.6 φ，分級度が 0.35 ～ 0.58，歪度が +1.9 ～ +0.7 のものがほとんどである（fig.286）。すなわち，粒径が中粒でそろっていて，分級が良く，対称性が良くやや粗粒側に偏った分布をとっている。この砂丘砂の特徴は，調査域のすぐ西側で行われた北青木遺跡第 3 次調査で観察された砂丘堆積物のそれとほぼ一致する（fig.286）。このことはこの地域の風によって海岸に堆積する砂は，その粒径や粒度特性がほぼ同じになることを示している。

fig.284　砂丘・海浜堆積物

工区 B80-A。上部の塊状砂層が砂丘堆積物，中部の粗粒砂層が後浜堆積物，下部の含礫平行葉理砂層が前浜堆積物。
写真下部のスケールは長さ 20cm。

fig.285　砂丘堆積物と潟堆積物

工区 B77-A。上部は人工改変土。中部は砂丘堆積物の塊状砂層。下部は潟堆積物の黒灰色粘土層。砂丘帯堆積物の最上部には小さなリップル葉理が，潟堆積物には生痕化石が認められる。
露頭の高さは約 1 m。

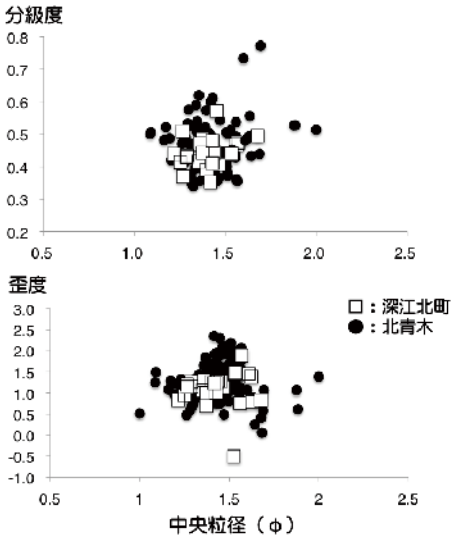


fig.286　砂丘砂の粒度特性

北青木（黒丸）は調査地西方の北青木遺跡で採取された砂丘砂の粒度特性値。

2）潟堆積物

調査地でみられる砂丘堆積物以外の別の特徴的な堆積物が，灰黒色の塊状の泥質堆積物である（fig.285，fig.287，fig.298）。この堆積物は厚さ 50 ～ 150cm で細長く分布しており，沿岸砂州と浜堤間の低地に堆積した沿岸湿地，いわゆる潟の堆積物である（増田ほか，2014）。それはその泥質堆積物に伴って，潮汐堆積物や潮流口と思われるチャネル（流路）埋積物がみられ，明らかに海水の影響がその一部にみられるからである。そこでは斜交葉理や斜交層理を薄い泥層が覆うマッドドレイプ（fig.288，fig.289），潮流の反転を示す反対方向に傾いたフォーセット葉理（fig.289），さらに細砂と中砂の細互層からなる砂干潟の堆積物（fig.290）などがみられる。調査地ではこの潟堆積物の泥質堆積物は，砂丘砂層の下位や海浜砂層の上位などでみられる。調査地の中央部（工区 B82-A）では，海浜砂の上位に浅いチャネル状に土石流から分化した土砂流堆積物が見られ，その上部は波食によって平坦化され，その上に砂丘堆積物の砂層がみられた（fig.291）。これは土石流の末端が海岸に流れ込み，海浜が沖側に成長し，そこに砂丘が形成されたことを示している。この海岸の前進は海水準の低下ではなく，堆積物の供給量の増加によっても発生する（増田，1999，2004）。

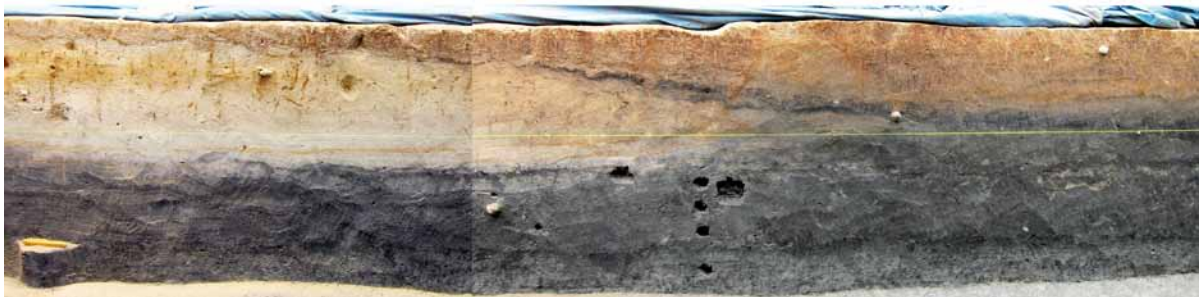


fig.287　砂丘堆積物と潟堆積物

工区 B75-B。最上部は人工改変土。左側から中央部にくさび状に入る黄白色の砂層は砂丘堆積物。下部の黒色層は細粒砂層と粘土層からなる潟堆積物。砂丘堆積物の上部には生痕化石が，潟堆積物にはストーム砂層や生痕化石が認められる。露頭の高さは約 1.2 m。

fig.288　潮汐チャネル（澪）埋積物にみられるマッドドレイプ

工区 B77-B。写真横幅は約 35 cm。

fig.289　砂質堆積物からなる潮汐チャネル（澪）埋積物

露頭は南北方向で，上げ潮流と下げ潮流によってつくられた逆方向に傾くフォーセット葉理，それを覆うマッドドレイプ層さらに潮汐低地堆積物の細互層などがみられる。最下部は海浜堆積物。
工区 B82-A。露頭の高さは約 1。5 m。

3）扇状地堆積物

砂丘堆積物や潟堆積物の上位に重なる自然堆積層は，扇状地堆積物の網状河川流路堆積物や土砂流堆積物などである。網状流路堆積物は上方細粒化がやや認められる礫層や砂礫層（fig.292）で，砂礫堆の堆積物である斜交層理やインブリケーション構造や基質のない礫支持の“すかし礫層”（fig.293）などが特徴である。また，土石流から分化したやや濃度の低い流れ，すなわち土砂流からの集団移動堆積物が認められる（fig.294）。それは下部が逆級化を示し，中・上部が正級化を示す淘汰の悪い含礫砂層である。

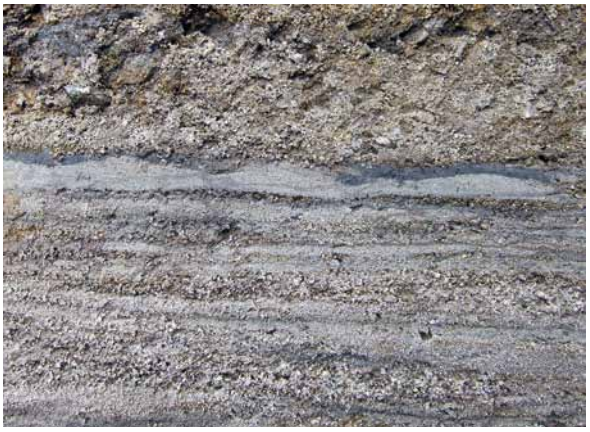


fig.290　砂干潟堆積物の砂泥細互層

砂層には流れリップルの痕跡が認められる。
工区 B82-A。写真横幅は約 70 cm。

fig.292　河川堆積物の砂礫層

上方細粒化を示す流路堆積物。
工区 B82-A。写真の横幅は約 40 cm。

fig.291　海浜・砂丘堆積物と土砂流堆積物

上部は塊状中粒砂からなる砂丘堆積物，下部は平行葉理をもった含礫中～粗粒砂層からなる海浜堆積物，中部は浅いチャネル状に堆積した平行層理の発達した砂礫層からなる土砂流堆積物。
工区 B82-A。露頭の高さは約 1.5 m。

fig.293　河川堆積物の砂礫層

中下部に，砂礫堆の堆積物の特徴を示すマトリックスの無い礫支持の“すかし礫層”がみられる。工区 B82-A。写真の横幅は約 25 cm。

fig.294　土砂流堆積物
土石流から分化した土砂流堆積物で，分級が悪く上方粗粒化から細粒化を示す含礫砂層。上位の堆積物から入った根痕が認められる。工区 B80-A。写真の横幅は約 30 cm。

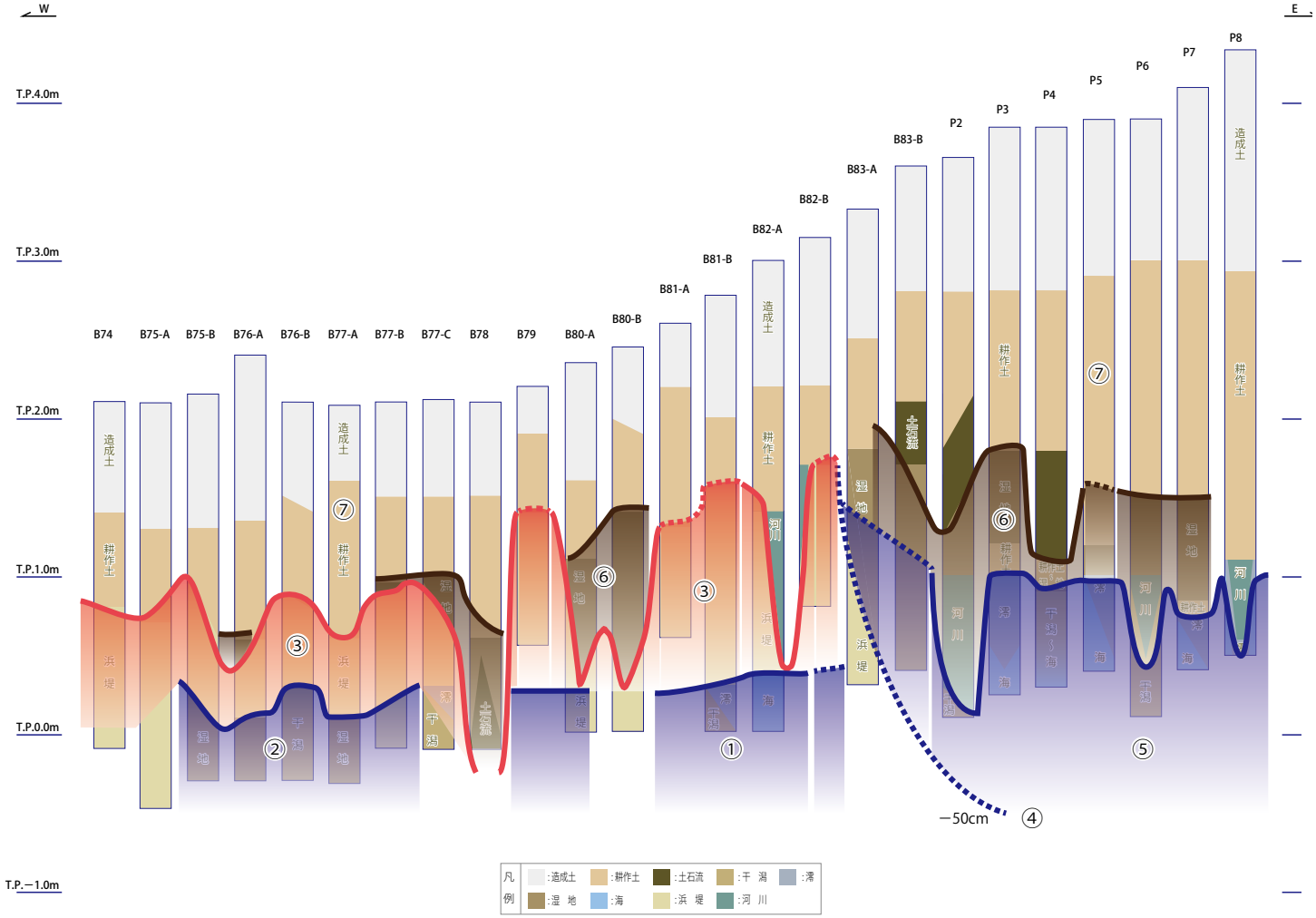
4）人工改変土層

自然堆積層 1）から 3）を改変して，遺構や遺物を含む堆積物が分布する。これらは表土，田畑の耕作土や床土，構造物の構築に伴う撹拌土などである（fig.285，fig.287，fig.290，fig.298）。

4. 自然堆積層から推定できる地形変化と海水準変動

深江北町遺跡で観察される砂丘・海浜堆積物，潟・沿岸湿地堆積物，扇状地堆積物の分布を，工区毎の柱状配列図（神戸市教育委員会，2014）に表記してみると（fig.295），地形や海水準の変化を読み取ることができる。

堆積相と層位から考えて，最も下位の地層は調査地の中央部の基底に見られる海浜堆積物（fig.295 の①）である。その後，海水準が 40cm ほど低下して西側の一部が直接海に面さない澪や干潟の堆積物（fig.295 の②）が溜まった。この間の海水準低下に伴う海岸線の海側への移動によって，この地域は厚さ 60cm ～ 1.5m 程の砂丘堆積物（fig.295 の③）に覆われた。この砂丘の高まりは浜堤の Ⅳ 帯（fig.281）にあたる。さらに海水準が低下すると，調査地の東部の谷部で標高－ 50cm まで谷底が下刻された（fig.295 の④）。調査地の西側の北青木遺跡でもこれと同じ時期の谷が見いだされており（増田ほか，2014），その谷底が標高－ 80cm であることから，ここでもその値まで下刻されたと考えている。これと同じ時期に砂丘の上にも小さな侵食谷が形成されたと思われる。そして最初の海浜堆積物の形成からここまで 1.5m 以上の海水準低下があったことになる。次の時期になると，海水準が上昇に転じる。東部の谷に海水が浸入し，そこが潟や塩水湿地の堆積物で埋積される。海水準は潮位差を無視すれば，標高＋ 1m にまで上昇したことになる。最高海面期後で，弥生時代に海水準が低下したことは知られている（有明研究グループ，1965；海津，1994）。その後に海水準が上昇したことはあまり報告例がないが，調査地付近では古墳時代の海進が報告されている（増田，2004；増田ほか，2013）。調査地のすぐ西の北青木遺跡でもこの時期の海進が報告されている（増田ほか，2014）。調査地でもこの海進時期は含有遺物からも古噴時代以降である。海水準の上昇が止まり，低下し始めると，潟は汽水域から淡水域の沿岸湿地へと変化する。その谷筋の湿地に，背後の山地から河川の氾濫流や土石流が流れ込み上位にそれらの堆積物が重なる（fig.295 の⑥）。地表面は，砂丘の堆積時（弥生時代）から今日まで人工改変が繰り返し行われ，変形してきている。



【堆積相から読み取れる地形変化】

① 浜堤（砂州）海岸（前浜・後浜）が形成される．

② 海水準低下に伴い海岸線が海側に前進し，直接海に面さない澪や干潟に変化する。

③ その海水準低下に伴って砂丘が前進する．IV 帯（fig.281）の浜堤形成。

④ 海水準低下がさらに進み，低まり（凹地）に谷が発達する。

⑤ 海水準上昇によりその谷に海水が浸入し，潟や塩水性湿地が形成される。

⑥ 海水準上昇が止み低下し始めると，潟は汽水域から淡水域の沿岸湿地に変化する。
その湿地の凹地に，河川氾濫流や土石流が流れ込む。

⑦ 地表は③以降に，人工改変が進む。

【堆積相から読み取れる海水準変動】

①→②→③→④　海水準低下（標高＋ 70 cm から− 80 cm 以下へ）：弥生時代末

④→⑤　海水準上昇（標高− 80 cm 以下から＋ 1 mへ）：古墳時代〜？

⑥→⑦　海水準一定から低下して，現在に至る．

fig.295　調査地における自然堆積層の分布とそれから読み取れる地形と海水準変動
神戸市教育委員会（2014）に堆積相の分布と境界を加筆

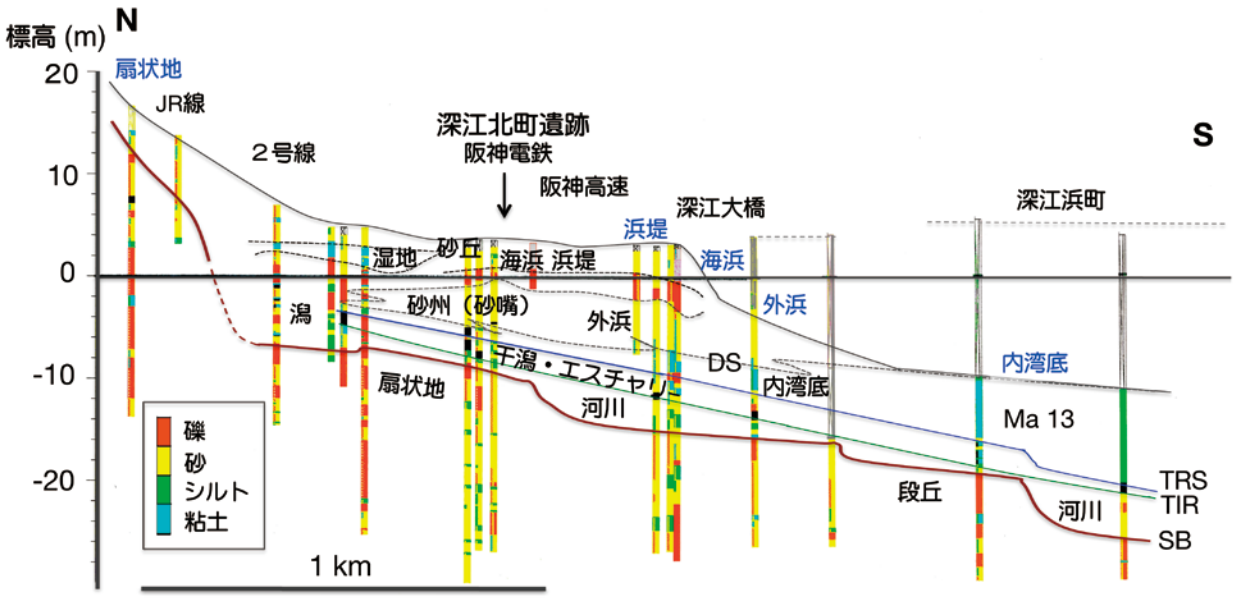


fig.296　調査地を通る南北方向の地下地質断面図。断面位置は fig.281（A-B）に示す

大阪湾の泥底堆積物（第 13 海成粘土層，Ma13 層）が陸側の潟堆積物に連続する。その上位は沿岸砂州（砂嘴）と浜堤海岸の堆積物からなる。DS は前進堆積体のダウンラップ面，TRS は海進ラビーンメント面，TIR は潮汐ラビーンメント面，SB は沖積層基底（シークェンス境界）。

5. 調査地の地下地質

調査地の地下表層には，沖積層と呼ばれる地層が分布する（藤田・笠間，1982）。この地域の沖積層については，田中（2004）によってすでに解析されている。沖積層は約 3 万年前から現在までに堆積した地層である（増田，2007）。その基底面は不整合面で，最終氷期極期（1.8 万年前）にかけて海水準の低下速度が最も大きくなった約 3 万年前から 2 万年前にかけて形成された地形面と，その後の波食などの侵食によって変形した面である。その面は，段丘面や扇状地面，あるいはそれを下刻した穿入谷がつくった地形で，その表面の一部が後の海進期の波食などで削られたものである。その不整合面上に堆積したのが，沖積層である。沖積層は，下部層，中部層，上部層に区分される（梶山・市原，1972）。

大阪平野で確立されたこの区分は，基本的には深江地区の沖積層にもあてはめることができる。調査地の西端での南北方向での地質柱状断面図（fig.296）では，調査地の地下に層厚約 15 mの沖積層が認められる。調査地の西部を含むさらに西方の北青木遺跡の地質断面は，増田ほか（2014）にも示されている。それらによれば，沖積層基底の不整合面（SB）は扇状地や段丘の上に設定でき，海側に向かって深くなる。その上位には，厚さ 5 m程の河川堆積物の砂礫層や泥層と，厚さ 2 ～ 3 mの干潟やエスチャリー（三角江，海進期の河口）の砂泥互層堆積物が重なる（下部層）。下部層は氷期の谷部では厚く，5 ～ 7 mになる。河川堆積物の上面は平坦面（TIR）で，内湾に海が侵入したときの潮汐の作用でできたものである。下部層の上位には厚さ 2 ～ 10 m の海成粘土層（中部泥層：第 13 海成粘土層，Ma13 層）が重なる。海進期から最高海面期（6000 年前から 5000 年前），さらに沖側では現在の大阪湾底の泥層に連続する。この大阪湾底の泥層は陸側に向けて薄くなるが連続し，陸端に分布する潟堆積物の礫砂泥互層に変わる。この陸側に分布する潟堆積物が最高海面期の海岸線に沿って分布するのが，深江地域の特徴である。潟堆積物

中の粗粒堆積物は洪水時に陸側からもたらされた土石流や土砂流に伴う堆積物である。中部粘土層の下底は明瞭な平坦面で，広がった内湾に発生した波浪でつくられた波食面（海進ラビーンメント面，TRS；増田ほか，2013）である。この上位に重なるのが，側方によく連続する厚さ５ｍ程の砂層（中部砂層）である。これは青木砂層（関西圏地盤情報協議会，1988）と呼ばれている。この砂層は最高海面期に発達した沿岸砂州（砂嘴）の海側斜面の堆積物と，海側ではその後に沖側に前進した浜堤や海浜の沖の外浜堆積物からなる（増田ほか，2014）。この砂層は下位の中部粘土層にダウンラップ構造をとって沖側に前進している。中部砂層の上位，標高０ｍ付近には厚さ１ｍ程度の砂礫層（上部砂礫層）が分布する。この砂礫層は海浜下部から外浜上部の暴浪時の砕波帯付近の堆積物である。さらに上位に重なる砂層（最上部砂層）が，調査地で観察できる海浜砂，砂丘砂，扇状地堆積物などにあたる。その陸側では海水の影響があった潟が，後に淡水の沿岸湿地に変化した泥質堆積物がみられ，その上位を山側から運び込まれた扇状地性の堆積物が堆積している（fig.296）。以上のことから，深江北町遺跡は，最高海面期に細長く伸びた沿岸砂州（砂嘴）とその後の海水準低下期に海側に前進した浜堤平野に立地していることがわかる。

謝辞：調査の機会を与えて頂いた神戸市教育委員会の丸山潔，千種浩，谷正俊、阿部功、井上麻子の各氏，粒度分析をお手伝い頂いた，谷口圭輔氏（筑波大学アイソトープ環境動態研究センター）と佐藤喜英氏(㈱片平エンジニアリング)に感謝します。また，表層地質の解析に用いた地盤情報データベースの利用許可を頂いた関西圏地盤情報データベース運営機構に謝意を表します。

文　献

Fork，R. L.　and Ward，W.，1957，Brazos river bar: a study in the significance of grain size parameters. Journal of Sedimentary Petrology，31，514-529.

有明研究グループ，1965，有明・不知火海域の第四系—とくに有明軟弱粘土層について．地団研専報，11，86p.

海津正倫，1994，沖積低地の古環境学．古今書院，270p.

関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会，1988，新関西地盤，神戸および阪神間。関西地盤情報活用協議会，270 ｐ。

藤田和夫・笠間太郎，1982，大阪西北部地域の地質。地域地質研究報告，5 万分の 1 図幅，地質調査所，112 ｐ。

梶山彦太郎・市原　実，1972，大阪平野の発達史－ 14C 年代からみた－。地質学論集，7，101-112。

増田富士雄，1988，1989，ダイナミック地層学－古東京湾域の堆積相解析から－「その 1 基礎編」，「その 2 発展編」。応用地質，29，312-321；30，29-40。

増田富士雄，1999，北青木遺跡の海浜堆積物。北青木遺跡発掘調査報告書—第３次調査，Ⅳ，66 － 74，神戸市教育委員会，148 ｐ。

増田富士雄，2007，相対的な海面変動が支配する地層の累重と地形の形成：わが国の沖積層の解析から。地形，28（4），365-379。

増田富士雄，2004，六甲山地南麓の完新世浜堤の形成過程。太田陽子ほか編：日本の地形６，近畿・中国・四国，98-101。

増田富士雄・佐藤智之・伊藤有加・櫻井皆生，2013，Shazam 層序学をボーリングデータベース解析へ適用する試み：大阪平野の表層地質研究を例に。地学雑誌，122，892-904。

増田富士雄・谷口圭輔・佐藤喜英，2014，神戸市東灘区北青木遺跡第 7 次調査地における堆積物と地層。北青木遺跡第 7 次発掘調査報告書，第 3 章，107-124，神戸市教育委員会。

田中眞吾，2004，大地の成り立ち。「本庄村史，地理編・民俗編 —神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ」，第一章，1-37。

		含泥率 [%]	含礫率 [%]	Mean	Sorting	Skewness	Kurtosis
B75-A	1	9.13	0.00	1.57	0.47	1.89	8.91
東壁	2	5.31	0.00	1.57	0.47	1.78	8.56
	3	5.34	4.62	1.12	0.70	0.56	4.11
	4	2.87	10.65	0.93	0.68	0.97	4.66
	5	2.22	10.28	0.89	0.71	1.03	4.60
	6	1.25	11.79	1.16	0.61	0.56	4.31
	7	0.99	26.20	0.86	0.83	1.13	3.99
	8	0.78	17.62	0.34	0.54	2.83	13.24
	9	1.63	26.92	0.50	0.74	1.97	7.04
	10	1.57	4.84	0.88	0.68	0.78	4.18
	11	1.01	0.00	1.36	0.43	1.07	6.78
	12	0.91	0.00	1.47	0.41	1.14	7.21
	13	0.84	0.18	1.37	0.48	0.70	5.27
	14	1.45	0.00	1.56	0.47	0.76	5.82
	15	3.44	3.66	1.44	0.74	0.35	3.23
	16	9.31	15.91	0.94	0.55	1.02	5.84
B77-A	1	6.68	0.52	1.45	0.54	1.36	6.36
東壁	2	5.28	0.00	1.35	0.50	1.47	7.79
	3	2.97	0.00	1.34	0.45	1.51	8.33
	4	2.31	0.00	1.34	0.45	1.51	9.04
	5	3.22	0.00	1.61	0.48	1.45	6.96
	6	4.91	0.00	1.54	0.45	1.48	8.30
	7	10.62	0.00	1.62	0.49	1.39	7.05
	8	4.71	0.00	1.53	0.51	-0.50	9.39
	9	10.08	0.17	1.63	0.49	0.79	6.54
	10	10.74	0.70	1.16	0.64	1.47	6.00
	11	5.60	3.04	0.99	0.61	1.76	7.21
	12	7.72	5.44	1.11	0.63	1.17	5.39
	13	5.54	3.22	1.18	0.64	1.18	5.60
	14	9.53	4.22	1.02	0.62	1.52	6.72
B77-A	1	3.66	0.00	1.30	0.43	1.26	7.47
北壁	2	2.98	0.00	1.36	0.47	1.31	7.17
	3	2.01	0.09	1.22	0.44	0.83	7.27
	4	1.97	0.21	1.29	0.43	1.15	7.39
	5	1.84	0.00	1.25	0.41	0.95	7.04
	6	1.89	0.00	1.40	0.39	1.26	7.90
	7	1.95	0.00	1.35	0.42	1.07	7.14
	8	3.18	0.00	1.29	0.43	1.27	7.86
	9	8.43	3.03	1.06	0.76	1.31	5.03
	10	10.32	0.80	1.08	0.63	1.51	6.38
	11	10.44	4.09	1.11	0.72	0.76	3.95
	12	6.52	8.60	1.04	0.65	1.00	5.61
	13	5.03	2.87	0.99	0.61	1.23	6.29
B77-B	1	6.08	0.50	1.41	0.51	1.34	7.50
西壁	2	5.41	0.54	1.34	0.52	0.84	5.75
	3	3.41	0.89	1.20	0.46	1.19	7.62
	4	5.16	0.76	1.36	0.51	0.90	6.22
	5	4.90	1.18	1.40	0.53	1.06	6.26
	6	4.72	0.55	1.44	0.55	0.88	6.17
	7	4.17	1.11	1.23	0.50	1.00	6.19
	8	2.63	0.00	1.28	0.51	1.04	6.19
	9	2.62	0.36	1.40	0.50	1.01	6.09
B77-B	1	4.40	0.12	1.41	0.52	1.30	6.42
北壁	2	5.63	0.50	1.48	0.55	0.92	5.02
	3	5.17	1.20	1.36	0.58	1.14	5.54
	4	4.19	0.91	1.19	0.67	0.51	5.26
	5	2.84	1.96	1.21	0.60	1.28	5.99
	6	2.23	3.51	1.07	0.58	1.03	5.84
	7	1.71	4.24	1.09	0.52	1.22	6.40
	8	1.50	1.77	1.04	0.55	0.90	5.42
	9	1.31	2.35	1.18	0.48	0.89	5.79
	10	1.71	0.84	1.19	0.50	0.85	5.29
	11	1.02	0.92	1.24	0.45	0.85	6.03
	12	1.23	0.03	1.32	0.45	0.87	6.08
	13	1.00	0.15	1.29	0.43	1.11	6.76
	14	0.77	0.00	1.17	0.40	1.95	8.81
	15	0.97	13.79	0.95	0.57	1.35	5.78
	16	1.60	7.69	1.03	0.65	0.80	3.79
	17	1.18	10.29	0.70	0.58	2.25	9.30
	18	1.57	5.76	0.63	0.46	3.68	21.25

		含泥率 [%]	含礫率 [%]	Mean	Sorting	Skewness	Kurtosis
B77-C	1	12.11	0.00	1.68	0.50	0.83	5.87
東壁	2	8.53	0.00	1.45	0.57	1.28	6.03
	3	3.80	0.00	1.44	0.44	1.28	7.77
	4	2.99	0.00	1.53	0.44	1.48	8.49
	5	2.82	0.34	1.23	0.50	1.27	6.37
	6	2.31	0.00	1.23	0.41	2.22	12.62
	7	2.59	2.61	1.08	0.54	1.35	7.28
	8	2.51	0.85	1.21	0.51	0.78	5.99
	9	8.85	15.04	1.22	0.60	0.61	4.22
	10	1.68	1.42	1.01	0.44	2.69	12.99
	11	1.26	0.00	1.56	0.39	1.66	8.40
	12	1.36	6.02	0.69	0.49	2.17	10.53
	13	0.84	1.78	1.03	0.50	2.28	10.41
	14	1.19	0.14	1.06	0.49	1.37	6.00
B80-A	1	18.41	2.17	1.11	0.62	1.49	6.98
東壁	2	9.71	2.06	1.08	0.53	1.33	9.21
	3	4.12	2.70	0.85	0.54	1.74	8.45
	4	3.67	0.44	1.18	0.64	1.34	5.68
	5	2.53	13.55	1.00	0.71	0.87	3.55
	6	1.82	2.70	1.00	0.52	1.00	5.68
	7	0.86	15.13	0.99	0.53	0.61	4.70
	8	1.03	19.48	0.98	0.56	0.86	5.66
	9	0.63	27.27	0.74	0.57	1.33	6.11
	10	0.84	0.15	1.19	0.41	1.82	9.74
	11	0.86	41.03	1.15	0.70	0.57	3.42
	12	1.14	12.72	1.06	0.61	0.94	4.49
B80-A	1	1.93	0.18	1.25	0.47	1.22	7.55
北壁	2	1.55	0.00	1.37	0.44	1.00	6.48
	3	1.81	0.00	1.43	0.48	1.01	6.94
	4	1.89	0.30	1.26	0.51	1.20	6.86
	5	2.24	0.33	0.95	0.62	1.20	5.45
	6	1.87	0.80	1.06	0.53	1.25	8.14
	7	1.52	0.00	1.15	0.58	1.35	6.61
	8	1.09	2.21	1.20	0.62	1.10	5.42
	9	0.86	7.04	0.33	0.50	3.77	20.57
	10	1.05	14.10	0.54	0.62	2.24	9.54
	11	0.89	19.26	0.56	0.63	2.23	9.78
	12	0.77	23.55	0.73	0.62	1.27	5.50
	13	0.75	13.63	0.98	0.69	1.28	5.64
	14	0.47	25.27	0.83	0.61	1.43	6.99
	15	0.49	13.66	0.90	0.61	1.04	5.78
	16	0.74	9.59	1.13	0.68	0.77	4.09
	17	0.67	3.68	0.75	0.54	2.37	11.78
	18	0.75	38.79	0.74	0.79	1.58	5.93
B83-B	1	6.21	33.94	0.86	0.84	1.40	4.86
東壁	2	3.38	44.74	0.98	0.76	1.05	3.93
	3	3.71	41.63	0.90	0.76	1.33	4.83
	4	2.06	42.35	0.80	0.76	1.73	5.96
	5	1.83	0.00	1.34	0.46	1.84	9.28
	6	1.35	0.00	1.36	0.42	1.37	7.80
	7	1.02	0.00	1.43	0.41	1.24	6.93
	8	1.45	0.00	1.42	0.35	1.23	8.02
	9	0.91	0.00	1.27	0.37	1.14	8.67
B83-B	1	5.25	26.18	1.16	0.83	0.97	3.46
北壁 - 東	2	5.39	28.90	1.40	0.85	0.37	2.84
	3	4.06	41.14	1.09	0.87	1.21	3.97
	4	12.38	16.21	1.11	1.00	1.10	3.48
	5	2.60	8.76	1.00	0.79	1.22	4.70
	6	0.99	1.16	0.92	0.54	1.40	7.01
B83-B	1	7.73	30.15	1.19	0.84	1.08	3.63
北壁 - 西	2	8.82	17.24	1.04	1.06	0.40	2.91
	3	2.98	26.93	1.03	0.78	1.28	4.93
	4	4.74	31.26	1.03	0.78	1.20	4.34
	5	1.18	10.38	1.08	0.78	1.01	3.57
	6	1.60	18.00	1.33	0.75	0.63	3.34
	7	1.98	42.23	1.00	0.87	1.15	3.76
	8	1.35	45.59	1.28	1.01	0.60	2.30
	9	4.57	2.17	1.72	0.95	0.20	2.05
	10	21.43	0.61	2.65	0.82	-0.83	3.43

fig.297　粒度分布から求めた粒度特性値

試料採取地点，試料番号（fig.282，fig.298 の写真中の番号に相当する），含泥率，含礫率，中央値（Mean），分級度 (Sorting)，歪度 (Skewness)，尖度 (Kurtosis)。

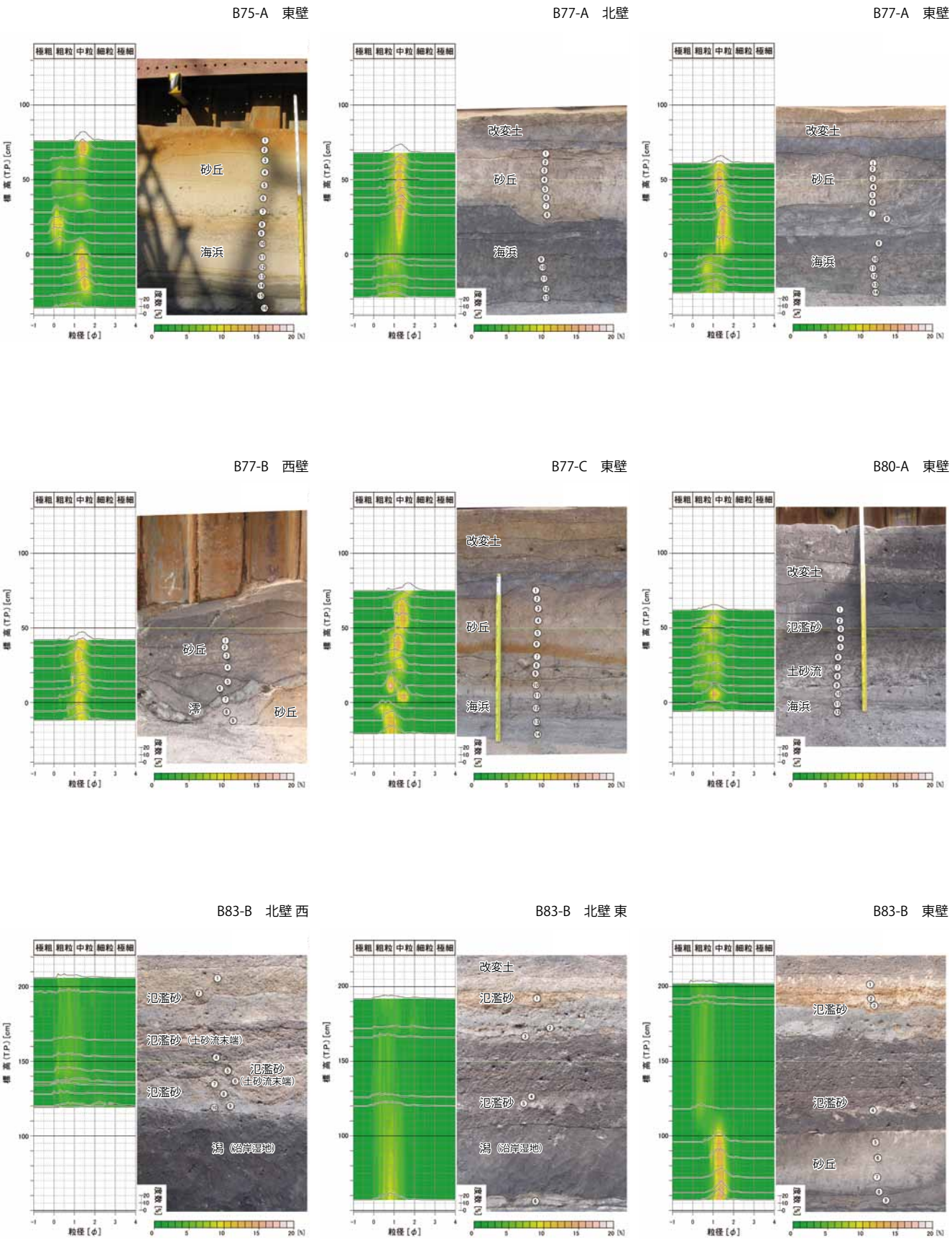


fig.298　砂試料の採取点と粒度分布型
粒度分布は集中度も表示

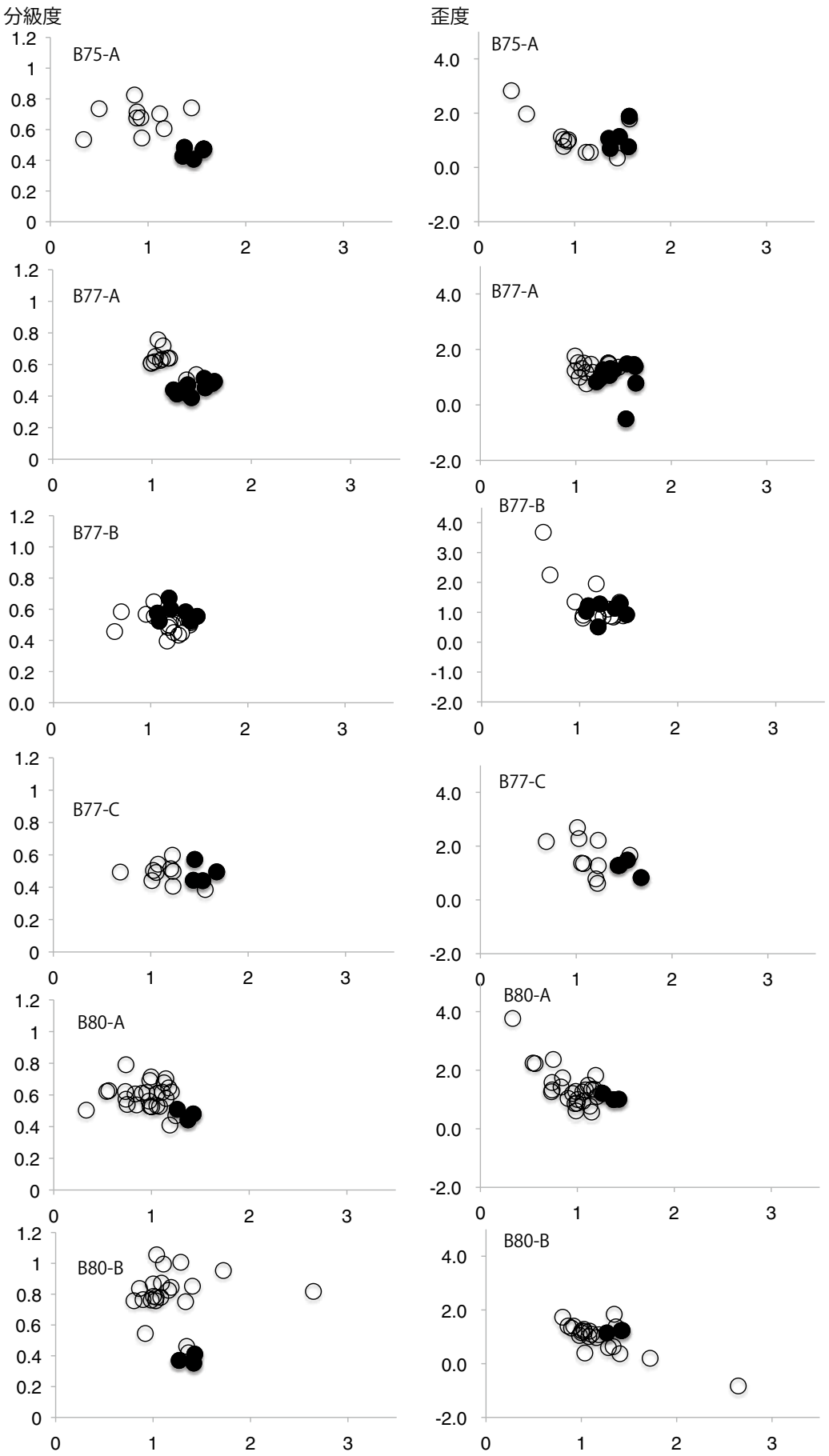


fig.299　砂試料の粒度特性。各工区の中央粒径，分級度，歪度のプロット。黒丸は砂丘堆積物。

Ⅳ．まとめ

2か年にわたる調査の結果、深江北町遺跡の様相が新たに明らかになってきた。今回の調査で出土した遺物を中心にその特徴を述べたい。

1．古墳時代の祭祀土製品について

B81-B区、B82-A区、B82-B区では古墳時代後期のものと考えられる祭祀土製品が、浜堤上の砂の面から、ある一定の範囲に集中した状態で発見された。出土状態から想定すると、何らかのまつりが行われた後、それらの遺物をその場に置いたまま人々は立ち去ったものと判断される。その種類は手捏土器、小玉、勾玉、管玉、鏡形、動物形（猪、馬）等があり、甕形土器が共伴する場合がある。これらの遺物の作りは粗雑であり、形状が本来のものに似て、その数が揃えばよいというような製作にあたっての意図が窺える。ただし、猪を象ったものは非常に写実的であり、生きている猪をよく観察した者が造形しているようである。

これらの土製品を使用したまつりの対象・目的（1）は判らないが、土製品の量や散らばっている範囲からみて、多人数によって執り行われた祭事とは想定し難く、むしろ家族単位程度の少人数のまつりを想定したほうが妥当ではないかと思われる。

2．漁具（土錘・浮木）について

今回出土の土製品・木製品で目を惹くのは土錘・浮木などの漁具の量である。実測できない小破片を含めると、数百点は出土している。これらは古墳時代の土層からも出土しているが、大半は奈良・平安時代のものであり、土錘は管状・棒状・有溝のものなど形状・大きさが多種多様である。これまでの研究で、これらの差異は使用される網の種類によって異なるといわれている。例えば小形の管状土錘は刺網、投網、大形は（地曳網または底曳網）、有溝土錘は（地曳網または底曳網）、棒状土錘は刺網に概ね使用されたとしている（2）。出土した土錘を観察すると、曳網に用いられたとされる大形の管状土錘、有溝土錘は表面が摩滅しているものが多く、海底や海浜を引きずった結果と考えるのは妥当ではないかと思われる。

また、浮木とされるものは細長い板状または棒状で両端に孔を持つもの、板状で両端に紐掛け用の切欠きを設けているもの、円柱状で中心部に孔が貫通しているものがある。これらについては土錘と同様に網の種類や装着する位置によって使い分けされていると思われるが、現状ではよく判らない。

3．木製祭祀具について

浜堤周辺の湿地から出土した木製品の内、祭祀具として斎串や形代（馬形・人形・舟形等）がある。これらは奈良・平安時代の都城、官衙、またはその付近で出土することが多く、古代の役所の宗教儀式の中で使用されたものであるといわれている。特に祭祀遺物の中では、すでに160頁で記したように、舟形については多様なヴァリエーションがあり、執り行われた祭儀と舟に関わりが深い人々との繋がりを想定することは可能であろう。

4．編み具・紡織具について

編み具・紡織具は、木錘、糸巻き、整経ヘラ未製品、綛かけ未製品、桙の腕木と思われるもの、綜絖棒（綾棒）の可能性のあるもの、緯打具の可能性があるものなどが確認されている（3）。これらの中では木錘が最も多く、梱包材、帆材等として俵、薦、莚など編物が製造されたものと思われる。紡織具については糸巻きが多いこと、未成品が多いことが目立ち、それらの道具の製造を付近で行っていた可能性と共に、糸の巻き取りから整経、製織といった複数の工程に必要な器具が揃っていることから、官衙に付属する工房の存在を示唆している。

5．木簡・墨書土器・硯について

今回の調査で発見された木簡は26片出土し、その内の3片は接合することから、点数としては24点となる。そのすべてが、堤間湿地の堆積土内から木製品、木屑などと混在した状態で見つかっている。24点の内、17点がB80-B区から集中して出土した。

墨書土器は調査地の中央部分で確認された浜堤およびその近辺の湿地で176点発見された。この内、B80-B区の湿地内からは148点と圧倒的な量が出土している。判読できる主なものを記すと以下の通りである。「大垣」・「大垣官」・「驛」・「三宅」・「津」・「殿□」・「北家」・「廿」・「美」・「新大」・「罡」(B80-B区)、「志」「辛」(B83-B区)、「辛万(呂)」(P2区)、「飯」(P5区)、「飯男」(P6区)、これらの内、「大垣」と書かれたものの数が多い。また絵画と思われる土器も数点認められる。文字が書かれた器種は土器の表面の残り具合もあるが、須恵器が多数を占め、坏蓋の内面または坏の外底面に記されているものが多く、側面に記されているものは極めて少ない。また、陶硯が1点、須恵器、土師器の坏・坏蓋を利用した転用硯が100片以上出土している。木簡・墨書土器・硯から判ることを要約すれば以下の通りである(4)。

①駅長宛の命令伝達の木簡や「驛」と書かれた墨書土器の出土から、深江北町遺跡が「葦屋驛家」関連遺跡であることがさらに明らかになったこと。「大垣」・「大垣官」等の墨書土器は驛家の機構や構造を表象している可能性がある。

②論語の習書木簡や多数の墨書土器・転用硯の出土は何らかの執務を行う役所の存在を示しており、また人名列記の木簡や米の数量を記した木簡、戸主名を示した木簡等は地方行政の末端を担う何らかの公的機関の存在を示唆している。

③天平十九年の年紀を持つ智識銭に関する木簡は東大寺大仏鋳造のための智識活動が盛んに行われていた時期のものであり、驛家を含めた地方末端の行政機関もそれに関与していた可能性を示す資料である。

④今回出土の文字資料からは従来考えられてきた驛家の活動範囲を大きく超える内容であるため、驛家と郡家(あるいはその付属機関)が近接する場合なども想定する必要がある。

6．深江北町遺跡の性格について

前項で述べたように当遺跡では、「驛家」に関わる遺物(木簡、墨書土器)が主に湿地内から発見されており、「葦屋驛家」である蓋然性が高まってくる。しかし浜堤上の遺構は掘立柱建物の一部と想定されるものは確認されているが、各調査区の範囲が狭いため、その規模、形状等は不明である。周辺の調査データを見ても、「驛家」と断定できる遺構は発見されていない。

このように状況証拠は次々提示されつつあるが、肝心の「驛家」本体が確認できていないのが現状である。現在の段階では、ごく近辺に「葦屋驛家」または「菟原郡家」に関わる公的な施設が存在したということに留めるのが妥当ではないかと判断される。今後の調査資料の蓄積が必要である。

(註)

(1)大平茂氏は土製模造品を土着の神(特に荒ぶる神)への供献品と考えている。『古代祭祀の世界』兵庫県立考古博物館2009

(2)真鍋篤行氏の考察を参考にした。「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」『瀬戸内歴史民俗資料館紀要第9号』1996
「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題(続)」『瀬戸内歴史民俗資料館紀要第10号』1997

(3)東村純子氏に遺物を実見していただき、コメントを頂戴した。また下記の資料を参考にした。
東村純子『考古学から見た古代日本の紡織』2011　六一書房

(4)Ⅴ章の奈良文化財研究所史料研究室のコメントをベースに記述したが、驛家についての見解は変えさせていただいた。

531 「O□　(38)×(25)×5　081

532 ・□□
・□□　(90)×(33)×10　081

533 □　(65)×(10)×3　081

534 □□（文字でない可能性もある）　(80)×(21)×6　081

535 ・□□
・□　(110)×(9)×4　081

850 □□□□　多支□□
□　辛万呂家麻呂□□　又□二□……□
□□二升□　□□升
(183+83)×(27)×4　081

※三片接続。

851 □□□□□合　丁　右件□　(175)×18×5　061（物差し）

※裏面にも墨痕あるか。

852 ・□□
・□　(54)×(14)×3　081

※一文字目は「請」の可能性がある。あるいは一文字目の上半は「生」、または「屋」の一部である可能性もあるか。　※二片接続。

853 □□　(32)×(8)×3　081

917 「O戸主椋人廣男戸馬□〔手カ〕　(105)×33×5　019

※九文字目は「主」の可能性もあるが、人名としては「馬手」のほうが一般的か。

【総括】

駅長宛の命令を伝える文書木簡とみられる木簡や「駅」の墨書土器の出土によって、深江北町遺跡が山陽道の葦屋駅家に関連する遺跡であることがほぼ確実になった。また、「大垣」「大垣官」などの墨書土器は駅家の機構や構造を考える手がかりになる可能性があり注目される。

一方、論語の習書木簡や数多くの墨書土器・転用硯の出土は、役人たちの活発な事務活動を示す資料である。人名列記の木簡や米の数量を記したとみられる木簡、戸主名を記した木簡などは、駅家が地方行政の末端を担う機構として機能していた可能性を示す資料として重要である。

そうした中で、天平十九年の年紀をもつ智識銭に関わる木簡は、東大寺大仏鋳造のための智識活動が活発に行われていた時期のものであり、駅家のような機構がそれに関わっていた可能性を示す注目すべき資料である。

深江北町遺跡出土の文字資料からわかるこうした活動は、これまで考えられていた駅家の活動範囲を大きく超える内容である。これまでに兎原郡家に関わるとみられる内容の文字資料は見つかっていないが、静岡県伊場遺跡のように駅家と郡家が近傍に位置する事例も知られているので、そうした観点から周辺の遺跡を検討していく視点も必要になってくるであろう。

523 「　　乎
遠方来不亦楽乎人不知而不慍不亦君子」　270×30×5　011

※習書（＝筆ならしなどを含む広義の練習）木簡。『論語』学而第一冒頭の、「子曰、学而時習之、不亦説乎、有朋自遠方来、不亦楽乎、人不知不慍、不亦君子乎」の一部を記したもの。現状では文字の残らない反対面に前半部分が書かれていた可能性もある。その場合、一般に論語の本文を習書する際は「子曰」から書き始めることが多く、字配りは前半（子曰～朋自）が十四文字、後半（遠方～君子＋乎）が十七文字＋一文字と考えられる。現状で文字が残る後半部分も上半分はやや大きめに間を取って書かれている様子が認められ、最初はゆったりと書き出したものの徐々に余白が不足気味になり、最後は一文字分書ききれなくなって「乎」を右傍に書き足したかとも推測される。全体に端正な筆跡であり、本文も現在広く流布しているテキストと異同はない。『論語』は『千字文』と並んで習書に用いられる代表的な典籍であり、都城のほか徳島県観音寺遺跡など地方官衙遺跡でも類似の木簡の出土例がある。深江北町遺跡が葦屋駅家関連遺跡と認められる場合、523は地方社会における文字文化の広がりを考えるための重要な資料となる。多数の墨書土器や転用硯の出土とあわせて考えると、深江北町遺跡の周辺で活発な事務作業が行われていたことがわかる。深江北町遺跡からは、これまでのところ郡家に関わる資料は確認されていないので、これは葦屋駅家の活動を示すとみられ、駅家の機能を考える上で注目される。ただし、郡家と駅家が近傍に位置する場合もあり（伊場遺跡など）、今後はそうした観点からの遺跡・遺物の検討も必要になってこよう。

524 ・□□□□
・┌□□□
└□　(70)×38×4　019

※上端は丸く削り出す。下端は二次的切断。表面一文字目は「弘」「於」など、二文字目は「勤」など、四文字目は「道」などの可能性がある。

525 「大石□□□□　□□□
□□□　□足□〔秦カ〕　(165)×40×4　019

※上下両端は二次的切断。人名の列記か。裏面にも墨書がある可能性があるが、判然としない。

526 ・「〈□□八□□　□□」
・「〈□□　□□」　272×26×5　033

※墨痕不明瞭。

527 「（□身連」など多数の墨痕あるも判読困難）　(430)×90×9　019

528 ・□孔古五斗　友麻□
・□二王□□丫皇　□　(105)×(16)×2　081

529 ・□□□□□□□
・□□□□□　□　(80)×(7)×3　081

※下端は二次的整形。

530 （言偏の文字の習書多数。「謹」などか）　(80)×(50)×7　081

いう語は八世紀段階ではあまり使用例が多くなく、正史における初見は「呪願文」が承和八年（八四一）であり（『続日本後紀』同年十二月壬午〔十七日〕条）、「呪願師」は貞観十六年（八七四）まで降る（『日本三代実録』同年三月廿三日壬午条、ただし本文中の表記は「呪願」）。「咒願師」につづく人名が俗名とみられることも不審であり、詳細は不明。

520
・□□□　┐□□□　□□　□十文　□□
□□□銭一文　□□平□
□□　□□　□□二文　□□
・┐□□六文　┐□□　□□
┐□□〔廣カ〕□足二文　□□文　□□
┐□□□文　□□二文　□□　(430)×43×5　081

※519と同一簡の可能性があるが、直接には接続しない。人名＋銭の数量（＊文）を列記しているとみられ、一部には何らかの照合をした印である合点（┐）が付されている。

521
・×□〔屋カ〕駅長等　□□□
・　即走上□〔奉カ〕　(130)×(17)×4　081

※急いで何かを行うよう命じる文書木簡か。表面上部は「葦」に続くとみられる。「駅長」は駅の管理・運営の責任者。古代の駅制では、駅の管理・運営のために充てられた戸を「駅戸（えきこ）」と称し、規模はほぼ里に相当するものであった。また、駅戸の構成人員を「駅子（えきし）」と呼び、さらにその中から財力と実務能力に秀でた者を駅長に任ずる規定となっていた（厩牧令15駅各置長条）。521はその駅長に宛てたものであるが、「等」とあることより、本来はその上に他の宛名も記されていたと想像される。複数人、あるいは異なる役職の人々に宛てた命令文の宛名表現としては、石川県加茂遺跡出土木簡の「深見村□郷駅長并諸刀弥〔祢〕等」などがある。

521は郡司層以下の下級官人に対する命令の場面で木簡が利用されていた様相を物語っており、地方社会における文字利用の広がりをうかがいうる資料となる。このような状況は、523のような習書木簡の存在や多量の転用硯の出土とも対応するものといえる。

522
賀美里戸主葦屋賀津羅□　(120)×(14)×3　081

※右辺割れ。賀美里は諸国に広く見られる地名であるが、上端は原形をとどめており単に「賀美里」と書き始めていることから、葦屋駅家が存する摂津国兎原郡の賀美郷である可能性が高い。葦屋駅家自体は隣接する（？）葦屋郷に所在したと考えられるが、賀美郷にも葦屋氏が分布していた状況がうかがえる。

地方行政単位の編成は「国郡里制（七〇一～七一七）→国郡郷里制（七一七～七四〇）→国郡郷制（七四〇～）」と変遷するが、「里」の表記から本木簡は国郡里制下のものである可能性が高い。その場合、天平年間後半の木簡である519の年代観との時間幅がやや大きくなるが、国郡郷制下でも本来「郷」と記すべきところを「里」と表記した荷札木簡が存在することが指摘されており（浅野啓介「荷札木簡の年代」、奈良文化財研究所編『文化財論叢Ⅳ』二〇一二年）、522の年代観も絶対的なものではない。

奈良文化財研究所史料研究室

170

「〈　　又米七升八合
九合□□□　合四斗五升五合
□□□五合　　」

235×25×6　032

※墨痕薄く不明瞭。

519

・「咒願師□朝臣□成
　亀智識
・「天平十□〔九カ〕年八月一日□

(130)×(38)×3　081

※「智識」に関係する記録簡の類か。智識（知識とも）は作善により仏縁を結ぶ行為を意味する言葉であり、労働奉仕などの形態をとるときもあるが、金品を寄進するかたちが一般的である。また、奉納された物品自体や結縁集団そのものを指す場合もある。

519・520は材の様子や幅などから同一簡である可能性があり、その場合、520には各人が寄進した智識銭の額が列記されていると考えることができる。さらに519裏面の年紀は「天平十九年」（七四七）の可能性が高い。これは東大寺大仏造立にともない智識行為が広まりを見せた時期に合致し注目される。

智識という行為自体は七世紀後半から確認され、大野寺（現在の大阪府堺市中区所在）土塔の造営など八世紀前半の事例も多い。しかし、古代の智識の画期は大仏造立事業であろう。天平十五年（七四三）十月のいわゆる大仏発願詔には事業を広汎な智識の結集により遂行する旨が明記されており（『続日本紀』同月辛巳〔十五日〕条）、その実現のために行基集団の取り込みが図られている（『続日本紀』同月乙酉〔十九日〕条）。519の年紀の天平十九年は、それから足かけ五年後、紫香楽宮から東大寺に舞台を移して継続された事業がいよいよ大仏本体の鋳造へと進む時期にあたり、この年の九月には記録上最初の献物叙位（地方豪族などが多額の金品を寄進し、対価として位階を授与される行為）の記事が『続日本紀』にあらわれる（同月乙亥〔二日〕条、これが「盧舎那仏」への「智識」であることが明記される）。大仏造立事業の進行を通して、智識行為は官営事業との結びつきを強くしつつ、地域社会に深く根をおろしていったものと思われる。

深江北町遺跡が葦屋駅家と深く関わる遺跡と推定され、出土木簡の内容も一定程度公的な事業に関連するものと目されることから、519の智識が大仏造立に何らかのかたちで関わるとの想定も不可能ではない。ただしその場合も、地域社会の人びとが個人単位で少額ずつ奉納した銭貨の記録であるか、あるいは献物叙位のような地域有力者の名で行われる大規模貢献が構成されてゆく過程の一端を示しているかは不明であり、位置づけには慎重を期す必要がある。また、前述の大野寺土塔や聖武天皇が大仏造立を志すきっかけとなった河内国大県郡の智識寺（寺名から地域社会の智識によって創建・運営されたと推察される）など、地域社会において一定以上に智識行為が普及していた様相も垣間見られ、519がそのような事業に関するものである可能性も、完全には否定しえない。

「咒願師」は、御斎会などの大きな法会で呪願文（祈りの文言や施主の願意などを記した文書）を読み上げる役僧のこと。ただし「呪願」と

写 真 図 版

深江北町遺跡第12・14次調査出土墨書土器・硯・転用硯

カラー写真図版２

1. 深江北町遺跡第12・14次調査出土墨書土器の一部

2. 同上 硯・転用硯の一部

B80-B区出土土錘・蛸壺

カラー写真図版４

B82-A区出土祭祀遺物

1. B81-B区出土祭祀遺物

2. B82-B区出土祭祀遺物

カラー写真図版６

1. 深江北町遺跡付近の航空写真（北から）　赤ライン部分が調査地

2. 深江北町遺跡付近の航空写真（東から）　赤ライン部分が調査地

1. 調査時の状況（東灘小学校校舎屋上より阪神芦屋駅方向を望む）

2. B74区近世溝と石材出土状況（東から）

写真図版２

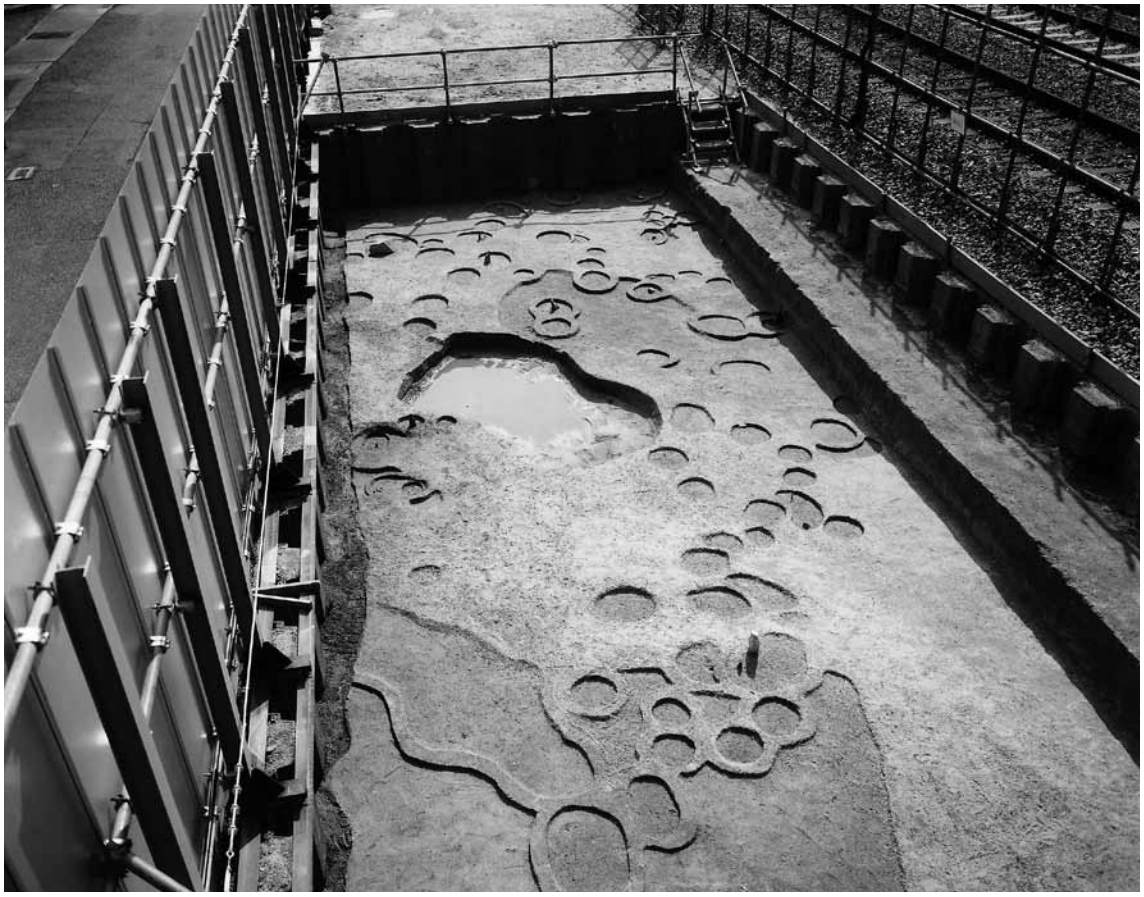
1. B75-B区湿地内杭列の出土状況（西から）

2. B80-A区湿地と浜堤の境界の状況（東から）

1. B80-B区湿地の状況（西から）

2. B80-B区北壁における土器・木片の堆積状況

写真図版４



1. B81-A区柱穴・ピット検出状況（南東から）

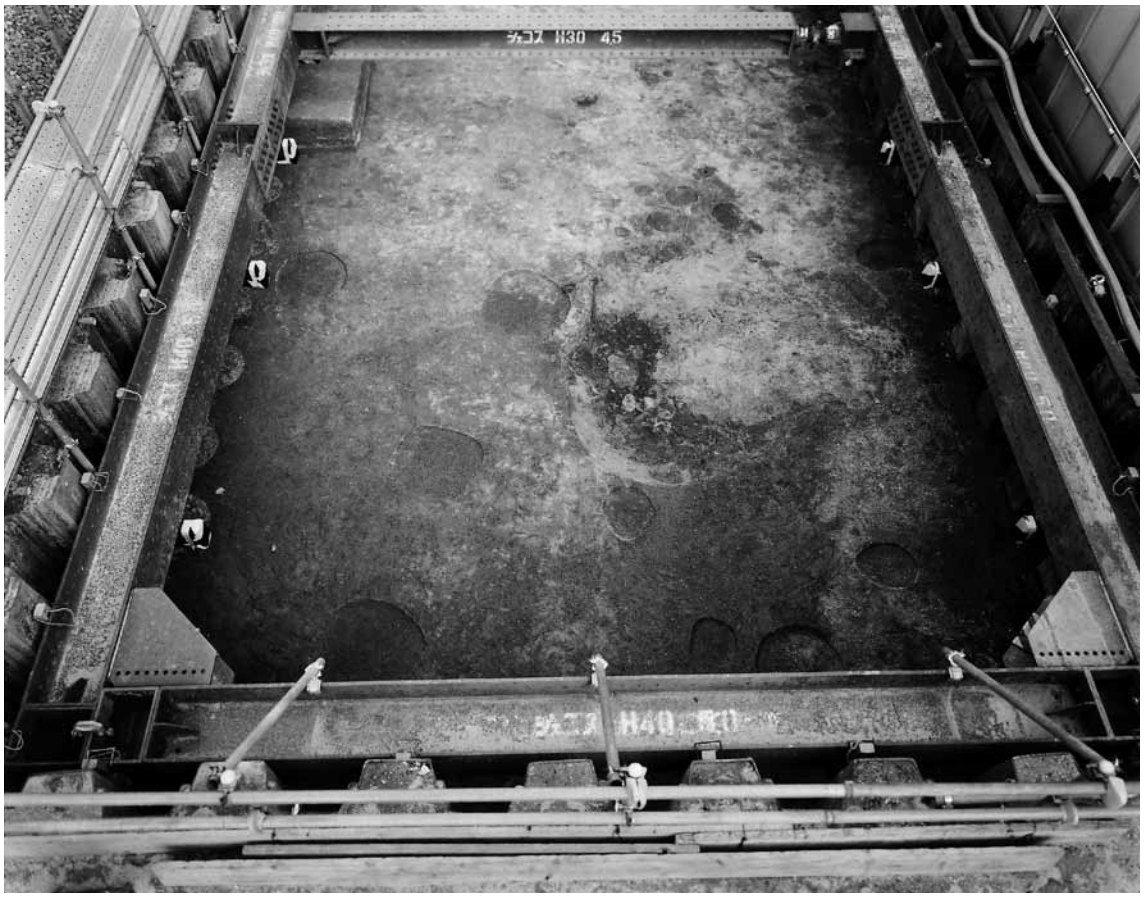
2. B81-B区柱穴・ピット検出状況（東から）

1. B82-A区柱穴・ピット検出状況（東から）

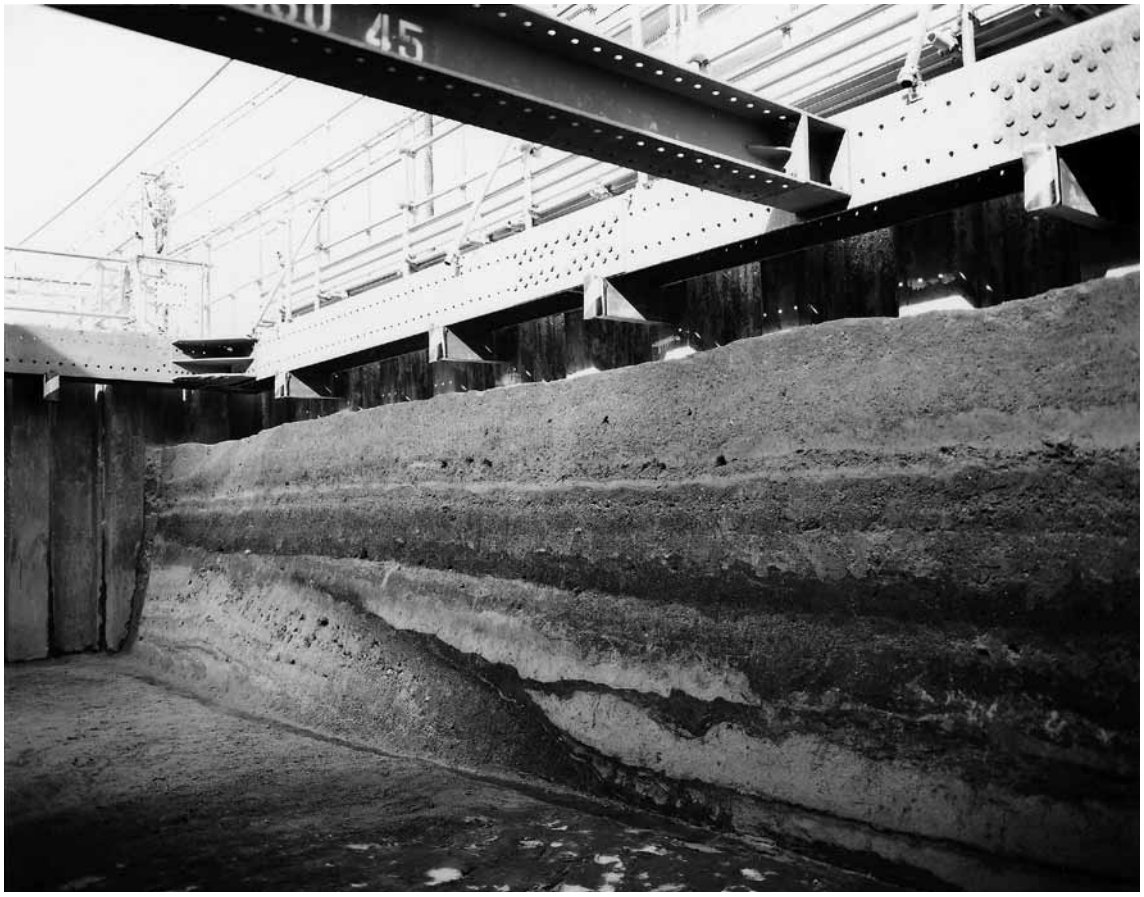
2. B82-A区祭祀遺物出土状況（東から）

写真図版６

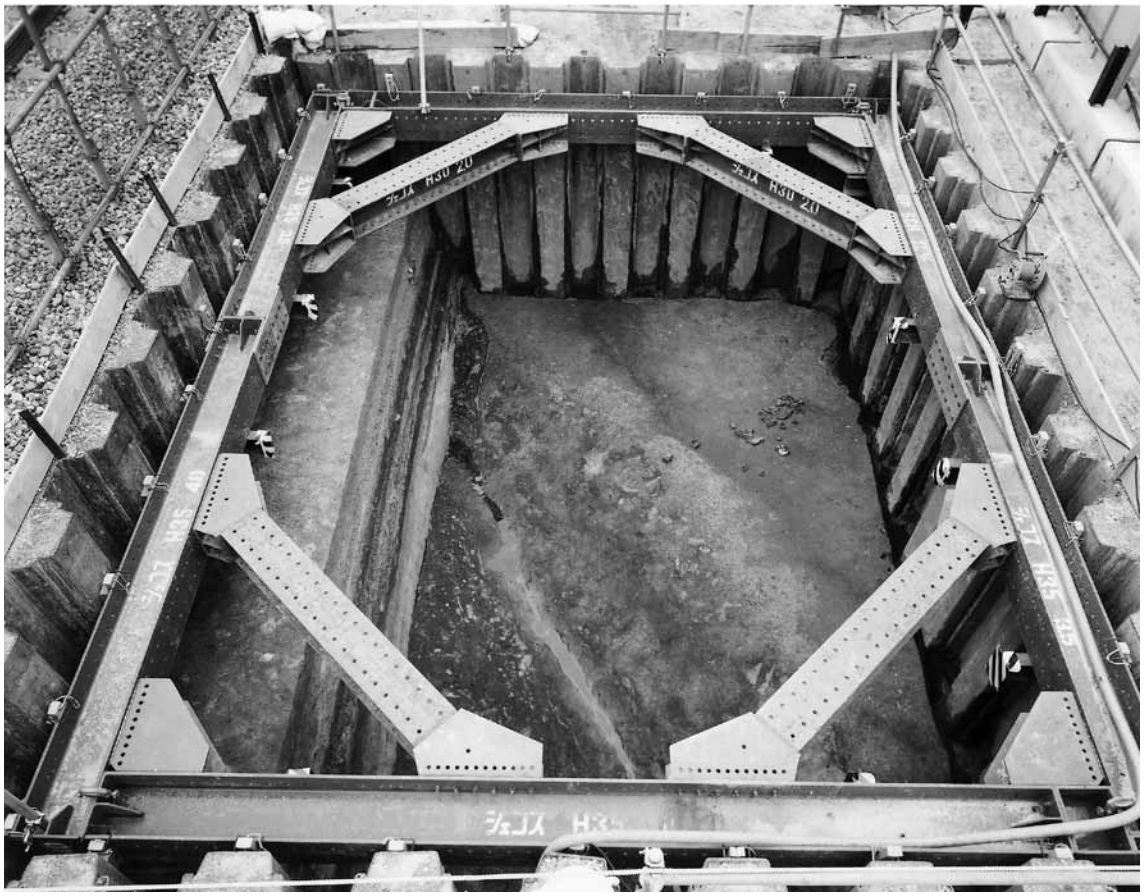
1. B82-B区柱穴・ピット検出状況（東から）



2. B82-B区掘立柱建物（西から）



1. B83-A区北壁における浜堤から湿地への堆積状況



2. P3区澪筋と土器出土状況（西から）

写真図版８

1. B74区出土陶磁器

2. B77-B区出土土器・土錘

1. B78区出土土器・土錘・石庖丁

2. B80-A区出土土錘・蛸壺

B80-A区黒灰色砂質シルト出土土器

B80-B区黒色砂質シルト出土土器

写真図版 12

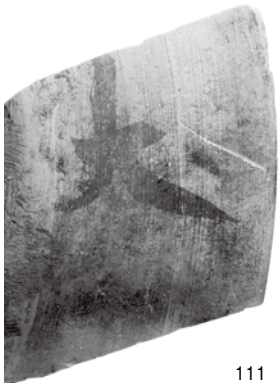
B80-B区黒色シルト出土土器

1. B80-B区出土瓦

2. B80-B区出土砥石・磨石・敲石

写真図版 14

33


111

112

202

206

207

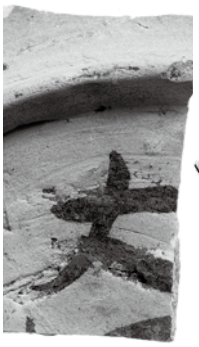
223

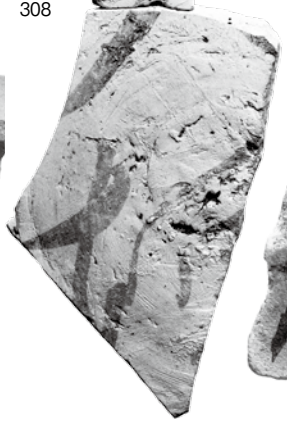
228

308

311

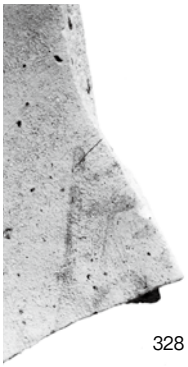
313


315


321

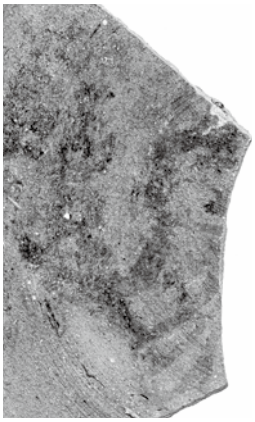
324

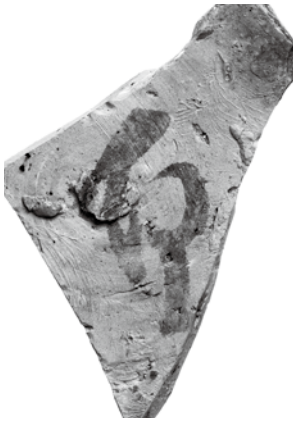
327

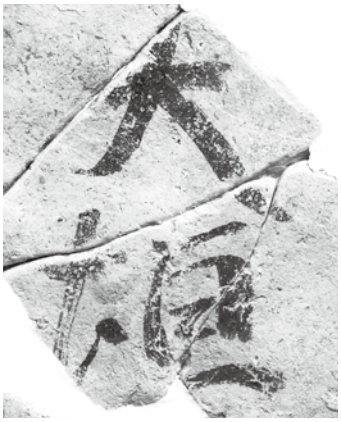

328

深江北町遺跡第12・14次調査出土墨書土器（1）

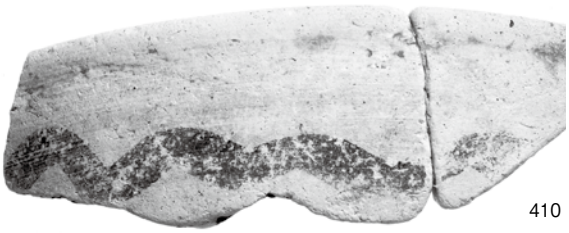
329


343


370

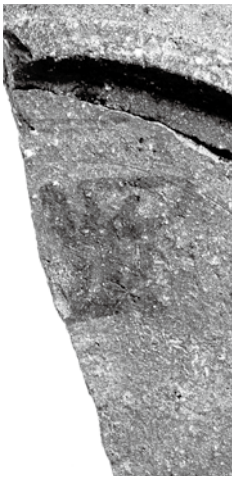

408

409

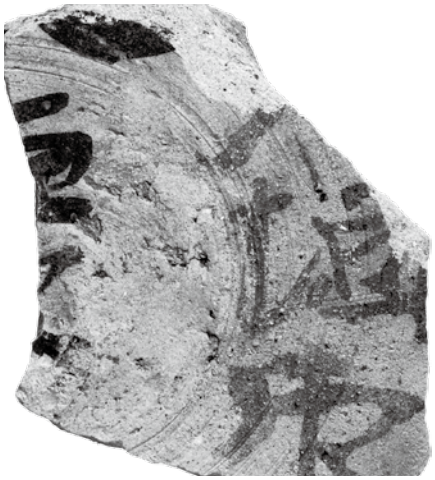

410

411

412

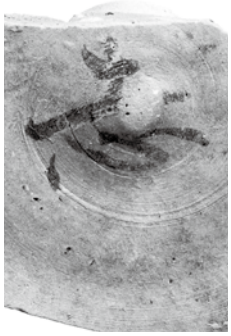

413

415


417

416

418


840

909

916

深江北町遺跡第12・14次調査出土墨書土器（2）

1. B80-B区出土漆付着土器

2. B81-A区出土土器・土錘・蛸壺・砥石

1. B81-B区出土土器

2. B82-A区出土土器（1）

1. B82-A区出土祭祀遺物（1）

2. B82-A区出土祭祀遺物（2）

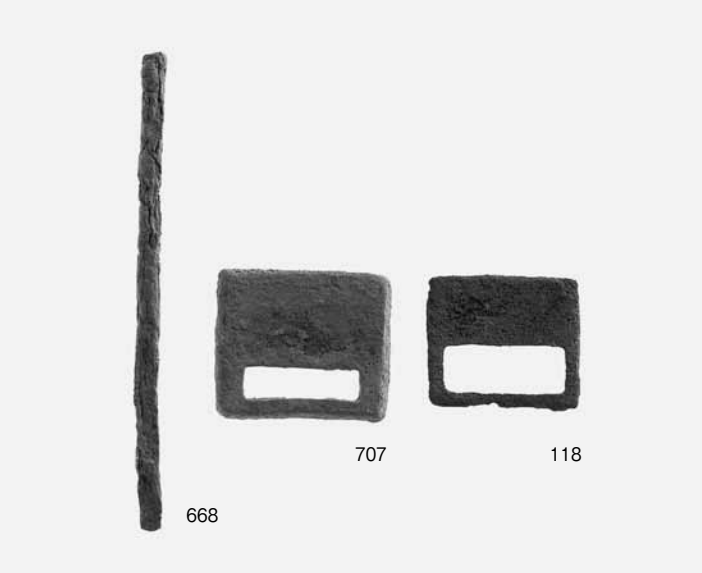
1. B82-A区出土土器（2）

2. B82-B区出土土器（1）

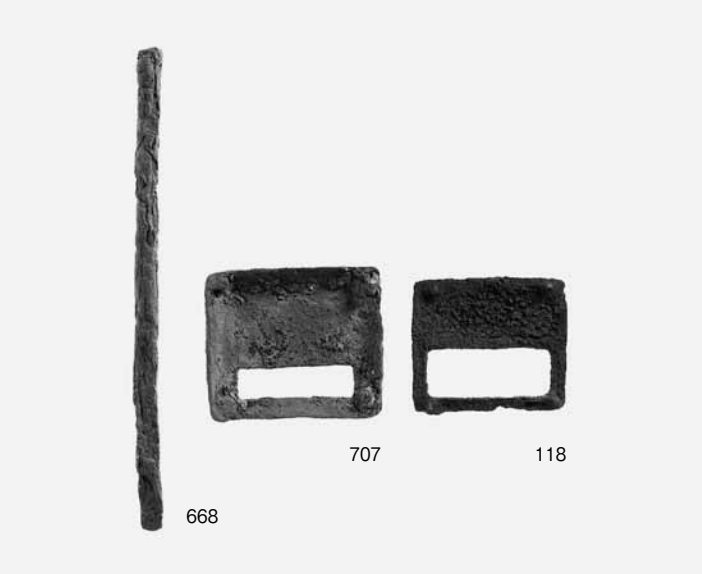
1. B82-B区出土土器（2）

2. B83-A区出土土器

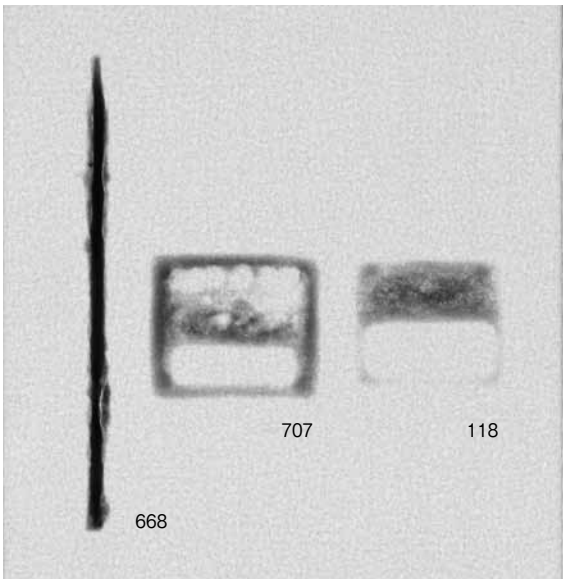
P3区出土土器



1. 深江北町遺跡第12次調査出土金属製品（表）



2. 同上（裏）



3. 同上（X線透過画像）

1. 木製品1（墨壺）

2. 木製品2（工具類）

3. 木製品3（鍬身・横槌）

4. 木製品4（浮木）

1. 木製品5（錘・織具）

2. 木製品6（下駄）

3. 木製品7（横櫛）

木製品8（祭祀具）

1. 木製品9（漆容器・皿）

2. 木製品10（曲物）

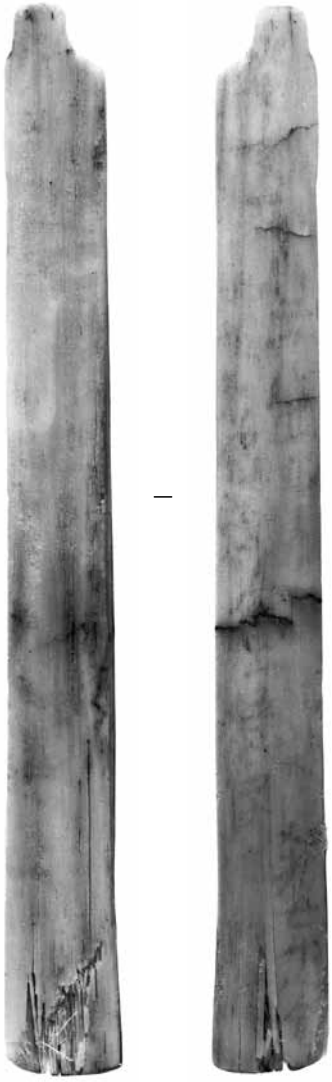
3. 木製品11（釘・楔）

4. 木製品12（その他）

1. 木製品13（大形部材）

2. 木製品14（御用札）

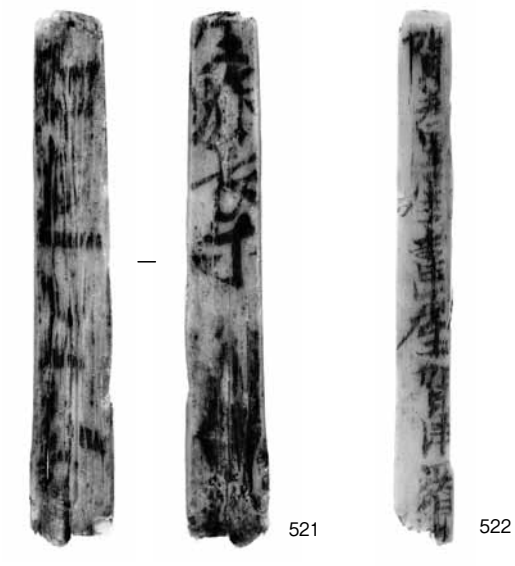
519

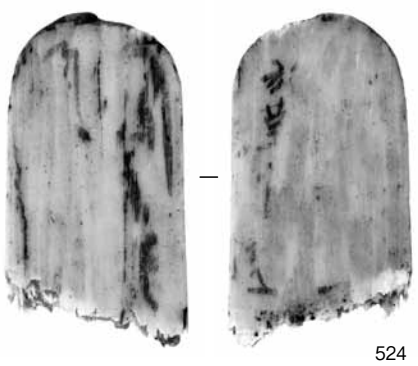


170

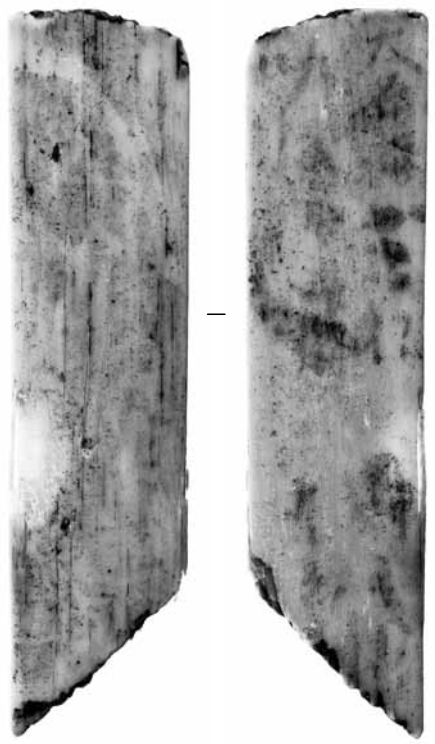
520

深江北町遺跡第12・14次調査出土木簡（赤外線写真１）

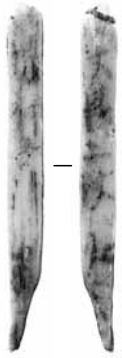

521 522

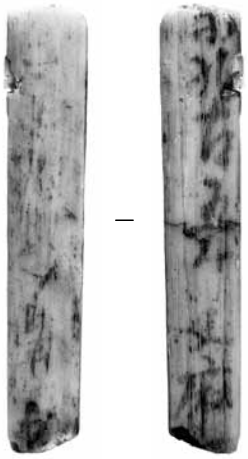

524

523

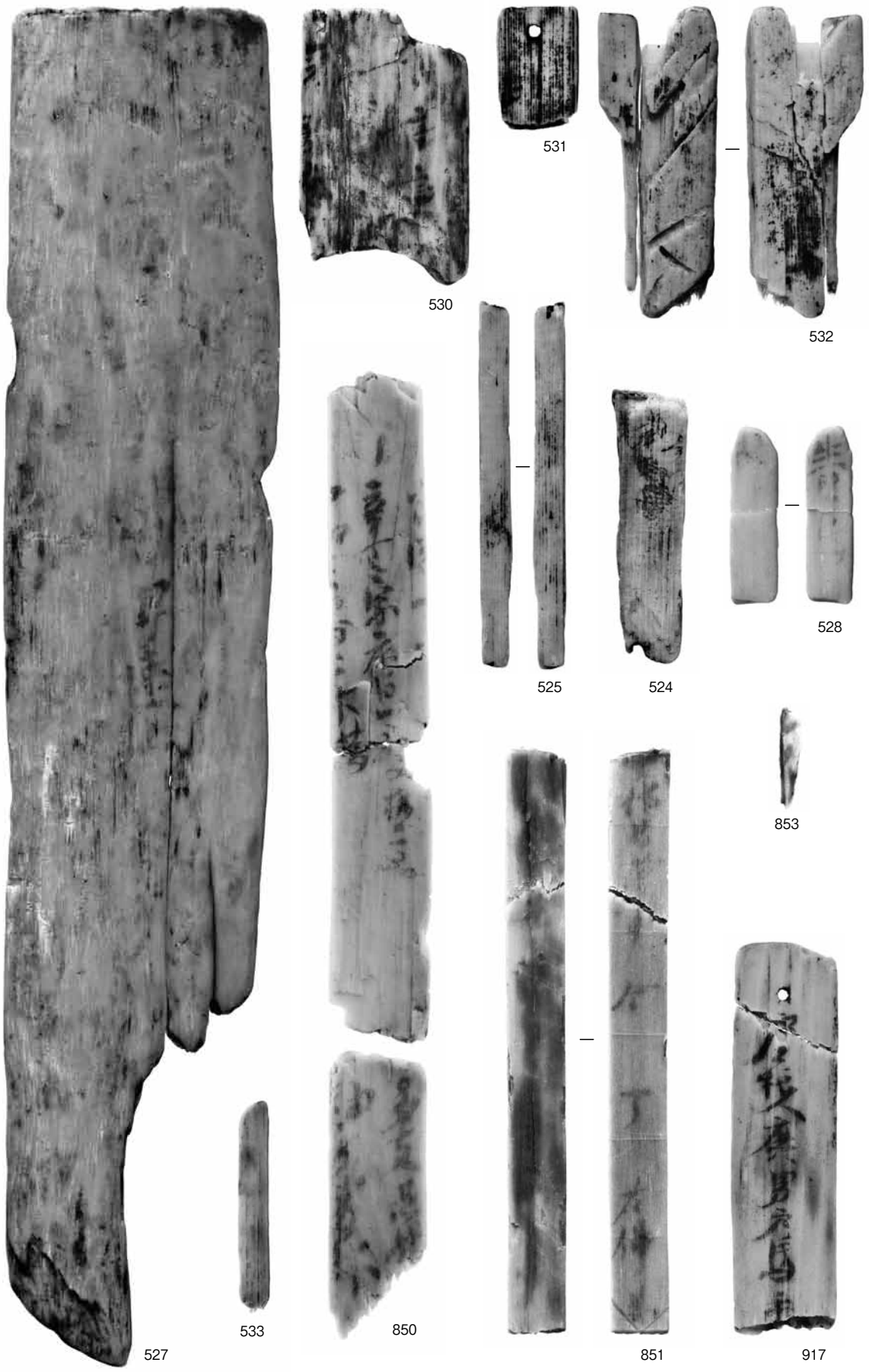

525

526


529


528

深江北町遺跡第12・14次調査出土木簡（赤外線写真2）



深江北町遺跡第12・14次調査出土木簡（赤外線写真3）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふかえきたまちいせき　だい12・14じちょうさ　まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	深江北町遺跡　第12・14次調査　埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	谷　正俊（編）・丸山　潔・阿部　功・中村大介・井上（佐藤）麻子・増田富士雄・（独法）奈良文化財研究所史料研究室・（株）古環境研究所
編者機関	神戸市教育委員会
所在地	神戸市中央区加納町６丁目５番１号　　TEL 078-322-5799
発行年月日	西暦2014年（平成26年）３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
深江北町遺跡	兵庫県神戸市東灘区深江北町１・２丁目地内	28100	10-038	34°43’26”～34”	135°17’40”～58”	20110509～20120217 20120404～20120807	1984（延べ4204）	鉄道高架化工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落遺跡　官衙関連遺跡（葦屋驛家関連）	古墳時代初頭	溝	庄内式併行期の土器	底部穿孔の土器群
	古墳時代後期	祭祀遺構	古墳時代後期の土師器・須恵器・手捏土器・馬形・猪形土製品・土製勾玉・小玉・管玉	祭祀に使用された遺物群
	飛鳥～平安時代前期	竪穴住居・掘立柱建物	奈良時代後半～平安時代初めの須恵器・土師器・木製品・木簡・木製祭祀具	「（葦）屋驛長」と書かれた木簡 「呪願師・天平十□年」と書かれた木簡 「驛」「大垣」等の墨書土器 多様な木製祭祀具
	江戸時代	集落を画する溝・犂溝		「御用・深江村」と書かれた札

要約

深江北町遺跡は神戸市域の東端に位置し、芦屋市と市境を跨いで遺跡が存在する。芦屋市側は津知遺跡と称しているが、本来同一の遺跡と考えられる。この遺跡は大阪湾を巡る沿岸流によって形成された浜堤（砂堆）上に立地し、現在の海岸線からは、約500m離れている。また、場所はまだ確定されていないが、この付近を古代山陽道が通過していたことはほぼ間違いなく、これまでの発掘調査成果により「葦屋驛家」がごく近辺に奈良～平安時代前半頃まで存在していたことが出土資料等から窺える。今回の調査では、遺構が集中した浜堤上からは古墳時代後期の祭祀遺物群や飛鳥時代～平安時代初めまでの竪穴住居、掘立柱建物等が確認されている。その周辺の湿地からは大量の木片・各種の木製品とともに木簡が出土した。木簡には「（葦）屋驛長」と書かれたもの、「呪願師・天平十□年」と書かれたもの等がある。その他の文字資料としては、「驛」「大垣」等の墨書土器が多数発見されていることが特筆され、葦屋驛家に深く関わる施設が近辺に存在していたことを示唆する有力な資料を提示している。また、各種土錘・蛸壺等の漁具が多く出土し、海との関わりが深い人々の集落遺跡でもあることも指摘される。

深江北町遺跡
第12・14次調査
埋蔵文化財発掘調査報告書
2014.03.31
発　行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL　078－322－5799
印　刷　岡村印刷工業株式会社
奈良県高市郡高取町車木215
TEL　0745－62－2701

神戸市広報印刷物登録　平成25年度第337号（広報印刷物規格　Ａ－６類）